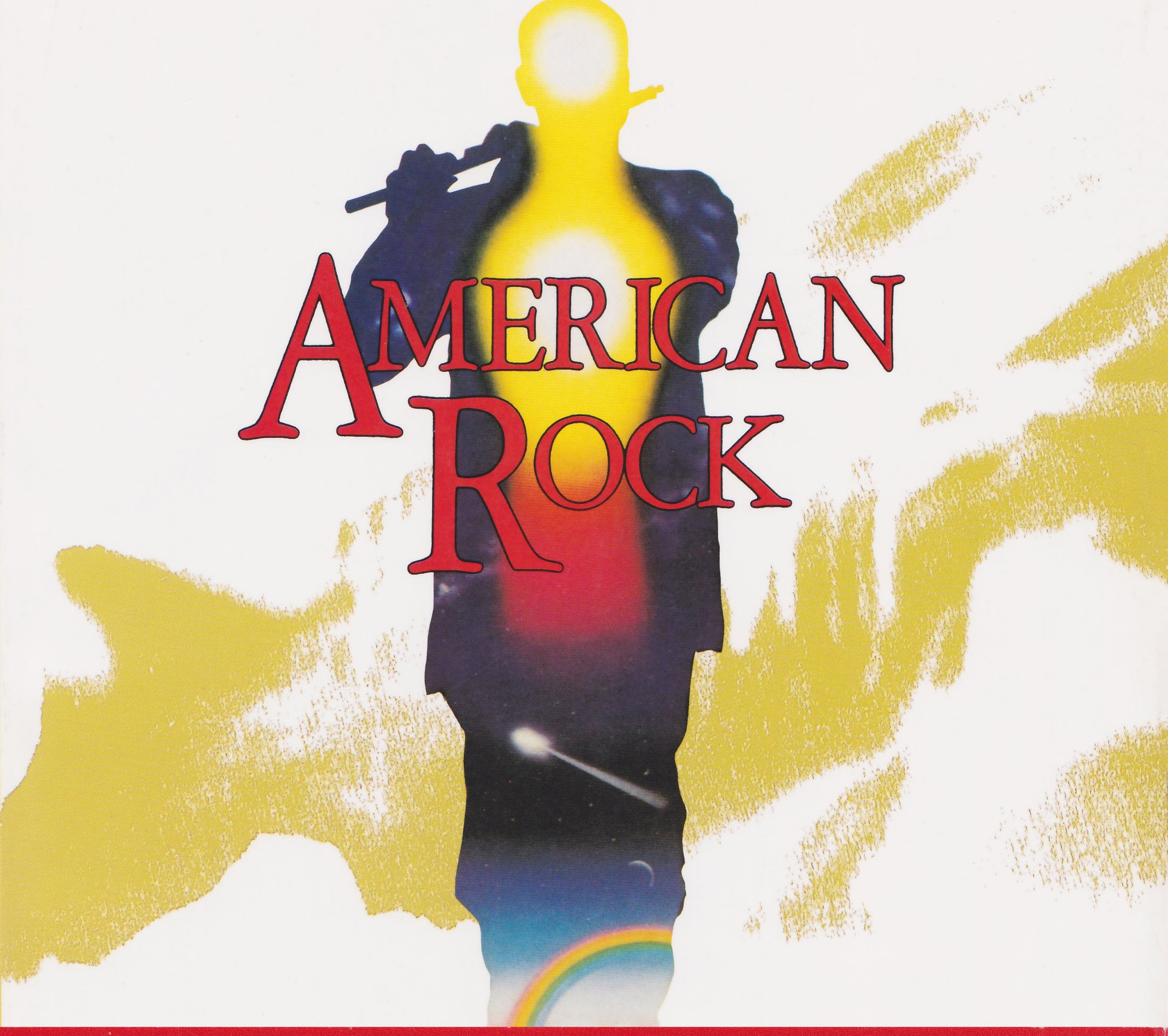
アメリカン・ロック集成

プログレッシヴ・ロッ

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA *of*

AMERICAN ROCK



マーキー別冊

アメリカン・ロック集成

マーキー別冊

アメリカン・ロック集成

～プログレッシヴ・ロック編～

アメリカ、カナダのカタログ満載！

ジョン・ケージ、マイルス・デイヴィスからフランク・ザッパ、グレイトフル・デッド、ラッシュそしてドリーム・シアター、ジョン・ゾーンまで。アメリカ、そしてカナダのロックをプログレッシヴ・ロックの視点から総ざらい。ヒット・チャート音楽に飽き足らない音楽ファンへ。初心者からディープなマニアまで対応するカタログは要チェック！

アメリカン・ロック集成

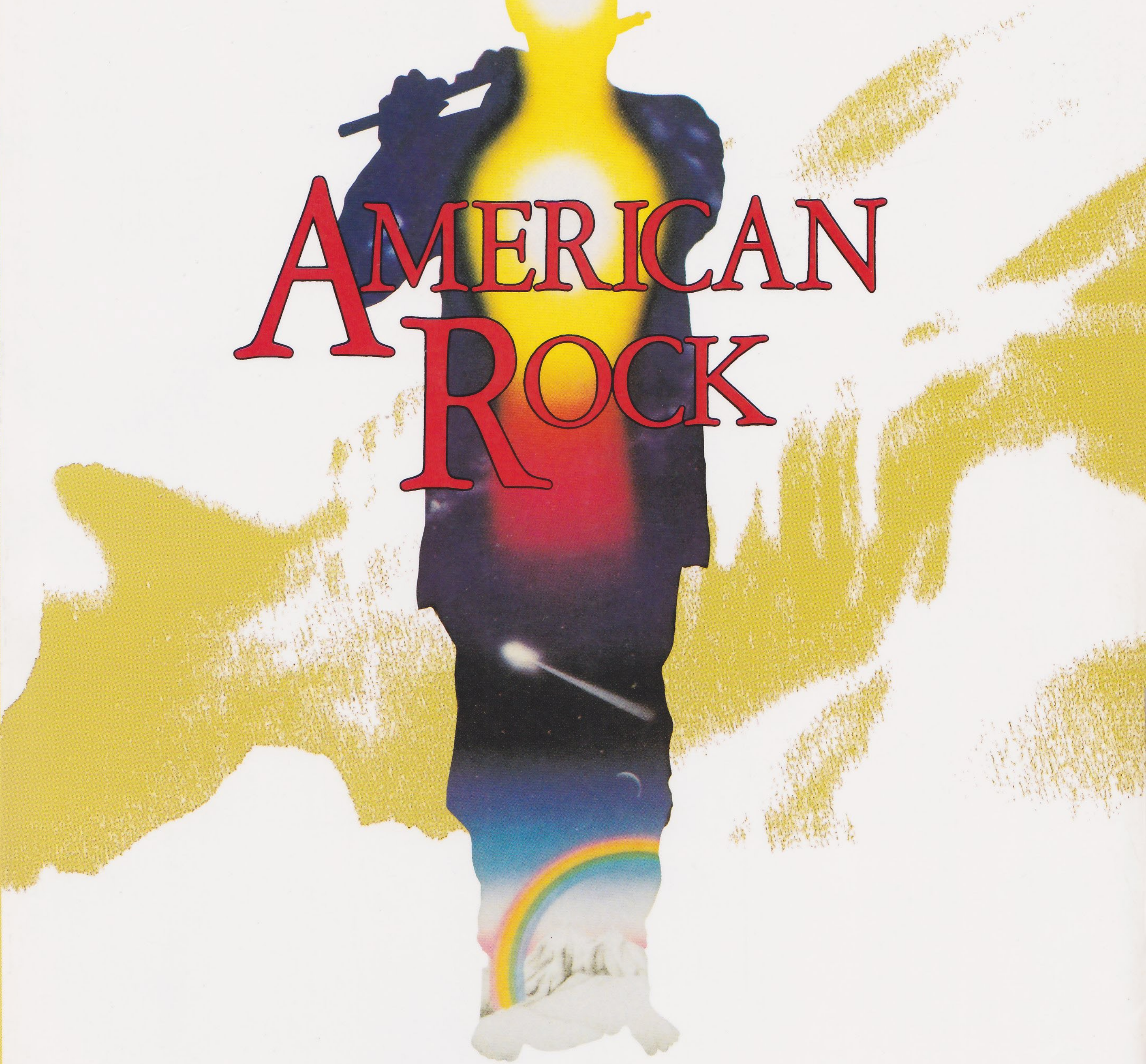
プログレッシヴ・ロック編

マーキームーン社刊

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA of

AMERICAN ROCK



PROGRESSIVE ROCK SIDE

アメリカン・ロック集成

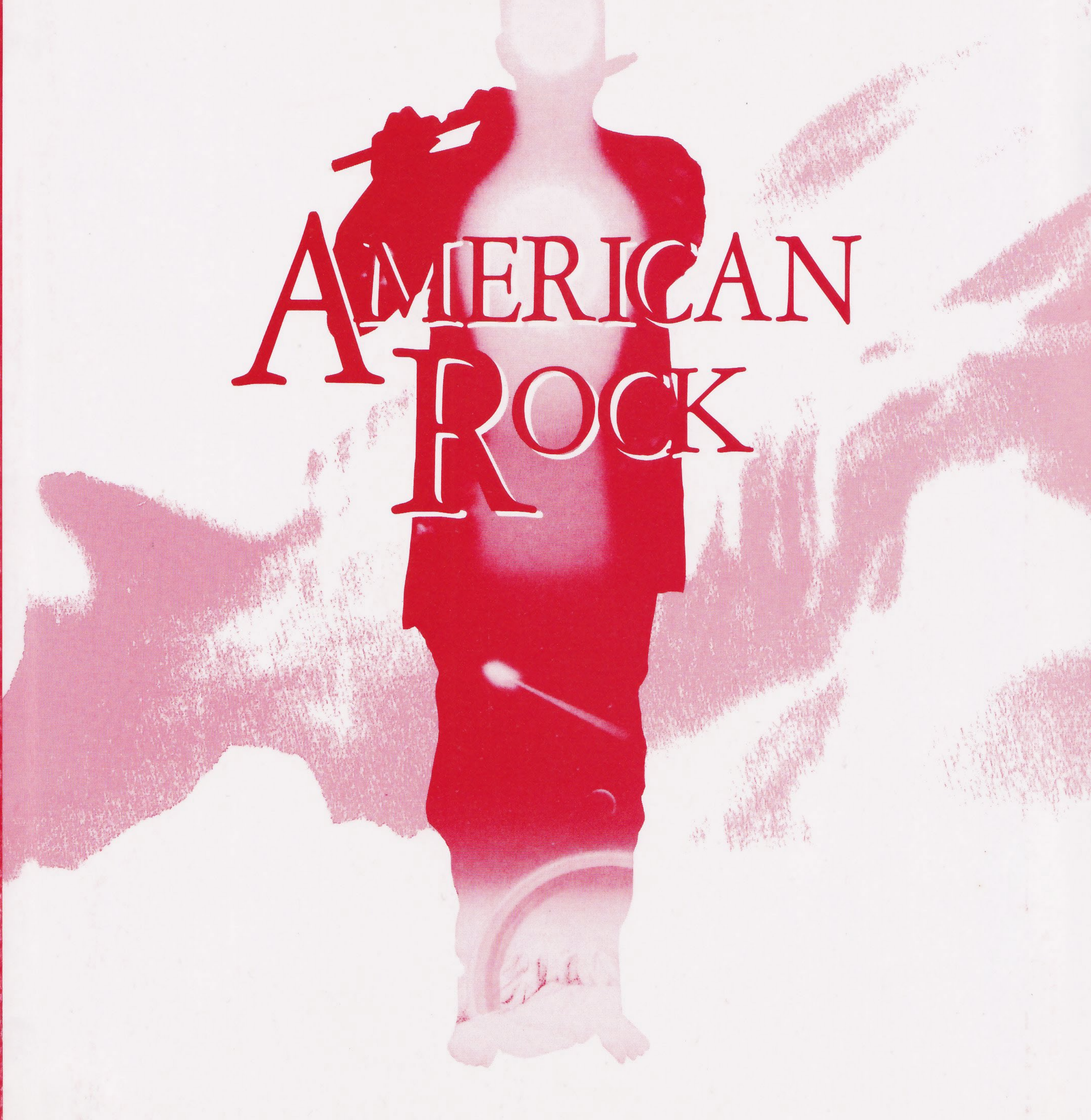
プログレッシヴ・ロック編

マーキームーン社刊

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA *of*

AMERICAN ROCK



PROGRESSIVE ROCK SIDE

MARQUEE'S
ENCYCLOPEDIA OF AMERICAN (PROGRESSIVE) ROCK



序

◉

シアトルに着くと、なぜか真昼間だった。天気も良かったからトリップ感も2倍増しである。そしてニューヨークへ。窓を覗けば、ロッキー山脈、グレート・プレーンズ、ミシシッピ、シカゴ、五大湖、アパラチア、大西洋…とゴキゲンの大陸横断である。この、北緯44度のラインは悪くない。カナダと合衆国を横切って、このとてつもなく大きな島を二分した。

アメリカは広い。ヨーロッパの比ではない。アメリカの前では、人種・民族がモザイク状にひしめき合うヨーロッパのなんと狭苦しいことか。アメリカ大陸は、地球の面積のけっこうな部分を占めているのだ。果たしてこれが一国なのか。そんなはずはない。だから合衆国と言うのだ。いろんな国が集まって一つの大きな国になっていたのだ。そして、この大きな国には1960年があっただろうし、1970年があって'80年も今もある。

何を言うにしても、アメリカはまずこの大きさ、広さが根幹になっている気がする。日本がすべてちっぽけな土地に起因して経済があり、文化、環境、何もかもに及ぶことの好対照な例がアメリカである。アメリカは広い。そして広い事を活かしてきたのがアメリカの文化だ。その点で、1970年前後の「大きい事はいい事だ」を鵜呑みにした日本は、まるで足元を見ていなかった。人には自分に見合ったサイズの靴があるのだ。アメリカ・サイズの靴をはこうとして公害を生み出し、オイル・ショックに狂乱していた日本は、戦後ベクトルでしかない。敗戦して米兵にチョコレートをもらう日本人像の変形したものに過ぎない。たくさんのウミを出して1970年代は終わったように思う。音楽にしてもそうだ。「日本語はロックに合うか合わないか」という1970年の論争は、その最たる例だろう。合うわけがない。なぜなら、ロックはアメリカやイギリスなどアングロ・サクソン系白人が、自分達にちょうどいいサイズのリズムやメロディとしてナチュラルに生み出してきたものなのだから。言ってみれば、ロックは、アメリカやイギリスという地域文化の音楽言語に過ぎない。でも、こうも堂々と言えるには、1990年代の中盤だから。アメリカの強さの象徴だったアポロ計画や東西関係が過ぎたあとだからだ。広いアメリカというバックボーンを持った強いアメリカの経済が弱まった今だから、初めて客観的に見れることのような気もするのだ。そのとおり、音楽も経済という大きな基盤の上で踊る。これまで日本は音楽のみならずよくアメリカにつき合ってきた。アメリカ型の「大きな事はいい事だ」のフロンティア精神の変形キャッチ・コピーを信仰する向きは今も健在だが、一方で1980年代を過ぎた今、これが穴だらけであることもよく見える。それは、「平和」を唱える国が夜空を焦がさんばかりに砲撃するあのテレビ映像が流れた時を最大の機にして確認されてしまった。矛盾が暴露した時、ウッドストックとベトナム戦争との関係がクローズ・アップされ、そこにアメリカが浮かび上がったようにも思う。

今さらアメリカの国民性を音楽に還元してフレンドリーだとか脳天気だと言うには、無理がある。もう一度、原点に立ち返って、アメリカの広さに注目すれば、音楽も様々な形が密集していると見た方が確かだろう。合衆国の名のとおり、音楽も多彩なはずだ。その縮図はニューヨークにある。混在するという点では、とてつもなくスケールが大きい。この器の中でそれぞれの民族はそれぞれの音楽言語を話して独立している。その集合体がニューヨークなのであって、多彩色なのがニューヨークだ。都市性というものであることを、まざまざと見せつける。文化の拮抗は緊張感をはらむ反面、共存するためのアバウトな感覚を持ち合わせることをどこよりも感じさせるのが、ニューヨークだ。それは知恵とも免疫とも言えて、もしかすると異文化間の出会いが新鮮な音楽を生み出すというのも、共存のための必要不可欠な排泄行為とその結果なのかもしれない。だからいつもアグレッションは都市にある。一色の文化なら一つの言語でわかりあえてしまうから他文化の他者を思いやる必要性など、鼻からない。多分、アメリカは共存を探ってその中からたくさんの新しい音楽を生み落としてきたに違いない。

ここで多彩なアメリカの音楽を一まとめにするには、あまりにも荷が重いから、二つ三つの関心に絞ってアメリカの幾つかを引き抜いてみたいと思う。それでもこの分量とすり落ちる数の多さだ。これまでのイタリアやドイツ、フランスとは勝手が違うことも白状しておいたほうがいいかもしれない。少しでも一般的なアメリカ像にプラスαが出ればと思い多くの方々に御協力をいただきました。

（松本昌幸）





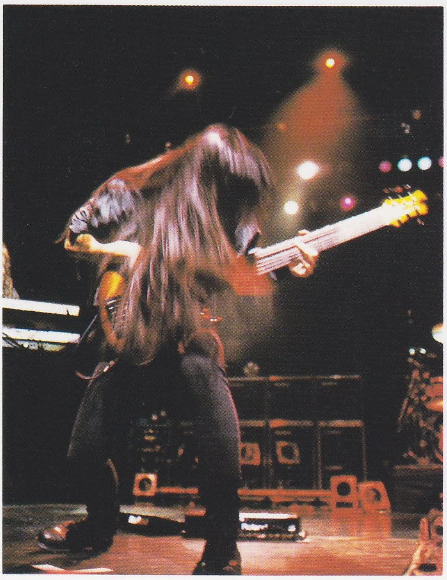
VELVET UNDERGROUND

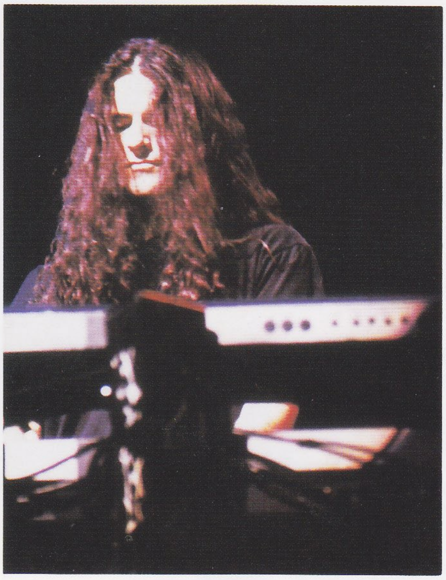
DREAM THEATER









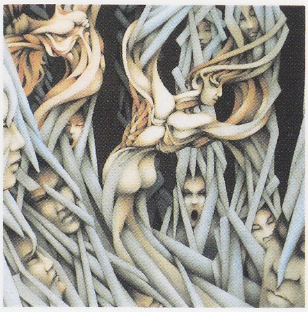




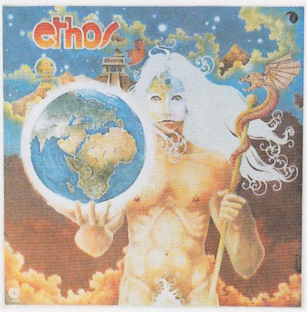
SONIC YOUTH





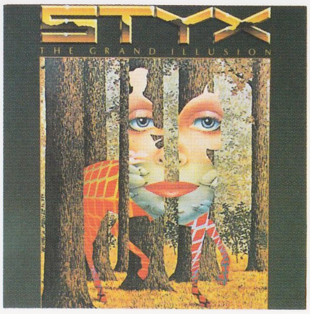






Progressive

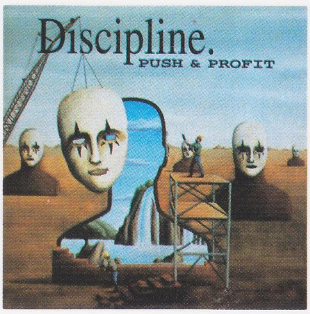


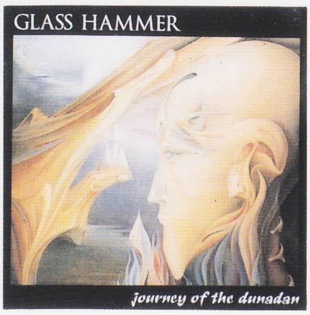


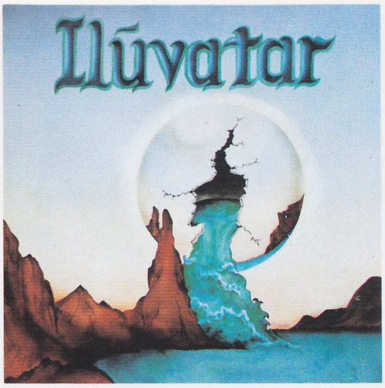











Iluvatar




MOUNTAIN · TWIN PEAKS

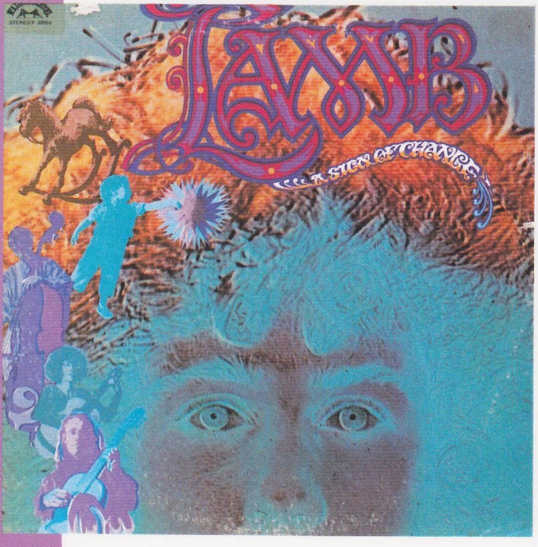






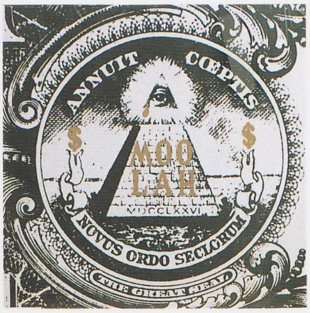
Psychedelic








Tiny Tim
For All My Little
Friends


ANNUIT COEPTIS
MOO LAH
MDCCLXXVI
NOVUS ORDO SECLORUM


SMASH
THE TROLL
ANIMATED MUSIC


PSYCHEDELIC
PSOUL
THE
FREAK
SCENE


ELIZABETH


Crescendo
Sky Saxon Blues Band
A Full Spoon of Seedy Blues


While The World was Eating
Vanilla Fudge
Vocalist and Organist
Mark Stein
The Pigeons


Reign Ghost



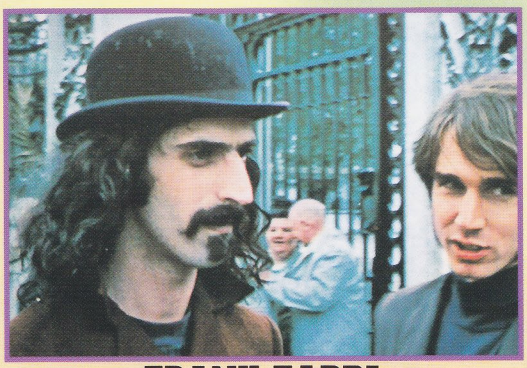

MAINSTREAM
The Tangerine Zoo



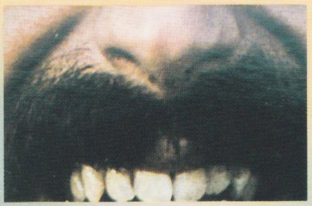


DOORS

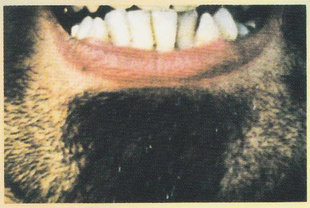
FRANK ZAPPA
AND
THE MOTHERS OF INVENTION



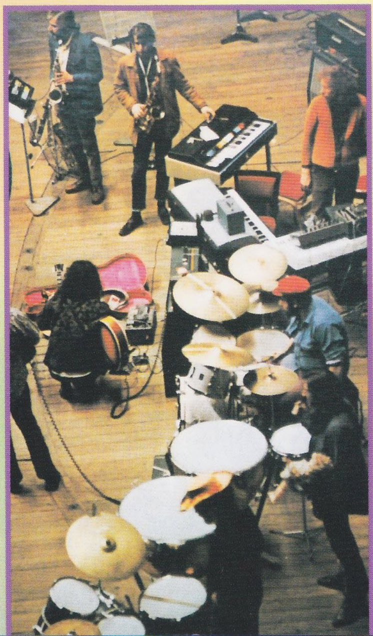
FRANK ZAPPA



AND



THE MOTHERS OF INVENTION



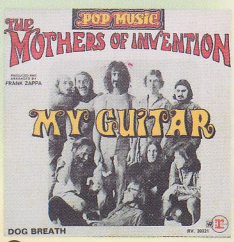


FRANK ZAPPA AND

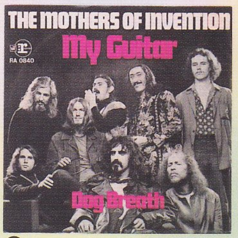




1



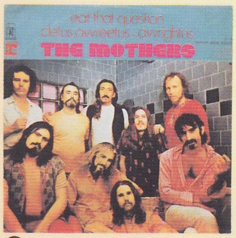
2



3



7

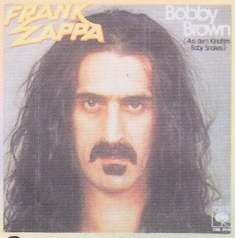


8

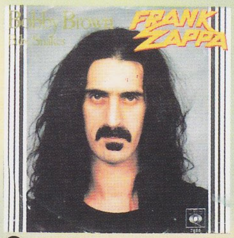


9

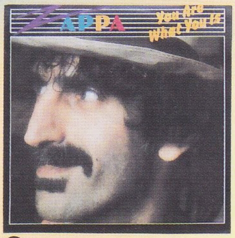
Single Collection

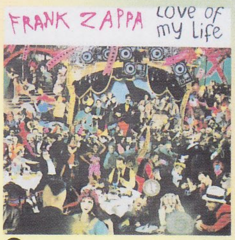


13

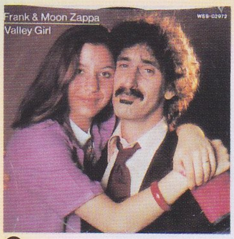


14


18



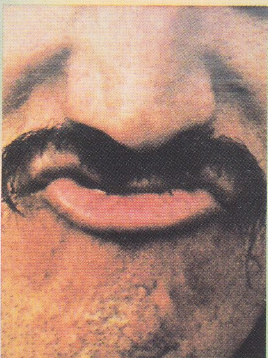
19

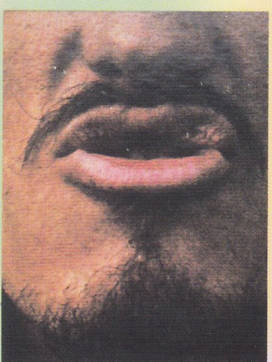


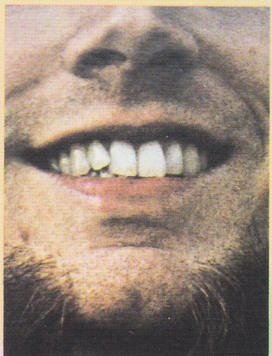
20

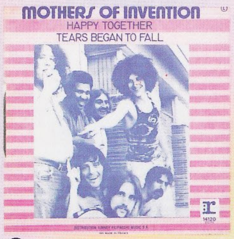
THE MOTHERS OF



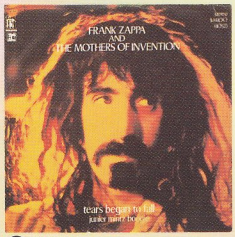

Jimmy Carl Black


Euclid James Sherwood

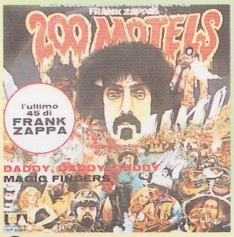

Ian Underwood



4



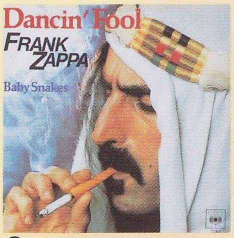
5



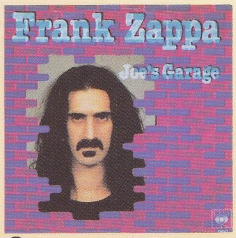
6



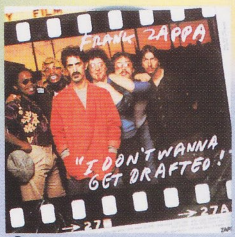
10



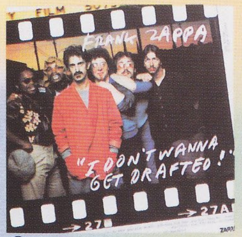
11



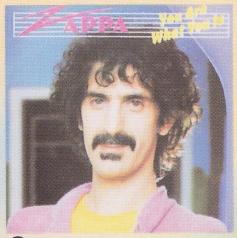
12



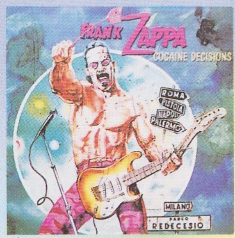
15



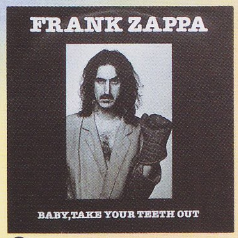
16



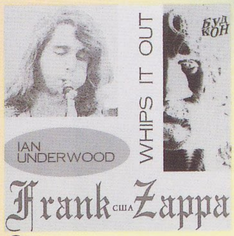
17



21



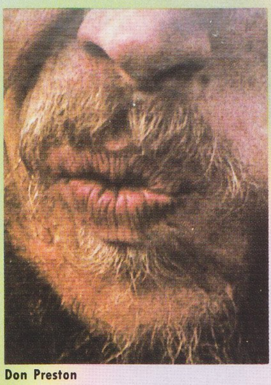
22



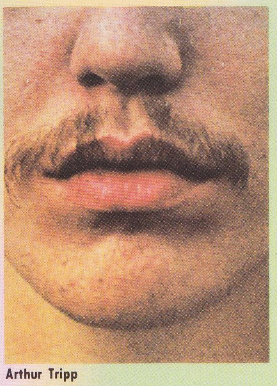
23

1. **THE MOTHERS OF INVENTION**
   Why Don't You Dome Right/Big Leg Emma
   (Nor.) Verve VK 58303
2. **THE MOTHERS OF INVENTION**
   My Guitar/Dog Breath
   (Fra.) Vogue RV. 20221
3. **THE MOTHERS OF INVENTION**
   My Guitar/Dog Breath
   (Ger.) Reprise RA 0840
4. **THE MOTHERS OF INVENTION**
   Happy Together/Tears Began To Fall
   (Fra.) Reprise 14120
5. **FRANK ZAPPA AND THE MOTHERS OF INVENTION**
   Tears Began To Fall/Junier Mintz Boogie
   (Ita.) Bizarre K 14100
6. **FRANK ZAPPA**
   Dadd,Daddy,Daddy/Magic Fingers
   (Ita.) UA UA 35344
7. **FRANK ZAPPA**
   What Will This Evening Bring Me This Morning
   Daddy. Daddy, Daddy
   (Fra.) UA UP 35.319
8. **THE MOTHERS**
   Eat That Question/Cletus Awreetus-Awrightus
   (Ita.) Bizarre k 14228
9. **FRANK ZAPPA**
   Cosmik Debris/Uncle Remus
   (Por.) WB N.S. 63-75
10. **FRANK ZAPPA AND THE MOTHERS OF INVENTION**
    Du Bist Mein Sofa/Stink-Foot
    (Ger.) Discreet DIS 19205
11. **FRANK ZAPPA**
    Dancin' Fool/Baby Snakes
    (Hol.) CBS 7261
12. **FRANK ZAPPA**
    Joe's Garage/Catholic Girls
    (Hol.) CBS 7950
13. **FRANK ZAPPA**
    Bobby Brown/Baby Snakes
    (Ger.) CBS 8216
14. **FRANK ZAPPA**
    Bobby Brown/Baby Snakes
    (Hol.) CBS 7485
15. **FRANK ZAPPA**
    I Don't Wanna Get Drafted
    /I Don't Wanna Get Drafted
    (U.S.) Zappa ZRP-21-AS
16. **FRANK ZAPPA**
    I Don't Wanna Get Drafted
    /I Don't Wanna Get Drafted
    (U.K.) CBS 8652
17. **FRANK ZAPPA**
    You Are What You Is/Harder Than Your Husband
    (Hol.) CBS 88560
18. **FRANK ZAPPA**
    You Are What You Is/Pink Napkins
    (Hol.) CBS A-1622
19. **FRANK ZAPPA**
    Love Of My Life/For The Young Sophisticate
    (Hol.) CBS CBSA 1241
20. **FRANK ZAPPA**
    Frank&Moon Zappa/Valley Girl
    (U.S.) Barking Pumpkin WS9-02972
21. **FRANK ZAPPA**
    Cocaine Decisions/Sex
    (Sp.) CBS A-3400
22. **FRANK ZAPPA**
    Baby Take Your Teeth Out/Stevie's Spanking
    (U.K.) EMI 5499
23. **FRANK ZAPPA/IAN UNDERWOOD**
    Whips It Out
    (Pol.) Будкон Д60 2131

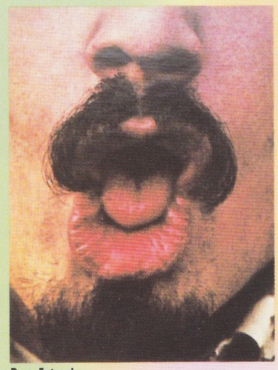
INVENTION



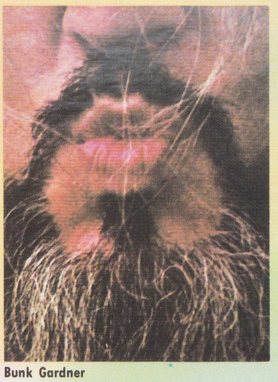
Don Preston



Arthur Tripp

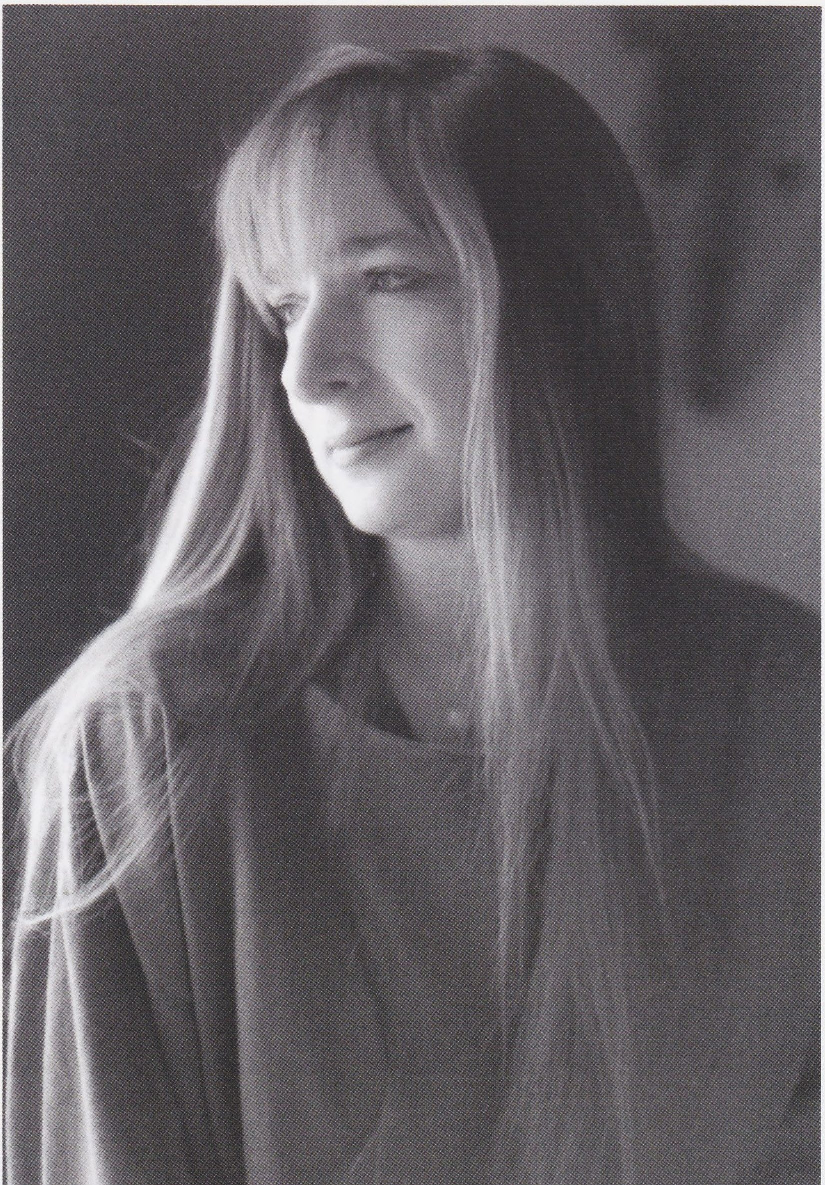


Roy Estrada



Bunk Gardner

トラディショナル・フォーク・ミュージックの華



KATE PRICE

CONNIE DOVER





LOREENA McKENNITT



THE MUFFINS

HOWEVER





VIRGIL MOOREFIELD ENSEMBLE



CARTOON

CONTENTS

アメリカン・ロック集成

税込定価3600円
1995年12月15日第1刷発行

発行所●マーキームーン社
〒161 東京都新宿区下落合
3-1-17 メゾン目白102
Tel：03-3954-4907
Fax：03-3954-9563
編集人●松本昌幸
発行人●賀川雅彦/山崎尚洋
編　集●平山英治
中西暢久
中島俊也
協　力●川上史郎
宮田大輔
レイアウト●三村好一(STUDIO HITMAN)
表紙デザイン●古田　賢
写　植●木下隆由(TKルーム)
有井康雄(アドコープ)
印　刷●㈱カシヨ

協力者(50音順/敬称略)

MCAビクター
BMGビクター
ポリドール
ワーナー・ミュージック
Cuneiform Records
WIND
ジャニス
マザーズ・レコード吉祥寺店
モダーン・ミュージック
芦沢誠
石原慎介
伊藤直継
伊波隆
いわねあつみ
内田哲雄
宇藤毅平
江田和宏
大関善行
岡田敏一
奥村裕司
金井浩
川辺敬祐
工藤康晴
久保田稔人
後藤仁
斎藤隆之
斎藤道巨
坂本理
佐々木敦
サトウユキエ
沢田守秀
島村昌樹
関口武也
高田誠
高橋理
高見博史
高山直之
竹川真
田中昌廷
Chihiro S.
津田幸一
東野明宏
中貞人
中藤正邦
難波弘之
Numero Ueno
法水凜太郎
長谷川陽平
泰田昌彦
林克彦
林多香子
平井誠一
平野剛
福島恵一
星野夏実
松尾裕正
松谷健
松本康臣
松山晋也
宮沢幸一
三輪岳志
六井久人
村上典彦
本木利英
森下忠
森本賢一
吉瀬孝行
吉野正哉

美狂乱



10月25日 発売

五蘊
GO - UN

BELLE 95149 ¥2,600（税抜価格）解説付

1.乱パートⅡ 2.旅の果て 3.おもいいれ 4.狂パートⅡ-2 5.21世紀のアフリカ

12年の沈黙を破り
遂に新生美狂乱の
スタジオ盤完成
彼等の新たなる
可能性を示唆する
5つの新曲を収録

12/16 緊急発売！



美狂乱
パララックス
BELLE 95186 ¥2,600（税抜価格）

長らく廃盤で、巷では1万円ものプレミアムが付けられていた美狂乱幻のセカンド・アルバム。ベル・アンティークより緊急発売（限定盤）。



美狂乱
ディープ・ライヴ
BELLE 95170
¥2,910（税抜価格）

1.狂パートⅡ-2
2.狂パートⅢ
3.乱パートⅡ
4.ディープ
5.21世紀のアフリカ
6.都市の情景

12月15日発売

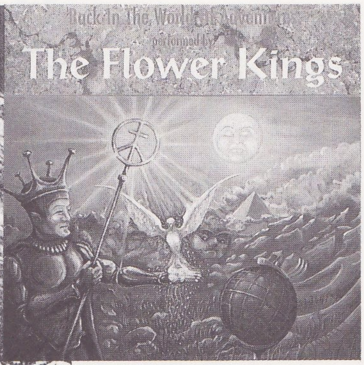
見事に復活を果たした今年6月16日、渋谷エッグマンでのライヴ。超満員のファンの中でくり広げられたあの魔法のような演奏が今、再び甦る。アルバム未収曲のバラード「ディープ」収録。

＊都合により、ポスター等で告知した曲目を変更しました。詳しくはライナーノーツ及びMARQUEE本誌を御覧

BELLE ANTIQUE

25th NOVEMBER
ON SALE!





カイパのギタリスト、
ロイネ・ストルトの新作登場。
前作「ザ・フラワー・キング」で
見事にプログレッシヴ・ロック・フィールドへ
カムバックしたロイネ・ストルトが
才能の全てを費して完成させた意欲作。
北欧特有の凍てつくようなロマンティシズムと
'90年代のテクノロジーとの幸福な融合は、
遂にカイパを超えたか？

フラワー・キングス (ロイネ・ストルト)
バック・イン・ザ・ワールド・オヴ・アドヴェンチャーズ

MAR 95155　¥2,500（税抜価格）　解説/対訳付

1.ワールド・オヴ・アドヴェンチャーズ　2.アトミック・プリンス/カレイドスコープ　3.ゴー・ウェスト・ユダ　4.行き先のない列車　5.オブリヴィオン・ロード　6.英雄のテーマ　7.テンプル・オヴ・ザ・スネイクス　8.マイ・コズミック・ラヴァー　9.ザ・ワンダー・ホイール　10.ビッグ・パズル



ロイネ・ストルト
ザ・フラワー・キング

MAR 95156　¥2,500（税抜価格）　解説/対訳付

1.ザ・フラワー・キング　2.ディスソナタ　3.ザ・マジック・サーカス・オヴ・ゼブ　4.目を閉じて　5.ザ・ピルグリムス・イン　6.ザ・サウンズ・オヴ・ヴァイオレンス　7.ヒューマニズモ組曲　8.スキャニング・ザ・グリーンハウス

カイパのギタリスト、ロイネ・ストルト。長く、プログレッシヴ・ロックのフィールドから遠ざかっていたストルトが'94年にカムバックした記念すべき作品。スリリングでメローなギターとカラフルなシンフォニック・ロック的アレンジはカイパのファンを桃源郷へと誘う幻想絵巻。

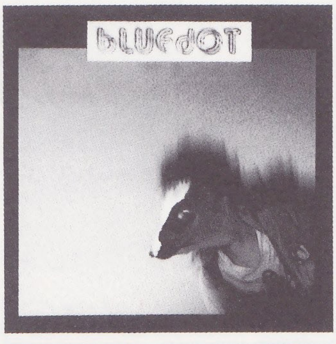


デヴィル・ドール
怒りの日

AR 95150 ¥2,500（税抜価格）　解説/対訳付

怒りの日（全編通して1曲のみの構成）

スタジオの火災による
マスター・テープの消失。再録。
紆余曲折を経て遂に完成した
4枚目のスタジオ・アルバム。
怪奇と幻想の織り成す
シアトリカル・ロックの世界。
闇の申し子として生を受けた
Mr.ドクターの独裁的世界は、
暗く、重く、そして耽美だ。



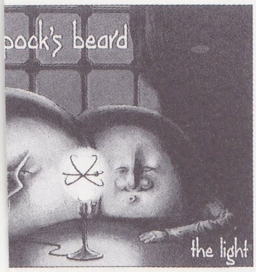
マジカル・パワー・マコ
ブルー・ドット

BELLE 95131 ¥2,910（税抜価格）　解説付

1.Blue Dot　2.Blue Dot II　3.Gothic Thic　4.Gothic Thic II
5.Mako Drum　6.Ukawamiming

サンフランシスコで録音されたマジカル・パワー・マコのニュー・スタジオ・アルバム。キャロライナーのドラマーが参加して、サイケデリックなインプロヴィゼーションを聴かせる意欲作。

25th OCTOBER ON SALE!



スポックス・ビアード
ザ・ライト

MAR 95180 ¥2,800（税抜価格）　解説/対訳付

1.ザ・ライト Ⅰ.ザ・ドリーム Ⅱ.ワン・マン Ⅲ.ガーデン・ピープル Ⅳ.ルッキング・ストレート・イントゥ・ザ・ライト Ⅴ.ザ・マン・イン・ザ・マウンテン Ⅵ.シーナー・ヴァラスコズ・ミスティック・ヴードゥー・ダンス Ⅶ.ザ・リターン・オヴ・ホリブル・キャットフィッシュ・マン Ⅷ.ザ・ドリーム 2.ゴー・ザ・ウェイ・ユー・ゴー 3.ザ・ウォーター Ⅰ.イントロダクション/ザ・ウォーター Ⅱ.ホエン・イット・オール・ゴーズ・トゥ・ヘル Ⅲ.ア・シーフ・イン・ザ・ナイト Ⅳ.FU/アイム・ソーリー Ⅴ.ザ・ウォーター（リヴィジテッド）Ⅵ.ランニング・ザ・レース Ⅶ.リーチ・フォー・ザ・スカイ 4.オン・ジ・エッジ

0年代に登場したシンフォニック・ロック・グループの中でも最大級の大物といるアメリカのグループ。湧き出るメロディ、熟練のアレンジ、そして破天荒なプイ。これが全くの新人だから驚く。全てのシンフォ・ファンに捧ぐ!!



ホイリー・コーン
昆虫偏愛

MAR 95174 ¥2,500（税抜価格）　解説付

注目を集める北欧から、又、新しいグループがデビュウ!!　テクニカルで変幻自在なチェンバー・ロック集団。カルティヴェイター的な強度に加えてアネクドテンのような叙情性をも加味した意欲作。

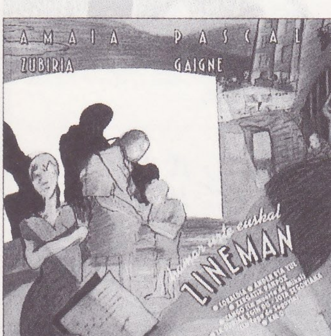
BELLE ANTIQUE

25th NOVEMBER
ON SALE!

バスク幻想

土の香りと
独特のアヴァンギャリズムの抽入
エキゾティシズムあふれる
バスク地方の音楽が
遂に日本へと上陸します

スペインとフランスにはさまれ、バスク語という独特の言葉と独特の文化圏を持つバスク地方。アマイア・スビリアという女性ヴォーカリストとフランス人アーティスト、パスカル・ゲイニュとのコラボレーションによって生まれた3枚のアルバムの内、最高作と呼び声の高い「ツィネマン」とパスカル・ゲイニュのソロ・ワーク「マルメロの陽光」の2作をベル・アンティーク・レーベルより国内発売することになりました。マドレデウス的なたそがれのイメージ。さらに何にも似ていないバスク地方の強固なオリジナリティは新鮮なエキゾティシズムと共に迎えられることでしょう。バスク地方のトラッド・ミュージックは素朴さと前衛性が常に同居している不思議な魅力に満ちています。



アマイア・スビリア&パスカル・ゲイニュ
ツィネマン

BELLE 95158 ¥2,910(税抜価格) 解説付

フランス人コンポーザー、パスカル・ゲイニュとバスクの女性ヴォーカリスト、アマイア・スビリアによるコラボレイション。彼等が担当した様々な映画の為に書かれた作品群。マドレデウス的な異国情緒に満ちた作品。

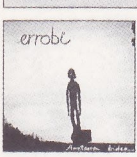


パスカル・ゲイニュ
マルメロの陽光

MAR 95159 ¥2,500(税抜価格) 解説付

1992年、カンヌ映画祭で批評家賞を受賞し、日本でも上映された、鬼才、ヴィクトル・エリセ(「ミツバチのささやき」他)の同名の映画のサウンドトラック作品。アコースティック感覚で織り成すセンシティヴな空間。

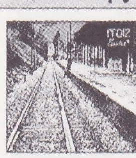
同　時　発　売
(完全限定盤。品切れになり次第廃盤となります。)



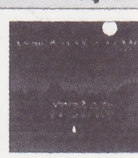
エロビ
さいはての地
MAR 95160
¥2,200(税抜価格)解説付
トラッドとジャズ・ロック系の要素をブレンドした意欲作。



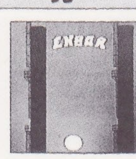
イトイス
イトイス
MAR 95161
¥2,200(税抜価格)解説付
ナイーヴな感性が光るプログレッシヴ・サウンド。



イトイス
エゼキエル
MAR 95162
¥2,200(税抜価格)解説付
優しいイメージのセカンド・アルバム。



イツィアール
イツィアール
MAR 95163
¥2,200(税抜価格)解説付
女性ヴォーカル+プログレッシヴ・トラッド。



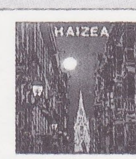
エンボル
エンボル
MAR 95164
¥2,200(税抜価格)解説付
メロディアスなサウンドを有するグループ。



エンボル
カテベギアク
MAR 95165
¥2,200(税抜価格)解説付
ギター、フルート等を巧みに使用した独特の世界を形成。



イスカイス
イスカイス
MAR 95166
¥2,200(税抜価格)解説付
バスクのトラッドを基本にプログレッシヴなアレンジを加えた作品。



アイセア
アウツ・ガウア
MAR 95167
¥2,200(税抜価格)解説付
アマイア・スビリアが在籍していたトラッド・グループ。

BELLE ANTIQUE
A LABEL DIVISION OF MARQUEE GROUP
TEL. 03(3954)4896 FAX. 03(3954)9563

BELLE ANTIQUE

CHRISTMAS RELEASE RUSH!

16th DECEMBER ON SALE!



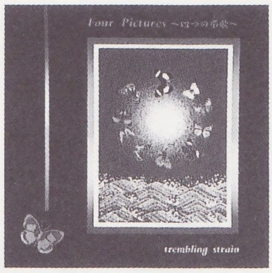
ボーナス・トラック収録

アイランド
ピクチャーズ

MAR 95173 ¥2,800(税抜価格)　解説/対訳付

1.序章　2.ゼロ　3.ピクチャーズ　4.ヘロルド・アンド・キング　5.ヒア・アンド・ナウ　6.エンプティ・ボトルズ(ボーナス・トラック)

驚愕のロック・シンフォニー。シンフォニック・ロックの頂点。ユニヴェル・ゼロのミスティシズムとSFFの構築美を持ち、卓越した技巧で演奏してみせる彼等のテンションを越えるものは未だに存在しない!!



トレンブリング・ストレイン
四つの弔歌(ちょうか)

BELLE 95171 ¥2,910(税抜価格)

1.埋葬歌　2.印　3.火葬歌　4.印Ⅱ　5.嘆きの河　6.印Ⅲ　7.鳥葬歌　8.印Ⅳ　9.水葬歌

日本の生んだエクスペリメンタル・ロック・ユニット。そのメディティショナルでフリー・フォームな作風は海外で大きな反響を呼んだ。ここに早くもセカンド・アルバムの登場。4つのメイン曲と挿入曲からなるミステリアスな弔歌を収録。

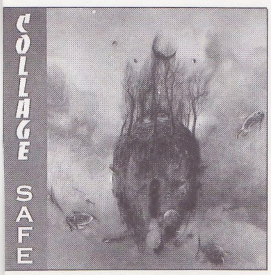


イルヴェイター
チルドレン

MAR 95185 ¥2,800(税抜価格)　解説/対訳付

1.かすみ　2.イン・アワー・ライヴス　3.ギヴン・アウェイ　4.レイト・オヴ・コンセンス　5.クラッカー　6.アイ・ネクスト・トゥ・グラス　7.ユア・ダーケスト・ナウアー　8.ザ・ファイナル・ストローク

アメリカのニュー・フェイス、イルヴェイターのセカンド・アルバム。歌心を大切にし、アンサンブルもスケールアップした好作。ペンドラゴンやシャドウランドのような、ロック・スピリットと重厚なシンフォ系のアレンジが新しい世代のシンフォニック・ロックの形を具現化します。



コラージュ
セイフ

MAR 95187 ¥2,800(税抜価格)　解説/対訳付

世界中のプログレッシヴ・ロック・ファンの間で評判となっているポーランドのコラージュ。満を持してのニュー・スタジオ盤登場。前作「Moonshine」をさらに完成させたようなシンフォニック・サウンド。最高作か?



ボーナス・トラック収録

トレース
鳥人王国

MAR 95172 ¥2,500(税抜価格)　解説付

1.ブーレ　2.スナッフ　3.ジャニー　4.作品第1065番　5.ペニー　6.トリクシー・ディクシー　7.組曲:鳥人王国　8.バーズ(ボーナス・トラック)　9.タブー(ボーナス・トラック)

イアン・モズレイをドラムスに迎えて、さらに強力になったセカンド・アルバム。ダリル・ウェイのゲスト参加によりスリリングなインター・プレイの応酬が楽しめる1枚。テクニカル・シンフォ系究極の1枚!



ボーナス・トラック収録

アラクノイ
アラクノイの憂鬱

MAR 95181 ¥2,500(税抜価格)　解説付

1.シャマデール　2.地下納骨堂　3.イン・ザ・スクリーン・オヴ・ユア・アイズ　4.心象風景　5.すずめばち　6.道化師の別れ　＋ボーナス・トラック

'72～'74年頃のキング・クリムゾン的サウンドとフランス特有のパラノイア的宇宙を加味した独特のシンフォニック・ロック・ワールド。ダークでヘヴィ、そしてデカダンスの美学。

EURO ROCK MASTER PIECE ON CD

硬派のシンフォ/チェンバー系



カルティヴェイター
幼年期の方針

MAR 95176 ¥2,500(税抜)
解説付

北欧のチェンバー・ロック・シーンを代表する1枚。ツアムラ・マンマス・マンナ的なフレームの中に、よりストレートなダイナミズムを抽入した作品。息をつく暇も与えない程のテンションの連続は必聴!



ブルー・モーション
碧き衝撃

MAR 95175 ¥2,500(税抜)
解説付

スイスのサーカスが発展して結成されたグループ。スリリングなアンサンブルと強固なダイナミズムを誇る彼等唯一のアルバム。硬派のサウンドと個々の技巧の冴えは耳にする者全てを圧倒する。

ブリティッシュ・ロック系



ボーナス・トラック収録

エニド
イン・ザ・リジョン・オヴ・ザ・サマー・スターズ

MAR 95184 ¥2,800(税抜)
解説付

記念すべき、エニドのデビュウ・アルバム。静と動の対比。ロマンティシズムあふれるピアノ・プレイ。本作を最高作の一つにあげるエニド・ファンは多い。ボーナス曲収録。オリジナル・カヴァーでのリリース。



ジョーンズィー
グローイング

MAR 95182 ¥2,800(税抜)
解説/対訳付

今まで未CD化だったサード・アルバムが登場。アラン・ボウンのブラスを効果的に配した独特の作風は、前作までのジョーンズィー節を継承しながらも新たな魅力が加味されている。



アメイジング・ブロンデル
大英帝国

MAR 95182 ¥2,800(税抜)
解説/対訳付

イギリスのトラディッショナル・フォーク・グループとして高い評価を受けてきたグループ。そんな彼等のディスコグラフィー中、最もプログレッシヴ寄りの作品として認められてきた作品。初CD化!!

シンフォ系



クルーシス
幻想絵巻

MAR 95188 ¥3,200(税抜)
解説付

アルゼンチンを代表するプログレッシヴ・ロック・グループ。ヘヴィでダークなファーストときらびやかなイエス的宇宙を展開するセカンドの2作を2イン1で収録したボーナス盤!

BELLE ANTIQUE　TEL. 03(3954)4896　FAX. 03(3954)9563
A LABEL DIVISION OF MARQUEE GROUP

RARE MEMORABILIA!

併設のミュージアム・ショップには、
コレクター垂涎の各種貴重グッズが揃っています。

T-SHIRTS (Rock Express製、Brockum製他オフィシャル物)
BLACK SABBATH／METALLICA／LED ZEPPELIN／DEEP PURPLE／GRATEFUL DEAD(TIE DYE物)／PINK FLOYD('ATOM HEART MOTHER'他)／KING CRIMSON('COURT'、'LARKS'、'STARLESS'、'RED'など全4種)／JIMI HENDRIX／VELVET UNDERGROUND
…¥1,500～

BOOKS
THE ILLUSTRATED COLLECTOR'S GUIDE TO LED ZEPPELIN (CD EDITION) ¥2,200
FRANK ZAPPA: A VISUAL DOCUMENTARY ¥3,000
FRANK ZAPPA IN HIS OWN WORDS ¥2,500
DIE WELT DES TAROT
(ドイツ語版「タロットの世界」) ¥5,250
マーキー別冊ロック集成各種常備

STICKER & TAG
KING CRIMSON ('DISCIPLINE'、'LARKS'、'GUITAR CRAFT'など全3種) 各¥500
DEEP PURPLE (ツアー用タッグ1種) ¥950

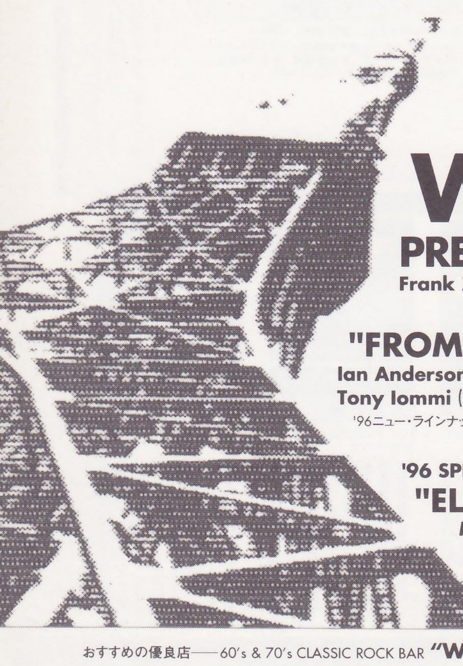
CD
TAROT (2CD＋BOOKLET＋TAROT CARD) ¥5,950
HAWKWIND：25 YEARS ON (4CD＋BOOKLET) ¥6,500
WARRIOR ON THE EDGE OF TIME (1CD＋BOOK) ¥2,800
QUARK：STRANGENESS & CHARM (1CD＋BOOK) ¥2,800
アモン・デュール：サイケデリック・アンダーグラウンド／エクスペリメンテ
ニック・ターナー(ホークウインド)：宇宙の祭典ライヴなど、キャプテン・トリップ・レコーズ物も扱っています。¥2,500～
このほか仏SPALAX LABELの主要作品のCD(各¥1,980)が揃っています。

MYSTERY GOODS
DAY DREAMER (手軽にサイケデリック感覚が味わえる画期的なメディテーション・ツール) ¥2,980
謎の円盤 "DAZER"(3Dメディテーション・ツール) ¥500
PSYCHEDELIC TAPESTRY ¥2,200
GRATEFUL DEAD CARD (トランプ1種) ¥1,200
LED ZEPPELIN 'PRESENCE' OBJET (最新レプリカ) ¥5,000

東京タワー
蠟人形館
WAX MUSEUM

東京タワー・ビル3F TEL.03-3436-6661(代)
年中無休／OPEN 10:00AM～7:00PM
(イベントにより延長あり)





WAXMANIA!

PRESENTED BY TOKYO WAX MUSEUM

Frank Zappa, Ritchie Blackmore, Robert Fripp, Peter Gabriel, Jimi Hendrix, Jimmy Page…

"FROM UNDERGROUND TO OVERGROUND"

Ian Anderson (Jethro Tull), Keith Emerson (E.L.&P.), Tony Iommi (Black Sabbath), James Hetfield (Metallica)

'96ニュー・ラインナップついに登場。ロックの歴史を華麗に彩る重鎮4人が今、高らかに咆哮する!

'96 SPECIAL LINEUP COMING SOON!

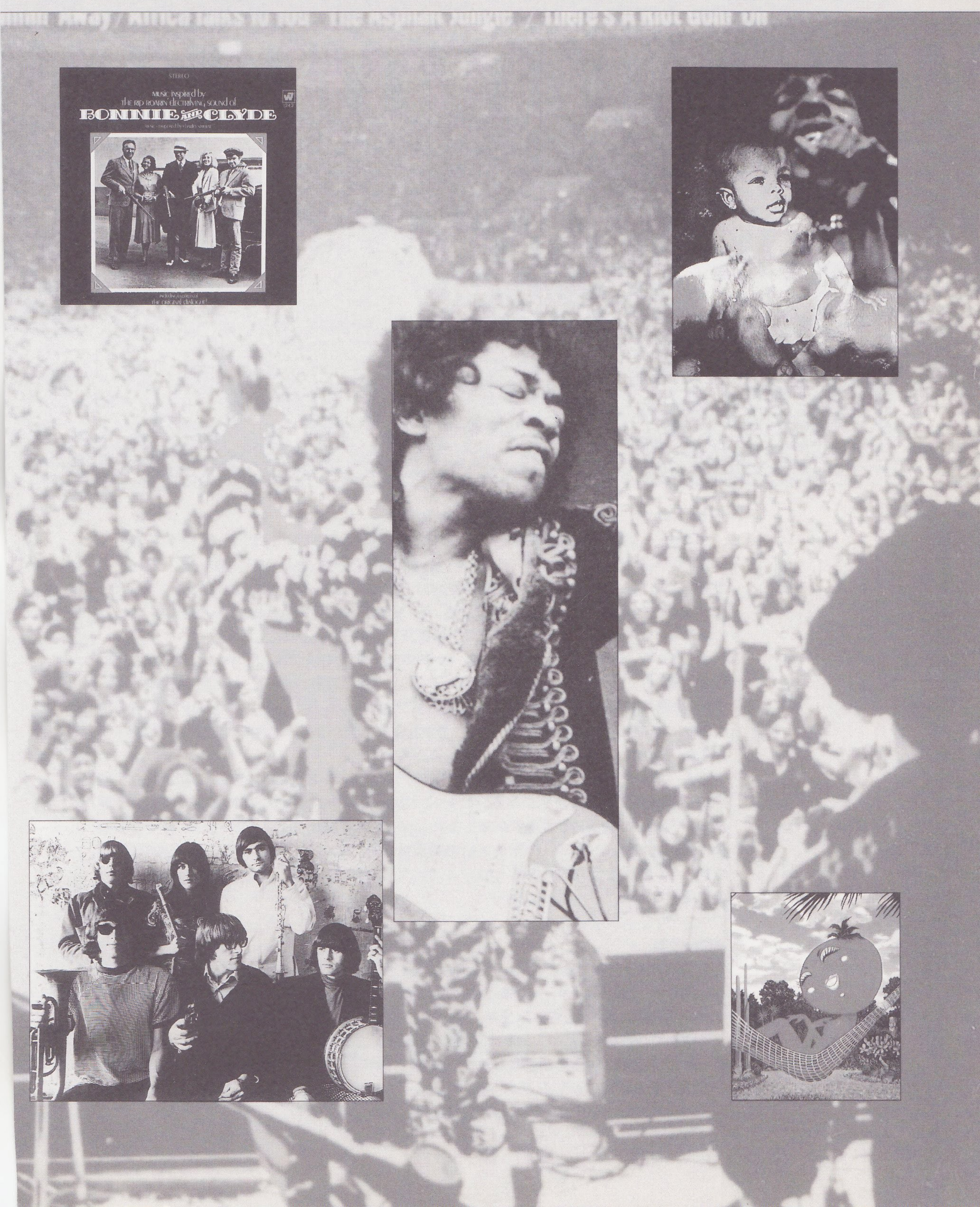
"ELEKTRONISCHE MEDITATION"

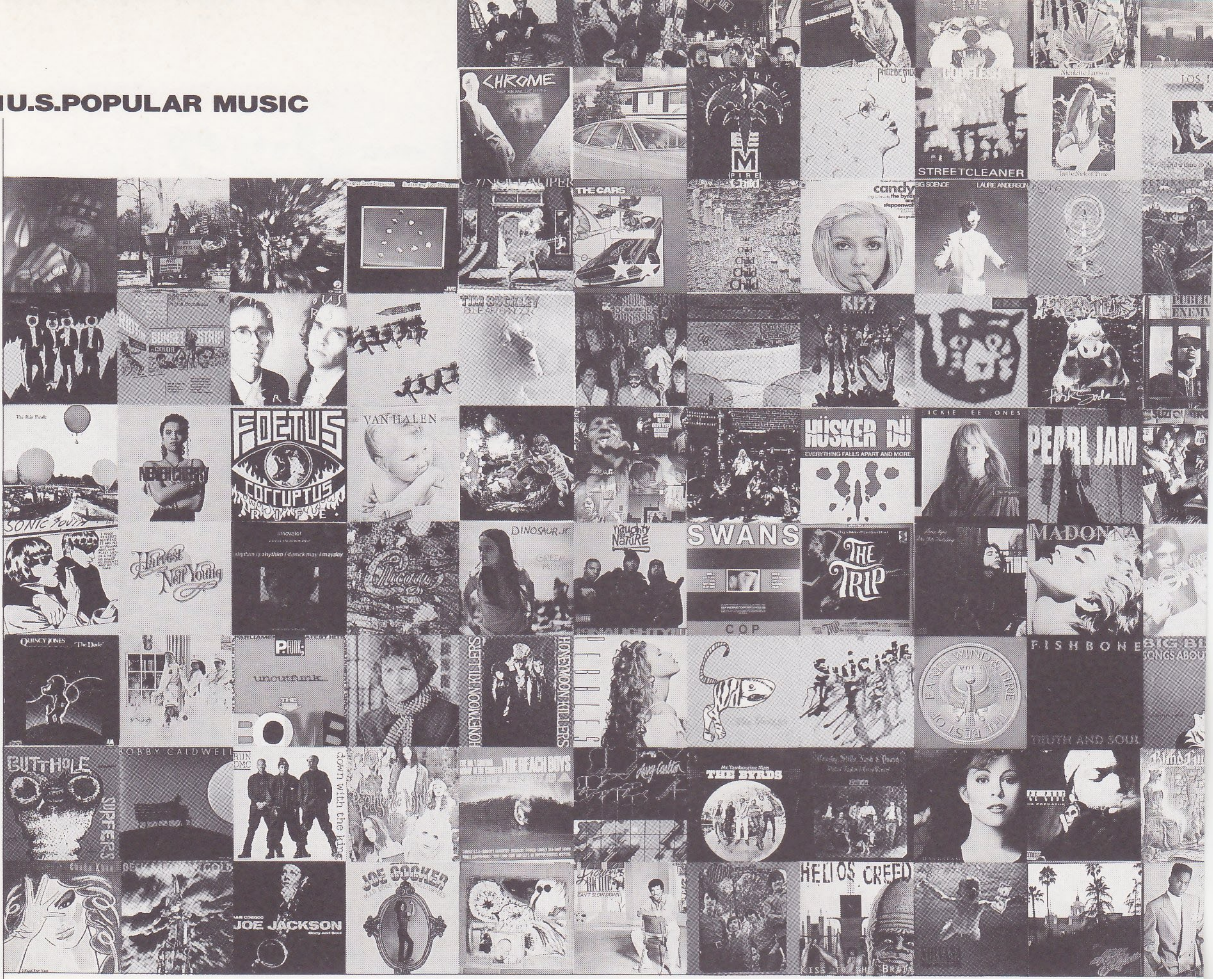
Mani Neumeier (Guru Guru), Manuel Göttsching (Ash Ra Tempel), Klaus Schulze !

U.S.ポピュラー・ミュージック

文●松本昌幸

U.S.POPULAR MUSIC





ポピュラー・ミュージックの発祥地・輸出国

ポピュラーと言うからには誰もが知っている、そんな盤がアメリカには死ぬほどある。そればかりではない。キャラの立つミュージシャンもひしめき合って、アメリカこそポピュラー・ミュージックの宝庫である。時代の顔どころか月刊で顔。これだ。毎月の顔。スラッシュの顔。グランジの顔。ニューエイジの顔。ラップの顔。なんでも顔。そう言えば、アメリカの盤はレコード時代からジャケに顔をもってくる。デ〜ンと。カンやサムラの世界ではありえないことだ。ヒョー。

ポップっていうのは、アンディ・ウォーホールがマリリン・モンローの写真をコピーしまくった事だ。大量生産っていうのは必ずポップである。ディテールを除いていって第一印象を補強する事。つまり簡単に言うと、「わかりやすく」する事だ。これがポップ。最大公約数ってやつだ。だからたくさんの人に「わかる」。「わかる」って、いつから音楽は説明事になったのか、てなわけだが、アングロ・サクソン系は、この面でおそろしく優れている。

でも、こうも言えるだろう。それは、「わかりやすい」パターンを布教したからだ。経済的な広がりに、あるいは英語の広がりに、あるいはキリスト教の広がりに、相乗りしてアメリカの音楽は世界に広がっている。女性形と男性形があり、それに従って形容詞が変化するヨーロッパ語では複雑なのだ。英語はシンプルだ。ほぼ日本語の対極にある。あのディテールの欠落。シンプルな英語はコピーの気軽さとジャケの顔につながる。こんなに「わかりやすい」アメリカの音楽はアッという間に広がり、ポピュラー然となった。

移民の歌

合衆国と言うからにはたくさんの人がいる。人口2億以上の市場はイギリスや日本を軽く上回る。UKチャートUSAチャートの根本的な違いはここにあって、即刻、経済に結びつくバック・ボーンが国の中にある。とうもろこしと小麦のストックがミシシッピ川右岸の大平原にあるここと同じだ。ところでこのたくさんの人たちは、俗に人種の坩堝と云われる。いろんな人がいろんな地域から来ているから、いろんな音楽もやってくる。アメリカの音楽は二重、三重のモザイク模様になっており、その根源はジャズ、ブルース、ゴスペル、トラッド、カントリーあたりにある。これが複合して、つまり＋－×÷等でロックン・ロールとか、なんでも、あり。



反ヨーロッパ主義

ケージ、ライリー、その他大勢。ヨーロッパで起こったダダの動きを下ってボイス等大勢。1900年代の前半から反伝統の流れはアメリカに限らずあったとしても、ヨーロッパに拮抗するアメリカという位置づけがあったのかもしれない。アメリカのアヴァンギャルドが成果を見せたのは、お金と結びつくことで伝統を打ち崩した'60年代だったと思う。ウォーホールのような「くだらない事」が大きな意味を持ってしまうのは、大きくはこうした図式の中にある事だからだろう。ザッパは、ここにいて、実はサイケデリックにはあまりいない。アメリカのアートは批評の上に成り立ってこそ意味を持って、だからこそ伝統「ゲイジュツ」の枠組みを最初から持っていなかったように思う。それは路上から出て来た。日常に即応する一種の手段としてあることが多い。そしてこれも世界に広がった。伝統がないというバックボーンゆえにアヴァンギャルドな拮抗の仕方をしたアメリカは、今、その手法自体がアメリカ固有のアート言語にもなっている。それすらが既に古典として史実づけされているように思うのだ。

ヒッピー/反戦

'60年代のアメリカは'50年代から引き続き社会問題が吹き出しているが、それはこの時期、アメリカが急成長していたからかもしれない。エネルギーは外へ外へと出て行き、月へもベトナムへも出て行く。とにかく過剰な程のパワーだ。ヒッピーはここから逃げていこうとする動きだったとも映る。月に行くエネルギーを精神へ、外ではなく内へ。その時、「未知」というキーワードは、東洋を神格化したかもしれない。古くは、"日いずる国、黄金の島"(だっけ？)とかパリにおけるジャポニズム、黒髪とか、いろいろある。こうした傾向は'60年代中頃まで合法だったドラッグの一般家庭への普及や、その後の本格的なベトナム戦争への介入による徴兵など、外と内とのダイナミックな揺り動かしがあって学生運動等の大きな意味でのアジテーションにつながったことだろう。ウッドストックはこうした流れの中のエポックだったろうし、そこにはジャニス・ジョップリンやジミ・ヘン、ジム・モリソン等のヒーロー、ヒロインがいた。そして彼らの相次ぐ死去は、「イージー・ライダー」や「バニシング・ポイント」や数々のニュー・シネマに通じただろうし、「俺たちに明日はない」が予言したアメリカの若者像を今、切なく回想させるだろう。

踊るアメリカ、ヒット・チャートにMTV

ブラック・アメリカンの持つリズム感は、やっぱり人種的なもので、そりゃ同じ黒人でもリズムの悪い人は悪い。が、そんな話ではない。黒人をオリンピック水泳チームに入れないアメリカの根深さは到底想像がつかない。でも'70年代に「サタデイ・ナイト・フィーバー」でディスコ渦になる以前からジェームス・ブラウンは活躍してたし、スライなんてプログレッシヴなことを演る人もいた。まず、ビート。グルーヴ。アメリカの「わかりやすさ」は、ここにある。ここに黒人、ヒスパニック等の有色人種たちが持ち込んだものは大きい。極端なことを言ってしまえば、アイルランドから移住した子孫たちは、彼ら有色人種たちが持っていたものをリアレンジして輸出したのかもしれないわけだ。

こうした雑種の音楽がいっぱい詰まったアメリカを「わかりやすく」する方式は、1960年代を通して爆発的な？確立を見る。ヒットチャートだ。これだ、アメリカ、ヒット・チャート。アメリカが世界に誇る、最強の音楽教育機構である。音楽の梅毒とも云われるこのシステムは、しかし影響力の面で今も揺るぎない。1970年代に入って、音楽は商品、ミュージシャンはエンターテイメントに突入したわけだが、これぞアメリカが生んだ、経済、キリスト教、英語にとってかわるものだ。決定的だったのは、1970年代後半に普及したMTVだろう。耳と目の決定的な影響力の違い。この時点で、はや音楽の性格は書きかえられたに等しかった。大資本のオーバーグラウンド・ネットもアッという間に世界に広がり、ヒットチャートは今や大統領よりも人気がある。(J.F.K.の頃、キューバ危機の頃はそうじゃなかったんだよね？)

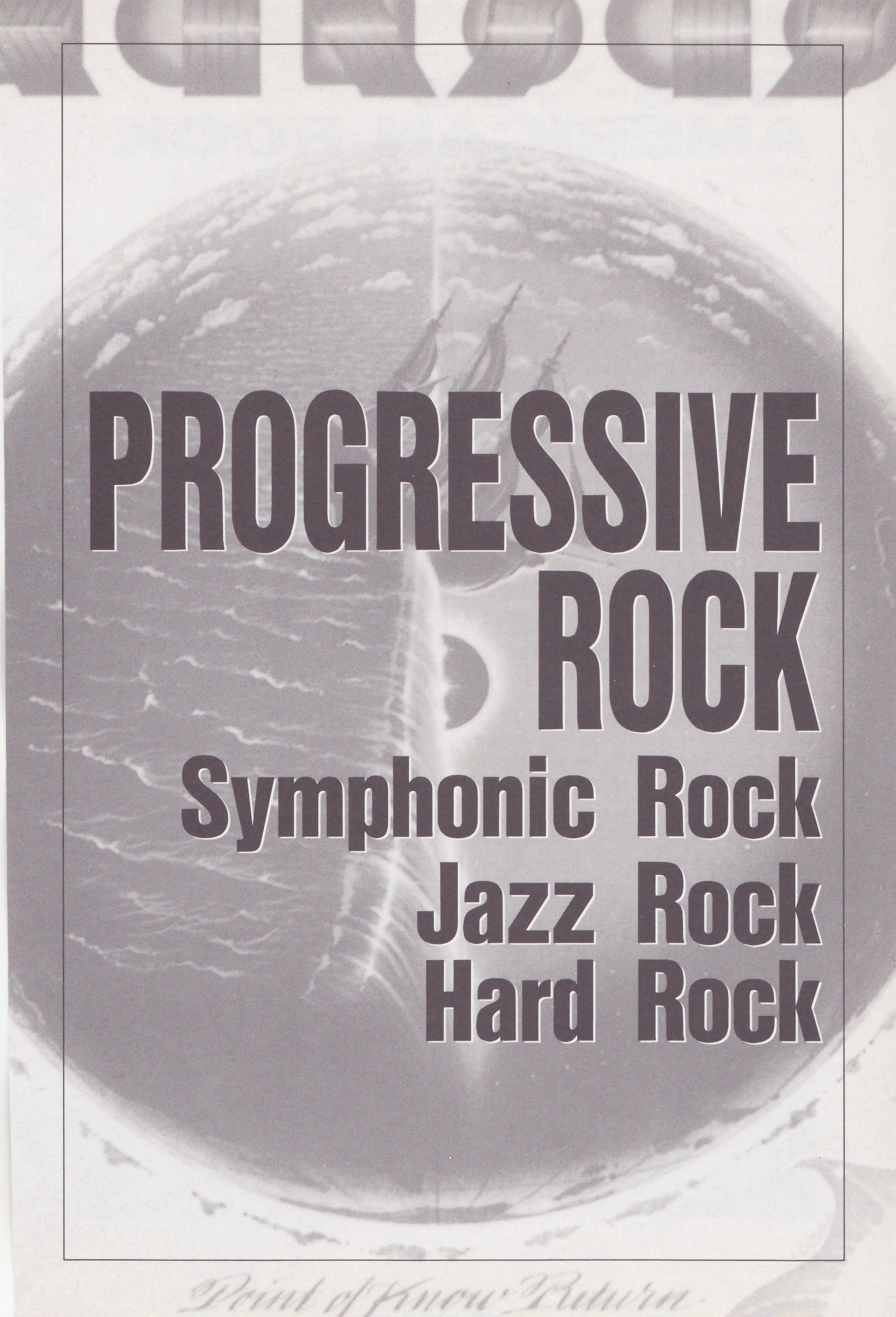
アンダーグラウンド・ネット

MTVで決定的になったヒットチャートは、言ってみれば象牙の塔でもある。だから、おもしろくないリスナーが出てきて全然おかしくない。'70年代の終わりから'80年代に入ってインディペンデントな動きは、未だ潜在的だったアメリカも、'80年代中頃にはソニック・ユースのメジャー契約を一つの機に表面化する。しかし、よく見れば、スラッシュやジャンクと呼ばれた動きは'80年代に入って蓄積されていた節はあって、更に幾つものミュージシャン・ネットが出来つつあったとも思える。こうした動きは、それまでの大資本/メジャーが築きあげた音楽産業システムと構造に対して注意深い。テクノにしても多分同じだろう。今、ふり返ってみれば、'80年代の10年間に、そうしたミュージシャン主義、音楽主義の作り手を蓄積させたのは、MTVを旗印にした'70年代型音楽産業だったのかもしれない。また、売れるもののパターン化に飽きた作り手、受け手の需要と供給が、いろんな所で循環してサイクルを造っていたということでもあるかもしれない。どちらにしても、'80年代から'90年代にかけて、アメリカの音楽のキャパが再び広がったことだけは確かだ。

ここには大きな起因材料がありそうだ。それはMTVに同じく情報網なのだ。広いアメリカでコンピュータ・ネットは今有効だ。それはMTVのような一方向ではなく、また電話よりも用途が広く、しかも何より個人単位のネットなのだからなおさらだろう。このネット上を音楽やそれに関する情報が流れるのだから、インディペンデントな動きは、物の見事にこれに同調する。しかもミュージシャン単位、リスナー個人単位でアメリカを出て行くことも可能なのだから、ここに何らかの可能性がないわけがない。MTVというアメリカの広報塔は、あまりにも高くそびえていて、そこではもう音楽が商品でしかないことを、作る側ほどよく知っている時代に入っているということだろう。果たしてMTVは広大なアメリカのいろんな人たちが各々につくる無数の音楽を吸い上げるだけのキャパと懐の深さを持っているのだろうか？ MTVの前には「メジャー」漬けにされた最大公約数を絶対と信じるたくさんの人たちが待っているというのに。

そう思えば、やはりアメリカン・ドリームは過去の夢のような気がする。大枠での数の論理は続くとしても小枠でのそれは崩れつつある。アメリカ音楽の足元は揺らいでいて、それは何か、強大なアメリカの弱体化を連想させたりもする。多民族であるアメリカのバックボーンはそういう今だからこそ逆の意味でチャンスがあるようにも思うのだが。一つがすたったとしても、もう一つが盛り返すだけの選択肢をもともと内包しているアメリカだからだ。

とにかく、アメリカの音楽層の厚さは、すさまじい。どこまで掘り進んでいっても何かの音楽が鳴っているという印象だ。ヒットチャートの強大なイメージは確かに大きいけれど、死ぬほどある有名盤の堆積層をはがしていけば、どれくらいアメリカという国の音楽埋蔵量が豊かであるか、ほとんどそれは底知れない。それは音楽ビジネスをリードする国が実は一番ビジネスっぽくない部分を抱えているスケールなのだ。



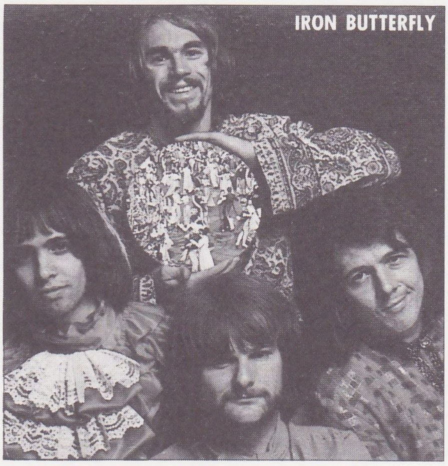
PROGRESSIVE ROCK

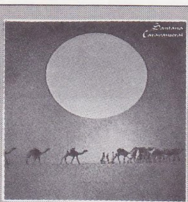
Symphonic Rock
Jazz Rock
Hard Rock

'60's-'70's AMERICAN ROCK

文●津田幸一

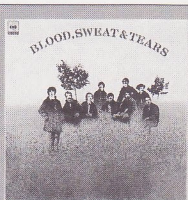
伝説のウッドストック・フェスティヴァルと前後して、アメリカン・ロックのシーンに続々と革新的なグループ達が登場する。新しい時代の到来だ。それらは「アート・ロック」あるいは「ニュー・ロック」等と当時呼ばれていた。そう呼ばれたのは、サンタナ、ヴァニラ・ファッジ、アイアン・バタフライ、マウンテンや、それとブラス・ロックとも呼ばれたシカゴ、ブラッド・スウェット・アンド・ティアーズ等。一見バラバラだが、細かく分析（余計なお世話だな）すると見えてくる線が有る。それは他種の音楽の方法論やスタイルを、それまでのロック・ミュージックと融合させようと試みている点。サンタナはラテン音楽、マウンテンはバッハの対位法、ブラス・ロックはジャズ等という具合。ヒッピー・ムーヴメントやドラッグ・カルチャーが生んだサイケデリック・ロック、あるいは都市部のアンダーグラウンド・シーン、そういうものの基盤に立った上で、自分達の土壌にあるネイティヴな音楽への再帰を試みたということだろう。欲求のままにプレイするのではなく、そこにインテリジェントな試行錯誤が有ると（感じさせる）いう点に於て、それまでの主流であったロック・ミュージックと一線を画していたのは間違いがない。今までのロック・ミュージック（ポピュラー・ミュージック）という枠では括れない、もはや芸術（アート）と言っても過言でないから「アート・ロック」。アメリカンらしい単純明解さだ。とは言え、こんな些細なことが「ロック・ミュージシャン＝不良」という図式を覆して、「＝アーティスト」と変貌させたのだから、言葉の持つ意味合いは大きい。しかし、そんな「アート・ロック」の旗手たちも、ロック・ミュージックが巨大な産業になり、リスナーが「大衆」を求めることにより、その精神性を失い、路線変更を余儀なくされたり雲散霧消してしまう。皮肉なことに、同じ精神性を持つ英国の「プログレッシヴ・ロック」が時代を席巻する直前のことだ。





SANTANA
Caravanserai
ソニー SRCS 6318 '72年

ラテンのリズムを取り入れたドライヴ感のある演奏で人気を博したサンタナであるが、大ヒット・アルバム「Abraxas（天の守護神）」の１曲目に見られるように、元来、プログレッシヴな音作りを見せることもあった。本アルバムは、グループとしては、４枚目の作品であり、カルロス・サンタナがヨガ及びジャズ（後にスリ・チンモイとジョン・コルトレーンに行き着く）に興味を持ち始めた時期に作られたものである。全10曲、「砂漠を行くキャラヴァン隊」をテーマにした、宗教色を感じさせるトータル作品。技術的には次作「Welcome」に一歩譲るものの、リリカルなギター、多彩なパーカッション等、グループとしての持ち味を最大限に生かした、従来とは異なる、クールで凝った作りのグループ最高作である。（賀川）



BLOOD, SWEAT AND TEARS
Blood, Sweat & Tears
ソニー SRCS 6311 '68年

ブラッド・スウェット＆ティアーズはシカゴ、チェイス等と共に「ブラス・ロック」という枠組みで語られることが多いバンドだ。その生い立ちはアル・クーパーがホーン・セクションを導入したジャズ・ロック・バンドを作ろうというコンセプトから派生したもの。この作品は彼等のセカンド・アルバム。ジャズとロックのダイナミズムを融合して、成果を収めたファーストからさほど間を置かずにリリースされた。メンバー・チェンジ等もあって、多少の変化はあるが、重要なのはエリック・サティの「ジムノペディア」を取り上げている点。ファーストの次の目標は「現代クラシック」。融合というレベルには至ってないが、統合されたプログレッシヴな音楽を目指す意欲として証拠になり得る作品。（津田）



MOUNTAIN
Nantucket Sleighride
ソニー SRCS 6240 '71年

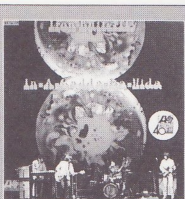
巨漢レスリー・ウェストのソロ・プロジェクトが発展してバンドとなったマウンテン。フェリックス・パパラルディとレスリー・ウェストの凄まじいまでのぶつかりあいが大きな魅力の一つだった。そんな彼等の代表曲"ナンタケット・スレイライド"を収録したのが、このサード・アルバム。フェリックス・パパラルディはミシガン大学で音楽理論を学び、そこで得たクラシック理論をロック・ミュージックに持ち込んだ。それはクリームに於ても実践した「バッハの対位法」で、特にこのタイトル曲でそれはほぼ完成していたと言える。美しいメロディ・ラインと大胆で迫力有るギター・プレイ、細部まで行き届いたアレンジ、ときとしてとめどなく繰り広げられるインタープレイ。英国のプログレッシヴ・ロックのバンドにも決して引けを取らない知的なハード・ロックの代表作。（津田）

VANILLA FUDGE



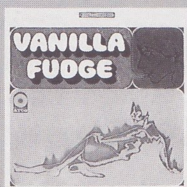


SANTANA



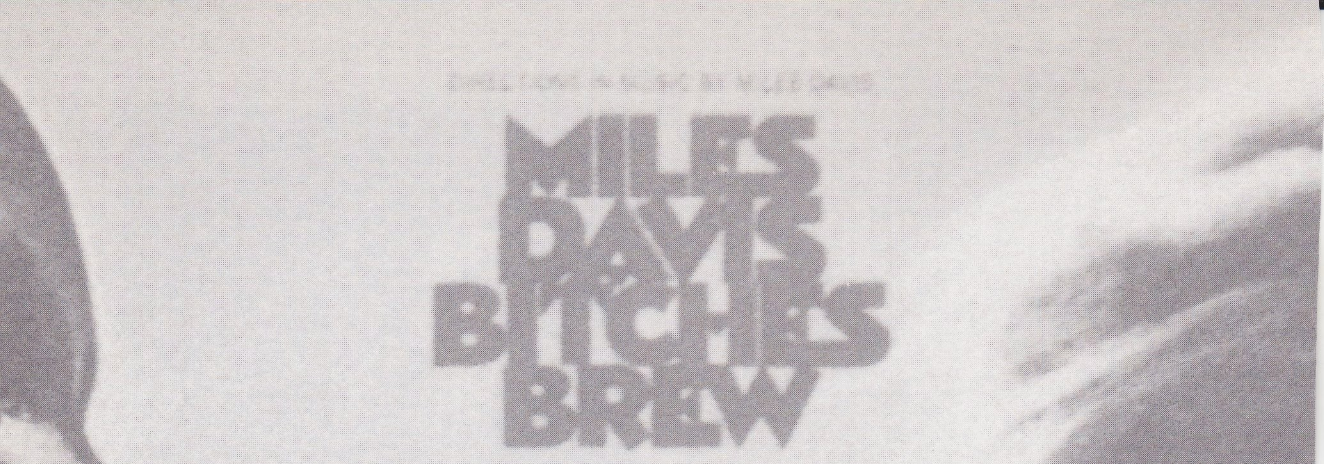
IRON BUTTERFLY
In-A-Gadda-Da-Vida
Atco 33250-2 '68年

アイアン・バタフライの一躍シーンに踊り出るきっかけとなったアルバム。特にLPでのB面を費やした17分にも及ぶタイトル曲は、この後のサイケデリック・ロック/ヘヴィ・ロックのシーンの礎になるべきもので、ネイティヴ・アメリカン調のリズム・ワーク等、完成度も高く、バンドの水準の高さを物語る。基本になるのはファズ・ギターとオルガンの絡み合いで、野太い声のヴォーカルがいかにも。アルバム全編を通じてそのサウンドのクォリティが高く、他のようにファズ・ギターがむやみに汚くなったりすることもなく、オルガンの素直な音色が効果的な雰囲気を生んでいる。A面の小曲は当時のサイケデリック・ポップスとでも言うべきメロディとサウンドだがこれも適度な明るさを持ち、聴きやすい。（津田）



VANILLA FUDGE
Vanilla Fudge
イースト・ウエスト 20P2-2096 '67年

シングル・ヒット曲“(ユー・)キープ・ミー・ハンギング・オン”を含むヴァニラ・ファッジのファースト・アルバム。参加メンバーは、カーマイン・アピス(ds)、ティム・ボガード(b)、ヴィンス・マーテル(g)、マーク・スタイン(org,vo)の4人。'60年代後半以降の、ニュー・ロック、アート・ロックの時代を代表する作品の1つである。当時のトップ・グループの多くはギターをメインにしていたが、彼らの演奏の中心はハモンド・オルガン。現在のレヴェルで見れば、各メンバーの演奏技術は傑出したものとは言い難いが、よく考えられた曲作りがされており、変化に富んだ展開で聴く者を飽きさせない。'70年代初期のブリティシュ・ロックをやや明るめにしたかのようなサウンドが聴ける中々の力作。（賀川）


DIRECTIONS IN MUSIC BY MILES DAVIS
MILES DAVIS BITCHES BREW

MILES DAVIS



文●坂本　理

エレクトリック・マイルスとその周辺

「エレクトリック・マイルス」とは中山康樹氏が好んで使う'60年代終わりに始まったマイルス・デイヴィスのエレクトリック・ジャズの探求が'70年代に未知なる新しい音楽の創造へと壮絶な軌跡を辿る、まさにそのマイスル自身を指す言葉だが、それはここで語るべきマイルスそのものなので、流用させてもらうことにしよう。

マイルス・デイヴィスは伝統に対し常に革新でありながら、自らが同時代の伝統を築いて来た恐るべきミュージシャンであり、彼を語れば'40年代後半からのジャズの歴史がそっくり語れてしまう。とてもそんな余裕はないので、ここではクール・ジャズ('40年代)→ハード・バップ('50年代)→モード・ジャズ('60年代)→エレクトリック・マイルス('70年代)という道筋だけを示唆し、エレクトリック・マイルスの前ステージである'60年代マイルスのクインテットのメンバーがハービー・ハンコック(p)、ウェイン・ショーター(sax)、ロン・カーター(cb)、トニー・ウィリアムス(ds)だったことを頭の片隅に入れておいてもらおう。

'60年代の黄金のクインテットはジャズのメインストリームで活躍したが、革命家マイルスは台頭して来たロック・リズムを意識しながら全く新しいジャズを模索し、エレクトリック・ピアノやエレクトリック・ギターの導入に踏み切り、オーストリア出身のジョー・ザヴィヌル(key)とイギリスから来たジョン・マクラフリン(g)を迎えたことで、「In A Silent Way」('69)、「Bitches Brew」('69)という決定的な作品を生み出すに至った。ここで繰り広げられている音楽は、ジャズのフォーマットを悉く否定した、不定形の、しかし明らかに構成されたインプロヴィゼーション・ミュージックだ。バンドのフォーマットすらが崩れ、ウェイン・ショーターこそ残っていたが、チック・コリアやジャック・ディジョネット、デイヴ・ホランドら若い有能なミュージシャン達が手探りでマイルスの実験に食らいついている。マイルスの発明したこの名付けがたい音楽がジャズ・シーンに与えた衝撃は計り知れないが、マイルス自身はマイケル・ヘンダーソンというファンク系ベーシストを加入させることでリズム主体の試行へと焦点を絞り込み、他を寄せ付けぬ孤高の領域へと邁進して行った。

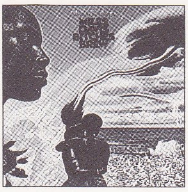
こうしたマイルスの活動は、周囲に直接間接に様々な影響を及ぼしたが、とりわけ直接その音楽を吸収した若手ミュージシャン達はその精神を受け継ぎ更に新しいエレクトリック・ジャズを追及して、目覚ましい成果を上げた。ジョン・マクラフリンが結成したMAHAVISHNU ORCHESTRA、ジョー・ザヴィヌルとウェイン・ショーターが結成したWEATHER REPORT、チック・コリアが結成したRETURN TO FOREVERの3バンドはそれぞれに素晴らしい独創的な音楽を創造し、マイルス同様ジャズ・シーンに大きな衝撃と影響を与えた。

MAHAVISHNU ORCHESTRAはあまりにもプログレッシヴ・ロックと通底するものが多いバンドなので、別枠で紹介する。

WEATHER REPORTの音楽は、マイルス以上に未来を向き、ほとんど宇宙的、SF的なヴィジョンを持っていた。初期はチェコ生まれのベーシスト、ミロスラフ・ヴィトウスの才気走ったプレイが凄まじい緊張感を生み出し、中期は天才の名を欲しいままにしたベーシスト、ジャコ・パストリアスがバンドに熱狂的なファンをもたらした。オマー・ハキム、ヴィクター・ベイリーらの健闘で更に一花咲かせた後期も充実していたが、これ以上の可能性が見えなくなったというのが真相だろう、'86年に惜しまれつつ解散した。ザヴィヌルはTHE ZAWINUL SYNDICATEを結成。またウェイン・ショーターはリーダー・グループを率い、「Atlantis」('85)、「Phantom Navigator」('86)、「Joy Ryder」('88)を発表して、WEATHER REPORTでは抑制していた才能を一挙に解放してみせた。

RETURN TO FOREVERはチック・コリア(key)とスタンリー・クラーク(b)の双頭バンドだ。アイアート・モレイラ(perc)らをフィーチャーしたラテン・フレイヴァーのほどよい緊迫感とほどよい安らぎで大人気を博した前期。ビル・コナーズ、アル・ディ・メオラの超絶的な速弾きエレクトリック・ギターをフィーチャーした中期。ビッグ・バンドと化した後期。と3期に分かれ、'78年には解散してしまったが、ロック・サイドからは圧倒的に中期が興味の対象となる。チック・コリアは非常に才能のあるピアニストであり、集大成的な「My Spanish Heart」('77)や「The Mad Hatter」('77)、室内楽との接点を持つ「Lyric Suite For Sextet」('83)等のアルバムも是非押さえておきたい。また、'80年代後半から再びエレクトリック・ギターを全面にフィーチャーしたTHE CHICK COREA ELEKTRIC BANDを率い、大いに話題を呼んだ。アル・ディ・メオラのソロ活動も無視できないが、ライヴに比べてアルバムの出来はどれも今一つなので、ヤン・ハマー(key)らとのライヴ盤「Force De Travel」('82)を代表作としたい。ビル・コナーズはECM盤を2枚発表した後、長いブランクを経、'86〜87年にアラン・ホールズワースの影響を受けたトリオ編成のアルバムを3枚発表している。

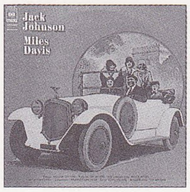
「エレクトリック・マイルス」の影響は本当はこれどころではないのだが、もうページがない。'80年代のマイルスは時代の最先端ではなかったが、ポップ・ミュージックとジャズの境界を跨いで優れた成果を上げた。そして'91年9月にマイルスは65歳でこの世を去った。サックスのビル・エヴェンス('58年にマイルスと接触を持った同名のピアニストの方が世間では有名)や、ギターのマイク・スターン、ジョン・スコフィールド、ベースのマーカス・ミラー、ダリル・ジョーンズ、キーボードのアダム・ホルツマンらの活動には注目すべきものが多い。



MILES DAVIS
Bitches Brew

LP/CBS GP-26 '69年
CD/Columbia 40577
/ソニー CSCS-5151/2

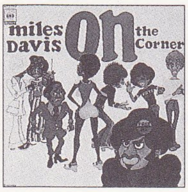
ジャズ史上に燦然と輝く金字塔的なアルバム。一般にここを起点に後のフュージョン・シーンが形成されたともっともらしく評されているが、実はプログレッシヴ・ジャズ・ロックにとってもここが聖地となる（いや、勿論「In A Silent Way」('69)を採り上げてもいいのだが)。ジャック・ディジョネット、レニー・ホワイト、ドン・アライアスの3ドラムスや、チック・コリア、ジョー・ザヴィヌル、ラリー・ヤングらのキーボード勢が象徴するように、リズムが交錯、輻輳し、異様なエレクトリック・インプロヴィゼーションが繰り広げられる。大勢の参加メンバーの個性の反映より先に、マイルスのコントロールするサウンド・コンセプトが突出しており、大きな時代の転換点だったことがうかがえる。（坂本）



MILES DAVIS
Jack Johnson

LP/CBS S-30455 '70年
CD/ソニー CSCS-5153

マイルスの実験はマイケル・ヘンダーソンというファンク系ベーシストを迎えたことでひとつの回答へと到達した。本作は実在したジャック・ジョンソンというボクサーのドキュメンタリー映画のサウンド・トラックとして制作されたアルバムであるためか、はたまたヘンダーソンのオーディションを兼ねていたためか、いつもよりも小編成で、マイルス・デイヴィス(tp)、ビリー・コブハム(ds)、スティーヴ・グロスマン(ss)、ハービー・ハンコック(key)、ジョン・マクラフリン(g)、マイケル・ヘンダーソン(b)というかなり変わり種の6人編成となっている（一部別メンバーのセッションを含む)。マクラフリンとヘンダーソンの行きまくった演奏が圧巻。最もロック色の強い作品として特筆に値する。（坂本）



MILES DAVIS
On The Corner

LP/CBS KC-31906 '72年
CD/Columbia/Epih 53579
/ソニー SRCS-5721

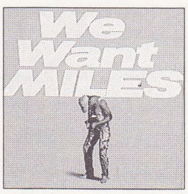
'71年半ば、J・マクラフリン、ジャック・ディジョネットの脱退に伴いマイルス・グループは一旦解体する。10月にツアー復帰してからの試行錯誤の結果、この2年ぶりのスタジオ盤が制作された。大勢のミュージシャンが参加しているが、ジャケットには一切クレジットされていない。曲によってもメンバーが違うようだが、ビリー・ハート、ドン・アライアス、ジャック・ディジョネットが3ドラムスでビートを交錯させて行く表題の組曲など、全編主役はリズム。あまりの複雑さに聴いていると思考停止してしまうが、それでいて〝Black Satin〟や〝Helen Butte〟のポップさはどうだろう。コリン・ウォールコット(sitar)やバーダル・ロイ(tabla)等の参加も興味深い限りだが、とにかく炸裂する難解さが凄まじい。（坂本）



MILES DAVIS
Agharta

LP/CBS PG-33967 '75年
CD/Sony Music C2K 46799
/ソニー CSCS-5154〜5

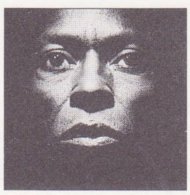
'70年代マイルスの頂点を伝えるライヴ。'75年2月1日、大阪フェスティヴァル・ホールでの昼の部が本作、夜の部が「Pangaea」('75)としてそれぞれ2枚組アルバムでリリースされている。バンドの絶好調ぶりが判るというものだ。ピート・コージー(g)、レジー・ルーカス(g)、マイケル・ヘンダーソン(b)、アル・フォスター(ds)、エムトゥーメ(perc)、そしてソニー・フォーチュン(sax、fl)というメンバーで、コージー、ルーカスのツイン・ギターとヘンダーソン、フォスターのリズム・セクションが既に完璧なまとまりを見せ、一点の曇りもない、明快なリズムが弾ける。その後、不本意ながらマイルスが長い休眠期間に入ったことを考えれば、この自由さが'70年代マイルスの結論だったと言える。（坂本）



MILES DAVIS
We Want Miles

LP/ '82年
CD/Sony Music 469402
/ソニー CSCS-5131〜2

「The Man With the Horn」('81)で現役復帰したマイルスのパワフルなステージを記録した2枚組ライヴ・アルバム。幾つかのステージを編集しているが、どれも満を持していたかのようにエキサイティングなステージが繰り広げられている。このうち'81年10月4日の新宿におけるステージは後に「Miles！Miles！Miles！」('92)としてフル・ステージがアルバム化されている。マーカス・ミラー(b)、ビル・エヴァンス(ss)、マイク・スターン(g)、アル・フォスター(ds)、ミノ・シネル(perc)という錚々たるメンバーが思い切り全力疾走し、凄まじい迫力だ。スターンが弾きまくると殆どロックだし、フォスターのドライヴ感はマイルスにとって重要な拠り所だ。そして何よりマイルスが元気。ジャズ・ロック・ファン必聴。（坂本）



MILES DAVIS
Tutu

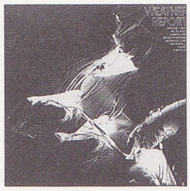
LP/Warner Bros. 9 25490-1 '86年
CD/Warner Bros. 9 25490-2
/ワーナー・ミュージック WPCP-3568

'80年代マイルスはポップなイメージがあるかもしれないが、「The Man With The Horn」('81)、「Star People」('83)、「Decoy」('84)、「You're Under Arrest」('85)とスタジオ・アルバムはいずれもポップながらかなりシリアスな面を持っていて、聴き逃せない。ツツ神父の名に因んだ本作もポップという点では最も当てはまるアルバムだが、同様だ。ここではサウンド・オーガナイザーとして弱冠27歳のマーカス・ミラーを指名し、陰影に富んだ音楽を生み出している。ミラーが単なる達者なベーシストではないことを見抜いたマイルスの勝利だろう。打ち込みとベースのみならず、サックスやバス・クラリネットまで手掛けるミラーの才能はマイルスの死後も瞠目すべき成果を上げ続けている。（坂本）



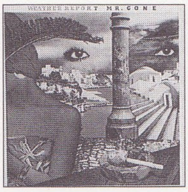
MILES DAVIS
Aura
CD/Columbia 45332
/ソニー SRCS-5728

「Amandla」('89)に続いて登場したこのアルバムは、マイルスにとって偉大なる変化球だった。'85年にデンマークでレコーディングされたこの作品は、本来パレ・ミッケルボルグ(tp) のアルバムと言っていいもので、全曲彼の作・編曲だ。内容もまさに北欧のビッグ・バンド・ジャズ。普通のマイルス・ファンは面食らっただろうが、ユーロ・ジャズ・ロック・ファンは必聴のアルバムだ。後にマイケル・マントラーの「Cerco Un Paese Innocente」('95) 年に参加したようなミュージシャンが大挙して参加しているほか、ジョン・マクラフリン(g) やヴィンス・ウィルバーン(ds) らも加わり、まるでもしマイルスがECMからアルバムを出したら、というような内容になっている。少なくとも僕らが忘れてはならない1枚。　(坂本)



WEATHER REPORT
Weather Report
LP/CBS 30661 '71年
CD/Columbia 468212
/ソニー SRCS 7001

ウェザー・リポートの記念すべきデビュー・アルバム。ウェザー・リポートを後追いしているリスナーにはその後の彼らの印象が強い所為もあってピンと来ないかも知れないが、このアルバムがジャズ・シーンに与えた衝撃は計り知れない。あまりにも未来指向のアンサンブルが他のジャズと大きくかけ離れており、聴く者の理解を超えていたのだ。本作で聴かれる壮絶なインタープレイはジョー・ザヴィヌル(key)、ウェイン・ショーター(sax)、ミロスラフ・ヴィトウス(b) の生み出した全く新しい語法の真剣勝負だ。いきなり極限的なプレイを応酬するかと思えば、妙にのどかな表情を見せたりする。尚、'82年にも同じタイトルのアルバムを発表しているがそれは別物なので、ジャケットで区別すること。　(坂本)



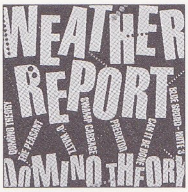
WEATHER REPORT
Mr. Gone
LP/CBS JC 35358 '78年
CD/CBS CK 46869
/ソニー SRCS 7036

ザヴィヌル、ショーターとの戦いに敗れたヴィトウスがバンドを去り、アルフォンソ・ジョンソン(b)を経て、前々作「Black Market」('76)よりジャコ・パストリアス(b)が加入。ここにウェザー・リポートの黄金期が始まる。未来指向、宇宙指向が難解さに繋がっていた彼らにとって、ジャコの持っていた天性のカリスマ性は一挙にポピュラリティーの獲得へと作用し、彼らは音楽的な妥協をすることなく、一大人気バンドへと変貌した。〝Birdland〞で有名な「Heavy Weather」('77) はベスト・セラーとなり、続く本作でも彼らの勢いは人気を背景に更に加速している。名曲揃いということなら「Heavy Weather」をも越えているだろう。ザヴィヌルが本当にやりたかったことを完璧に形にした傑作。　(坂本)



WEATHER REPORT
8:30
LP/CBS JC 36030 '79年
CD/Tristar 80925
/ソニー SRCS-7178〜9

ウェザー・リポートの最高傑作といったらこれだろう。アナログではABC面がライヴ、D面がスタジオ録音という変則的な構成だが、バンドの頂点を記録したアルバムであり、もう溜息が出るほど素晴らしい内容だ。ジョー・ザヴィヌル(key)、ウェイン・ショーター(sax)、ジャコ・パストリアス(b, d)、ピーター・アースキン(ds) という最も充実していた時期の編成であり、すべての演奏がパーフェクト。サウンド・エフェクトふんだんの〝Scarlet Woman〞など、原曲を遥かにしのぐドラマティックかうスリリングな演奏が興奮ものだ(1枚で出ているCDにはこの〝Scarlet Woman〞が抜けているようなので、必ず2枚組を購入のこと)。〝8:30〞はステージでもジャコがドラムスを叩いていたことを思い出す。　(坂本)



WEATHER REPORT
Domino Theory
LP/CBS FC 39147 '84年
CD/Tristar 80926
/ソニー SRCS-7181

ジャコ・パストリアスとピーター・アースキンがバンドを去り、存亡の危機に立たされたウェザー・リポートはオマー・ハキム(ds) とヴィクター・ベイリー(b) という新人を加入させ、それを乗り切った。特に新人離れしたハキムのドラミングは歴代のメンバーの中でもナンバー1の切れの良さを持っており、どんなに複雑な曲においてもバンド・サウンドの躍動感が衰えない逞しさは彼らの新しい魅力となった。「Procession」('83)に続く彼らの第2弾はそうした彼らの最後の傑作となった(以後の「Sportin' Life」('85)、「This Is This」('86)は除々にポテンシャルが落ちて行く)。おそらくほかのバンドでは曲になり得ないようなモチーフが見事な曲にアレンジされ立ち上がって行くのが驚異のアルバム。　(坂本)



WAYNE SHORTER
Joy Ryder
CD/Tristar 80917 '88年
/ソニー SRCS-7041

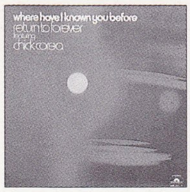
1986年にウェザー・リポートが解散した時には予想もしていなかったのだが、ソロ活動を再開してからのウェイン・ショーターは本当に脂がノッていると言うか、かつてない程才能を迸らせ、ジャズ・シーンの最重要ミュージシャンの一人にまで伸し上がってしまった。ソロ活動再開3作目のこのアルバムは、その後ソロ作品を発表しなくなってしまった彼の今のところ最新作に当たり、演奏もさることながら楽曲の素晴らしさで一際輝く名盤だろう。これ見よがしの難しいプレイなど何もないのにこの手に汗握る興奮と感動。アドリブ・パートすら実は僅かしかなく、それでもスリリングなジャズになるというのがまるで魔法を見るようだ。今となってはウェザー・リポートの解散に感謝したいね。いや、ホント。　(坂本)



RETURN TO FOREVER featuring CHICK COREA Hymn Of The Seventh Galaxy

LP/Polydor PD 5536 '73年
CD/Polydor 825336
/ポリドール POCJ 1978

リーダーのチック・コリアに第一期から居残りのスタン・クラーク、更に新加入のレニー・ホワイト、ビル・コナーズによる〝ジャズ・ロック・グループ〟リターン・トゥー・フォーエヴァーとしての幕開けの作品。ほぼ純エレクトリックな編成による、極端なキメを多用したテクニカルな演奏、派手なインタープレイ、明解でドラマチックな曲調はマハヴィシュヌ・オーケストラ共々後のジャズ・ロック／クロス・オーヴァー／プログレッシヴ・ロックの各ジャンルに決定的な影響を与えた。以降、ギターをアル・ディ・メオラに変えて「ロマンティック・ウォリアー」に至る4作は全て同じ傾向にあるが、情熱度と言う点では本作が一番か。尚、各メンバーのソロ作品にも同傾向の秀作が数多くある。 (中西)



RETURN TO FOREVER featuring CHICK COREA Where Have I Known You Before

LP/Polydor PD 6509 '74年
CD/Polygram 82506-2
/ポリドール POCJ 1979

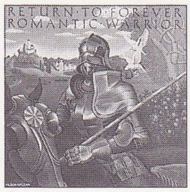
'70年代中期のR.T.F.は完全にプログレッシヴ・ジャズ・ロックだ。もし未だにカスい廃盤に大金突っ込みながらこの辺を聴いたことがない人がいたら是非一度、中古で500円でごろごろしているし。さて本作だが、荒々しさが目立ちながらそれが魅力にもなっている前作から、段々と練り込まれ洗練されていって完成度を増し、「ロマンの騎士」で頂点を迎える、その中間。個人的には荒々しさが前面に出ているほうが好みなので前作、本作辺りが一番好きなのだが。メイン・コンポーザーが思いきりジャズ寄りの人なので時折甘ったるくなったりするが、A. Di Meola、S. Clarke、L. Whiteという強力な布陣で押し進める様は圧巻。 (伊藤)



RETURN TO FOREVER featurisg CHICK COREA No Mystery

LP/Polydor PD 16512 '75年
CD/Polygram 827 149-2

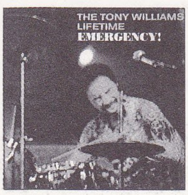
エレクトリック編成のR. T. F.としての通算3作目。アル・ディ・メオラ加入後も2作目とあってコンビネーション・プレイにますます磨きがかかったサウンドで、チック・コリアの名よりもバンド名が先に来ているのがそれを象徴しているようだ。逆にこの頃にはコリア以外の3人もソロ・アーティストとしての活動を始めており、グループと共通しながらも多少のズレを持った楽曲を提供している所にそこいら辺りがうかがえる。とは言え大半の楽曲ではグループ特有の極端なキメで熱くせめぎ合う演奏が聴け、情熱と安定感両面のバランスの取れたB面の流れは彼等の作品の中でも1つのピークに位置するもの。 (中西)



RETURN TO FOREVER Romantic Warrior

LP/CBS 34076 '76年
CD/Columbia 46169
/ソニー SRCS 7004

チック・コリアの名前を落として完全にバンド名のみになった第2期通算4作目。同時にこの編成では最終作となった。以前にも増して極限を極めたようなアンサンブル技が連発される構成にはもう呆れるしかない程に凄い。もろにコピー的な物も含めて数多くのジャズ・ロック・グループに影響を与えたサウンドだが、それをここまでやれたのは本家である彼等くらいのものだろう。過去2作で見られていた指向性のズレもここでは丁度いい位に調和が取れており、まとまりと言う点ではR.T.F.最高の作品と言えるだろう。このグループでやれる事の全てをやり尽したと感じたのか、コリアは次作よりまた違った方向へと踏み出す事になる。 (中西)



THE TONY WILLIAMS LIFETIME Emergency !

LP/Polydor 25/3001 '69年
CD/Polydor 849 068-2
/ポリドール POCJ-1983

'60年代末、ジャズとロックが接近を図った始めの頃、その熱気とパワーをそのままLP2枚に投げ込んだような作品。マイルス・ディヴィス・グループの若き天才として、ドラミングの1スタイルを築いたウイリアムズがJ. マクラフリン、I. ヤングと共に結成したトリオのデビュー作にはそうとしか呼びようのない何かがある。叩きまくるドラムス、歪みきったギター、ヒステリックなオルガン、その三者が好き放題やりまくるサウンドはとにかくワイルド＆パワフル。実の所、リズムやヴォイシングにも担当な神経とイスピレーションが込められているのだが、それ以上に凶悪さが目立つ。かと思えば酔ったような語りをした漂うような雰囲気も。なんにせよ当時の空気を目一杯に含んだ作品。熱い。 (中西)



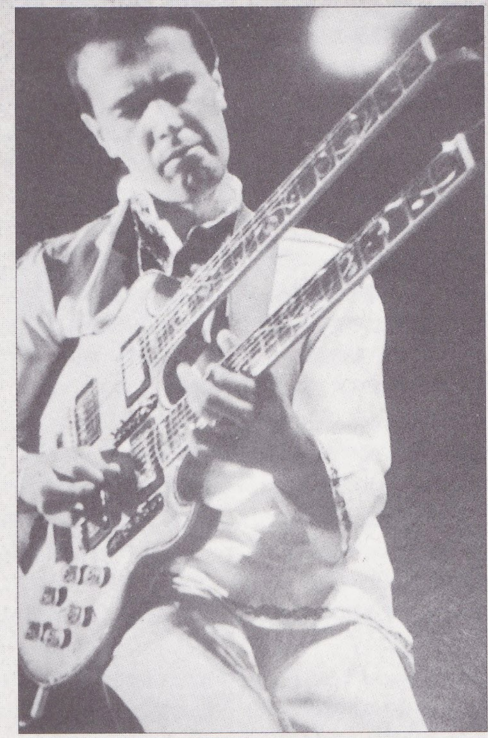
THE NEW TONY WILLIAMS LIFETIME Believe It

LP/CBS 69201 '75年

T. Williams率いるLIFE TIME、第1期はJ. マクラフリンが参加していた。'70年代も中盤に入って再編成され、ギターにこの時期が一番脂が乗っていたA. ホールズワースが参加。他にはT. Newton(b)、A. Pasque(key)。因にT. Newtonはモータウン系のソウル畑でのセッション・ミュージシャンとして活動していたがCMPにまで顔を出す幅広さ。このアルバムに収められている〝Snake Oil〟が「Let's Be Generous」にも収録されている。さて本アルバムであるが、Allanのギターを前面に出した（彼自身の発言でも、ベスト・プレイの一つだとしている）軽快ながらも芯の強さを感じさせるジャズ・ロック。本作の後、「Million Doller Legs」('76年)を発表している。 (伊藤)

Birds of Fire

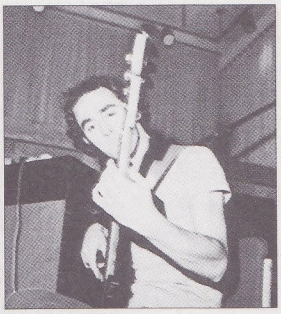
MAHAVISHNU ORCHESTRA



John McLaughlin(g)



Billy Cobham(ds)



Rick Laird(b)



Jan Hammer(p)



Jerry Goodman(vin)

文●中西暢久

'60年代の終わり、ロックがその語法を広げるべく様々な異ジャンルの要素を取り入れ、交流をしつつあった時期、当然ながら交流の対象となった異ジャンルの方でもロックを意識するようになっていた。例えば御大マイルス・デイヴィスの「俺がその気になれば世界一のロック・グループくらい、いつでも作ってやる」と言った発言は余りにも有名だ。そのような状況下、例えばクラシック等と比べ、その基本構造のシンプルさ、更にはアフロ・アメリカンの感覚を母体としつつより世界音楽的な発展を遂げて来たという共通点を持つロックとジャズがある種重なり合った活動を見せることになったのは、さほど不思議な事ではない。単純な話、ロック(ンロール)が自然にある状況に育ち、自らもそう言った音楽を演奏した事がある世代のジャズ・ミュージシャンが出て来つつあった事、更に演奏が主体であるジャズというジャンルにあって新種の楽器、演奏法(録音スタジオそのものを楽器として使うといった手法も含めて)に興味を示す者も少なからずいたと言うことだ。そういった気風の中、ロック・ビート＋長時間のインプロヴィゼーションと言った比較的シンプルなやり方を取ったクリーム、コラシアム(英)、ラリー・コリエル等から、更に一歩進んだ形のスタイルを再創造したグループが幾つかある。その代表が英プログレッシヴ・ロックの流れで見ればキング・クリムゾンであり、米ジャズ・ロックの流れで見れば(いずれも前記マイルス・デイヴィスのグループにいた)チック・コリアのリターン・トゥー・フォーエヴァー、ウェイン・ショーター/ジョー・ザヴィヌルのウェザー・リポート、そしてジョン・マクラフリンのマハヴィシュヌ・オーケストラということになる。

マハヴィシュヌ・オーケストラのリーダー、ジョン・マクラフリンは'42年イギリスのヨークシャー生まれ。'60年代初期に(全てのブリティッシュ・ロックの源となったと言える)グレアム・ボンドのグループやブライアン・オーガーでの活動を経、様々な形で後に英ジャズ/ロックの最前線に立つJ・サーマン、G・ベック、J・ブルース、J・ハイズマン等と交流を重ねる。そのテープを聴いたマイルス・グループのトニー・ウィリアムスに呼ばれ渡米、ライフ・タイムでの二枚のアルバム、それからいわゆるエレクトリック期のマイルス・デイヴィス・グループでも活動を経、英/米両側の当時の先鋭を経験した後、自らのグループ、マハヴィシュヌ・オーケストラを結成する。元フロックのジェリー・グッドマン、ドリームスのビリー・コブハム、更にはヤン・ハマー、リック・レアードの五人全てがロック/ジャズを自由に往き来する新世代によるグループならではの新鮮な演奏は'72～'73年の間、ロック/ジャズ両シーンにセンセーションを起こすことになる。事実、明確でドラマティックな構造を持つテーマ、様々なアクセントを多用した複合的な変拍子によるリズムといった楽曲的な部分、それから驚異的なパワーとスピードにより、ヴァイタルなビートを叩き出すコブハムのドラミングに乗せたマクラフリン、グッドマン、ハマー三者によるユニゾンやインタープレイ、各々の個人技に至るまで、多くのジャズ・ロック、プログレッシヴ・ロックに決定的な影響を与えたのがこの第一期マハヴィシュヌ・オーケストラと言えよう。その影響下にあるグループはキング・クリムゾン、ジェフ・ベック、サンタナ、ゲイリー・ムーア、アルティ・エ・メスティエリ、ザオ、その他メジャー/マイナーを問わず数知れない。これ程までに重要な活動を見せたマハヴィシュヌ・オーケストラだが、サウンド面のテンションの高さは人間関係にも及ぶのか、三枚のアルバムをもって解散してしまう。三枚目にあたるライヴ・アルバム、あるいは来日公演等その末期に至ってもサウンド面の充実振りには変わりがないが、メンバー間には相当のフラストレーションがたまっていたようだ。ヤン・ハマーは後にこう語った。「最後の頃はビッグ・サウンドのギターと歪んだバックグラウンドと言う形になっていたよ、不満だったね。」

結局、'74年に入りアルバム「Apocalypse」をもってマクラフリンはグループを再始動させる。ここではJ・L・ポンティーを含むストリングス・カルテットを加えた大所帯グループに、マイケル・ギブスの編曲によるオーケストラを加えたロック・シンフォニー的な作風に挑戦。バンドのみによる次作と並び、第一期の個々のぶつかり合いにより危うくバランスがとれている作風から、調和を重視した作風へ移行している。また、それにより、マクラフリンがトータルな全権を取ったプロジェクトと言う印象が強い。結局、これは更に人数を減らした最終作、「Inner Worlds」においては半ばマクラフリンのソロといった扱いがなされるようになり、グループは解散する。いささかあっけない終わり方であったが、以後もマクラフリンはシャクティや新生マハヴィシュヌ、T・グルトゥ等とのトリオにおいて、その時代その時代、常に彼でなければ出来ない事をやり続ける。それらの活動が、マハヴィシュヌ・オーケストラ程の影響力を見せたことはないにしろ、マクラフリンは依然、ジャズ・ロックの創始者であり、最重要なミュージシャンであり続けている。

その他、マクラフリン以外のメンバーを見ても、ジェフ・ベック「ワイアード」の立役者、ヤン・ハマー/ナラダ・マイケル・ウォルデン(ウォルデンはノヴァでも活躍)、またJ・L・ポンティーの全盛時の諸作や、'80年代、プライヴェート・ミュージックを通じて新生面を見せたJ・グッドマン等重要人物の元になったマハヴィシュヌ・オーケストラの名は'70年代音楽シーンをこちらから見た場合、外すことの出来ない物と言えよう。



MAHAVISHNU ORCHESTRA WITH JOHN McLAUGHLIN
The Inner Mounting Flame
LP/Columbia 31067 '71年
CD/Columbia 31067
/ソニー SRCS 7009

マイルス・デイヴィスの「イン・ア・サイレント・ウェイ」「ビッチェズ・ブリュー」「ジャック・ジョンソン」等に参加し、ジャズ・シーンにその名を轟かしたジョン・マクラフリン。そんな彼がジェリー・グッドマン（vln）、ヤン・ハマー（p）、リック・レアード（b）、ビリー・コブハム（ds）の４人と結成した、ジャズ史、ロック史に残るグループのデビュー作。タイトでスピーディなジャズ・ロックのリズムをバックに、ギター、ピアノ、ヴァイオリンがメロディアスかつこれまたスピーディなソロやアンサンブルを次々に披露する。そのテクニカルかつ緊張感に富んだ演奏は一つのスタイルとなって多くの後進達に影響を与えた。アコースティック・ギターを中心にしたクラシカルでリリカルな演奏も素晴らしい。（賀川）



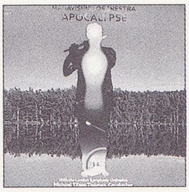
MAHAVISHNU ORCHESTRA
Birds Of Fire
LP/CBS 31996 '72年
CD/Columbia 31996
/ソニー SRCS 7010

'60年代末頃から、ジャズ・シーンにおいて、ロックを意識した音作りが行なわれるようになり、それが「クロスオーヴァー」「フュージョン」に繋がっていた。ロック・サイドから見ると、そうした中の最大の成功例がマハヴィシュヌ・オーケストラであり、最大の成果が本作品である。マクラフリンにとっても、本作品は自己の最高傑作の１つであろう。驚異的と言うに相応しいコブハムの強烈かつ正確なドラムとレアードのベースをバックに、マクラフリン（g）、ハマー（key）、グットマン（vln）がインタープレイ、ユニゾン等による緊張感溢れる演奏を繰り広げている。曲はメロディアスなものが多く、スピリチュアルな雰囲気に満ちている。ジャズ・ロックの究極の姿を見ることが出来る名作である。（賀川）



MAHAVISHNU ORCHESTRA
Live Between Nothingness & Eternity
LP/CBS 32766 '73年
CD/Columbia 32766
/ソニー SRCS 7011

泣く子も黙る、大爆発第１期マハヴィシュヌのしかもライヴ演奏を収録した１枚。リーダーJ. マクラフリンのギターも若々しく、如何にもアンプ直、ハイパワーで歪、最高に男らしい。後に段々と整理され、行儀良くなり、去勢されたB.G.M.と成り下がるインスト音楽とは違い、まさに熱く燃えたぎる、ロックとジャズの融合。しかもライヴ録音とあって、各メンバーのソロの勢いが全然違う。強力リズム・セクションも二人揃って上層楽器に二階級特進。熱い男の音楽を好む人にとっての必聴盤。（伊藤）



MAHAVISHNU ORCHESTRA
Apocalypse
LP/CBS 32957 '74年
CD/Columbia 46111
/ソニー SRCS 7012

「Birds Of Fire（火の鳥）」で頂点を極めたマハヴィシュヌ・オーケストラが、新たな領域に挑戦した問題作。マクラフリン以外のメンバーは一新されており、ジャン・リュック・ポンティ（vln）、マイケル・ウォルデン（ds）、ラルフ・アームストロング（b）らがニュー・メンバーとして参加している。ロンドン・シンフォニー・オーケストラとの共演という形を取っており、サウンドも変化に富んだものになっているが、両者の融合は今一つ。女性ヴォーカルにも多少の違和感がある。それでも、バンド自体の演奏は素晴らしく、強力なリズム・セクションをバックに、ギター、あるいはヴァイオリンが繊細かつリリカルな演奏をスピーディに展開する部分は最大の聴き所である。（賀川）



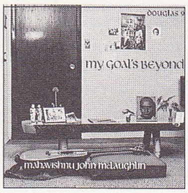
MAHAVISHNU ORCHESTRA
Visions Of The Emerald Beyond
LP/CBS 33411 '75年
CD/Columbia 46867
/ソニー SRCS 7013

J.L. Ponty、M. Walden達による第２期マハヴィシュヌ、編成が変わったことにより音楽性もやや変化を見せたがその２枚目。とにかく強力に、力で押し進める第１期に比べると壮大な広がりをもたせて伸び上がるような部分が強い。これはJ.L. Pontyのキャラクターによる部分が多いと思うのだが。また、ストリングスの大胆な導入、管楽器のサポートなどもありとてもスケールが大きくなっている。この希有のバンドは更にもう一枚スタジオ録音をして消滅、その後の各メンバーの活動は多方面に広がっている。'84年に再編成、２枚の作品を残している。（伊藤）



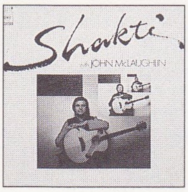
MAHAVISHNU ORCHESTRA/ JOHN McLAUGHLIN
Inner Worlds
LP/CBS 33908 '75年
CD/Columbia 52923

ミニ・オーケストラとでも言うべき前作から大幅にメンバーを減らし、N. M. ウォルデン（ds）、R. アームストロング（b）、それから新加入のスチュ・ゴールドバーグ（key）の４人編成により作られた最新作。前作にも増して、ヴォーカル・パートを重視した曲が収められている他、コンパクトな編成を利したよりストレートなサウンドは当時全盛を迎えつつあったクロス・オーヴァー・サウンドの一つとも言え、グループとしての独自性はうすれつつあるようだ。また、表ジャケにグループ名と並んでマクラグリンの名が大きく書かれているのと対照的に曲によってはウォルデン／アームストロングがリーダー・シップを取る場面が目立つ。依然、クォリティは高いが、最後としては集中力に欠ける作品となってしまった。（中西）



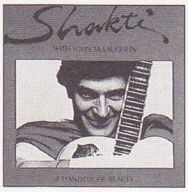
MAHAVISHNU JOHN McLAUGHLIN
My Goal's Beyond
LP/Douglas KZ 30766 '71年
CD/Ryko 10051
/ビデオ・アーツ VACK 1018

ビリー・コブハム、ジェリー・グッドマンを迎えての録音という事でマハヴィシュヌ・オーケストラとメンバー的に直結する3rdソロ。ただしサウンド的には多少違った傾向にある。A面では前記両名にデヴィッド・リーブマン、チャーリー・ヘイデン、アイアート・モレイラと言った当時の気鋭にシタール、タブラを加えてモーダルなインプロヴィゼーション主体の演奏。マハヴィシュヌにおけるアコースティック曲に比べ、よりフォームをもたない構成の中、順次リードが浮かんでは消える構成はより一般的な東洋指向が感じられる。B面のアコースティック・ギターの多重録音による小曲集と共にマクラフリンのたおやかな一面が現われた一枚。（中西）



SHAKTI WITH JOHN McLAUGHLIN
Shakti With John McLaughlin
LP/CBS 34152 '76年
CD/Columbia 46868
/ソニー SRCS 7014

MAHAVISHNUの活動を停止したあと、J.マクラフリンはインドへ渡り、現地のミュージシャン達と交流する。そこで結成されたのがこの編成、本作を初め3枚の作品を残している。J. McLaughlin (g)、L. Shankar (vln)、T. H. Vinayakaram (Ghatam)、Z. Hussain (tabla) という弦楽器＆打楽器のアンサンブル。インドのトラディショナルな旋律を主体に超高速フレーズが走り回り信じられないような複雑なユニゾン、無茶とも思えるようなキメを連発。というのは全部インドのトラッドのお家芸だったりする。電気楽器が皆無、全て弱音楽器ながらブットビ度はMAHAVISHNUより上かもしれない。一種の究極アンサンブル。因みに本作は全編ライヴ録音。TV放映された映像ではにこにこと笑いながら超絶技を披露していた。（伊藤）



SHAKTI WITH JOHN McLAUGHLIN
A Handful Of Beauty
LP/CBS 34372 '77年

インディアン・トラッドの究極アンサンブル集団、シャクティの2枚目。前作とスタイルは変わるところはないが、本作はスタジオ録音だけにブットビ度は同様ながらより丁寧な印象がある。彼等の代表曲と言っても良いだろう、1曲目〝La Dance Du Bonheur〟の、冒頭のタブラのユニゾンから怒濤のようになだれ込んでくるフレーズ、キメの嵐。この編成の良い部分が全て集められているような1曲。また、注目すべきはタブラ及び陶器の壺である打楽器なのだが、まるでピアノを弾いているかのように表情豊か、指先で細かいニュアンスをつけている。既に打楽器の域を脱しているようだ。この後ややスタイルに変化を見せた3作目を発表し解散。（伊藤）



CARLOS SANTANA, MAHAVISHNU JOHN McLAUGHLIN
Love Devotion Surrender
LP/Columbia KS 32034 '73年
CD/(Ger.) Columbia 468871-2

グル、スリ・チンモイの弟子となったサンタナが、兄弟子のマハヴィシュヌ（ホーリー・ネーム）・ジョン・マクラフリンと共演するという形でリリースした作品。当時、サンタナが尊敬していたジョン・コルトレーンの曲（〝至上の愛〟と〝ナイマ〟）も収められている。ラリー・ヤング（org）に加えて、アーマンド・ペラザ（conga）、ダグ・ローチ（b）、ビリー・コブハム（ds）ら、馴染みのメンバーのサポートを受け、2人がインタープレイを展開する、どちらかと言うとマクラフリンの色が濃く、サンタナも彼の影響下にある演奏を見せる。とは言うものの、マクラフリンがサンタナ風の上昇感に富んだ演奏を披露する部分もあり、両者がうまく融合している。兄弟子と弟弟子の対話を思わす宗教的要素も持った力作である。（賀川）



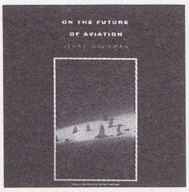
JOHN McLAUGHLIN AND MAHAVISHNU
Adventures In Radioland
CD/Polygram 51939-2 '88年
/クラウン BRJ-4058

復活したMAHAVISHNUの第2弾。'70年代の編成で見せたような荒削りのごりごりながら信じられないような絡み合いをする超絶ジャズ・ロックではなく、より洗練され冷静さを持つようになったがそれでも超一流の音楽が全面に溢れている。前作でややゆったりしたアプローチを見せたが、本作では軽快な明るいノリを見せている。デジタル音を多く使っているのもその要因かも知れない。いずれにしてもこの再編成、ニューヨークの天才ベーシストJ. Hellborgを起用し、世に知らしめただけでも価値あり。本作以降この編成では活動が無く、J. McLAUGHLIN Trioとしての活動がメインになった。（伊藤）



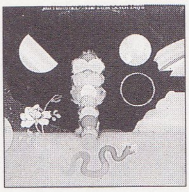
JOHN McLAUGHLIN TRIO
Live At The Royal Festival Hall November 27, 1989
CD/Polygram 834436-2
/ポリドール POCJ-1009 '90年

M-Base派の全面的バック・アップを打ち出しているJMTレーベルにあっては些か異質な取り合わせだが、強烈な個性とインパクトの強さでは一歩も引けをとらないマクラフリンの最新プロジェクトがこのトリオだ。1988年の結成時はジェフ・バーリンがベーシストだったが、翌年カイ・エカートに交代した。ドラムスもいない3人で一体何が演奏出来るのか、聴くまでは半信半疑といったリスナーが多かった筈だが、どちらかと言えばかなり饒舌なプレイで知られるマクラフリンの非常に抑制の効いた、逆に言えばそれだけ選び抜かれた最小限の音と、エカート、グルトゥの緊迫したやりとりが劇的な音空間を演出しており、見事というほかない。特にグルトゥのパーカッション・プレイは素晴らしいの一語。（坂本）



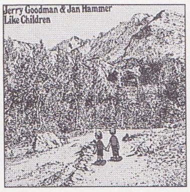
JERRY GOODMAN
On The Future Of Aviation
LP/Private Music 32XB-57　'85年

アメリカにおける最初期のプログレッシヴ・ロック・グループ、フロックのバイオリニストとして知られるジェリー・グッドマン。マハヴィシュヌ・オーケストラのメンバーとしてジョン・マクラフリン、ヤン・ハマーらと白熱のインタープレイを展開したのも早10年以上前のこととなった。その後の彼の活動は地味なものであったが、'85年、話題のプライヴェート・ミュージックから突如本作を発表した。グッドマンらの演奏は穏やかで安定しており、広がりのあるサウンドが心地良い。デジタル・レコーディングの特色を生かした音作りになっており、シンセサイザー、パーカッションの残響が生々しい。（賀川）



JAN HAMMER
The First Seven Days
LP/Nemperor NE 432　'75年

プラハ生まれのキーボード奏者、ヤン・ハマー一世一代の大傑作。チェコではミロスラフ・ヴィトウスらと活動していたが、渡米しサラ・ヴォーンのバックで活動した後、MAHAVISHNU ORCHESTRAの結成に加わり、一躍ジャズ・ロック・シーンの最前線に飛び出した。ベンドを多用した独特のシンセサイザー・プレイが好き嫌いの対象になるほど聴く者に強烈なインパクトを与えた。独立後、ジェリー・グッドマンとの「Like Children」('74)を経て発表した本作はごく一部デヴィッド・アール・ジョンソン(perc)とスティーヴ・キンドラー(vln)が加わっているほかはすべてヤン・ハマーの多重録音であり、彼の最もプログレッシヴな音楽性が全編に現われている。近年のハマーは力が抜け過ぎていて物足りない。（坂本）



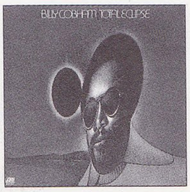
JERRY GOODMAN JAN, HAMMER
Like Children
LP/Nemperor NE 430　'74年

マハヴィシュヌ・オーケストラを去ったジェリー・グッドマンとヤン・ハマーの最初のデュオ・アルバム。２人以外に参加ミュージシャンはおらず、グッドマンがヴァイオリンとギター、ハマーがキーボートとドラムスを担当し、多重録音で作品を作っている。マハヴィシュヌ・オーケストラのような、ドライヴ感に富んだ、スピーディな演奏も一部見られるが、全体としては、メロディアスで穏やかなプレイが中心になっている。ファンキーなシンセ・リズムを使った部分は今一つであるが、グッドマンのリリカルな演奏は正に彼の本領が発揮されたものと言える。一方、ハマーは作曲面においても、演奏面においても、その非凡な才能を見せつけるが、多才ゆえに、方向性がやや明確でない感もする。（賀川）



JEAN-LUC PONTY
Enigmatic Ocean
LP/Atlantic SD 19110　'77年
CD/Atlantic 19110-2

代表作。序曲＋３つの小品＋２つの組曲が統一感を持った流れの中に連なっており、ドラマティックな展開、バランス良いソロの配し方と各々の役割分担等、トータル・サウンドとしてのポンティの配慮が窺い知れ、結果、幅広い層へアピール出来る一枚となった。ヴァイオリストとしての彼の技量は勿論の事、当時既にミュージシャンズ・ミュージシャンとしてカルト的人気を持っていまA・Holdsworth（g）を始め、D・Stuermer（g）、A・Zavod(key)という我々に馴染みの深い人達の活躍も光るが、何と言ってもR・Armstrong（b）とS・Smith（ds）という切れのあるリズム・セクションが出色の出来。クロスオーヴァー/フュージョンの持つポップさ、明快さが最も良い形で発揮された一枚として挙げておきたい。（山田）



BILLY COBHAM
Total Eclipse
LP/Atlantic SD 18121　'74年

'70年代前半に全盛を極めた、手数／パワー勝負のドラマーの中でも最も派手派手しいプレイで注目を集めた彼の３rdソロ・アルバム。初期マハヴィシュヌ・オーケストラの土台を支えたエネルギッシュなドラミングを軸に派手なキメ、大迎なテーマで曲を転換させて行くやり口は前後数作においても共通し、出来栄えにも大差はない。各曲のタイトルからすると月世界冒険をテーマにトータルな作品となっているが、その事自体にはさ程の意味はなく、マハヴィシュヌを手本としたドラマチックな曲調と派手な演奏をひたすら楽しむのが筋だろう。テクニカル・ジャズ・ロックと言うスタイルがまとまりつつある時期の典型例。ブレッカー兄弟、J.アバークロンビー、M.レヴィエヴ他参加。（中西）



NARADA MICHAEL WALDEN
Garden Of Love Light
LP/Atlantic SD 18199　'76年

現在ではブラック・ミュージック界の大物プロデューサーとして知られる彼だが、この頃はマハヴィシュヌ・オーケストラを経てウェザー・リポート等で活躍するドラマーとして一流の存在だった。他にもJ.ベックの「ワイアード」やNOVAの「Vimana」等にも加わり、コラード・ルスティチとはブラザーと呼び合う仲でもある。本作では、一部オーケストラも迎え、マハヴィシュヌと（本作でもキーボードを担当している）デヴィッド・サンシャスのソロに通じるスケール感あるシンフォニック・ジャズ・ロックをメインとした作風。勿論、今に通じるソウル色のあるナンバーもあるが、これは、この時代のクロスオーヴァーと言われたサウンドに共通する傾向でもある。J.ベック、C.サンタナもゲスト参加。（中西）

KANSAS



文●平山英治

カンサスと言うと、スティクス、ジャーニー、ボストンと同列に並べられた上で紹介されることが多い。日本でプログレ・ハードと言われているものだ。ハード・ロックを基調にしたテクニカルな音楽をそう呼んでいるのだ。

カンサスはヘヴィな音で分厚く構築された音世界を築いている。なおかつ前面にヴァイオリンがフィーチャーされていることが大きい。美しくかつハードなフレーズを弾き出すヴァイオリンの影響は強かった。もう一つの特徴は歌を大切に扱ったバンドであったということだ。アメリカ的でポップなメロディに乗せられたスティーヴのパワフルな歌がカンサスの曲を印象的にしていることは言うまでもない。歌詞の世界も、時や場所を越えた物語の設定で、コンセプチュアルなものが多いというのも特徴になっている。

カンサスはクラスメイトだったフィル・エハート(ds)とケリー・リヴグレン(g)が自分たちのバンドに飽き足らず、ホワイト・クローバーというグループを作ったことに始まる。そこにデイヴ・ホープ(b)が加わり、バンドとしての骨格が整ってきた。デイヴが自分たちの音楽性を表現できるようなバンド名にしようということでようやくカンサスというバンド名になった。1970年の中頃からダンス・ホールなどで演奏するようになり、その後、ドアーズと共演したりしたが、バンド活動はうまくいかず、再び分裂する。ケリーは別の7人編成カンサスを作り、フィルとデイヴはホワイト・クローバァーを再結成する。

その後フィルは単身でイギリスに渡ったがうまくいかず、3ヶ月で帰国の途についた。

カンサスに戻ったフィルは、プロとしてホワイト・クローバーを再結成しようと決意し、ソングライティングとヴォーカルでグループを引っ張っていくスティーヴ・ウォルシュ(vo,key)を迎えた。そして、ヴァイオリニストのロビー・スタインハートが最初に集まった。ホワイト・クローバー再結成の話を聞いたデイヴとリチャード・ウィリアムズは活動中のバンドを蹴ってホワイト・クローバーで活動することになった。ホワイト・クローバーはスティーヴに加えてもう一人強力なソングライターが欲しいとケリーを引き抜いた。

6人編成で再出発を果たしたホワイト・クローバーはカンサス州や中西部のロデオやバーで演奏するようになる。その後彼らのデモ・テープを聴いたドン・カーシュナーに認められた。その時彼らはカンサスと再びバンド名を変更し、1974年にようやく1stアルバム「Kansas」がリリースされた。

ということで、デビューまで幾多の苦節を経たカンサスは当然、ずば抜けた演奏技術を持っていた。しかしこの時点では洗練度がそれほど高くはないためか、商業的にはそれほどの成功はなかった。その後、1975年には「Song For America」、「Masque」とリリースする。この2枚のアルバムは1stアルバムより売上を記録したものの、まだ大ヒットには遠かった。しかし、この2枚のアルバムで、カンサスは大作志向がますます強くなってきた感があり、洗練度も高くなってきた。というのもこの2作目からプロデューサーをジェフ・グリックスマンがつとめるようになったことも関係しているかもしれない。

そして、'76年には「Leftoverture」をリリースし、これが大ヒットとなり、200万枚もの売上を記録した。このアルバム、そして次作の「Point Of No Return」、ライヴ・アルバム「Two For The Show」の三作をカンサスの黄金期と見る向きも多い。「Leftoverture」に収録の〝Magnum Opus〟(超大作)という曲は、いくつかの組曲になっているが、これは別の曲でカットになったテイクをつなぎ合わせたものだという。この曲を聴くだけでも、当時のカンサスの構成力を測り知ることができる。

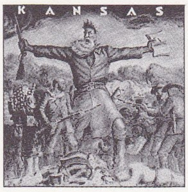
1977年には「Point Of No Return」をリリースする。〝Dust In The Wind〟のシングル・ヒットはおろか、アルバム自体も前作以上のセールスを記録した。

その後、この時のツアーのライヴ録音である「Two For The Show」を発売。編集・ミックス以外にオーヴァーダブ等の作業は一切行われていない、純粋なライヴ録音なのだ。

そして、次作「Monolith」を発表。内省的で音数が減ったスマートな音に変化しているが、トータル・コンセプト・アルバムとして作られており、歌詞の面での構成力はやはり評価に値する。この時のツアーの延長として日本公演も行われている。その後、スティーヴ・ウォルシュとケリー・リヴグレンの二人はソロ・アルバムを互いに'80年にリリースした。そして、「Audio Vision」を録音し、それが最後のオリジナル・メンバーでの録音となり、次作「Vinyl Confessions」の時はスティーヴが脱退し、「Drastic Measures」ではロビー・スタインハートが消え、「歌」と「ヴァイオリン」を欠いたカンサスは求心力を失いベスト・アルバムを残し、活動休止、そして、解散してしまう。

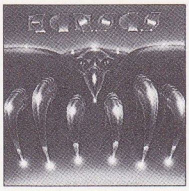
'86年にカンサスはフィル、リック、スティーヴの三人と元ディキシー・ドレッグスのスティーヴ・モーズ(g)を加え再結成し、アルバム「Power」を発表した。そして、'88年に「In The Spirirt Of Things」を発表後、しばらく休止状態に陥ってしまった。

しかし、'92年には、スティーヴ・ウォルシュ、リチャード、フィル、ビリー・グリア(b)、グレッグ・ロバート(key)、デヴィッド・ラグスデイル(vln)という編成で再びライヴが行われ、ケリー・リヴグレンもゲスト参加した。そして、'95年には'92年のライヴが行われたときのメンバーで「Freaks Of Nature」が発表された。プロデューサーに再びジェフ・グリックスマンを迎え制作された。カンサスの持ち味が生かされながらも、今の時代の音を出している。カンサスは見事な復活を遂げ、今も健在だ。



KANSAS
Kansas
LP/Kirshner 32817　'74年
CD/Kirshner 32817
　/ソニー SRCS 6293

本文中でふれてきた通り、何回も何回もメンバー・チェンジを繰り返したり、バンド名を変えてきてやっと出た1stアルバム。しかし、それだけの期間苦労してきただけあって、演奏技術はすばらしいものがある。ただ、まだこの時期のカンサスは特にヴァイオリンの音があるところが大きいと思うが、サザン・ロックやカントリー・ロックの抜けきっていない部分があって、いかにも「プログレッシヴ」というような音の構築性はまだ希薄ではある。しかし、スティーヴ・ウォルシュのパワフルな歌声とロビー・スタインハートのハードな感じのヴァイオリンはこの時すでに炸裂していた。そして、歌を聴かせてくれるカンサスならではのコーラスもバッチリ決まっているし、バラードもしっかりと聴かせてくれる。（平山）



KANSAS
Song For America
LP/Kirshner 33385　'75年
CD/Kirshner 33385
　/ソニー SRCS 6294

自分達の出身地をそのままバンド名にしたと言われるカンサスは'74年にデビューした。1stアルバムはサザン・ロック色が出るなど、セールス的にも内容的にも今一歩の感じであったが、続くこの2nd「Song For America」において彼らの実力は頂点へと達した。ツイン・キーボードによるぶ厚い音の壁と、メロディアスなヴァイオリンによる劇的な構成は実に見事で、アメリカン・プログレッシヴの代名詞と呼ばれた所以も容易に理解できるだろう。以後、彼らはプログレ・ハード色を増していくが、2枚組ライヴに続く「Monolith」あたりまでがプログレッシヴ・ファンにアピール可能な内容と言えるだろう。それ以後はポップ色が強くなり、一時解散。'86年に再編し、現在もベテラン・バンドとして活躍中である。（本木）



KANSAS
Masque
LP/Kirshner 33806　'75年
CD/Kirshner 33806
　/ソニー SRCS 6295

カンサスが日本で始めて紹介されたアルバムとして知られている。セカンド・アルバムの時に共同プロデューサーとして参加したジェフ・グリックスマンが本作より単独でプロデュースを担当。この作品からヴァイオリンがよりフィーチャーされるようになり、クラシカルなアレンジが更に際だってくる。場面の転換もこれでもかというぐらいドラマティックに展開していく。10分を越えるような曲はないが、7分前後の曲でその展開は充分に味わえる。必要以上に曲を長くしないというのはプロデューサーの意向ではないかと推測できるが、それが適度なポップ感ということなのだろうか。とにかく、「プログレ」の展開にこだわっているので、セールス的には不完全燃焼だったが、隠れた名曲がたくさんあります。（平山）



KANSAS
Leftoverture
LP/Kirshner 34224　'76年
CD/Kirshner 34224
　/ソニー CSCS 6038

言わずとしれたカンサス大ブレイクの名作。300万枚ものヒットを生み出した原因を考えてみれば、それは曲がこれほどの感動的な展開を見せながらも、歌メロが覚えやすく印象的で心の琴線に触れていくものだからではないだろうか。ハードでポップ、それは一瞬商業主義のみに走ってしまったように聞こえてしまうのかもしれないが、カンサスの場合はそのポップということが染み付いている上で、こういう「プログレッシヴ」な展開の曲を生み出したいという思いがあったのだと思う。また、最後に収められている〝Magnum Opus〞は、色々な曲からカットされてしまった部分を驚異の構成力で結び付けたまさに「超大作」。ハード×ポップ×プログレ＝カンサスというわかりやすさがいい形で出たアルバム。（平山）



KANSAS
Point Of No Return
LP/Kirshner 34929　'77年
CD/Kirshner 34929
　/ソニー SRCS 6293

前作が爆発的な人気を得たカンサスだが、「次も売れるものを作らなくてはいけない」という過度のプレッシャーのために、スティーヴ・ウォルシュが3日ほど脱退してしまうという事件もあった。しかし、その不安はとりこし苦労となったようだ。このアルバムは前作を越え、チャートは4位まで登り詰めた。基本ラインは前作と同じではあるが、シングル・カットされた〝Dust In The Wind〞は6位にまで上がった。この曲は最初アルバムのコンセプトに合わないから入れるのをやめようという話になっていた。ギター一本で演奏された曲はこれが初めてだった。この曲の成功に自信を得て、ウォルシュはソロ・アルバムの計画を考えたという。カンサスの静的な一面が花開いたアルバム。ジャケも美しい。（平山）



KANSAS
Two For The Show
LP/Kirshner PZ 235560　'78年
CD/Epic ASSOC 35660
　/ソニー CSCS 6040

カンサス初のライヴ・アルバム。選曲は各アルバムより厳選された名作ばかりです。信じられないかもしれないが、このライヴ・アルバムは一切のオーヴァーダブ等をしてない。3回分のライヴから編集したとはいえ、ライヴの断面がこの一枚につめられているのだ。このライヴを聴いていて思うのは、アルバム・テイクよりもいい演奏をしてるんじゃないかという迫力が伝わってくることだ。完璧なものを目指すためにライヴ中にテープを使っていたとかいうことでもない。中には、このライヴ・アルバムをカンサスの最高作に挙げる人もいるという程の出来。ライヴ盤史上での歴史的名盤と言っても過言ではないかもしれない。ここのライヴ盤までが、カンサス黄金期と一般的に言われている。（平山）



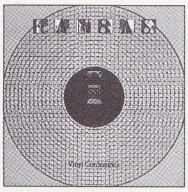
KANSAS
Monolith
LP/Kirshner 36000　'79年
CD/Kirshner 36008
　/ソニー CSCS 6041

カンサスが単独でプロデュースした初のスタジオ作品。映画「2001年宇宙の旅」にインスパイアされて制作されたコンセプト・アルバム。ジャケットの宇宙服を着たインディアンが象徴しているが、破壊された未来にインディアンが新たに文明を築くというストーリーが流れている。しかし、そのストーリーには、バンドとして成功を収めてしまった今、つらい状況だったけれども理想を目指し、いいミュージシャンになることにだけ没頭していた自分たちを懐かしむことにピリオドを打ったという意味合いもあったとケリーは語っている。そのストーリーを反映して、音の方は落ち着いていて、どこか寂しさが漂うような展開になっている。演奏も手数が少なくなった分、間を生かした音作りがされている。　（平山）



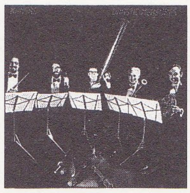
KANSAS
Audio Visions
LP/Kirshner FZ 36588　'80年

'80年2月の初来日公演、夏のリヴグレンのソロ作に続いてリリースされた、スタジオ・アルバムとしては通算7作目。さらにポップ化を進めながらも〝KANSASらしさ〟を守ったつくりになっており、ウォルシュとリヴグレンの色の違い——2人のソロの内容からより明白となった——が曲によってハッキリ出た作品とも言えよう。とはいえ、〝On The Other Side〟の線を狙ったであろうシングル・カット曲のA③のメロディも充分に泣いており、ドラマティックなA⑤がまだまだ〝JOURNEY、STYXにはならないぞ〟と主張していた。が、7分に迫るB③が少々軽目のアレンジになっていて、インスト・パートも〝バトル〟とは呼べない点は残念。尚、本作を最後にウォルシュが方向性の違いから脱退する。　（奥村）



KANSAS
Vinyl Confession
LP/Kirshner FZ 38002　'82年

ウォルシュの脱退により、約2年間の活動停止期間を経た後、ニュー・メンバーとしてジョン・エレファンテを迎えた通算8作目のスタジオ作。幾分、曲のつくりがシンプルになり、よりキャッチーな印象を受ける曲が多くなったものの、そう急激な変化はない。エレファンテのヴォーカルもウォルシュのトーンにかなり近く、B面には、全盛期程ではないにせよ、リリカルなメロディを使った佳曲が並んでいた。気になったのは、サックスのソロをフィーチュアしたA⑤とB①だ。また、エレファンテ作曲（ジョンとその兄弟のディノが共作）によるA④、B④といった曲が、例えばリヴグレン作曲によるポップなB②なんかよりもずっとKANSASらしいのも奇妙といえば奇妙。スタインハートにとってのラスト・アルバムでもある。　（奥村）



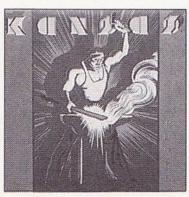
KANSAS
Drastic Measures
LP/CBS 38733　'83年

ついにヴァイオリンのロビィ・スタインハートまで抜け、5人編成となった彼等が最後に放った作品。ここには嘗てのドラマティックなカンサス本来の姿はなく、今一つ煮え切らない普通のポピュラー・ソングが無造作に並んでいるという印象が強い。個人的には好きな曲もあるが、当然セールス的にも振るわず、ツアーも行なわれなかった。この後彼等は、解散というよりは自然消滅に近い形でファンの前から姿を消す。それにしても廃盤になったままCD化もされないなんて酷い。出れば買い直したいんだけど。　（東野）



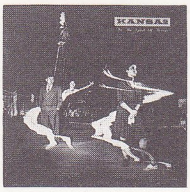
KANSAS
The Best Of Kansas
LP/CBS ZK39283　'84年
CD/CBS ZK39283
　/ソニー 32DP 178

デビュー10年目にしてリリースされた初のベスト・アルバム。セカンドの「Song For America」から、当時の最新アルバムだった「Drastic Measures」までの6作品から、9曲が選曲され、さらに、オリジナル・アルバム未収録の新曲が1曲収められていた。「Masque」からはともかく、「Monolith」から〝On The Other Side〟が選ばれていないのが意外だが、シングル・ヒットだけではなく、長尺のA⑤、B③や、B⑤までもが収録されているのだからあまり文句も言えないか。で、'84年レコーディングの新曲B①だが、コーラス・ワークはなかなか〝らしい〟ものの、サビ・メロも含め、やはり、かなりメタル寄りの曲だ。尚、A①、B⑤はリミックス・ヴァージョンを収録。　（奥村）



KANSAS
Power
LP/MCA 5838　'86年
CD/MCA MCAD 5838
　/MCA ビクター MVCM-21009

3年近くの沈黙期間を経た復活第1弾にして通算10作目。とはいえ、ある種再結成ともとれるこの復活は、リチャード・ウィリアムス（g）、フィル・イハート（ds）を含むものの、ケリー・リヴグレンを欠き、言わばスティーヴ・ウォルシュ主導によるものだったろう。というのも、他のメンバーが、ウォルシュの'80年発表のソロ作に参加していたスティーヴ・モーズ（g：元DREGS）とビリー・グリアー（b：彼はウォルシュのバンド、STREETSのメンバーでもあった）だったからだ。サウンドの方も、まるでメタルのA①を始め、かつてのKANSASのイメージとは異なるタイプが殆ど。フル・オーケストラをフィーチュアしたA④に続くA⑤と、歌詞が〝らしい〟B④にかろうじて雰囲気を残す。　（奥村）



KANSAS
In The Spirit Of Things
LP/MCA 6254 '88年
CD/MCA MCAD 6254
/MCA ビクター MVCM-21010

通算12作目（ライヴ盤も含む）となる、MCA移籍後第２弾が本作である。MCA在籍時の彼等は、後期FOR EIGNERやTOTOにも通じるHRベースのAORを基盤としていたのだが、各メンバーのキャリアに裏打ちされた高品質な内容を誇っていた。前作から復帰したスティーヴ・ウォルシュの歌唱も、その力強くも美しいメロディとあいまって、非常にエモーショナルな輝きを放っていた。とはいえ、元DREGSのスティーヴ・モーズも含めて、プログレッシヴ・ロック的手法を全く忘れてしまうわけでもなく、シアトリカルなインスト部を挟む佳曲⑩、インストの小作品⑪を経て感動的なラストを迎える⑫までの流れには、KANSASと名乗る彼等の強いこだわりが充分詰め込まれている。（芦沢）



KANSAS
Kansas Box
CD/Epic/Legacy ZZK 47364 '94年
/ソニー SRCS 7448〜9

ちゃんとした箱入りなので当然３枚組か４枚組と思っていた、２枚組ボックス・セット。デビュー作から「Audio-Visions」までのナンバーが、各アルバムからまんべんなく選曲される中、勿論のこと、未発表曲が入っている。まず、Ⅰ-①はドン・カーシュナーに送ったという'72年のデモ・テイク。Ⅰ-②⑥、Ⅱ-⑪は、それぞれ'73、'75、'79年の未発表ライヴ・テイクで音質もまあまあ。で、Ⅱ-⑯が本作の目玉中の目玉の、新曲だ。ウォルシュ（vo）、イハート（ds）、リヴグレン（g）、そしてディヴィド・ラグスティル（vln）というラインナップでの録音で、リヴグレンを含みながらもリチャード・ウィリアムスを欠くのはどうして？ 元々はリヴグレンのソロ用だそうだが、泣きのメロの佳曲です。（奥村）



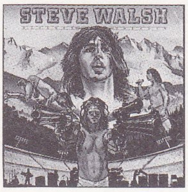
KANSAS
Live At The Whisky
CD/Intersound CDI 9107 '92年
/ソニー SRCS 7469

'92年４月５日にLAのウィスキーで行なわれたライヴを収録。クレジットによると〝one take〟とのこと。が、当然ながらその演奏にはさしたるミスも見当らない。ラインナップは、ウォルシュ、ウィリアムス、イハートのオリジナル組に加え、「Power」以来のビリー・グリアー（b）、そして、グレッグ・ロバート（key）、ディヴィッド・ラグスディル（vln）という６人で、リヴグレンは、ゲストとして⑧⑫にのみ登場する。それにしても、全曲が'70年代のナンバーというのも凄い。同内容のライヴ・ビデオもリリースされているが、CDの方にはボーナス・トラックとして'75年のライヴより⑭を追加収録。結局、この６人で今もKANSASは活動中らしく、先日、最新作をリリースしたばかりである。（奥村）



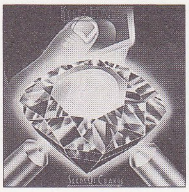
KANSAS
Freaks Of Nature
CD/Intersound ESS CD 299 '95年

'92年のライヴ・アルバムの時と同じメンバー（オリジナル・メンバーはフィル、スティーヴ、リチャード）でプレイされている。しかも、プロデューサーはまたジェフ・グリックスマンが担当している。そうして出来上がった新生カンサスの音は、ヴァイオリン、キーボードを生かした、「これぞ、カンサス！」という音に仕上がっている。ヴァイオリンのロビー・スタインハートの穴は、デヴィッド・ラグスデイルがしっかりと埋めています。しかも彼はギターとソングライターとしても大活躍している。昔のカンサスの音に戻ったからと言っても、それは決して旧態以前のコピーをするのではなく、現在を軸に作られた非常にポジティヴな音であることは間違いない。ケリー・リヴグレンが一曲提供しています。（平山）



STEVE WALSH
Schemer-Dreamer
LP/Kirshner 36320 '80年
CD/ソニー SRCS 6296

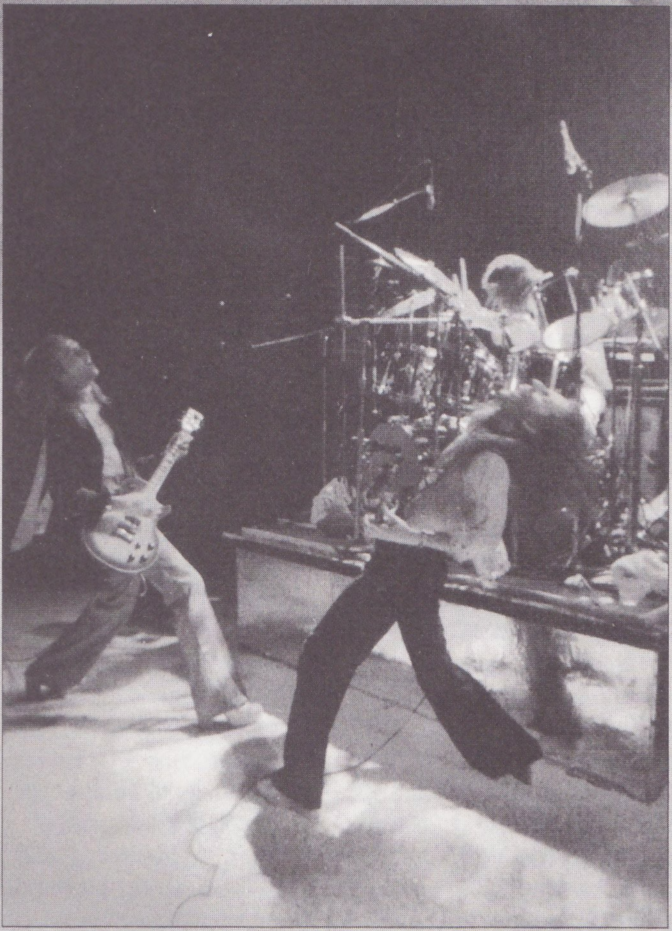
'79年の２月にはほぼ完成していたものの、「Monolith」の制作を優先させたため、翌年初頭までリリースが伸ばされたという曰くつきのソロ作。いきなりシンプルなR&Rで驚いてしまうが、このストレートなサウンドこそ、実はウォルシュが本当にやりたかったものだというのが定説となっている。KANSASからは、リヴグレン（A④）、イハート（B③）、ウィリアムス（A①）が参加。他には、DREGSからアラン・スローン（vln：B②）、スティーヴ・モーズ（g：B③）がジョイントしているが、この２人が参加した２曲が最もKANSASを感じさせるというのは、何とも皮肉だ。特にB③は、その壮大でドラマティックなアレンジが、後の『Power』につながると言っても過言ではない名曲。（奥村）



KERRY LIVGREN
Seeds Of Change
LP/Kirshner 36567 '80年
CD/ソニー SRCS 6297

KANSASの初来日公演から約半年後に発表されたファースト・ソロ作。が、ウォルシュ（A③）、イハート（A④、B③）、スタインハート（B③）が参加した本作は、当時、よくソロとしての意味を問われていた。実際、ジェフ・ポーランド（LE ROUX）とディヴ・パック（AMBROSIA）がそれぞれ歌うA①、B③もかなりKANSAS的だし、B. SABBATH加入直前のロニー・ディオが歌うA②も、ロニー色が強いものの（このオッサンだけはホントに……。B①なんてDIOだ）、このアレンジはやはりKANSASだろう。要は、彼は自分の世界観を様々な方法で表現してみたかったということか。実はA④も、それ程南部してるわけではない。その後、'84年以降にも５作程のソロ作を発表している。（奥村）

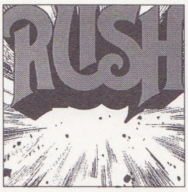
RUSH



文●高山直之

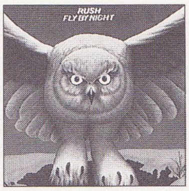
「高い地位を摑んだ者は、新たな現実を形造り始めねばならない」——ニール・パート〝Closer To the Heart〞より

RUSHの歴史はたゆまぬ前進の歴史である。20歳そこそこのカナダの若者アレックス・ライフスン(g)ゲディ・リー(b、vo)ジョン・ラトジイ(ds)の3人が自費で録音したアルバム「Rush」を、'74年2月にムーン・レコードより発表したときから彼等は歩みを止めなかった。ジャケットが後の作品と比べチープなのはそのせいもあるのだろう。しかし本作の評判によりマーキュリーと契約。8月には全米発売もされ、彼等は表舞台に浮上する。この時点では初期ZEPのフォロワーだった彼等に訪れた大きな転機、それはジョンの脱退とニール・パートの加入だろう。ジョンと同じく他の2人より一歳年長の彼は、卓越したドラマーというだけでなく、作詩能力に優れた文学青年で、RUSHの音楽に深みとコンセプトを持ち込んだ。セカンド「Fly By Night」ではメロディ面の進歩と共に、トールキンの『指輪物語』に想を得た〝Rivendell〞、組曲〝By-Tor And the Snow Dog〞(裏ジャケではアレックスがSnow Dog、ゲディがBy-Torとクレジットされている)を収める等、早くもニールの嗜好が現れた。ジャケットの羽根を広げたふくろうはこれから飛び立とうとする叡智のバンドとしての彼等だろう。続く「Caress Of Steel」ではムーディな深みを増し、片面を費した組曲〝The Fountain of Lamneth〞を披露。曲名からは彼等がZEPやYESだけでなく、初期GENESISも好んでいたことが窺える(因みに本作以降の歌詩はすべてニールによるものとの誤解があるようだが「2112」や「Farewell～」「Permanent～」にもゲディ、アレックスの作詩曲が収められている)。賢者は黄金を見つけ、'76年には彼等の真価を発揮した「2112」を発表。アイン・ランド(Ayn Rand)の小説『Anthem』を基にした片面のストーリーは、自我の発見と獲得、すべての「ロック」の物語である。小説自体には反共的な色彩も感じられるが、むしろRUSHが問題としているのは左右問わず全体や他者に律されない、行動し思考する主体としての個の在り方だろう。巨きな赤い星に挑む若者は個の可能性の象徴なのだ。「お前が持つのはお前自身の王国/お前が為すのはお前自身の栄光」「お前が生きるのはお前自身の物語」と歌う〝Something For Nothing〞はその表明であり、〝Closer To the Heart〞〝Freewill〞等これはRUSHに通底するテーマである。ライヴを挟んだ英国録音「Farewell To Kings」ではゲディがシンセサイザーもプレイ。大作主義とプログレッシヴ、ファンタジィ色が前面を覆う。次作「Hemispheres」はその完結編だろう。この空間的広がりは同郷のSAGA、TRIUMPH、FMとも通じる。そしてそれが大味さとなる米国のバンドに比べ、彼等カナダのバンドには欧州的な緻密さも同居している。筆者が初めて聴いたRUSHの曲は、FENでかかった〝La Villa Strangiato〞だが、各パートが全力で激突するインストに、YESの「危機」に通じるロックの一つの極を見た気がした。もっとも当時の日本での評価は「テクニックだけのハード・ロック」程度のものでしかなかったが。しかしそれを覆したのが「Permanent Waves」のヒットだ。冗長さを排し、高度な演奏力を高密度、コンパクトにまとめ、詩も従来の歴史や文学、架空の世界から、現代や近未来を描き、より豊かなインテリジェンスを漂わす本作は英米でプラチナ・ディスクを獲得。彼等が当代一級のバンドに成長したことを証明した。「Moving Pictures」でこの路線を究めたRUSHは、遂にZEPでもYESでもないRUSHとしての姿を確立する。それは多くのHMバンドに影響を与えたが、彼等はそこに留まりはしなかった。総集編的ライヴ「Exit…Stage Left」の後に発表した「Signals」、プロデューサーがセカンド以来のパートナーで、第4のメンバーと言われたテリー・ブラウンから紆余曲折を経てピーター・ヘンダースンに交替した「Grace Under Pressure」ではシンセサイザーを前面に使用。前者ではFMのヴァイオリン奏者ベン・ミンクも参加し、レゲエ・ビートまで取り入れる等、音のふくらみが増した。そして後者に伴う'84年のツアーで彼等は初来日。リアルタイムで接して来た「Permanent～」以降のキーボード・サウンドも良いが、やはりライヴではゲディがベースを弾く場面の方が光った。その認識が彼等にもあったのかピーター・コリンズ、プロデュースの「Power Windows」では疾走するベースが心地好い。歌詩がより直截になった点にも注目しよう。〝Marathon〞は10年選手となった彼等の更なる決意表明である。ここまで走り続けて来た彼等だが、「Hold Your Fire」は演奏、完成度では申し分ないものの、何故かふっと息をついたような印象がある。Stop & look aroundといった所だろうか。だが3作目のライヴ「Show of Hands」で文字通り無比のテクニックを見せつけた彼等は、ルパート・ハインを起用した「Prest」で飽くなき変化への意欲を示す。ハインとの2作目「Roll the Bones」では前作の試行もこなれ、暖か味のあるメロディと共に彼等なりの時代感覚を導入した。骨を休めず転がし続け、型にはまらないようにすること。言うは易しいが、それは長く険しい行程だったはずだ。転がる骨は錆びつかない。後ろを振り返っても仕方ない。何故我々はここにいるのか。それはここにいるからだ。新たなスタートを切った'90年代のRUSHを主張するモダンでヘヴィな音像の現時点での最新作「Counterparts」＝対はFLOYDのテーマとも合致する。彼等の愛したZEPやYESも前進を旨としたバンドだった。しかし、今、RUSHはそれらと並び称されるべき高みにいる。そして頭脳と肉体を備え、プログレ、HR/HMの枠を越えて高い地位を摑んだ今でも彼等は新たな現実(リアリティ)を形造り始めようとしているのだ。



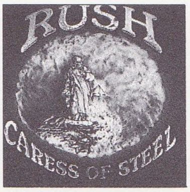
RUSH(Canada)
Rush
LP/Mercury SRM 11011　'74年
CD/Mercury 822541
　/イースト・ウェスト AMCY-314

'69年にトロントで結成。まず地元のMoonレーベルからリリースされた本作デビュー・アルバムは、それから約半年後にアメリカでもMercuryの配給にて発売された。まだドラマーがジョン・ラトジーだった当時の彼等がZEPフォロワーとして登場したことは有名だが、それは、本作のＡ①の〝Ooh Yeah！〟と叫ぶゲディ・リーやＢ①のリフなどにも顕著。また、ブルース風ナンバーのＡ④は、とても現在のイメージからは想像がつかないだろう。強いて言うならＢ④のヘヴィなリフの使い方辺りにその後の片鱗が窺えるか。尚、裏ジャケにクレジットされている〝WMMS〟というのが、彼等のアメリカ・デビューのきっかけを作ったクリーヴランドのFM局で、ここのヘヴィ・ローテーションが決め手となった。（奥村）



RUSH
Fly By Night
LP/Mercury SRM 1-1023　'75年
CD/Mercury 822542
　/イースト・ウェスト AMCY-315

ジョン・ラトジーの脱退を受け、'74年７月29日にニール・パートが新ドラマーとして加入。本作より、文学おたくのニールが歌詞を手掛けるようになり、彼等はようやくその後の〝進化するバンド〟としての第一歩をここに記した。トップ・ナンバーは、これまでも何度も言及されているように、後の「2112」のアイディアの基礎となった曲で、アメリカの女流作家、アイン・ランドの'37年の同名小説から材が採られた。また、ファンタジー志向が強まっていったのも、かの『指輪物語』をテーマとしたＢ③、プリンス・バイターとスノー・ドッグの戦いが描かれた初の組曲Ａ④から顕著で、詞世界の表現のために楽曲を練りに練ったことも窺えよう。とはいえ、まだまだHRからは脱してはいない。（奥村）



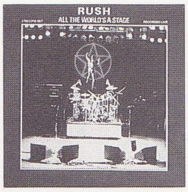
RUSH
Caress Of Steel
LP/Mercury SRM 1146　'75年
CD/Mercury 822543-2
　/イースト・ウェスト AMCY-316

本作より全ての歌詞をニールが手掛けることになり、歌詞世界が一気に広がって、曲が練れてくる。組曲は２つ。Ａ④は、柳の谷の３人の旅人が、魔術師の暗黒と恐怖の地へ向かうファンタジーで、〝プリント・バイター〟が第３部で再び登場。Ｂ面全てを使った〝ラムネスの泉〟も、やはりファンタジー・ストーリーを中心としている。前作からプロデューサーを務めている（1stではリミックス・エンジニア）テリー・ブラウンがアレンジ面でも関わるようになり、曲の空間はより大きなものへと拡大した。内ジャケのハッピを着たニールが、ダリのよう…？（奥村）



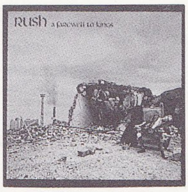
RUSH
2112
LP/Mercury SRM 11079　'76年
CD/Mercury 822545-2
　/イースト・ウェスト AMCY-317

2ndの〝Anthem〟をさらに発展させ、アイン・ランドの同名小説をニール流にアレンジしたタイトル組曲がＡ面全てに亘る。シンセサイザーによる宇宙空間を思わせるSEに続いてメイン・テーマが始まり、主人公が新しい音楽を発見し、体制に疑問を抱くストーリーが展開、ラストの〝グランド・フィナーレ〟に至る全編は、ハード・ロック界でも１、２を争う完成度を誇る組曲として結実した。Ｂ面に収められた４曲も、既にRUSHが、〝ZEPからの影響を隠しきれないカナダのバンド〟から完全に脱したことを証明するに充分な楽曲となっている。（奥村）



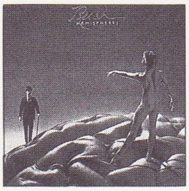
RUSH
All The World's A Stage
LP/Mercury SRM2-7508　'76年
CD/Mercury 822552
　/イースト・ウェスト AMCY-318

'76年６月11、12、13日に行われた、「2112」発表後のカナディアン・ツアー中のステージを収めた、彼等にとっての初のライヴ・アルバム。彼等の初期HRスタイルのダイナミズムを伝えるだけではなく、組曲形式の〝2112〟や〝By-Tor & The Snow Dog〟といった長編を、確実にライヴでも再現出来ることを示したという意味でも、彼等の存在感は、本作でさらに真実味を帯びたに違いない。特に、ゲディ・リーの若々しい声は、このバンドがこれからの絶頂期に向けて勢いづいていることを強く感じさせる。尚、オリジナル・リリース時は２枚組だったが、CD化に際して１枚モノに編集したため、Ｄ②に収められていた〝What You're Doing〟がカットされてしまった。（奥村）



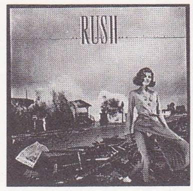
RUSH
A Farewell To Kings
LP/Mercury SRM 11184　'77年
CD/Mercury 822546-2
　/イースト・ウェスト AMCY-319

3rdと4thで片面１曲をやってしまった彼等が、次にどうするかが注目された作品だったが、結局10分台の曲を２曲収録するのみに終わっている。しかし、ラストを飾る〝Cygnus X-1〟は、ついに宇宙へと飛び出したニールのSFファンタジーが、デビュー時からは考えられない程の器の大きさを身につけた〝進化し続けるRUSHサウンド〟によって壮大なスペース・オペラへと結実し、さらには、とどまるところを知らぬ彼のアイディアのほとばしりから、〝つづく〟と締めくくられるに至る。ライヴでの合唱曲Ａ③、タイトル曲、残る３曲も全て名曲。（奥村）



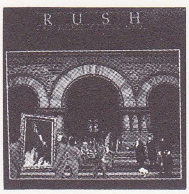
RUSH
Hemispheres
LP/Mercury SRM 11184 '78年
CD/Mercury 822547-2
/イースト・ウェスト AMCY-320

前作の〝第1巻：航海〟に続く、〝Cygnus X-1 Book II：Hemispheres/第2巻：神々の闘い〟からスタートする本作は、SFストーリーから、大脳生理学や神の領域まで舞台を広げ、大円団を迎えるが、実は、本作のレコーディング突入10日前になっても、ニールには〝第一巻〟の続きのストーリーが思いつかなかったというエピソードが残されている。B②の〝The Trees〟は、カエデとオークに、カナダとイギリス、引いてはRUSH自身とイギリスのロック・シーンをダブらせた佳作。ラストのインストは、12のパートから成るテク爆発曲。（奥村）



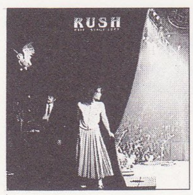
RUSH
Permanent Waves
LP/Mercury SRM14001 '80年
CD/Mercury 822548
/イースト・ウェスト AMCY-288

既にダリ髭も剃ってしまったニールは「天界での〝神々の闘い〟は終わった。しばらくはこの地上で、目に映る世界を歌いたい」と語り、「次作は軽いコンセプトになるだろう」ともコメントしたが、それは、この通り7作目のサウンドに如実に表われていた。勿論、急激にコマーシャル化したわけではないが、シングルのA①には5分弱の原曲を3分にエディットしたヴァージョンが作られ――ちなみにこのシングル・エディットにメンバーは当然のごとく反発したらしいが――それが全米のラジオ・ステーションでブレイクし、彼等は本作をもって、一躍メジャー・アクトへと浮上する。最後の組曲となったB③のテーマの中に、早くも現実をみつめる眼が生まれていることも注目したい。（奥村）



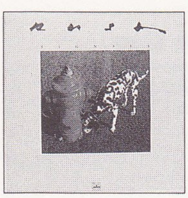
RUSH
Moving Pictures
LP/Mercury SRM14013 '81年
CD/Mercury 800048-2
/イースト・ウェスト AMCY-289

本作をもってRUSHのハード・ロックの時代は一応終わりを告げた。キーボードの導入がさらに目立ち、ヴォーカル、ベース、シンセサイザー、ペダル・ベールを操るゲディは、ライヴ・ステージで機材に囲まれるようになっていく。A①の〝Tom Sawyer〟の歌詞は、MAX WEBSTERの作詞を手掛けるパイ・デュボアが基本アイディアを出し、意気投合したニールとの共作となった。超絶バカテク・インスト・ナンバーの〝YYZ〟とは、彼等の地元、トロント国際空港のアイデンティティ・コードで、イントロはそのモールス信号が使われている。（奥村）



RUSH
Exit Stage Left
LP/Mercury SRM 27001 '81年
CD/Mercury 822551-2
/イースト・ウェスト AMCY-290

当初、「Permanent Waves」の次にライヴ・アルバムをリリースするというアイディアもあったらしいが、結果的には、前作「Moving Pictures」から8カ月後に本作が発表された。ということで、レコーディング自体は'80年から行われていたようで、全英、カナダ・ツアーの模様が収められている。既に組曲は収録されていないが、中期以降の、これぞベスト選曲ともいう内容になっているのも事実で、エレクトロニクスが大胆に導入される寸前の、HRバンドとしての彼等のスリリングなプレイが楽しめる最後の作品と言ってもいいだろう。見開きジャケットに、デビュー作からのジャケット・アートのキャラクターを総出演させたことからも、ひとつの〝区切り〟としての役割が見える。（奥村）



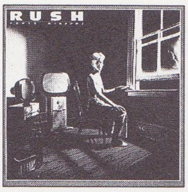
RUSH
Signals
LP/Mercury SRM 14063 '82年
CD/Mercury 810002
/イースト・ウェスト AMCY-291

俗に言う（？）〝POLICE化〟が始まってしまった通算9作目のスタジオ・アルバム。かつてのSF色は近未来の現実直視にすっかり取って代わり、楽曲のコンパクト化は、HR時代のファンの多くを去らせてしまったようだ。シンセサイザーやシーケンサーの多用は、A①のイントロを聴いただけでも分かるが、これまでは飽くまでも空間演出の一手段として使用していたテクノロジーを、主たるインストゥルメンツとして本格的に導入したのも本作からであった。そんな中、FMのヴァイオリン奏者、ベン・ミンクのプレイをフィーチュアしたB③の柔らかな音色が何とも心地好い。シンプルさの中でメリハリに欠ける流れにおいて、ベースのリフが耳を引くA④も、オールド・ファンをちょっと安心させるかも。（奥村）



RUSH
Grace Under Pressure
LP/Vertigo VERH/2
CD/Mercury 818476
/イースト・ウェスト AMCY-292

〝第4のメンバー〟と言われたテリー・ブラウンの許を離れて、ピーター・ヘンダーソンをプロデューサーに迎えた10枚目。前作以上にシンセサイザーを多用するも、アレックス・ライフソン曰く「ギター中心に戻した」だけあって、透明なエッジの効いたギター・サウンドが同等にフィーチュアされ、前作よりはハードな印象も与える。シーケンサーの上を淡いカッティングが舞うA③、個人的には〝'80年代RUSH流HM〟の佳曲と評価したいB①（レコーディング当時、ゲディはチョッパーが出来なくて苦労したという話を聞いたが……本当？）辺りは、「Singnals」で見放したHR／HM系リスナーにも是非聴いてもらいたい。前作から次作への流れの中で、特異点的な色を持つHR作品だ。（奥村）



RUSH
Power Windows
ＬＰ/Vertigo VERH31　'85年
CD/Mercury B2609B
　/イースト・ウェスト AMCY-293

非常にきらびやかでスマートな印象が残る作品である。ピーター・コリンズのプロデュースのもと、久し振りに英国でレコーディングされた本作だが、「Signals」以降のサウンドの流れから外れるのではなく、シンセサイザー等の大胆な導入も、既に彼等のコントロール下におかれ、結果非常に人間的なサウンドが保たれている。確かにフィル・インされるシンセが目立つのは事実だが、例えばリム打ち一つとっても、３人個々のプレイの存在感が勝っているのは言うまでもない。やはり小気味良いほどにタイトなプレイが光る④にハイ・ライトを当ててしまうのは、ファンの悲しい性なのかもしれないが、ヒットした①からのアルバム全編に流れを感じた時に、各楽曲の必然性も強く浮かんでくる。　（芦沢）



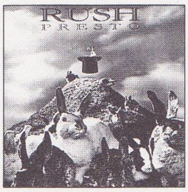
RUSH
Hold Your Fire
ＬＰ/Vertigo VERH 47　'87年
CD/Vertigo 832464-2
　/イースト・ウェスト AMCY-294

彼等の音楽を考えた時、ゲディ・リーの声の魅力は非常に大きい。メッセージを伝達し、人間味あふれる彼の歌が円熟の境地に達したこのアルバムこそ、「シグナルズ」以降の方向性の到達点である。全くスキのない演奏、適確なアレンジ。全てがゲディの歌の為にあり、ポジティヴに、感動的にメロディが歌い上げられていく。ポップだ、ハードだといった視点を変えてみれば、この時期の彼らに対する評価も変わってくるはずだ。音作りは前作の延長だが、よりシンプルなものになっている。RUSHのひとつの本質を表した名作。ちなみに〝Tai Shan〞はニールの中国旅行記。　（中島）



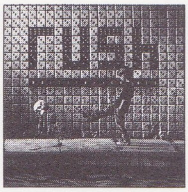
RUSH
A Show Of Hands
CD/Vertigo 836346-2　'89年
　/イースト・ウェスト AMCY-245

３作目のライヴ・アルバムとなる本作は、過去のライヴ作品同様、テクノロジーとの共存という業の中で築き上げた一時代の、総括的意味合いを含んでのリリースであった。'85年の「Power Window」ツアーと'87年の「Hold Your Fire」ツアーからの収録となる内容は、その殆どが'82年以降の楽曲で占められていて、やはりシンセの波が大きく存在してはいるが、その存在理由がパート間の空間を埋めるためのものではなく、その空間を活かすためのものであると、改めて認識させられる。トリオとしては究極の演奏が収録された作品であることには疑う余地もなく、彼等のライヴとは縁遠い我々日本のリスナーにとっては、更に欠かすことの出来ない、重要な一枚であろう。　（芦沢）



RUSH
Presto
CD/Atlantic 82040-2　'89年
　/イースト・ウェスト AMCY-4

新たにルパート・ハインをプロデューサーに迎え制作された、Atlantic移籍第一作。贅肉をそぎ落とすかのごとく簡素化されたサウンドは、結果、アレックスのギターとゲディの歌を前面に引き戻し、再びロック・バンドとして新たな可能性へと足を踏み出した。〝簡素化〞とはいえ、当然彼等のこと、アコースティック・ギターや、効果的に導入されるフィル・イン等綿密なアレンジが巧みに噛み合ってサウンドをつくり出しているのは言うまでもなく、あくまで表面の感触がリアルなものになったという話だ。アルバム・ラストで聴けるアレックスのプレイに代表される〝円熟味〞と、彼等にとっては自らの持つパーツであり、楽曲の全体像の中に巧みにコントロールされているかのよう。　（芦沢）



RUSH
Roll The Bones
ＬＰ/Anthem　'91年
CD/Atlantic 82293-2
　/イースト・ウェスト AMCY-286

前作同様にルパート・ハインをプロデューサーに起用した通算17作目。ニール・パートのプレイが手数の多さよりも、グルーヴ感を求めたミドル・レンジのものに変化してきたのは周知の通りだが、サウンド面でも彼のドラムが生々しく伝わってくる。まだ楽曲そのもののクオリティの高さは、彼等の歴代の中でもトップ・クラスで、一歩下がって余裕を持ったかのように巧みなアレンジをみせつけてくれる。『Singnals』以降に辿ったテクノロジーとの共存も、完全にひとつのパーツとして手中に納め、重視される〝ロック魂／グルーヴ感〞を底辺で彩っている。グランジ全盛の時代にリリースされた本作だが、充実した力強い内容で、全米のラジオ・ステーションを席巻した傑作だ。　（芦沢）



RUSH
Counterparts
CD/Atlantic 82528-2
　/イースト・ウェスト AMCY-608

ここ10年来、最もヘヴィな色合いの強い最新作。シンセはバックに回り、ギター・オリエンテッドな音像は要するにアレックスの主張が通ったことか？　そのグルーヴ感、ヘヴィさの質は同時代的イディオムと自身のルーツの両面を感じさせる。楽曲は無論彼らならではのものだが、「プレスト」以降の結論とみるか、新たな転換とするかは微妙なところ。ともあれ彼らがここへきてこの音を選択した事実は興味深い。ゲディの歌という核は不変だが、その伝え方に新鮮味があって、結果「逆襲」と呼ぶにふさわしい作品となった。今回もインストを収録。来日は夢なのか？　（中島）

DREAM THEATER

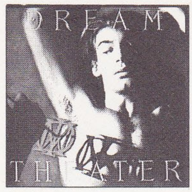


文●島村昌樹

'90年代のプログレッシブ・ロック＆ヘヴィーメタル・グループの中で現在、実力、人気共にトップクラスの成功を手中に収めた感があるDREAM THEATERであるがその道のりは決して平坦ではなかった。ここではその彼らの歴史を簡単ながら記してみたいと思う。

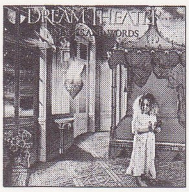
1985年9月、ロングアイランド出身でバンド仲間でもあったJohn PetrucciとJohn Myungは在学中だったバークリー音楽院で、RISING POWER、INNER SANCTUMといったバンドに参加していたドラマーのMike Potnoyと出会いバンド結成を計画する。その際やはり2人のJohnとバンド仲間で当時フレドニア音楽院に在学していたキーボーディストのKevin Mooreも合流、バンドはMAJESTYと名乗り本格的な活動を始めた。'85年末、活動拠点をロングアイランドに移したMAJESTYに翌年3月ヴォーカリストのChris Collinsが加入、現在と同じ5人編成となる。その後MAJESTYはローカル・クラブでの活動を続けながら6曲入りのアルバムを1000枚限定で自主制作する。このMAJESTY唯一の音源は荒削りながらその後の彼らを思わせるもので、現在のDREAM THEATERの原点と言っていい作品であった。このように好スタートをきったMAJESTYだったが、直後の'86年11月にChrisが脱退、以後100人にも及ぶオーディションを行い後任にCharlie Dominiciを迎えることになった。Charlieを加えたMAJESTYは新たに4曲のデモを制作、それを聞いたMechanicレーベルの社長Steve Sinclairに気に入られ契約を交わすことになる。しかしながら同名のバンドがすでに存在していた為、彼らはMikeの父親のアイディアからDREAM THEATERと改名しレコーディング準備に入った。'88年6月～8月にフィラデルフィアのカジェム・スタジオにて録音された記念すべき1stアルバムは「When Dream And Day Unite」と名付けられ'89年始めにリリースされる。この1stアルバムでは、今までのプログレッシブ・ロックやヘヴィーメタルの影響を受けながらもそれを昇華し独自のサウンドとして構築するという彼らならではのサウンド・スタイルが評価され、一部のマスコミや多数のファンの注目を集めることになった。このように順調なスタートをきったDREAM THEATERであったが、Charlieの脱退により再びヴォーカルを捜す必要性に迫られる。またこの間にMechanicレーベルとの契約も終了してしまうが、バンドの活動意欲は損なわれずヴォーカル・オーディションを繰り返す一方でインスト・ショーを行うなど地道ながらもコンスタントに活動を継続していた。オーディションの結果、彼らはカナダでCONEY HATCH、WINTER ROSEといったバンドに在籍していたJames Labrieを加入させ復活を遂げる。再スタートをきったDREAM THEATERはAtcoのA＆RマンDerek Oliverの強力なバックアップにより契約、直ぐさまプロデューサーにDavid Praterを迎えレコーディングを行う。こうして完成したのが彼らの2ndであり出世作でもある「Imeges And Words」である。'92年夏にリリースされたこのアルバムはまず日本で最初に人気に火がつき、その後の地道なツアーとMTVでオンエアーされたビデオクリップにより本国アメリカでも人気を獲得、彼らは本人達も驚くほど早くに成功を手中に収めることが出来た。以降も'92年11月の初来日も含めバンドは精力的にツアーを展開、その地位を確固たるものにしていった。翌'93年、彼らはヨーロッパ・ツアー中にロンドンのマーキーでライヴを敢行、この公演はライヴ・レコーディングも行われ、その中から6曲を選んでミニ・アルバム「Live At The Marquee」として'93年7月にリリース、日本では8月に再来日が決定していたので来日記念盤となった。その再来日公演を含めたツアーを終了した後の'94年5月よりJohn PurdellとDuane Baronをプロデュースに迎え、彼らは3rdアルバムのレコーディングに入る。2nd以降ここまで順調に進んできた彼らだったが、この3rdレコーディング途中に再び重大な事態に遭遇する。なんとMAJESTY結成以来活動を共にしてきたキーボーディストのKevin Mooreが脱退を表明したのである。結局Kevinはメンバーの説得にも応じずレコーディング終了を待ってバンドを去ることとなった。こうした紆余曲折を経て'94年10月にリリースされたのが3rdアルバム「Awake」である。前作に比べこの「Awake」はそのダークな雰囲気と難解さから発売当初は賛否両論を呼んだが、時間が経つにつれその根底にあるより強固になったバンド・サウンドや緻密な中に見え隠れするキャッチーさ等の本質的な部分が理解されるようになり、続く3度目の日本公演を含むツアーでも再びオーディエンスに熱狂をもって歓迎されることになった。なお、このツアーではex ALICE COOPER BANDでバークリー音楽院出身でもあるDerek Sherinianがサポート・キーボーディストとして参加、後に正式メンバーとして迎えられた。ツアー終了後の'95年5月、彼らはミニ・アルバムの制作を決めプロデュースに2ndと同じDavid Praterを起用しレコーディングを始めた。こうして出来上がったのが「A Change Of Seasons」である。この23分を越えるタイトル曲は当初彼らがインスト・バンドとして活動していた'89年に作曲されたもので、その後は数度のライブで披露されたのみだったが、ファンの有志が運営するインターネット上のメーリングリストYtsejamがこの度この曲の正式リリース希望の署名を集めたことによりリリースに至ったものだ。これはまさにファンを大切にする彼らならではのエピソードだと言えよう。また一緒に収録されたライブは'95年1月にロニースコッツで行われたカヴァー・ギグからのもので彼らがルーツとするバンド達のナンバーを演奏したものだ。

困難を乗り越え前進し続けるDREAM THEATERこそ数少ないプログレッシヴな姿勢を持ち続けるバンドだろう。



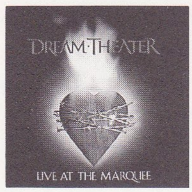
DREAM THEATER
When Dream And Day Unite
CD/Mechanic MCAC 42259 '89年
/MCA ビクター MVCM-21059

'85年にMAJESTYとしてスタートし、翌年、自主制作ミニ・アルバムを制作。その後、シンガーを代え、バンド名を変えてリリースされたのが本作デビュー・アルバムだ。当時〝METALLICA meets RUSH〞と言われたサウンドは、その曲構成の妙と攻撃性から一気に話題となり、各メンバーの卓越したテクニックも手伝って、多方面に衝撃を呼んだ。特に、大作ナンバーならずとも殆どの曲に用意されていたインスト・パートのバトルは凄まじく、リズム・チェンジ等にスラッシュ・メタル的な強引さも見られたものの、このメロディ至上主義の中でのスリリングなプレイは、後に多くのフォロワーを生む。今聴くと荒い部分も多く、やはりチャーリーの歌は危なっかしいが、インパクトは充分すぎる。 (奥村)



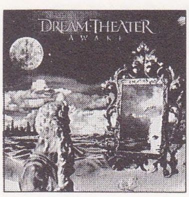
DREAM THEATER
Images And Words
CD/ATCO 92148-2 '92年
/イースト・ウエスト AMCY-438

ファーストのリリースから約半年でシンガーが脱退し、その後、数えきれないオーディションを繰り返すうち、いつしかファンの間では〝解散した〞という噂が誠しやかに囁かれるようになる中、カナダ出身のジェイムズ・ラブリエを獲得して実に3年振りに発表されたセカンド。よく伸びる声と抜群の歌唱力を持つラブリエをうまく使い、バラードを2曲含む前半は、長尺の①③を含みながらも〝歌モノ〞的印象で、⑤で幕を開ける必殺の後半は、これでもかとインストゥルメンタル・パートの充実ぶりを見せつける。もう⑤〜⑥の流れが、あまりの〝プログレぶり〞に泣けてくる程だ。アレンジ能力の向上は言うまでもなく、〝音〞の存在感が前作とは段違いとなった本作で、彼等はついにチャートにも登場する。 (奥村)



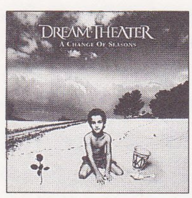
DREAM THEATER
Live At The Marquee
CD/(U.K.)Atco 7567 92286-2 '93年
/イースト・ウエスト AMCY-574

'93年4月23日にロンドンの名門クラブ、Marqueeで行なわれたギグを収録したライヴ・ミニ・アルバムでスタジオ・アルバム未収録のインスト③を含む全6曲が収められている。音質・演奏ともにまさに〝完璧〞としか言いようがないスキのなさで、改めて彼等のミュージシャンとしての力量が規格外のものであることを思い知らされる。しかも単にスタジオ・ヴァージョンの再現にとどまらず、ライヴならではの緊張感、熱気まできっちり伝わってくるのだから「フル・ライヴ・アルバムが聴きたい」というリクエストが多いのも当然といえよう。また本作のイギリス盤は収録曲違いというマニア泣かせの技が使われており、こちらでは2nd収録曲である〝Surrounded〞のライヴ・ヴァージョンが聴ける。 (石原)



DREAM THEATER
Awake
CD/Eastwest 7567-90126 '94年
/イースト・ウエスト AMCY-750

ライヴ・ミニ・アルバムを狭んでのサード。ギターがかなりヘヴィになり、少なくとも〝シンフォニック〞という形容とは無縁のグルーヴィな音像になってしまったことで、ファンの間では賛否両論となったことは、記憶に新しい。勿論まだまだメロディは残っており、むしろ各曲のサビ・メロは前作以上にキャッチーなぐらいだが、バックの重い音に負けじとライヴ以上にダミた声で力んでしまうラブリエが痛々しく、よって曲に表情と張りがなくなってしまった気もする。アレンジ面での方向性の不統一もミエミエで、結果的に異を唱えたのであろうキーボーディストのケヴィン・ムーアは、本作のリリースを待たずにバンドを脱退してしまった。尚、日本盤初回プレスは、地味なインスト〝Eve〞収録のシングル付き。 (奥村)



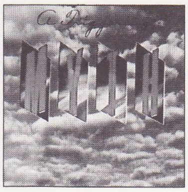
DREAM THEATER
A Change Of Seasons
CD/イースト・ウエスト AMCY-885
'95年

'89年、〝Metropolis-Part I〞と同時期にヴォーカル不在のまま作られたものの、'93年の米ツアーで数回プレイされただけで、結局来日公演では聴けなかった噂のタイトル曲がついにスタジオ・レコーディングされ、さらに、今年1月にロンドンで行なわれたカヴァー・ギグの模様も収めた、変則企画アルバムにして、新キーボーディストのデレク・シェリニアンにとってはようやくツアー・メンバーから正式メンバーに昇格した作品。当初、17分台のインストとしてデモが録られたのは、イントロ部分が大幅にアレンジされ、その他のパートも練り直された末に23分を越える7部構成の大作となった。カヴァー曲のライヴ・テイクは、いかにも楽しんでいるという雰囲気だが、曲によっては選曲がなかなか渋い。 (奥村)

PROGRESSIVE ROCK

Symphonic Rock
Jazz Rock
Hard Rock

A to Z



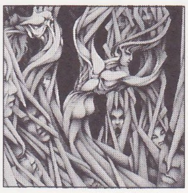
A TRIGGERING MYTH
A Triggering Myth
CD/The Laser's Edge LE 1003　'90年

'90年のデビュー作。ここには8曲が収められている。ティムとリックによるデュオで多重録音によるインストゥルメンタル・チューンを制作していくというスタイル自体はこのアルバムで確立されている。ただ、緊張感に乏しく、又、構成力が次作程ではないので、全編を通して聴くと、やや散漫な印象が残る。当時の印象としては、いいものを持っているのにもうひとつ表現力に欠けるというものであった。カヴァー・ワークの単調さもかなり損をしている部分だと思う。　（山崎）



A TRIGGERING MYTH
Twice Bitten
CD/The Laser's Edge LE 1019　'93年

2作目。キーボード・デュオ＋(b)、(ds)、(g)、etcのゲスト、そして作風ともに大きな変化はない。どちらかと言えば、前作「A Triggering Myth」の方が構築的な音造りをしていた分、派手な印象がある。でも彼らのシンフォニック・サウンドだとされる音楽は、もともとロック魂やアンサンブルとは余り縁のない所で音によるヴィジュアル化をはかったものだと思うから、その意味で、今回の方が彼らの特質は具体化されている。音数は決して多くないが張りつめたトーンで作り出された物語/情景がより具体的に思い浮かぶということだろうか。21分を超える②を筆頭に④⑥⑦辺りが聴き所。初期バンコの暗くかげる部分に通じるような、もしくはジャケットの絵を下地にしたようなミスティックなサウンドが、今回の特長になっている。　（松本）



A TRIGGERING MYTH
Between Cages
CD/The Laser's Edge LE 1022　'95年
/マーキー MAR 95130

セカンドでもかなりヴォルテイジが感じられたが、このサードではさらなる高みに昇りつめてしまったとでもいいたくなるような完成度の高さだ。今までのアルバムには感じられなかった血の通った躍動感が加わったのが最大の収穫だろう。キーボード類も色彩感の強いものを使用しているのでシンフォニック・ロック寄りの印象も強まっている。変拍子を伴う、オール・インストゥルメンタルということもあり、SFFのファースト的なイメージもある。'90年代のイディオムでSFFが演奏したら、このような作品ができるのでは？　といえば、この作品のスタイルを想像してもらえるだろうか。（山崎）



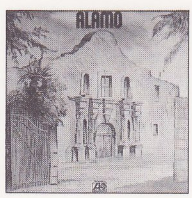
AFTER ALL
After All
ＬＰ/Athena 6006　'?年

アフター・オールが発表した唯一の作品。人形の首をデザインした不気味なジャケット及びそのサウンドから、一部マニアの間で、アメリカのクレシダと俗称されている。キーボード、ギター、ベース、ドラムスの４人（内２人はヴォーカル担当）の織り成す演奏は確かにクレシダに通じる部分が多い。鳴りの良いメロディアスな、そして、時にはワイルドなオルガン、ジャズの香り漂うシンプルで哀愁を感じさせるピアノ、巧いとは言えないもののロック・スピリットを持ったヴォーカル、それらと一体になって曲を盛り上げる他のメンバー。それは正に最初期のブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックを連想させる。この時代に発表されたアメリカのプログレッシヴ・ロック系の作品の中では異色の１枚であり傑出した出来を示している。　（賀川）



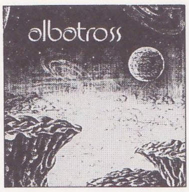
AIR CRAFT
So Near, So Far
ＬＰ/Catero CAT 019　'85年

新進レーベル〝Catero〟からリリースされたエアー・クラフトの１stは、美しいカヴァーに描かれた世界を、イメージそのまま音にしたと言っても過言ではあるまい。流麗ながらも力強いテクニックを物語るピアノにヴァイオリン、地味な位置でありながらも的確にリズムを刻むベースとドラムス、プライヴェート系の作品にも通じるシンセの使用法…等、所謂現代風プログレッシヴに位置する作品である。むしろこの手の作品は、ニュー・エイジの愛好者達にアピールするところが多々あるようで、新世代の台頭著しい北米全体のシーンを見渡しても、素人臭さの全く無い、新人離れした風格さえ漂わせている感もある。メンバーはkeyにvln、b、dsの４人編成。久しく聞かれない新作発表が大いに待たれる所。　（大関）



ALAMO
Alamo
ＬＰ/Atlantic SD8279　'71年

大メジャー・レーベルに残されたテネシー産ハード・ロックの快作。全編ヘヴィーなギターとオルガンが鳴り響き、Ａ②を除いて、初期ツェッペリン風リフと初期サバスのゴリ押し感覚に満ちている。オルガン＆ヴォーカルのケン・ウッドレーがほぼ全曲を作曲。彼の迫力あるダミ声はいかにもアメリカらしいが、サウンドは完全にブリティシュ指向である。Ａ③のイントロのクラシカルなオルガン・ソロは、「おっ、プログレ者でもいける曲か!?」と思わせるが、すぐに'70年代ハード・ロック・ファンが思わずニヤけてしまいそうなリフがとってかわる。アルバム一枚通して聴くと、ミディアム・テンポの曲が多いため、やや単調な印象を受けるが、「ハード・ロックはリフが命」と思っている人には一聴の価値あり。唯一の作品。（中）



ALBATROSS
Albatross
LP/Anvil AT-100-1　'?年

多彩なキーボードによる壮大なオープニングがすばらしい。パイプ・オルガン、メロトロン、シンセサイザー、ピアノと目まぐるしく使い分けるマーク・ダルグレンのキーボードが光る。しかし、惜しいかな、リズム隊が単調で、ヴォーカルも妙に明るいので、音に深みが足りないのも事実。14分に渡るA①は彼らの長所と短所が交互しても、なおかつ好ナンバーではある。録音も悪くなく、演奏もこなれているため、傑作とまでは行かなくても、上の出来ではあろう。マイク・ノヴァ(key、vo)、ジョー・ジュリーノ(b、vo)、ポール・ロー(g)、ダナ・ウィリアムス(ds)を加えた5人編成で、イリノイでの録音。製作年度は付記されておらず、'75〜'77年頃と思われる。（吉瀬）



AMBROSIA
Ambrosia
LP/20 Century T-434　'75年

人が食すれば不老不死になるという〝神々の食物〟をバンド名とした4人組のデビュー作。A①を聴いて、なかなか爽やかなバンドだなんてノンビリ構えてる場合じゃない。続くA②の歌メロが完全にブリティッシュしてることに気づくや否や、絶妙のタイミングで電話のベルが。何と、ミキシング・エンジニアはかのアラン・パーソンズだ。フィドルがきて、マンドリンがきて、ギター・ソロ。リズム展開もいい。となると、もうシングル曲のA③にもダマされないだろう。アメリカンの証のA④もしかり。で、B面。コイツは〝アメリカン・プログレ・ハード〟なんてもンじゃない。ピアノが初期KAYAKかというB①。再び歌メロが英国してるB②。CRIMSONしててSF的要素の強いB③。ラストのB④にも仕掛けあり。まいった。（奥村）



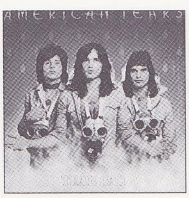
AMBROSIA
Somewhere I've Never Travelled
LP/20 Century BTH 510　'76年

ジャケットの三角を持ち上げて立てるとピラミッドが出来てしまう(本当はピラミッドは四角錐のはず。プリズムだからいいのか？)というセカンド。邦題も『ピラミッドの伝説』だが、直接アルバムの内容とは関係なさそうだ。アラン・パーソンズをプロデューサーに、アンドリュー・パウエルをオーケストラル・アレンジに迎えた本作は、殆ど映画のサントラのノリ。A③、B②、④にはオーケストレーションがドバ〜っと入ってくるが、シンフォニックというよりは、むしろロック・オペラっぽく仕上がった。よって、ドラマティックな展開やテクニックで聴かせた前作とは違って、本作はかなりポピュラーな印象。良く出来てはいるが、スリリングさは皆無。その後、ワーナーに移籍後は、すっかりAORに染まってしまう。（奥村）



AMERICAN TEARS
Branded Bad
LP/Columbia KC 33038　'74年
CD/ソニー SRCS 6292

'69年にVALHALLAなる5人組でアート・ロック色の強いセルフ・タイトルのアルバムをUnited Artistsからリリースしているマーク・マンゴールド(key、vo)が、新たにスタートさせたトリオのデビュー作。オルガンとピアノだけのVALHALLAに比べ、ムーグやメロトロンまで導入した本作は、ずっとサイケ色は抑えられているものの、やはりアート・ロックっぽい雰囲気が所々に感じられる。オルガン・プレイにどことなくキース・エマーソンからの影響が窺えるのも同じ。そういう意味では、このキーボード・トリオでマンゴールドが目差したのは、クラシカルでもジャジーでもないTHE NICEか。(何じゃそりゃ)唯一、⑨のみがリリカルなメロディを聴かせてくれる。何故か本作のみCD化。（奥村）



AMERICAN TEARS
Tear Gas
LP/Columbia PC 33847　'75年

彼等のセカンド・アルバムの紹介である。キーボード・トリオの編成であるが、クラシカルな要素はほとんどなく全体的にノリの良い軽快な曲が収録されており、ギタリストがいないため、当然ソロやバッキングはキーボードが受け持ち多彩なキーボード・ワークが楽しめる。B②は印象的なリフレインが用いられた名曲である。(個人的印象では、イギリスのアージェントが思い起こされた) なお彼等は'74年、セカンドと同傾向のファースト「ブランデッド・バッド」(KC33038)を発表し、サードはセカンドから2年経った'77年に「パワーハウス」(KC34676) が発表されたが、ハード・ロック・ファン、プログレッシヴ・ファンからも評価されない、中途半端な内容になってしまっている。（吉野）



AMIN BATIA (Canada)
The Interstellar Suite
CD/東芝 EMI CP32-5503　'?年

カナダのシンセシスト。ローランドの国際シンセサイザー・コンクールで2度にわたり優勝した経歴を持つ。彼は「スター・ウォーズ」のコピーをすることからシンセサイザーと出会ったという。コンポジションは作曲法的にも、またエレクトロニクスの分野から見ても極めて水準の高いもので、曖昧性のない明晰なアレンジで複雑なヴァリエーションを描き切っている。ただ我々の耳にはプログレッシヴ・ロックというよりは映画のサウンド・トラックふうに聴こえてしまう。全9曲から成るこのアルバムに収録されたタイトルを見てもわかる通り、宇宙船、旅立ち、宇宙の浮遊等、宇宙をテーマにしたスケール感の大きいスペクタル・サウンドである。その後、M.ジャクソン、トト等とも仕事をしている。（山崎）



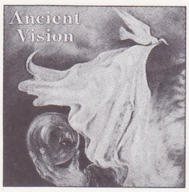
AMISH
Amish
L P/Sussex SXBS 7016　'72年

自然を蝕んでゆく現代文明を一切拒絶し、外界との交渉を断って原始的な生活を続ける集団〝アミッシュ〟。その人々を真近に見て育ったカナダの若きミュージシャン達が、敬意の念をこめて、その名を冠したグループの唯一の作品。楽曲のテーマとの関連性は歌詞がないのでよく解らない。A①に針を落とすと、「おっ、やや軽めでブラス抜きのアフィニティーか、マッド・カリーみたいだな。」と思わせるが、何と女性シンガーはいない。複数のメンバーでリードヴォーカルをとり、その中の1人が女性的な声をしているらしい。演奏技術は高く、A③の中間部の様に、タイトかつ軽快なドラム、スリリングなベースの上を鳴る、長いオルガン・ソロなど、聴き所は多い。英米の名手たちの作品に引けを取らない、味のある好盤。(中)



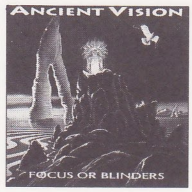
ANANTA
Songs From The Future
L P/Touchstone BBT 115　'80年

アナンタは3枚のLPをリリースしている。どれも一定水準の作品ではあるが、代表作として本作をあげよう。聴き所はA面全てを費した組曲で、めまぐるしく変化するリズム・セクション、多才なキーボード・ワークに加えて、壮絶なヴァイオリン・ソロまでもフィーチュアして、高レヴェルのシンフォニック組曲を演じてみせる。ヴォーカルと全てのキーボードを操るイラン・チェスターは、アレンジとプロデュースまでも手がけ、グループの核になっている。全く素人くささのない安定したパフォーマンスで、聴く者を圧倒するだろう。彼等の作品はイギリスでもリリースされているが、ユーロ・ロックのジャンルではほとんど知られていない。'85年に再発されているので、ぜひ一聴することをお勧めする。(山崎)



ANCIENT VISION
The Vision
CD/(private press) TM-01　'91年

アメリカン・シンフォニックのニュー・フェイス、エンシャント・ヴィジョン。ややシアトリカルで渋みのあるサウンドで、僕はどことなくジェスロ・タルに似ているような気がする。キーボード、ベース、ギター、ドラムスとヴォーカルの5人編成。うわべだけのシンフォニックと違い、自己の内的インパクトを音にしていったような必然性が感じられ、それがとても好印象を与えてくれる。未完成なところも多いが、全体を通して聴くと納得のいくサウンドを聴かせてくれる。とてもいい作品であると思う。渋めのシンフォ系のファンに勧めたい。(山崎)



ANCIENT VISION
Focus Or Blinders
CD/(private press) TM-02　'94年

最後まで聴くのがつらい。最近流行しているのだろうか、思索的ムードを持ったトータル・シンフォニック作……のハズなのだが、どうもシャキッとしないのだ。別に無理に疾走しろとかメリハれ、という訳ではないが、これでは余りにフックが少ない。大曲⑥等に見られる様にキーボードは仲々聴かせてくれるのだが、リズムとヴォーカルが弱い。特にvo.が致命的、声質がダーティ過ぎる。曲作りを根本的に見なおすなり、メンバーを変えるなりして欲しい。実際key以外はどうにも使えない。それっぽい音だから許されるという物でもないんだぞ。冗長作。(中島)



ANGEL
Angel
L P/Casablanca 7021　'76年
CD/Mercury 510955-2
　/ポリスター PSCW 1088

バクスというバンドを母体に、'75年に結成されたエンジェルの1stアルバムである。彼らの最大の名曲A①(良い)、メロトロンの嵐のA②&B②、単なるロックン・ロールにコーラス、メロトロンのイントロを強引につけたA③など、うっとおしい程のグレッグ・ジェフリアの鍵盤群が売り物ではあろうが、パンキー・メドウスの〝ジミ・ヘン大好きローズ指板のストラト〟の音も、このバンドをハード・ロックにとどめていて、捨て難い物がある。この後の「Helluva Band」('76)、「On Earth As It In Heaven」('77：悪夢の来日直前)までが、ユーロファンの限界であろう。例のルックスの為〝華麗なる貴公子〟と呼ばれ、アイドル視され続けたが、音楽指向は完全にブリティッシュに向いていた。真に悲劇の天使といえるバンドである。(川上)



ANGEL
Helluva Band
L P/Casablanca NBLP 7028　'76年
CD/Mercury 510956-2
　/ポリスター PSCW-1089

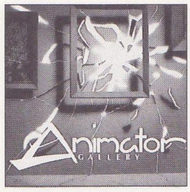
新興レーベル、カサブランカと契約した彼らはワシントンDCからL. A.に拠点を移し、'75年10月に1stを発表(日本発売は'76年3月)。本作2ndは日本で'76年5月に発売された。プロデューサーは引き続き、デレク・ローレンスとビッグ・ジム・サリバン。前作の延長線上のサウンドで、ぶ厚い鍵盤群の壁をバックにした壮大なナンバーと、いかにもアメリカ然としたパーティ乗りの曲が同居している。これが彼らのユニークさでもあった訳だが、シングル・カットされた曲は当然後者のパターンで、ルックスと合わせて誤解と偏見の原因にもなった。ラストには1stに入っていた〝Angel (Theme)〟の別ヴァージョンが再録されている。これは数年後にランディ・ローズがパクった〝Mr. Crowley〟のイントロの原曲である。(川上)



ANGEL
On Earth As It Is On Heaven

LP/Casablanca NBLP 7043 '76年
CD/Mercury 510957-2
/ポリスター PSCW-1090

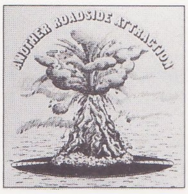
'77年2月に来日記念盤として国内発売された3rd。プロデューサーはエディ・クレイマー。母体となったBUX時代の〝White Lightning〟を除く全てが新曲。本国でのブレイクを狙い、前2作より鍵盤群の使われ方もスッキリとし、大曲も姿を消している。ニュー・エンジェルを宣言する好盤であったのだが……。発売日の翌日、羽田に到着した彼らは結局、京都、名古屋の公演をキャンセルして2週間後に帰国した。原因は呼び屋の倒産であった。これでケチがついたのか人気は一気に下降に向かう。この後bを交代して、「White Hot」('77)、「Sinful」('79)「Live Without A Net」('80)を発表し、解散。G.ジェフリアは、GUFFRIA〜HOUSE OF LORDSを結成している。その間にANGEL再結成の噂もあったが……。（川上）



ANIMATOR
Gallery

CD/Rotamina '90年

市場の巨大さに相反して、純音楽的には暗黒大陸といわざるをえない米国。広すぎる国土と過剰な保守性から、非主流的芸術家が密集して切磋琢磨する風土がない。ヒット作の形式踏襲にかけては世界一の国民性ゆえ、ポンプ・ムーブメントが全土で興こっていたら、どんなに優れた作品が残されたろう。イリノイの片すみから出現したこのバンドが、ポンプ勢の影響を受けたか否かは知る由もない。爽快なコーラス、スピーディーなシンセ、各曲最終部のひと工夫など、捨ておけない要素を持っている。が、代表曲1曲あればいいともいえなくもない。（ミワ）



ANOTHER ROADSIDE ATTRACTION (Canada)
Another Roadside Attraction

LP/ARA '79年

アナザー・ロードサイド・アトラクションという、まるでイタリアのグループの様に長〜いバンド名を持つ彼らは、ダブル・キーボードにベース、ドラムスというキーボード・トリオに準じた編成のグループで、基本的にはEL＆Pやトレースといったグループからの影響が多大なサウンドであるが、バンド・アンサンブル以外の部分である〝静〟の部分は、エアー・クラフトやハッピー・ザ・マンが持つ映像的な静の空間表現やピアノの奏法等の共通点を持ち、リタン・トゥ・フォーエバーらのプログレッシヴなフュージョンからの影響も加わっている。カナダという土地柄。フランスの香りのするグループが多い中で、彼らは明確にアメリカ大陸のプログレッシヴ・ロック・グループであり、かなり洗練された高レベルな作品に仕上っている。（N. Ueno）



AQUARELLE (Canada)
Sous Un Arbre

LP/Atlantic KCA9503 '78年

こういう、思想的にも技術的にも特に革新的な所はないが、しかし、素晴らしい「音楽」に関してとやかく言うのは、形容詞の羅列になりがちで、あまり好ましいものではない。ジャケット裏の写真を見る限り、メンバーは皆若く、何人かは十代なのではないかと思える程だが、そのことがかえって、才気に満ちた若々しい情熱とみずみずしい情緒性となって現れているようだ。内容の方は、スピード感と多彩な展開を伴なったジャズ・ロックで、ヴァイオリンと女性ヴォーカルが前述の情熱と情緒を感じさせる。音楽性は全く異なるがラッテ・エ・ミエーレの1st等を想起される方も多いのではないか。なお、2ndはライヴで、1stである本作には、ジャケ、ラベル共に微妙に異なるものが数種存在する。再プレスを繰り返すだけの出来には違いない。（森下）



ARCANGEL
Arcangel

LP/Portrait BL 38247 '83年

ドラムスを本職としながらも、リード・ヴォーカル、各種ギターもこなすマルチ・プレイヤー、ジェフ・カンナタを中心とするプロジェクト・ユニットのファースト。もう、絵に書いたような〝アメリカン・プログレ・ハード〟サウンドが全編に渡り、透明感のある音像の中、キャッチーなコーラス、BOSTON風ギター・フレーズ、シンセサイザーによるアクセント等、ハイ・クオリティながらもポップでお約束ともいうべき楽曲ばかりが詰め込まれている。そんな中でも耳を引くのは、やはり明るいだけでなくリリカルなメロディとコード進行を持つA①、B⑤だろう。その後、このユニットはCANNATAと名義を変え、'88年と'93年にそれぞれアルバムを発表しているが、基本サウンドは殆ど変わっていない。（奥村）



ARCANE
Destination Unknown

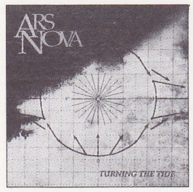
LP/Wild Rags WRR 027 '90年

テキサス出身のツイン・ギターの5人組のデビュー作。結成当初は専任シンガーがおらず、メイン・ソングライターでギタリストのバイロン・ホークがヴォーカルを兼任していたようだが、2本目のデモからリード・ヴォーカリストが加入し、本作では2代目のオスカー・バボアが歌っている。基本ラインはスラッシュ寄りのパワー・メタルなのだろうが、とにかくそこから発展させた〝複雑でテクニカルなこと〟がやりたくてたまらないに違いない。それ以前に、WATCH TOWERを師と仰いでいることもThanksリストから分かる。ところが悲しいかな、彼等の場合、テクがとても追いつかないのだ。まあ、メロディはいいもの持っているので、後は今後の精進次第。今年に入って、ミニ・アルバムを発表したらしい。（奥村）



ARCHITECTURAL METAPHOR
Odysseum Galacti
CD/Arc Met Music AM2001　'94年

g、key、dsの編成での3～4人からなるユニット。もろホークウィンドのシンパといったスペース系。'89年から'92年にかけては6人編成だったようだ。現在は3人。自主製作のりのチープさがホークス系スペース感をマニアックにイコライズしており、B級の持つまどろっこさやウダウダとしたまとわりつきが色濃く出る。ソリッドにコズミックにソニックなわけでもなく、ダンサブルにテクノになるのでもない、なにかあと味の悪さが残るような、ベチョッとしたスペース感に溢れたものだ。一言に趣味の悪さとかダサさと言ってしまえばいいのかもしれないが、これが延々と続くと、それなりに聴こえてくるからタチが悪い。基本的にシンセ系＋ソニック・ギターのサウンド。それも相当マニアックな内容だ。　（松本）



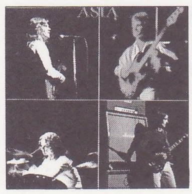
ARS NOVA
Turning The Tide
CD/Europadisk MZ12AT7　'93年

ニュージャージー出身の5人組。(vo)、(g)、(key)、(b)、(ds)の編成のとおり、シンフォニックなアレンジを施したストレートな曲調が目立つ。売りは、メロディ・ラインということになる。が、しかし、そこに抜きん出たものがないのだから、アピール度は低い。それでもアコ・ギを散らしたり、キーボードのバッキングで雰囲気をつくったりと、ながくこの種の音楽を聴いてきたリスナーならば、射程距離内には入るだろう。一通り聴いてオランダのSIミュージックから出てくるメロディック・ロックを思い出す。同じくヴォーカル・メインの曲作りだ。ギターのリード部がもう少し前に出てきてもいいタイプか、と思わせるが……。　（松本）



ART LANDE
Rubisa Patrol
L P/ECM 1081　'76年
CD/ECM 519875-2
　/ポリドール POCJ-2217

'73年にECMからサックス／フルート奏者ヤン・ガルバレクとの連名による「Red Lanta」でデビューしたアート・ランディは、NY州出身とは思えない程、ヨーロッパ的な硬質の美意識と叙情を紡ぎ出すピアニストである。2作めに当る本作は、自己のグループRUBISA PATROLによるもので、メンバーは当時無名の若手だったマーク・アイシャム（tp、flgh、sax）ビル・ダグラス（b、fl、bamboo-fl）グレン・クロンハイト（ds、perc）。尺八のソロに導かれ、パーカッション、ピアノ、トランペットが幽玄な世界を描き出すオープニングからも彼の類稀なセンスが窺える。中国やブルガリアの民族音楽、クラシック、ロック等の要素を取り込んだ静謐で牧歌的な響きは、レデリウスのソロにも通じる美の一つの極と言えよう。　（高山）



ASIA
Asia
CD/The Wild Places WILD 001　'79年

サウス・ダコタ州ラピッド・シティで'68年から'76年まで活動していたWHITEWINGというバンドの2人のメンバーを中心に、'77年初頭に結成されたASIAの1stアルバム。'79年に自主制作で発売された本作、ブリティッシュ・ハード・ロックを愛して止まないアメリカのローカル・バンドの気持ちは確かに伝わってくる。特にバラード系、シンフォニック・ロックの気性を持った泣きの入る曲では彼らの持ち味が発揮されている。物哀しげなコーラスが印象的。2nd発表後もメジャー・バンドのオープニング・アクトの域を出ないまま、英国産ASIAの登場による名義使用権利問題で'83年初めには活動停止を余儀なくされている。インナー・スリーヴにはその辺りの事情がバンドのリーダー格によって詳細に記されている。一読を。（川上）



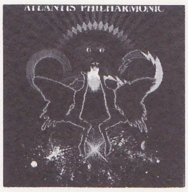
ASIA
Armed To The Teeth
CD/The Wild Places WILD 001　'80年

ドラマーが交代し、'80年にリリースされたセカンド・アルバム。リーダー兼コンポーザーのマイク・コルテス（g、key）にとっても納得のいく作品となったようで、事実楽曲のパワーは前作の比では無い。全編に響き渡るメロトロンゆえにマニアの間で高値を呼んだらしいが、その導入はあくまでドラマ性を（過剰なまでに）演出する手段であり、本質はブリティッシュ志向のコテコテHR。勇ましいオープニング曲から空中戦そのままに疾走する〝カミカゼ〟、果ては〝ジンギス・カン〟と余りに分かり易い一本気な情熱には失笑やモンド的意味を飛び込えて感動してしまう。様式美やドラマ性をクサ過ぎる程盛り込んだ楽曲群は、これぞ男気、の力技。バラードを含め剛／軟を歌い分けるヴォーカルも透逸。本作をもってバンドは消滅。　（中島）



ASTRË
Foresight
L P/Akustic　'81年

アメリカ南部、オクラホマ州出身のキーボード・トリオ、アストラの多分随一と思われる作品。'81年録音の自主製作盤。LP A面は6分台の曲が4曲、B面は9分台と13分台の組曲から成っている。基本的にはELPを思わせる音作りで、ハモンドが仲々良い音を出している。通常この手のバンドはキーボード奏者が主導権を握るが、ベーシストもかなり曲作りに参加しており、B①の良く歌うベース・ラインを奏いている。A③はライヴ録音でキーボード奏者がギターを弾いており、仲々の腕前でラッシュが〝太陽で戦慄パート2〟を演っているかの様である。完成度は高いのだが、静の部分での艶っぽさや、アレンジに若干不満が残り、聴いた後での印象が今一なのが残念。
（高橋）



ATLANTIS PHILHARMONIC
Atlantis Philharmonic

LP/Dharma 802　'74年
CD/The Laser's Edge LE 1005
　/マーキー MAR 9117

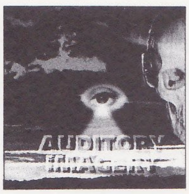
'74年にDharmaなるマイナーレーベルから発表されたアトランティス・フィルハーモニックは、グループと思われがちだが、実際はkey、vo、g、bを兼任するJoe DifazioとdsのRoyce Gibsonのデュオ（二人共スイス人という説がある……）から成るグループである。サウンド面はアメリカ臭さはほとんど無く、純粋なブリティッシュ・ユーロ・ロックナイズされた、オルガンをメインとするキーボード群にハードかつヘヴィな旋律のギターが聴き処で、一冊の冒険譚を思わせる内容の如きサウンドがそのままイメージされたかの様なカヴァーワークも必見である。イタリア系にも負けず劣らずのヘヴィ・シンフォニック屈指の傑作である。（大関）



ATTILA
Attila

LP/Epic 30030　'70年
CD/(Ger.)Sony 472484-2

'60年代末にTHE HUSSLESにて2枚のアルバムを残したビリー・ジョエル（vo、key）&ジョン・スモール（ds）が'70年に結成したヘヴィ・オルガン・デュオの唯一のアルバム。もう、のっけからバリバリにヒズんだハモンドB③のハード・サウンドの嵐なのだから、今の〝ピアノ・マン〟しか知らない人にとっては〝目が点〟どころではない。恐らくナイスやアトミック・ルースターみたいなことを、もっとヘヴィな音像でやろうということなのだろうが、ベースレスの上に殆どライヴ・レコーディングなもんで、荒々しくも生々しいプレイは、ジョン・ロードも〝マイッタ〟という感じか。特に二部構成のインストA④は圧巻！　当時の邦題は『フン族の大王アッティラ』だった!!（奥村）



AUDITORY IMAGERY
Reign

CD/ゼロ・コーポレーション XRCN-1165
　'92年

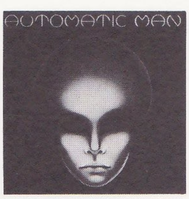
マサチューセッツ出身の5人組のデビュー作……というか、'92年発表の6曲入ミニCDに、'88年制作の5曲入デモの全曲をプラスしてフル・アルバムにしたもの。FATES WARNINGからの影響が強いことは収録曲を聴けば分かるだろうが、彼等の場合、KING'S Xのようなアメリカのメインストリームでも受け入れられるタイプのバンドからもインスパイアされていることで、よりメジャーな方向性も有していることが窺える。細かなリズム・アレンジの上に乗るギターは飽くまで繊細でヘヴィ過ぎず。それでヴォーカルが線の細いハイ・トーンとくれば、いかにもという感じだが、決して没個性的ではない。'95年発表のセカンドではより洗練されるも、既に彼等ならではの音は確立されたようだ。（奥村）



AWFUL TRUTH
The Awful Truth

CD/Metal Blade ZORRO 3　'90年
　/ポニー・キャニオン PCCY-00140

ミズーリ州出身、後にテキサスへ移動し活動するトリオが残した唯一の作品。KING'S Xを手掛けたサム・テイラーのプロデュースというだけに、例えば、そのコーラス・アレンジ等に初期KING'S Xと共通する要素を見出すこともできよう。ギタリストのディヴィットは、'70年代のブリティッシュ・プログレから強い影響を受けたと公言していたが、確かに彼の作る曲やギターのプレイからは、根底に流れるブリティッシュ・テイストを感じ取ることができる。様々な意味でフランシス・ダナリーとの共通項を持ったプレイヤーだと思うのだが、そのリズム隊や、勿論本人も兼ね備えている〝アメリカ的要素〟とのブレンドが成されることで、独自のサウンドが生み出されていた。尚、本作発表時に既にバンドは解散していた。（芦沢）



AUTOMATIC MAN
Automatic Man

LP/Island ILPS 9397　'76年

黒人キーボーディスト、ベイエットを中心とする4人組のデビュー作。ベーシストも黒人プレイヤーで、ギターはかのパット・スロールである。サウンドは、ジミ・ヘン風のギター・ワークが前に出た、ややサイケがかっているもののメロディにキャッチーさも感じられるHRで、そこにSF的なシンセが絡むことで、独特の雰囲気を演出していた。A①〝Atlantis Rising Fanfare〟で始まり、B⑤〝Atlantis Rising Theme〟で終わることから、コンセプト・アルバムの可能性もある。また、リード・ヴォーカルも兼ねるベイエットの声質がフィル・ライノットを思わせるのも特徴だ。翌年、色違いだが、同じジャケット・デザインのセカンドを発表。リズム隊がチェンジしていたが、黒人(b)＋白人(ds)という点に変わりはなかった。（奥村）



AUTUMN PEOPLE
Autumn People

LP/Soundtech SO-3020　'76年

g、key、b、dsの4人組。ウエスト・コーストっぽい明るさのあるビート・サウンドをベーシックに、キーボードがストリングスをやったり、ギターがすっきりとしたメロディックなソロを速弾きしたり、とサイケ・ファン、プログレ・ファンの狭間に落ちてしまいそうなアルバム。一番、埋もれそうなタイプの内容だ。キーボードのバッキングはシンフォニックなのにリズムもヴォーカルも軽く流れがちなのが、どっちつかず。B②あたりのリズムレスもしくはスロー・テンポな曲でのしみじみとした曲想では、まぁなんとかこの編成も効果ありという程度なのが残念。コーラスっぽいシンキングが全曲に及んで、曲のカラーリングも、もう一つはっきりしない。（松本）



AXE
Living On The Edge
ＬＰ/MCA-3224　'80年
CD/アルファ ALCB-809

テキサス出身の５人組のセカンド。彼等もまた、JOURNEY、KANSAS、STYX等の商業的成功後のデビュー組らしく、所謂〝アメリカン・プログレ・ハード〟的音像の中でキャッチーな小曲中心のデビュー作を'79年に発表。本作ではより楽曲をタイトにコンパクトにしてはいるものの、その絶妙なアレンジ・センスにより、ありきたりのハード・ポップスにしていないところは流石だ。この手のバンドが長尺のバラードで泣かせるのは常套としても、本作において特筆すべきは、〝３分15秒のプログレ〟たるドラマティックな佳曲②の存在である。次作以降、よりメタル寄りになっていくが、４作目発表後、'84年にメンバーの交通事故死により解散。'88年等一度再編されるも、うまくいかなかったようだ。（奥村）



BABYLON
Babylon
ＬＰ/Mehum Music 4641　'?年

ジェネシス影響下のグループは当然の如くアメリカにも存在しているもの。70年代末期に生み落とされ、イギリスのENGLANDと双璧を成すと言われるバビロン唯一の作品は、ダブルkeyに、vo＆b、g、dsの基本的な５人編成で、予想よりも比較的お国柄を反映した軽めの印象を与える曲想ではあるが、ガブリエルをやや意識した様なヴォイスに、ブラッフォードからの影響を思わせるドラミング、ツインにおける疾走感とスリリングさとが融合されたシンセ系統の重厚感溢れるアンサンブル……etc、往年のシンフォニック系大名盤に慣れ親しんでこられた方々にも大いに受け入れられる、しいて言うならば全盛期のイーソスが持っていたエッセンスを継承した純粋アメリカン・シンフォニックの好サンプルとも言えよう。限定作品と思われる。（大関）



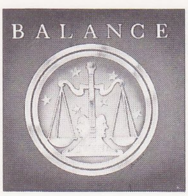
BABYLON
Live Vol. 1
ＬＰ/Syn-Phonic 001　'89年('78年録音)

'79年の唯一のLPをリリースした、アメリカのジェネシス・タイプのグループ、バビロン。以前、日本にも少量入荷したので、御聴きになった方は、彼等の演奏力／表現力に驚かれたに違いない。そんなバビロンの当時のライヴ・アルバムがリリースされた。レーベルはその名もずばりSYN-PHONICといい、このレーベルは今後も続々とこの手の作品をリリースしていくはずだ。このアルバム、バビロンの演奏力もさることながら(もちろんアルバムからの曲＋未発表曲から成る)、比類ない幻想美を誇るカヴァー・ワークにも注目してもらいたい。森の奥にたたずむ夢の城を描いたこの画家は、今後のこのレーベルのカヴァーをほとんど手がけるという。過去の作品が発掘されてきているアメリカだが、今後のリリースにも期待が高まる。限定プレス盤。（山崎）



BABYLON
Better Conditions For The Dead-〝Live At The Empty KEG 2〟
ＬＰ/Syn-Phonic SYNPHO 2
'89年('78年録音)

こちらがライヴのパートII。アルバム収録曲２曲(Ａ①とＢ②に収められていたもの)と未発表曲４曲が演奏されている。Vol. 1と同時に録音されたものと思われ、マイク一発録りの様な音質のキツさに目をつぶればかなり楽しめる内容になっている。アルバムに比べて演奏自体は全くひけを取らず、チャカチャカしたせわしないリズムとツインKeyの妙、シアトリカルなムードと売りの要素はきっちりクリアー。最もバビロンらしい〝Dreamfish〟をVol. 1に持っていかれている為楽曲が多少地味だが、スライドや芝居がかった感じのヴォーカリスト等、もろジェネシス系ステージ写真をながめつつ聴くと仲々想像力を刺激してくれる。スタジオ作にしろプロダクションに恵まれなかったのが惜しまれるだけの実力を持っていたバンドだ。（中島）



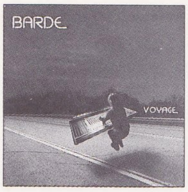
BALANCE
Balance
ＬＰ/Portrait NFR 37357　'81年
CD/Portrait 4694422

数々のセッション・ワークで知られる実力派ギタリスト、ボブ・キューリック（KISSのブルース・キューリックの兄）が在籍していたアメリカン・プログレ・ハード・バンドのデビュー・アルバム。キーボードとヴォーカル・ハーモニーを基調とした爽やかな音像のハード・ポップ・サウンドが全面展開されている。この当時にありがちなサウンドと言ってしまえばそれまでだが、ハードさと透明感が同居したＡ⑤を筆頭に軽快なドライヴ感が魅力のＡ②や哀愁を帯びたメロディが印象的なＢ①など佳曲は多く、この手のタイプが好きな方には自信をもっておすすめ出来る高品質な作品である。それにしても昨今の再発ブームの中にあって、このアルバムが日本盤でCD化されないのは不思議な気がする。（石原）



BARDE (Canada)
Images
ＬＰ/Polydor 2424 188　'77年

'77年にセイム・タイトルで１stを発表。泥臭さのかなり残るトラッドで、手元にあるのも５年以上シールドのままだったりする（ジャケは茶系と緑系の２種存在し、確かに茶系の方がオリジナル)。本作は２ndで、大上段に構えて誉め上げる様なものではないが、一転して臭味が脱け充分に楽しめる作である。本稿のために聴き直していて、何故これがシンフォニックのセクションに入るのか少々疑問に思わざるを得ない。ポリムーグの使用があるものの全然目立たず、完全にトラッドである。恐らくL'ENGOULEVENTが人気を博してフレンチ・カナダのトラッド系が発掘される様になったためだろうと思うが。トラッドとオリジナルが半々位入り、ヴォーカルは男性だが魅力的。アメリカ盤も出ているが、内袋が無かった様に思う。（森下）



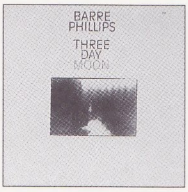
BARDE
Voyage
LP/Porte-Parole PTMP-1982-5
'82年

夕闇迫る道路上を飛行するミキサー卓とミキサーのジャケット。シンセ物だと思った、とは吉瀬氏の弁である。しかしコレクターはジャケ裏にあるタマノワール（L'ENGOULEVENTで知られるレーベル）のマークを見逃さないのであった。2ndから4年経ちメンバーも1人を残して全て変わっているが、その甲斐あってか非常に素晴らしい出来。一曲を除き全てオリジナルとなり、ドラムスとシンセ類のあからさまな使用及び要所要所でキメてくれる艶やかなヴァイオリンが、本作を私達にとって受け入れ易いものにしている。B・フェリーとM・ピンダーを混ぜた様なよく震えるヴォーカルも実に味わい深い。強いて言えば線の細いガロルーの1stという感じで、そのガロルーの1st、ラングルヴァンと共に最大の愛聴盤である。（森下）



BARRE PHILLIPS
Mountainscape
LP/ECM 1076 2301 076 '76年
CD/(Ger.)ECM 843167-2

彼のように楽器片手に世界のシーンを渡り歩くタイプのミュージシャンに国籍もジャンルもあった物ではないが、その分、こう言った集成の作業ではどこからもこぼれ落ちてしまう危険がある。J.サーマン、S.マーティンと言ったザ・トリオ時代の同僚2人にシンセサイザーのディーター・フィヒターの4人（一曲のみギターにジョン・アバークロンビーが加わる）による本作もこの時のこのメンバーのみに可能な音をただ奏でるのみと言った趣きのもの。メンバーはザ・トリオに近いが、瞬間の火花の散らし合いと言うよりは四者が融合して滔々とした流れを造る。シリアスながら無理なく落ち着いた感触。叙景的ながら、ただうわっ面のメロディに取らわれない達意の作品。（中西）



BARRE PHILLIPS
Three Day Moon
LP/ECM 1123 '78年
CD/ECM 847326-3 847326-2

バール・フィリップスは確かにアメリカ人だが、もうずうっとヨーロッパで活動しているので、ここに採り上げるとちょっと違和感がある。彼の最高傑作は同じくECMからの「Mountainscapes」だと思うが、この「Three Day Moon」もなかなかの好アルバムだ。何しろ、参加しているのがテリエ・リピダル(g,g-syn,org)、トリロク・グルトゥ(perc)、そして前作にも参加していたディーター・ファイヒトナー(syn)と来る。リピダルのカラーは非常に強く、ジャケットさながらの冷たい北欧のイメージがアルバムを支配している。バール・フィリップスはフリー・ジャズ・サイドでの活動が多いベーシストだが、こういう確固とした音楽を芯に持っているミュージシャンなのだ。（坂本）



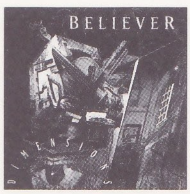
BAXTER
Baxter
LP/Paramount PAS 6050 '73年

アメリカのプログレッシヴ・ロックの波は、'75年以降に本格的となるが、それ以前となると、やはりサイケデリアによって隠されている部分が多い。このバクスターは、'73年制作ながら、余りサイケ色を感じさせない好アルバムを唯一パラマウントに残している。それはギターよりもメロトロン、オルガン、シンセサイザーを多用している所に感じ取れるが、9曲中3曲が何の変哲も無いロックなので、幾分印象を薄くしている。しかしながら、それ以外の曲は意欲的に展開され、聞き応え十分なヘヴィーな作品が多い。特に7分を超えるA③やB①は、かなり純度の高いプログレッシヴな作品で、オープニングから大担なメロトロンを使用し、雷で幕を明ける所など、ついつい拳に力が入ってしまう。（田中）



BEAUSOLEIL BROUSSARD
(Canada?)
Le Mitan Du Sieck Qui
Sén Vient
LP/CBS/Léscorgot PFC90563 '79年

ジャン・ピエール・アラルサンのソロやフランソワ・ベランジェの作品群で知られるレスカルゴ・レーベルのカナダ盤。グループ及び参加メンバーに関する資料はなく、フランスあるいはフランスとカナダの混合チームの可能性もある。しかし、知名度こそないものの、ヴァイオリン、ピアノ、アコースティック・ギター等を使って4人のメンバーが作り出したサウンドは中々に魅力的である。本質的にはフォーク・ロック・グループで、カントリー・ウェスタン調の部分もあるが、クラシカルな演奏やジャジーな演奏を織り混ぜ、変化に富んだ音を作り出している。セギンやカノ等に共通する、クリアーでゆったりとしたサウンドは、正にフランス語圏カナダのものである。（賀川）



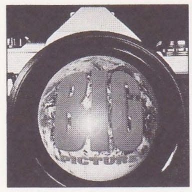
BELIEVER
Dimensions
CD/Roadrunner RR 9101 '93年

ペンシルヴァニア出身のクリスチャン・バンドのサード。元々はデス・メタル寄りのスラッシュ・バンドとしてスタートした彼等は、'90年発表のセカンドでMEKONG DELTA的変則リフを本格的に導入すると同時に、ストリングスとソプラノを配した〝讃美歌スラッシュ〟とも言うべき実験曲「Dies Irae」を披露。本作は、その両方のアイディアをさらに広げ、深く実践してみせた意欲作だ。何とメンバー・クレジットには、セカンドにも参加していたヴァイオリン奏者とソプラノ・シンガーに加え、チェロ奏者までを列記。そのスラッシュ・サウンドとの共演は、⑦をイントロとする⑧⑨⑩の三部作で爆発する。出来の方はまだまだ混沌としていて〝とりあえずやった〟という感じだが、それなりの緊張感はあり。（奥村）



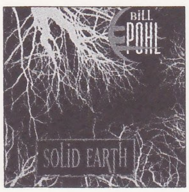
BERTRAND GOSSELIN、JIM CORCORAN(Canada)
A Labri De La Tempete
ＬＰ/Kebec Disc KDL 965　'79年

彼らはケベックのTrad／Prog. Folk系の重鎮でありながら何故か日本で全く紹介された事がない。ケベックがCANO、GAROLOU、ORIENT D'Ô、CONCERT、ETERNITE程度の水準でしかないと思うのは大間違いで、それは本作を聴けば一目瞭然だ。彼らはこれまでに少なくともKebec Discに１枚、B•Gosselinのソロは２枚以上あり、その中で本作の出来が一番良いだろう。殆どクラシック・ギター２本とヴォーカルで地味ながら多彩な演奏を聴かせる演奏のＡ面、旧作の所々で見せたのと同じくハッとするようなフルートや弦が奏でるメロディーとギターの対比が美しくＢ③、ストリングスに包まれた歌もののＢ④等良く出来ている。SageからのLP、Ｂ・Gosselinの初期も見逃せない。　（奏田）



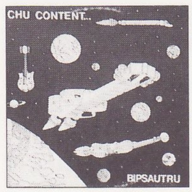
BIG PICTURE
Big Picture
CD/Drysdale DR-9301　'94年

おそらくは米国イリノイ州のバンド。本作がデビュー作と思われ、自主制作の可能性が高い。バンドはvo＆ｇを含む基本編成の５人組。７曲中５曲でプロデューサー自身がベースを担当している。全体のテイストはラッシュあたりの路線も感じさせるシンフォニック・サウンド。ドライブ感を強く押し出しておいて、突如、静の叙情に切りかわる展開がところどころで見られ、それなりのセンスはあるように思う。といっても、ペンドラゴンやギャラハドあたりと比較すると、特筆すべき極立った１曲がないように感じられる。しいていえば最終曲か。　（ミワ）



BILL POHL
Solid Ear
CD/Crunchy Songs LDCD2　'92年

ジャム•カレットの最近作に似て、サウンドの切れが素晴らしい。もちろん演奏力もあってのことには違いないが、まず感覚の鋭敏さを感じさせる。このアルバムの最大の魅力は、そこにある。この人は、同じレーベルの第１弾としてリリースされたKurt Rongeyのアルバムに参加していたが、どちらのアルバムにも共通しているのが、この鋭敏さだ。今回はドラマーとのデュオで兼任し、vo、g、b、dsの楽器給成になっている。リズム・セクションとギターの絡みが凝っていて、各所に切れ味鋭いタイミングのプレイがあり、複雑なはずなのにシンプルに聴かせる。そうして作り出されたソリッドさに入ってくる彼のジャズ・センスのギター・ソロがまた非常に的を得ていて、ブラッフォード張りのドラムと共に魅力だ。　（松本）



BIPSAUTRU (Canada)
Chu Content
ＬＰ/ME　'?年

オタワに隣接した美しい小都市ハルのグループ。いかにも自主盤的などんづまった内容の様に思えるが、よく聴くとそうでもない。逆に素朴な持ち味が魅力。笛、ハーモニカ、ヴァイオリン、アコースティック・ギター、マンドリンを使いトラッドをベースにしながらもケベック独特の瑞々しいフォーク・プログレッシヴ・サウンドを生み出している。何曲かで聴かれるヴォーカルはアクが強すぎるが、Ａ③の感じは良い。派手な展開やシンフォニックを好むリスナーには全くアピールしないが、素朴で手作りの温かさで作られたフォーク・プログレが好きな人には聴き込めば良さは伝わるだろう。　（奏田）



THE BIZ (Canada)
A Matter Of Wine
ＬＰ/Bent WRCI-1749　'78年

キーボード、ギター、ベース、ドラムの４人編成に依るバンクーバー出身のカナディアン・ハード／プログレッシヴ・アルバム。あくまでヴォーカルに重点をおいたメロディアスでポップな作品だが、ハード・ロック的なギターと全編弾かれるオルガン、曲間でリードをとるシンセと小粒だがバランスのとれた出来の良い作品。特に演奏面での聴き応えがある曲はＡ④〝Last Chapter〟とラスト・ナンバー〝Love Leaves On Time〟だろう。'70年代初中期のカナディアン・ヘヴィ・プログレ・スタイルが初期FOOT IN COLD WATER、Axeレーベルに代表される〝音圧があり多少サイケデリックな感じ〟なら、本作は'70's後期らしい、より洗練されたスタイルの正統派。　（奏田）



BLACK SEPTEMBER
Black September
CD/(Ita.)Mellow MMP 264　'94年

米ZNRからソロを発表した（覚えてる？）マイケル・ウェスト率いる新バンドの１st。ソロに見うけられた過剰なkeyゴリ押しは影をひそめ、バンドとしてのバランスの上で、ここぞという時に技を出す。vlnの参加が耳を魅きつけるが、タイプ的にはカンサスというよりは３連HRノリにELP的テクニカル・アンサンブル＋ヴォーカル・パートで高揚感を持たせる、というもの。全体的にストレートだがラスト曲のようなたたみかけ（見事！）もあってＢ級臭さは無い。いかにもアメリカ然としたスカッとした抜けがあって、HR系リスナーに受けそう。次作も期待。　（中島）

BLONDE ON BLONDE
Contrasts



LP/Embar NR5035 '69年
CD/See For Miles SEE CD 406

アメリカ人の4人組ブロンド・オン・ブロンドは'60年代終盤に英国に渡り、Emberレーベルから3枚のアルバムを発表している。本作は彼らのデビュー盤で金髪女性の背中を這い上がる毒グモを描いたカヴァー・デザインが話題にもなった。サウンドは'60年代サイケデリック、アートロックの薫りを色濃く残したもので、プログレッシヴな展開は殆ど見られない。ひずみの大きいギターサウンド、乾き切ったドラム音等、かなり荒削りな部分も認められるが、ハープシコード、チェレスタ、シタール、コルネット等の導入、生楽器とエレクトリック・サウンドの巧みな使い分けにより、英国ロックが好きな人なら、さ程違和感無く溶け込めそうなサウンドを作り上げている。オルガンを多用していないものも特徴で、次作ではより体裁の整ったサウンドが聴ける。　（江田）

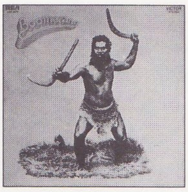
BLONDE ON BLONDE
Rebirth



LP/Embar NR 5049 '70年
CD/((Ger.)Repertoire REP 4239

CDのライナーに〝Guy From Wales〟とあるのが少々気になるが、ともあれEmber英国原盤の2作目である。新たにヴォーカルにデヴィッド・トーマスを迎え、まさに再生をアピール。'60年代を引きずったサイケデリック／アート・ロックが全面的に展開されているが、専任key奏者不在のため、主役はヴォーカルとトゲトゲしいファズのかかったギターである。時代を感じさせるエコーの効き方、ポップでキャッチーなメロディの曲からサイケ色を前面に押し出した大作まで極めてブリティッシュな音である。voの声質はどこかクリシダを思わせるもので、コレがイイ。全体的にソツなくまとまっているが時代を突き動かす程のパワーが感じられないのが残念だ。次作発表後メンバーは音楽界から身を引いた。7曲目が秀逸である。（中島）

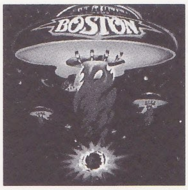
BOOMERANG
Boomerang



LP/RCA LSP 4577 '71年

ジャケのダサさが半端じゃない。責任者の顔が見てみたい。が、これにだまされてはいけない。元ヴァニラ・ファッジのKey奏者マーク・スタインを中心としたハードロック・バンド唯一の作品。驚きなのはギタリストがバンドに参加した時まだ15歳だったという事だ。とてもそうは思えない堂々としたプレイを聴かせてくれる。リズム隊もタイトで、実力的には申し分ない。実にヘヴィーなA①は強力。オルガンが大活躍するB③やB①、ストリングスを導入した意欲作B②等、聴き所は多いが、他の曲とのクオリティの差が印象を多少弱めている。録音もこの時期としてはレベルが高いし、A①B③路線で押せば、ライバルのカクタスにも充分勝てたであろうに、この一枚で終わってしまい残念。（やっぱりジャケか!?）　（中）

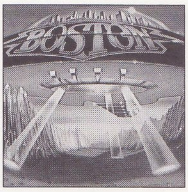
BOSTON
Boston



LP/Epic BL 34188 '76年
CD/Epic 34188
/エピック・ソニー 25-8P 5192

アカ抜けたメロディ・センスでチャートに踊り出たこのアルバムは、少しクイーンが出てきた時の「一歩フッ切った」感覚なんかに似ている。ベタ塗りのポップスに陥ることのない練り込まれた曲は、どれもこれも細かな部分まで息の届いたものだ。それまでの「アメリカ」に欠けていたものは多分こうした気配りのようなことなのだ。出しっぱなしってやっぱり色気に欠ける。ボストンはそのへんでインテリ入ってて、曲の裏地にうるさい。引きの部分やバッキングのちょっとした所にはトム・シュルツの目が光っており、ただではメロディ、全開にしない。だから出たサビには人一倍の開放感があってしかも押しつけがましくなく、そしてメロディが残る。〝Hitch A Ride〟なんて隠れた傑作もあった。ホント、捨て曲がない。夢見れるよ、これ。　（松本）

BOSTON
Don't Look Back



LP/Epic EF 35050 '78年
CD/Epic FE 35050
/エピック・ソニー ESCA 5211

1stから2年後の'78年8月に発表（全米）された2nd。作詞、作曲、編曲、プロデュース、エンジニアを全てリーダーのトム・ショルツが担当。録音、1年2ヶ月に及ぶミックス・ダウンは彼の自宅地下のスタジオで行なわれた。1stでの共同制作者、主にウエスト・コースト系アーティストのプロデュースで知られるジョン・ボイランはアドヴァイス程度のクレジットになっている点でも、ショルツによるボストン・サウンドは本作で完成した感がある。'79年4月には、怪しげなパイプ・オルガンもどき？　をバックに配したステージ・セットとともに来日を果たしたが、その後、'86年まで沈黙する。その間、もう1人のg、バリー・グドロウは元HEARTのds、マイク・ドロージャーらとORION THE HUNTERを結成している。　（川上）

BOSTON
Third Stage



CD/MCA MCAD 6188 '86年
/MCAビクター MVCM-21008

契約不履行（そりゃそうだろう）によるCBSとの裁判ざたを何とかクリアし、MCAに移籍。堂々〝8年周期説〟を打ち立てたサード・アルバム。初回入荷でプラチナ・ディスクは当たり前、当然のようにチャート1位。ショルツとデルプのみのユニットと化したボストン号、制作に一万時間（またか）かかったという大作も、どこに時間がかかったかは謎である。ヒットした〝Amanda〟を始め普遍のボストン節なれど、よりクリアーでポップなAOR色を強めているあたり時代性である。それでも宇宙的イメージのインスト⑥や⑨の泣き泣き盛り上がりコーラスには胸ときめいてしまう人も多いはず。当時洋楽に入門した者にとってはこれが最初のボストンであり、ロック入門編として思い出に残る佳作。次まで本当に8年かかった。（中島）



BOUNTY
Bounty
LP/Harts H755　'81年

BOUNTYと言うアメリカのグループは、キーボード担当のSteven Hartmanを中心とする、キーボード・トリオ。10分程の大作が3曲収録されているが、録音はリリース時より4年古く、'77年とクレジットされている。自主制作らしさを丸出しにしたジャケットの様に、オープニングの安っぽいピアノのソロが気に入らないが、ものの1分もしない内に、〝テクニカル・トリオ〟らしさが全編を覆う。ほんの少しゲスト参加のギタリストも加わり、3曲全てがそれ相当の盛り上がりを見せてくれる。（田中）



BRÉCHE (Canada)
Carapace Et Chair Tendre
LP/Tamanoir TAM-27015　'?年

EN ALLANT VERS... の項を先に見て欲しいが、レーベルだけを頼りに買った一枚。こっちの方はかなりいい線いっておりラングルヴァンに近い雰囲気。トラッド色はあるが全曲オリジナルで哀愁たっぷり、ピアノ、フルート、ヴァイオリンは非常にクラシカルな使われ方をしており、またエレクトリック・ベースの使用が全体をぐっと引き締めている。本誌の松本氏はシングル・ヴァージョンをシンフォニックだと断言していたが、その伝に従えば本作もまたシンフォニックであるに違いない。特に1、2曲目のフルート・ソロ、ヴァイオリンをピアノのアンサンブル等、イタリアのクラシカル・ロック全盛期を思い起こさせる。プロデューサーはバルドやアナランヴェール等と同じ人物で、共通の人脈を持った当時のシーンの存在を伺わせる。（森下）



BREGENT (Canada)
Poussiere Des Regrets
LP/RCA PCS 4021　'73年

正確にはブレジャンだが日本ではブレガンと発音されている彼の1st。バックの音をギリギリまで絞り込んでヴォーカル・パフォーマンスを聴かせる、C・リベロあたりに近い作風で、ヴォーカルそのものはブルージーかつシリアスな、かのE・ブーズをも凌駕する物凄いものである。その声の持ち主ジャック・ブレガンは3兄弟の長男であり、本作のアレンジ及びキーボードを担当しているミシェル＝ジョルジュ・ブレガンが次男である。現在では2人共ロックのフィールドでは活動しておらず、弟の方はクラシックを、兄ジャックの方は何と、高校の教師をやっている。モントリオールのとある高校で、数学の教師として、恐らくは平凡な生活を送っているであろう彼の、若き日の激情を確実に刻み込んだ凄絶な作品である。（森下）



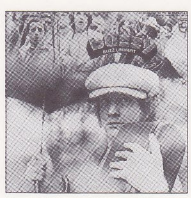
BREGENT
Partir Pour Ailleurs
LP/CAM CML 2003　'79年

カナダ最強の個性派、気魄の1枚。'70年から'77年にかけてキーボード奏者ミッシェル・ジョルジュ・ブレジャンを中心に書かれた曲（大半は'72年）を'78年に録音したもの。エマニュエル・プーズ張りのジャック・ブレジャンの静・動ともにインパクトの強いヴォーカルもさることながら、各テクニシャンによる演奏も対等に一体となり、オペラ風の混声コーラスの導入、シアトリカルなムード、ジャズなどの要素も絡み合う中、とりわけアレアとブーズが合体したようなB面前半部は圧巻。内面的なものが突出してきて発せられる鋭い感性の切れをテクニックで支え置き替え、曲作りに反映した如く、完成されているにもかかわらずメロディー、曲展開、音色へのこだわりは感じられず、プログレッシヴな音楽性では一線を画く驚くべき存在。（松本）



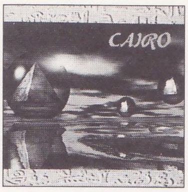
BUCK DHARMA
Flat Out
LP/Portrait ARR 38124　'82年

BLUE ÖYSTER CULTにとって8枚目のスタジオ作「Fire Of Unknown Origin／呪われた炎」の翌年リリースされた、同バンドのギタリスト、ドナルド・ルーザーのソロ。が、拍子抜けする程コマーシャルで軽快なA①でスタートする本作に、当然BÖCを求めてはいけない。当然ながら、BÖCのメンバーも基本的には（'81年のツアーに同行したドラマーのリック・ダウニー以外は）不参加で、アリス・クーパー人脈等、NY辺りのミュージシャンが起用されているようだ。しかし、殆ど全編パワー・ポップ風なのは（どこかヒネくれたアレンジ曲もあるものの）ビックリ。そんな中で、中間部が突然P. FLOYD風になる大作A④の存在は、意外だが一番の聴き所かも。（奥村）



BUZZ LINHART
Buzzy
LP/PHS 600-291　'69年

このアルバムは、彼のデビューアルバムで、他に少なくとも、もう一枚は出している。基本的にはフォーク・ブルースを根っ子に持つシンガー・ソングライターなのだが、この時代にわざわざロンドンまで行ってレコーディングしてるぐらいだからバック（なんとアイズ・オブ・ブルー）のサウンドとも相まってただのアメリカン・ロックにはなっていない。頭の一曲目はソレッぽいか。（ウウッ）。B①では18分強のシタール、タブラ使用のラーガ・ロックっぽい事もやっている。A②、B②では大雨注意報一歩手前のような（洪水とまではいかない）なかなかに素晴らしいメロトロンが聞ける。ワタシャA②一曲で買ってしまいましたよ。ちなみに英盤(Philips SBL 7885) もでている。（伊波）



CAIRO
Cairo
CD/Magna Carta 1081 '94年
/アポロン APCY-8189

速弾きギタリスト養成所長マイク・ヴァーニーは、'92年に新レーベルMagna Cartaを起こし、プログレ業界に参入する。MAGELLAN、SHADOW GALLERYに続く第3の所属バンド、5人組のCAIROのデビュー作。key全般を担当するM. ロバートソンのスタジオで制作されており、プロデュースはジャケット・アートも手掛けているdsのJ. ブロックマンとの共同作業。UKの〝Danger Money〞の導入部を思わすオープニング、YES風コーラス、EL&Pからの強い影響等、叙情性とダイナミズム、そして疾走感を持つサウンドは、往年の英国産プログレッシヴ・ロックの遺産と、HR／HMの合体の成功例と言える。各曲の配置具合、アルバム全体の構成力の良さが、中だるみを感じさせず、ラストの大曲まで駆け抜ける。ただ者ではない。（川上）



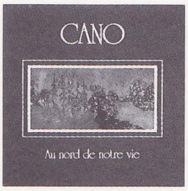
CALIFORNIA GUITAR TRIO
Invitation
CD/ポニー・キャニオン PCCY 00702
'95年

CGTについてはマーキー本誌57号でも触れたとおり。予告されていた新作は、当初のデモからタイトル曲の〝Invitation〞が除かれ、ライヴでも一際印象的だった〝Train To Leimy〞がパートに分けられるなどして、内容変更があった。特に後者によって一枚のアルバムとしてまとまりがついた気がする。これに挟まれて、オリジナル曲、コピー曲の各曲それぞれの色が一歩出て、区別がつきやすくなったと同時に流れが生まれたと思うからだ。聴くには、リラックスした方がよく聴こえると思う。ギター・アンサンブルの妙を好む人には是非すすめたいアルバム。（松本）



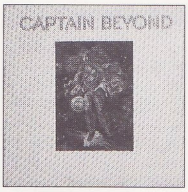
CANO (Canada)
Tous Dans L'meme Bateau
LP/A&M SP-9024 '76年
CD/A&M 31454 0371-2

カノは、知りうる限り6枚のLPをリリースしたグループ。もしかすると、その後も活躍したかもしれない。初期に於いては、トラディッショナル・フォークとプログレッシヴ・ロックを融合したかのような演奏を得意としており、徐々にポップス・グループ的な路線に変容していく。彼等の持ち味を生かした作品は、やはりファーストである本作と、セカンドの「Au Nord De Notre Vie」（A & M SP 9023 '77）あたりであろうか。曲によってはオーソドックスなものもあるが、ヴァイオリンを効果的に配し、フルートやエレクトロニックなキーボード等のエッセンスも加えて、独自の世界を創りだしている。（山崎）



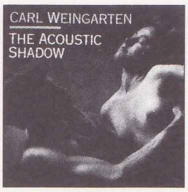
CANO
Au Nord De Notre Vie
LP/A&M 9028 '77年
CD/A&M 31454 0372-2

カナダのトラッド系プログレッシヴ・ロックというとアルモニウムが真っ先に挙げられるが、このカノも忘れてはいけない存在。特に初期の3枚はトラッドがうまくプログレッシヴ・ロックに昇華された価値ある作品。これは、そんな彼等のセカンド・アルバム。アルモニウムのサードに共通するような美しいジャケットに包まれた隠れた逸品と言える。広大な大地に続く爽やかな森からカナディアン・ロッキーを見上げるような清涼感溢れるサウンド。大作指向ではないものの、きっちりと起伏に富んだメロディが延々と流れる時の流れを緩やかに受け止め、さりげなく断片として描き上げる。「武闘派」には物足りないだろうが、「爽やかさん」にはたまらない魅力を持つ一枚。（津田）



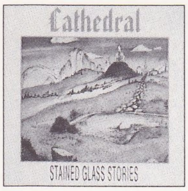
CAPTAIN BEYOND
Captain Beyond
LP/Capricorn CP0105 '72年
CD/ポリドール POCP 1826

キャプテン・ビヨンドはディープ・パープルの初代ヴォーカリスト、ロッド・エヴァンスがアイアン・バタフライのラリー・リノとリー・ドーマン、ジョニー・ウィンター・アンドのボビー・コールドウェルと結成したハードロック・バンド。本作は彼らのデビュー盤で〝スーパーグループ〞の触れ込みが効いて、日本でもそこそこのセールスを記録した。バンド名は、I. バタフライの欧州公演の時に、不調だったリノを、リーが〝キャプテン・ビヨンド〞と呼んだ事に由来している。収録曲は13曲ながら、殆ど切れ目無く継がっている。ボビーの堅実なドラミングに導かれたスリリングなオープニング。重々しいベース・ラインと縦横無尽に暴れまくるギターが最大の魅力だが、動と静の起伏も豊かで、聴く者を飽きさせない曲構成がなされている。（江田）



CARL WEINGARTEN
The Acoustic Shadow
CD/Multiphase MP-CD 103 '95年

キット・ワトキンスとも交流のある西海岸のミュージシャンのソロ・アルバム。エスニック、アンビエント、アコースティック等々いろいろな言葉が浮かんでくる。いかにもニューエイジ以後の西海岸という気がする。インカやインドの雰囲気も混ざっていて、総じてクリアー。朝焼けの時の静けさ、広がり、透明感にそれら様々なものがある、という……。この流れがとても西海岸的だ。ヒッピー思想とテクノロジーが合体した場所の象徴、そしてそれ以後のアコースティック系サウンドという感触だ。音も多彩で変化があり、この手では珍しく退屈しなかった。他に「Critical Path」('91)、「Pandora's Garage」('92)、「Red Melodies」('95) 等のアルバムがある。（松本）



CATHEDRAL
Stained Glass Stories
LP/Delta DRC 1002 '78年
CD/Syn-Phonic SYNCD 3
/マーキー MAR 95145

数あるアメリカ勢の中でも、正に驚異的な存在がこのカテドラルである。クリムゾン、イエスの影響を受けた攻撃的かつ叙情的な面を持ち合せたシンフォニック・ロックで、日本人好みの、ある意味では異色のグループといえよう。変則的なリズム陣に、メロトロンとギターが進行する様は、ジェネシス・イミテーションが多い中で、新鮮かつ感動的。ドラマーがプロデュースを兼任していることもあって、多くのパーカッションが導入され、サウンド面で奥行きを与えている。ミステリアスなムードが強く、シンフォニックといっても開放的なタイプではない。かげりと味を兼ね備える好作。超大作というよりも細かい振幅でドラマ性を作り出していくタイプ。
（吉瀬）



CHAKRA
Chakra
LP/BS-15 '79年

チャクラというバンドの唯一の作品は、灰色のジャケットがとても地味であるが内容はカラフルなプログレッシヴ・ロックである。多彩なキーボード、テクニカルなリズム、コーラス・ワーク等による静と動を使い分けたA面の流れがなかなか素晴しい。アメリカのバンドでありながら、歌メロやコーラスにおいて強くイギリスらしさを感じさせてくれる。あえて言うならば、イエスやUKの影響があると思われるが、イエス・タイプというのはほめ言葉にはならないケースが多いのでそういうイメージにとらわれない方が良いかもしれない。
（六井）



CHALIS
One Small Chance
LP/Ellen Abbey EA 25389 '75年

オープニングのイントロからヴォーカルの入りまで、恐しくジェネシスに似ているので一瞬ビクッとしてしまうが、一変してすぐアメリカになってしまう。詳しいクレジットがないので編成が分からないのだが、使われているのはピアノ、オルガン、シンセ、フルート、ストリングスにベース、ドラム、ギターと言う5人組。'74～'75年に録られたこのチャリスのアルバムは、多分これが唯一の作品だと思う。彼らは余りプログレッシヴ・ロックにこだわって作ったようではないが、アメリカにはない妙な懐しさを持つ曲調と、キーボード類をふんだんに使ったインスト曲、叙情的なピアノとストリングスをバックにもの悲しく歌われる曲など、ジャケットのイメージとも合わせて、多少コンセプト的な雰囲気が魅力である。（田中）



CITADEL
The Citadel Of Cynosure And Other Tales
CD/Whitman Enterprises
WE12-CD-ITY '90年

シタデルはカンサスやスターキャッスル等の流れをくむ正統派アメリカン・プログレッシヴ・ロック・グループで、'78年頃から活動を始めていたらしい。一時期あったいわゆる「ハード・ロックの変異型」を地で行く音作りではあるが、上記2グループの特徴でもあったイエスやジェネシスからの影響はほとんど感じさせない。エッジの立ったソリッドなギター・ワークとアグレッシヴなキーボード・プレイが売りのグループとはいえ、清涼感のあるコーラスと12弦ギターによって引き出される叙情性がシンフォニック・ファンの気を魅きそう。SFを素材とした大仰なストーリー仕掛けとハード・ロックのイディオムが合体し、更にシンフォニック・ロックの良質な部分がクロスする。
（内田）



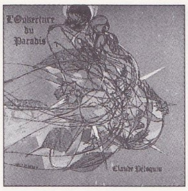
CLAUDE DUBOIS (Canada)
Fable D'espace
LP/Pingovin UFO 1 '78年

このアルバムは素晴らしい。クロード・デュボアというアーティストのソロであるが、大きく分けて2つのタイプの楽曲が収められている。1つはヴォーカルをメインにしたバラード系のもので、僕の大好きなアーティスト、ジル・ジャネランのアルバムを想起するもの。もちろんフランス語の歌詞で切々と歌われ、ひかえめながら的を射たアレンジも情感の深さを表現するのに貢献している。1つは実験的でサイケデリックな演奏を主体としたもので他の曲とはかなり印象の異なるもの。個人的にはほとんどの曲のタイプである前者が好みだ。モールス・コードやポーレンのような展開的なシンフォニック・タイプではないが、それでも何度も針を落としたくなるような力を持つ。A③などその典型。
（山崎）



CLAUDE LEVEILLE (Canada)
Black Sun
LP/Polydor 2424 171 '78年

2作目に当たる本作を数えて3枚のアルバム「Frederic」(CBS FS748)、「Felix Leclero」(Polygram 2424 196) が確認されている仏語圏のアーティスト。アコースティック・ギターのつま弾きを土台にヴァイオリンやキーボード、エレクトリック・ギターが情感あるメロディーを取るといったインストゥルメンタル作。アレンジを始め全面にわたってミッシェル・ル・フランソワが協力し、彼自身ギター、キーボードを演奏して非常に大きく貢献している。トータル作のような物語性のある曲想、進行が強く感じられ、いわゆるフォーク色とはまったく異なる控えめながらもシンフォニック・サウンドの範中に入る音作りになっている。実質的な共演作と言えるかもしれない。かげりのある、サウンドの引きをいかしたアルバム。（松本）



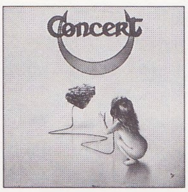
CLAUDE PELOQUIN (Canada)
L'Ouverture Du Paradis
LP/London LFS-9030 '79年

Claude Peloquinは「Eternite」(フランス盤は見開き)でMichel Le Francoisと共演した詩人で、このソロ名義のアルバムでは、音楽はJean Pierre Goussaudが担当している。牧歌的なインストゥルメンタルで始まるこの作品、続く2曲は印象的なメロディーをバックに歌と語りの中間のようなシャンソンのパターンを踏襲しており、続く曲はアコースティックな曲。B面は〝Les Realites Perpetuelies〟という組曲となっており、こういう場合やはりアレンジが問題になるわけだが、キーボード類を中心に、シンプルだが効果的なアレンジが施され、女性ヴォーカルも導入している。盤はブルー・カラーで、フランス盤もリリースされているようである。 (吉野)



COCHRANE (Canada)
Hang On To Your Resistance
LP/Love Prodvctions DAF 10043 '74年

'74年に発表されたTom・Cochraneをリーダーとする3人編成のバンドで、それにピアノ、ギター、オーボエ、バック・ヴォーカル等6人を加えて録音されている。フォーク・ロック系のサウンドで、技術的にはごく標準的なものであるが、アコースティック楽器を中心にしみじみと聞かせるタイプである。また端正な曲づくりでメロトロンを含むキーボード群も曲にマッチしており、こうした曲展開には好感が持て爽やかな感動を覚える。初めは地味な印象を受けるが、聞けば聞く程深い味わいが出てくる作品である。カナディアン・シンフォニック・ロックの中では地味な存在であるが、多くの人に聞いてもらいたい傑作として推選したい。 (村上)



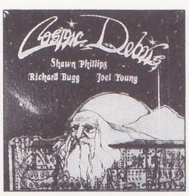
CONCERT (Canada)
Concert
LP/CBS PFC 80038 '80年

このグループ、いかにも大編成と思えるネーミングだが、ギター、ベース、ドラムスというロック・バンドとしては最小のユニットで成り立っている。オープニングは彼らだけの演奏で始まるが、これが骨太なハード・ロックで驚かされてしまう。しかし、それ以降の曲は全てキーボードを含む何人かのサポートが加わり、非常に甘いメロディ・ラインの曲が続く。どうやら、こちらの方が彼らの本来の持ち味のようだ。しっかりポップスになっている曲もあるが、フランス語の洗練されたハーモニーを美しく透明感のあるキーボードに乗せたサウンドは特筆に価するものだ。考えてみたら最近のシンフォニクにこだわりすぎて彼らのような親しみやすさが欠けているような気がするが……。 (本木)



CONTRACTION (Canada)
Contraction
LP/Columbia PS-735 '?年

紅一点Christiane嬢を中心とするコントラクションは仲々ユニークなサウンドを持つグループだ。簡単に説明してしまえば軽いジャズ・ロック風の演奏に乗せて彼女の美しいヴォーカルをフィーチャーしたものであるが、ちょっとこわいのが彼女のスキャットなのだ。ある時は美しく、そしてある時は呪文のようにも聴えたりする。しかしそれ程感情移入が強い訳ではなく、むしろクールな味わいがあるのが不思議だ。このグループの作品は2枚あり本来ならば2ndの「La Bourse Ou La Vie」を紹介するべきなのだろうが、スタイルの確立していない本作(1st)を選んでみた。というのは、この作品は彼女のスキャットではない歌ものが中心であり、バックの演奏がうすっぺらな分、彼女の美しいヴォーカルが前面に出た構成となっているからだ。 (本木)



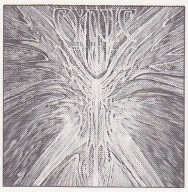
COSMIC DEBRIS
Cosmic Debris
LP/Non Compos Mentis 3.7K '80年

キーボード・トリオなのでELPタイプを想像したが、タンジェリン・ドリーム・タイプであった。私はTDの方がELPより好きなので同じ様にINTRUSIONあたりより本作やE. Q...ZAKの方が好きである。ドラムがいるので丁度TDのサイクロンを思わすが本人達も意識していた様でギターの音色も「Foree Major」のB①みたいである(あるいはアシュラ・テンペルなのか?)。A面ではドラムスのノリも良く針を落とせばそれなりに楽しめるが、TDを差し置いてこのレコードを選び針を落とすことが人生に何度もあるとは思えない。B面ではフルートも入るが、ダレる。シークェンサーの使い方が下手で、TDとの違いを出そうという意志が感じられない。ジャケ裏のコメントも大げさでウルサイ。針を落とせば聴けるんだけどね。 (森下)



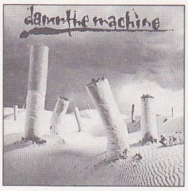
COVENANT
Nature's Divine Reflection
CD/Syn-Phonic SYNCD 13 '93年

大型ブックレットで目をひいたK. Rongeyの作品「Book in Hand」。同作に曲を提供(共作)していたキーボード奏者、D. グライダーのソロ・プロジェクトが本作である。同じく「Book～」に参加していたギタリストがギター&ベースの一部を担当している。全体は典型的な'70年代のキーボード・シンフォニック・サウンド。メロトロン、B③、ソリーナなどの銘機が縦横に駆け回る。サンクス・クレジットを見ればわかる通り、彼自身、相当なシンフォニック・マニアの模様。重厚長大で落ち着かないサウンドは時流音楽からは絶対に出てこない。 (ミワ)



CYNIC
Focus
CD/Roadrunner 9169 '93年
/アポロン APCY-8144

フロリダの４人組のデビュー作。'80年代の後半から活動していた彼等の名前は、メンバーそれぞれの卓越したテクニックを買われての様々なデス・メタル・バンドへのセッション参加やヘルプで何度となく耳にはしていたものの、実際にバンドの音源がアルバムとして世に出たのは本作が初めて。'91年のデモ収録曲がオムニバスに提供された時は、まだまだ複雑でテクニカルなことをやっているデス系スラッシュという感じだったが、本作ではのっけからクリーンなトーンやスペイシーなエフェクト、さらにはエレクトロヴォイスを使っていて、ド肝を抜いた。スティックを操つるベーシストを加え、シンセサイザー・ギターも大胆に導入。⑦のインストなどまるでジャズ系インプロだ。今後の〝進化〟も実に楽しみ。（奥村）



DAMN THE MACHINE
Damn The Machine
CD/A&M 540103-2 '93年
/ポリドール POCM-1038

あのMEGADETHのメンバーとして、２枚のアルバムに参加したギタリスト、クリス・ポーランドを中心とする４人組のデビュー作。クリスを含めたメンバーの殆どがジャズ畑出身……ということは、HR/HMの世界（何故か特にスラッシュ系）でもよくあることだが、このバンドにもその点は、リズム面によく表れている。意外にポップで、歌モノ的な曲も多く、今の〝アメリカ最新流行〟スタイルをうまく取り入れたりもしている点が気になるが、ハマればクセになる可能性は大いにあり。（奥村）



DARYL HALL
Sacred Songs
ＬＰ/RCA AFL 1-3574 '80年
CD/BMGビクター BVCP 2091

ピーター・ガブリエルのセカンド、自身のソロに先立つMOR３部作第一弾としてロバート・フリップがプロデュースを手懸け、'77年に録音されながら、米RCA側の圧力で２年半の間未発売だったこのアルバムは、ダリル・ホールのファースト・ソロであると共に、フリップの活動再開をも宣言するアルバムであった筈だ。ソウルからの影響が濃いHALL & OATESだが、ホール自身は隠秘思想への指向を持ち、以前からフリップとは親交があったという。ヒステリックとも思えるシャウトで、ニューヨークへの愛憎を歌うホールと、それに絡みつくフリッパートロニクス。フリッパートロニクスによる④から続く〝Red〟的ギター。トッド・ラングレンが手懸けた「War Babies」を更に深く沈潜させた夜のＲ＆Ｒ。（高山）



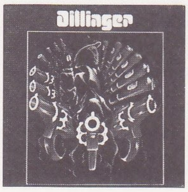
DAVID SANCIOUS
Forest Of Feelings
ＬＰ/Epic 33441 '75年
CD/Sony Music EK 47903

デヴィッド・サンシャスはブルース・スプリングスティーンのE STREET BANDのオリジナル・メンバーとして活動後、'74年に独立。この「Forest Of Feelings」でソロ・デビューした。ベース、ドラムスを率いてのキーボード・トリオだが、サンシャスはギターもばりばりに弾きまくっている。この音楽は紛れもなく純正のプログレッシヴ・ロック。キーボードのセンスといい、曲の組み立てといい、パトリック・モラーツを彷彿とさせる。モラーツからラテン色を抜いて、少しだけジャズ・ロック色を加えるとこうなるのではないだろうか。'80年代後半からピーター・ガブリエルやスティングのバンドで活躍しているのはご存知の通り。CD化に際し、短い未発表曲が１曲ボーナス・トラックとして追加されている。（坂本）



DAVID SANSCIOUS & TONE
True Stories
ＬＰ/Arista AB 4201 '78年

B.スプリングスティーン、P.ガブリエルその他との共演を通してセッション・ミュージシャンとして有名な彼だが、N.M.ウォルデンやS.クラークの初期のアルバムで作品のスケール感を出す役割りを担っていたのも印象深い。彼自身のアルバムが何枚リリースされているかは良く分らないのだが、'80年前後に至るまでの諸作はいづれもそのキーボード・ワークを中心にスケール感大きいシンフォニック・ロックになっている。クロス・リズムを多用したリズム・ワーク他は洗練度の高い作曲能力は同時期のアメリカン・プログレッシヴ勢にあってかなりのレヴェルにある。本作にはB.オーガー→TROCを経たA.リジャートウッドが参加、熱唱を聴かせる。マスター・マインドにも影響を与えたアーチスト。（中西）



DILLINGER(Canada)
Dillinger
ＬＰ/Love Productions DAF 10045
'76年

カナディアン・プログレッシヴ・カルテット、ディリンジャーのデビュー作。フルート、サックス、オルガン、ピアノに歌と大活躍のJ. Harrissonが中心となり、ブルージーな側面からＤ・パープル系に至る英国HR色とジャズ・ロックを融合した演奏を展開する。ハードな曲調が突然ジャズになる強引な展開が凄いが、張りのあるヴォーカル、叙情的コーラス、リッチー・ブラックモア的（？）ギターも一級品。Ｂ面を埋める大曲など、スピーディでタイトなジャズ・オルガン・ハードからキャッチーで気持ちいい歌／コーラスへ、更には泣きのギターが叙情を演出し炸烈するオルガンでシメる圧巻の秀曲である。演奏力も申し分なく、個性と質を兼ね備えた傑作。セカンド・アルバム「Don't Lie To The Band」が同レーベルから出ている。（中島）



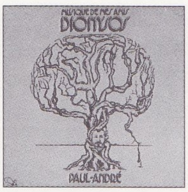
DIONNE BRÉGENT (Canada)
Deux
LP/Capitol ST 70 052　'?年

ディオンヌ・ブレジャンはパーカッションとキーボードのデュオで、この作品は二作目。A面はドラマティックなオープニングに続き18分に及ぶ6つのパートから成る組曲が収録されており、管楽器、バイオリンを導入している。B面は加速されたシークエンサー・フレーズで始まり、パーカッション・ソロやシンセサイザー・ソロがフィーチャーされ、キーボード奏者としても卓越した面を見せている。続く曲はフュージョン色が濃い。一作目「... Et Le Trosieme Jour」(ST70044)のA面は民族色が強い瞑想的作品。B面は重層音の現代音楽的作品である。なおこの二人はそろってブレジャンのアルバムに参加し、M. G. ブレジャンは1曲を除き全て作曲しており、おそらく兄弟であろう。　(吉野)



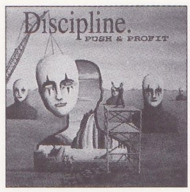
DIONYSOS (Canada)
Dionysos
LP/Jupitor YDS 8032　'70年

このディオニソスというグループは'70年代に数枚のアルバムを出している。筆者は「Dionysos」('70)、「Le Prince Croule」('?)、「Dionysos」('76)、「Musique 'De Mes Anis」('78)と4枚は確認できたが、他にもある可能性は高い。本作は'70年ということで、ハモンド・オルガンをメインにヴォーカルがのるスタイルである。ただ12分の大曲を入れたり、又、フルート等を導入して意欲的なスタイルを築きあげたりとプログレッシヴ・ロック的な雰囲気はなくもない。例えば我が国のロック黎明期の作品、コスモス・ファクトリーやストロベリー・パス等のサウンドに興味があれば、おそらくはこの最初期のカナディアン・プログレッシヴ・ロックのサウンドも楽しめるに違いない。　(山崎)



DIONYSOS
Musique De Mos Amls
LP/Solo SO 25507　'78年

実際のところディオニソスと言うグループはそれ程プログレッシヴ指向なグループとは思えない。ブリティッシュ色の強いサウンドであることは認めるが、曲によってはブラス・ロック調、スティーリー・ダン調ありと、かなりオール・マイティなグループに思えるため、プログレ・バンドとして聴き込もうとすると、どうしても納得出来ない部分があった。そんな彼らをカナダ・ロック界きってのマルチ・プレーヤー、ミッシェル・ル・フランソワが大シンフォニック・バンドに変身させてしまったのが本作。(vo担当のP・アンドレのソロ作であるがグループ名義にもなっている) ディオニソス特有の硬質なサウンドに、フランソワのまろやかなキーボードがうまく味つけされている。〝サテンの夜〟を思わせるB面のラストは名曲。　(本木)



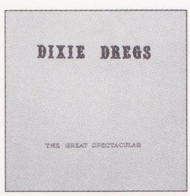
DISCIPLINE
Push & Profit
CD/Strung Out 128764-01
'93年

不思議な魅力を持ったバンドだ。ジャケットに魅かれて、大いなるプログレを期待して聴けば、何か物足りないが、そこに別の魅力を見つける、そんなアルバムだ。確かに'70年代のプログレッシヴ・ロックを引き継いでいるが、とらわれてはいない。ロック歴10年以上のリスナーなら、そこにアメリカン・ロックの臭いを嗅ぎわけると思う。②などG・ジャイアントのパターンとそのドライな感触が、アメリカン・ロックの乾いたトーンに見合うようで、どちらとも言えない線をついている。メロディ・ラインのつくり方も極く自然で、曲の構成もそれ程凝っているわけではないものの、変拍子や叙情味のあるパートは流れにそってうまく入っている。そしてポップな色が強すぎることもない。意外と玄人好みな音かもしれない。多少タイプは違うものの、パブロフス・ドッグなどに似た、プログレともアメリカン・ロックともつかない所で確かなカラーを出した好作。　(松本)



DIVINE REGALE
Horizons
CD/DRH 1994　'94年

米国北東部のニューハンプシャー州出身の6人組の自主制作によるデビュー・ミニ・アルバム。ツイン・ギターにキーボードを擁する彼等だが、各パートが見事に噛み合い整合感のある楽曲に仕上げられている。変拍子などの導入は、あくまで楽曲のメロディを活かす程度に抑えられているが、劇的な曲構成を支えるフレージングの妙は新人とは思えぬほど。また、パブロフ・ドッグを時として思わせるシンガーの存在感も際立っており、バンドの個性となっている。②の導入部でもあるインストの①で雄壮に幕を開ける本作は、おそらくデモ作品的な要素も含まれて制作されたようだが、印象的なピアノのアタックで幕を閉じるラストまで、小作品としての流れも存在しており、決して軽視出来ない存在だ。　(芦沢)



DIXIE DREGS
The Great Spectacular
LP/(private press)　'75年

幻の1st. '75年の自主制作。このアルバムは作品というよりもプロダクションやレコード会社へのプロモーション用に作られたデモではあるまいか。モノクロのジャケットに〝instant recording〟とコメントされており、ほとんど一発録りと思わせる様相。〝Holiday〟〝Wages Of Weirdness〟はアルバム〝FREE FALL〟に、〝Ice Cakes〟〝What If〟はアルバム「WHAT IF」にそれぞれ再録されるも、その完成度には歴然と差がある。しかしながらメンバーはロッド、スティーブ、アレン、アンディの4人だ。ディキシー地方のカス野郎どもはこの頃からとてつもなくテクニシャンで、音楽性も変わらない。ディープ・パープルのギタリスト、スティーヴ・モーズのファースト・レコーディングとすればマニア垂涎か。　(中藤)



DIXIE DREGS
Free Fall

LP/Capricorn CP 0189 '77年
CD/PolyGram 829 661-2
/ポリドール POCP-2389

所謂アメリカン・プログレッシヴ・ハード・ロックの典型であるディクシー・ドレッグスだが、彼らの場合その背景にマハヴィシュヌ・オーケストラやジェリー・グッドマンのジャズ・ロックとカントリーが同居していて、さすがにデキシーでこそないが、アメリカ以外からは決して生まれないサウンドを生み出している。既に彼らの音楽は完成しており、その後は更に更にとその音楽をテクニックでガチガチに固めて行ってしまった彼らにとっては、まだ原点となるジャズ・ロックの出自が聴き取れる本作が一番余裕のあるバランス感覚で聴き易い。当時その変なバンド名とおちゃらけたジャケットで日本のプログレッシヴ・ロック・ファンには敬遠されたきらいのあるアルバムだが、実はこれが彼らの最高作ではないだろうか。 (坂本)



DIXIE DREGS
What If

LP/Capricorn CPN 0203 '78年
CD/Polyaram 831836-2
/ポリドール POCP 2390

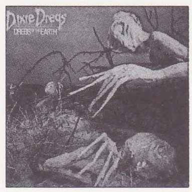
自主制作盤「Dixie Dregs」でレコード・デビューしたディクシー・ドレッグスの3rd。プログレッシヴ・ロック・サイドから見たアメリカのジャズ・ロックとしては最高峰に位置する1枚である。切れの良いリズムと緩急自在、メロディアスかつリリカルに、そして、スピーディかつダイナミックにソロを展開するバイオリン、キーボード、ギターとのアンサンブルは素晴らしく、その演奏は一流のジャズ・ロック・グループのみが持つドライブ感に溢れている。一部にポップな箇所もあるが演奏自体の出来は良い。本作以後、「Night Of Living Dregs(同CPN216)'79」、「Dregs Of The Earth(Arista 9528)'80」、ドレッグスと改名して「Unsung Heros(同9548)'81」、「Industry Standard(同9588)'82」を次々に発表、ポップ色を強めていく。 (賀川)



DIXIE DREGS
Night Of The Living Dregs

LP/Capricorn CPN 216 '79年
CD/PolyGram 831 411-2
/ポリドール POCP-2391

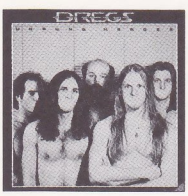
「プログレ・ハード」と言われる音楽が大嫌いな私としてはディクシー・ドレッグスは許容範囲ぎりぎりのバンドだったりする。だが、同様のリスナーも彼らの周辺にジェフ・バーリンやスコット・ヘンダーソンらがいること、また、後のWindham Hillとも連鎖していることなどは覚えておいた方がいい。本作までがCapricornからの作品であり、前作同様ケン・スコットがプロデュースとエンジニアを担当している。①〜④がスタジオ録音、⑤〜⑧がスイス、モントルーでのライヴ録音という変則的なアルバムだが、何しろ滅茶苦茶にテクニックのあるバンドなので、ライヴも余裕たっぷりだ。後年スティーヴ・モーズのことばかりで語られている彼らだが、アレン・スローンのヴァイオリン・プレイも大きな位置を占めていた。(坂本)



DREGS
Dregs Of The Earth

LP/Arista AL 9528 '80年
CD/Arista ARCD 10-8116
/BMGビクター BVCA-7333

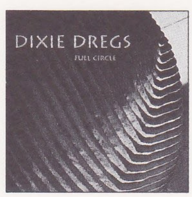
キーボードがT・ラヴィッツに交代し、レーベルも移籍してバンド名も単に「DREGS」と改めて(このアルバムでは何故か「DIXIE DREGS」の表記のままなのだが)心機一転のアルバム。前々作「What If」に比べてスティーヴ・モーズの比重がより高まっている。カラフルで控え目ながらも、しっかりと厚くサポートするT・ラヴィッツのプレイがモーズのギターを引き立たせている印象。特にシンセサイザーよりもオルガン、ピアノ等を多用しており、自然体な感じが受け取れる。そのせいかモーズのギターものびのびしていて、バックのうまさに乗せられてバリバリ演奏している。'80年代の初頭を飾るアルバムにふさわしい秀逸な仕上り。 (津田)



DREGS
Unsung Heroes

LP/Arista AL 9548 '80年

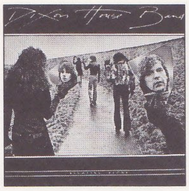
DREGSと名前を縮めての作品。再出発と言う意味もあるのか「Free Fall」にも収録されていた代表作であり、ステージにおけるハイライト・ナンバーでもある〝Cruise Controll〞をトップで再録している。とは言えバンドのスタイルそのものには変化はなく、明快なビートに乗せ、ハード・ロック/プログレッシヴ/カントリーその他をごた混ぜにした楽曲をハイ・テクニックで決めるドライヴ感ある演奏に時折り挟みこまれるリリカルなフレーズを聴かせる。'80年代を迎えて、幾分、各曲をコンパクトにメロディを浮き上らせた、と言う気配もあるが、依然シャープな演奏で決めている。ここいらの強味は決してオーヴァー・グラウンドにはなれなかった彼等がステージで根強い支持を集める原動力になっていた。 (中西)



DIXIE DREGS
Full Circle

CD/Capricorn 2-42021 '94年

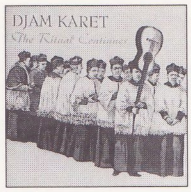
ギタリストのソロ活動やカンサスへの一時加入、ドラマーのウィンガー入りで日本ではむしろ解散後に名を広めたDREGS。ライヴに続く再編2作めにあたる本作では、ヴァイオリニストとして元マハヴィシュヌ・オーケストラのジェリー・グッドマンが名を連ねている。ジャズ、クラシック、そしてカントリーまで視野に収めたテクニカルなインスト/フュージョン・ミュージック。各人の技量を前提とした上で静と動が織り成す今回のアプローチは余裕の成せる技だろうが、彼等には優雅さよりむしろ力で押す終曲〝Ionized〞のようなジャズ・ロックが似合う。 (高山)



DIXON HOUSE BAND
Fighting Alone

L P/Infinitv INF-9008 '79年
CD/MCAビクター MVCM-347

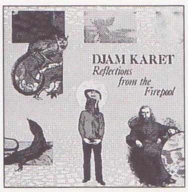
ハート人脈のディクソン・ハウス(vo、key)を中心としたプロジェクトのデビュー作。バック陣は、カナダのBIGHORNの元リズム隊を始め、女性ギタリスト、クリッシー・シェフツ他で、⑤にはハートのハワード・リースも参加している。サウンドは、キーボード中心ながらもメロディアスなギター・フレーズを随所に配したドラマティックなもので、コーラス・ワークからSTYX的とも言えよう。中には単なるハード・ポップもあるが、注目すべきは劇的なメロディ展開が見事な②、泣きのメロディを含む④⑥、組曲形式でプログレッシヴな⑨から導かれる⑩辺り。その後ハウスは、'81年にハワード・リースと組んでA＆Mからソロ名義のアルバムをリリース。こちらの内容は本作よりポップな仕上り。（奥村）



DJAM KARET
The Ritual Continues

CD/HC Productions HC 007
'89年('82、'87録音)

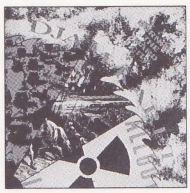
'89年のデビュー作「Reflections From The Firepool」を覚えている人には何の説明もいらないジャム・カレットだが、今思うとあの切れ味鋭い感触こそデジタル主導の現在をとらえていたと思う。彼らにはこれ以前に3本のテープ作があるとのことで、活動も'82年頃に遡るようだ。このアルバムは'89年にLPで出たものだが、録音は'82年と'87年で多分テープ作の曲だろう。既にあの鋭さを聴ける。まさしく同時代感覚を活した切れ味だった。曲としては多少ラフな印象を与えるとは言え、より実験的な未完な所を逆に楽しめる。それ位のバンドだ。（松本）



DJAM KARET
Reflections From The Firepool

CD/HC Productions HC 004 '89年

アメリカからの強力なクリムゾン・フォロワーが出現した。ジャム・カレットと名のるこのグループは、'82年頃から活動を始め、3つのカセット・アルバムをリリースした後、このアルバムをCDで発表した。ギター×2、ベース(キーボード持ち換え)、ドラムスの4人構成である。非常に安定したテクニックを持つ彼等の演奏は極めてトルクフルで、余力を残しながらも並以上のスピードで疾走するスポーツ・カーのような充足を感じさせてくれる。後期クリムゾン～新生クリムゾンのイディオムを巧みに吸収しながらも、それらを単純に意識させないだけのオリジナリティで包みあげた素晴らしい作品だ。トータルで65分もの長きに渡って描かれる、硬派のインストゥルメンタル・シンフォ・ワールドである。（山崎）



DJAM KARET
Burning The Hard City

CD/HC Productions HC 006 '91年

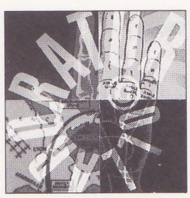
'91年にリリースされた本作は、「Suspension～」と同時にリリースされた。2枚組では無く別個に出たのは音傾向が全く異なるため。こちらは前作の音作りを継いだ内容になっており、鋭角的切れ味と技術力を前面に出したロック色の強いもの。とはいえフリップナイズされた音色のギターは更に多彩な変化を見せ、前作から一歩踏み込んだ手ごたえを感じさせる。泣き系のフレーズを出したとしても情が出てこない無菌培養工学ロックは、唯一無比と言ってもいい程の個性。これはクールとか、感触の問題以前にバンドの根本的なコンセプトとして人工性を極めること一ある種の終末観を表現する意図があるのだと思うが。先鋭感、'90年代感覚を体現したアメリカ産として極めて重要なバンドである。メンバーの変動は無し。（中島）



DJAM KARET
Suspension & Displacement

CD/HC Productions HC 005 '91年

「Burning～」とセットで出た'91年作品。「Burning～」においても新生面として導入されていたエレクトロニクス/アンビエント志向を、こちらでは全面的に展開している。ゆるやかに反復されるギター・ループの上にキラキラとしたkeyが加わり、メディテイショナルな流れの中で近未来と太古の暗黒が出会ったかの如き舞踏をくり広げる。アシッド的とはいっても極めてクリアーなもので、オズリック・テンタクルズの質感に通じる類のあれ。しかしユートピアはここには存在せず、歯車、定規と解剖図、星座、キノコ雲といったジャケットに象徴される世界、まさに〝Dark Clouds, No Rain…〟つまり〝その後〟の地球上に立ちつくすのみである。次作にこちらが受け継がれるという点以上に、彼らの本質を露わにする意味で重要な作品。（中島）



DJAM KARET
Collaborator

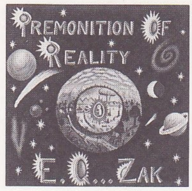
CD/HC Productions HC 008 '94年

「Suspension & Displacement」を継承した新作。その世界は、サイキックTVの1stをデジタル・プログラムしたかの様な魔境の奥地から聴こえてきそうな魔術的、呪術的な恐怖感を感じる世界だ。ポスト・クリムゾン、ポスト・プログレという言葉とは程遠い世界、現代が生んだロックという概念とは別世界に自らのベクトルを位相している。それも原始的楽器群を駆使するのではなく、最先端のテクノロジーを駆使して原始回帰を主張しているのだ。一見矛盾のパラドックスだが、文明の中での精神に於ける原始崇拝の一試論として意義を感じる。（竹川）



DRAMA
Drama
CD/Black Moon Productions BMP 1001 '93年('85年録音)

インディアナポリスの新興レーベル、Black Moonの第一弾。同レーベルは、米国屈指のコレクター/ディーラー、Mike O'Neal氏が設立、The Laser's EdgeのK. Golden氏も関与している模様である。本作はもともと'85年のテープ作品だったとされている。フュージョン色のない硬質のジャズ・ロックで、楽曲もよく練られている。知名度がないので例として適切ではないが、メキシコのBANDA ELASTICAやアメリカのKen Watsonに近い。スタジオ・ワークの貧弱さとヤマ場作りのセンスを割り引けば、相応の作品といえるのではないか。
(ミワ)



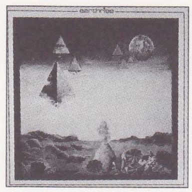
E. Q... ZAK
Premonition Of Reality
LP/(private press) EQZ-1 '88年

この何か、マンダラをマニアックに変形させたようなジャケットの絵は、ユーモラスでもあり、また素朴でもあるが、それよりも深層心理に来るような恐さを感じる。バンド名を名乗っておきながら、実は二人のキーボード奏者によるデュオ。'60年代からのニュー・エイジの潮流を汲んだような内向的なサウンドとともに、最近のアメリカには、このパターンが多い。こうしたサウンドの発祥は、ヒッピー・カルチャーにあって、いわば白人が東洋文化の精神性に目を向けた地点での、アメリカらしい楽天主義の表れっぽい。ただしこのデュオの場合は、もう少しエコロジカルというよりも屈折した音使いをする。歪み気味のトーンのメロディ、その背後ではスペイシーで妙に単調なポップなサウンドが流れ、マニアック！ (松本)



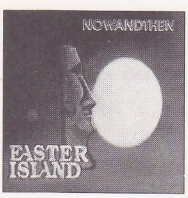
EARDANCE
Seek Opposites
LP/Touch T-1000 '82年

他国同様、いやそれ以上にプログレッシヴ・グループが表舞台に出る事はなかった'80年代前半のアメリカ、当然、このイアーダンスも自主制作である。全ての曲を書くマルチ・プレイヤーのジム・ジェイコブセン（ギター、ベース、スティック、クラリネット、キーボード）を中心にレギュラー・ゲストを加えると言う編成でパーカッション類の多用が目に付く。作風としてはディシプリン期のクリムゾン＋ジェントルと言ったトリッキーなリズム・ワークを主体に当時らしいポップ感覚とハッピィ・ザ・マン的な中庸を得たシンフォニック・トーンを混ぜると言った物。こう言ったハイブリッド・スタイルは当時のアメリカにあって生き残るべく、多くのグループが取っていた物。一枚で消えるには惜しいグループ。 (中西)



EARTHRISE
Earthrise
LP/Arcede 番号無し '77年

最初に手に入れた時既に５万円以上していたし、ジャケが素晴らしかったので期待が大き過ぎ、一聴してガッカリしたのを覚えている。しかしその後限り無くカスに近い北米の自主ものを大量に聴いて、再び本作を聴くと、おとなしめ、地味めなのは否めないにしても、評価を改めざるを得ない。値段が本国で10万を超えてしまったのも充分肯ける。アメリカによくあるハード・サイケ寄りの音ではなく、プログレ・ファンしか喜ばないド・プログレ。基本的にはキーボード・トリオだがELPには似ていない。自主盤にしては録音も良い方だし、メロディーも良い。やや地味に聴こえてしまうのはゆったりした曲調と、展開の激しい部分でも音色が控えめなためだろうか。ヴォーカルが持っているのと同じ位の情緒がオルガンにも欲しい。 (森下)



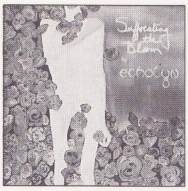
EASTER ISLAND
Easter Island
LP/Baal 999 '79年
CD/ZNR CD 2001
/マーキー MAR 9122

太平洋東端に眠る孤島イースター。そこには「モアイ」と呼ばれる巨大な石像が林立し、未だ解読されていない象形文字と共に様々な伝説が残されている。そんな、失われた文明に思いを馳せながら本作に耳を傾けてみるのも一興だろう。'79年の自主製作。キーボード系の奮闘や、変拍子多用によるスリリングな展開（B①など）、acギターや澱みの無いヴォーカルを軸としたメロディアスな展開（A②など）と持ち味は２通りで、いずれのケースも積極的なメロトロン導入が功を奏し、音に一段と厚味が加わる。中でも17分にも及ぶB①「練金術師組曲」は、彼らの持つ魅力を余す所なく詰め込んだ本作のハイライトと言える。なお、大半の曲は'77年の作だが、'78年に作られたA①、B②の２曲はヘヴィなギタープレイと力強いヴォーカルが聴かれ、多少毛色が異なる。 (江田)



ECHOLYN
Echolyn
CD/Bridge 番号なし '91年

正体不明。CD番号なし。アメリカのハード・プログレ・バンドらしい。普通、この手の作品は一聴した後無視してしまうのだが、これは意外とイケる。少しばかりラッシュやFATES WARNINGを思わせる展開がナカナカ面白い。少々センスの悪さが気になるもののソコソコのテクは感じさせる。やたらとデシャバリたがるドラムは何とも言えずイイ。マスター・マインド程の重さや疾走感は無いが、その分クリアーな印象を残している。メロディアスなハード・プログレとしてオススメしよう。
(沢田)



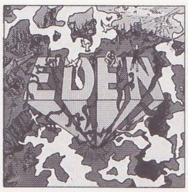
ECHOLYN
Suffocating The Bloom
CD/Bridge 番号なし '92年

前作に引き続き変なシンフォニック・ロックだ。テクは相当なものがある。ヴォーカルもついでの素人ではない。好き嫌いは、はっきりとわかれるとしてもカラーがある。泣かせて酔わせようという意図のないサウンドだ。曲の転調は忙しく、あたかも非予定調和シンフォニック・ロック。つまり流れ、展開があまりない。それだけに引っかかりが多くて気持ちよくはない。曲の構成が下手なのではない。そういう構成の曲が彼らなのだ。随分と色々な面を見せる。これで明るく吹っきれているのだから、カラーは強い。ブラック・ユーモアさえ感じる。3作目「As The World」はメジャー・リリースもあってか、一層ストレートなサウンドになっている。（松本）



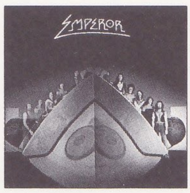
ECLIPSE(Canada)
Eclipse
LP/CBS FS 90340 '76年

名前からして多分にピンク・フロイドから影響を受けていると思われるエクリプス。B①は〝吹けよ風〜〟を思わせるし、A①は〝アス・アンド・ゼム〟調で、曲の間にムーグが派手に暴れ廻る仲々スリリングものだ。全体的にゆったりした曲調で、シンセによるけばけばしい音色を多用しているのが目立つ。曲によってはサイケデリック・サウンド的な感じの曲もあるが、ポップ色がもろに前面に出ている曲もあり、アルバム全体的には統一感に欠けていると言わざるを得ないだろう。しかし大半を女性ヴォーカルがイニシアチヴをとっているため、その甘さで虜になってしまう人も多いはずだ。本作発表後、大幅なメンバー・チェンジを行い、2ndアルバムを発表しアメリカ進出を試みるが見事に失敗する。（本木）



EDEN(Canada)
Eden
LP/Total DT-22009 '?年

あちらこちらにエデンと言う名のグループが存在するが、我がプログレ界ではドイツのエデンの作品の完成度の高さがあまりに有名なため、他国のエデンはさぞかしつらい思いをしたことだろう(?)。ストリング・シンセを大幅に使用して、哀愁ある演奏を聴かせるこのカナダのエデンも仲々の強者グループだ。メロディアスなサウンドやキーボードの音色などから、パンタクルと非常に似た印象を受けるが、ギターによる泣きのメロディ・ラインには彼らならではの良さが感じられる（特にB面)。イントロがイタリアン・ロックを思わせるB④、ムーグが大活躍するB①等も良いがA②が最も印象的だ。発表年代は付記されていないが、レコード番号から察する所によると'74年後半〜'75年頃と思われる。（本木）



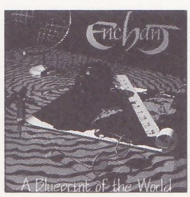
EMPEROR
Emperor
LP/Private Stock PS 2029 '77年

ツイン・ドラムを擁する5人組バンドの恐らく唯一の作品。他のパートはギター、ベース、キーボードで、リード・ヴォーカルはベーシストとドラマー×2の計3人で曲によって分け合う。'77年というとカンサスやSTYX、ジャーニーといったバンドがブレークを果たす前夜にして、ボストンがデビューした翌年に当たり、彼等がよりAOR的手法でその流れに乗ろうとしていたことが窺えるサウンドが全編で展開されている。全体的には実に爽やかでファンキーなノリの曲が多いのだが、ギター・ソロはすっかりトム・シュルツしていて、キーボードもどこかスペイシー。7分台のB①がキャッチーなだけに終始するのは残念だが、A①、泣きのB②と決して楽曲クオリティは低くない。（奥村）



EN ALLANT VERS... (Canada)
En Allant Vers...
LP/Tamano TAM 27016 '?年

L'ENGOULEVENTを最初に聴いた時の衝撃は、衝撃という文字を辞書で調べなくてはならなかったり、バンド名やレコード・タイトルを全然思い出せなかったりすることの頻繁（また辞書）な近頃でもよく覚えている。で、他にもこういうのがあるんじゃないか、とレーベルの広告ビラを頼りに色々買ってみて、まあ聴けたのが本作とBRÉCHEの2つ(コンヴェンタムは既に知られていた)。他はまあどトラッドばかりで私はダメだったが、全作品を試したわけではないので、興味のあるかたは探してみてもいいかも。基本的にはトリオだが殆どの曲でドラム等でゲストが参加、ラングルヴァンのメンバーの名も見える。女性ヴォーカルが一曲だけ歌っているが、全曲歌っていればかなり評価が上る筈で、勝手な思い込みだが、残念。（森下）



ENCHANT
A Blue Print Of The World
CD/Dream Circle DCD 9310 '93年
/ビクター VICP-5404

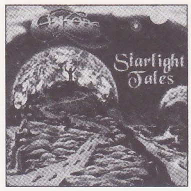
'93年カリフォルニアから登場したバンド。9曲中5曲がマリリオンのS.ロザリーのプロデュース、他2曲も彼がリミックスを担当している。エンジニアリング・スタッフがマリリオンの「Brave」と重複しており、この2作品は同時進行で制作された可能性もある。音の傾向としては、ものの見事にジャディス、ペンドラゴン、Si-Musicの路線。ダイナミックでドライヴ感あふれる動の展開にキラリと光る静のフレーズが斬り込んでくる。ヴォーカリストは専任だが、決して〝歌手とそのバック・バンド〟に陥っていない。ギタリストもリフとソロだけのメタル中毒ではない。特筆すべきはドラマーの力量。この力量を見抜いたS.ロザリーは、あえて、「ドスン、バシャッ」のいわゆるデジリバ・サウンドを採用しなかった。（ミワ）

L'ENGOULEVENT (Canada)
L'île Où Vivent Les Loups
L P/Le Tamanoir TAM-27012 '?年



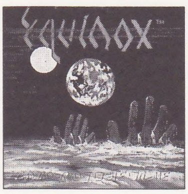
カナディアン・プログレッシヴ・トラディショナル・サウンド。正確には全曲自作曲ながら、p、g & vo、vln, violincelloという編成や曲調、ヴォーカル・スタイルからしても、トラッドに慣れ親しんだうえでの作曲であることには違いない。が、ピアノと弦楽器は終始クラシカル・タッチで演奏されていて、両者の流れるような優雅さある音色から土臭さはまったく感じられない。むしろ、こくのある滑らかさは、ヨーロピアン感覚に近いものだ。変化のある曲づくり、そして各楽器の絡みに至るまでこなれていて、しかも味も落としていない。難を言えば、男性コーラスが雑に聴こえることか。これは彼等の唯一のアルバムと思われるが、大自然の残るカナダのこと、まだまだプログレッシヴな知られざるトラッド系作品が幾つもあるに違いない。 (松本)

EPISODE
Starlight Tales
CD/Alabaster ALB 3733-1 '93年



結成は'84年というからもう10年になる。今もサンフランシスコ周辺でライブ活動しているようだ。'89年には1st LP「Into The Epicenter」が出ている。またコンピレーション「Past Present Future」には既に今作の⑤も収録されていた。今回が2作目になる。正確に言えば、とても詰めの甘い音造りだ。悪い意味の素人臭さは否めない。決まりきったリズムなどちょっとひどい。なのにこれがいけるのだ。最近のスタイリッシュなだけのシンフォニック・ロックから消え去った夢見ふうの空気がある。その一点。それだけでもっている好作。出来、不出来の激しい不揃いな内容だけに1か0かという人には向かないが、ファンタジック・ファンへは是非すすめる。1曲目のピアノとどこか'70年代のアメリカへ通じる明るさからして上昇気運、爽やか。 (松本)

EQUINOX
Color Of The Time
CD/Opus 5 2023 2 '95年



アメリカはサンフランシスコ出身のトリオ・バンドの恐らくデビュー・アルバム。名もないインディ・レーベルからのリリース故音質のチープさは否めないながらも、1st時のドリーム・シスターを彷彿とさせるテクニカルで泣きのメロディを孕んだコンパクトな楽曲は彼等の新人離れした力量を余すところなく伝えてくれる。現在世界中に数多く存在する〝ドリーム・シスターの落とし子〟的バンド群の中においても、曲作りのセンスという点で頭一つ抜けている感がある。輸入盤マニアの間では既に好セールスを記録しているようだが、来年1月に予定されているという日本デビューを機によりポピュラリティを得ることは間違いない。今後の活躍が楽しみな期待のニュー・アクトの登場である。 (石原)

ET CETERA (Canada)
Et Cetera
L P/Disques Apostrophe AP800 '76年



ET CETERAは女性一人を含む5人編成のケベック(フランス語圏)のグループでこれが唯一の作品である。以前本誌でカナダの小特集がされた時、カナダのジェントル・ジャイアントと紹介されていたように、ほとんどの曲が変拍子であり、各楽器のフレーズが目まぐるしく変わり、有機的に絡む箇所では明らかに影響を受けているが、ソロ部分ではフュージョン的になっている。又フランス語で歌われているためか、フランスの多くのグループに感じられるのと同様に、ヴォーカルが女性ということもあり、本家と比べると淡白な印象を受けるがそこがこのグループの特徴である。収録されている曲全てが一定の水準を保っており、個人的にカナダのベスト・アルバムとして推すものである。 (吉野)

ETERNITÉ (Canada)
Le Chants De L'Eternité
L P/Polydor 2424 156 '77年

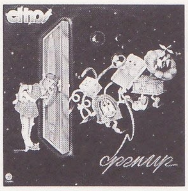


エテルニテはM. L. FrancoisとC. Peloquinによるプログレッシヴ・ユニットで参加ミュージシャンは総勢11人、'77年に制作された本作が唯一の作品と思われる。クレジットを見る限りでは、フランソワがピアノ、シンセ、アープにクラヴィネット、el & acギターまで担当、彼のマルチプレイばかりが目立ちそうな印象を受けるが、A、B面で違ったドラマーを起用するなど曲によってバックの顔触れが異なる為、曲想には意外なヴァリエーションが認められる。重壮なキーボード・プレイも持ち味ながら、ほのかなスペーシー感覚。女性ヴォーカルで綴るフォーク・タッチのナンバー、ピアノとフルートで奏で出す清楚な調べ、アグレッシヴなギタープレイーと、聴き所は様々。余談になるが、原盤はシングル・ジャケながら、何故かフランス盤は見開きなっている。 (江田)

ETHOS
Ethos (Ardour)
L P/EMI-Capitol ST11498 '76年
CD/東芝EMI TOCP 7700



卓越したオリジナリティー、本腰を入れたプログレッシヴ精神で、アメリカン・ニュー・ウェイヴと呼ばれた当時の頂点を極めたのは紛れもなくこのイーソスであろう。本作品の1stは欧州美を継承した作風云々とは一線を画する、アメリカ人本来の持つアイデンティティーに基づいたひとつの解答とも言える快作。ギター及びヴォーカル、本作品の全作曲を手掛けるウィル・シェイプを筆頭に、メロトロンを含めムーグがメインのダブルkeyから、b & vo、dsの5人編成で、演奏自体個人プレイが出ることも爆発的に盛り上がることも無い、比較的地味な印象ではあるが、意表をついた展開に良く練られ計算し尽くされた曲編成は驚嘆に値するだろう。本作品後keyが1人脱けた4人編成で「Open Up」リリースし解散する。 (大関)



ETHOS
Open Up.
L P/Capitol ST 11616 '?年

'70年代のアメリカのプログレッシヴ・ロック系アーティストの中で、ヨーロッパ的な方向性を持っていたバンドの一つがイーソスである。当時、自主制作品というものはほとんど日本には入ってこなかった為、アメリカ系でヨーロッパ的なテイストを持つというと、他にファイアー・バレー等、限られたバンドしかなかった。イーソスには2枚の作品が残されているが、どちらかというとこのセカンドにあたる「Open Up」のほうが完成度は高い。楽曲のまとめ方も絶妙ならテクニック的にも一流で、いわゆるシンフォニック系の作品の中では超一流の部類に属するサウンドである。　(山崎)



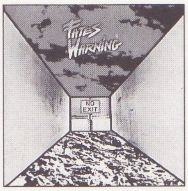
FAIRCHILD
Fairchild
L P/Flight FR 1706 '78年

ミネアポリスから'78年に現われたフェアチャイルドは、中期頃までのスティックスに似ている。もちろん彼らほどに完成されたサウンドではないが、マイク・リッチのヴォーカル・スタイルと、マーク・エンスタッドのキーボード、特にオルガンとシンセサイザーのフレーズにその影響が色濃く出ているようだ。派手に動き回るソロ・パートは余り無いが、シンフォニック・ファンにアピール出来るパートはあちらこちらに散らばっている。アメリカン・プログレッシヴ・バンドの売りのひとつに、一糸乱れぬ重厚で伸びのあるハーモニーを挙げることが出来ると思うが、彼らの魅力はそんな所にも表われていて、アルバムの重要な〝壁〞の役割りを果たしている。　(田中)



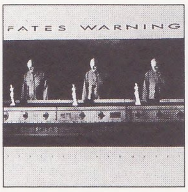
FATES WARNING
Awaken The Guardian
L P/Metal Blade ST-73231 '86年
CD/Metal Blade 14046
/マーキュリー PHCR-16155

コネティカット出身の5人組のサード。元々はアイアン・メイデンルーツの、'80年代中期の米マイナー・メタル・バンドにありがちなスタイルからスタートした彼等だが、前作辺りから濃くなり始めた大作指向がいよいよ本格化し、本作ではファンタジックさも増してついに独自世界を完成した。何と言っても当時の彼等のサウンド・イメージの核は、シンガーのジョン・アーチのクセのあるメロディ・ラインと伝説や神話に材を求めた歌詞にある。曲構成はその世界観の再現に伴い複雑化し、ドラマティックな展開は飽くまでHR／HMの音を守りながら新しい方向性を示すものと期待を持ったものだが、本作発表後、どういうわけか突如ジョンが脱退。この〝御伽〞路線は、必然的に本作で終わりを告げてしまう。　(奥村)



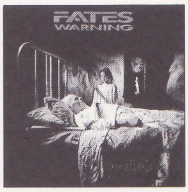
FATES WARNING
No Exit
L P/Metal Blade Di-73330 '88年
CD/Metal Blade 14047
/マーキュリー PHCR 16156

ヴォーカリストをジョン・アーチからレイ・アルダーにチェンジして制作された'88年発表の4thアルバム。基本的には前3作の延長線上にある展開の複雑な正統派HMをプレイしているが、⑥の組曲以外は本作以前に見られた大作主義が鳴りを潜めアレンジがスッキリとまとめられた印象を受ける。20分以上にも及ぶ⑥にしても非常に展開が練られており、バンドの楽曲作りの面での成長ぶりを如実に反映した出来に仕上がっている。この当時のレイのヴォーカル・スタイルからよくクイーンズライチと比較されることの多い作品であるが、少なくともこの段階では彼等の方がより本質的にHMバンドだったように思う。このままマニア受けのバンドで終わってしまうには惜しい独特の味を持った実力派だ。　(石原)



FATES WARNING
Perfect Symmetry
L P/Metal Blade 7 73408 '89年
CD/Metal Blade 14048
/マーキュリー PHCR-16157

テクニック面の問題からオリジナル・ドラマーのスティーヴ・ズィマーマンを解雇し、新たに元WARLORDの〝サンダーチャイルド〞ことマーク・ゾンダーを迎えての5作目。ジャケットからも脱ファンタジーしてラッシュの近未来ワールドに接近したことが窺えるが、サウンド面の硬質さが何よりも彼等の目指す世界観の変化を顕著に示している。前作から加わったシンガーのレイもようやく自己主張を始めており、線の細さで前任者との違いを強調。当時デビューしたてのドリーム・シアターからケヴィン・ムーア〈Key〉を迎えた⑤では後半のインスト・パートで緻密ながらも力押しでないバトルを展開し、その⑤と⑦にはヴァイオリンもフィーチュアしていた。リズム・アレンジの凄さは、彼等の作品中随一。　(奥村)



FATES WARNING
Parallels
CD/Metal Blade COZORRO-31 '91年
/マーキュリー PHCR-2105

彼等にとって通算6作目となる本作は、2代目シンガー、レイ・アルダー加入後に新たに求めたスタイルの完成型ともとれる傑作である。プロデューサーとしてラッシュを手掛けたテリー・ブラウンを迎えた本作は、綿密に絡み合う各パート間に独特の空間を持たせ、叙情的なメロディを情感豊かに歌うヴォーカルと共に、アルバム全編にもの凄い緊張感を維持させることに成功している。当時比較されることの多かったクイーンズライチとは全く異質の荘厳な世界を描き出しているのだ。また、楽曲のクオリティも総じて高く、ジム・マセオス(g)が作曲者として最も充実していた時期の作品でもある。前作から加入のマーク・ゾンダー（ds）のテクニカルかつタイトなプレイも、その鋭角的サウンドに大きく貢献している。　(芦沢)



FIRE MERCHANTS
Landlords Of Atlantis
CD/Renaissance RCD 1007　'94年

一部でHMファン向けジャズ・ロック（？）と騒がれたユニットの２枚目。何といっても全編弾きまくるジョン・グッドソールのギターが圧巻。ブランドＸでおなじみのあの音色、アルペジオ、速弾きでグイグイくる。ダグ・ラン（Ｂ）とトス・パノス（Dr）のリズム隊も切れ味鋭く、濃密なプレイを展開。確かにギター・リフなどにHM色を取り込んではいるが、モダンなセンスと緊張感あふれる演奏は〝カッコ良いジャズ・ロック〟の王道を行くもの。曲調にも幅を持たせつつ、グッドソール健在なり！　を大きく印象づける。実に痛快なテンション。（中島）



FIREBALLET
Night On Bald Mountain
ＬＰ/Passport PPSD 98010　'75年

'70年代に良質なプログレッシヴ・ロックの作品を多数発表したパスポート・レーベルより'75年デビューしたファイアバレーは、アメリカン・プログレッシヴ・ロック創世期でもあった当時に早くもジェネシス・スタイルのサウンドを確立していたグループであった。特にＢ面が素晴らしく、アメリカン・ロック特有の泥臭さを徹底的に排除した純ユーロ・ロック的な世界が展開されている。プロデュースを担当したイアン・マクドナルドの力も見のがせないだろう。翌年ベーシストが変わり、コミカルなジャケットの２nd「Two Too」を発表。オーケストラの使用、ヴォーカル・ハーモニーの多様化などにより、よりカラフルなサウンドに変化した。その後、彼らは活動の場をヨーロッパに移したと言われたが消息は不明である。（本木）



FIREBALLET
Tow, Too...
ＬＰ/Passport PPSD-98016　'76年

ダブル・キーボードの５人組のセカンド・アルバム。前作ではムソルグスキーの「はげ山の一夜」をカヴァーしていた彼等だが、本作でもクラシカルな色合いは強く、Ａ③のエンディングではベートーベンの〝第九〟を取り入れている。全体的なサウンドとしては、前作よりもさらにアレンジが練られたという印象で、イエスからの影響がよりハッキリと出てきた。特にそれはコーラス・ワークに顕著だが、Ｂ③においては、元ネタがバレてしまう箇所もあり。それにしても、何とファンタジックな音像だろう。オーケストラとバンドが一体化し、フレーズからフレーズへと息つく暇もなくリード楽器が移り変わり、かつバックのアンサンブルをキメる様は、正に圧巻の一言だ。〝声〟も含めた一大シンフォニックの名作！（奥村）



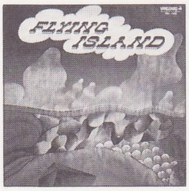
FLIGHT
Flight
ＬＰ/Capitol ST 11458　'75年

キャピトルという大メジャー・レーベルに２枚以上の作品を残すフライト。セカンドのアルバム・カヴァーが、アース・ウィンド・アンド・ファイアー等の作品で有名な長岡秀星で、多少話題になった。リーダーであるパット・ヴィダスが管楽器奏者のため、全曲ブラスがリードを取るスタイルは、はっきりと好みが二分されると思うが、恐しい程のテクニックを持つ５つの才能がぶつかり合う様は、他を寄せつけない程の迫力がある。技術面においてはハッピー・ザ・マンと互角で、アプローチがよりジャズ的な分、彼らの方がよりテクニカルに思える。ブラスと同等にフィーチャーされているシンセ、キーボードも聞き応え十分、圧巻の一言。ただ、ヴォーカル・アレンジが軟弱で、全曲盛り上がりっぱなしなので、アルバム一枚は厚苦しい。（田中）



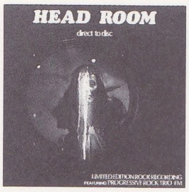
THE FLOCK
Dinosaur Swamps
ＬＰ/CBS 30007　'70年
CD/Columbia 469443-2
/ソニー SRCS-6289

フロックは'69年にデビューしたシカゴ出身の７人編成のバンド。ホーンとヴァイオリンを導入したアメリカン・プログレッシヴ・ロックの原典ともいえる存在。ヴァイオリンはジェリー・グッドマン。ジャズ、ブルーズ、カントリー等のアメリカのネイティヴな音楽にフリー・フォームな姿勢で取組んでイマジネィティヴなサウンドを作り上げた。土壌になるカテゴリーが違うだけで、音楽に向かう姿勢はブリティッシュのプログレッシヴ・ロックとなんら変わる所はない。これは、彼等のセカンドに当る作品で、翼竜の棲む沼でのフロックが遭遇した物語というコンセプトに基づく。奥の深さも感じられ、今でも充分聞き応えのある作品。（津田）



FLYING ISLAND
Flying Island
ＬＰ/Vanguard VSD 79359　'75年

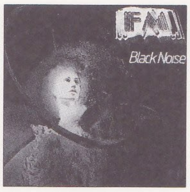
アメリカからも優れたジャズ・ロック・グループが何組か登場しているが、その数は決して多いとは言えない。今だ知られざるグループもあるものとは思われるが、アメリカがジャズ及びロックの本場であることを考えると、むしろ少ないと言えるだろう。こうした状況下、フライング・アイランドはトップ・クラスに位置するバンドの１つである。本アルバムは彼らのデビュー作であり、バイオリン(女性)、キーボード、ギター、ドラムス、ベースの５人による熱演が収められている。各メンバーのソロを繋いでゆく展開を基礎としており、軽快なリズム・セクションに支えられた演奏はいずれもメロディアスで歌心あるものとなっている。翌年発表した「Another Kind Of Space」も中々の力作であるが、本作には及ばなかった。（賀川）



FM (Canada)
Head Room

LP/Discwasher Group LBR 1001
'77年

カナディアン・プログレッシヴ・ロックの古株、FMのファースト・アルバムは、いかにもプログレ風の怪しげなジャケットのとおり、聴き応えのあるものだ。まずＡＢ面一曲づつというのに驚かされる。Ａ面は５つのパート、Ｂ面は４つのパートからなる。２曲共、ヴォーカルはほとんど入らず、３人のインター・プレイが延々と続く。いかにもダイレクト・カットの効果がありそうなインストゥルメンタルが大部分を占めているわけだ。その分アルバムとしての構成上やや大味な嫌いはあるが、逆に、キーボード、ヴァイオリン、リズムによるソロ・プレイはたっぷりと聴けるわけだから、特にヴァイオリン・マニアにはたまらないサウンドともいえる。（高見）



FM
Black Noise

LP/Passport 7007 '79年
CD/Now See Hear NSH D 7007

カナダのプログレ・シーンといえばフランス語圏を除けばプリズムやサーガ等のフュージョン感覚のバンドが多いが、このFMはどちらかというポップに近く、'78年の録音にも関わらず'80年代の感覚を持ち合わせた非常に秀れたバンドである。それよりもリーダーのナッシュ・ザ・スラッシュのセンスはとにかく抜群でアレンジも曲創りもこの手のバンドではピカーと言って間違いない。彼はソロも２枚出していてこれまた大傑作でエレクトリック・ポップの中では最高水準を持っている。３rd以後はナッシュが脱退してしまってつまらなくなってしまったが、もしもあなたがサーガの２nd、プリズムの初期、当時のアメリカン・ニューウェーブ等が大好きならば必ず気に入ると保証するのだから安心して買い給へ。（いわね）



FM
Surveillance

LP/Passport Arista AB-4246 '79年

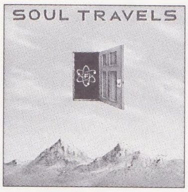
自主製作で限定プレスの１st、キングから国内リリースされた２nd「Black Noise」及び本３rd、そして４th「City Of Fear」が確認されているFM。タイトル通りのダークエナジー漂う２ndから較べると、グループの要とも言うべきナッシュが脱けただけあって、本作品はコマーシャル性を意識したカヴァーを物語るかの様に、明るめで壮大なポップ感溢れるサウンドへと移行している。が、決して完成度は落ちることなく、逆に、メインでもあるキャメロンのkey自体以前にも増して重厚感が加味されて活躍の場が多くなったみたいで、新加入のベン・ミンク（vln、g）も、先任ナッシュと互角……あるいはそれ以上に演奏力量を発揮し、グループの新機軸打ち出しへ大いに貢献している。ポップ系プログレッシヴ理想の頂点でもあろう。（大関）



FŌNYĀ
Wanderers Of Neverending Night

CD/Kinetic Discs KDCD 1004 '92年

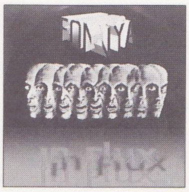
無名ながら確固とした音楽性を持ち、しかもそれに見合う演奏水準を持つ。やはりアメリカは国土が広いのか、音楽人口密度が高いのか、地域が集合した国柄と雑多な音楽的集積のある性格は、層の厚さをつくり出すのかもしれない。ニュー・エイジ・サウンドから派生したようなスペイシーな響きの、それも非常にカラフルなトーンのキーボード・アルバムだ。そこに他の楽器が絡む。情念めいたようなヴォーカルも常に奥でリヴァーブがかかっていて、全体に耳ざわりもいい。これが兄弟デュオによるものだとは思えないバンド形態を装う内容なのだ。音処理、録音からしてスタジオ経験者には違いないだろう。テクニカル面のクオリティも高いが、何よりも音楽性に一貫した独自の色を見い出せるのが嬉しい。（松本）



FŌNYĀ
Soul Travels

CD/Kinesis Inc KDCD 1007 '93年

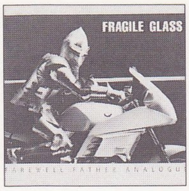
セカンド・アルバムは61分に及ぶオール・インストゥルメンタル作品で、全体が12の小曲から成ってはいるが、全編はトータライズされている。どことなく似ているといえば、オズリック・テンタクルズの手法に近いかもしれない。共に様々なインストゥルメンタルを使用しながら次第にエモーショナルにエクスタシーへとむかって昇天（？）していくようなイメージだからだ。しかし、オズリック〜が基本的にサイケ・トーンであるのに対し、こちらは純正シンフォニック・サウンドであるという違いはある。各楽器のアレンジのセンスが抜群なので、聴くほうは、彼等の世界にはまり込んで意識の高揚をおさえることができないだろう。意識下の世界を旅するようなこのイメージは、「Soul Travels」というタイトルにぴったりだ。（山崎）



FŌNYĀ
In Flux

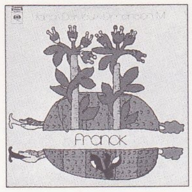
CD/Kinesis Inc KDCD 1014 '94年

ダラスのテキサス・インストゥルメンツ社に勤務するC. Fournierの完全ワンマン・プロジェクト。３作目である。路線は変わらず、オール・インストのスペイシーなシンフォニック・チューンが並んでいる。ニュー・エイジ・テイストの音色でメタル曲を演奏したかのごとき作風は、ドラマチックかつクリアー。音圧があるのに押しはそう強くない。素人臭さがまるでない分、強いひっかかりも多くない。ひっかかる部分でいえば最終曲。ジェネシスの〝Los Endos〟〝Hairless Heart〟をメドレーで演奏しており、これが極めて荘厳で楽しめる。（ミワ）



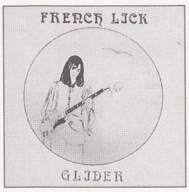
FRAGILE GLASS
Farewell Father Analogue
CD/NPM CD 89002　'89年

'80年代の中期あたりから、スタイリッシュな響きを持つシンフォニック・ロック・グループが出現し始めてきた。方法論や表現の手段としてのイディオムがほぼ飽和状態になったシンフォニック・ロックにおいて、現代の中で時代に呼応したアイデンティティーを持つ為には、むしろ、こうしたスタイリッシュな音が自然の流れであったとも言えるだろう。フラジャイル・グラスもその代表的な一例だろうと思う。かなり洗練度も高く、ディジタル機材を巧みに使用して、時代に呼応したアイデンティティーを作り出すことに成功しているように感じる。従来のシンフォニック・ロック・ファンの中には拒否反応を示す人もいるだろうと思うが、今の音として一聴してみる必要はありそうだ。　（山崎）



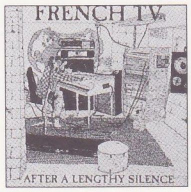
FRANCK DERVIEUX（Canada）
Dimention〝M〟
L P/Columbia ES 90155　'?年

キーボード奏者、Franck Dervieuxのソロ・アルバムは基本的にはジャズ・ロックの範ちゅうに入る。派手なインター・プレイがあるわけでもなく、むしろ地味な印象を与えるのにもかかわらず、充実感のある内容といえる。彼は情熱や感性だけで音楽を作り上げるタイプというよりも、理知的に音楽に取り組むタイプらしく、そのことをライナーに書き残していて、興味深い。本作がどことなく醒めていて、人によっては物足りなさを感じるのはそのためであろう。彼の弾くピアノ、オルガンを中心としたギター、ベース、ドラムス、ヴァイオリンに女性スキャットという編成で、クラシカルな雰囲気を持ったB①と、パイプ・オルガンで始まるブリティッシュ・ロック調のB③が聴きもの。製作年度が記されておらず、推測では'70年代後半と思われる。（吉瀬）



FRENCH LICK
Glider
L P/Fric Frac JP-FL-1/2 77　'76年

味も素っ気もないジャケット、メンバーのクレジットもなし。自主制作丸出しの音質のせいもあるがとにかくソフトな感触だ。基本的にはアメリカンなポップ・ロック路線であるが、A①でメロトロンと優しい音色のキーボードをフィーチャーしている通りシンフォ色も結構有る。メロディアスなギターやアコ・ギを多用、ふんわりとしたコーラスと共に歌メロをサポートする。フォーク調のバラードや渋めの曲を織り混ぜながらドラマティックな構成のラスト曲へ至るのだが、甘いヴォーカルや適度にしめり気のあるメロディが親しみ易い叙情込みで仲々だ。プログレ・ハードや産業ロックに通底する泣かしのツボを押えつつ思い切りスカスカで演奏力も並だが、健げさが伝わり捨て難い。残されたのは本作のみと思われる。
（中島）



FRENCH TV
After A Lengthy Silence
CD/Pretentions Dinosaur PR 0287
'87年

ケンタッキー州ルイヴィルの（自称）永遠のローカル・グループ、フレンチTVの２ndアルバム。１st同様にシンフォニック・ジャズ・ロック路線の作風で大体のメンバーは固定されているが、実態としてはリーダーのマイク・サリー＋常連ゲストと言った形のバンドのようだ。1 stアルバムに比べれば、仲々の進歩を見せているサウンドだがやはり'87年の完全自主制作と言う事もあり、プロダクションがどうにも安手なのは仕方がない所。サリー自らが書いたジャケにイエス、キャメル、ブランドＸからバンコに至るまで様々なグループ名が書かれたカセットが書き込まれているように多分にマニアックな指向があるが、それがツボを押えた作風にもなると同時に思い切りのなさにもつながっているのは残念。　（中西）



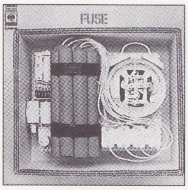
FRENCH TV
Virture In Futulity
CD/Pretentions Dinosaur CD 001
'94年

自称、「今なお地元のみにおけるカルト的存在に留まっている。」M.サリー率いるフレンチTVの３作目。番号を見てお伴りだろうが、全くの自主制作。とは言え、そこらの専門レーベル勢よりは、プロダクションを含めてトータルなクォリティは高い。タイプとしてはシンフォニック・ジャズ・ロックで、ケン・ワトソンとケンソーの中間辺り。多少、影響の元が透けて見えるのと、ヌケに欠けるのが難だが、色々な物を良くまとめてはいる。その先へ行くのが、実は難しいとは言え、まずまずの出来。本人による馬鹿馬鹿しくもシニカルなライナーは笑える。　（中西）



FRIDA BOCCARA（Canada）
Frida Boccara
L P/London LFS 9005　'?年

雄大な合唱、メロトロンの洪水の中を情熱的にうたいあげる女性voの作品。ピアノ、ギター、ベース、オルガン、ドラムも、ドラマチックな効果を引き立て、荘厳なイメージのシンフォニック・アルバムに本作を仕上げている。どちらかと言うと、イタリア物を思わせるタッチと言えばわかり易いだろうか？　書いていて裏のクレジットを見て気づいたのだが、かのAlain Goraguerがアレンジを担当しているではないか!! ということは、ヤバイ……カナダ物ではない可能性もある。まあ、内容的には歌物系プログレ・ファンもしくはメロトロン・マニアが思わず拳を握りしめる内容なので紹介する価値はあると思う。　（奏田）



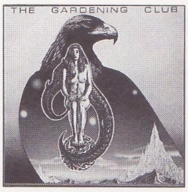
FUSE
Fuse
LP/Epic 26502　'68年

ヒューズは後に有名なチープ・トリックを結成するリック・ニールセンとトム・ピーターソンが在籍していたグループ。全体を通じての印象はハード・ロック・グループの感が強いが、全曲にオルガンがフィーチャーされており、それがプログレッシヴなイメージを形成している。ことにA④〝To Your Health〟は、展開もかなりプログレッシヴであり、又、メロトロンを導入して、この曲に関していえば、純粋にプログレッシヴ・ロックとして通用するインストゥルメンタル作品。この路線で進めば、チープ・トリックはシンフォニック・ロック・グループになっていた可能性もあるという見方も楽しい。グループはギター、キーボード、ドラムス、ベース、ヴォーカルの5人編成で、当時の平均年齢は18歳と若いグループだった。（山崎）



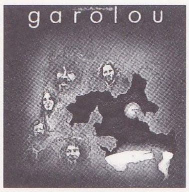
GABRIEL BONDAGE
Another Trip To Earth
LP/Dharma D 808　'77年

アトランティス・フィルハーモニックと同じマイナー・レーベルDharmaより「Angel Dust」でデビューしたガブリエル・ボンテージは知名度こそ低いが、メジャー・アーティストの作品と比べても遜色ない素晴らしい作品を残したグループだ。一時期のロキシー・ミュージックやホークウインドを思わすスペイシーなキーボード群、サックスの使用に加え、時にP・ハミルを思わすシアトリカルなヴォーカルが繰り広げる退廃的な音空間は、非常に味わい深いものがある。本作は'77年に発表された2ndアルバム（何とカラー・レコード）で、よりスペイシーな感覚の強い作品となっている。その後の消息については不明。シンフォニック・ファンには本作を、少々クサめなサウンドを好む方には1stをお推めする。（本木）



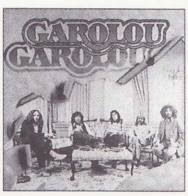
GARDENING CLUB（Canada）
Gardening Club
LP/Illuminated I.R.5002　'?年

表裏ジャケット共に全く良くないので、完全に無視されているレコードだが、実は同レーベルの〝HEADS IN THE SKY〟を上回る好内容だ。内袋は凝ったイラストなので、こちらをジャケにすれば良かったのにとも思うのだが……。歌中心のソフトなA①②からスペーシーなジャズ・ロックのA③へと続き、何とAnn Mortifeeの美しいスキャットが虚空を舞い、この辺りから聴き手は引き込まれてゆうゆうたる〝Andromeda〟からスペーシーなギター・ソロの空間を通過し、ドリーミーなジャズ・ロックでA面は幕を閉じる。そして、ムーディーなB①、B②へと続くこのトータルLPはカナダならではの空間性を持った完成度の高い一枚だろう。非常に洗練され、おだやかな暖かさに包み込まれた、北アメリカならではの音楽。（奏田）



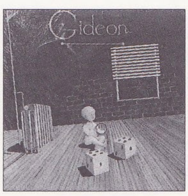
GAROLOU（Canada）
Garolou
LP/London LFS-9027　'78年
CD/Just A Memory Vol.1：9101-2

カナダにはトラッド・フォーク・サウンドをベーシックとして、プログレッシヴ・ロックの要素を取り入れた〝謎めいた〟グループが数多くいる。ムジカ・オルビスやレ・マッチなどはその代表選手。このガロルーも、トラッド・フォーク・サウンドをベーシックとして、スリリングなヴァイオリン・プレイをフィーチャーしたエスペラント風のナンバーや、壮大なキーボード・アンサンブルと泣き泣きのギターが織りなすシンフォニック・ナンバーを持つグループ。前記したレ・マッチやムジカ・オルビスよりも明確にプログレッシヴ・ロックとしての要素を押し出したアルバムであり、ボーレンやオパス5等と比較して知名度はないが、これらに匹敵する内容と魅力を兼ね備えたカナディアン・プログレを代表する一枚だ。（N. Ueno）



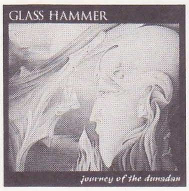
GAROLOU
Romancero
LP/London LFS　'80年

記憶が定かではないけれども、確かガロルー名義での2nd。この後にも1枚か2枚か出ていたと思うがかなり現代的になってしまっていてつまらなかったという印象しかない。本作にもその傾向がありヴォルテージの低下は否めないが、あのヴォーカル、トラッド風のメロディ、未だにゲストのヴァイオリン（ずっと同じ人！）は健在で、売り払ってしまおうという気にはならない。前2作で泣いていたギターはやや控え目になりキーボードが目立つが、やはり彼らを魅力的な存在にしているのは大らかなメロディと、山の大男といった感じの暖みであろう。ヨーロッパからはまず出て来ないと思われる大陸的な音だが、アメリカもので目立つ浅薄さが感じられないのはフランス語のせいなのだろうか。住んでみたい国だ。（森下）



GIDEON（Canada）
Eight Reasons Why
LP/（private press）WRC 1-1627　'?年

Smalczewski兄弟2人にドラムを加えた編成トロント近郊のOshawaで制作された、知られざるカナディアン・ヘヴィー・シンフォニック・アルバム。A①冒頭からムーグが唸りを上げ、ハモンド・オルガンの響きが冴え渡る。カナダらしい空間的なスケールを持った内容で、HUNT、AUALON、WAHKA、MAGIK、ZON、FIST／Roud One辺りの作品よりも本格派。むしろDILLINGER、Robert connolly辺りをヘヴィーにした感じと言った方が近いかも知れない。カナダは自主盤が多いので、この手のグループはトロント周辺に他にも埋もれている可能性が強い。（奏田）



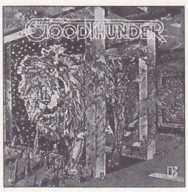
GLASS HAMMER
Journey Of The Dunadan
CD/Arion 7690-51111-120 '93年

このグラス・ハマーというバンドはアメリカから突然、出現したシンフォニック・グループ。フレッドとステファンというアーティストが中心になったグループで、彼等はヴォーカルからキーボード、ギター、パーカッションまでこなすマルチ・プレーヤー。他に6人のミュージシャンが本アルバムには関与している。掛け値なしで、エマーソンに肉薄するキーボード・ワークのできるプレイヤー達で、今のEL＆Pなど問題にしないようなシンフォニック・サウンドが展開される。イメージは「恐怖の頭脳改革」か？ 全体的に聴くと、実験的な部分もあり、やや、とらえどころのないところもあるが、2/3程を埋めつくすぶ厚いシンフォニック・ワールドは比類ないものだ。（山崎）



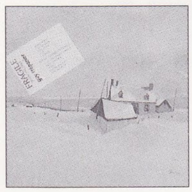
GOOD RATS
The Good Rats
LP/Kapp KS3580 '68年

豪快かつ痛快なハード・サイケの傑作。ペッピ＆ミッキーのマルチェロ兄弟を中心に結成され､兄ペッピがほぼ全曲を手がけている。ペッピの若さにまかせたパンキッシュなヴォーカルに、ミッキーのギターがガリガリと切れこみ、オルガンが響き、ホーンやストリングスがユーモラスに、時に美しく絡む様は気持ちいいことこの上ない。ライブでも短パン姿でブリキのゴミバケツやバット、果てはダッチワイフ等を手に、客にゴミを投げつける等、派手なパフォーマンスを繰り広げていた様である。その後バンドは一度活動を休止した後、'74年にツイン・リード・ギターのハードロック・バンドとして再編され、7枚のアルバム（6thにはメル・コリンズやラリー・ファーストも参加！）を発表。'80年代前半まで活動していた。（中）



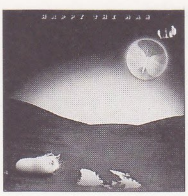
GOOD THUNDER
Good Thunder
LP/Elektra EKS-75041 '72年

これをプログレッシブと言うべきか、ひねくれたハードロックと言うべきか。中堅ブリティッシュ・プログレ風イントロからG・ジャイアント風歌メロが始まり、いきなりクラシカルなオルガン・ソロに突入したかと思ったら、様式美ギター・ソロで盛り上がるA①。6/8拍手からシャッフルにリズムチェンジし、ピアノでしっとり歌い上げて、また元に戻るA②等、曲展開をいちいち説明して行ったらきりがない。こう書くととりとめがない様に思えるが、全体の印象はまとまっていて聴き易いから不思議だ。余裕とユーモアの産物である。実力あるミュージシャン達が、ドアーズのプロデューサーの元に作りあげた、人を食った快作。メンバーはこの後LA JETS、1994といったバンドを渡り歩くが、こちらは平凡な出来。（中）



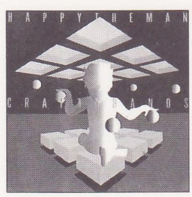
GUY TRÉPANIER（Canada）
Fragile
LP/SO-1781 '78年

ギ・トレパニエールなるアーティストの作品で、他にアルバムがあるかどうかは不明。本アルバムではトレパニエールは詩、曲の他、ピアノ、シンセサイザー、アレンジ、及びプロデュースまでをこなし、バックには室内楽団を配している。一聴するとシンガーのアルバムのようで全編に渡ってヴォーカル曲が続くが、アレンジは正にプログレッシヴ・ロック色をだしており、特にB面のアコースティック・ピアノがフィーチュアされるあたりは最もその手のサウンドに仕上がっている。フランスでいうとジル・ジャネラン、イタリアならエンツォ・スタヴォッロかチロ・ダミコあたりがその手のサウンドを有するアーティストだが、この作品もそれらに肉迫する秀れた内容を持っている。（山崎）



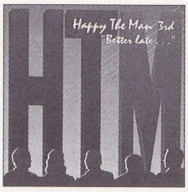
HAPPY THE MAN
Happy The Man
LP/Arista 4120 '76年

キット・ワトキンス率いるハッピィ・ザ・マンのファースト・アルバム。どちらかというと次作「Crafty Hands」のほうが評価は高いが、出来としてはこのデビュー作も同じ水準にあり、甲乙付け難が出来である。アメリカのプログレッシヴ・ロックというものは、ヨーロッパのそれのように精神性を色濃く反映するタイプではなく、どちらかというとメカニズムを重視した、純音楽的な意味での完成度を追求していくタイプが多い。そんなテクニカル志向の表現主義的ロックの最右翼に位置していたのがこのハッピィ・ザ・マンである。技術的水準の高いグループが多いのは前述の国民性を反映しているからであろうが、そんな中においてもひときわ輝いた彼等のサウンドは歴史に残るものだ。（山崎）



HAPPY THE MAN
Crafty Hands
LP/Arista 4181 '78年

「Happy The Man」（Arista 4120 '77）に続くハッピー・ザ・マンの2nd。'70年代後半に盛り上がりを見せたアメリカン・シンフォニック・ロックの頂点に位置する名作である。ダブル・キーボード（1人はフルート、サックスも吹く）、ギター、ベース、ドラムスの5人から成るメンバーは、一部アコースティック系の楽器も使い、メロディアスで繊細な演奏を繰り広げている。一聴したところ派手さはないが、その軽やかかつ穏やかなサウンドは心地よく、聴く程に味が出てくる。グループは、その後、'83年に「Better Late」（Azimuth 1003）（録音は'79年）を発表、メンバーのキット・ワトキンスもソロ・アルバムを多数､Coco Rousselとのデュオを1枚リリースしている。（賀川）



HAPPY THE MAN
Better Late
LP/Azimuth AZ 1003
'83年('79年録音)
CD/Cuneiform WMAS 55001

録音は'79年、リーダーのキット・ワトキンスがキャメルに参加していた頃のことである。ドラマーが元エルドンのココ・ルッセル（後にワトキンスのソロ・アルバムにも参加する）に替わった以外は前2作と同一のメンバー構成（key＆fl、e-p＆as＆fl、g＆vo、b）であり、キャメルの「I Can See Your House From Here（リモート・ロマンス）」にも収められていた〝Eye of the storm〞で幕を開ける演奏は明らかに従来の作品の延長線上にある。各種キーボード、フルート、ギターと小気味好いリズムとが一体化した演奏はメロディアスであり、独特の広がりを持っている。軽やかで起伏に富んだ曲構成も見事である。彼らがアメリカを代表するシンフォニック・ロック・グループであったことを再認識させるに十分な内容を持った作品である。（賀川）



HAPPY THE MAN
Beginnings
CD/Cuneiform 55003 '90年
('74、'75年録音)

ハッピー・ザ・マンの本作は、彼らが活動を始めて最初の2年間の、'74年、'75年のテイクで、ファースト・アルバム・リリース以前の未発表曲集。ライヴ録音とスタジオ録音に分かれているが、スタジオ録音といっても4チャンネルのマルチのリミックス物。いわゆるデモ・テープというやつだ。内容的には、'75年のライヴ・テイクが抜き出ている。すごくテクニカルでテンションの高いコードを多用しているにもかかわらず、彼らの持ち味の不思議な イマジネーションを換起させるヴィジュアルな曲想と、どこか優しく柔らかな印象は後の作品とほぼ同じレベル。一曲目は例のシンフォニックのV.A.と同じ曲？ ただ、彼らをカンタベリー・サウンドと呼ばないで！
（LUNA）



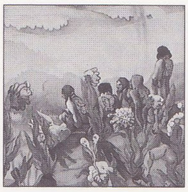
HAPPY THE MAN
Live
CD/Linden Music LM2021
'94年('78年録音)

キット・ワトキンスとココ・ラッセルを擁するHAPPY THE MAN、'78年のライヴである。一瞬オーディエンス録音かと思わせる音質ながら、内容的には非常に充実したライヴといえる。2nd「クラフティ・ハンズ」の1曲目、あの超名曲のライヴ・ヴァージョンが聴けるとあっては、それだけで手を出すファンも多いのではあるまいか。全体としてはスタジオ曲に忠実な印象を受け、ナイーヴかつセンシティヴな演奏が展開していく。ジェントル・ジャイアントを女性的にし、エニドをクロスオーバー寄りにした音、といっても的外れだろう。いわくいいがたいオリジナリティである。キャメルのA.ラティマーが目をつけたのもうなづける。しかし、きらめく演奏にあって平然と入ってくるハウリング・ノイズ。当時のバンドの経済状態を象徴するようで悲痛である。（ミワ）



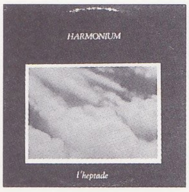
HARMONIUM（Canada）
Harmonium
LP/Celebration CEL 1892 '74年
CD/Polydor 833 991-2

デビュー作。ジャケット裏にはSerge Fiori、Michel Normandeau、Louis Valoisの3人が写っている。繊細に重ねられていくアコースティック・ギターの響き、ふわっとエコーの効いたコーラス、優しく語りかけるヴォーカル。彼らのスタート地点を明確に示す叙情的フォーク・ロック。ケベックという出自もあろうが、むしろトラッド／フォークの流れでとらえるべき存在に思える。郷愁を誘う子供達のざわめきやフルート、ピアノの導入がシンプルな中にもほとばしる感傷といった趣で胸に迫る。以後の作品と比べてはプログレッシヴと呼べるものでは無いが、良い意味で浮き足だった夢想ムードが支配的で捨て難い魅力がある。余りにシンプルにフォーク過ぎるのは確かであるとしても、フォーク系歌ものとして再評価したい作品。（中島）



HARMONIUM
Les Cinq Saisons
LP/Celebration CEL 1900 '75年
CD/Polygram 833 990-2

マンドラゴラの花が咲き乱れる岡を描いたカヴァーにまず目を惹かれるこのアルバムは、アルモニウムの2ndにあたる作品で、最も美しい、豊かなプログレッシヴ・ロックを演じている。彼等は基本的にはフォーク／ロック的なサウンドのグループなのであるが、この作品では、豊饒なメロトロンを加えて、この世、いや架空のものもあわせて、最も美しい紅葉の秋の一日を演出してみせる。それは、聴くリスナーにとって、想像の世界の際にたたずむ甘美な秋の幻想である。そこではマンドラゴラが咲き、深紅の落ち葉が空を埋めつくす程、風に乱れ、無数の蝶が舞いあがる。これ程、視覚的にせまる音もめずらしく、一種、麻薬的な甘美さすら持っている。その傾向が強いのはA③とB面のほとんどを使った組曲である。フランス盤、及びCDもリリースされている。（山崎）



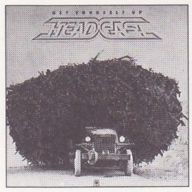
HARMONIUM
L'heptade
LP/CBS PGF 90348 '76年
CD/CBS G2K-90348

アルモニウムの傑作。名作である2nd「Les Cinq Saisons」に続いて見事に独自の美的空間を構築している。基本的にはフォークからスタートしたグループなのだが、カナダという土地柄のせいなのだろうか？ まさにフレンチ・シンフォの繊細さと北欧に通じるある種のクールな雰囲気を合わせて持っている。前作に較べて若干シリアスさが薄れているような気はするが、そのぶん甘美さが増しており、高純度な美しさにさらに磨きがかかって聴く者を虜にする。CD化に伴って美しいジャケットが縮小されてしまうのが残念ではあるが、音が出た瞬間に強烈に想像力に訴えかけ、目の前に天上世界を眺めるような空間が出現する。これもまた、聴く者を別世界に誘ってくれる高尚な作品。
（津田）



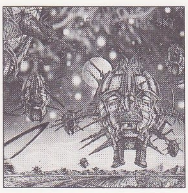
HARMONIUM
En Tournee
LP/CBS PFC 280045 '80年
('77年録音)

「L'Heptade」発表時、'77年ヴァンクーヴァーでのステージを収めたライヴ盤。ラジオ・カナダ用の音源を仏Spalaxがレコード化した2枚組で「L'Heptade」のほぼ全曲が演奏されている。Neil Chotemを除く同作の主要メンバーとコーラスのMonique Fauteuxの7人編成で、音数は全く問題ない。さすがにオーケストラ曲は外してあるが、彼らの実力を示すに充分な劇的ライヴだ。叙情と言うより哀愁/センチメンタルな彼らの世界は、甘く切ない。セルジュの歌声、オーケストラなアレンジ、繊細で時に雄大なサウンドは言わばフランスの恋愛映画にも似て、視覚と感情に訴える一編の映象である。動的な部分での勢い、タメ、メリハリにおいてスタジオを上回る部分も少なくない。ライヴ用アレンジの妙(ソロ等)もたっぷり味わえるのが嬉しい。(中島)



HEAD EAST
Get Youself Up
LP/A&M SP-4579 '76年

イリノイ州出身の5人組のセカンド・アルバム。同郷のREOスピードワゴン辺りとよく比べられる彼等だが、その音楽性は、似た点もあるものの実はかなり違う。中西部を拠点としていたバンドだけあって、ハード・ブギやカントリーっぽいナンバーも確かにプレイしてはいるが、彼等の場合、スティックスと親交が深かったことからも分かるように、キーボード・ワークとコーラス・ハーモニーに〝売り〟があった。本作でも、ハモンドやムーグが出まくりで、特に、展開がドラマティックで、ヴォーカルのヴァースがどことなく〝21世紀の精神異常者〟してるHRナンバーのB⑤は絶品。その後、レインボーに(2度も)先駆けてラス・バラッドをカヴァーする等、マニアックな話題の中、7〜8作を残す。(奥村)



HEADS IN THE SKY (Canada)
Heads In The Sky
LP/Illuminated IR 001 '81年

リーダー格のラス・ウォルカーがプロモートのため来日したとき、幸運にもあのたかみひろし氏と会うことが出来、あっという間に国内盤がリリースされてしまったというエピソードを持つヘッズ・イン・ザ・スカイ(オランダ盤もリリースされている)。'80年代初頭にテラスド・ガーデンが登場するまでの間、久しく無風状態であったカナダで唯一気を吐いたバンドでもあった。サウンド的にはフロイドとジェネシスからの影響が何処となく見えるが、ジャケットからイメージされるSF的なトータル・サウンドは魅力的だ。後に12インチEP「Poetry & Soience」もリリースした。又、ジャケット・イラストを担当したマーティン・スプリンゲットのソロ作が同レーベルよりリリースされており、ラスがフルートとシンセで参加している。(本木)



HEIR APPARENT
One Small Voice
LP/Roadracer RO 9472 1 '89年
CD/アポロン APCY-8018

クイーンズライチと同じシアトル産のバンドで結成は'84年。'85年の「Graceful In Heritance」に次ぐ2nd。本作録音の前に加入したvoは、もろジェフ・テイト声で、サウンドも当然「Operation : Mindcrime」時までの本家とそっくり。セルフ・プロデュースだが、エンジニアはこれ又本家のミニ・アルバムを担当したトム・ホールなる人物。だが、フォロワーと一言で切り捨てられない何かを持ったバンドだった。本当に何か程度のモノなのだが……。サイモン&ガーファンクルの〝サウンド・オヴ・サイレンス〟ではギター・リフとコーラスがいい味を出しているが、本家も〝スカボロ・フェア〟を演ってはいまいか？ '90年の国内盤CD発売時には、サポートとして録音に参加したgに変わる正式メンバーが入ったようであったが……。(川上)



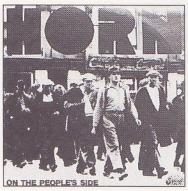
HIGHWAY ROBBERY
For Love Or Money
LP/RCA LST-4735 '72年

ドラマーがリード・ヴォーカルを兼ねるニューヨークのハードロック・トリオ。ということはSIR LORD BALTIMOREと同時期で同じ編成ということになるが、同じゴリ押しタイプでも、A①を除くと殆んどサイケ色はなく、より整合感があり、メロディアスなコーラスワークを前面に押し出す所に特徴がある。スピード感とパワーは充分で、インスト部分も比較的長く、特にA②④三身一体リフ攻撃は強力。要所をボトルネック奏法で締めるギターはB②④でセンスの良さを発揮。ベースはジャック・ブルースを彷彿とさせるフレーズをブンブンとよく歌わせ気持ち良い。ドラマーはナルシストっぽい外見に似合わずB④の乱れ打ちは迫力モノ。しかもアコースティックな曲もgood。ただの単細胞ハードロック・バンドではない。(中)



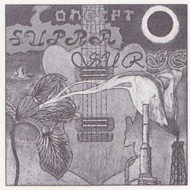
HOLDING PATTERN
Majestic
CD/Art Sublime ASCD 491-002 '81年

コネチカットのバンド。'70年代初期にはドラマーが後のイースター・アイランドのギタリストと同じバンドに在籍、またギタリストはT・マカパインが優勝したギター・コンテストで入賞したという妙な経歴を持つ。結成は'81年。同年、ミニLPを発表、'83年にはシングルおよびビデオを製作、MTVでもオン・エアされた。本作はそのミニLPとシングルに未発表ライヴを加えた77分にもおよぶコンピレーション・アルバムである。音の傾向は、明らかに'70年代ヨーロッパのシンフォニック・ロックを継承する曲想。キャッチーなメロディ・ラインはオランダの諸バンドを、重くよどんだ演奏はイタリアン・ロックを想起させる。シンセとギターの速いパッセージ、メロトロンや12弦ギターの使用など、どれもメロディック。(ミワ)



HORN（Canada）
On The People's Side
ＬP/Special 9230-1028　'?年

ホーン唯一の作品と思われる。'71～'72年という時代背景もあって、歌詞の重要性が高く、ヴォーカリストを前面に押し出した部分も少なくないが、他のメンバー（ギター２人、ベース、キーボード、トランペット、ドラム）もなかなかの強者である。ヴォーカル中心の部分では派手ではないが効果的かつ印象的なバッキングを行ない曲を盛り上げている。一方、インスト主体の部分ではその実力を発揮している。技術的に傑出したものとは言い難いが、各メンバーとも確実なプレイを展開しており、ややジャズィな熱演を聴くことができる。特にマリンバの軽快なプレイが印象に残る。グループ自体がプログレッシヴ・ロックを意識していたとは思われないが、プログレッシヴな姿勢を持った、カナダ最初期のグループの１つである。（賀川）



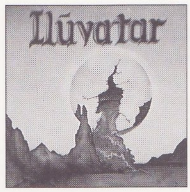
THE HUMANIST ADVENT CONCEPT（Canada）
Supra Surge
ＬP/Reveal RC77-3　'80年

彼らが示す音楽は、確かに複雑で手のこんだものだが、非予定調和とでも言おうか予測の出来にくい快感が所々に待ち受けている。キーボードのロバート・シュウェルヴ、ギターのピーター・リデンの２人が殆んどの曲を手がけており、それがまともに曲に反映されている。２人のソロに負けじとドコドコ叩きまくるドラムが、やたらとうるさいのだが、時折聞こえる狂った様な叙情が、ラッキーのＶサインでグー。オリジナリティーの面では、かなり高い評価を得られそうだが、どこかしらフランスの香りが漂っていることは確か。音の断片を拡張した曲の構成に難はあるが、十分に評価出来る内容を持っている。もう１枚作品があるが、どっちが先か今の所未確認。（田中）



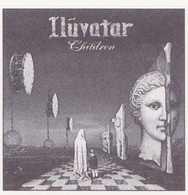
THE HUNT（Canada）
The Hunt
ＬP/CRT 9216　'76年

ディリンジャーなどで知られるダフォーディル傘下のGRTに、２枚の作品を残しているザ・ハントのこれはファースト。全体的にヘヴィ・ロック仕立てのそのサウンドは、スピード感と重厚なハーモニーを伴って、終始迫力のある展開をする。それ程に凝った作りをしている訳ではないが、アコースティック・ギターとフルートを使用した１曲目等に、彼らの並々ならぬ力量が浮き出ている。また、オルガンとギター・ソロが特に光っていて、２曲目からＡ面ラストまで仲々聞き応えのある演奏が繰り広げられている。ケベック州のバンドが何かと好まれるカナダにあって、オンタリオ出身のザ・ハントは結構貴重な存在ではないだろうか。（田中）



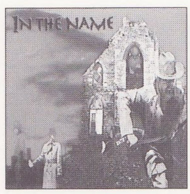
ILÚVATAR
Ilúvatar
CD/Kinesis Inc. KDCD 1008　'93年

何よりも〝ロック〟としての高揚感があり、好感が持てた。かなりライヴも重ねているようだ。惜しむらくは、マリリオンなどと同様、音楽的にはトライアドの連続で、サウンドやテクニックは〇なのに、いまひとつ展開が少ないところだ。とはいえ、アレンジなどはなかなか凝っており、ドラムもリズムが良く、いわゆる打込みインディーズに見られるような欠陥はない。ヴォーカルは、声質は異なるが、ハイ・トーンで張るところなど、こぶしの回し方がフィル・コリンズそっくり。③が佳曲。④などのリズム・アレンジやコーラス/サウンドには、そこはかとなくアメリカっぽい〝ご陽気さ〟が漂ってしまうが、そこはご愛嬌。アコースティック・ギターのアルペジオを主体にした⑤がいい。歪む一歩手前ぐらいにパワーのあるミキシングがあぶない。（難波）



ILÚVATOR
Children
CD/Kinesis KDCD 1016　'95年

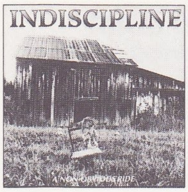
'95年現在、北欧のシーンと並んで多くの新人グループを輩出しているのがアメリカだ。定期的に行なわれている〝PROGFEST〟も今年で３年目を迎え、ローカル・プレスでリリースされるプログレッシヴ系作品は数え切れない程だ。このイルヴェイターもそんなシーンの中で活躍しているグループでこれがセカンドにあたる。表現力、録音技術、全ての点で確実にスケールアップしているのがたのもしい。イメージとしてはSI系の良質な作品群にも似た、メロディックでヴォーカルをメインにしたシンフォ・サウンドであり、そんな中にひそむロック・スピリットが心を打つのは、あのペンドラゴンやシャドウ・ランドといった'80年代を生きのびてきたミュージシャン達と同様である。（山崎）



IN THE NAME（Canada）
In The Name
CD/ビクター VICP-5568　'95年

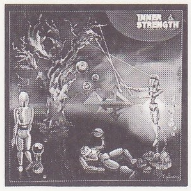
トロント出身の４人組のデビュー・アルバム。以前はKINGS BANEと名乗っていてツイン・ギターの５人組だったが、ギタリストがひとり脱け、バンド名をSEVEN YEARSと改名した後、またまたバンド名を変えて本作をリリースした。'91年制作のKINGS BANE時代の６曲入デモ・テープは本誌マーキー50号で紹介済だが、それから４年間でサウンドの質は少々変わってしまったようだ。ハイ・トーン・シンガーの声質は少々コモったものになり、ギターの音色もアメリカの〝今様〟の妙にヘヴィなものに。ラスト３曲は日本盤ボーナス曲で、上記デモからのリメイク。が、これがあることで余計にKINGS-BANE時代が光ってしまう。シンガーの歌い方も含めて'91年の方がずっと良かった。ちょっと悲しい。（奥村）

INDISCIPLINE (Canada)
A Non-Obvdous Ride
CD/Orange ORCD 001 '94年



ソリッドなギター・トーンと手数、音数の多いベース、ドラム、そして無表情なヴォーカル・ライン。おおよそケベックのこれまでのイメージには当てはまらないモノ・トーンな音は、どこかキング・クリムゾンの持つ音の暗さに通じる。インディシプリンというバンド名がそのイメージを一層強めるが、それよりも、'90年代に入ってからのロック・ミュージックの先鋭さを吸収した音といった方がいいかもしれない。その中でもソリッドさを前面に出したバンドだ。ギターはリフ主体で、メロディックな部分はほとんどない。通して聴くと、そのためか、曲の傾向が似ていて印象に残りづらいということにもなる。ハード・ロックの'90年代における正統派とも言えるような音だ。ちょっと味気ないかも。　（松本）

INNER STRENGTH
Shallow Reflections
CD/Institute Of Art RTD 397.0004 '93年



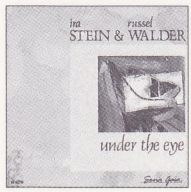
ニューヨークを拠点とする４人組のデビュー作。非常に複雑な構成の中に超絶技巧パートを巧みに折り込んだ攻撃的なスタイルは、WATCH TOWERからの強い影響の下に誕生したものだろう。難解なメロディもしっかりと歌うハイ・トーン・シンガーの存在は、バンドの音楽を自己満足で終わらせないことに大きく貢献している。こういった音楽を追求すればする程、フレーズごとのメロディに対する配慮とセンスが重要になってくるのだが、その点でも及第点を与えたい。シンプルなアコースティック・ナンバーのタイトル曲の存在は、彼等が技巧に溺れたバンドではないことの証であろう。尚、同年に米国パワー・メタル勢を集めたオムニバス「Molten Metal Monsters Vol.1」に本作未収録曲を１曲提供している。　（芦沢）

INTRUSION
Passing Without Notice
ＬＰ/Intrusion INP-2461 '82年



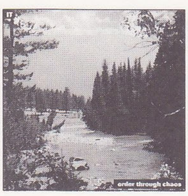
自主制作は大体〝志が高くても予算は低い〟ので、作品内容に質が伴わない例が多い。この作品も、ジャケがファンタスティックで楽曲と面白いだけに、録音の悪さが残念だ。３人のパーカッショニストを中心とした変則的なプロジェクトで、作風はキーボードとドラムのデュオに様々なゲストを加えた感じ。売りは〝多彩なキーボード・プレイとスリリングなドラムをフィーチャーしたシンフォニック・ロック。14分を超える三部構成の組曲を含む、雄大なスケールの大作あり。といった所だが、肝心のドラム録音が軽く、キーボードもピアノとプロフェット５のみで、オルガンの音など当然リアリティに欠ける。誰か彼らに豊富な機材と有能なエンジニアを与えてくれ！　EL＆PとP・シンフィールドに捧げられている。　（中）

IRA STEIN & RUSSEL WALDER
Under The Eye
CD/Sona Gaia ND-62760 '90年



アイラ・ステイン(p)とラッセル・ウォルダー(ob)のデュオは'81年にスタートしている。Windham Hillから「Elements」('82)、「Transit」('86)をリリースしており、ピアノとオーボエの織りなす幽玄で深みのある音楽は同レーベルにあっても出色のものだった。彼らの音楽の背景にOREGONがあるのは一聴して明らかであり、実際に彼らは直接コロラド州ボールダーのナローパ・インスティテュートでOREGONの教えを受けた門下生だった。Windham Hillを離れての本作ではスティーヴ・ティベッツとの共演で知られるマーク・アンダーソン(perc)のほかゲストを数名迎えており、特にギターが入ったことで更にOREGONの影響がハッキリしている。ただ数曲ながらドラムスの起用は安易さに流れ、ピンと来ない。　（坂本）

IT
Order Through Chaos
CD/(Ita) Mellow MMP 185 '94年

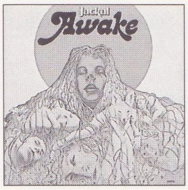


伊国の圧力団体、メロウ組からの新人は中心人物２人による米国人のプロジェクト。コピー・ライトの年代に約10年のバラ付きがある所を見ると満を持してのデモ・テープ送付も、あっさりOK即CD化という明日なき内部抗争の渦中にヒット・マンとして迎えられた口であろう。初めてチャカを持たされてやたらと撃ちまくるチンピラとはちがい、ある程度年季の入った、道理のわかる流れ者といった所か？「もう若い衆の芽を摘むのは止めて、死んだオジキたちの供養に専念したらどうですかいモローニ親分。」と言いに来たとすれば役者不足ですがね　（川上）

IXT ADUX
Brainstorm
ＬＰ/Madame X MAX 001 '82年



男の叫び声に続いてBoozの４thみたいな水を流す音（痔なのか!?）。いきなり始まるラウドなギターの音はハードロックを予感させるが、それにしては余りに激しいリズム・チェンジに変拍子の雨あられ。俗に言うクリムゾン・タイプとして括られてきた音だが、実際に似てるなと思わせる部分はそう多くはない。クリムゾンはもちろん後期を指し、イアーダンスみたいな新生タイプを指すのではない。ギター２本にドラムス、ベースのバンド構成は〝レッド〟や〝戦慄パート２〟を目指すには充分かも知れないが、本物のクリムゾンが持っていたあの〝サウンド〟を創造するまでには当然至っていないのでやや単調になってしまう。暗さ、硬さ、重さの内どれか一つもう少し深味があれば愛聴盤になったであろう惜しい一枚。歌詩付。（森下）



JACKAL (Canada)
Awake

LP/Periwinkle PER 7309　'73年
CD/(Ita.) The Labyrinth TL 2002

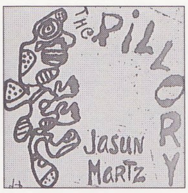
カナダはトロント出身の幻のグループJACKAL、噂のみぞ聞く存在であったが実際に手にしてみてその音楽水準の高さに改めて感心させられた。プログレ、サイケ、ハード・ロックと言った全てのカテゴリーを超越し、ロック本来の持つ血の熱くなる様な高揚感をその卓越したテクニックと素晴しい楽曲センスでキーボード、ギター、ベース、ドラム、ヴォーカルを通じて徹底的に押しまくり、尚かつリリシズムも兼ね備えた彼らのサウンドは正に圧巻という言葉が相応しい。ジャケットのセンスもこの手の大物らしさを感じられて好感が持てる。リード・ヴォーカル、キーボード、ギター、ベース、ドラムの5人編成で、これが唯一のアルバムになる。　(松尾)



JACQUES TOM RIVEST (Canada)
Jacques Tom Rivest

LP/CBS PFC 80020　'79年

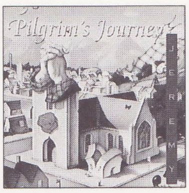
言わずと知れたポーレンのリーダーであり、ヴォーカリストであったJ. T. Rivestの1stソロ。ポーレンと言うと彼の声質のためか一見ジェネシス風のサウンドに見られてしまいがちであるが、実はタイ・フォンやイトイズに通じる歌心に満ちたシンフォニック・バンドである事を忘れないでほしい。その事を明確に呈示しているのがこの作品である。少々オリエンタルな雰囲気があり、以前と比べると角がとれてリラックスした印象を受けるが、まろやかなヴォーカルを中心に叙情的にオーケストレイションされたサウンドは相変らずである。彼は'81年に2ndを発表している。よりヴォーカルを中心にしたシンプルなカンタウトーレ的な内容であるが、やはり本作同様味わい深い好アルバムとなっている。　(本木)



JASUN MARTZ, THE NEOTERIC ORCHESTRA
The Pillory

LP/All Ear AE 11480　'78年
CD/(Swe.) Ad Perpetuam Memoriam APM 9404

オール・イヤーズ・レーベルは、日本のクロニクルのLPをリリースしたり、一時アメリカのプログレッシヴ・シーンで活動していた。ジャーサン・マーツは元フランク・ザッパのグループに在籍していたキーボーディスト。シンセ、メロトロン・ピアノ、オルガン、サックス、フルートetc.と多才に楽器を使い分けている。又、ゲストもエディ・ジョブソンを始め、36人のオーケストラを迎えて演奏は繰り広げられる。実験的な作風の演奏であり、アンビエントな持続音を主とした部分や、マグマ的なダイナミズムを感じさせる部分、ロマン派後期的な弦のユニゾンによるエロティシズムを表現する部分、そして即興的な部分から成り、全体的に非常に硬質な質感を持った作品である。オリジナル初回プレスはクリアー・ビニールでリリースされた。　(山崎)



JEREMY
Pilgrims Journey

CD/Kinesis KDCD 1015　'95年

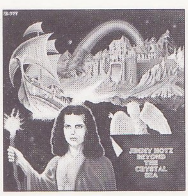
ジェレミーと言う名に聴き覚えがある人はそうはいないと思うが、自主制作としてアルバム十数枚のキャリアがある。もっともそれらはまるで畑違いのポップ／ハード路線がほとんどらしいが。ともあれ、巡礼の旅と言うタイトルの本作、ストーリーに乗って叙景的なインスト曲が続いて行く構成。シンセ・オーケストレーションにアコ・ギを散らし、エレキ・ギターのロング・トーンを乗せる、と言った作風は初期のハケット、ガンダルフ辺りに通ずるもの。多少、リズムの音処理に細やかさが欠けるのが難だが、伸びのある甘いギター／シンセは仲々。　(中西)



JESTER (Canada)
It's Time

CD/ゼロ・コーポレーション XRCN-1137　'94年

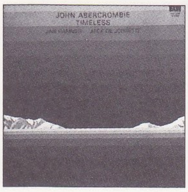
カナダはオンタリオ出身の4人組のデビュー作。エモーショナルな歌唱を聴かせるシンガーと芯の太いギターから、サミー・ヘイガー加入後のヴァン・ヘイレンを思わせる①で幕を開ける本作だが、そのシンガーが兼任するキーボードが彼等の隠しポイントとなっている。ジョナサン・ケインのようなスマートかつスペイシーな音が、どこか荒涼としたカナダらしい（？）サウンドを生み出しているのだ。叙情的なバラード④においても同様で、ギターの情感溢れるフレーズも、それにより鮮烈な印象を残すことに成功している。ただ、スペイシーに迫るコーラスが光る⑤や、後期ジャーニーにも通じるHRナンバー⑥等、平均して楽曲の出来は良いのだが、アルバムとしての起伏が淡泊で、今後の大きな課題であろう。　(芦沢)



JIMMY HOTZ
Beyond The Crystal Sea

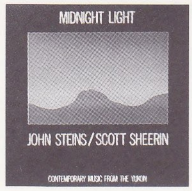
LP/Vision VR 777　'80年

今や引退気味の吉瀬氏のお気に入りだった一枚。ややハードより、もしくはハード・プログレ寄りの音なのに何故と聞くと、メロディーが良いんだとの返事。レーベル・マークはダビデの星・ヘキサグラムに十字架だし、レコ盤は777だし歌詞もそれ風なので宗教がかった人なのかも知れないが、少女マンガ風ファンタジックなジャケを見ていると何ともアメリカンなバカバカしさが目立ち、素直にその世界に入っていけない。音はやたらと分厚く、キーボード・ファンは楽しめそうだがそうでない私には相当暑苦しいのでもっと引きのパートがあっても良いのではと思う。大仰なのが好きな人には絶対だとも思う。彼がプロデュースした作品もあった筈だがバンド名タイトル共に思い出せず。　(森下)



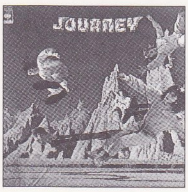
JOHN ABERCROMBIE
Timeless
LP/ECM 1047 '74年

ドリームス、ビリー・コブハムのグループを経て発表されたジョン・アバークロンビーの初リーダー作。ヤン・ハマー(key)、ジャック・ディジョネット(ds)とのトリオ編成によるキメとインタープレイを軸にしたジャズ・ロック・スタイルは明らかにマハヴィシュヌ・オーケストラ以降のもの。「ジャズ・ロック」のスタイルが出来上がりつつもまだ新鮮だった時代ならではの感覚がある。相当にテクニカルだが手馴れた演奏ゲームと言う感じはせず、一瞬先をどうするかをその場の互いのインスピレーションで決めていくスリルがある。テリエ・リピダルと共にこの頃のECMレーベルを代表する作品。三者ともその後、様々な活動をしており、アバークロンビーとディジョネットは共演が多い。 (中西)



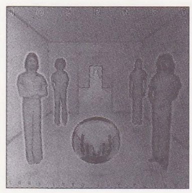
JOHN STEINS, SCOTT SHEERIN (Canada)
Midnight Light
LP/River Town JSSS 3939 '81年

カナダには自然や大地をテーマとした透明感溢れる洗練された、アコースティック楽器編成によるアンサンブルが比較的顕著に見られる。NEXUSやPaul Horn、Paul Winter系といったビッグ・ネームはもとより、マイナーなグループは幾らでも存在する。その中で、あえてユーコン準州(オーロラの地、ホワイト・ホースで有名)出身という、異色の2人組を紹介した。12弦ギター、フルートの2人を中心にパーカッション等数種の楽器が絡む編成で、彼らは、透明に澄み切った美しいアコースティック・ミュージックを聴かせる。聴き所はB面で、彼らの音楽は伊のペペ・マイナ辺りに近いのだろうが、非常に感覚的且つ繊細、しっとりとした叙情を湛えた美しい演奏が特徴で、カナダの冷たい空気を肌に感じることが出来る。 (奏田)



JOURNEY
Journey
LP/Columbia PC 33388 '75年
CD/Columbia 33388
/ソニー CSCS 6004

元サンタナのニール・ショーン(g)を中心に、'73年、GOLDEN GATE RYTHM SECTIONから発展、結成された彼等のデビュー作。元サンタナのグレッグ・ローリー(key)がシンガーを兼任していたものの、当時の彼等が重きを置いていたのは、インスト・パートにおけるアンサンブルとテクニックのバトルであった。圧巻なのはA③のインスト。ピアノによるイントロダクションが明けるや、コラシアムIIばりのフュージョンがかかった展開が待っており、そこでのニールとグレッグの速弾きたるや、鬼気迫るものがある。が、それでいて、まったりとしたグレッグの歌に耳を奪われるのもまた事実だ。特に泣きを含むスローなA①は絶品。中後期とは区別の必要あり。
(奥村)



JOURNEY
Look Into The Future
LP/Columbia PC 33904 '76年
CD/Columbia CK 33904
/ソニー CSCS-6005

グレッグ・ローリー(vo、key)、ニール・ショーン(g)、ロス・ヴァロリー(b)、アインズレー・ダンバー(ds)というラインナップだった頃のセカンド・アルバム。この頃の彼等のサウンドは後年スティーヴ・ペリーを加えて体現することになるポップで親しみやすいヴォーカル・オリエンテッドなものではなく、各ミュージシャンのテクニックを活かしたインストゥルメンタル・パート主導のものだった。それ故その音楽性はキャッチーな①、本作のハイライトとも言うべきハード・チューン④、プログレッシヴな味わいを持つ長編⑥といった具合にややまとまりに欠ける感は否めない。しかし随所で展開される各楽器の火花散るインタープレイ(特にニールのギター)は今聴いても充分刺激的だ。 (石原)



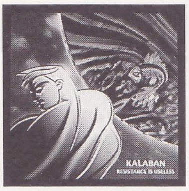
JUNE WALLACK (Canada)
June Wallack
LP/RCA KPL 1-0136 '75年

全世界的に見ても女性シンガーのプログレッシヴ・ロックは決して多いとは言えない。それがシンフォニック系となってくると、かなり数が苦しくなってくる。このJune Wallackの'75年に出されたアルバムは、カナダで唯一そんな条件を満たしてくれた作品なのだ。彼女のピアノとLe Gros Pierreなる人物のキーボード群のぶ厚い壁。そしてリズム・セクションのメリハリのきいたサウンドは凄まじいものだ。残念なのは彼女の声が少々弱々しい所。(好みの問題?)一曲だけビリー・ホリデイの曲(他は彼女のオリジナル)があったり、宇宙空間をジャズ・ピアノが浮遊しているような曲があったりと、彼女は以前ジャズ・シンガーだったのではないかと思わせる部分もある。又、〝ETERNITE〟で彼女は一曲ヴォーカルを担当している。 (本木)



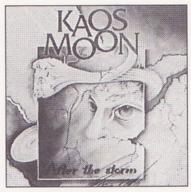
KALABAN
Don't Panic
LP/Syn-Phonic SYNPHO 5 '86年
CD/Syn-Phonic SYNCD 5

アメリカで'86年に録音されていた幻の作品。この作品は3曲の小曲と3曲の大曲(各10分以上もある)から構成されている。ポップで、センスの良さの光る小曲も確かにいいが、僕が聞いてもらいたいのは、やはり大曲3曲である。天空に突き抜けるようなイメージのスケールの大きな作品であり、もちろんテクニック的にも申し分のないものを持っている。難をいえば機材の問題からくる録音クォリティーが落ちることだが、自主制作だからそれはしかたないだろう。各楽器がせめぎ合いながら、次第に高揚していく様は本当に見事だ。名前と、小曲のポップさで誤解されそうなグループなので、評価はぜひともこれらの大曲を聴いてからにしてほしい。ああ昇天。
(山崎)



KALABAN
Resistance Is Useless
CD/Syn-Phonic SYNCD 11 '93年

2作目。前作とは同一バンドと思えないほど飛躍的な進歩をとげている。1曲目のキーボードの洪水を聴いただけで、並の出来ではないと察しがつくだろう。全体を通して、J. P. Alarcenの「タブロ」の荘厳さとOzricのシャープさが同居した印象を受ける。2曲目の中盤、ヴォーカルが入ってくるあたりのテンションの高さ、ゾクッとする感覚は、リスナーの嗜好を問わず、耳を引きつけるように思う。3曲目は、Syn-Phonicの2枚組オムニバス・アルバム収録曲と同一曲。テイクに大きな違いはないが、ベース奏者が変わっている。彼らのベクトルは完全にヨーロッパの硬質なシンフォニック・ロックに向かっており、キャッチーなポンプ・サウンド、画一的なメタル・ロックから遠ざかる一方である。そうした方向性は、幻想的なカバー・アートからも察せられる。 (ミワ)



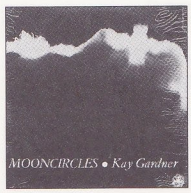
KAOS MOON (Canada)
After The Storm
CD/Kozak KO 2501-2 '94年

ケベックのバンド。'80年代中期にカセット作品をリリースしており、当時はバンド名の表記がKAHOS MOONだったように記憶している。このバンドには、ヴィジブル・ウィンドの初代ヴォーカリストも在籍していたことがあり、本作のサンクス・クレジットには同バンドの新旧メンバーが名を連ねている。演奏にもヴィジブル・ウィンドのメンバーが参加しているが、現在のバンドの実体はすべての曲を手掛けるヴォーカル兼キーボード奏者のワンマン・プロジェクトのようである。その音楽性もヴィジブル・ウィンド同様、シャープかつダイナミックなシンフォニック・サウンド。ポンプ色やクラシック色よりもメタル・テイストが多少強い。後半の曲にはいずれもどこかにハッとする静謐な切り返しが配されている。 (ミワ)



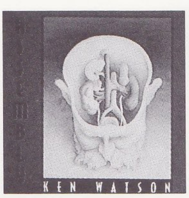
THE KAPLAN BROTHERS
Nightbird
LP/Quinton '?年

自主製作で'70年代中期に製作されたと思われるこの作品は、曲が全て繋っている事や曲調からしてムーディー・ブルースを意識したと思われる。メインに使われる楽器はメロトロンとピアノぐらいで、キーボード奏者はピアノのアルペジオ等リック・ウェイクマンからの影響を受けており〝ラウン・ドバウト〟のイントロが使われたりしている。メロトロンから始まる一曲目はラヴ・ロックの佳曲であり、二曲目は〝ポルシュカポーレ〟続いていきなり「Confusion!」で始まる〝エピタフ〟。ワンコーラスはバック無しで熱唱しており、後半は先の〝ポルシュカポーレ〟のコーラスをバックに歌われパロディーと化す。このグループ基本的にはコーラス・グループであり、アメリカにおいてこのようなラヴ・ロック・グループは貴重であると思う。 (吉野)



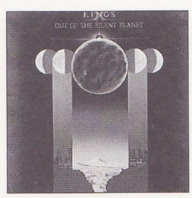
KAY GARDENER
Mooncircle
LP/Urana WWE 80 '75年

アメリカ・アンダーグランドの層の厚さ、奥の深さは何もロックやジャズに限ったことではない。特にアコースティック・ミュージックはまさに底無し沼といった様相を呈しており、いろいろ迫っているとこのような名盤級の作品に当たることもしばしばだ。余りにもファンタジックでドリーミーなアルバムをリリースしたケイ・ガードナー、本業はフルート奏者のようだが、ここではヴォーカルも取っていて女性ヴォーカル・ファンにも即応。気品ある室内楽的なムードの内にフルートやヴォイスを絡ませ、まどろむようなファンタジック・ワールドを作り上げている。音は古いがヴァージニア・アストレイの世界にも通じると思う。イマジネーション豊かな逸品。近年はワールドそミュージック畑で活躍中。 (内田)



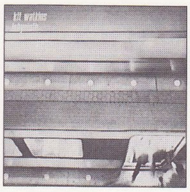
KEN WATSON
Assembly
LP/(private press) 001 '85年
CD/Kinesis Inc. KDCD 1010

世の中には才能の溢れている人間がいるもので、このケン・ワトソンも豊富なアイディアと申し分のないテクニックを持ち合わせている。マルチ・プレイヤーであり、ドラムス以外の殆どの楽器をひとりで操り、最上級のシンフォニック・ジャズ・ロックを生み出している。想像するに、彼はおそらくHAPPY THE MANを手本に自分の音楽を構築したのだろう。ギター・フレーズ等にジェネシスやPFMの残滓も聴き取れる。更に、全体の雰囲気がそこはかとなくKENSOに似ている。肌理細かく丁寧に構築された構成と、味わいとしてのジャズ・ロック・センスの絶妙なバランス感覚がもたらした偶然だろうか。'85年に自主制作されたケン・ワトソン唯一のアルバムのCD再発であり、3曲計20分の新録音が追加されている。 (坂本)



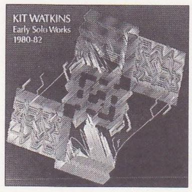
KING'S X
Out Of The Silent Planet
CD/Atlantic 7 81825-2 '88年
/MMG AMCT-399

黒人を含むトリオ編成でアトランティック傘下の〝Megaforce〟よりデビュー。'70年代的HRとモダン・ヘヴィネスの融合で、クロスオーヴァー・ブームの中にあって特異なHRバンドとされたKING'S Xのデビュー作。日本での評価は次作「Gretchen Goes To Nebraska」を待つことになるが、本作において既に彼らのインテリジェントな音楽性は開花している。グルーヴやコーラスを重視したサウンドは直接的にプログレッシヴとの類似は見い出せないが、ビートルズとジミ・ヘンの出会い、と形容されたことに明らかなように完全に英国を志向し、また随所での凝ったアレンジで十二分に魅力的である。SFというより精神世界に目を向けた歌詞世界とも相まって、暖かい人間味を感じるサウンドだ。以後3枚の作品を残している。(中島)



KIT WATKINS
Labyrinth
L P/Azymuth AZLP 1001　'82年

僕はキット・ワトキンスがよく使うソリーナやファンタジックに流れるピアノ、無理なく登り下りするムーグが好きだ。この「ラビリンス」は、ハッピー・ザ・マンの３rd「ベター・レイト」録音時から３年後に出された彼のファースト・アルバム。エルドンのドラマーだったココ・ラッセルとのデュオ作品で、キットはキーボード以外にもフルートとクラシカル・ギターを担当し、ちょっとしたマルチぶりを発揮している。'83年にはブラッド・アインというギタリストと「フレームズ・オブ・マインド」を、そして'85年に再びココ・ラッセルと「イン・タイム」を発表するが、本作の出来が断然良く、キャメルの「ヌード」に収録されているＡ②と、「ベター・レイト」中のＡ④、Ｂ②の別バージョンも聞けて面白い。（田中）



KIT WATKINS
Edrly Solo Works 1980-82
CD/Linden LM 2001　'91年

ハッピィ・ザ・マンのキーボードディスト、キット・ワトキンスはリンデン・ミュージックを中心にして多数のソロ・アルバムをリリースしている。これはその名の通り彼の最初のソロ作品をCD化したもので、'80～'82年の間の作品が収められている。どの曲も様々なアプローチで制作されたスケッチ的な作品で、断片的な印象はあるが、いたるところに散りばめられた彼の才能の豊かさを証明する宝石達を聴きながら拾い集めていくのもわるくはない。全編に渡って透明度の高い、プログレッシヴ・ロックとフュージョンの中間に位置するようなイメージの作品。ハッピィ・ザ・マンのような完成度やテンションの高さは期待できないので念の為。（山崎）



KLAATU（Canada）
3：47 E.S.T.
L P/Dafodil　'76年
CD/Justin　JEBD-9

冒頭のSE、そしてメロトロン。そして、聴き手はクラートゥが作り出す夢の世界に連れていかれてしまう。それは、このメロトロンとかその他キーボード類の作り出す装飾的な音と、ビートルズのような美しいコーラスによる部分が大きい。④などメロディの作り、コーラス、そしてブラス・セクション等に、はっきりとビートルズの影響を感じるが、そこはやはりアメリカのバンド。どこかブリティッシュものとは違った感触がある。また、ギターを中心とした曲では、アメリカっぽいドライでロックン・ロールな部分が際立っている。基本的にドラムなどのリズム・セクションはあまり目立たないものの、手数を抑えた演奏で曲の土台を築きあげており、そこに内省的な歌が乗ったタイプの曲がプログレ的である。（平山）



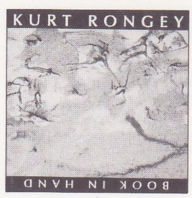
KLAATU
Hope
L P/Capitol ST-11633　'77年
CD/Justin JEMD-9

よくラジオでビートルズをパロったバンドとしてラトルズ等と一緒にオンエアーされたりするクラトゥー。デビュー当時は全くの覆面バンドで、ジョンやポールが参加しているかも知れないと言ったデマも飛んだため、かなりの話題になった。確かにパロった部分も多かったが、プログレッシヴな方向性が強すぎたため、彼らの本来の実力が逆に前面に出てしまった感のある作品がこの２nd「来たるべき世界」だ。ビートルズに影響された美しいメロディ・ラインと彼らのSF風シンフォニック・ロックの調和は今聴いても色褪せていない。彼らの正体は４人のスタジオ・ミュージシャンで、その後３人で活動しウイングス調の３枚のアルバムを発表し解散したと思われたが、'88年ドイツより〝Woman〟なるサントラのシングルを発表した。（本木）



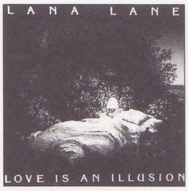
KLAATU
Magenta Lane
CD/Permanent Press PPCD-52701
'81年

'81年に発表された５枚目のアルバム。この作品で特筆すべきは導入されたオーケストラの甘味な響きと、それを十二分に活かす工夫されたアレンジ、優しく美しいメロディ・ラインだろう。一聴しただけでは只のポップ・ロック・アルバムのような感じ（それだけでもクォリティは充分高い）だが、ところどころに現われるクラトゥーならではの隠し味のような偏屈さが効果的になっている。スペクター風サウンドを取り入れてみたり、アラン・パーソンズ風に決めてみたり、そのアレンジの秀逸さには驚かされる。歌物として聴きやすく叙情的なメロディーの良さもここに極まれりと言った風情の傑作。（津田）



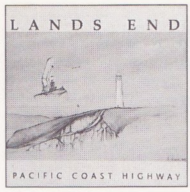
KURT RONGEY
Book In Hand
CD/Long, Dark Music LDCD 001
'91年

Kurt Rongeyなる人物の自主製作作品。一部でギタリストが参加している以外、エンジニアリング、カバー・アート等を含めて全て彼一人が行なっている。全体をおおうクリアーかつ冷徹な音色は、ECM作品に見られるようなシンフォニック・トーン。特にキーボードが前面に出る部分では荘厳さが極立っており、見事なダイナミズムで聴かせてくれる。一方ではアヴァンギャルドなエッセンスも効果的で、またシンセサイザーのスピーディーなパッセージと畳みかけるリズム・セクションには、シンフォニック・ジャズ・ロックの味つけも色濃い。そうした手法にあって、ところどころに絡んでくるポンプ・テイストのヴォーカルが、彼の音楽的出自をうかがわせて興味深い。32ページ、Ａ４変型のブックレットつき。（ミワ）



LANA LANE
Love Is An Illusion
CD/Think Tank Media TTMD 1012
'95年
/マーキー MAR 95154

ラナ・レーンという女性vo名義にはなっていても実際はバンド形態。流し聴きするとあまりにオーソドックスに感じるが、もちろん曲の練りと完成度は充分で、そのままハード・ロックとしても通る。が、よく聴くとピンと来る人はいるはず。オール・アバウト・イヴやヴァイオレット・アワー、ヴァレンシアに近いテイストがある。特にハモンド・オルガンやメロトロンまでを使ってのキーボードはあちこちでメロディーに深みのある影をつけていて隠し味っぽい効果が大。ポップな歌メロや曲のサビを極立たせる作曲、構成が目立ち、一般へのアピールも大。決して厚塗りのメロディだけに終わらないアルバムだ。 （松本）



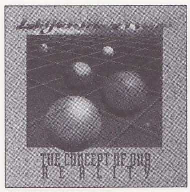
LANDS END
Pacific Coast Highway
CD/Land End Songs LECD 2 '94年

カリフォルニア出身の新人。10分以上の４曲を含むので、〝おつ〟と思わせるが、複雑緻密に練り上げた展開で聴かせるのではなく、雄大なイメージのkeyを中心に比較的ゆったりとしたテンポで進行してゆく。圧倒的という程では無いがインストの曲にしても単調にならないようにとの工夫はそれなりに見られる。例によってkeyの力量は仲々で、イメージ重視のプレイはそこかしこに印象的フレーズが有る。それで持っているような感じだ。狙いは悪くない。g、voも含めて自主シンフォ系としては良い素質を持っているが、ムードに流され過ぎ。ややうけ。 （中島）



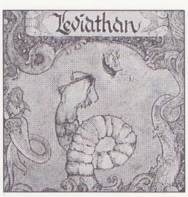
LANDS END
Terra Serranum
CD/(Ger.) Cyclops CYCL 024 '95年

キーボードにおんぶにだっこだった印象の１stに比べると随分バンドらしくなった。全体の印象もギター（アコースティック含む）の度合いが増し、曲調の変化もあってイメージの出し方に工夫が感じられる。極端な話エニドからジェネシスになった、というか。エニワンズ・ドーター思わせるヴォーカルも線は細いが良い声質で作品に色をつけている。とはいえドラムを始めギター以外は後からとって付けたような感は否めず、そこの弱さが未だにある。今回はトータル・アルバムで、メロトロンも多用しての壮大な作風はその筋にはアピール度があるはず。 （中島）



LEGER DE MAIN
The Concept Of Our Reality
CD/PMM-0100 '95年

女性ヴォーカル、マルチ・プレイヤー、ドラムというトリオ編成のデビュー作。メロディアスな歌から強引に力技で持っていく変拍子テクニカル・パートとの対比が異様に新鮮。１曲目に象徴されるダイナミズム、HM色を基盤とした泣きとタイトなリフ、歌い上げるヴォーカルは正統派、次から次へと展開していき耳を離さない。特にギター・プレイは様々な技を用いて力量の程を見せつける。デジタリーでコンピューター的精密感と素朴な歌メロとの対比が個性となっている。これでもうひとつ歌がバックに負けない存在感を示せば、とんでもない存在になるかもしれない。自主制作とは思えぬクオリティだ。あえて分類するならシアター系なのだろうが、質感が絶対違う。満腹。 （中島）



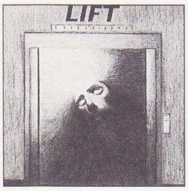
LEVIATHAN
Leviathan
ＬP/Mach AMA 12501 '74年

クリムゾン級のメロトロンの洪水という宣伝文句が使われるグループの１つに、USAロンドン・レコード傘下MACHレーベルより同名の作品を発表したレヴィアサンがいる。メロトロンの使用は確かに多く、叙情的は演奏はそれなりに魅力がある。しかし、それとは対照的にリズム・セクションは実にヘヴィーで、ブルース・ロック的な印象が強く感じられる。そのため、当時（'74年）と他の作品と比べると、どうしてもアート・ロックを思わせる古臭さを隠し切れない欠点がある。しかし作品としての構成力は意外としっかりしており、メロトロンのソフトなパート、ヘヴィーなギター・ワークの巧みな使い分けにより、大海のうねりにも似た重厚な世界が展開されている。 （本木）



LEVIATHAN
Deepest Secrets Beneath
CD/RTN-41201 '94年

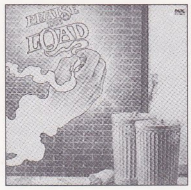
コロラド出身のツイン・ギターの５人組のファースト・フル・アルバム。本作以前には５曲入りのミニ・アルバムをリリースしており、その頃は今とシンガーが違っていた。彼等が目指すサウンドは、飽くまでも伝統的なHR/HMを基本にしたもののようだ。本作にもキーボーディストをゲスト参加させているものの、メインとなるのはやはり２本のメタリックなギターで、目まぐるしく展開していくリフとそこに絡むヴォーカルは、少なからずFATES WARNINGからの影響が感じられる。但し、各メンバーのテクニックがアイディアに追いついていないところもまだまだあり、特にシンガーの存在感の薄さとメロディを乗せきれていない点が気になった。このまま精進を重ね、是非頑張っていって欲しいものだ。 （奥村）



LIFT
Caverns Of Your Brain

LP/Guinness GNS 36021 '77年
CD/Syn-Phonic SYNCD 1
/マーキー MAR 9013

メロトロンは確かに魅力的な楽器である。ここに紹介するリフトのアルバムもメロトロン抜きだったら、かなり評価も変ってくるだろう。ヴォーカル、演奏スタイルは、陰影のあるプログレッシヴ・ロックというよりもハード・ロックという感が強い。とはいえ、ところどころでシンフォニック的な面を見せてくれる不思議なグループである。もちろん、メロトロンがその重要な役割を占めているが、彼らはここぞという時にしか使用せず、より一層効果を高めているように思える。曲としては、展開が激しくハードなA①と、後半メロトロンで盛り上がるA②が聴きものといえよう。残念なことに、メンバーについては不明で、全曲の作曲はチップ・グレミリオンとなっている。（吉瀬）



THE LOAD
Praise The Load

LP/Owl Intermedia ST 2557 '75年
CD/The Laser's Edge LE 1008
/マーキー MAR 9121

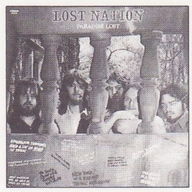
バッハの〝ブランデンブルグ〞や〝ウィリアム・テル・オーヴァーチュア〞をアレンジして演っているが、EL&Pの影響は余り感じ取れない。無名のローカル・バンド、ザ・ロードはキーボード、ギター兼ベース、ドラムのトリオ編成で、'75年に本作を発表している。初めて聴いた際は、全体的にクールな印象を受けたが、2、3分もたてば恐しい程の技巧派集団だと分かる。休む暇もなく忙しい演奏と言うのは正にこのこと。キーボードとベースは弾きまくり、ドラムは叩きまくってA①の11分の曲などあっと言う間に終わってしまう。強いて難を言えば6曲中2曲のヴォーカルだが、そこをせめる気は毛頭ない。こうしたスゴイ奴らがポンと見つかるこの広大で無限なる国アメリカを、パワー・プログレッシヴの宝庫として見つめて行きたいナ。（田中）



THE LOAD
Load Have Mercy

CD/The Laser's Edge '95年
/マーキー MAR 95153

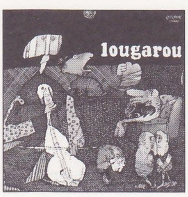
ウワサの未発表アルバムが到着。最初はいかにもなオルガンで始まり1stと同じ感じだが、よりギター・プレイやヴォーカルをフィーチュアした内容になっており、明らかに音楽性の幅が広がった。ややおとなしい印象もあった1stよりもハードで、攻撃的なプレイが増えている。keyはクラシカルな色に加えてジャジーな色、トラッド系フレーズも導入するなど「おっ」と思わせる新機軸も目立つ。持ち前のホコリっぽさも相変わらずだが、ギター・プレイに叙情味が出てきているあたりは聴きもの。広がったぶんやや冗長な部分も無くはないが、面白味ではファーストを上回っている。パタパタした音質のドラムがいかにも自主制作。古っぽくも親しみ易く暖かい音。（中島）



LOST NATION
Paradise Lost

LP/Rare Earth RS518 '70年

「アメリカのベカーズ・オペラ」という表現も使われていた彼らの唯一の作品。確かに適切な表現と思えるが、こちらの方がよりシンプルな印象を受ける。逆に言えば冗長な部分がなく、良質な歌を中心にまとまり良く、より熱い音に仕上がっているのである。基本的な4人編成であるが、鳴りの良いオルガンを中心に、よく練られたメロディアスな各楽器のフレーズが丁寧かつドラマチックに繰り広げられていて、楽曲全体の魅力としてはこちらに軍配を上げたい。乗りが多少軽く聴こえる所がアメリカ的とも言えるが、ビート・サイケ卒業直後の音作りとして、当時のイギリスのグループが持っていた精神性の重さやシニカルさよりも、より生真面目に良質な音楽を目指す曲作りに好感が持てる。オルガン・ファン必聴の一枚。（中）



LOUGAROU(Canada)
Lougarou

LP/London LFS 9022 '76年

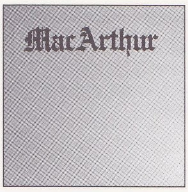
GAROLOUの前身でLOUGAROUというバンドがあると聞いた時は最初は冗談かと思ったが、ホントにあった。ヴォーカル、ドラムス、ベースは後の作品と同じメンツだがギターとキーボードは変わってしまった様だ。彼らの音を特色付けているのはトラッド風の歌メロとよく響くヴォーカル、加えてヴァイオリンの使用だと思うのだが、ヴァイオリンは本作でも次作(ガロルーの1st)でもゲスト扱いで解せない。ギターとキーボードの変更はバンドの音楽性に影響を与えておらず、ガロルーの1stでは同方向でより完成度の高い、より魅力的な曲を聴くことが出来る。逆に言えば、ガロルーの1stが好きな人なら本作も充分に楽しめるハズ。ROULOUGAなんていう名前のさらに前身とか後身とかは存在しないと思うが不明。（森下）



LYLE MAYS
Lyle Mays

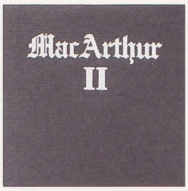
CD/Geffin 24097
/MCA ビクター MVCG87

パット・メセニーの良き相棒として、美しいピアノ、シンセサイザーを奏でるライル・メイズ。ドイツのECMレーベルを離れ、ゲフィンに移った彼等だが、このメイズのファースト・ソロにはいかにもECM的な透明な叙情と開放感が溢れている。本作は全編彼という鏡に映し出された幾つかの土地の心象風景であり、スコットランドを描いた〝Highland Aire〞にはバグパイプのようなシンセ、日本人女性の名である〝Teiko〞には琴を思わすオートハープがフィーチャーされている。ビル・フリゼールの幽玄なギター、マーク・ジョンスンとアレックス・アクーニュのタイトなリズムも彩りを添える。3部構成の組曲〝Alaskan Suite〞はシンフォニック、ジャズ・ロック・ファンにとっても大きな聴き物だろう。（高山）



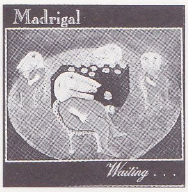
MACARTHUR
Macarthur
LP/Z 589321　'00年

マッカーサーIIというのがあるからIもあるだろうと思われていたのがこれである。こちらは白ジャケに紙が貼ってあるだけで、プレス数が少いだろうことが如実にわかってしまう。プログレというカテゴリーでみるとレアリティーはトップ3に入る代物。しかし内容はトップ50に入るかどうか。明るめのギター、キーボードを中心とした軽快なプログレという印象。1970年後半から1980年前半までに録音したものを2枚に分けて出したものでLPの統一感はない。B面後半からの緊張感のある流れが聞きどころと言える。　(六井)



MACARTHUR
II
LP/Bay Music　'82年

ベン・マッカーサー（vo. g）率いるマッカーサーのこのLPは'77～'82年までの曲が収められている。冒頭、派手な曲で幕を開け驚かす。しかし、我々の興味を惹くのは、マルチ・プレイヤー、ビル・ヘフェルフィンガー（key. g）の作曲によるものである。A③、B③で全楽器を担当し、本作のプロデュースもしているこの人物、裏ジャケットの目つきからしてかなりの才人と見た。クリアーなギター・ソロも彼だろうし、シンセサイザーの扱いもバラエティに富んでおもしろい。曲が短いのが惜しまれるが、パイプ・オルガン風なシンセで始まるドラマチックなA④、タイトル通りスペーシィなシンセとギターがからむB③はこの手のレコードにありがちな録音の悪さもなく聴き応えがある。他のメンバーはスコット・ストックフォード（b）とジェフ・パウエル（ds）。　(吉瀬)



MADRIGAL
Waiting...
CD/Every Third Person
ETP 2001-A　'89年

これ程のアルバムが人知れず有ったとは。同じ大陸のECHOLYNなんかもシンフォニック・ロックを脱構築するような組みかえによる新鮮さがあって、うっかり見おとす所だったが、このアルバムにも似た所がある。甘さのない積極的なサウンド・アプローチがあるからこそ、ac-gの響きもピリッとくる。そしてハミルふうの空気を醸すヴォーカルも曲につかず離れずで、全体に音が込み入っていないにもかかわらず非常に多面的になっている。曲の発想に吹っ切れを感じるし、それら様々な素材を一つにまとめあげた力量も同時に感じる。しかも、そこに何か陰な空気が漂い、時によってメロディアスさを帯びもする。とても深味のあるアルバムだと思う。多分、コンセプションがしっかりしていて頭も柔かいのだろう。デュオ＋ゲストの編成。　(松本)



MAGELLAN
Hour Of Restoration
CD/Magna Carta MA-92722　'92年
/アポロン APCY 8068

様式美。シンフォニック・メタル。と一言でレッテル張りして見合うサウンドだ。北米大陸にはラッシュがいるわけで、こうしたキーボードをふん段に使ったキメのハード系は、むしろアメリカのくったくのない乗りと見合い易いのかもしれない。新人バンドだけに、どこか切れがないが、そこをキーボードのオーケストレーションでフォロー、そのまま盛り上げる。14分強の①は、むしろシンフォニック系。曲調を変えながら劇的路線。少々、押し一辺倒あたりが新人故の力味か、ウエスト・コースト故の明るさか。　(松本)



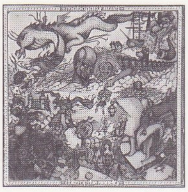
MAGELLAN
Impending Ascension
CD/Magna-Carta　'93年
/アポロン APCY-8124

MAGELLANの2ndで、マグナ・カルタの第3弾。全体的には前作の延長線上だが、1曲目は、QUEENかYESかというハーモニーに驚いた。大作主義も変わらず11分台が3曲。但し、前作冒頭の、展開しっぱなしキーボード攻勢程のインパクトは流石になし。タイコも再び打ち込みながら、何故か2曲目のみに元J. TULLのドアン・ペリーが参加。しかしまぁ、アメリカ・オヤジの見事な〝ウェットン声〟は健在だし、ポンプ系に多い〝のっぺり〟よりは楽曲もずっとドラマティックだ。ラス曲の〝いきなりHM〟は、長編で聴きたかった。　(奥村)



MAHOGANY RUSH (Canada)
Maxoom
LP/Kotal　'71年

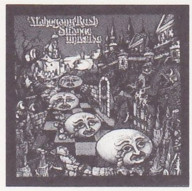
'70年頃、まだティーンエイジャーだったフランク・マリノ（g、vo）が、友人のジェイムズ・エィヨブ（ds）を誘ってジャム・セッションを始めたことからスタート。間もなくベーシストとしてポール・ハーウッドを迎えた彼等は、リハーサルの末、何と翌年にはモントリオール・エクスポのフェスティヴァルに出演する。そして同年、地元のインディーズのKotalからリリースしたのが本作デビュー・アルバムだ。前年に他界したジミ・ヘンドリクスに捧げられた本作は、いきなりキまくりのギター・ノイズからスタート。以下、ヘヴィ・スタイルからブルース、ファンキーまで、マリノのジミ・ヘン・ワールドが展開する。実に弱冠17歳。まだまだスペイシーな空間演出は見られず、とりあえず作ったという感じだが、凄味は伝わる。　(奥村)



MAHOGANY RUSH
Child Of The Novelty

LP/20th Century T-45 '74年
CD/(Ger.) Repertoire REP-4029

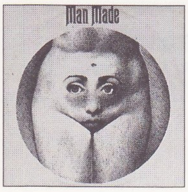
デビュー作が20th Century Recordsから再発された翌年にリリースされたセカンド。A①②辺りは、まあ、ジミ・ヘン風のフツーのヘヴィ・ロックだが、A③のギター・ソロ辺りからそろそろキた。ギュワ〜ン、ギュオオ〜ン……って、感じですか。が、まだまだこれは序の口。マリノがひとりで全パートをプレイしたというA④(他にもマリノはA①でパーカッション、B③でベースもプレイ)以下、インプロにより力が入り、再びギュワワ〜ンも出るA⑤〜B③までを挟んで……。出ました！　わざわざ〝声以外は全部ギターでやりました〞とクレジットしてある必殺轟音ノイズのA④。これじゃあ、まるでデス・メタル。いや、それ以上。しかし、まだまだこんなモンじゃない。エフェクトにさらに凝るのはまだ先の話。　(奥村)



MAHOGANY RUSH
Strange Universe

LP/20th Century T-482 '75年
CD/(Ger.) Repertoire RR-4028-C
/MSI MSIF-7064

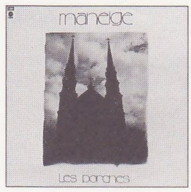
前作に引き続き、イヴァン・シュワルツのファンタジックかつサイケなイラストをジャケット・デザインに使ったサード。何だか、急に音がクリアになった印象。ジミ・ヘンを核にしつつも、サウンド・スタイルに幅が出てきたのは、ドラマティックで幻想的なA①を聴けば一発で分かるはずだ。他にも、曲調がキャッチーになってきたものもチラホラ。B⑤では、いよいよマリノ自身がムーグをプレイしているが、何とこの曲のドラム・テイクは、バンドのドラマーであるエイヨヴ以外に、当時MOUNTAINにいたコーキー・レイングのプレイもミックスされているらしい。で、いよいよCBSとの契約を交わした次作以降の〝メジャーへの道〞がスタートするわけだ。とはいえ、マリノはこの時まだ21歳。末恐しいハズ。　(奥村)



MAN MADE (Canada)
Man Made

LP/Good Noise GN 5001 '00年

名は体を表わす。ジャケットはサウンドを表わすと言ったかどうかは知らないが、誰だってこんなジャケットを見たら購買意欲を無くしてしまいそうな作品がこれ。レーベル名もGood Noiseって言うくらいで、アヴァンギャルド系のサウンドと思ったものだった。しかし私の読みは見事に外れた。A面のグループ名がタイトルになった19分の大作はオルガンをメインにした、ピンク・フロイド調のシンフォニック・ロックだ。しかし、どうしてもふに落ちない点が一つある。ヴォーカリストの声が渋すぎるのだ。まるでジョー・コッカーみたいだ。B面はその彼のソウルフルなヴォーカル小品集で、その手の作品としてはけっこう聴き応えのあるものとなっている。全曲この路線でやった方が良かったかも？　マン・メイド・ブルース・バンドって名でね。(本木)



MANEIGE (Canada)
Les Porches

LP/Harvest ST 6438 '75年

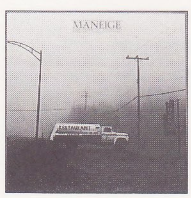
全体的なバランスがとれた作品というと、'77年の「Ni Vent...」になるだろうが、1stから4thまでは、どれをとっても甲乙付け難い好作品である。本作の、特にA面の19分に及ぶ組曲は、アコースティック楽器――ピアノをメインにクラリネット、フルート等を使用して、静かな、しかし、心をかきむしられるような情熱を秘めた演奏を繰り広げている。聴く者個々の心の中に住む、小さな心の傷跡が、いくばくかの郷愁と共に広がっていくかのような、不思議な、孤独な世界だ。マネイジュは、合計8枚の作品をリリースしており、後期になると、デリケートさが失われてしまうが、中期までは魅力的だ。尚、本作品は英盤もリリースされていた。幻想的な風景の中にひっそりとただずむ寺院のアルバム・カヴァーがA面の組曲のイメージをよく表現している。　(山崎)



MANEIGE
Ni Vent... Ni Nouvelle

LP/Polydor 2424 143 '77年
CD/Les Disques Kozak KO 2503-2
/ベル・アンティーク BELLE 9471

マネイジュの3rd。我国のファンに「カナダにマネイジュあり」と印象づけた作品でもある。キーボード、ギター、フルートを中心とした管楽器、ベース、各種パーカッション等をプレイする6人のレギュラー・メンバーに、一部ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロらゲスト・ミュージシャンを加えた演奏は極めてテクニカルなものであり、変拍子などを効果的に使っている。同じカナダのオパス・サンク同様、演奏自体は派手なものではないが、非常に凝ったものであり、穏やかにしてリリカルで聴き込む程に味わいが出てくる。'78年には4thアルバム「Libre Service」(Polydor 2424 176) を発表、初期の4作は甲乙つけ難い出来となっている。その後も、'83年までに4枚のアルバムを製作しているが、ポップな音作りがされている。　(賀川)



MANEIGE
Libre Service

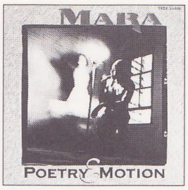
LP/Polydor 2424 176 '78年
CD/Les Disques Kozak KO 2504-2

マネイジュの4枚目。地味なジャケット・デザインのため知名度こそ低いが、内容的には前2作に引けをとらない出来である。ややポップな曲調の作品も含まれているが、それなりに凝ったものになっており、彼らの持ち味が発揮されている。また、従来の作品の延長線上にある曲では、その高度な演奏力を駆使して素晴らしい演奏を展開している。数多くのパーカッションを用いた繊細なリズムを受けて、フルート、サックス、ギター等がリリカルで洗練されたプレーを披露している。非常に聴き易いサウンドのため、一聴した時の印象は薄いかもしれないが、聴き込めば数多くの聴き所を持ったものであることが分かるだろう。本作以後も多くの作品をリリースしているが、彼らの持つポップな部分が強調されている。　(賀川)



MANNHEIM STEAMROLLER
Fresh Aire
L P/American Gramaphone AG 355 '74年

イージー・リスニングなところを持ち合わせた室内楽的なサウンドは地味ながら、自然の温かみと安らぎを聴く者に与える。ピアノをメインにストリングス、リコーダー、シンセサイザー、パーカッションを加え、この時期を考えると、かなりユニークな音作りである。本作以降も、〝Fresh Aire〟のタイトルを使用して「II」('78)、「III」('79)、「IV」('80)、「V」('81) と私の知る限り5枚発表しており、確か「IV」が国内でも発売されていたと思うので、手許にあればくわしいことを書けるのだが。コンスタントにレコードを発表していることから、本国ではそれなりの評価を受けていると思われ、次第にレコーディング、ジャケットの質が向上している。特にロンドン・シンフォニーと共演した「V」の内ジャケのイラストがすばらしい。 (吉野)



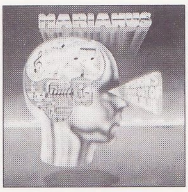
MARA
Poetry & Motion
CD/Bullet Pre. CDVEST-II /テイチク TECK-25666

ギタリストのジェイソン・アロノフを中心に'80年代中期から活動を続ける、オハイオ州シンシナティの5人組の本邦デビュー作となるセカンド・アルバム。'70年代後期〜'80年代初期にかけての〝アメリカン・プログレ・ハード〟の流れを受け継いだ、キャッチーかつ哀愁を帯びた旋律を活かした実にオーセンティックな楽曲からは今時珍しい位の〝音楽に対するひたむきさ〟が伝わってくる。ツボを心得たアレンジ・センスと確かなテクニックに裏打ちされたそのサウンドは目新しさや強烈なインパクトこそないが、心にじっくりと染み込むような繊細さを持っており、聴いていると何か心が安まるような気がする。最近、'90年発表の1stアルバムも輸入盤で復刻されたようだ。 (石原)



MARCUS
Marcus
L P/Unided Artists UA-LA 668-G '76年

謎の黒人シンガー、マーカス・マローンを中心とした5人組の唯一のアルバム。2人のリード・ギタリスト＋リズム・ギタリストというトリプル・ギター編成ながら、正式なベーシストを欠き（だから6人組ではない）、A④、B②ではかのティム・ボガートがゲスト参加している。いきなりA①がDEEP PURPLEの〝Space Truckin'〟のパクリで驚いたが、全体的なサウンドは、スペイシーな味付けのファンキーさも含むHRという感じ。やはり耳を引くのはブルースを基本としながらもメロディアスなフレーズを連発するツイン・リードで、特にアラビックなフレーズが印象的なA④と、メロトロンをうまく使ったファンタジックなB④でのプレイはなかなかのもの。アメリカン・ヘヴィ・ロックの隠れた名盤！ (奥村)



MARIANUS
Visions From Out Of The Blue
L P/Jupiter Phonodisc JP 2711-1 '81年

メロトロンの使用で話題を呼んだアルバム。各所でいろんな使われ方をしていて、特にB①は、こちらの望むイメージ通り、初期クリムゾン&チェレステ風。B②のスリリングな間奏に現れるドラマチックな使用法も良い。しかしこの作品、基本的には明るい曲想のハード・ロックが中心で、シンセも多用されているものの、シンフォニック・プログレを期待して聴くと肩透かしを喰う。そのつもりでいれば、結構演奏も安定しているし、アレンジも凝っていて仲々楽しめる。B④は割とシンフォニックな佳曲。A①がハズしだから、B面から聴きましょう。リード・ヴォーカルで全ての作曲・アレンジを担当し、メロトロン、シンセ、サックス等を操るマリアヌスを中心に数人のミュージシャンが参加。唯一の作品と思われる。(中)



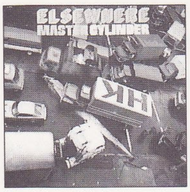
MARK MOORE
The Gardens Of Love
L P/Astral-1001 '85年

マーク・ムーア(Mark Moore)のデビュー作「The Garden Of Love」('85年作)も特筆すべき作品である。浜辺の夕暮れが美しくメタモルフォーゼされた内ジャケットが彼の音楽スタイルを端的に表現しているように思う。彼はヴォーカル、ギター、キーボードを担当し、ギター・シンセ、ベース、ドラムスの4人編成のグループを率いている。又、3曲だけ、エレクトリック・ヴァイオリンがゲスト参加している。彼もやはりフュージョンの影響を受けたシンフォニック・ロックを得意としており、なめらかなメロディーはジェネシス、キャメルを想起させる甘美なものである。ちょうどオーストラリアの生んだセバスチャン・ハーディーがそうであるように……。(山崎)



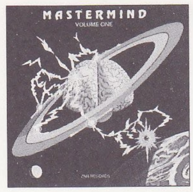
MARS EVERYWHERE
Industrial Sabotage
L P/Random Radar RRR 008 '80年

ランダム・レーダー・レーベルは、所謂レコメン系のレーベルで、マフィンズ、ロル・コックスヒル等もリリースされており、フレッド・フリスとの交流もあった。このグループ、レーベル・サンプラーに収録された曲には何の印象も残らず見過ごしていたが、この作品を聴くとアメリカのシンセサイザー系では屈指のものであるのが分かると思う。個人的には日本のダダ〜ケネディの流れが思い浮んだ。ギター、ドラム、ベース、キーボードの4人組のバンド形態で活動しており、管楽器の持ち換え演奏をしているライヴ録音が収録されている。B②では、トワイライト・ゾーンのテーマ・フレーズを用いて、スペイシーな演奏が聞かれ、続くB③の10分以上の曲は、第二期キング・クリムゾンを彷彿させる熱演をしている。 (吉野)



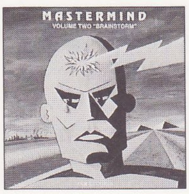
MASTER CYLINDER
Elsewhere
LP/Inner City IC 1112　'81年

やはり、本場と言う関係か、アメリカのジャズ・ロックと言えば基本的にクロス・オーヴァー／フュージョンのライン上の物がほとんどで、例えばカンタベリー・スタイルといったプログレッシヴ・ロック経由の物はどうしても数が少ない。それでもマフィンズ、ハウエヴァー、ハッピー・ザ・マンと言った優れたグループが幾つか知られているが、このマスター・シリンダーも名こそ知られていないが、トップ・クラスのグループと言えよう。人懐っこいメロディと柔らかなトーンを基調にしたテクニカルで綿密なコンポジションはハットフィールズ辺りの影響が強く、そう言った意味ではマフィンズに近いが、小技を効かせた楽曲、演奏の切れ、と言った面では一枚上を行っているかも知れない。語らざれる傑作。　（中西）



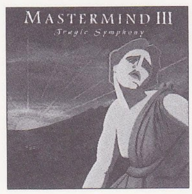
MASTERMIND
Volume One
CD/ZNR CD-1001　'91年

ナイス及びエマーソン・レイク＆パーマーに影響を受けたミュージシャンは多い。そして、現在、全盛期の彼らをずっと後になって知ったと思われる世代からもそうしたグループが登場した。マスターマインドである。彼らは現在までに２枚のアルバムを発表しているが、一聴しただけですぐにELPから大きな影響を受けたことが分かる。しかし、驚くべきことにマスターマインドにはキーボード奏者はいない。グループはギターとパーカッションの２人組である。エレクトロニクスの進歩はギタリストがエマーソンのような演奏をすることを可能にしたのである。ELPの影響下にあると言っても彼らはコピー・バンドではない。こうした中、全盛期のELPのような作曲をし演奏することは生易しくない。真の実力派バンドと言える。　（賀川）



MASTERMIND
Volume Two "Brainstorm"
CD/ZNR CD-1002　'91年

１stアルバムでいきなり我々を驚かせたあのMASTERMINDがまたやってくれた。20分余りの組曲２曲を含み、トータルで70分を超える驚愕の２ndアルバムがこれだ。前作ではEL&P的な部分ばかりが目立ってしまった彼らだが、今度はその辺をグッと押さえ、その分エッジの効いたギターを前面に押し出している。全編を支配するそのたたみ込むような迫力と整合感は、昨今のやわなシンフォニック勢から一歩も二歩も抜きん出ていると言っていい。ツボを心得た曲作りとアレンジ、テクニック等、あらゆる面で優に前作を凌いでいるが、ただ一つヴォーカルだけは相変わらずいただけないな。⑥と⑨は有名なクラシック曲のアレンジ。ほとんど原曲通りながら迫力満点。ちなみにメンバーはBerends兄弟（親子？）二人だけ!?　マジか？……　（みやら）



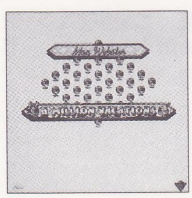
MASTERMIND
Tragic Symphony
CD/ゼロ・コーポレーション XRCN 1194　'94年

前２作と同様、メタリック・ギターと大仰きわまりないオーケストレーションがたたみかける作風である。細部を見ていけば、しっとりとしたアコースティック・サウンドも加わり、曲想の幅は明らかに広がっている。さらにいえば、フロント・ギターとオーケストレーションの比が前作までは６対４程度の割合だったのが、本作では２対８程にも開いている。疾走感ではドリーム・シアターも遠くおよばないだろう。ヴォーカルの弱さについては、やはり多少興をそぐものといわざるをえない。もし全編インストでさらに引きの叙情が強化されれば、トニー・マカパインの傑作「マキシマム・セキュリティー」に肉薄するものとなるだろう。いずれにしろ、けたたましいロック・オーケストレーションを堪能したければ入手して損はない。　（ミワ）



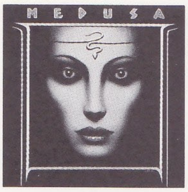
LE MATCH (Canada)
Le Match
LP/Sonogram LSG-72007　'75年

ル・マッチ。アンジュ・タイプらしいとのことで入手してみた。確かにそれっぽいところはあるが、少々迫力に欠けて適切な指摘とは言えない。編成はギター、ベース、ドラムス、キーボードにヴァイオリンが加わったもので、このヴァイオリン奏者が各曲に渡って大活躍をしてくれる。基本的にはフォーク・ロックで、曲によってはトラディショナルがかったり、カーヴド・エア風にもなったりする。ギター及びフルート兼任のキーボード奏者も味のあるプレイを見せ、一曲一曲の完成度が非常に高いものとなっているため、一見小品集的（全12曲）な作品ながらも十二分に堪能出来る作品と思う。Ａ②、Ｂ①、⑤、⑥は絶品。もろにシャンソンしているＡ④もおもしろい。本作はダブル・ジャケットで、シングル・ジャケの再発盤もある。　（本木）



MAX WEBSTER (Canada)
A Million Vacations
LP/Antbem　'79年

カナダはオンタリオ出身の５人組の通算４作目。同郷のRUSHと共に、HRサウンドを基本としながらも、様々なアイディアの下、独自のプログレッシヴ感覚を各アルバムに出してきた彼等だが、本作では、特にＡ面において、コーラス・ワークに重点を置いた〝アメリカン・プログレ・ハード〟にも通じる透明サウンドを構築している。メンバーのうちひとりは作詞のみ担当という点も、なかなか〝プログレ人〟の興味をソソるところ。RUSHとの交流も盛んで、彼等のラスト・アルバムとなった『Universal Juveniles』（'80）には、両バンドのメンバーが集まり一発録りしたナンバー〝Battle Scar〟が収められていた。解散後、メイン・ソングライターのキム・ミッチェル（g、vo）はソロに転向。　（奥村）



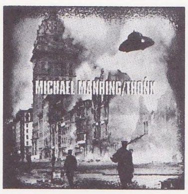
MEDUSA
Medusa
LP/Columbia JC 3535　'78年

ジョン・リー(b)とジェリー・ブラウン(ds)のリズム隊を中心としたユニットの唯一のアルバム。シンガーは白人男性のエリック・タッグと黒人女性のシェリル・アレキサンダーの2人で、よくMOTHER'S FINESTと比べられるようだ。後にビリー・スクワイアのアルバムに参加するキーボーディスト、ディヴィッド・サンシャスのきらびやかなイントロに導かれてスタートするA①も、そういう意味ではやはり黒っぽく、A②、B②のようなHR然とした曲もあるが、基本的にはファンキー路線が多い。尚、ムーディなバラードB③とフュージョン系インストのB④でギターをプレイしているのはFOCUSのラスト作にも参加していたイーフ・アルバース。B①②辺りはグレン・ヒューズに歌わせたい？　(奥村)



MICHAEL HEDGES
Live On The Double Planet
LP/Windham Hill　'87年
CD/Windham Hill WD-1066-2
/ポニー・キャニオン D32Y5084

マイケル・ヘッジスはWindham Hillから登場したアコースティック・ギタリストだ。ハープ・ギターという特殊な楽器まで駆使して、呆れるほどのテクニックを披露する器用なギタリストだが、最も近い存在はジョニ・ミッチェルではないかと思う。そういう包容力の高いフォーク・サウンドを基本に、美しく力強い演奏を聴かせてくれる。ギター・ソロを中心としたアルバムもよいが、彼の歌もまたなかなかのもの。彼の本当の良さが判るのはステージなので、このライヴ盤がお勧めと言える。様々なステージを編集してあり、1曲だけマイケル・マンリングのベースが加わっている。私が目撃したステージでは薄化粧をしてワイルドかつ超絶的な演奏を繰り広げ、観客の度肝を抜いていた。　(坂本)



MICHAEL MANRING
Thonk
CD/Windham Hill 72902 10322-2
'94年

Windham Hillの中で最もプログレッシヴ・ロックよりのミュージシャンがマイケル・マンリングだろう。フレットレス・ベースの達人としてレーベル内のミュージシャンをサポートしながらソロ作を発表しているが、トータル・ミュージシャンとしての才能も光る。ポール・マッキャンドレス(ob,sax)やココ・ルーセル(ds)らを迎えての「Toward The Center Of The Night」('89)もこちら向きだったし、スティーヴ・ロドビー(syn,b)やフレッド・サイモン(syn)らを迎えた「Drastic Measures」('91)も聴かせてくれたが、「Thonk」は格段にパワー・アップしたアルバムで、スティーヴ・モーズ(g)やスティーヴ・スミス(ds)、PRIMUSのハーブ(ds)等の超強力ゲスト達を迎えて思う存分決めまくる。遂に本音が噴出して来た。(坂本)



MIKE QUATRO JAM BAND
Paintings
LP/Evolution 3011　'72年

彼はプロモーターとしての経歴もあり、それぞれの作品にその時代の流行を反映した曲が収録されているが、4作目のA②は、個人的にシンフォニック・ロックという形容をためらいなく使えるもので3作目にパートIIが収録されている。後に2～3作目は、コアラ・レーベルよりリミックス盤がリリースされるが、3作目はメロトロンが消されている。4作目はデヴィット・サーカンプ（パヴロフズ・ドッグ）が参加している。この1作目、2作目迄ジャム・バンド名義だが、以降と同じソロ・アルバムと言ってもさしつかえない。興味を引くところで〝クリムゾン・キングの宮殿〟を演っているが、ピアノの弾き語りで始まり、特筆すべきアレンジは施されていないが読者の中には気になる人もいるはず。　(吉野)



MICHAEL QUATRO JAM BAND
Look Deeply Into The Mirror
LP/Evolution 3021　'73年

マイケル・クアトロ・ジャム・バンドのセカンド。マイケル（key)、パティ・クアトロ（b、g）（以上2人はあのスージー・クアトロの兄姉)、Kirk Arthur Trachsel（ds）の3人を中心に、テッド・ニュージェント、複数のヴォーカリストがゲスト参加している。そのサウンドはキーボードをメインにしたシンフォニック・ロック色の濃いものとギター、ベースを前面に押し出したハード・ロック調のものが混在している。やはり、聴き所はA②、B①のようなマイケルのピアノやメロトロンが活躍するシンフォニックな演奏である。どことなくリック・ウェイクマンを思わずプレイを見せるマイケルと他のメンバーの間には力量に差があり、それがそのまま作品の出来に繋がっている。　(賀川)



MICHAEL QUATRO
In Collaboration With The Gods
LP/United Artists UA LA420　'75年

スージー・クアトロの兄。スージーの姉であるFANNYのvo、g、パティとの兄or弟の関係は不明。日本でも邦題「ロック神の降臨」としてリリースされた。JAM BAND名義を外れた、key主体に25以上の楽器を操るマイケル・クアトロのソロ、3枚目。ルネッサンスを想わせるpにメロトロンと、gが襲いかかり本作は幕を上げる。〝アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽手帖〟他のクラシック、ジャズのスタンダードとおぼしきナンバーが顔を出すとpはR.ウェイクマンの響きに変化する。サウンドの要は重厚なメロトロン。R.デリンジャー（g）が一曲ゲスト参加。この後'82年の「Bottom Line」まで作品を発表しつづけている。1、2作ではテッド・ニュージェント（g）1、2、4作では前述のパティも参加している。　(川上)



MICHAEL QUATRO
Dancers, Romancers, Dreamers & Shemers

LP/United Artists UA-LA587-G '76年

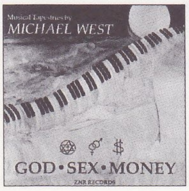
ソロ名義での２作目。クアトロのピアノをフィーチュアした様々なタイプの曲が収められているが、何と言っても本作において注目すべきは、B①にPAVLOV'S DOGのディヴィッド・サーカムが参加し、あの独特の声を披露していることだろう。クレジットに〝Narration Vocal〟とあるように、どちらかというと語り風のものなのだが、メロディのあるセリフという感じのそれは、ドラマ性を持った７分半の中で、余計にシアトリカルな印象を与える。A④はバッハの、そしてB②はショパンの曲をそれぞれアレンジ。ラストのB④は、クレジットによると一発録りで、チェンバロからパイプ・オルガン、そしてピアノへの流れはなかなかなのもの。尚、R&RナンバーのA⑤の歌詞は妹（姉？）のスージーが書いた。（奥村）



MICHAEL SALVATORI
Waiting For Autumn

LP/Nightshade N-001 '82年

生ギターを基調としたサウンドは一聴すると地味な印象を与える。しかし、B面を聴き終える頃には、このレコードの不思議なエナジーに包みこまれて行く自分に気付く。同時期のルディ・ペローネのソロに傾向は近く、演奏技術、音楽性は見劣りするものの、静けさの中にも盛り上がって行く様は、すがすがしく心地良い。サルヴィトーリはギター、ベース、シンセ、ヴォーカルを担当。それに加え、ドラマーとキーボード奏者の３人が基本的メンバーで、曲によって６名が客演し、一役買っている。といっても、客演なしのB③が一番の出来なのだが。（吉瀬）



MICHAEL WEST
God・Sex・Money

CD/ZNR CD 6001 '92年

マスターマインドで知られる米ZNRレーベルのキーボード・シンフォニック作品。同バンドのギタリストがベース＆プログラミングで参加。プロデュースも担当している。肝心の主人公、M・ウェストについては不詳。全篇攻撃的なキーボード・サウンドで、R・ウェイクマンの影響を感じさせるフレーズも聴ける。ヴォーカルなし、ギターなし、フリー演奏なしで、ここまでハードな演奏というのも今の時代には珍しい。アリのはい出るすきまもない整合感。にもかかわらず、どんなフリー・ジャズよりけたたましい。聴けない人はまったく聴けないだろう。（ミワ）



MICHEL LE FRANÇOIS (Canada)
Sur La Terre Comme Au Ciel

LP/CBS PFC 80012 '79年
CD/Kozak KO 2505-2

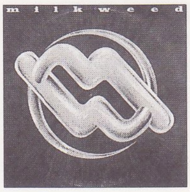
冒頭しばらくしてメロトロンの音色が青空へ貫き抜けていくように吹き出す幕明けの効果は見事。この胸のすくような爽快感は、女性ヴォーカルを迎えた２曲目展開部での、ピアノのつま弾き、波の遠鳴りに酔わせ郷愁感を呼びさましておいて、一気にマクソフォーネのA①に匹敵するほどの上昇感をみせるギター・ソロを聴かせる部分でも具体化されている。vo、g、keyを担当する一方で、こうした曲展開のおもいっきり、際立った対比は、彼の作曲の力量を示すとともに、アメリカン・ロックに接するフランス語圏を反映しているかのようだ。下地にはアメリカナイズされたものがあるとしても、シンフォニックなアレンジはこれを上回って印象が強い。複数の弦楽器がサポート。グループ形態のサウンド。彼名義の作品では唯一のもの。（松本）



MICHEL MADORE (Canada)
La Chambre Nuptiale

LP/Kebec Disc KD-944 '78年

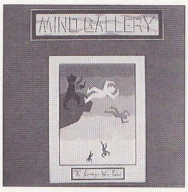
ミッシェル・マドールのセカンド。La Chambre Nuptialeとは男女が愛を確認する寝室のことであろうか。内ジャケットの写真で見ることができる。Francine Larivéeによるかなり大がかりな創作物（生まれつつある赤ん坊、抱き合う男女、装飾を凝らした寝室？等）のための環境音楽と思われる。各種シンセサイザーを用いて、マドールが１人で作り上げた組曲作成のサウンドはどこか神秘的雰囲気を感じさせるもので、ダイナミックな展開を見せる。既に一般化した手法による音作りではあるが、耳を素通りしてしまうイージーなものでなく、作品としての主張を持ったものとなっている。なお、従来セカンドと言われていた「Le Komuso A Comdes」（Barclay 80260）が実際はファースト・アルバムである。（賀川）



MILKWEED (Canada)
Milkweed

LP/CCL 33-114 '78年
CD/Disques L'aller-Retour AR 003

キーボード奏者、Sergio Goncalves率いる幻のグループ、ミルクウィードの唯一のアルバム。英語で歌われているため、他のカナダのグループと雰囲気が異なるが、総勢７人ということもあって、厚味のあるサウンドを聴かせる。圧巻はA②、③であろう。A①は肩すかしを食う軽いポップ調な曲に対し、A②は夢見るようなキーボードとギターで始まり、緊張感のあるインストと、メロディアスなヴォーカル・パートを盛り込んだドラマチックな構成がファンの心をくすぐる。ヴォーカルのメロディ・ラインは「ブロードウェイ」の頃のジェネシスに似てないでもない。それに続くA③はシンフォニックな面とジャジーなピアノの組み合わせが新鮮。B面はフリー・ジャズ的前半、美しいオーボエを中心とするクラシカルな中間部、ジャズ・ロック調の後半を持つ大作である。（吉瀬）



MIND GALLERY(Canada)
The Lemmings Were Pushed

CD/Mind Game Productions
MGP-001 '92年

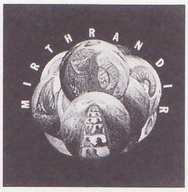
バンクーバーの自主製作。g、b、ds、keyの基本編成。骨格のはっきりした硬質のシンフォニック・サウンドになっている。所々にユニークな展開を見せて歯切れもいい。keyが前に後ろに踊り出てgがアクセントをつける。各楽曲の出来から見れば、もっとエッジのきいたアグレッシヴな音に聴こえそうだが、実は非常に穏やか。イル・ヴォーロのデジタル・ヴァージョンという印象を受ける部分もある。悪く言うとメリハリに乏しいが、決して軽い音ではない。バンドの経歴は不詳。知名度のある作品の人脈が関与している可能性も捨て切れない。（ミワ）



MINGO
Flight Never Ending

LP/CBS BL 34260 '76年

「キャラヴァンサライ」時のサンタナ、後にはアル・ディ・メオラのグループに参加する事になるミンゴ・ルイスのリーダー・アルバム。パーカッション／キーボードを本人が担当する他、ダブル・キーボード、ギター、ベース、ドラムスによる編成でグループ色が強い。傾向としては前記参加バンドをそのまま反映させたような物で、パーカッションをメインに高速変拍子ユニゾンをキメるリズムとスペーシーなストリングス・シンセをバックにギター、キーボードが熱の入ったソロを奪い合うと言った物。上記両バンドでも曲を書くなどしているので、彼本来の持ち味と言えそうだが、やはりオリジナリティには少し欠けるか。イギリスのコラシアムII辺りに近い位置にあるとも言えそう。（中西）



MIRTHRANDIR
For You The Old Woman

LP/(private press) 2276 '76年
CD/Syn-Phonic SYNCD 6

かつて本作のテープを某店長の好意により送って戴いた。アメリカがいまだ未開拓であるのを実感させられる内容であった。まずフルートによる幻想的な曲から始まる。ヴォーカルの表情豊かな張りのある声が作品全体が印象を良くしている。A②のハードな曲はその典型。そしてこのバンド、GENTLE GIANTのスタイルを独自に消化した水準の高い演奏を行う。B①で本領を発揮、トランペットが効果的。B②の大曲はプログレッシヴ・ロックの定形パターンが次々と現れわれる曲。彼等の造詣の深さと愛着を感じる。全体的にメリハリが効いて密度の濃いイタリア最盛期を想わせる音。（吉野）



MORNING STAR
Morning Star

LP/Columbia SC 35316 '78年

カンサス州出身の5人組のデビュー・アルバム。STYX的なコーラス・パートを持つHRナンバーで幕を開ける本作は、〝アメリカン・プログレ・ハード〟という言葉がイメージさせる通りのサウンドを聴かせてくれる。透明感のあるハーモニー、スペイシーなシンセサイザー、リリカルなメロディ展開、ドラマティックな曲調……もう、完全にお約束のサウンドだが、楽曲そのもののクオリティが高いことは言うまでもなく、いかにも日本人好みのA②④、B②④は名曲として語り継がれてもおかしくない出来だ。お約束といえば、アメリカン・バンドのアイデンティティと言うべきか、B①③ではR&R調のナンバーも収録。この辺りが流石に英国モノとは違う。翌年には同傾向のセカンド『Venus』を発表。（奥村）



MORSE CODE TRANSMISSION (Canada)
II

LP/RCA VPS-6092 '72年

モールス・コードの正式デビューはキャピトル・レーベル以前のRCAに至り、当時は〝モールス・コード・トランスミッション〟というグループ名で'70年〜'72年頃にかけて2枚のアルバムをリリースしている。その頃彼らは英語で歌っており、グループ名をタイトルにした1stなどは2〜3分代の曲が中心で、オーケストラをバックにしたポップ・ロック的なものだ。本作は2ndに当り前作に比べると数段の成長の跡が見られる。とは言っても曲名を見ても〝Funky Alley〟、〝Soul Odyssey〟というようにまだガリガリのブリティッシュ・ブルース・ロックをベースにしたような音づくりであるが、既に大作指向（2枚組で9曲収録）の曲構成をしている所には、後の彼らの姿をほんの少し感じることが出来るようだ。'76年に当時のベスト盤が出た。（本木）



MORSE CODE(Canada)
La Marche Des Hommes

LP/Capitol 69657 '75年

「トランスミッション」というオルガン・ロック・サウンドのアルバムを2枚出した後キャピトルに移籍、そしてその移籍第一弾に当たる本作は、リリカルなフルートやピアノ、そしてメロトロンの大胆な導入によって前作までとはガラッと変わったシンフォニック・ロックの傑作アルバムに仕上がっている。特にA①の10分を超えるタイトル・チューンのロング・プレーは聴きモノ。フレンチ・カナダのバンドであるが、フレンチ・プログレにありがちなフニャフニャした音ではなく、YESを多少お手本にしたと思われる力強いサウンドが全編を流れる。ポーレンやオパス5といった強力な〝派手〟アルバムに隠れがちな本作ではあるが、間違いなくそれらと肩を並べられる彼らの最高傑作と言える。シンフォニックが好きな人に絶対のおすすめ！（神山）



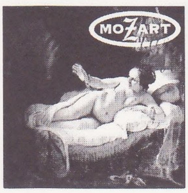
MORSE CODE
Procréation
L P/Capitol SKAD 70,046 '76年

モールス・コード・トランスミッション時代から長い活動を続けるグループであるが、プログレッシヴ・ロックとしての完成度を問うなら、Capitolレーベルに残された3枚のLPということになろう。本作は、それらの中でも特にシンフォニックな一枚である。イエスからの影響がうかがえるが、それとて、メカニズムの円熟というバックボーンがあればこそである。A面の6曲の小曲、B面の組曲、どちらも構成のしっかりとした佳曲だが、性格上、B面全てを費したタイトル・チューンが素晴らしい出来になっている。ギター、ベース、キーボード、ドラムスの4人編成で、ハモンド、クラヴィネット、メロトロン等を使い分けるキーボーディストの演出が、この作品を、より魅力的なものにしている。どことなく、かのボーレンにイメージの似たアルバムであり、水準は高い。 (山崎)



MORSE CODE
Je Suis Le Temps
L P/Capitol ST 70.051 '77年

キャピトルに移っての3作目、通算5作目となるアルバム。コンパクトな小曲が並ぶもののメロトロンやオルガンが効果的な1曲目を始め、単純にポップとは言い切れない。おどけたような土っぽいロックン・ロールをやってもつい顔を出してしまう上品なアレンジが壮大さよりも暖かみを感じさせる。B面トップのようなイエス色も混ざって親しみ易く魅力的な内容に仕上がっており、ソリッドな感覚は薄いが彼らの歌心を示した好作である。カラフルなキーボードの音色とソフト・タッチのヴォーカル・パートのバランスが無理なくメロディを立たせ、一瞬スッと引いた時のピアノのタッチの泣きも効果的。その引いた感触がカナダらしい。本作をもって彼らの黄金期は終わったがキチンとしたCD化を望みたい。 (中島)



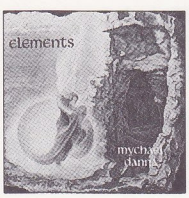
MOZART
Eve
CD/テイチク/TECW-25044 '95年

'93年にかのロイ・トーマス・ベイカーのプロデュースで突如デビューを飾ったLA出身の4人組のセカンド。セルフ・タイトルのファーストでは、当然ながらそのQUEENぶりが話題となり、名曲「Hope And Glory」でノック・アウトされた人も多いことだろうが、コーラス・ハーモニーを除けば、実はそれ程到達していなかった……というか、メンバー自身の実力そのものがまだまだ未成熟だったのではないだろうか。その点、本作ではシンガーのアダムの表現力と歌唱力を始めとし、成長著しい各メンバーが、ようやくQUEENという存在をコピーを越えた部分で捉え、幅広い音楽性のもとで自分のものにしたと言えよう。ナルシストで自信家のアダムはそのエキセントリックからも〝本家〟に迫れる傑作と見た。 (奥村)



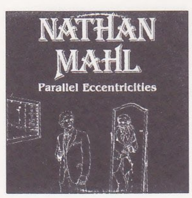
MUSICA ORBIS
To The Listeners
L P/Longdivity LD1 '77年

アメリカのプログレ・シーンは以外に層が厚く、まだまだ未知の部分が多い。特にマリコルヌのようなフレンチ・トラッドとクラナドのようなアイリッシュ・フォークを融合させたトラッド・フォークを基調としたクラシカルな響きを持つグループは多い。このムジカ・オルビスもその中の一つ。彼らのサウンドは前記したトラッド・フォーク部分とスリリングなジャズ・ロック部分の二面性を持ち、とりわけ、トラッド・フォーク色部分の出来が素晴らしい。透明感に溢れる女性ヴォーカルを中心として、ハープ、生ギター、ピアノ、オルガンをメインとしたリリカルなクラシカル・フォーク・サウンドは、MELLOW CANDLEやTUDER LODGEと同様の評価を与えられるべき内容。人知れずにひっそりと佇む名盤である。 (N. Ueno)



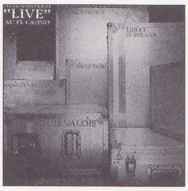
MYCHAEL DANNA (Canada)
Elements
L P/Frederick Harris FHR 791 '79年

ミシェル・ダンナーはキーボード奏者で、ほとんどが彼一人の多重録音に依る演奏である。シンセサイザーという楽器は、'70年代には、極めて感覚的な楽器として使用されることが多かったが、ヴァンゲリスの作品、あるいはイタリアのサンジュリアーノのように、シンセサイザーの持つ自由な特質を生かしながらも、音楽的には構築的な手法を取っていた例もある。これは今でこそ、プライヴェイト・ミュージックやシネマ・レーベル等で多く見かけるものであるが、当時は皆無だったのである。曲の構成、及びエンジニアリングに素人くささを残すが、トータルとしての印象は非常に魅力があり、四大元素をタイトルにした、スペクタクルな音が聴ける。この後、2ndを制作するが、スイッチト・オン的なクラシックの名曲のシンセ・ヴァージョンで面白味はない。 (山崎)



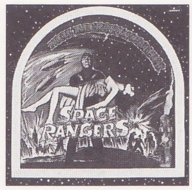
NATHAN MAHL (Canada)
Parallel Eccentricties
CD/(private press) PLP-1016

ギター、キーボード、ベース、ドラムスの4人編成。人知れずオタワで自主制作されたアルバム。ジャケットが余りにひどいので一瞬オルタナティヴかと思ってしまうが、内容のギャップが余りに激しく、驚愕を禁じ得ない。複雑にして緻密な構成、高水準の演奏、息をもつかせぬ展開、思い切り凝縮されたUK＋ジェネシス・スタイル、全パートの余裕さえのぞかせるセンスと言い、カナダ最高水準では済まされない。キーボード・ファンのみならず、ギター・ファンも必聴であろう。しかもB面でテンションが落ちると思いきやギターとオルガンが炸裂し、とどまることを知らない。 (奏田)



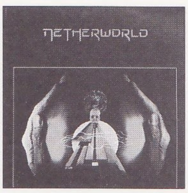
NEIL CHOTEM (Canada)
"Live" Au El Casino
LP/CBS PFC-80034　'79年

マリ・クレール・セギンとセルジュ・フィオーリの参加及びその内容で一部熱心なファンには知られている作品。マリ・クレールのソロでバックを演っていた連中とほぼ同じメンツだが、音の傾向は著しく異なる。全7曲4曲がオリジナル、他はショパン（J.バーキンの〝バビロンの妖精〟ね）、ラフマニノフ、シューマンで、ピアノが大きな位置を占めている。数曲で聴けるマリ・クレールのヴォーカルは、トラッド色が無い分典雅さが増し、ライヴ独特の張りつめた空気と相まって何かひどく崇高なものであるかの様に響く。生ピアノにフルート、サックス、フレットレス・ベース等が絡むのでややジャズ・ロック調の部分もあり、A面ラストでは殆どチェンバー・ロック風でもあり飽きさせない。内袋付。（森下）



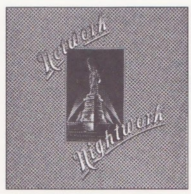
NEIL MERRYWEATHER
Space Rangers
LP/Mercury SRM1-1007　'74年

彼はもともとママ・ライオンと言うブルース・ロック・バンドのベース奏者で、'72年に大手フィリップスからデビューしている。当時は日本盤も出ているので、そちらでの知名度は結構あった人物だ。ソロ・アルバムとしては'70年頃から7枚程制作しているが、初期の作品はサイケデリックでブルース色の強いものが多いようだ。その中でも「クリプトナイト」と本作の出来は非常に興味深い。サイケデリックでいちいち大袈裟なアレンジと、ジャケットが示す通りのSF仕立てのサウンドは、チェンバリンと言うメロトロンの音を伴なって圧倒的に迫って来る。これに目をつけたのか、カナダのシンフォニック・スラム（ティモ・レイン）は、このB①と②を自分のデビュー作で〝ユニバース〟と名づけて、完コピで盗作している。（田中）



NETHER WORLD
In The Following Half-Light
LP/REM 4441　'81年

'80年代初頭、アメリカのシーンはほぼ鎮静化し死滅へ向っているかの様に思われていたが、アンダーグラウンドな範囲ながらも、カートゥーン、ハウエヴァー、そしてここに紹介されるネザー・ワールド……等の登場によって、再び起死回生の如く、現在の活況著しい北米のシーンへの礎に成り得たのは言うまでもない。彼等ネザー・ワールドの唯一の作品は、ジェネシス的要素にプログレッシヴ・ハードが融合された'80年代によく有りがちなスタイルと、ひと口で単純に言ってしまえばそれまでだが、シーンの栄華を極めた'70年代後半の熱きスピリッツを純粋に受け継いだ真摯な姿勢には好感が持てる。g、vo、b、key、dsの基本的な編成に若干名のゲストが参加。A面も良い出来だが、メロトロンを多用したB面が特に素晴らしい。（大関）



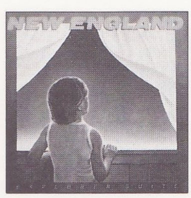
NETWORK
Nightwork
LP/Epic JE 35476　'78年

ニューヨーク出身、ツイン・ギターにキーボード、パーカッションまで擁した7人組のセカンド。前作からはシンガーが交代し、元々はダブル・キーボードだったところをキーボーディストのひとりがギターに転向したことでツイン・ギターとなり、よりハードなサウンドとなった。また、前作のほぼ全編にフィーチャーされていたファンキーなパーカッションも、HR路線に合わないと判断したか、最小限に抑えられている。そんな本作のハイライトは、中間部にファンタジックなインスト・パートを持つA③だろう。シンセのスペイシーな音色とギターの絡みは、コーラス・ハーモニーと相俟って、どことなくBOSTON風。A②のキャロル・キング＆ジェリー・ゴーフィンのヒット曲のカヴァーも、すっかり透明感サウンドに。（奥村）



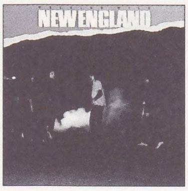
NEW ENGLAND
New England
LP/Infinity 9007　'79年
CD/MCA ビクター MVCM-346

キッスのP.スタンレー、後にジャーニーの「Escape」、エイジア（英）と関係するマイク・ストーンの共同プロデュースによる1st。全米で最も英国的と言われる地方名を冠したバンド名のみならず、サウンド指向も英国産のプログレを米国流に仕上げた、名実ともにアメリカン・プログレッシヴ・ハード・ロックの裏の代表バンド（産業ロックに行き着かなかった点でも）。彼ら最大のヒット曲〝Don't Ever Wanna Lose Ya〟を収録。美しいコーラスとkeyが売り。'81年の3rd「Walking Wild」を最後に解散。J.ウォルドー（key）＆G.シェアはY.マルムスティーン等とともにG.ボネットのALCATRAZZに加入。その後、ウォルドーはセッション・ワークを経て、'92年に再びボネット、B.キューリック（g）等とBLACKTHORNを結成している。（川上）



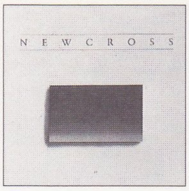
NEW ENGLAND
Explorer Suite
LP/Elektra 6E-307　'80年

ぶ厚いシンセサイザーと泣きのメロディ、ハーモニーが本当に聴き手を感動させてくれる。'79年にデビュー、3枚のアルバムを発表、セカンドまでは日本盤LPも出た。個人的には3枚とも好きで、特にサードはプロデュースがトッドなので迷ったが、何と言ってもこのセカンドのタイトル曲〝エクスプローラー・スート〟の出来がズバ抜けている。上段に構えて大袈裟なインストを展開する訳ではないが、ヴォーカル、ギター、キーボードが次々と胸の奥を掻きむしる。エイジアなどで知られるマイク・ストーンのオーバー・プロデュースが鼻につくが、メロトロンも大々的に使っていて文句なし。本当に惜しいグループだったが、G・シェアとJ・ワルドはアルカトラスに加入、J・ファノンは引退。（田中）



NEW ENGLAND
Walking Wild
LP/Elektra 6E-346　'81年

最後の作品となったサード。前2作までのマイク・ストーンと訣別し、かのトッド・ラングレンをプロデューサーに迎えた本作は、そのトッドの色が出たのか、かなりポップな音に仕上がっている。特に、キーボードの音色やヴォーカルの音処理は何とも言えぬポップ・テイストを演出しており、B④などはニュー・ウェイヴ的な印象さえ受けた。また、ELOっぽいコーラス・ワークのA⑤も面白いし、前作までのプロデュースなら絶対にドラマティックな泣きのナンバーになっていたであろうリリカルなB①も、トッドの手に掛かればこのキャッチーさだ。他にもトッドはA③でギター・ソロを弾いたり、B②の歌詞を書いたりもしている。果たして、ファーストに続いてElektra時代の2枚のCD化はいつの日か……。（奥村）



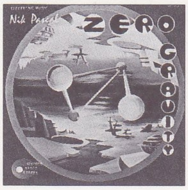
NEWCROSS
Newcross
LP/Rain Of Thought 00001　'86年

ニュークロスはドラムス、ギター（キーボード、ヴォーカルも兼ねる）、ベースの3人から成るアメリカの新人バンドである。本作品は彼らのデビューEP（33回転）で、全5曲、24分弱の演奏が収められている。そのサウンドは第3期〝ディシプリン〞キング・クリンゾンに通じるもので、ドラムスを中心にした切れの良いリズムとムードあるヴォーカル、メロディアスなギター、キーボードの絡みが聴き所と言える。たたみかけるような演奏からゆったりとしたものまで起伏に富んだ展開となっており、彼らの演奏力及び構成力がともに高い水準にあることを窺わせる。現在、徐々に解明されつつあるアメリカのプログレッシヴ・ロック・シーンにおいてもトップ・クラスに位置する作品の一つ。（賀川）



NIGHTWINDS (Canada)
Nightwinds
CD/The Laser's Edge LE 1007
'91年（'76年録音）
/マーキー MAR9115

'76年にマスターを制作したまま、現在まで眠っていたカナダのナイトウインズのCD化が実現した。'76年といえば、カナディアン・プログレッシヴ・ロックが最高潮に高揚した年である。ギター、キーボード、ベース、ドラムスの編成で演奏されるサウンド・クオリティは驚く程高水準であり、ポーレン、オパス5、モールス・コードといったトップ・クラスのシンフォニック・グループと全く同一地平で渡り合える作品である。サウンドの傾向としては、どことなくポーレンに近く、夢みるような叙情ナンバーから、全員の高い演奏技術をフルに引き出したテクニカル・ロックまでをカヴァーし、美しいヴォーカルには多才なハーモニーが時として加味される。これ程のグループが何故に当時アルバムを出せなかったのか、と思う。（山崎）



NIK PASCAL
Zero Gravity
LP/Narco NR123　'75年

ニック・パスカルは、知り得る限り、3枚のソロLPを制作したエレクトロニクス・アーティスト。1stは'72年の「The Sixth Ear」(Narco NR666)、2ndは'73年の「Magnetic Web」(Narco NR321)、そして本作が3rdである。彼の追求したものは、初期のクラフトワークや、タンジェリン・ドリームにも通じる、知的でありながら、感覚的である電子音楽で、ムーグとアープ2600という、当時先鋭的な役割を担ったエレクトロニクス楽器を使用して、宇宙的な、インプロヴァイズド・ミュージックを演奏している。和声やメロディーによる伝統的な音楽体系を完全に無視し、効果音を主体にしてまとめあげたことは、当時としては前衛的だったに違いない。3枚とも同傾向の作品で、完成度はこの3rdが高いと言う。（山崎）



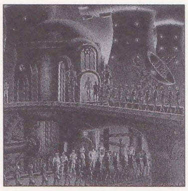
NORTH STAR
Feel The Cold
LP/ベル・アンティーク 8703　'87年
CD/Syn-Phonic SYNCD 2

本誌、ベル・アンティークの第3弾としてリリースされたアメリカの新星ノース・スター初のフル・アルバム。タイトル同名の2本目のテープ作品から一曲差し替えて製作された本作品は、ジェネシス、イエス、EL＆P…といった'70年代の大御所からの影響を感じさせながらも、良質なエッセンスを抽出し、彼等独自のカラーと機軸を打ち出したメモリアルな趣を反映した完成度を保っている。サウンドの要はやはりkeyのケヴィン・レオナルドが握っており、キーボードプレイも良い意味で、新鮮で初々しく、リスナーである僕等により親近感を与えているかの様だ。グループ・リーダーであるdsと、voを兼ねるb＆gも的を射たプレイでしっかりとバックを固めている。尚、フランスで1本目のテープ作品「Triskelion」が再発売された。（大関）



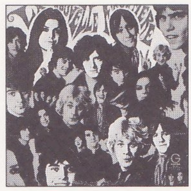
NORTH STAR
Triskelion
CD/(Fra.)Musea FGBG 4076
'84、'86年

'70年代後半のアメリカは、多少なりともこうしたサウンド・スタイルの上昇気運にあったと思う。ノース・スターもその頃に動き出している。このアルバムは元々テープ作として出たもので、既にCD再発売された「Feel The Cold」の以前の録音になる。自主製作レベルの録音で随分と損をしているが、ピッチの速いナンバーでのキーボード・ワークやギター・ソロは所々ひかるものがある。ヴォーカル主体のこの手のスタイルを山と聴いた多くのファンには、何の新鮮さもないかもしれない。こうしたインディな活動がThe Laser's EdgeやSyn-Phonicへと連動した。（松本）



NORTH STAR
Power
CD/Spece Monster Optional Entertainment CD-0992-2 '92年

「Feel The Cold」が好評だったノース・スター、最新譜。いまだホーム・レコーディングに頼らざるを得ないところが、アメリカのシーンの厳しさをよく表わしている。内容は、曲によっていささかバラつきはあるものの、かなりな水準を保つ。「Feel The Cold」との大きな違いは、リード・ギタリストが再び参加している点で、典型的シンフォニック・ロックであるノース・スターの音楽にジャジーな彩りをそえる。とは言ってもテープ作「Triskelion」ですでにこの水準に達していた訳だから、昔を知る者にはやはり不満が残る。ムゼアや北欧の一連の「ニュー・タイプ」がシーンを賑わす昨今、このいかにも安上がりなプロダクションに目をつぶることの出来るファンがどれだけいるかが問題だ。（古田）



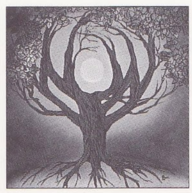
LA NOUVELLE FRONTIÉRE (Canada)
La Nouvelle Frontiére
L P/Gamma GS 137 '00年

アルモニウムと共にカナディアン・フレンチの突破口をつくることになるセギンの前身バンド。ファースト・アルバム。2 nd「L'hymne Aux Quenouilles」同様、ジャケットからして年代ものだ。そのとおり'60'sものっぽい。それもシャンソン系コーラスものふう。女性ヴォーカルがフワッとさわやかでポップなソフト・ビート・タッチ。ほのぼのとした雰囲気は、同じ'60'sものでも英米スタイルにはないソフト感覚だ。どこか内省的な雰囲気なのも、この頃からのもの。後々のサウンドを期待されては困りものなので、結構ポップだ、と書いておこう。でもイエイエでもないから誤解のないよう。（松本）



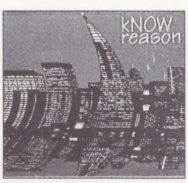
NOVAC
The Firth Word
L P/Embryo SD 527 '70年

Jerry Novac(vo. key)を中心に、Eric Gale(g)、Buzzy Feitan(g)、John Dzubak(ds)が参加したアルバム。ジャズ系レーベルよりリリースされたが、その内容は正しくオルガン・ロック。徹底してフィーチャーされるハモンドの嵐は、多彩なリード、バッキングでブリティッシュ・バンドも真っ青である。ソウルやジャズのフィーリングもたっぷり浸み込んでおり、ヴォーカル・スタイルもかなり黒っぽい。それらを統合し、サイケデリックな音作りでヘヴィに仕上げた味わい深い一枚。基本的にオルガンとドラムのデュオであり、そこにギターが色をつける。FRUMPY等のオルガン・ヘヴィ・ロックが好きな向きにはこたえられない逸品。アンダーグラウンドな空気の中でこのような作品が生まれたことも忘れてはならない。独盤もある。（中島）



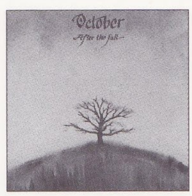
NOW
Everything Is Different Now
L P/Yoronkel's YOR287 '87年
CD/Syn-Phonic SYNCD 4

ポピュラー音楽の世界においてアメリカは最大の大国である。こうした国ではプログレッシヴ・ロックのように規模的に超マイナーなものは人知れず埋もれてしまう。カテドラル、イエツダ・ウルファ、ポリフォニー(ELPタイプの好グループ)等の優れたグループが長い間知られることなく、まして、自国アメリカのプログレッシヴ・ロック・マニアさえそれらの名前を知らないという状況は日本はおろかヨーロッパ各国でも考えにくい。それだけにアメリカのシーンに対する期待は大きいのだが、ナウはコロラドのグループで、'87年に本アルバムを発表した。キーボード、ギター、ヴォーカル（コーラス）をうまく組合せたオーソドックスなシンフォニック・ロックでリリカルでめりはりのある演奏が展開されている。（賀川）



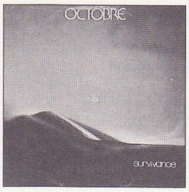
NOW
Know Reason
CD/Yoronkel's YOR1291 '91年

アメリカのほうのNOW。3作目である（カセット作品をのぞく）。1曲目の稚拙なギター・ソロですでに興をそがれるが、忍耐強く全体を聴き通せば、相応に意欲的な音作りであることがわかる。チープなシンフォニック曲にサムラ系のおふざけ感覚、後期〜新生クリムゾムの攻撃性をからませ、非常にアトラクティヴ。〝未熟なF. ザッパ〟といった感触もある。いずれにしろ、これまでの最高作であることに間違いはない。なお、作品全体には社会的メッセージが色濃く、シニカルである。よく読むと各曲のメンバー・クレジットが笑える。（ミワ）



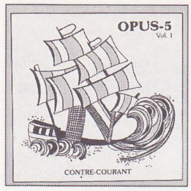
OCTOBER
After The Fall
L P/番号無し '79年

自慢じゃないが私はマッカッサーの1 stやクィルの原盤を売ったことがある。しかしオパス5の2 ndと本作に関してはまず無理だと常々思っていた、超レア・アイテム。50枚限定とは聞いていたが現物を見て納得、手刷りどころか手書きの水彩画がジャケットである。1 stの方が音は殆ど記憶に無くスカスカだった印象があるのみだが、本作では音に切れ目が無く、またアルバムとして統一性があり、澄んだ小川のせせらぎをぼーっと眺めている様な陶酔感がある。ジャズの香りはあるがジャズ・ロックという言葉から連想される緊張感やダイナミックさは無く、この言葉で括ってしまいたくない。シンセの海を漂うヴァイオリンの音色と全編に流れる哀愁がバンド名とタイトルにぴったりマッチする。気に入ったが買えないな。（森下）



OCTOBRE（Canada）
Survivance
ＬP/Trans World T16023　'75年

オクトブルは今回紹介されるアーティストの中でも最古参のグループで、１stアルバムは'67年に発表されている。彼らのスタイルは、イタリアのカンタウトーレ系のグループに近いもので、いかにもシャンソンぽい雰囲気を持ったヴォーカルに、ジャジーでシンフォニックなキーボードで淡々と味付けされたものである。非常に歌ごころあふれる端正なサウンド創りは個性的であり魅力的であるが、いかんせん派手さがないため、大上段からかまえる正統派大シンフォニック・ロックを望むファンの耳には少々インパクトが弱いかも知れない。本作はそんな彼らの作品中最もシンフォニック色が強く、完成度の高いもので、メロディアスなサウンドの中にいぶし銀のようなセンスの光る作品集なのだ。'78年の２枚組ベストを最後に解散。（本木）



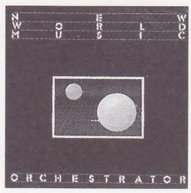
OPUS 5（Canada）
Contre-Courant
ＬP/Celebration CEL 1929　'76年
CD/Aller Retour

カナダのプログレッシヴ・シーンにおいて古くから名盤としてその名を知られていたオパス・５。薄い水色のシンプルなデザインのジャケットは、彼らのシンフォニック派とはまたひと味違う高水準なサウンドをよく表している。冒頭の深い森の中から聞こえてくるような美しいピアノとフルートの絶妙なアンサンブルは、このアルバムの素晴らしい内容を予感させてくれる。畳み掛けるリズムとピアノをバックにフルートが憂愁の美を醸し出し、メロディアスな女性ヴォーカルが入る。全体的に、カナダ特有の透明感のあるサウンドで、一聴した時の印象はそれ程強くないものの、聞く毎にその確かな内容が伝わってくる。なお、CDは収録テイク等に変更がある。（LUNA）



OPUS 5
Serieux Ou Pas
CD/Aller Retour　'90年

カナディアン・ロックの頂点を極めたバンド、OPUS ５。その未発表作品をCD化したもの。内容はかなりバラエティに富んでおり、「Contre～」とは幾分趣きを異にしている。ジャジーな曲、シンフォニックな曲、ギターの弾き語り、ピアノの美しいバラード……実に雑多な構成。同一バンドとは思えない曲も含んでいる。トータル40分以上、曲数も13曲と多く、大曲を構成するにあたって採用されなかった〝部分楽曲〞も収録しているのではないか。作品全体の統一感、整合感には欠けるが、しみわたるフルート、独特のコーラス・ワークなど、やはりOPUS ５である。この13曲を徹底的に構築して５つの大曲をつくっていたら、あるいは第２の「Contre～」が生まれていたかもしれない。（ミワ）



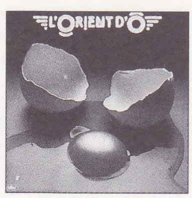
ORCHESTRATOR
New World Music
ＬP/Orchestrator RR-002　'84年

デトロイトの自主製作。サウンドはグループ名を予想させる線をはずれないが、メンバーはギターのMichael Wiseとキーボードのgary Ortleibのデュオという意外な展開。ドラムは打ち込み。両者の耳あたりの良いヴォーカルをメインに、それを丸々包み込むようなオーケストラ風のキーボードが、シンフォニックな味をぐっと深め、またアコースティック・ギターのそつのない使い方も詩情味を加えている。難しいことは演っていない。メロディーもポップだし、キーボードの音色も明るい。ただし全編に渡って清涼感があり、特にキーボードに関して胸のすくような音の広がりとクラシカルなセンスがあって、これが魅力になっている。ニュー・エイジ・ミュージック風にならず、メロディアスなポップ感覚と結びついているところが特長。（松本）



OREGON
Violin
ＬP/Vanguard　'78年

西洋、東洋のアコースティック楽器を使い、半ばインプロヴィゼイションも交えて世界のどこの物でもない室内楽を作り出した特異なグループ、オレゴン。彼らの７作目に当たる本作では、前作のエルヴィン・ジョーンズに引き続き、ヴァイオリンのズビグニエフ・ザイフェルトを迎え製作された。何でもフランスのラジオで放送されたザイフェルトの演奏を聴き、共演を決めたとの事だが、この組み合せが大正解となった。従来の端整なオレゴン・サウンドに絡みつくザイフェルトの妖気ある音色がいつにない緊張感を呼び起し、時としてサード・イアー・バンドを思わせる場面もある。殊に15分を超えるインプロヴィゼーションからなるタイトル曲での集中はオレゴンの長いキャリアにあっても類を見ない物。（中西）



L'ORIENT D'O（Canada）
L'orient D'o
ＬP/Capitol ST 70.064　'78年

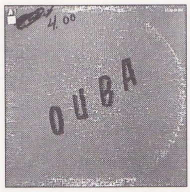
フレンチ・ポップス調の甘いメロディ・ラインのため好みが分かれそうだが、ヴォーカルを主体にしている割には演奏時間も長く、単にポップ・グループとはいえないものを持っている。個人的にはもう少しヴォーカルに遠慮してもらって、インスト・パートに比重をかけてもらえればとついつい差し出がましいことを口にしてしまいそう。しかし、曲名がグループ名のＢ②は文字通りオリエント調のインスト曲が収録されて仲々の快演なので、その辺は大目に見よう。ところどころ叙情的な味わいがあり、特に、女性キーボード奏者のクラシカルなプレイが光る。ギタリスト、Gaétan Laurendeauがリーダーらしく、全曲の作曲も担当し、他にドラム、ベース、ヴォーカル（サックスも兼任）のオーソドックスな５人編成。（吉瀬）



ORION THE HUNTER
Orion The Hunter

ＬP/Portrait 39239　'84年
CD/Ragor & Tic RE 2073

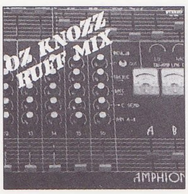
『Third Stage』までの長過ぎるインターヴァルに嫌気がさしたのか、'80年にソロ・アルバムをリリースしているBOSTONのバリー・グドローが、新たに元HEARTのドラマー、マイケル・ドロージャーと結成した４人組の唯一のアルバム。９曲の収録曲中５曲でグドローと共作し、３曲でバック・ヴォーカルを務めているのが、まだBOSTONに籍を残していたブラッド・デルプ〈vo〉だという点も、当時話題となった。サウンドは、グドローのソロ作でも聴けた、かなりBOSTONに近い、あの透明感溢れるキャッチーなHR。但し、スペイシーさとドラマ性がうまく同居したＡ③のみ、ややマイナー調で展開もRUSH風。その後、グドローは'91年にデルプを誘ってRTZを結成している。（奥村）



OUBA（Canada）
Ouba

ＬP/Al　'?年

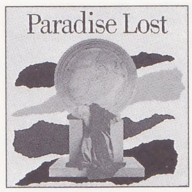
〝凄い〞との噂ばかり先行して欧米では〝マッカーサー〞並（以上？）の高値で取り引きされているレコード。実際の内容はややラフになった〝LOVE LIVE LIFE ＋ 1〞といった感じのオルガン・アート・ロック・サウンドで一種のコンセプト・アルバム。voも時に入るが、同じ言葉を繰り返し歌う程度にとどまり、演奏に重点が置かれている。実はこのグループ、LES SINNERSの覆面バンドとも言われるが、SINNERSの３rd以降分裂したグループ REVOLUTION FRANCOISE「C-COOL」の内容がプログレッシヴなサイケであり、又SINNERS自身の４thLP「Sinners」もアート・ロック色が濃い事を考えるとその噂は本当かもしれない。（平野）



OZ KNOZZ
Ruff Mix

ＬP/Ozone OZ-1000　'75年

オズ・ノッズと読んでしまいそうだがジャケ裏には(OZ KA'・HOZZ)と記されているのでオズ・カノッズと読むに違いない。'90年前後のアナログ・ブート再発が乱発された時期に本作も複製されたが、プログレ・サイドでは全く知られていなかった上、ブート再発のメインであったハード系・サイケ系に紛れて余り気付かれなかった様だ。全ての曲を書いているキーボード奏者のワンマン・グループの様式だが、ギター及びドラムスも頑張っていて、ロックとしての骨太さも失われていない。事実ハード・ロック・ファンにも人気があった。Ｂ面に15分を超える３部構成の組曲があるが、やはり圧巻なのはギターやキーボードで畳み掛けるＡ①だろう。死ぬ程ある自主盤の中に埋没させておくにはちょっともったいない。テキサス出身。（森下）



PARADISE LOST
Paradise Lost

CD/MCA/Gold Dust MCAD-6289
'89年

'90年代を目前にしてどメジャーのMCA傘下にて、デジタル・レコーディングしてしまった、テネシー出身の謎の４人組の、最初で最後の作品（だと思う……）。アルバムの全編を覆うのは、どこかRUSH的でもある、しかし、所謂ひとつの〝ポンプ〞サウンドだ。が、元気な①に騙されてはいけない。彼等の持ち味は、②以下に展開される、淡く、夢見るような、それでいて暗く浮遊するサウンドで、さらには、どこかスケールの大きい大陸的なムードも兼ね備えている。楽曲それぞれにきちんと起承転結が見える点も只者ではなく、殆どの曲が３～４分台とは思えないくらい。勿論、まだまだ未完成の部分も多いが、こういうバンドが実は生き延びてて、突然Magna Cartaとかから復活したら面白いのに……。（奥村）



PASCAL LANGUIRAND（Canada）
Minos

ＬP/Kebec KD-950　'?年

知る限り３枚のアルバムを発表しているパスカル・ランギュランのデビュー作。この後「De Harmonia Universalis」（Polydor 2424210、'80）、「Vivre Ici Maintenant」（Minos 003、'81）と続いている。その後の活動もあるかもしれない。本アルバムのサウンドは、やや実験的な作風を持つエレクトロニクス・ミュージックが展開されており、例えるならば、初期のエルドン（サードあたり）に通じるような非常に知的なサウンドである。ファルフィッサのポリフォニック・シンセ、ムーグのトーラス（シンセ・ベース）あたりの持続音、あるいは反復音の上にギターやシンセサイザーのソロが浮遊する。表現力もあり、ドラッグ・ミュージック的な聴き方も可能だ。（山崎）



PAT METHENY & LYLE MAYS
As Falls Wichita, So Falls Wichita Falls

ＬP/ECM 1190　'81年
CD/ECM 21190-2
/ポリドール POCJ-2032

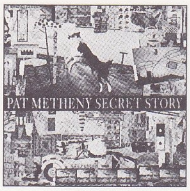
一般にはジャズ／フュージョン畑のハイテク・ギタリストとして知られるパット・メセニー。だが彼の歩みと創り出す音楽は驚くほどプログレッシヴだ。自己のグループの右腕的存在であるライル・メイズ（key、auto-hp）とのコラボレイションによるこのアルバム。演奏にはパーカッショニストのナナ・ヴァスコンセロスも加わり、旧アナログＡ面を費やした大作のタイトル曲が収められている。戦争と平和、死と再生をテーマとしたこの曲は'80年代の“原子心母”と言っても過言ではない。緊張感のある導入部から、シーケンサーとパーカッションがひたひたと迫る中盤、そしてベースとドラムが加わる瞬間のクライマックスとカタルシス。旧Ｂ面に当る後半にも美しい４曲の小品が宝石のように並んでいる。（高山）



PAT METHENY GROUP
First Circle

LP/ECM　'84年
CD/ECM 21278-2
　/ポリドール POCJ-2033

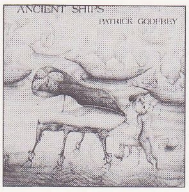
グループ名義での５作め。前作がグループとしての活動の一まとめ的な２枚組ライヴだったこともあってか、本作ではメンバーに異動が見られる。パーカッション＆ヴォイスにはブラジル人ナナ・ヴァスコンセロスに代わりアルゼンチンのペドロ・アズナールが加入。ドラマーはダン・ゴットリーブの後をポール・ワーティコが継ぎ、これでオリジナル・メンバーはパット（g）とライル・メイズ（key、tp）のみ。そして彼等の新たな魅力となったのはアズナールの天界的な美しいヴォイスだろう。ヴァスコンセロスも美しい声の持ち主だったが、従来以上にヴォイスが大きくフィーチャーされている。よりポップに、アヴァンギャルドに、ドラマティック／シンフォニックにとグループとしての多彩さを深めた豊熟の一枚。　　（高山）



PAT METHENY
Secret Story

CD/Geffen GEFD-24468　'92年
　/MCA ビクター MVCG 87

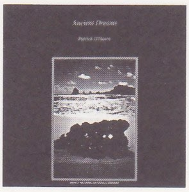
パット・メセニーがこれまでのキャリアの集大成として、５年の構想の後に制作したこのアルバム。清新にして彫琢、しかも進歩的でありながらオープン。高技術に支えられた美しく懐の深い音楽は、扉を開き、聴く者を広大な世界へと連れ去る。PAT METHENY GROUPの新旧メンバーを始め、チャーリー・ヘイデン、矢野顕子、アンソニー・ジャクソン、ロンドン・フィル等、総勢72名のミュージシャンを駆使して、ジャズ、ミニマル、エスニック等様々な要素をメセニー色に染め上げ約80分の大作は、彼自身のというだけでなく、アメリカの、いや世界の「秘なる物語」でもある。才能あるミュージシャンにして一生に一度作り得るかという一つの奇蹟。聴くほどに恐ろしい。　　（高山）



PATRICK GODFREY（Canada）
Ancient Ships

LP/Aparition 02801　'79年

パトリック・ゴドフリーは現在までに３枚のピアノ・ソロ作品を発表している。３枚共、繊細なリリシズム溢れる叙情的な（印象派的な）ピアノを演奏しているが、どれか一枚ということになれば、美しいカヴァーに包まれて、最も初々しいこのファースト作品をあげることになるだろう。全７曲にはどれも表題が付けられており、彼は、ピアノだけでなく、ハープシコード、ハーモニウム、マリンバ、ベル、ヴォイスも使用し、非常に感覚的な演奏をしてくれる。その情緒あふれる各楽曲は、性格上、プログレッシヴ・ロック・ファンの耳にも充分にアピールするものである。'79年の冬に、パトリック・ゴドフリー自身のプロデュースで、トロントにて録音されたものだ。　　（山崎）



PATRICK O'HEARN
Ancient Dreams

LP/Private Music PMP-28001　'85年

「太古の夢」と名付けられた本作は、元MAHAVISHNU ORCHESTRAのヴァイオリニスト、Ｊ・グッドマンの「未来飛行」等と共に、元TANGERINE DREAMのＰ・バウマンがNYで設立したプライヴェート・ミュージックの第一回新譜である。Ｆ・ザッパやＴ・ボジオのMISSING PARSONSでの活動を経てＰ・オハーンが創造した太古の夢の世界。シンセサイザーとパーカッションが織り成す現代性と呪術性の向うに、今と始源を結ぶ時を越えた夜の夢想が広がる。姓から察するに、彼の出自はケルト系ではなかろうか。ならばその夢想は自らの血によって導かれたものかも知れない。オハーンの他マーク・アイシャム（tp）アレックス・アクーニャ（perc）等が参加。独得のクールでイマジネイティヴな肌触りは魅力的だ。　　（高山）



PAVLOV'S DOG
Pampered Menial

LP/ABC ABCD-866　'75年
CD/Columbia 469085-2
　/ソニー SRCS 6286

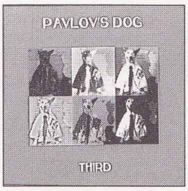
狂気のヴォーカリスト、デビッド・サーカンプ率いるパブロフズ・ドックは'75年ABCよりこの１stアルバムを発表した。個性的な声質はもちろん、彼の作りだす曲の神経質で陰うつな感触は、アメリカにおいて非常に異質な存在だった。バックの演奏はデリケートであるためか、彼のヴォーカルはガラスの破片のように鋭い衝撃を与えた。本作はそんな彼の個性が最も開花した作品だと思う。翌年CBSに移籍し「At The Sound Of The Bell」を発表。ドラムスにビル・ブラフォードがゲスト参加。少々明るい曲調の作品となった。３rdアルバムも録音されたが、発表されないままバンドは解散してしまった。最近そのアルバムが「St. Louis〝Hounds〟」としてプレスされ出廻ったが、彼らの凄さを再認識出来る素晴らしい作品だった。　（本木）



PAVLOV'S DOG
At The Sonud Of The Bell

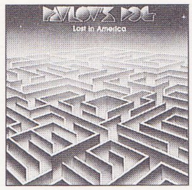
LP/CBS 33694　'76年
CD/Columbia CD-3205
　/ソニー SRCS 6287

総勢７人で録音された１st発表後、vln、ds、gが脱退。新たに２人の正式メンバーを加えた彼らは、ビル・ブラッフォード、ROXY MUSICのsaxのアンディ・マッケイ等をゲストに迎え、本作を発表する。プロデューサーは１stと同じ、マレイ・クラッグマン＆サンディ・パールマン（BLUE ÖYSTER CULTとの仕事で著名）。この世の不幸を全て１人で引き受けてしまったかのようなD. サーカンプのvoは変わっていないが、前作より曲の粒が小さく、インパクトは弱まっている。ポップ化したと普通のバンドでは一言で片付けられるのだが……本来なら明るいはずの曲調も、voが乗った瞬間に哀愁をおびるという……もう、この人の生来の声質なのだから仕方ない。本作を持って彼らの歴史は終わった、と誰もが思ったのだが……。　　（川上）



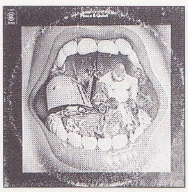
PAVLOV'S DOG
Third
CD/(Ger.)TRC 036 '90年('77年録音)

デヴィッド・サーカンプ。泣きのギターとよく言うが、彼ほど泣きのヴォーカルという言葉が当てはまる奴はいない。感情移入をして〝泣く〟のではなく、声そのものが〝泣いて〟いるのだ。1st「Pampered Menial」は彼のデリケートな感性が写し出され、音の背後にはいつも重い雨の音が聞こえていた。それは他のアメリカン・プログレ・バンドとは異質な、かと言ってヨーロッパ的でもない香りを放っていた。大砂塵を濡らす雨が、〝ハッピー・ヒッピー〟の街並に降りそそぐ。それはインディアン系という彼の生い立ちによるものなのか……？　曲も短くなり、雨の量も減少した2nd「At The Sound Of The Bell」の感覚に近いこのオクラ入りの幻の3rdだが独自の叙情性は変わらずに息づいている。晴れているのに小雨がパラつく天気雨のノリかな……。　(川上)



PAVLOL'S DOG
Lost In America
LP/Telectro 番号なし '90年
CD/(Ger.) TRC 028

1st発表後に脱退した、元REO SPEED WAGONのスティーヴ・スコーフィナ（g）が戻り、dsに新メンバーを加えた6人組は'77年に3rdの録音をする。その音源は結局約10年後、突如ST. LOUIS HOUNDSというバンドの同タイトルの作品としてLPで発表される。現在出回っているCDは、ジャケット、曲順は異なるが同内容の物である。そして4枚目に当たる本作は、1stからのメンバー、D.サーカンプ（vo、g）、ダグ・レイバーン（恐らくkey）のフケ方、音の作りからして'80年代終りから'90年代頭の録音と思われる。女性コーラスを含む5人編成。数曲、当時のジェネシスを思わせるが、1曲目でいきなりメロトロン？　が鳴っていたり、さすがに枯れはしたが紛れもないあの声で、2ndからの流れも確かに感じる。　(川上)



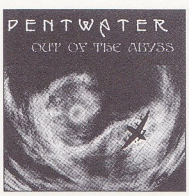
PEACE & QUIET
Peace & Quiet
LP/Kinetic Z-30315 '70年

グループ名を逆手に取ったジャケットがユーモラスな、マイアミの5人組による作品。2つのローカル・バンドが合体して出来ただけあって、B③の8分に及ぶ白熱のインスト・ナンバーを聴けば、その実力が窺い知れる。基本的には、ギターとオルガンを中心にしたシンプルな構成なのだが、4つの楽器が一つの塊の様に迫る音作りはなかなかの物。A①の、ユニゾンによるリフが印象的なハード・ナンバーに続き、A②ではフロックのヴァイオリニストがゲスト参加。優雅で美しいプレイを聴かせてくれる。ヴォーカリストも硬軟使い分けが上手く良い歌いっぷり。この曲など、ヴァイオリンがなければ、殆どユーライア・ピープである。(年代から言ってパクリではない。）しかし広大なアメリカ。これも単発作。　(中)



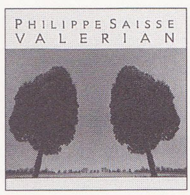
PENTWATER
Pentwater
LP/Beef '78年

ウィンディ・シティで有名なシカゴ出身の5人組ペントウォーターは、地元のローカル・レーベルから、'78年に1枚アルバムを発表している。ギタリストが2人いる割には、キーボードの占める割合が多く、メロトロン、ハモンド、ムーグ、シンセ等が何度となくスピーカーを横切る。多少アメリカ臭いヴォーカルが気になる曲が2曲程あるが、それでもキーボード・ファンには大推薦出来る内容を持っている。曲自体にもかなりオリジナリティが認められ、短い曲でもそれなりの大きさを感じさせる。ただ、B③のインスト曲〝War〟は、どう聞いてもEL＆Pの〝トッカータ〟にそっくりで、違いと言えばギターが途中でソロを取る所ぐらいだろうか。しかし、それもテクニックあってのこと。仲々のもんです。　(田中)



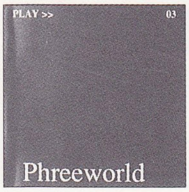
PENTWATER
Out Of The Abyss
CD/Syn-Phonic SYNCD 7
'92年('73～'76年録音)

'78年のド廃盤「Pentwater」がマニアの間で知られるバンド。'70年頃に母体ができあがり、'75年頃から本格的な活動に入ったとされる。この「Out Of The Abyss」は、「Pentwater」以前に録音されたマテリアルである。それにしては1枚のアルバムとして聴けるし、ホントに'70年代前半か？　と驚く音楽性だ。ヴォーカルとキーボードの絡みにG・ジャイアントの影、シアトリアカルな曲調、vln、g、keyの凝ったフレーズやソロ、イエス調のb、走るリズム。アメリカの自主製作は、イギリスに比べ確かにクオリティが高い。この時期にして、これ程にシンフォニックな曲想を持つバンドがいたことも発見だが、イエスの吹っ切れ感をどこよりも早く吸収したアメリカ大陸で、ラッシュが出て、ドリーム・シアターに行きついたのも納得してしまう。　(松本)



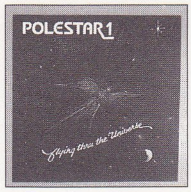
PHILIPPE SAISSE
Valerian
LP/Windham Hill '88年
CD/Windham Hill WD-1073
/ポニー・キャニオン D25Y-5138

フィリップ・セスが最初に登場したのはアル・ディ・メオラのバンドのキーボーディストとしてだった。ヤン・ハマーの後がまとして加わり、舌を巻くようなプレイで聴く者を圧倒した。やがて彼はDOPPELGÄNGERやプロデュース・ワークで広く知られるようになった。そんな彼の1stソロ・アルバムがこのWindham Hillからの「Valerian」だ。レーベル・カラーもあってテクニックは極力抑制し、ドン・アライアス(perc)、マーク・イーガン(b)、ミノ・シネル(perc)という最小限のゲストを迎えてしみじみとした演奏を聴かせるが、その曲が素晴らしいの一言。ライル・メイズの1stソロに匹敵する傑作と言ってしまおう。その後もWindham Hillを離れてソロを発表しているが、近作はこなれ過ぎていて感動が薄い。　(坂本)



PHREEWORLD
Boost The Signal
CD/Friends In The Garden FG 19941-1
'94年

ただ青くて紙切れだかジャケットだかわからない状態、しかもミニ・アルバム。出身はシアトル付近。オーソドックスな４人編成。４〜５分の曲が５曲。どれもポップなヴォーカル中心の曲。でも何回も聴かないうちに覚えてしまってメロディが耳の奥にたまってきた。簡単でポップなのだが魅かれる。ビートルズとは言わないものの、そのたぐいの微妙な線をついたメロディ。簡単なのは、つまりツボを突いた挙句の簡素さなのだ。そしてポップなメロディはアメリカでもイギリスでもある人なつっこく嫌味のないところ、プログレ・ファンの10cc、カンサス派に好まれそうなところでもある。個人的な感想では最良質のポップ・センスを持っていると思う。もう少しなんとかなればメジャーで通る音。でも本当に自主製作なのか？　（松本）



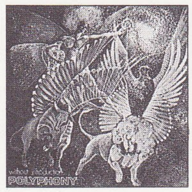
POLESTAR
Flying Thru The Universe
ＬＰ/Rascal 808-89　'80年

アコ・ギの爪弾きにウネウネしたシンセが重なっていくタイトル曲に代表される様に、シンプルでゆったりとしたメロディで淡々と進行していく雰囲気はピンク・フロイド的な部分も。が、自主制作の悲しさ、演奏の詰めが甘く、プロデュースにメリハリがないため非常に地味な印象を受ける。スリリングな（つもりらしい）インタープレイもあり、構成は結構凝っているのだが、やはりこの手の楽曲は、SE等も含めたアレンジ・センスと録音技術がないと辛い。ギターやオルガンには光る所もあるし（ドラムは、やりたい事がよく解るが、時々腰がくだけてしまう。）曲も仲々味わいがあるだけに残念。Ｂ①はリフ展開の面白いネクター風ハード・ロックの佳曲。この録音クオリティだったらＢ①の路線で行った方が良かったかも。（中）



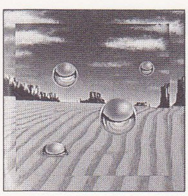
POLLEN（Canada）
Pollen
ＬＰ/Kebec Disc KD 908　'76年
CD/Kozac KO 2502-2
/マーキー MAR 9467

オパス５と並び、カナダの２大傑作といわれてきたポーレン。オパス５が乾いたイメージの清涼感のある音作りだったのに対し、このポーレンは聴く者にトリップ感を与える。技巧的にも申し分なく、きらきらと輝くフレーズが複雑なハーモニーを奏でる様は全盛期のイエスを想起させるが、色彩感覚がもっと極彩色に塗りたくられた感じで、いわば、ジャケットのイメージだと言ったらわかり易いかもしれない。極上のテクニックを駆使してこの世にあらぬ空間をコンセプチャルに演出するのがシンフォニック・ロックであるなら、このポーレン程、その形容がぴったりくるグループもあるまい。これだけの幻想性を伝えながら、覚醒した視野で曲を理知的に構成していけるということは、彼等の持つ非凡な才能を証明しているに他ならない。　（山崎）



POLYPHONY
Without Introduction
ＬＰ/Eleventh Hour EH 1003-5　'?年

アメリカのポピュラー・シーンは実力派が多い。国が広くバンド数が多いだけに勝ち抜く為の百戦練磨を要求されるからだ。意外とメジャーが青田刈りするような甘さは少ない。そこにメジャーの意にそわなかったプログレが実力を持ちながら自主製作に甘んじた例はあるだろう。テキサス出身のポリフォニーも不遇だったに違いない。E、L＆Pとアトミック・ルースター初期を合わせたようなパッションで押すシンフォニック・スタイル。ほぼ全編に及ぶハモンド・オルガンの速弾きに粘り気のあるギター・ソロと連打のドラムなど、総じてマイナー調。ここという決め手、サビに欠けて走るあたりが、演りたい放題に詰め込む自主製作らしい。平坦で冗長だがマニア受けするクセのあるサウンドだ。　（松本）



PRE
Pre
CD/ZNR CD 5001　'93年('73年録音)

ここ数年の発掘や新人の登場により今ではプログレの遅れてきた宝庫的な様相を呈しつつあるアメリカよりまたも素晴らしいバンドが発掘された。それがPREである。この度かのMASTERMINDをリリースしたレーベルであるZNRよりリリースされたこのPREのアルバムは、なんとプログレ黄金期の'73年に人知れず録音されていたものであり、また驚くべきことにEASTER ISLANDのメンバーであるMark Miceliの推薦によりCD化リリースに至ったといういわくつきのものなのである。音の方も鳴り物入りで登場しただけあって、その緻密に構築されながらも聞き易い楽曲や複雑に絡み合い変化する見事な歌とアンサンブルは当時活躍した往年の名バンド達と、とりわけYESを想定する程素晴らしいクオリティーを持ったものとなっている。　（島村）



PRISM（Canada）
See Forever Eyes
ＬＰ/Ariola 50034　'78年

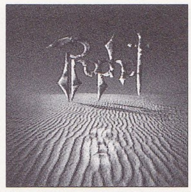
カナダはヴァンクーヴァー出身の５人組のセカンド。そもそも彼等は、仲間が集まってバンドになったのではなく、プロデューサーのブルース・フェアバーンが、地元のクラブに出演する有望なミュージシャンをセレクトし、その選ばれたメンツで結成されたという。当初は６人組だったが、デビュー作発表後、ツイン・ギターのひとりが抜け、さらに本作よりリズム隊もチェンジしている。当時、よくBOSTONと比べられたそのサウンドは、キャッチーかつ透明感漂うスペイシーなHR。爽やかなヴォーカルときらびやかなシンセサイザーも武器にしていた。本作では、誰だったかプロレスラーの入場テーマにもなったＡ④がその典型的ナンバーで、泣きのバラードも当然あり。その後、ブルースの手を離れ、'84年までに全６作を発表。　（奥村）



PROMETHEUS
Prometheus

CD/Deep Music DM 021 '94年
/マーキー MAR 95143

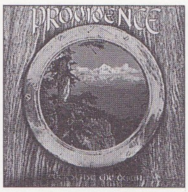
'80年代アメリカの先鋭レーベルだったプライヴェート・ミュージックからデビューしたサンフォード・パンダーと、彼の在籍したLAのバンドKOMMUNITY FKで片腕だったスティーヴ・ボールの二人が中心のバンド。ドラマーが現クリムゾンのパット・マステロットということで話題もあるが、そんなことはあまり意味ない。むしろ中心人物二人のLAアンダーグランドならではの先鋭感覚が冴えて、これがメジャー・フィールドにも通用しそうな瀬戸際で鳴っているところがいい。こっち向きの話で言えば、ジャム・カレットあたりの先鋭感で、ヴォーカル曲あり、インストの長大指向あり、ということだ。いい線を行ってると思うのだが、やっぱりもう一つ何か大きなポイントがあれば。それは歌メロでもアンサンブルの極端さでも。（松本）



PROPHET
Prophet

ＬＰ/Total Experlence TEL 6-5709
'85年
CD/アルファ ALCB-3035

ニュージャージー出身の５人組のデビュー作。BON JOVI人脈にも絡むことからポップでキャッチーなHR/HMバンドの一面もあるが、中心人物のスコット・メタクサス〈b〉がKANSAS、それもスティーヴ・ウォルシュに強い影響を受けていることから、HR/HM全盛の'80年代中期に往年の〝アメリカン・プログレ・ハード〞系サウンドを復活させたことでも知られる。特に①③⑤は、センスの光るキーボード・ワークと曲構成、そして決して明るくなりきれないリリカルなメロディ・ラインとコーラス・パートで、彼等が単なるハード・ポップ・バンドでないことを強く主張していた。その後、'88年に本作の延長線上のセカンドを、'91年にはよりストレートになったサードを発表している。（奥村）



PROVIDENCE
Ever Sense The Dawn

ＬＰ/(U.K.) Threshold THS 9 '72年
CD/マーキュリー PHCR-4239

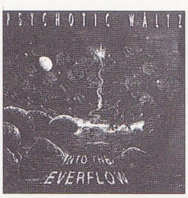
つややかなチェロ、ヴァイオリンの響きをとり入れたフォーク・ロック・サウンド。ムーディー・ブルースで有名なスレッショルド・レーベルの知られざる英フォーク系の名作、なんて書いてしまったが、後々の調べでどうもアメリカのバンドらしい、ということに落ち着いている。どちらにしてもソフトなアコースティック楽器の音が滑らかに流れて、朝露のすがすがしさ、プラス室内楽の響きなので、この手の好きな人は一聴をすすめる。結構クラシカルなイメージも強く柔らかで温かい音だ。メンバーはM.ブルースの変形ユニットとも言えるバンド、BLUE JAYSのアルバムへ参加してもいる。（松本）



PSYCHOTIC WALTZ
A Social Grace

CD/Sub-Sonic SVS 1102 '90年
/テイチク TECX-15631

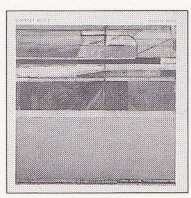
サンディエゴ出身の５人組のデビュー作。初期FATES WARNINGに強い影響を受けたバック陣に、JANE'S ADDICTION時代のペリー・ファレルに感銘を受けたというシンガーがジョイントしてスタートしたというだけあって、HMのエッジと、それに相対するサイケ感覚をうまく融合させた個性的なサウンドを当初からクリエイトしていたようだ。加えてメロディ感覚が普通ではなく、クセの強い変音階を多用したフレーズとその上に乗るより奇妙な歌メロが、エキセントリックさを強調。フルートも吹くシンガーはイアン・アンダーソンにもインスパイアされたとかで、⑥のバラードはモロだが、それはどっちかというとオマケ。以後セカンド、サードとサイケ色が強くなり、現在に至る。（奥村）



PSYCHOTIC WALTZ
Into The Everflow

ＬＰ/Dream Circle '93年
CD/テイチク TECX-25567

アメリカはサンディエゴ出身ながら所属レーベルの関係もありヨーロッパを主戦場とする５人組の'93年発表のセカンド。最新作にあたるサード（日本未発売）ではシンプルなリフ主導型ヘヴィ・サウンドに変貌してしまったが、本作では多少サイケがかった味を出しながらも幻想的で怪しげなプログレッシヴ・ワールドを構築している。中でもシンフォニックなイントロが美味しい①とアコースティック・ギターの調べと憂いを含んだ歌メロが胸をうつ名バラード⑥は出色の出来のように思う。ちなみにギタリストのダン・ロックとドラマーのノーム・レジオはドイツのDEATHROWのメンバーとのプロジェクト、END AMENで、ヴォーカリストのバディ・ラッキーはソロ・アルバムを、各々一枚ずつリリースしている。（石原）



QUARTET MUSIC
Ocean Park

ＬＰ/Nine Winds 0113 '84年

'80年代の前～中半にかけて４枚のアルバムを残したグループ。本作は二作目になる。ベース、パーカッション、ギター、ヴァイオリンの四人からなり、基本的にはアコースティック・オンリー（後の作品で一部シンセサイザーを導入）の編成。出自としてロックなのだろうが、クラシックやフォーク等からの影響をうかがわせるノン・ジャンルな音作りはオレゴン辺りにも近い。これだけだと時代柄、その他大勢のニュー・エイジになる所だが、特にパーカッションとギターを担当するクライン兄弟の演奏にどこか静かな気迫と言ったシリアスさが漂うのが、音に深味を与えている。それは、その後のクライン兄弟の発表した作品にも通じる物だ。ティム・バーン他、色々と交流のあったグループでもある。（中西）



QUEENSRŸCHE
Queensrÿche
LP/
CD/東芝EMI CP 20-5810　'83年

'82年に彼らのデモ・テープを聴いたレコード店のオーナー夫妻は、すぐに自主レーベルを設立、本作を発表する。その後マネージャーも兼任した二人がイギリスのプレスや、地元のラジオ局に働きかけた結果、彼らの噂を聞きつけたアメリカEMIが権利を買い取り、'83年にメジャー・リリースされることになる4曲入りミニ・アルバム(CD化に際し〝Prophecy〟を追加)。QUEEN、そして彼らのヒット曲〝Seven Seas Of Rhye〟を即座に連想するヨーロッパの香りを漂わせたバンド名はもとより、重く、かげりのあるそのサウンドは、遠いシアトルでのブリティッシュ・ハード・ロックの復活を感じさせた。同年暮には日本でも発売され、翌'84年8月には初来日公演を、まだ小規模な会場ながら実現させている。　(川上)



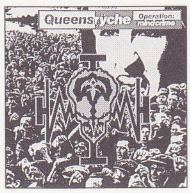
QUEENSRŸCHE
The Warning
LP/(U.K.) EMI 2402201　'84年
CD/EMI America E21Z-46557-2
/東芝EMI TOCP 7607

初来日公演の直後にこの1stフル・アルバムは発表された。プロデューサーはピンク・フロイドの「The Wall」のジェームス・ガスリー。言わば彼らとプログレッシヴ・ロックの出会いを生んだ重要な作品である。進化するヘヴィ・メタル・バンドとしての第一歩は、前作でのHR/HMの常套手段である中世的ファンタジーの世界から一気に時間をかけ登り、現代社会、近未来への警告へと姿を変える事であった。ジューダス・プリースト的とも言われたサウンドも充分残した上で、ラッシュの方法論を取り入れた多用化したスタイルへとわずかに歩み寄っている。日本青年館でのオープニング〝NM156〟で浮かび上がったジェフ・テイトの肖像が今も鮮明に回想される。すでにあの時進化の第一段階はすでに完了していた訳だ。　(川上)



QUEENSRŸCHE
Rage For Order
LP/EMI America ST 17917　'86年
CD/EMI America E21Z-46330-2
/東芝EMI TOCP 7608

通算3作目(フル・アルバムとしては2作目)にして、彼等は一気にHR/HMバンドとしてのイメージを崩しにかかる。プロデューサーに「Queen II」のエンジニアを務めていたニール・カーノンを迎えたのも、広がりのある音空間の中に数々のサンプル音をうまく取り込み、サウンドと一体化させるためだったろう。が、デジタルな音像の衣を纏っていたとしても、実は、彼等の基本的なHR/HMサウンドに変化がなかったことは、各曲の骨子となる部分を聴きとれば明白だ。確かにビデオ・クリップにもなったシングル曲の④は奇妙だが、それも、決して一方向ではないバンドの可能性のひとつとして、彼等が主張したかったものだったのではないか。〝限界〟を取り払うための、正に〝実験〟的作品。　(奥村)



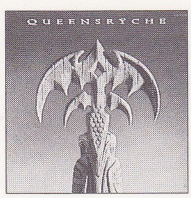
QUEENSRŸCHE
Operation：Mindcrime
LP/EMI America L3126
CD/EMI America E21Z-48640-2
/東芝EMI TOCP-8391　'88年

彼らの評価を不動のものとした金字塔。病んだ現実に鋭くメスを入れる社会派のコンセプトが映画さながらの劇的な進行と強烈な楽曲の数々によって聴き手の脳髄を揺さぶる。前作での近未来的志向が一気に壮大な世界へと結実したといえ、ソリッドでモダンな音創りに様々なSEが効果的に導入されこれ以上ないという程にドラマティック。ヘヴィ・メタルに進化は可能なのか？　という命題へのひとつの解答として日本では大きな話題となり、プログレッシヴ・ロックとの接点がクローズ・アップされる原因となった。RUSHを手がけたピーター・コリンズをプロデュースに迎え、彼らの資質が一気に開花した傑作だ。ライヴ・ビデオとセットにした「Operation：Livecrime」もリリースされ、見事な再現ぶりが確かめられる。(中島)



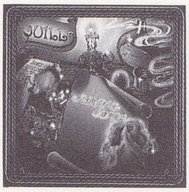
QUEENSRŸCHE
Empire
LP/(U.K.)EMI 950691
CD/EMI America E21Z-92806-2
/東芝EMI TOCP-8392　'90年

ボーイ・ソプラノによる荘厳な幕開け。前作に続きピーター・コリンズのプロデュースによる本作、前作とは対照的にコンセプトは各曲の中に凝縮されており、作品としての強烈さこそ及ばないが楽曲の充実度は前作に全くひけを取らない。一聴すると聴き易くなった印象だが音作りの密度は恐ろしい程である。ジェフ・テイトのヴォイスは低音から高音と万華鏡のように変化し、複雑にからみ合うギターとリズムは情感を失わない。当時は問題作扱いもされたが結果的には正解だったことは楽曲の充実度、更には〝Silent Lucidity〟のヒットが呼び水となりアメリカ本国で大ヒットとなったことにも証明されている。余裕と緊張感が交差する中、ある意味では更にプログレッシヴ・ロック色が強まった〝楽曲主導〟作である。(中島)



QUEENSRŸCHE
Promised Land
CD/(U.K.) EMI CDMTL-1081
/東芝EMI TOCP-8396　'94年

「Operation～」での社会派的視点から「Empire」での個への回帰、更に商業的成功を通過して制作された実に4年振りの作品。ヘヴィさの質感やフレーズの端々に見られる異国的ムードはヴィヴィッドな感性を示し、迫力とつき動かされるような切迫感はジェフ・テイトとクリス・デガーモの表現の必然性を示すに充分である。実験的ムードを吹き飛ばす、より深い地平からの声が作品のリアリティを高め、約束の地への希求はとどまることを知らない。様式美や叙情性といった言葉はもはや彼らには不要だが、終始一貫人間を視つめ、また自分を出していくことで結果として知性を超えて感情が伝わってくる。本作も楽曲単位ではあるがテーマが複雑にからみ合いより高度な次元でのコンセプトを形成する。堂々たる音世界である。　(中島)



QUILL
Sursum Corda
CD/Syn-Phonic '77年

伝説の〝クィル〟が遂にリリースされた。この作品はキーボードのテクニカル・プレイを中心にしながら、アコースティックな響きや幻想美を大切にした音創りの作品で、テクニカルなキーボード・プレイは〝タルカス〟時のキース・エマーソンを、叙情的な部分は初期のスティーヴ・ハケットを連想させるような出来で、カテドラルやイエツダ・ウルファに匹敵する名作であることは明白だ。シンフォニックではLPサイズの見開きジャケットにフル・カラーのライヴ・フォトを加えたインサート、さらにブックレットを加えての限定500枚プレスという力の入れようで、後にノーマル仕様のCDがリリースされるようだ。（山崎）



RA CAN ROW
Ra Can Row
LP/EYE 8107 '82年

オハイオはシンシナティで制作された自主制作。ジャケやインサートからプンプン臭うアヤしさは音をそのまま示している。ロックの編成でフリー・ジャズがどうのというよりこれはグル・グルとアシュラ・テンペルを足して2で割って、の乗り。ひたすらトゲトゲしく叫び続けるギターはアクス・ゲンリッヒを思わせ、ドタバタとくり返されるリズムの上を縦横無尽。やたらとエコーがかって中近東志向、つまりサイケデリック。しかし重圧感は少なく後年のオズリック・テンタクルズのような清涼感もチラホラと見られるあたりが面白い。どっぷりでもあるが聴き易く、アメリカにもやはりこの手合いがいたか、と実感出来る作品。再発LPには「現在このメンバーは生きており……」とか書かれていて、結構凄い。（中島）



RADIO PIECE III
Tesseract And Monuments
CD/ZNR CD 3001 '94年

米ZNRレーベルからのニュー・カマー。国籍、メンバーの経歴、関連人脈など現時点でいっさい不詳である。メンバーはキーボード2人とドラムスの3人。作品全体は非常に支離滅裂で、何がやりたいのかさっぱりわからず、たいへん面白い。「アヴァンギャルトであれ」という形式にとらわれないで、やりたいことをやっている。構築的で整合感が強く、フリー演奏なし。にもかかわらずデタラメに近い感覚もある。比率でいえば、多少ハッピー・ザ・マンを思わせるクリアー・サウンド、フランスのティアンコに近い屈折した曲想が多い。こぜれにムーディーなインスト曲、ハモンド・オルガンがスイングする妙なジャズ、ザッパ風の曲、ナイスを思わせる曲などが加わる。1曲目などは伝統的アメリカン・ロックの後ろでオルガンが暴れまわっている。（ミワ）



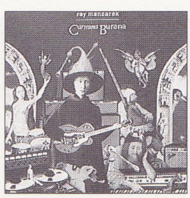
RALPH TOWNER
Solstice
LP/ECM 1060 '75年
CD/ECM 825458-2

アコースティック・ギターの名手、ラルフ・タウナーの名は勿論、オレゴンの中心人物としても重要なのだが、もう一つ絶対に見逃せないのが、このソルスティスのプロジェクトによる2枚の作品だろう。ヤン・ガルバレク（sax、fl）、エバーハルト・ヴェーバー（b、cello）、ヨン・クリステンセン（ds、perc）を迎えての流麗さと緊張感が同居した音は、明らかにECMレーベルが生み出した最良の物の1つと言える。過度の主張をせず、ゆっくりと叙景的に音が流れて行く様はECMスタイルの典型と言えようが、そこに込められた気迫のみなぎりようは奇跡的とすら呼べる物。全員が絶対的な名演を聴かせる中、自身のアルバムでは地味な演奏に徹しているヴェーバーの驚異的な演奏には何とも言い様が無い程の物がある。（中西）



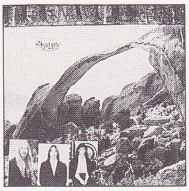
RANTZ
Rantz
LP/Casino 番号なし '82年

ジャスト・アナザーB級自主盤と言われればそれまでだが、世間にカテドラルやマースランダーやイースター・アイランドみたいなのがゴロゴロ転っていると思う方が間違いなのだ。カヴァー・アートはなかなか凝った美しいものだが音の方は〝美しい〟という言葉で形容されるタイプではなく、サスティンの効いたギターとやや押しの強いトーキング・スタイルがかった女性ヴォーカルをメインしたロック色の濃いもの。ほぼ全曲で聴けるフルートと時折入って盛り上るキーボードが聴きもので、本作を、たまたま手元にあるという理由以外で、ここに掲載する意義のあるものに仕上げている。メンバーに女性が2人もいるのに写真が無いのは残念。一枚聴き通すのはちょっとツライかも……。（森下）



RAY MANZAREK
Carmina Burana
LP/A&M SP-4995 '83年
CD/A&M CD-4945

言わずと知れたドアーズのキーボード奏者のソロ作品。カール・オルフの「カルミナ・ブラーナ」を全曲演っているとなると、マグマを思い浮かべるがやはり軽い。プロデューサーはフィリップ・グラスが担当、'83年当時彼がメジャー進出を図っていた事を想い出したがポップ的アレンジが施されており、楽しめる内容になっている。ラテン語（英訳のインサート付）で歌われている為かそれなりの雰囲気は保っている。しかし当時レイ・マンザレクがこのような作品を発表する必然性は感じられず、やはりフィリップ・グラスの「カルミナ・ブラーナ」ロック化のアイディアを依頼か共感を受けて作られた作品であると思われる。彼は'74年と'76年にマーキュリーよりソロ作品を発表しているが、内容はドアーズの流れを汲んだものである。（吉野）



REALM(STEVE VAILS)
Time Tales
L P/System 33-1184257 '83年
CD/System CD 14546-2

「システム」という名で紹介されて来たこのグループ、実は「システム」というのはレーベル名で、グループ名は「レルム」と言う。'83年の自主製作だが、軟弱なポンプに飽き飽きしている人達を大いに満足させ得る秀作と言える。クレジットは無いが、スイスのブルー・モーションと同じkey×2+dsという変則的なトリオ編成の模様。EL&Pでエマーソンを2人にした様な凄まじいキーボード・ワークで一方的に押しまくる。voの内、1人はJ.アンダーソン風の声を出している。20曲収録ながらトータライズされた内容。目まぐるしい展開の変化、圧倒されるスピード感、切れ味の鋭さ―いずれを取っても〝一級品〟の風格を備え、強烈な個性に乏しいユーロ・ポンプ勢に水を開けている。残念ながら、本作以降の活動情況については不明。（江田）



REALM
The Path
CD/Syn-Phonic SYNCD 9 '92年

レルムの2ndは米Syn-Phonicレーベルよりディストリビューションされた。生ギターのストロークにファルセット・ヴォーカルというフロント・ラインが好みを分けるであろうけれども、全体に完成度の高いシンフォニック・サウンドである。音色豊かなキーボード群、スピード感にあふれる曲展開。中間部に唐突な生ギター・ソロやピアノ・ソロが斬り込んでくる③などは、往年のYESを思わせる。シンセサイザーの速弾きもR.ウェイクマンを彷彿させて小気味よい。ラストのアルバム・タイトル曲中間部で聴けるキーボードによる弦楽アンサンブルも面白い。ただ、全編通して心に残る印象的な旋律に乏しく、インパクトという点で多少見劣りがするかもしれない。カバー・ブックレットはカラー写真をふんだんに使った豪華なものである。（ミワ）



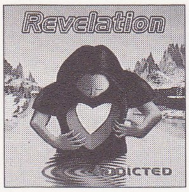
RELAYER
The Relayer Album
L P/HSR LSR 1006 '79年

リレイヤーが'79年にリリースしたこの作品は、様々な側面を持っている。SIDE Qの3つの小品から成る組曲は、明らかに往年期のキース・エマーソンのソロを意識したプログレッシヴ・ロックであるが、よりロック・スピリットの強い曲に、プログレッシヴなキーボードで味付けられた曲も多い。後者の曲は、'70年代のアメリカン・ロックのスタイルなので、ちょっとジャンル違いの印象であるが、加味されたキーボードのソロは捨て難い。いずれのスタイルにせよ、アマチュアくささは感じられず、安定したプレイで聴かせてくれる。総勢9人のメンバーがクレジットされているが、時にダブル・キーボードになったり、曲によってサックスを入れたりと変則的なスタイルである。Q面①とラストの曲が特に素晴らしい。（山崎）



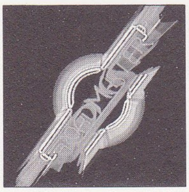
RELAYER
A Grander Vision
CD/Wire Mill WM 12054-2 '95年
/マーキー MAR 95142

スッキリシャッキリ、アメリカ版メロディアス・シンフォHR乗り。まず第一に録音、演奏の質は最近の自主モノの中でピカイチ。甘いハイ・トーンのvo(良い)を軸に、大作も、メロ中心に流麗な進行。バンド名通りの火花散るインタープレイは皆無で、むしろイエス/ジェネシス的フレーズを盛り込んだポップ寄りHR/シンフォとしてソツ無くまとまっている。余りにまんまなフレーズもあるが安定感はあるので、メロディ派には一聴の価値はあろう。しかしそれゆえに破天荒さが無く、感動もそこそこ。抜けがポップに向かうのが惜しいデビュー作。（中島）



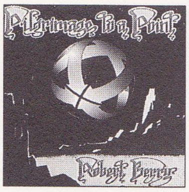
REVELATION
Addicted
CD/(U.K.) Red Hot CDR 108 '95年

英Red Hotレーベルよりリリースされ、ファン・クラブもイギリスの住所なのでてっきりイギリスのバンドかと思っていたがアメリカのバンドの模様。なる程このソリッドでタイトな抜けは今のイギリスからは出にくい音だ。メロディック・ハード・ロックの下地に切れとキャッチーさを加えたかのような質感にマイナー臭さは全く無く、録音／演奏とも水準以上。産業ロックっぽい売れ線志向もあるとは言えこれも完成度ゆえか。透明感のあるバラードやポンプ以後を示すコンパクトだがドラマティックな構成は自主のデビュー作としてはSI勢と軽く肩を並べるレベルである。1曲目のような思い切ったポップ感がもっと全面に出てくれば、より個性を確立することができると思う。ここで止まるには惜しい素材、もっとアクを。（中島）



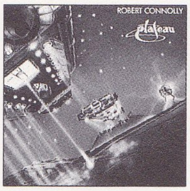
ROADMASTER
Sweet Music
L P/Mercury SRM-1-3760 '78年

インディアナポリス出身の5人組のセカンド・アルバムで、前作からはドラマーがチェンジしている。卓越したポップ・センスとスペイシーなキーボード・ワークを売りにしたハード・ポップ・バンドで、全編キャッチーながら、印象的なメロディが次々と出てくるところはなかなかのもの。ポップ・チューンを単なるAORにしない点に、QUEEN的なアイディアの方向性も窺え、時代性かBOSTON的音像も目立っている。但し、B面にて6分台の曲があるのに、展開に光るものがない点は残念。このポップ・テイストをうまく扱えるプロデューサーにでも恵まれれば、もっと面白いアルバムを作っていたはずだ。以後、1年ごとのペースで計4作を発表。次作サードでは、もっとムーグが効果的に使われている。（奥村）



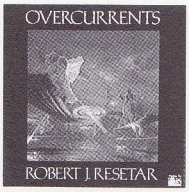
ROBERT BERRY
Pilgrimage To A Point
CD/Leonardo LEN 6691　'93年

K・エマーソン、C・パーマーとの３や、S・ハケット脱退後のGTRへの加入で知られる、アメリカ人シンガー/マルチ・プレイヤー、R・ベリー。最近では彼はマグナ・カルタ・レーベル主宰のフロイドやイエスのトリビュート・アルバムにも参加している。ブリティッシュ・プログレッシヴの洗礼を受けながら、アメリカ人らしいキャッチーなメロディ・センスを持つ彼はエマーソンやS・ハウが当時進んでいた方向性の良いパートナーとなったに違いない。ファースト・ソロに当たる本作でも当時のマテリアルなのだろうエマーソンやパーマー、ハウとの共作が収められ、10分の大作といかにもエマーソン的なキーボードを含む、ブリティッシュとアメリカン・プログレ・ハードの一つの融合の形を聴くことが出来る。　（高山）



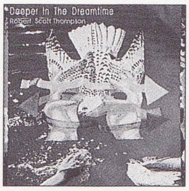
ROBERT CONNOLLY （Canada）
Plateau
ＬP/Tube TSH-352　'?年

SF調のジャケット、長髪の本人の写真などを見ると､「これ、ハード・プログレじゃないの？」と言われそうなロバート・コノリーなる人物のソロ作品。オルガンとメロトロンのイントロから始まり〝虚空のスキャット〟のような女性ヴォーカルが響きわたる……。プロレスで例えたらカール・ゴッチ、いやビル・ロビンソン直伝とでも言える正統派ブリティッシュ・ストロング・スタイルのシンフォニック・ロックだ。彼はドラムス以外の楽器そしてエンジニア、プロデュースまで全て一人でこなしてしまうかなりの才人だが、とりわけ達者なのはキーボードで、リック・ウェイクマンをかなり勉強したような小廻りのきいた演奏が印象的だ。Ｂ①の何処となくイエスの〝And You And I〟を思わせる曲（実はイギリス録音）などは絶品中の絶品だ。（本木）



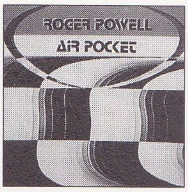
ROBERT J. RESTAR
Overcurrents
CD/Whispering Trees MWT 033
'87年

アコースティック・ピアノ、オーボエ等の生楽器とストリングスのハーモニーが織り成す世界は、そのメカニズムの礎にロマン派の影響があり幻想的ですらある。このアーティストの確かな音楽的素養か、他の凡庸なニュー・エイジのアーティストとは違うブリリアントな印象となって我々の耳に届いてくるのである。各曲ごとに様々なアイディアが投入されており、決して単調にはならずに最後まで聴き通すことができる。カナダのパトリック・ゴドフリーにも通じる音楽だ。　（山崎）



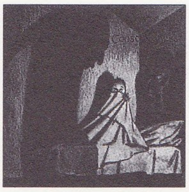
ROBERT SCOTT THOMPSON
Deeper In The Dreamtime
CD/Aucourant AUREC 9101-1　'91年

プライヴェート・ミュージック・レーベルから発表されそうな優良ニュー・エイジ・ミュージック。鋭敏な感覚で操られた音色群が、タイトル通り夢心地に繰り広げられ、更にサイケデリックな装飾音が、アウトからインに絡んでくる様は、ゆらぎ度合でEddie Jobson並み。テーマは当然「地球・環境」について、森林や草原、そこに息づく生物等。とはいっても問題意識を表現した創作ではなく、もっとナイーヴな感性に依っていて、Patrick O'hearnの作風に近い。そこはやっぱりニューエイジ系。リズム・セクションに民族色有り。中国やアフリカ系のパーカッションをアレンジして、グローバリズムを持つ。St. GIGAで流れればアピール必至。カバー・アートが意味深な感じで、両端にちらっと残された背後霊みたいな、全く逆の絵柄がひっかかる。（平井）



ROGER POWELL
Air Pocket
ＬP/Bearsville 6994　'80年
CD/ポニー・キャニオン PCCY 842

UTOPIAとして、またD・ボウイのツアー参加や、シンセの開発でもその名を知られるR・パウエル２作目のソロ・アルバム。３曲のヴォーカル・ナンバーを含め、一部T・ラングレン等のゲストを迎えている他は殆どが彼のキーボード/シーケンサー類による演奏である。とは言え所謂シンセ・ミュージックやテクノ・ポップとは一線を画す、洗練され何処かひねったセンスは流石にこの人らしい。随所にUTOPIAでもお馴染みのフレーズ/パターンが顔を出し、バンド内での彼の役割も確認できる。④は「Oops！Wrong Planet」に収録。⑤はUTOPIAのライヴでも演奏された。ロマンとアドヴェンチャー感覚は元祖RPG世代？　現在はCG制作会社の社員との事だがソロでもUTOPIAでもまたアルバムを発表して欲しい。　（高山）



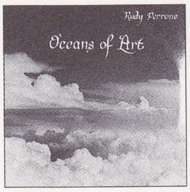
ROOTS OF CONSCIOUSNESS
Roots Of Consciousness
CD/Syn-Phonic SYNCD 12　'93年

趣味の悪さを逆手にとって誇示したかのような堂の入り方、もちろんこれが堂に入っているからには、曲構成の面白さや演奏技術の確実さはありあまるほどある。久々にシンフォニックからのリリースとは思えない奇妙キテレツな１枚だ。ブラック・ユーモアも涼しい顔でこなす。演出のうまいバンドだ。それで一応ハード・シンフォニックのようなことを演っている。もっと言えばセミラミスのようなグロテスクな曲進行やフレーズが、いかにもアメリカらしく健康的に出てきたりして、とにかく笑えるのだが、これが仲々聴かせてくれる。形容し難し。'95年、ヴォーカリストが死去している。
（松本）



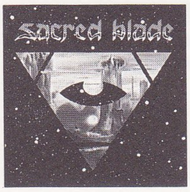
ROUND HOUSE
Handle With Care
ＬＰ/CP-4613　'76年

ハード・ロックに含むことは可能だと思うがその内でも最も軽い部類に入るであろう。メロトロンが入ってなければ採り上げなかったかも知れない。しかし米本国ではこの５年に３倍に値上っているのでどこかの誰かの評価は高いのだろう。ハード・ロックとしての軽さはミックスの失敗などではなく意図されたものの様で、その分メロディとハーモニーは整っている。ギター＆ヴォーカル、ベース、ドラムスの基本的なトリオ構成で、クレジットの部分にGeneral HystriaとかSex Appealなどもあるのは御愛嬌。肝心のメロトロン（バンドの連中は怒るだろうな）はＡ①、Ａ④で聴け、特にＡ④ではかなり鳴りの良い気持ちの良い使い方。全曲使ってたらアメリカのASIAなみの人気は出たと思うが、残念ながら彼らの知ったことではないわけだ。　（森下）



RUDY PERRONE
Oceans Of Art
ＬＰ/Heartstring Music IMUR-1　'81年

ルディ・ペローンは、元カテドラルのギタリスト。カテドラルは、幻想的なヴィジョンを持つシンフォニック・グループ（カテドラルの項参照）であったが、このソロ作品の印象はよりアコースティックで牧歌的なイメージで創られたものである。アンソニー・フィリップスや、初期のスティーヴ・ハケットのソロ作品にも一脈通じる、自然や素朴さを加味しており、カテドラルのようなハードな印象はない。しかし、ここに内在する音楽性の深みは、並のミュージシャンではとうてい達することのできないもので、聴く度に人の心をひきつけていくような出来なのである。バックはカテドラルのメンバー達。彼等にはLP化されなかったマスターがある。　（山崎）



SACRED BLADE（Canada）
Of The Sun＋Moon
ＬＰ/Black Dragon BD 015　'86年

カナダはヴァンクーヴァー出身、メイン・ソングライターにしてコンセプターで、歌詞は勿論のこと、バンド・イメージやジャケット・デザインまで徹底して手掛ける〝ザ・パイロット〟ことジェフ・ウルマー〈vo、g、key〉の個人プロジェクトのような形で活動していたユニットのデビュー作。基本サウンドはNWOBHMに強い影響を受けたであろうパワー・メタル系だが、ダークな雰囲気はB. SABBATHから、冷めた雰囲気はBÖCからインスパイアされたに違いない。また、全編を覆うどこか怪しい錬金術の如き世界観と、各曲をつなぐ短いインストやSEも只者ならぬ空気を演出している。'80年代初期から'90年頃まで、断続的にデモを制作していたようだが、アルバム音源は本作のみのようだ。　（奥村）



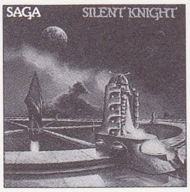
SAGA（Canada）
Saga
ＬＰ/Maze 8001　'78年
CD/Polydor 825 477

'77年にトロントで結成された５人組のデュー・アルバム。当初はPOCKETSと名乗っていたらしいが、改名して正解だろう。いきなり、Ａ④が〝第４章〟、Ｂ④が〝第６章〟と言われても困ってしまうが、このコンセプト（？）は、４作目でようやく終章を迎える。サウンドの方は、全編でキーボードを使いまくりで、当時としてはかなり先鋭的なアンサンブルがプログレッシヴだった（ギター以外、４人がムーグをプレイ。キーボーディストのクレジットは〝Lead Keyboards〟だ）のだろうが、曲調は飽くまで耳に優しいキャッチーなものばかり。７分前後の大作を３曲も含みながらも、クサいまでの劇的展開を見せる曲はなく、壮大な泣きでドップリ浸れる曲もなし。Ｂ③④も、あと一歩……という感じか。　（奥村）



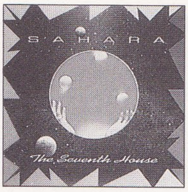
SAGA
Images At Twilight
ＬＰ/Polydor 2391 437　'79年
CD/Belaire MCD 1061

キーボーディストをチェンジしてのセカンド・アルバム。が、基本的な方向性に変化はなく、キーボード主体の、きらびやかながらどこか淡々とした音像は前作の延長線上と言える。ただ、ポップな曲はよりポップになり、ドラマ性を持たせたい曲はアレンジにより気を配って、前作と比べると全体の流れにメリハリが出てきたのも確かだ。その点はリード・シンガーのマイケル・サドラーの唱法にも顕著で、前半はかなりキャッチーに歌い、逆に、後半特にＢ②③④では、前作でも聴けた、あのMAGNUMのボブ・カートレイを思わせる柔らかな唱法をとっている。結果、その後半３曲は、かなりドラマティックさが出てきたのではないだろうか。例のコンセプトは、ようやく〝第１章〟が登場。　（奥村）



SAGA
Silent Knight
ＬＰ/Polydor 2374 166　'80年
CD/Belaire SAG CD 3

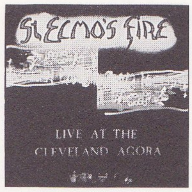
またまたキーボーディストを代えてのサード・アルバム。しかし、やはり方向性に大きな変化なし。１曲目が６分台ということで期待が嫌でも膨らむが、どうもインパクトに欠けるこの曲は、ファーストの淡白さを感じさせる平板なアレンジに逆戻りしたかのよう。で、残りはほぼ全編がキャッチーさを前面に出した、その後の彼等の進む道を予見させる曲ばかりで、少々ガックリ。とはいえ、やはり楽曲自体のクオリティは高い。ここまで、本国カナダとドイツでの成功を享受してきた彼等は、そして、次作でようやく全米デビューを果たす。が、チャート・アクションを起こせたのはその後２作のみで、以後、どんどんとコマーシャルになるも、結局は加・独のシーンへ戻ってしまい、現在も元気に活動中。　（奥村）



SAHARA
The Seventh House

CD/Dream Circle DCD 9202 '95年
/テイチク TECX-25869

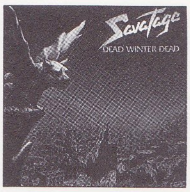
元WARLORDの〝センティネル〟ことダイアン・アレンズ（key）を中心に、'87年、LAにて結成された５人組のセカンド。'92年発表のファーストでは様式美系の匂いもする伝統的なHRサウンドを聴かせた彼等だが、本作では女性シンガー、エリザベス・ヴァンドールの存在感をより前面に出し、どちらかというと所謂〝フィメール・ヴォーカルもの〟的な色を強くしているようだ。そのため、元々はパンチの効いた典型的HRシンガーのエリザベスも曲の世界観により様々なキャラクターを演じ分け、よりファンタジックな雰囲気を演出。HRだがHRではない何やら不思議な音世界をここに完成させた。ところが、今年の夏にバンドが突如解散。今後、エリザベスはソロで活動していくとのことだ。（残念…）　（奥村）



ST. ELMO'S FIRE
Live At The Cleveland Agora

ＬＰ/Corposant CRS 001 '80年

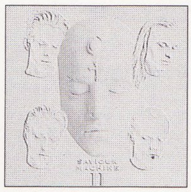
めまぐるしく変化する演奏は、プログレッシヴ・ロックの伝統を受け継ぐものであり、キーボードよりもギターを前面に押し出しているところはクリムゾン的とはいえないこともない。ライヴ盤ということで、彼らの魅力を十二分に伝えていないかもしれないが、個人的には非常に興味深い存在である。それというのも、熱気あふれる演奏の中にも、緻密なアンサンブルを有しているからで、それに伴うメンバー５人の実力も高い。収録時間は短いながら、４曲とも聴き応えがあり、トールキンからヒントを得たというＡ②、ジェネシス調の中間部を持ったＢ②が特に印象的。メンバーは、ポール・コラー(b)、エリック・フェルドマン(g、syn)、マーク・ヘルム(ds)、エリオット・ウェイントラーブ(g、vo)、ステファン・ジョン(perc、syn、vo)。　（吉瀬）



SAVATAGE
Dead Winter Dead

CD/ゼロ・コーポレーション XRCN-1249
'95年

フロリダ出身、当初はパワー・メタルをプレイしていたが、クラシックやオペラに精通するプロデューサー、ポール・オニールとのジョイント後、徐々にドラマティックでクラシカルな要素を取り込み、通算10作目のスタジオ作となる本作で、ついにその10余年のキャリアの集大成を完成させた。サラエボ内戦を舞台とした本作はコンセプト作にして〝ロック・オペラ〟。全編をオーケストレーションが覆い、荘厳かつ感動的なサウンドを構築している。特に、サラエボに実在した老チェロ弾きをモチーフとした場面の演出は、生のチェロとオーケストラのサンプル音がバンドと絡み、凄まじいばかりの劇的サウンドが、エモーショナルなヴォーカルと共にクライマックスへと導く。これぞ、HR／HM史上最強のシンフォニック作品。（奥村）



SAVIOUR MACHINE
Saviour Machine II

CD/Intense CD 32005 '94年

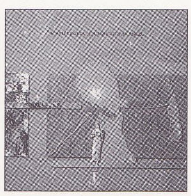
南カリフォルニア出身の５人組のセカンド。シンガーが白塗りのスキンヘッドで額に宝石……という何ともインパクトの強いルックスをしていることからも分かるように、かなり芝居がかったコンセプトを持つバンドで、サウンドの方は、生ピアノをうまく使い、オーケストレーションも大仰なバックの上をオペラティックなヴォーカルが自在に歌い上げる、とてつもなくドラマティックだがある部分繊細かつ耽美なもの。専任キーボーディストのいなかったデビュー作ではギターがヘヴィに出ており、どちらかというとHM寄りだったが、本作はもう映画のサントラか現代クラシックの域まで行ってしまっている。ちなみにメンバーはクリスチャン。16分の大作⑧ではサイケな世界観もあって、ある意味〝内側〟にも響く。　（奥村）



SCARLET RIVERA
Scarlet Rivera

ＬＰ/Warner BS 3060 '77年

ボブ・ディランの作品にも参加した事があるという、女性ヴァイオリニストの初作。b、ds、keyに管楽器兼ヴォーカルの五人による、グループ色のある演奏。基本スタイルとしては「ワイアード」期のJ.ベックのギターをヴァイオリンに置きかえたような、モノ・シンセとヴァイオリンがソロ、ユニゾン、掛け合い等でひたすら競い合うものだが、どちらかと言えばロマンチックで大迎なテーマを用い、各面最後に10分前後の大作を持ってくる辺りプログレ寄りの作風。これはヴァイオリンと言う楽器の特性とも合う所だが、クラシカルと言うよりはジプシー調と言ったニュアンスを持つ。翌年に少々曲調にバラ付きのある２ndを発表し、近年もジェリー・グットマン路線の好作を発表している。　（中西）



SCARLET RIVERA
Journey With An Angel

ＬＰ/(Hol.) Thela 834 112-1 '88年
CD/(Hol.) Thela 834 112-2

'78年の「Scarlet Fever」以来、音沙汰がなかった彼女の'88年の作品（間に作品があるかもしれないが）。年代を反映してか曲調はゆるやかにイメージを拡げるタイプの物になっており、当時の（プライヴェート・ミュージックからの）J.グッドマンを多少フュージョンに寄せたかの風だ。当然、かってのように滅多やたらと暴れまわるアドリブ・プレイは見られないが、ゆったりとして艶やかなヴァイオリンの音色は仲々美しい。一部、ムーディーなサックス等安手のバックが腰を折ったりもするが、それも多少の事。ただし、本当の事を言えばこの時期の音源としてはモントルー・ジャズ・フェスのオムニバス・ライヴ・アルバムがあり（他、R.ラッセル等）、より生き生きとした表情豊かな演奏となっている。　（中西）



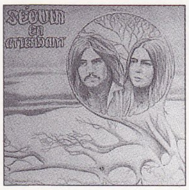
SCOTT LINDENMUTH GROUP
Changing Rhythms
LP/Dark Stream DS 1002 '87年

アコースティックなトーンを手に着けつつ、それを昇華させたようなイマジネイティヴな作風が一時のゴードン・ギルトラップを思わせるギタリスト、これが2作目となる。前作同様、自身のレーベルからの完全自主製作だが、エンジニア、プロデュースにニュー・エイジ方面で名の知られるポール・スピアーを迎えている所、前作がダウン・ビート誌に取り挙げられている所等から、多少の知名度はありそうだ。他、ds、key、bを迎えたバンド編成による録音で、バランスの取れた作風だが、メインとなるのは当然本人のギター・ライン。複数のラインを重ねたアンサンブルから流麗なリード・ラインまでテクニックは確か。多少フュージョン寄りだが、時としてホールズワースやハケットを思わせる繊細なトーンを聴かせる。(中西)



SÉGUIN (Canada)
Séguin
LP/WEA WSC 9013
CD/WEA CD 93847

HARMONIUMと並んでフレンチ・カナダを代表するフォーク・ロック・グループの1stアルバム。後のアルバムでもジプシー風の舞曲があったりして、コテコテのトラッド・グループと思いきや、それ以前は別バンドでサイケデリック・フォークをやっていたという謎めいた経歴を持っている。そして本作。トラッド・フォークを基調としているが、昔のサイケ風のムードも結構残っており、最もプログレ色が濃いといえるかも知れない。多少荒けずりでファンタジックなムードも少ないが、マリ・クレールのヴォーカルが美しい⑦は後を予見させる。(内田)



SÉGUIN
En Attendant
LP/WEA WSC 9015 '74年

カナダ、あるいは少くともケベックは、レコード・フェアがあると家族一同で出かけていったり、小さな村までバスが迎えに来たりするのだ、とカナダ人から聞いた。セギンやアルモニウム周辺の皆様も農村や牧草地で一緒に暮らしていそうな雰囲気ではある。実生活と音楽との距離が短く、密着しており、彼等の様なバンドをパブかなんかで生で見れたりする、アイルランドの様な所なのではなかろうか。そういう底辺の広い所で上の方に位置するバンドの作品は、地球の反対側でも耳のある人には喜ばれているというわけだ。本作は2作目で、1stよりはずっと洗練され起伏に富んでいるが、何故か淡白な印象を受ける(俺だけか?)。ともあれこの方向での可能性は次作以降で全く見事に花を開く。(森下)



SÉGUIN
Récolte De Réves
LP/Kot'ai KOT 3307 '75年
CD/Musi-Art MACD-5810

かつてのユーロ・ロック集大成再版時に彼らの4thのみ掲載されたのは当時まだ全作品が知られていなかったからに過ぎないと思う。本作こそ彼らの最高傑作であろう。異論も出るだろうが、それは極めて優れたバンドに付き物の幸福な対立である。セギンはアルモニウムの中心メンバー、リシャール・セギンとその妻マリ・クレール・セギンによるユニットであるが、彼女は、アルモニウムで歌っていたことが腹立たしくなる位の美声の持主で、本作では声のみパートがかなりありたっぷり楽しめる。曲調も前2作に比べ遥かに洗練され、文字通り美の極致といった趣き。こんなに音楽性の高い作品がそれにふさわしくちゃんと売れるというカナダの人々の精神的豊かさを羨ましく思う。イラスト入り歌詩カード付。(森下)



SÉGUIN
Festin D'amour
LP/CBS PFS 90385 '76年

カナダはケベック州のフォーク・バンドのたぶん4th。基本的には初期MALICORNEに近い音だが、彼らは心の奥底に眠るムキ出しの「愛」をとても素直に表現している。加えてA面後半からB面にかけてはジプシー・ヴァイオリンが突如クラシカルになったり、天にも昇るような伸びやかな女性ヴォーカルがソロを取ったりしてシンフォニック顔負けの盛り上がりを見せる。彼らはHARMONIUMと交流が深く関連アルバムもリリースされているが、そういえばサウンドにも共通点が見られる。なお、マイナー・リリースの1stもTUDER LODGEをケベック・フォークに寄せたような好作品。(内田)



MARIE CLAIR SÉGUIN (Canada)
Mane Clair Séguin
LP/CBS 83973 '79年

そのファンタジックな曲想でシンフォニック・ファンをもうならせたケベックの名フォーク・グループSÉGUINの看板女性ヴォーカリスト、マリ・クレールのソロ・アルバム。これが2作目を数える。ソロ・デビュー作は良質ながらもどこか垢抜けないバタ臭さが気になっていたが、本作ではそうした部分は大きく改善され、曲の完成度も比べものにならない程アップしている。いわゆるコンテンポラリー系のシンガー物で、しっとりとメロディアスな楽曲は非常に聴き易い。そして多くのリスナーを魅了した天界のスキャットはここでも健在、程度いポップさと絶妙にマッチングしてついうっとりと聴き惚れてしまう。数曲でHARMONIUMのセルジュ・ロカによるメロトロン・プレイが聴けるのも話題のひとつ。(内田)



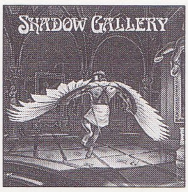
SERGE LOCAT (Canada)
Transfert
LP/CBS PFC-80010 '78年

アルモニニウムのキーボード奏者のソロ作。「Les Cinq Saisons」や「En Tournee」での卓越した叙情は彼の実力に起因していたのは誰もが認めるところだ。本作ではアルモニウム時代のような壮大なプレイは少々控え目で、どちらかと言うとアコースティックな感覚を適度に盛り込んだ、シンプルでメロディアスなものとなっている。元々はフォーク・バンドであったアルモニニウムが後期にあまりエレクトリックな方向に進みすぎた事への反省、そして彼の自然への愛着というものがストレートに表現されており、彼の暖かな人柄を端正こめた実に美しい演奏から感じとれる素晴らしい作品だ。B面ラストでS・ハケット調のギターを弾いているのはミッシェル・ル・フランソワでセルジュは彼のソロ作にも参加している。（本木）



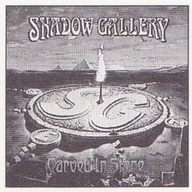
707
707
LP/Casablanca NBLP 7213 '80年

LAで結成された4人組のデビュー作。彼等が一般的に知られるようになるのは、後にリード・シンガーのケヴィン・チャルファントを加えて5人編成となり、映画『Megaforce』のテーマ曲を含むサードを'82年に発表してからのことだろう。が、キーボード不在のトリオのまま、セッション・プレーヤーを起用して制作されたその前年のセカンドや、スティーヴ・ペリーにクリソツと評判になったケヴィンを含むサードの、JOURNEYにも通じるキャッチーなHR路線以前に、彼等は本作でストリングスを導入したよりドラマティックな方向性を実践していたのだ。本作B④の大作バラードはその最たるもので、感動的なアレンジは涙モノの出来。また、展開が絶妙なB③やメロディ展開が劇的なB①も名曲だった。（奥村）



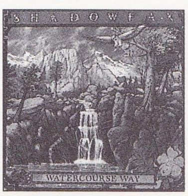
SHADOW GALLERY
Shadow Gallery
LP/Magana Carta MA 91442 '92年
CD/(U.K.) Roadrunner MA-91442
/アポロン APCY-8083

Magna Cartaの第2弾として登場したペンシルヴァニア出身の4人組のデビュー作。フルート等も導入するなど、'70年代プログレからの影響を基盤としているのだが、その音作りはあくまでモダンな感性に包まれている。'95年にリリースされるセカンドにおいて、その完成度の高さから多方面から支持を受けるわけだが、叙情味溢れるメロディを生み出す感性は、本作においても遺憾なく発揮されており、③⑥といったナンバーには思わず息を呑む。また名曲として名高い⑦は17分を越える大作なれど、アルバム中最も秀でた構成を誇る上に、リフレインのあまりの美しさには陶酔させられる。尚、この時点では正式なドラマーが不在で、そのことがアレンジ面での僅かな詰めの甘さにつながったようだ。（芦沢）



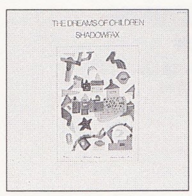
SHADOW GALLERY
Carved In Stone
CD/Magna Carta '95年
/アポロン APCY-8236

'80年代には〝速弾きギタリスト発掘人〟として知られたマイク・ヴァーニーが主宰するプログレッシヴ・ロック専門レーベル、Magna Carta所属の有望株の今年8月にリリースされたばかりの最新アルバム(通算2作目)。複雑な曲構成、大作主義、メロディの叙情性といった〝いかにも〟のファクターをきちんと〝聴かせる〟ものに昇華している点は高く評価できる。ギターのエッジも非常に効果的に用いられており、曲作りや演奏能力も軽く平均点を越えるだけのものを備えているといっていいだろう。ただ、まだ2作目ということもあってオリジナリティの確立という一点のみが現段階では心許ない。これだけの完成度の作品を作れるのだから次作以降それをクリアにすることを期待する。（石原）



SHADOWFAX
Watercourse Way
LP/Passport PPSD 98013 '76年
CD/Windham Hill WD-85-2

本アルバムの再発を含め数枚のアルバムをウィンダムヒル・レーベルからリリースして、その名をプログレッシヴ・ロック・ファン以外にも知られるようになったシャドウファックス。本作以外のレコードも彼らの実力を示す力作であるが、メンバーの意図はともあれ、我々から見ると、彼らの持ち味がオブラートで包まれたかのような印象は免れない。その点、本作品はロックとしての力強さに溢れている。高度の演奏力を持った5人のメンバー(ギター、ベース、ドラムス、キーボード、管楽器)が一体となった演奏はリリカルかつドラマチックである。ジャズ・ロック・グループと言われる彼らであるが、テクニカなソロで押しまくるタイプではなく、ゆったりと情感を込めた音作りをしている。（賀川）



SHADOWFAX
The Dreams Of Children
LP/Windham Hill 1038 '84年
CD/Windham Hill WD-1038-2

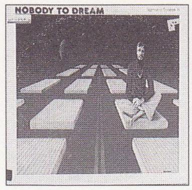
'72年にシカゴ郊外で結成され、「Watercourse Way」('76) 1枚で消えてしまったSHADOWFAX。それが'82年に新興ニュー・エイジ・ミュージック・レーベル、Windham Hillのもとでメイン・アーティストとして大復活したのだからプログレッシヴ・ロック・ファンは度肝を抜かれた。まるで去勢されたかのようにおとなしい彼らのサウンドは往年のファンには拒絶されたが、彼らは新しいファンを掴むことに成功し、来日も果たした。ロック色こそ後退したが、彼らの音楽の本質は実はそれほど大きく変わった訳ではない。ダグ・マルチニク(key)の持っていた音楽性が抜け落ち、G・E・スティントン(g)以上にチャック・グリーンバーグ(lyricon、sax、fl)が台頭しただけのことだ。多分現在もレーベルを移籍して生存中。（坂本）



SIGMUND SNOPEK Ⅲ
Who's Afraid Of Virginia Woolf?

ＬＰ/Water Street WST 1001
'72年('73年、'87年再録音)
CD/(Ger.)WMMS 042

本作を始めとして、バンドSNOPEK名義の二枚を含め、知る限り'87年までには６枚のアルバムがある。作風もヒネたロックと言える物から'82年の「Roy Rogers Meets Albert Einstein」のように極端に出来の良いプログレッシヴ・ロック作品まで多岐に渡る。本作はアメリカの'72年という時代相応に'60年代的ゴタマゼ感覚を漂わせた作風で、サイケ・サイドでも語られていたのが納得が行く。とは言え、おそらくは正規の教育を受けたと思われる作／編曲能力の高さと、ストリングス等を配しつつ、場面毎に的確な色を付けたトータル・アルバム的な音作りは本誌読者に強くアピールするはず。尚、'73年の現代音楽作品と'87年に本作収録曲をより明確でダイナミックなシンフォ・ロックとして再録した物が追加されている。　(中西)



SIGMUND SNOPEK Ⅲ
Nobody To Dream

ＬＰ/CYR-1001　'75年

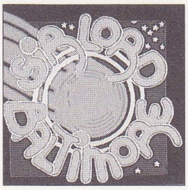
メロトロン・ファンにはお染馴みのシグムン・ドスノペック３世であるが、アルバムを何枚出しているか正確にはよくわからない。本アルバムは、付属のポスター兼歌詞カードに紹介されている過去２枚のアルバムから考えて３枚目と思われる（プロモを除く。）。さて内容の方であるが、スノペックの弾くピアノ、メロトロンを中心にシリアトリカルなヴォーカル、コーラス、ギター等がからみ、時に叙情的に、時にドラマティックに盛り上がり聞く者を飽きさせないトータル・アルバムに仕上がっている。尚、本アルバムには別テイクのプロモが存在するが、かなりレアらしい。　(六井)



SIGMUND SNOPEK Ⅲ
Roy Rogers Meets Albert Einstein

ＬＰ/Mountain Railroad HR 8004
'82年

'72年にデビューして以来、様々なフィールドで数多くの作品を発表している彼のような存在の場合、単純に１つの作品を取り挙げて良し悪しを問うても余り意味は無いのだが、その長いキャリアの中でも明らかにピークに位置するものの１つとして本作を挙げる事にそうは異論は出ないはず。彼の経歴上でも珍しくプログレッシヴ・ロック色を打ち出したアルバムで、全３曲と大作指向。殊にＡ面は30分近い大作で占められている。とは言え、やはり一筋縄ではいかない作品で、30秒毎に意表を突きまくる曲展開の異常さ、アイディアの豊富さは特筆物。にもかかわらず全体を通しての整合感は高い。人を食った感覚がある分、感情移入はしづらいタイプだが演奏技術を含めたクオリティの高さは類を見ない程。　(中西)



SIR LORD BALTIMORE
Sir Lord Baltimore

ＬＰ/Mercury 6338 069　'71年
CD/(Ger.) TRC 047

'70年代ロック喫茶の必須アイテムにして、幻のアメリカン・ハード・バンドのセカンド。(こちらがファーストという説もあるが、個人的には２作目と伝え聞いてるんで) トリオ編成の前作の方は、それはそれはガサツで、いかにも大陸的な力技的骨太ハード・ドライヴィング・ヘヴィ・サウンド(何じゃそりゃ……)を聴かせて、CACTUSもGFRも何のそのという感じだったが、ギター兼オルガン・プレイヤー（オリジナル・ギタリストの兄弟か）を加えて４人組となった本作では、まだまだサイケ風味は残しながらも、Ａ面トップから11分半の組曲を、少々ファンタジックにカマしてくれる。とはいえ、不器用なハーモニー部を除けば、ドラマーのジョン・ガーナーの声は依然ゴツく、ヘヴィさは消えていない。　(奥村)



SIR LORD BALTIMORE
Kingdom Come

ＬＰ/Mercury SR61328　'72年
CD/(Ger.) TRC 015

言わずと知れたサイケ寄りハード・ロックの大名盤。1stはサイケの文脈で語られる事が多いが、この２ndでは、実にラウドで、三位一体となった少し前のめりに突っ込んで行く様なリズム感が最高にスリリング。Ａ⑤のギター・リフなんかたまらなく格好良いし、ヴォーカルも悪乗り気味に切れていてユーモラスなくらいだ。手数の(足数も)多いドラムを始め、メンバーの力量は見事。この暴れ馬の様な演奏を、シンプルに一点の濁りもなくハードな音像にまとめ上げたのは、名匠エディー・クレイマーの仕事。妙にベタつかないから後味すっきり胃にもたれないが、アドレナリンは出っ放しのスポーツ感覚。アコ・ギとチェンバロが美しい、唯一のバラードＡ④も名曲。正に必聴の一枚なのに最後の作品。何故だ!?　(中)



SLOCHE (Canada)
J'un Oeil

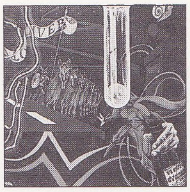
ＬＰ/RCA KPL 1-0126　'75年

ダブル・キーボード、ギター、ベース、ドラムスの５人から成るスロシュのデビュー作。本アルバムは、フランスにおいても、ザオ、トランジット・エクスプレスらの名作で知られるRCAのバランス・シリーズの１枚としてリリースされている。こうしたことからも分かるように、その内容は高水準のジャズ・ロックに仕上がっている。各メンバーのソロを次々につないでいく演奏は力強く軽快である。ギターはロック色が濃く、多少なりともキース・エマーソンを思わすピアノ・ソロはややクラシカルである。このように各メンバーの個性が総合されてグループ独自のサウンドが出来上がっている。ロックを基礎とした'70年初期のイギリスのジャズ・ロックに通じる聴き易い音である。'76年に２nd「Stadacone（同KPL-１-0177)」を発表した。　(賀川)



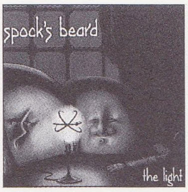
SOMA
Soma
CD/(Fra.)Heading West HW 652509
'92年

'86年に制作されたこの作品、主役を務める3人Guy Eckstine (ds、per) Mark Lauren (key、vo)、David Shawn(g)の正体については皆目判らないが、ゲストがとんでもない。V. ベイリー、A. ホールズワース、P. オハーン、G. リー等。48チャンネル録音でサウンドもプロ級。何故に6年後にフランスのマイナーから出る派目になったのかもまだ謎。歌詞が全部つながったトータルな構成で、一言で言えばファム・ファタールを追いかけてひどい目に合う男の話（？）。ただし相当にコミカルではある。一方のバックだが、こちらは厚手で派手派手しいシンフォック・サウンドでUK、D. サンシャス辺りを思わせる。当然、楽曲／演奏の質は一級。ホールズワースは5曲でソロを取り、かなりの好演。（中西）



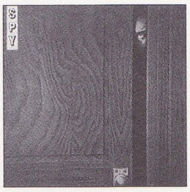
THE SPIRIT OF CHRISTMAS (Canada)
Lies To Live By
L P/Daffodil DAF 10047 '74年
CD/The Laser's Edge LE 1001
/マーキー MAR 9012

スピリット・オブ・クリスマスは以前ジェスロ・タルという形容で紹介されていたが、確かにイアン・アンダーソンがブリティッシュ・トラッドを基盤に独自のドラマティックなサウンドを築き上げたスタイルに影響を受けており、実際カナダでの英語圏グループはまだ埋もれているものが多くあるのであろうが、珍しく本格的ブリティッシュ・サウンドを有したグループである。各メンバーのテクニック（特にギター）が安定しており、アレンジも変化に富んだ素晴らしいもので、ピアノやメロトロンのメロディは特筆すべきものである。'74年にリリースされ、これが唯一の作品だと思われるが、'71年～'73年に前身バンド、CHRISTMASで2枚のアルバムをリリースしている。（吉野）



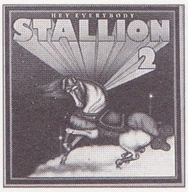
SPOCK'S BEARD
The Light
CD/Syn-Phonic SYNCD 14 '95年
/マーキー MAR 95180

カリフォルニア出身の4人組、デビュー作。シンフォニック・ロックと言うには余りにも型が無く、またそうした前提の無い地平から始まっていることでアメリカならではのプログレッシヴ・ロックになっている。オルガンやメロトロンを使用しているが懐古型では終わらず、むしろ同時代的（ダンサブルでさえある）リズムやポップ、ジャズ／フュージョン色の上にイエスやカンサスを加えたような印象。最近のバンドではDISCIPLINEに通じるひねくれ度であり、その上でシンフォニックな聴かせ所も多数ある。演奏力、構成、作曲能力とも第一級のものを持っており、大作主義（組曲を2曲含む）でありながらスムーズな流れと印象的メロディで一気に聴かせる。ひとつの突破口となる新種の出現、と断言できる内容だ。（中島）



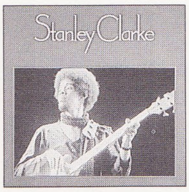
SPY
Spy
L P/Kirshner '80年
CD/(Ger.) Sony 920. 6291
/ソニー SRCS 6291

Kirshnerレーベルからのデビューで、メンバー構成がヴァイオリニストを含む6人組だったことから、〝KANSASの弟バンド〟的な捉われ方をしていたバンドの唯一のアルバム。ということで、基本的なサウンドはかなりKANSAS的ではあるものの、殆どの曲が4分前後ということからも分かるように、飽くまで歌モノ中心で、インスト・パートに各楽器のソロが大々的なフィーチャーされるということはない。とはいえ、イントロや間奏部分、またヴォーカル・パートのバッキングにまでも、絶妙のアレンジで印象的なフレーズが挟み込まれているのは実に見事で、ギター、シンセ、ヴァイオリンと、よくもまぁブツからずに詰め込んだものだと感心しきり。次作があれば色々期待出来たに違いない惜しい存在だ。（奥村）



STALLION
Hey Everybody
L P/Casablanca NBLP 7083 '78年

カサブランカ・レーベルと言えば、'70年後期に最もその名を広めたハード・ロック主体のレーベルだが、当時のチャートを賑わすディスコ・ミュージックにも力を入れた頃があり、元来ハード・ロック・バンドだったこのスタリオンのファーストLPにも、その辺の迷いがありありと表われた実にタイムリーな失敗作だった。翌'78年にはこのセカンドを発表するが、土着的アメリカン・ロックとハード・ロックに、ウォリー・ダムリックのキーボード、ムーグ、アープが不思議にマッチする快作に仕上がっている。レーベルの思惑通りタイトル曲がビルボードのトップ50に食い込むが、そんなことはどうでも良い。唯一プログレッシヴな展開をするB面が良く、シンセの嵐の中で突然泣き出すギターが現れるが、そのも束の間の夢と化す。（田中）



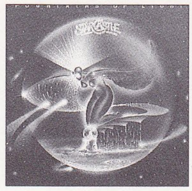
STANLEY CLARKE
Stanley Clarke
L P/Epic PE 36973 '74年

リターン・トゥ・フォーエヴァーにおけるプレイで一躍スターとなった彼のグループ在籍中に発表された2ndリーダー・アルバム。R.T.Fからビル・コナーズ(g)、その他ヤン・ハマー(key)、トニーウィリアムス(ds)によるバンドに加え、マイケル・ギブス編曲のストリング＆ブラスも曲によりフィーチュアされている。曲調としてはモロに当時のR.T.F.の影響を受けたドラマチックなテーマとキメを多用した物がほとんどだが、本家に比べラテン色は薄く、リズミックなナンバーが増えているのはベーシストらしい所。14分にも及ぶ〝Life Suite〟あたりのドラマチックな曲調が聴き物。次作「Journey To Love」あたりも同傾向の好作だが、その後はファンク色が強くなっていくのは時代柄しかたがないか。（中西）



STARCASTLE
Starcastle
LP/Epic PE 33914　'76年
CD/Epih EK 33914

'76年にボストンと共にCBS／EPICよりデビューしたスターキャスルは俗に〝アメリカのイエス〟などと呼ばれていた。確かに、本作（1st）に見られる「こわれもの」「危機」発表当時のイエス・サウンドの大々的なパクリは、よく御本家よりクレームが出なかったなと感心(?)する程であるが、むしろそれだけの高度な演奏技術を持ち合わせていたことを高く評価しても良いだろう。ただ、弱冠ベースのアタックが弱く、Terry Luttrell（元REOスピードワゴン）を中心とするヴォーカル・ハーモニーがさほど金属的でなく、どちらかと言えばウエスト・コースト的な色彩を放っており、3作目以降にようやく開花する彼らの真のオリジナルなサウンド（結果的によりポップな方向へ進むことになるが）への布石となったように思われる。（本木）



STARCASTLE
Fountain Of Light
LP/Epic 34375　'77年

本邦デビュー作となったセカンドで、当時の邦題は「神秘の妖精」だった。またもやA①から10分台の大作だ。勿論、クリソツ路線にも大きな変化はない。ただ、前作よりは元ネタがすぐバレるようなフレーズが少なくなったものの、両面とも曲間なしの構成は、似た曲が続くことで（しかもどの曲も展開が多いので）それぞれの曲の区別がつき難く、全体的に平板な印象を与えるかも。ロイ・トーマス・ベイカーのプロデュースということで、コーラス・ワークの音処理に何か〝技〟を期待するも、それも特に凄いことをやっているわけでもなく、適度なクリアさという感じ。バンドのアイデンティティを考えた場合、次作ではもうこのままの路線では発展がないことは既に見えていたろう。とはいえ、本作も高品質なのは確か。（奥村）



STARCASTLE
Citadel
LP/Epic 34935　'77年

前作に引き続き、ロイ・トーマス・ベイカーのプロデュース作品となったサード・アルバム。（邦題は「星の要塞」）本作よりクリソツ路線が幾分退き、彼等ならではの部分が出てきたというのが通説となっているようだが、A②やB①のように、再び元ネタがバレバレな曲があるということから、まだまだ〝STARCASTLEならでは〟というオリジナリティ確立には随分と時間がかかることが予想出来た。A③に〝脱〟の色が濃いが、このパターンなら、ルトウレルがREO時代に戻っただけという気もする。何にしても、彼等の場合、あまりに〝ウマ過ぎた〟ことが逆にネックになってしまっていたようだ。結果的に、彼等は本作をもって、ジャケット・デザインも含めたスペイシーなカラーに終止符を打つことになる。（奥村）



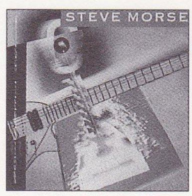
STARCASTLE
Real To Reel
LP/Epic JE 35441　'78年

もう、ジャケットが何をか言わんや、の通算4作目にしてラスト・アルバム。ベースのトーンだけはスクワイア節を断ち切ることはなかったものの、ヴォーカルも含めて、ようやく〝脱YES〟は果たされた。しかし、だからといっいきなりA①でBOSTON風ハーモニーを導入して、スライド・ギターとは何とも極端なこと。結局、予想通りのアメリカン路線転向となったわけだ。それにしても、ここまでメンバー・チェンジもなしにやってきたのは本当に凄い。まだ、'78年である。所謂〝アメリカン・プログレ・ハード〟勢がようやく栄光を摑み始めた頃ではないか。そして、'80年にバンドは解散。'84年にはストレイターが再結成を図るが、それも長くは続かなかったようだ。今となっては全作品のCD化を待つのみ。（奥村）



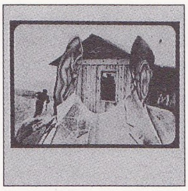
STARDRIVE
Stardrive
LP/Columbia KC 33047　'74年

2枚の作品を残したスタードライヴ、1作目に'73年に、エレクトラより「インターギャラクティック・タロット」（EKS75058）がリリースされ、2つのカバー曲を含み、A面ラストは変拍子の典型的アメリカン・プログレッシヴ・ロックであると思う。さてこの2作目であるが、このバンドはシンセサイザーをフィーチャーしたインストゥルメンタル・バンドで、両作品の裏ジャケットには当時の最新鋭楽器の前に座ったバンドの中心人物ロバート・メイソンが写されている。今度は全てオリジナルで占め、シンセサイザーも多彩に使いこなされており、曲も良く練られている。演奏水準が高く、後のフュージョンのような商業的意図がなく演っている。B①等クラシカル的要素もあるが、ソウル的熱い感触がバンドの特徴であろう。（吉野）



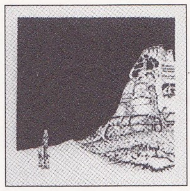
STEVE MORSE
High Tension Wires
LP/MCA MCA 6275　'89年
CD/MCA MCAD-6275
　/MCAビクター MVCM-21048

（ディキシー）・ドレッグス、カンサスを経て現在はディープ・パープル！のギタリスト、スティーヴ・モーズはドレッグス解散後、コンスタントにソロ作品をリリースしているが、それらのほとんどはスティーヴ・モーズ・バンド名義の物で、純ソロ・アルバムとしては本作一枚きりしか出ていない。勿論、わざわざ名義を変えるのには意味があり、他作品がドレッグス路線のゴッタ煮のハード・フュージョン・サウンドなのに対し、こちらはイメージを拡げたギルトラップ辺りにも通じる作風。爪弾かれるアコ・ギに複数重ねられたエレクトリックのリード・ライン、伸びやかなトーンにほのかに見えるアイリッシュ風味。架空のノスタルジー、イノセンス願望といった点ではメセニー、フリゼール辺りにも近い。（中西）



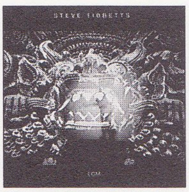
STEVE TIBBETTS
Steve Tibbetts
ＬP/Obscure Music　'77年
CD/Cuneiform 55009

次作の「Yr」あるいはその後のECMからの諸作で多少は知られるイマジネイティヴなギタリストの初作。相棒格のマーク・アンダースンは未だ参加してはいないが、やはりティベッツのギター／エレクトロニクスにハンド・パーカッション奏者を加えた編成による録音。時に爪弾かれ、時にアグレッシヴにプレイされる各種ギター類とシンセを絡ませ、場面を切り替えていく作風は今に通じる物だが、近年のなめらかさよりも素の姿が出ていて、非現実感も強い。いわゆる「SF的」なサウンドの中に架空のノスタルジアと言った風情が見える。　(中西)



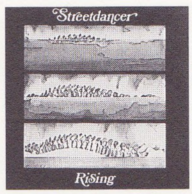
STEVE TIBBETTS
Yr
ＬP/Frammis 1522-25　'80年
CD/ECM 21355-2

スティーヴ・ティベッツはECMより「Nothern Song」「Safe Journey」の２枚のアルバムをリリースしている。ここに紹介するのは彼の'80年リリースの自主製作盤で、かつては時折り見かけた。数人のパーカッショニストによるタブラ、コンガ他の民俗打楽器にオーヴァー・ダビングされたティベッツの各種ギター、シタール、メロトロンの織り成す音楽は正に至福の世界を形づくる。彼のアルバムはみな浄化作用を伴うメディテイショナルなものだが、本作はヨーロッパのトラッドやインド音楽を意識した、最も趣味性の強いもののようである。マイク・オールドフィールドやアンソニー・フィリップスが好きな方にとっては大切なストックとなるであろうこのレコード、アーティスト自身による架空の古代遺跡らしきイラストに包まれている。　(古田)



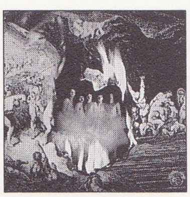
STEVE TIBBETS
The Fall Of Us All
CD/ECM 21527　'94年

'80年にマイク・オールドフィールドとアンソニー・フィリップスを合体させたような自主盤の会作「Yr」を発表し、その後にECMで活躍中のギタリスト、スティーヴ・ティベッツの新作。ひところはアコースティック・ギターとタブラにより内省的な作品が多かったが、本作は'86年の「Exploded View」以来のエレクトリックものとなっている。幾重にも重ねられたパーカッション群が刻むリズムの上で派手にギターをひきまくる展開はスリリングこの上ないものである。アンサンブルは多少ラフでナイーヴさも薄いが、これはこれで彼のカラーだ。良い。　(内田)



STREETDANCER
Rising
ＬP/Dharma Future D-807　'77年

ATLANTIS PHILHARMONICと同じDharmaレーベルよりリリースされていたジャズ・ロック作品。ヴァイオリン、サックスを加えた正体不明のインストゥルメンタル・バンドで、サウンドは本格的なジャズ・バンドにロックよりのアイディア（ハードなギター・パート等）を挿入した感が強い。変拍子を含むリフの導入や、民族音楽的なアプローチにより、プログレッシヴ・ロック色を強めている。同じ米のジャズ・ロック・バンド、SHADOWFAXの１stアルバムあたりと同傾向の作品で、時に攻撃的に、時に抒情的にと、ヴァリエーション豊かな内容である。高い演奏水準を持ってはいるが、テクニック追求指向ではなくバンド全体のおもしろみを大切にしている様だ。突出した個性がないのは残念だが、なかなかの好盤である。　(沢田)



STYX
Styx
ＬP/Wooden Nickel WN3-1008　'72年

'64年、シカゴにて結成。パノッゾ兄弟とデニス・デ・ヤングを中心にTHE TRADEWINDSとしてスタートした彼等は、'68年にジョン・クルリュウスキーを迎えTW４と改名し、その後ジェイムズ・ヤングを加えて'70年にSTYXとなる。本作は'71年に制作したデモ・アルバムをきっかけにディールを結んだRCA傘下のWooden Nickelからの記念すべきデビュー作。いきなり13分の組曲で始まり、その中にEL＆Pよりも５年も早い〝Fanfare For The Common Man〟を含み、デ・ヤングもハモンド＆シンセで頑張るところは流石で、Ｂ①②では既にあの透明感溢れるリリカルなコーラス・ハーモニーが完成していた点に注目したい。尚、'73年発売の日本盤の表記は〝スタイクス〟だった。　(奥村)



STYX
Styx Ⅱ
ＬP/Wooden Nickel WN-1012　'73年
CD/RCA 3111-2
/BMG ビクター BVCP-5039

Ａ面が〝Heads〟、Ｂ面が〝Tails〟となっていたセカンドで、オリジナルは切り抜きジャケ。オープニングからドラマティックなキーボード・ワークが耳を引くが、Ａ①は爽やかなＲ＆Ｒ風。しかし、例の美しいハーモニーとデ・ヤングの独特の声質、ハモンドとシンセの使い分けのセンスは、既に個性として定着していたろう。また、本作の第１弾シングルのＡ②が'74年に再びシングル・カットされた時に地元FM局で何故か突然ブレークし、やがて全米６位にまで昇りつめたのは有名な話。この〝棚ボタ〟的ヒットが彼等の延命を助けた。他にも、けだるくも幻想的なヴォーカル・パートからジャジーなインスト・パートへ展開する大作Ｂ③、バッハのＢ①からのこれまた大作Ｂ②への流れも聴き所だ。　(奥村)



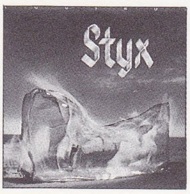
STYX
The Serpent Is Rising
ＬＰ/Wooden Nickel BWL1-0287
'73年
CD/RCA 287-2
/BMG ビクター BYCP-5040

彼等ならではの透明感のある音像と、ファンタジックなフレーズを持つ展開部を含むものの、比較的オーソドックスなHRナンバーの連打で幕を開ける本作サード・アルバムは、全体的には前２作以上にハードな印象。ヘヴィなつくりのリフとキーボードの絡みが不思議な世界を演出し、クルリュウスキーのメイン・ヴォーカルから、サビのデ・ヤングのあの声への転換が見事なアレンジのタイトル・ナンバーも、ダークながらも劇的なHRナンバーだ。そういう意味では、セリフ絶叫型雰囲気モノのＢ⑤からヘンデルのＢ⑥への流れは本作の中では浮いているかも。ところで、アコースティックなＡ④が６分台なのでどう展開するのかと思うと、〝バナナ・ボート〟だあ？これって一体……？？ （奥村）



STYX
Man Of Miracles
ＬＰ/Wooden Nickal BWL1-0038
'74年
CD/RCA 3115-2
/BMG ビクター BVCD-5041

通算４作目にしてWooden Nickelからの最後のオリジナル・アルバム。オープニングから２曲立て続けにJY＆クルリュウスキーによる軽快なR&Rチューンがきて、一瞬、おや……と思ったら、３曲目にはデ・ヤングの荘厳なピアノ・バラードがあって、フェイド・アウトの後に雨音のSEからドラマティックないかにもデ・ヤング的なＡ④へ。この流れからも分かるように、本作は、ハードＲ＆Ｒ路線のJY＆クルリュウスキーとリリカルさにこだわるデ・ヤングとの色分けがよりハッキリしてきた作品と言えよう。但し、神秘的なジャケット・アートそのままの世界を再現した壮大なアレンジのタイトル・ナンバーは、JYとデ・ヤングの世界がうまく融合した名曲。デ・ヤングのバラードは、他にもＢ②④と充実してる。 （奥村）



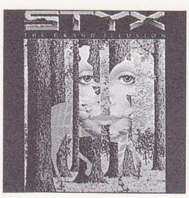
STYX
Equinox
ＬＰ/A&M 4559 '75年
CD/A&M CD-3217
/ポニー・キャニオン PCCY-10100

いい曲もあるが今一歩抜けきれなかったWooden Nickel時代から、正に一足飛びの成長を遂げたＡ＆Ｍ移籍第１弾にして通算５作目。まるでYESかKANSASかというオープニングが開けると、これぞSTYXというイメージそのままのＡ①がスタート。続くＡ②（全米27位のヒット曲）、Ａ③、Ｂ②も、デ・ヤングとJY＆クルリュウスキーの二面性が決して分離せず、見事なバンド・サウンドとして結実している。YES的という点では、Ａ③のスライドとＢ③のアコ・ギに顕著なクルリュウスキーのスティーヴ・ハウへの傾倒ぶりが興味深く、Ａ③の中間部にはモロに〝Roundabout〟してる部分もあって、微笑ましい。ラストのＡ④の素晴しさについては、もう今さら説明するまでもないだろう。正に『分岐点』だ。 （奥村）



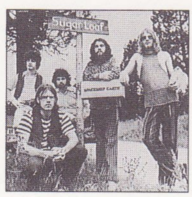
STYX
Crystall Ball
ＬＰ/A&M SP 4604 '76年
CD/A&M CD-3218
/ポニー・キャニオン PCCY-10111

トレイド・ウインズ・４からスティクスに改名し、ウッデン・ニッケルより'71年にデビューして以来、彼らは11枚のオリジナル・アルバムを発表して解散した。散々迷った末にこのクリスタル・ボールを選んだが、「マン・オブ・ミラクルズ」や特にＡ＆Ｍ移籍後の最初の３枚は甲乙がつけがたい。「エキノクス」の中の〝スート・マダム・ブルー〟、「グランド・イリュージョン」の〝カッスル・ウォール〟、そして本作の〝バレリーナ〟等は知られてはいないものの、後世に残る名曲と言える。哀愁を帯びた美しいメロディ・ラインと多彩なキーボード群、そして演奏力、ハーモニーが一体となった素晴らしいアルバムばかりだ。惜しくも解散してしまったが、D・D・ヤング、T・ショウ、J・ヤングはそれぞれソロを出して頑張っている。 （田中）



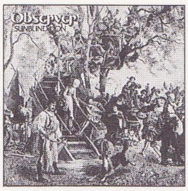
STYX
The Grand Illusion
ＬＰ/A&M SP 4604 '77年
CD/A&M CD-3233
/ポニー・キャニオン PCCY-10112

タイトル通りの透明サウンドを詰め込んだ名盤中の名盤の前作に続く７作目。Ａ②④というヒット曲を含み、アルバム自体も全米６位まで上昇した彼等にとっての初のプラチナム作で、チャート・バンドとしての出世作でもある。そういう意味では、前々作のツアーからのクルリュウスキーに代わって加入したトミー・ショウの色がバンド全体へ波及し始め、デ・ヤングのメロディ指向がリリカルさからキャッチーさへ傾きかける直前のバランス上の作品と言え、特にＡ面ではそろそろ〝売れ線〟を意識し始めたことが若干窺えよう。とはいえ、全米８位のＡ④も６分台の大作だし、JY流HRの佳曲Ｂ①、ドラマティックなＢ③と、まだまだ初期からの方向性は充分に残されている。次作まで……との声、しきり。 （奥村）



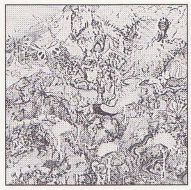
SUGARLOAF
Spaceship Earth
ＬＰ/Liberty LST-11010 '71年

コロラド州デンヴァー出身の５人組のセカンド・アルバム。デビュー作をリリースした当時は４人組だったが、本作よりギターも兼任するリード・シンガー、ロバート・イーゼルを迎えている。驚くのは、このイーゼルがいきなり殆どの曲作りに加わり、全10曲中、実に６曲をもひとりで手掛けていることだ。幻想的なインスト曲のＡ①からスタートする本作は、しかし、元々幅広い音楽性を持ち、〝ロックからバロックまで〟と言われていた彼等にとってそれ程の変化を感じさせるものではない。'70年代初頭のアメリカにしては、あまりにサイケ色が希薄な点も彼等を特異な存在にしていたろう。個人的にはハード・チューンのＡ②、Ｂ⑤のアレンジの非凡さに注目。後者の延々と続くインプロに、GFRの原点が……？ （奥村）



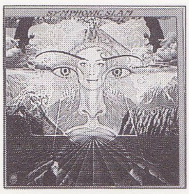
SUNBLIND LION
Observer
LP/Homegrown S 80-1147S '76年

2枚の作品を残しているサンブラインド・ライオンの内、'76年にリリースされた「オブザーバー」は、仲々充実した内容を持っている。強いて引き合いに出すならば、スティクスの初期と言うことになるが、サウンドのオリジナリティを取って見ても、彼ら独自の強い良性の毒を持っており、この点ではかなり評価が出来る。ムーグ、オルガン、シンセが主体となるが、やたら厚ぼったいバラード・シンフォニック・バンドと違い、ベースの切れが非常に良い。ちょっと単調なドラムが唯一の難点だが、そこは他の部分でカヴァー出来ているようだ。聞き所はB面の組曲〝Spring Essence〟と〝Observer〟。この後'78年に「Above & Beyond」を出すが、その後の活動は不明。
（田中）



SURPRISE
Assault On Merryland
LP/TS 77-743/744 '?年

アメリカは本当に層の厚い国だ。あとからあとから名盤が発見されている。御伽話のようなジャケットがまず目を惹く。サウンドは、全編に渡って、あくまでヴォーカルが主体であるが、多種のキーボードやフルート、サックス等が魅力的なサポートを展開していくのであるから文句のあるはずもない。全編に渡り、目のさめるような展開で聴かせてくれる様は、例えばイギリスのサーカス(CIRKUS)あたりに近いといえば近いだろうか。聴けば聴く程、はまり込んでいくような感じなのである。A③のような美しいバラードもあり、この曲は、好む好まざるにかかわらず、あなたの心を揺さぶるはずだ。その手のブリティッシュ・プログレッシヴ・ファンにぜひ聴いてもらいたいようなサウンドなのである。
（山崎）



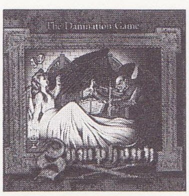
SYMPHONIC SLAM (Canada)
Symphonic Slam
LP/A&M SP 9023 '76年

今となっては別に珍らしくと何ともないが、当時はティモ・レインの弾くシンセ・ギターが話題となったシンフォニック・スラム。内容もバンド名同様の大シンフォニック大会と言えるものだが、メインとなるのは彼のギターではなく、デヴィッド・ストーンの達者なキーボード群であった。ティモのギターは壮大なデヴィッドのキーボードに寄り添うようにして、音に厚みを持たせるだけで精一杯だったように思える。はっきり言ってしまえばこのティモ・レイン、この手のバンドの主役になり切るにはあまりに力量不足だったのだ。それはデヴィッドがレインボウに加入するため脱けてしまった後に発表された2ndアルバム（ティモのソロ作？）の完成度に、より明確に表われている。
（本木）



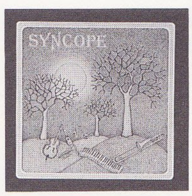
TIMO LAINE SYMPHONIC SLAM
Timo SSII
LP/Lady LALP-001 '77年

ティモ・レインひきいるシンフォニック・スラムの2ndであった。あの1stが出た翌年（'77年）の作品なので新譜とは言えないし、廃盤になっているかも知れない。前作では、初めてギター・シンセ・アルバムという事で、当時かなりの話題をさらったものだがよくよく聞いてみると、ギターよりも、キーボード群の素晴らしさの方が優っていた。このキーボード奏者デヴィッド・ストーン（後にブラックモアのレインボウに参加する）はこの2ndではすでに見られず、代わりのキーボードが何曲か参加しているだけで、残りの曲はギター・シンセ・トリオの演奏になっている。トリオの演奏は音がスカスカで、ヴォーカルはポップになっている。しかし、キーボードを入れた曲になると、途端にシンフォニックなプログレになるのであった。
（中藤）



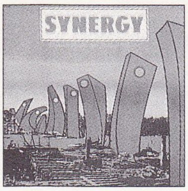
SYMPHONY X
The Damnation Game
CD/ゼロ・コーポレーション XRCN-1244 '95年

PHANTOMS OPERAというバンドから発展した、ニュージャージー出身のSYMPHONY Xは、'94年に1st「Symphony X」をリリース。Y・マルムスティーンに影響を受けたリーダーのマイケル・ロメオのクラシカルなフーズを多用したg、QUEENのようなハーモニー、単に様式美系とは言い切れない複雑な曲展開を身上とするバンドである。本作は新たなvoが加入した2nd。サウンド・プロダクション、楽曲のクオリティー、演奏の切れの鋭さは1stより数段レベル・アップしている。だが、録音状態の悪さは別として、楽曲に未整理な部分を残してはいるものの、前作の方がよりプログレッシヴ・ロックとしての側面を強く感じる。M・ロメオ「The Dark Chapter」('94）というオール・インストのソロも出ている。
（川上）



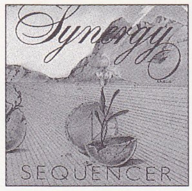
SYNCOPE (Canada)
Syncope
LP/Production CRAM WRC 1-1374 '80年

通常の4人組編成にトランペット、サックスの3人を加え、他、ゲストにヴォーカル、パーカッションを招いた大所帯グループ。基調となるのはメロディ指向のジャズ・ロック・サウンドだが、ヴォーカル・パートがケベック系特有の物憂げなフランス語で唄われる他、キーボード、ギター等も合わせてプログレッシヴ寄りのサウンドとなる。どちらにしてもゆったりとした情趣指向には変わりはないのだが、管楽器セクションを場面に応じてジャジーに、クラシカルに使い分ける等、安定したアレンジ能力をバックに幅広い曲想を取り入れているが、少し散慢か。それでもパイプ・オルガンの導入といった仕掛けやなめらかな曲進行などあってあきさせない。
（中西）



SYNERGY
Electronic Realization For Rock Orchestra
LP/Passport PB 6001 '75年

シナジーことラリー・ファーストは1975年にパスポートよりデビュー、現在まで9枚の作品を残している。1st LP「Electronic〜」に始まり「Sequencer」「Chords」「Games」「Computer Experiments」「Audion」「Jupiter Menace」「Metropolitan Suite」の他に未発表曲を含む2枚組ベスト「Semi Conductor」も出ている。シナジーのエレクトリック・オーケストレーションは、彼自身による一つのフォルムであり、サウンド・ポリシーが透かし見られる一種透明な結晶体であり、彼独特の視覚的な感受性としての色彩や光と影が物語の罠のように張りめぐらされ魔術的な呪縛力を与えている。彼はピーター・ガブリエルの1stから5、6thまでのLP制作やツアーに参加したり、ケイト・ブッシュ、ネクター、フォリナーetc等、数多くのセッションもこなしている。 （斎藤道臣）



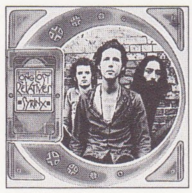
SYNERGY
Sequencer
LP/Passport PPSD-98014 '76年

シナジーことラリー・ファスト。基本的にエレクトロニクスのシステムや、主にムーグなどのシンセの、プログラミングと演奏によって繰り広げられるエレクトリック・ポップ・ワールド。内ジャケにフィーチャーされている写真はほとんどが機材関係の写真になっていることからもわかるように、異常なまでに数多くの機材を使いこなしている。ムーグだけでも6種類。その他にも独自に開発したシステムだと思われる〝シナジー・システム〟など全部は紹介しきれない。それ程の数の機材を駆使していながらも、音楽は基本的にポップでスペイシー。〝シナジー〟と名乗るだけあって、数々の電子楽器が相乗効果をもたらし、独特の浮遊感を生み出しているのだと思う。 （平山）



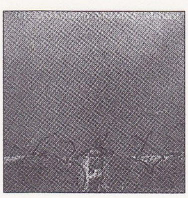
SYRINX （Canada）
Syrinx
LP/True North TN-2 '70年
CD/ワーナー・ミュージック WPCR-81

カナダのグループ。グラス系のアシッド感覚のあるグループで、大自然と合致するような乾いたサウンドが特長である。キーボーディスト、サクソフォニスト、パーカッショニストによる変則的な3人編成。2枚のアルバムを残している。'70年代初期のグループなので、全体的な仕上がり感はプログレッシヴ・ロック的なのであるが、むしろ、'60年代のサイケデリック感覚が昇華されて創られた作品と解釈するのが自然である。本作がファースト。セカンドには生楽器による10分程の叙情的なナンバーが収録されており、この曲はアルモニウムの名曲を想わせるナイーヴな曲だ。 （山崎）



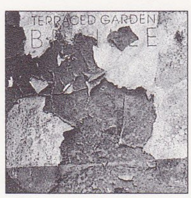
SYRINX
Long Lost Relatives
LP/True North TNX 5 '71年

'70年に「Sirinx」（True North TN-2）、'71年に本作をと、2枚のLPをリリースしたシリンクスだが、'70年代最初期という、カナディアン・ロックの黎明期でありながら、恐しく完成されたコンセプトを持つ作品を世に送り出している。キーボード、サックス、パーカッションという変則的な3人編成で、生のストリングス・オーケストラを随所に効果的に配している摩可不思議なサウンドで、草の香りのする、トリップ・ミュージック的なイメージを感じる。そういう意味で記憶をたどると、ホワイト・ノイズあたりとの共通点もある。A③の8分58秒もある大曲は、生楽器をオーケストラ風にアレンジした、もの悲しい曲で、どことなく、アルモニウムの2ndあたりにも通じるテイストを持つ。シンフォニックではないが、非常に素晴らしい作曲だ。（山崎）



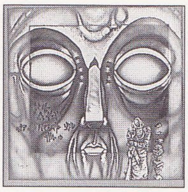
TERRACED GARDEN （Canada）
Melody & Menace
LP/CT 1956 '82年

デビュー作。元来、グループのリーダーであるカール・トフェルのソロ・エフォートが発展して出来たバンドであり、本作においても、彼はギター、ベース、ピアノ、メロトロン、クラヴィネット、シンセサイザー等の楽器を演奏し、ヴォーカルを取り、更に、作詩、作曲、アレンジ、プロデュースを担当している。トフェルを中心に、ドラム、フルート、サックス、ヴァイオリン等が一体となった広がりのあるサウンドは甘くメロディアスであり、十分にオリジナリティを感じさせる。曲展開もドラマティックであり、LP1枚を一気に聴かせるだけの力を持った作品と言える。 （賀川）



TERRACED GARDEN
Braille
LP/CT 1958 '84年

ドイツ系カナダ人カール・タフェル率いるテラスト・ガーデンは、計3枚の作品が確認されている。ここに挙げる2ndの本作品は、ブルー・カラーを基調としたカヴァーにメロトロンがクレジットされている1stから較べると若干評価は低いようだが、実際は、演奏から録音水準、曲構成、展開に至るまで、もたつき気味の感があった1stよりも出来は良く、各人のプレイも数段向上している。中でもメインはやはりカールのギターに依るところが大きく、b、key...etc.をも手掛ける彼自身のマルチ・プレイの多才さもさることながら、ヴァイオリンを始めとするサポート側の好演も実に捨て難い。センスの悪いカヴァーだけで評価されるのは何とも不運極まりない。今一度、再評価を要する好作品。 （大関）



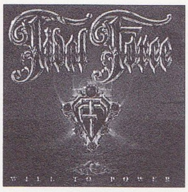
TETELESTAI
Tetelestai
L P/Jr 1930　'84年

ポリフォニー、ストリート・ダンサー、オーケストレイター、ナウ等、アメリカではこれまで、未確認だった好作品がいくつか見つかっている。テテレスタイもそうしたものの一つである。彼らはベース、キーボード、ギター、ドラムスの４人に作詩及びディレクションを担当する１人を加えたグループで'84年に本アルバムを発表している。テテレスタイとは「It is finished」を意味するギリシャ語で、イエスが死の直前に発した言葉と言われている。作品はストーリー性を重視したものになっており、ドラマチックなヴォーカルを中心にグループが一丸となって曲を盛り上げていく。派手さはないが軽やかでメロディアスなサウンドが聴ける好作品である。（賀川）



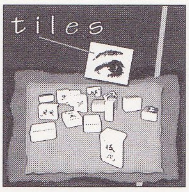
THOUGHT INDUSTRY
Songs For Insects
CD/(U.K.) Metal Blade CDZORRO-45
'92年
/アポロン APCY-8098

ミシガン州カラマズー出身の４人組変態バンドのファースト。ジャケットに使ったサルヴァドール・ダリの絵世界をそのまま音にしたかのような混沌とした異形サウンドは、所謂〝ミクスチャー〟系で、それでいて〝何でもあり〟の中に確実なテクニックに裏打ちされた理路整然たる部分も持ち合せているという変態さ。特に、キレのいいカッティングがエッジを際立たせるギター・サウンドや、シンガーの意外にうまいハイ・トーン・ヴォーカルは、これが芯にあるから色々なところにハミ出すことが出来るという好例で、やはりというか、この手のバンドのルーツは何故かスラッシュなのです。'93年発表のセカンドでは、よりハチャメチャさを増すものの、そこら辺にいるミクスチャー系と大差なくなり少々ガッカリ。　（奥村）



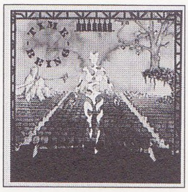
TIDAL FORCE
Will To Power
CD/Atico AMK-36391　'93年

アメリカの４人組の恐らくデビュー作。ほぼ全曲で参加しているキーボーディストの他、何人かのゲスト・プレイヤーを迎えており、②ではヴァイオリン、④ではサックス、⑧ではフルートがそれぞれソロをとっている。タイトルではインストゥルメンタルとなっている⑧には、他の曲でもバック・ヴォーカルを務めている女性シンガーがリード・ヴォーカルを披露。というわけで、①を聴いた時にはRUSH（それも近年の）タイプなのかと思ったが、所謂〝ポンプ〟風サウンドを中心に、実験的とはいかないまでも、色々なパターンを試しているようだ。ただ、まだまだアイディアが散漫で、今イチやりたいことが見えないのも確か。⑦のみライヴというのも妙だし、とにかく、今後には注目したいバンドというところか。　（奥村）



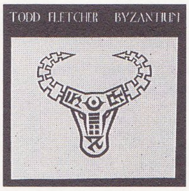
TILES
Tiles
CD/Standing Pavement SPR-94001
'94年
テイチク TECW-25047

麻雀牌からバンド名をつけたというデトロイト出身の４人組のデビュー・アルバム。一聴してRUSHからの影響がモロ見えだが、ここのところの一連の〝D. THEATER症候群〟とは明らかに一線を画すという点で、出自が安易でないことが窺える。専任キーボーディストを擁していない（レコーディングではギタリストがプレイしていた）ことから、ギタリストの今後の精進に期待したいところだが、本作では、ドラマーの〝ピアートぶり〟と同じく、元ネタがバレバレなのが気になるものの、なかなかのアレンジ・センスを早くも発揮していて将来が実に楽しみ。さらには、例の〝画一ハイ・トーン〟でなく、デニス・デ・ヤング的な声質の持ち主であるシンガーにも期待が集まる。次作で〝化けて〟欲しい。　（奥村）



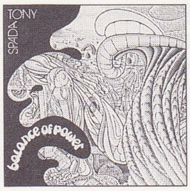
TIME BEING
Time Being
CD/（番号なし）　'94年

詳しいクレジットが無いので出身地等は不明。ジェームス・マディソン大学のスタジオで録音されたとあるので学生バンドの確率が高い。イエスやジェネシス、カンサスが好きな連中が演奏するメロディック・ポップ・ロックといった感じで小じんまりとしているが演奏自体は下手ではない。数ある自主盤のひとつとして埋もれがちなレベルではあるが、カンサス・タイプの声質のヴォーカルとコーラス、歌メロが仲々いい線いっていると思う。基本的な４ピースにキーボードのクレジットが３人もあるが音自体はシンプルで、アメリカン・ハード・プログレの流れにあるといえる。インストゥルメンツで圧倒するようなタイプではないので物足りなさも残るが自主制作らしい思い入れは感じることができる。光りきらないけど。　（中島）



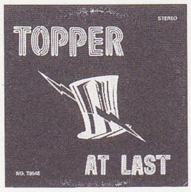
TODD FLETCHER
Byzantium
CD/Dervish Music D 01　'93年

インナー・スリーヴを見るとギリシャ～トルコ～中東の古地図、音の方もその雰囲気を押し出したもの。シンセ、サンプラー、ドラム・マシーン、ギター、ベース、ラジオ・ヴォイス等を使ったイマジネイティヴなインスト作になっている。映像音楽ふうだが、もう少し作者の突っ込みがそれら楽器のミックスや音響処理に出ていて、コントロールされた感じがする。ニューエイジ・ミュージックにありがちなリラクゼーション色はあまりない。静かな内容ながら変化に富み、この種のタイプでは推薦したいところ。音はクリアーでも、エスニックなテーマのようなものが横たわっているせいか意外とシリアス。それでいて深い拡がり有り。　（松本）



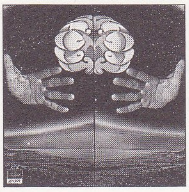
TONY SPADA
Balance Of Power
CD/Art Sublime ASCD 993-004
'93年

LPサイズのハード・カヴァー・リリースでファンの心をくすぐったホールディング・パターンを覚えているだろうか？　このトニー・スパダはあの幻のシンフォニック・グループのギタリストなのである。ほとんどの曲が'91年から'92年かけて録音されたもので、ホールディング・パターンの唯一の欠点であった録音クォリティーの悪さは完全に払拭された。このギタリストの才能はかなりのもので、テクニック／センスとも申し分なく、時に聴かせるアコースティック・ギターの奏法を聴いても彼の非凡さが理解できるだろう。いわゆるぶ厚いシンフォ・サウンドに甘いギターが飛びまわるタイプだが、特に６曲目からラストまでの流れがものすごく、例えるならドラゴンフライのように、高揚をかさねたリスナーの意識はラストで一気に昇天していく。（山崎）



TOPPER
At Last
ＬＰ/Scot T 9548　'77年

'77年に発表されたTOPPER唯一の作品と思われる。メンバーは、キーボード、ギター、ベース、ドラムス、ヴォーカルの５人編成で、プログレ・ハード系のサウンドであるが、Ａ①では、テクニカルなシンフォニック・ロックを聞かせＡ③では、キーボードのRUDYが奏でるメロトロンが全面で大活躍する名曲になっており、メロトロン・ファンに推選したい。各人のテクニックは安定しており演奏水準も高い。又作品としての構成力も意外としっかりしており、メロトロンを含むキーボード群、ヘヴィーなギター・ワークを巧みに使い分けたサウンドは、この時代に発表されたアメリカのプログレッシヴ・ロック系の作品の中でも傑出した出来を示しており一聴することをお勧めする。（村上）



TOUCH
Touch
ＬＰ/Coliseum DS 51004　'69年
CD/Renaissance RCD 1001

アメリカ最古のプログレッシヴ・バンドと言われているタッチは、当時イギリスでもデラムから発売されているが、オリジナル観音開きジャケットが見開きジャケットになったため合わせの部分の継ぎ目がずれている。この作品はサイケデリック・ファンにも支持されているらしく、ハードなところでそう感じられる部分があり、付いているポスターもそのような雰囲気で一見の価値がある。音はブリティッシュ・ロックそのものであり、ジャケットといいブリティッシュのグループと勘違いしている人もいると思う。録音は'68年、ハリウッドにて。ドラムの音等さすがに古臭いが、逆にオルガンの古い音が良かったりする。Ａ③はポップな曲で、聞きどころは10分近くのＡ面ラスト、女性ヴォーカルを起用した11分に及ぶＢ面ラストであろう。（吉野）



TOUCH
Touch
ＬＰ/Atco SD 38123　'80年
CD/Music For Nations CDMFN-107
/アルファ ACLB-807

マーク・マンゴールドがAMERICAN TEARS解散後、ギターのクレイグとドラムスのグレンを誘って結成した４人組の唯一のアルバム。STYXやQUEENを思わせるコーラス・ハーモニーと同時にBOSTON風になるギター・ワークはある意味で予想通りの音と言えるが、キャッチーな曲が殆どながら、ドラマティックさを伴わせる辺りは流石はマンゴールドという感じか。印象的な曲が前半に集中しているといった感も無きにしもあらずだが、どこを切ってもヒットしそうな佳曲ばかりというのも事実。特に、名曲の呼び声高い①、スペイシーなHR調アレンジが耳を引く④は絶品だ。尚、'93年のCD化に際して２曲の未発表曲（⑥⑪）追加収録されているが、どうせなら〝幻のセカンド〟が聴きたい……。（奥村）



TOXIK
Think This
ＬＰ/Roadrunner RRD 9460　'89年
CD/Roadrunner RRD 9460

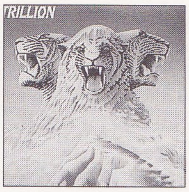
NY州出身の５人組のセカンド。デビュー作『World Circus』を発表した頃は４人編成だったが、本作よりツイン・ギター体制となり、シンガーもチェンジしている。基本的なサウンドは、前作のスラッシーさを残しながらも整合感の出てきたパワー・メタル。が、テクニカルなギター・プレイを随所に配した楽曲は、リズム・チェンジも激しくかなり目まぐるしい。で、その上に乗るのが例によってハイ・トーン・ヴォーカルなのだが、彼の歌メロが所々浮遊しつつハズしにかかる独特のスタイルで、同じく奇妙なフレーズを得意とするギターと共に、バンドの個性として重要な役割を担っていた。残念ながら、本作を最後に解散。未完成のまま消えていった彼等は、ある意味で早過ぎた存在だったかも。（奥村）



TREY GUNN
One Thousand Years
CD/ポニー・キャニオン PCCY 00493
'93年

現キング・クリムゾンのスティック奏者として活動中。もっぱらロバート・フリップの周辺で活動している。このアルバムは、ニュー・クリムゾンが本格的な音楽活動を始める直前の'93年に製作された。どう聴いてもギターやキーボードにしかきこえない音は、スティックによるもの。その点で、スティックという楽器の可能性を追求した部分もうかがえる。アルバムはトレイ・ガン自身の夢がコンセプトになっており、音全体は清涼感のある、少しカラッとしたアメリカンなイメージを、フリップ主宰するギター・クラフトあがりのサウンドで統一した印象をうける。そしてシルヴィアン＆フリップやＲ・フリップ・ストリング・カルテットに共通するサウンドスケープが流れる。即興から立ち上がった曲が多い。（松本）

TRILLION
Trillion
LP/Epic JE 35460　'78年



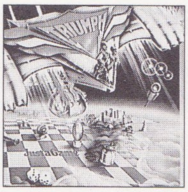
かつて、かのトミー・ショウと活動を共にしていたこともあるメンバーを含む5人組のデュー作。彼等もまた、キャッチーなメロディを基本としながらも、ブ厚いコーラス・ワーク、スペイシーなギターのトーン、センス抜群のキーボード・プレイ、そしてどこかドラマ性を感じさせる楽曲で勝負していた、典型的な〝アメリカン・プログレ・ハード〟バンドだ。BOSTONにも通じるシングル・カット曲のA①はその代表的ナンバーだが、それでいて彼等の場合、確実なテクニックに裏打ちされたプレイも随所に配し、実は変拍子も多用されている。本作を最後にバンドを脱退したデニス・フレデリクセン(vo)は、その後、ANGELにごく短期間在籍し、LE ROUXを経て、'84年にはTOTOに加入することは有名な話。（奥村）

TRILLION
Clear Approach
LP/Epic JE 36206　'80年



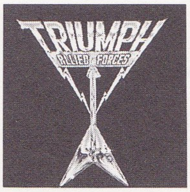
ニュー・シンガーとしてギターも兼任するトム・グリフィンを迎えたセカンドにしてラスト作。前作に比べて楽曲がコンパクトな印象を与えるものの、より整理された構成の中にきちんとオイシイパートを盛り込み、起承転結をハッキリと見せるアレンジは、かなりのセンスとアイディアが必要とされるはず。そういう意味では、決して長尺の曲が用意されていないにもかかわらず、聴き所は前作以上にあるだろう。特に、ピアノをバックに勇壮に歌い上げるA②、ユニゾンのリフからドラマティックに突入してくるA④、後半の盛り上がりが鍵のB②、そして、シンプルさの中にも複雑さを垣間見せる疾走感たっぷりのB④から⑤への流れは、本当に見事だ。出来ることなら、あと2〜3枚は作品をリリースして欲しかった……。（奥村）

TRIUMPH(Canada)
Just A Game
LP/RCA AFL-1-2982　'79年
CD/MCA MCAD-31118
/ポリスター PSCW-5325



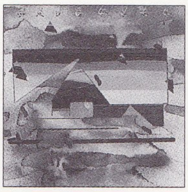
カナダAtticから2枚のアルバムをリリース後、そのダイジェスト盤的作品でRCAから'78年にアメリカ・デビューも果たしたトリオの通算3枚目。同じ3人編成ということからよくRUSHと比べられてきた彼等だが、サウンドの幅の広さという点でも決してヒケをとらず、特にRCA時代の作品には聴き所が多かった。リード・ヴォーカルを分け合うリック・エメット(g)とギル・ムーア(ds)の2人のカラーがかなりハッキリ分かれているのも特徴で、どちらかというとハードR&R寄りのギルに比べ、リックの書く楽曲はクラシックからジャズまで幅広い上、リリカルなメロディを有したナンバーが目立ち、本作にも、キャッチーなA②、泣きのB①、クラシカルなギターの小曲B②等、名曲は多い。（奥村）

TRIUMPH
Allied Forces
LP/RCA AFL 1-3902　'81年
CD/MCA MCAD-5542
/ポリスター PSCW-5327



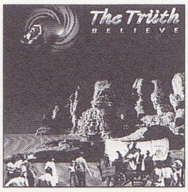
ジャケット・デザインや、当時の邦題が「メタル同盟」(笑) だったことからも、ヘヴィなつくりになったことが分かる5作目。作曲クレジットは全曲でメンバー3人の列記になっているものの、ヴォーカルの歌い分けは相変わらず、〝動〟のギル、〝静〟のリックという風に行なわれているようだ。HRを基本に様々なタイプが収められているのも同様で、STYXを思わせるキャッチーなA②、疾走感溢れるHMメンバーのA③、ドラマティックかつファンタジックなアレンジのB①、泣きのアコースティックからスペイシーなHRへ展開するB②、お約束のクラシック・ギターのインストB③等、繊細さとスケールの大きさが同居する独特の音世界は流石の一言。アレンジがよりシンフォニックになった点も要注目。（奥村）

TRUE MYTH(Canada)
True Myth
LP/Waner Bros. TMP 2020　'79年

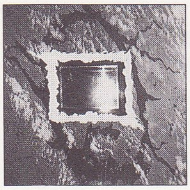


ジャケットの印象もあったが、トゥルー・ミスは刺激的なグループだった。オープニングからトム・トゥリューマスのキーボード・プレイに圧倒されっぱなしで、特にピアノのセンスの良さから、カナダのフェスタ・モビーレなどとも呼ばれていた。中にはヴァイオリンとピアノで作られた佳曲もあり、バランスのとれた好アルバムと言える。グループ解散後のT・トゥリューマスは、幾つかのセッションに参加し、最近では新人バンドのプロデュースをしているようだ。今のところ、「テレグラム」と言う作品がセカンド・アルバムとされており、カナダ人に聞いても彼らの作品はこの2枚だけと断言している。が、僕は信じないぞ。'81年頃に同じワーナーに「Blue Desert」を残しているんだ。（田中）

THE TRÜTH
Believe
CD/Spot SPTRO 194　'94年

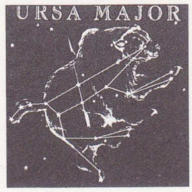


フロリダの4人組のデビュー・ミニ・アルバム。①はイントロでちょっとだけRUSHしてると思ったものの、まあまあフツーのHRナンバー。で、②のイントロがモロにDREAM THEATERだったので「やっぱり……」となったが、歌入りと同時にその印象も薄れていき、ふと気づくとシンガーが今時珍しい(?)スティーヴ・ペリー声をしてて、さらにギター・ソロが突然イングヴェイ・マルムスティーンに。が、それでいて決して寄せ集めではなく、基本的にはオーソドックスなアメリカンHRしていて、8分台の大作⑤でもさらりとインスト・パートを聴かせてしまうあたり、往年の〝アメリカン・プログレ・ハード〟が'90年代に甦ったかのよう。ギタリスト兼任のキーボードは早く専任を見つけて下さい。（奥村）



256
Mirroringe Of Every
**CD/Rediscovered Music（番号なし）
'94年**

ミシガンの５人組。'93年の録音。一聴して確かな手ごたえを感じるにしては、何度聴き直してもつかみ所がない奇妙な一作。ジャズやリコメン系が入っているのは確かとしても、ハード・ロックからシンフォニック系、ポップスまで様々なエッセンスが混じっている。スタイルのコピー、つぎはぎでないことが、分かりづらさにつながっているとも言えるが、リスナーに尻尾をつかませないくらいにはオリジナリティを生み出している。意外とヴォーカル・パートは多く、いわゆる「難解」なタイプの音楽ではない。ハード・ロックのりではないエッジの立つギター・リフやゴリゴリのベース・トーン、サックス等が小技の変拍子をきかせながら、あくまでヴォーカル曲として成立する、という微妙なアンバランスさがクセになる。（松本）



URSA MAJOR
Ursa Major
ＬＰ/RCA LSP 4777　'72年

元FROSTのディック・ワグナー（vo、g）、元AMBOY DUKESのグレッグ・アラマ（b）を擁するトリオの恐らく唯一のアルバム。サイケっぽいSEからスタートし、１曲目はそのままのイメージのヘヴィ・サイケでどこかスペイシーな雰囲気漂う大作HRだ。イントロで延々と引っぱるところや、スケールの大きい武骨なアレンジは、いかにも'70年代初期のアメリカン・ハードという感じ。リフが一瞬、CRIMSONするけど、それは気のせいか。以下、全体的には骨太のHR＋当時のアメリカものにはつきものの土臭いアコースティック・チューンが続き、唯一、ストリングスやピアノを導入したＢ②のみ繊細でリリカルな泣きの曲。意外に歌のうまいワグナーは、その後アリス・クーパーの元へ。（奥村）



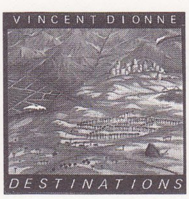
VALHALLA
Valhalla
ＬＰ/United Artists UAS 6730　'72年

邪悪な雰囲気漂うハード・ロック。深くリヴァーブ処理されたオルガンが、時には闇の底から湧き上がる様に、また時には一抹の光明の様に響き渡る。が、残念ながら演奏技量は並で、派手なソロが展開されるわけでもなく、ロッド・エヴァンス風の専任ヴォーカリストも今ひとつ魅力に乏しい。それでも広がりのある音の空間処理にかなり救われているし、ヘヴィーな音作りに工夫する姿勢は好感が持てる。マイナーな'70年代ジャーマン・ハードが聴ける人には、何の問題もないでしょう。Ａ①はパワフルな佳曲。Ａ③の様なピアノ＆オルガンのバラードはgoodで、こういう曲の方がこのバンドには合っているかも。ラストの曲ではストリングスを導入、構成面でもスケール感でも抜けた出来の、ドラマチックな名曲である。（中）



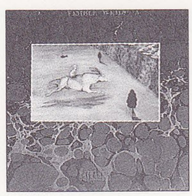
VICTOR PERAINO'S KINGDOM COME
No Man's Land
ＬＰ/（private press）　'75年

アーサー・ブラウンズ・キングダム・カムのラスト・アルバム「Journey」でメロトロンやオルガン等を弾いてスペイシーな感覚を出していた人。アメリカ、デトロイトの出身のこの人物は、その後、地元に戻ってまたもやキーボードを弾いた。バンド名をあやかったか、'Sキングダム・カム。「Journey」のスペース感覚が今度はポップにそしてハードに広がる。厚塗りのメロディがやたらとうるさいが、１曲目あたりの高揚感等、自主製作の低音質ではなくもっと響いて広がってほしかった。そういう録音のせいもあって音も声も魂になって、とにかくうるさい。が、しかし、ポップでSFチックでアメリカン・コミックなワールドは全開。アトミック・ルースターの１stが大シンフォニックになったみたいな迫力がある。（松本）



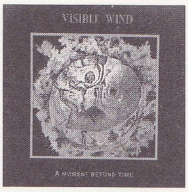
VINCENT DIONNE
Destinations
ＬＰ/GMD 1303-13　'89年

僕は、カナダのロック・シーンについてあまり詳しくなく、キーボード奏者と言うとシネマ・ミュージックのアミン・バティアとモロー風のジャケットに包まれたミッシェル・ダンナ程度しか浮かばない。特に昔、楽器メーカーで聞いたアミンのデモ・シーケンス・データは、サンジュリアーノやバンコもびっくりの壮絶クラシカル・ロックで、シネマからリリースされたアルバムとはまったく違っていて驚いた。さて、本アルバムも２人のキーボード奏者と１人の管楽器奏者で編成され、ヴァンゲリス風の叙情的な雰囲気で幕を開けるが、攻撃的なパートやエマーソンを想わせるピアノ・パートもあって聞き手を飽きさせない。又、オカリナ、フルートをメインにした美しい小曲も収録されており暖かみを加味している。（LUNA）



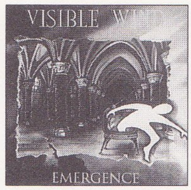
VISIBLE WIND(Canada)
Catharsis
**ＬＰ/RSB 1262　'88年
CD/Visible Wind Music（番号なし）
/ポニー・キャニオン PCCY 00672**

'88年発表の自主盤ということだが、そのサウンドは新人バンドとは思えないほど。全体の音が厚くアレンジもしっかりしていて聴く者を飽きさせない。ジョン・ウェットン・タイプのヴォーカルと、トニー・バンクス風キーボードといえば大体イメージはわかってもらえると思うが、かなりブリティシュナイズされた音に仕上がっている。又、４分以内に収まる曲はたったの２曲で大半が５分を越える曲で占められているということも興味深い。中でもＢ①の８分近くに及ぶタイトル曲の間奏部で流れる、オパス・アヴァントラの１stのＡ②の始まりを思わせる様な子供達のざわめきと雑踏。まさしく〝カタルシス〟の名のとおり、哀愁をさそうサウンドである。CDは再レコーディングされ、一層、内容が充実した。（林）



VISIBLE WIND
A Moment Beyond Time
CD/Progressive PRO-002 '91年

2 nd。'90年代に入って、ケベック系ミュージシャンの底力を見せつけた快作と断言できる(発表は'91年だが、曲ごとのクレジットは'84〜'90年とバラつきがある)。今10曲、さまざまなテイストの曲が散りばめられ、その力量の幅をデモンストレーションするかのような構成である。特筆すべきは8分近いインスト曲の④。硬質のシンフォニック・ナンバーとしては近年まれなる秀曲である。他の曲も総じて出来がよく、さして好き嫌いを分けないのではないか。歌詞は英語と仏語とあるが、仏語の曲のほうがコーラスも含めて数段仕上りはよい。さらに、生ギターのみによるしっとりとしたインスト曲。その後に続くポップなヴォーカル・ナンバー等々、アルバム1枚を聴き通せば多くのリスナーが満腹感にひたれるヴォリュームである。 (ミワ)



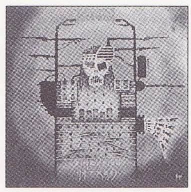
VISIBLE WIND
Emergence
CD/Distribution Mezzo MZ 7001 '94年 /ポニー・キャニオン PCCY 00671

名作の2ndと同傾向。極端にバラエティ豊かな楽曲群は見事に聴く者の耳をとりこにする。冒頭から劇的かつダイナミックに展開していき、14分後には突如としてニュー・エイジ調のリリカルな曲調に切りかわる。このあたりにバンドの類まれな資質を感じる。後半のヴォーカル曲には、ダモ鈴木やマルコム・ムーニーの声が聴こえてきそうな曲、クリムゾンの〝ケイデンス・アンド・カスケイド〟をモチーフにしたような曲など、ユニークな好曲が並ぶ。総じて、'80年代後半以降の英、蘭のポンプ勢とは明らかにテイストが違っていて興味深い。なお、データ・クレジット未着のため、断言はできないが、ギタリストがかわっている気配を感じる。 (ミワ)



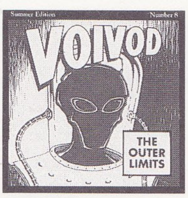
VOÏVOD (Canada)
Killing Technology
L P/(Ger.) Noise N0058 '87年
CD/Noise N-00583

ケベックで'82年に結成され、'84年に「War And Pain」でデビュー、翌年の「Rrröööaaarrr」の時点で既に怒りと悲しみのノイズをもってスラッシュ・メタルの中で特異な地平にいた彼らの転機となった作品。ドラマーでコンセプト・メーカーのアウェイが歌詩、カヴァーを担当し、地球を脱出する宇宙船は彼らのバイオメカニカルなイメージを決定した。ピギーの無機的ノイジー・ギターに変拍子が導入され、スネイクの冷めたヴォーカルと相まって彼らの個性が確立されたと言えよう。不協和音的リフ構造の巧みな展開は圧倒的破壊力である。当時ひっそりと国内盤LPもリリースされていた。〝Ravenous Medicine〟(名曲)はビデオ・クリップも制作され、猟奇的世界を表現していたのが印象深い。彼らの真のスタート地点である。(中島)



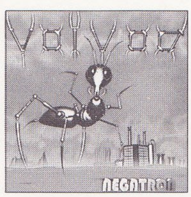
VOÏVOD
Dimension Hatröss
L P/(U.S.) Noise FW 44262 '88年
CD/Noise N-01063

アウェイ(VDGGやフロイドを愛聴していた)が導入したサイバー・パンク的歌詩とコンセプトを前作以上に押し出し、過激さとインテリジェンスの奇跡的融合を見た傑作。冷酷なまでに精緻さをもって突き刺さるリフ攻撃をして、現在とは多少意味合いが違うが、インダストリアルなる呼称が出るのは無理もない。それ程に皮膚を刺激するトゲトゲしい不協和音リフと変則的構成、効果的に操作されるSE、VOÏVODの世界はここでひとつの完成を見た。強固な世界ゆえにスネイクの表現力の向上が収まりきらない点に発展の余地がある。が、次作以降表面化するサイケデリック系プログレッシヴ色よりもスラッシーな色が前面に出ている分、迫力と凄み、という一点において全作品中最もVOÏVODらしい作品であると確信する。凄いよ。 (中島)



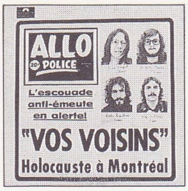
VOÏVOD
The Outer Limits
CD/MCA MCAD-10701 '93年 /MCA ビクター MVCM-391

MCAからの最後の作品となった通算7作目。完全に脱スラッシュを果たした「Dimension Hatröss」以降、「Nothing Face」('89)、「Angel Rat」('91)と、どうも焦点が定まらず、ガツンと抜けきれなかった彼等にとっては、その薄いがどうしても破れなかった一枚を突き抜けた作品と言え、ある意味ではそれまでの集大成的なアルバムとも言えよう。しっかり〝歌う〟ようになったスネイクは、それでいて往時の危なさを持続しているし、硬質ギターによるリフの反復も、リズムとのキレのいいコンビネーションでますますサイケな音像の中で映える。ベースはセッション・ミュージシャンを起用。大作⑦の途中のスラッシーなパートと④〝ナイルの歌〟の共存も心地好い。 (奥村)



VOÏVOD
Negatron
CD/A&M '95年 /ポニー・キャニオン PCCY-00833

オリジナル・メンバーであるヴォーカリストのドゥニ・ブランジェの脱退をうけ新たにエリック・フォレスト(bも兼任)なる人物を迎えて制作されたカナダの異端バンドの最新作(通算7作目)。一作ごとにサウンド・スタイルを著しく変化させることで知られる彼等がバンドの〝顔〟であるヴォーカリストの交代という〝変化〟を取り込んだだけあって、近年のサウンドからはかけ離れたノイジーなリフと吃哮型voを主軸にしたモダンな音を呈示している。だからといってバンド初期の方向性に立ち返った訳でもないのだが、そのある種無機的な音の感触は〝VOÏVODのアイデンティティ〟として一貫しているように感じる。真の意味で〝プログレッシヴ・バンド〟たろうとしている。今の時代稀有なバンドかもしれない。 (石原)



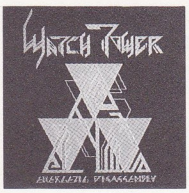
VOS VOISINS(Canada)
Vos Voisins
LP/Polydor 2424 048 '71年

ヴォ・ヴォワザンは'70年代初期に複数のアルバムを残している4人組。本作が何枚目に当るかは不明だが、剛、柔二通りのスタイルで奏で分け、味わいのある作品に仕上げている。軸となるのはJ.ペロンによるオルガン、ピアノ・プレイで〝剛〟のパートはオルガンにパワフルなギター、〝柔〟の場面ではピアノをバックに美しいコーラス等で聴かせる。両者の構成比率はほぼ半々の為、どちらが本来の持ち味なのか、判断が難しいところ。無気味なフランス語のヴォイスが続いた後で〝The Main Monster!〟のシャウトと共に、一気に弾けるB①は、シンセ系をも存分に駆使したハード・プログレッシヴの秀曲。また、A②やA④は素朴な味わいとメロディー・ラインの美しさが際立つ歌物仕立ての好ナンバー。(江田)



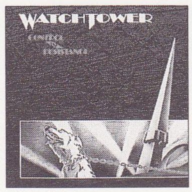
WARLORD
Deliver Us
CD/アポロン APCY-8179 '83年

'83年当時のL.A.では異質な存在だった様式美系バンドの1st。メロディ・ラインのセンスは良いが、北欧産の透明感のある疾走タイプとは違い、ミディアム・テンポが中心(速い曲もあるが疾走はしていない)で、曲のタイトル、歌詞はオカルト的要素も感じられる。メンバーには芸名があり、宣材写真は一切無いなど、バンド自体にも神秘性を持たせていた。結成時の中心人物の1人、サンダー・チャイルド(ds)は現FATES WARNINGのマーク・ゾンダー。途中参加する現SAHARAのkey、ダイアン・アレンズはセンティネルと名乗っていた。初代voのダミアン・キングは本作発表の翌年脱退、ダミアン・キングII世が加入(笑)。尚、国内盤CDは1stの6曲に、後に出る12inch、ライヴ・アルバム等から追加収録したベスト物。(川上)



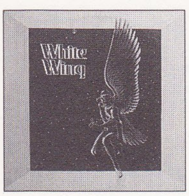
WATCH TOWER
Energetic Disassembly
LP/Zombo 番号なし '85年
CD/Institute of Art RTD 397. 0082.

テキサス出身の4人組の自主制作デビュー・アルバムで、当時のラインナップはジェイソン・マクマスター(vo)、ビリー・ホワイト(g)、ダグ・ケイザー(b)、リック・コラルカ(ds)だった。〝テクニカル・スラッシュ〟と呼ばれた彼等のサウンドは、読んで字の如し、ハイ・テクニックに裏打ちされた複雑で目まぐるしいことこの上ないスラッシュ・メタル。のっけからリフに次ぐリフ、リズム・チェンジに次ぐリズム・チェンジで、ハイ・トーンというよりは〝金切り声〟に近いジェイソンのヴォーカルも含めて、ハッキリ言って全曲通して聴くと疲れる。特にドラムの忙しさは凄まじいものがあるだろう。完成度はともかく、ここまでやってしまったという点は元祖的存在ということも含めて素直に評価したい。(奥村)



WATCH TOWER
Control And Resistance
LP/Noise N 0140 '89年
CD/Noise N 0140
/ビクター VICP-8006

シンガーとギタリストをそれぞれアラン・テッシオとロン・ジャーゾンベクに代えてのセカンド。デビュー作が、若さにまかせてとにかく凄いことをやってしまえ的なノリの上に出来上がったものとすれば、本作は、そのアイディアをより整理し、練った結果が楽曲の所々に表われている。テクニックの凄まじさもさらに強調。が、そのため音像がずっと無気質になり、曲というよりは〝テクニック博覧会〟になってしまっているものの、リスナーの多くはそれを望んでいるのだから問題ないか。アレンジに凝れば凝る程、フレーズの〝つぎはぎ〟的なものになっていくのは仕方ないのだろう。そんな中で、同じ〝金切り声〟系だが、前任者よりもずっと歌心のありそうなアランは、ひたすら頑張る。⑤にその成果が出た。(奥村)



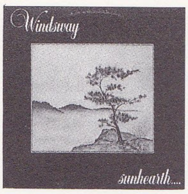
WHITE WING
White Wing
LP/番号なし '?年

メロトロンのふんだんな使用で人気のあるエイジア(J.ウェットンのじゃない)の前身にあたるバンド。本誌でも最初に紹介された時には絶賛されていた。確かに本作にもメロトロンは使用されており耳に心地良いものだが、その後発見されたエイジアがハード・ロックと言えるのに対し本作では特にハード・ロックともプログレとも言えない中途半端なサウンド。そういう曖昧なスタイルにもかかわらず本作にファンが心魅かれるのは恐らくはそのメロディーの良さのためだろう。2、3日も聴いた後ではいつの間にか口ずさんでいたりするのである。とはいえ、メロトロンが入ってなければ2回聴いていないだろうし、そもそも買ってもいまい。マニア好みのマイナーな秀作ではあるが、CDになってもベストセラーにはならなそう。(森下)



WHITE WITCH
White Witch
LP/Capricorn CP0107 '72年

サイケなシンセ&ギターの中から呪文の湧き上がるA①、印象的なピアノとオルガンに導かれるインストA②でドラマチックに幕を開ける彼らの1stアルバム。ポップで良質なメロディを凝ったアレンジで聴かせ、全体の印象としてはワウを多用するギター、多彩なキーボード・コーラス・ワーク等からプログレ寄りのユーライア・ヒープといった感じ。voの能天気なシャウトが好みを分けるかもしれないが、演奏・歌唱・録音共に水準が高く安心して聴ける。ポップながら変拍子を含み展開の多いA④や、カッコいいファースト・ナンバーB③も◎。案外知られていない様で、やや印象も小粒ではあるが、下手な高額廃盤よりよっぽど楽しめると思う。'74年に2ndアルバムを発表するが、プログレ色は大きく後退してしまう。(中)



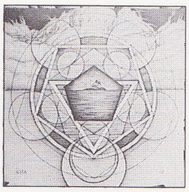
WINDSWAY (Canada)
Sunhearth
L P/(private press) WRC 1-1205 '?年

トラッドをベースにしたフォーク・ロック・グループ。きめ細やかでおだやかなサウンドの上を清楚な女性ヴォーカルがたなびく風のように歌う。正にWINDSWAYといった感じだ。さわやかなアメリカ大陸の風と、ヨーロッパの叙情がミックスされて、カナダにはこうした独特の音が生まれるのだろう。コーラス、アコースティック・ギター、ローズ・ピアノ、オルガン、フルート等のソフトな演奏も光る。（奏田）



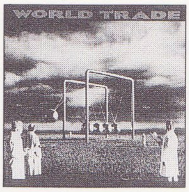
WITHOUT WARNING
Believe
CD/ゼロ・コーポレーション XRCN-1238 '95年

ニューヨークを拠点に活動する５人組のセカンド・アルバム。彼等の楽曲というのは、テクニカルで複雑なインスト・パートを尻目に、どこかライトな印象を与えるLAメタル的メロディにより、一聴した限りではそれほどのインパクトを受けることはないかもしれない。また、この手のバンドの多くが好む、〝劇的／クラシカル路線〟への執着はキーボードのサウンド・メイキング等も含めてあまり感じられず、独特のスケール感をともなったオリジナルなサウンドを求めているようだ。'70年代の米国産プログレ・バンド等を下地に、HMを含む様々な要素が加味されているのだろう。本作においては、いずれも各パートと楽曲のメロディが噛み合った③⑦といったナンバーに、そういった彼等特有の色が凝縮されている。（芹沢）



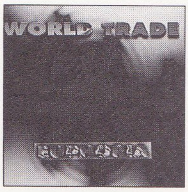
WITSEND
Cosmos And Chaos
CD/Entropy 927608 '93年

詳細不明のｇ、key、dsの３人組。'93年の作。本拠地は一応オハイオのようだが、ギュンター、〜ヴィッチ方面のファミリー・ネームからすると移民の歌か？　わずかに叙情性を残したヘヴィ・シンフォニック・サウンドと、生ギターを軸にした小曲がご丁寧にも交互に現われる。攻撃と休息、ヒット・アンド・アウェイ。まるでA.フィリップスとEL&P、UK等が同居しような構成。だが、氾濫を知らない川の如くたれ流される根性無しシンフォ系と異なるこのあまりにもの手法が何故か響きが良い。スタミナ切れを露呈させない攻撃の長さも要因のひとつか。（川上）



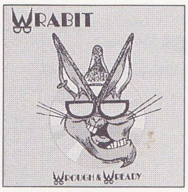
WORLD TRADE
World Trade
CD/ポリドール P25P20284 '89年

かつてレニー・ウルフ（vo）と共にSTONE FURYを組んでいたブルース・ゴウディ（ｇ）が結成した新バンド。一方、レニー・ウルフがHRの様式に寄り添う形でKINGDOM COMEを始動させたことは御存知であろうか、遅れて姿をあらわしたこのワールド・トレードは純プログレッシヴ・ロックの様式を意識したものとなった。よってHR色はほとんどない。YESからそっくり受け継いだハーモニー主体のヴォーカル、演奏、構成などレベルは高いが、一作目にして老成したかのようなこの落ち着きに居心地の悪さを覚えた。平凡なプロデュースも音楽の勢いを抑止する方向に作用しているのが残念だ。⑪のように発展を期待させる秀曲も含まれている。でも、〝そっくり大賞〟的な曲だけは勘弁してよね、実力あるんだから。（古田）



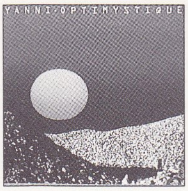
WORLD TRADE
Euphoria
CD/Magna Carta MA-9005-2 '95年
/アポロン APCY-8279

忘れた頃に帰ってきた２作目。案の定マグナ・カルタ・レーベルからリリースされた。相変わらず異様に洗練度の高い内容で、ミディアム・テンポのナンバーを中心に90125イエスを通過したポップでタイトな曲が並ぶ。テクニカルな素地を前面に押し出すでもなく、あくまで歌メロを重視している。無菌的人工空間はロックという形のひとつの進化型とは確かに言えるが、これもアメリカの感性ならではか。中心人物ビリー・シャーウッド自身のプロデュースは細部に渡ってクオリティを高めており、好みは別にしてもバンドの質は第一級として認められるだろう。イエスの「Talk」ツアーにシャーウッドが参加した縁もあってか、クリス・スクワイアが２曲ベースで参加しているのも話題になった。職人的技巧派ぶりが見事。（中島）



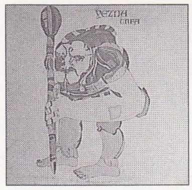
WRABIT (Canada)
Wrough & Wready
L P/MCA-5268 '81年
CD/MCA ビクター MVCM-350

カナダのHRバンドのデビュー・アルバム。ツイン・ギターとキーボードを擁する６人組で、抜群の作曲能力とセンスを持ちながらも、どうも小粒なHRに終始してしまった点が惜しまれる。ギタリストやキーボーディストの志向がもう少し違う方向を見ていれば、RUSHやTRIUMPHのようにヒット曲を出しながらも様々なサウンド展開が望めたのに……と思うが、どちらかというとアメリカン・プログレ・ハードの商業的成功組の路線を狙ってしまったのだろう。が、本作収録の①⑦⑨を始め、彼等には名曲と呼べる３分台の小曲が多数あるのも事実だ。本作以降シングル・ギターとなり、そのギタリストとシンガーが主導権を握ってメンバー・チェンジを繰り返しながらサードまで発表。いい曲を書くバンドだった。（奥村）



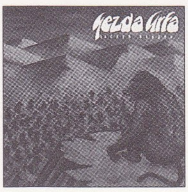
YANNI
Optimystic
LP/Varese Sarabande STV 81215
'80年

アメリカ在住のギリシャ人ヤニーは、その才能が認められて、プライヴェート・ミュージックから現在までに3枚のアルバムを発表しているが、彼はすでに'80年、サウンド・トラック専門レーベルでゴブリンの作品などもリリースしているベアス・サラバンドから、ファーストを出している。多種多様なキーボード類を操り、時にはじっくりとその端々しいピアノを聞かせるなど、並のシンフォニック・バンドよりも遙かに圧倒的である。P・Mレーベル・デビュー以前の彼は、精力的にライヴ活動をしており、「プロフェシー」他のたくさんのカセット作品やタイトルのついていない未発表作品が多数存在する。その中には、ピンク・フロイドの〝One Of These Days〞のライヴ録音も含まれている。（田中）



YEZDA URFA
Boris
LP/(private press) 番号なし '75年

マッカーサーの1st、オクトーバーの2nd、クィル等、当時からロクに売られていない超レア・高価格作品群に肉迫するレアさと20万近い価格。針を落とすといきなりトレーダー・ホーンの様な2人のヴォーカル、その後ちゃんとプログレになるが、2分足らずの2曲目ではバンジョーかき鳴らしてC&W風。3、4曲目ではアレアやマグマを思わすダイナミックさを披露してくれる。サムラ等にみられるユーモラスさは私は嫌いだが、本作からその奇妙さを削ぎ落とし再録音された「セイクレッド・バブーン」より本作の方が数倍のインパクトがある。〝芸術は爆発だ〞を地で行く様な、溢れる才気煥発さをそのままぶち込んだ奇怪な大作、大傑作である。整合性には欠けるのでヨーロッパ風の美学を求める向きにはダメかも。（森下）



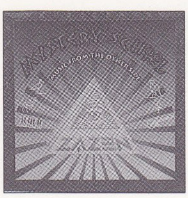
YEZDA URFA
Sacred Baboon
CD/Syn-Phonic SYNCD 8 '76年
/マーキー MAR 95144

ジッケで引いてはいけない。アメリカの自主制作系プログレッシヴの中でも代表作たりうる傑作セカンド。一聴してイエスとジェントル・ジャイアントを合体させたようだ、と思わない人はいない。全編を貫く疾走感とたたみかけのスリルは相当なもので、各パートのからみも面白い。引きの叙情よりもロックっぽさが先に立つ所がポイントである。'76年発表。メロディアスさも込みだが、パシパシッとした切れの中で次々と押し寄せる「いかにも」な複雑・変拍子の嵐は楽曲／演奏派のリスナーにかなりのインパクトを放つはずだ。構成力もずば抜けており、決して一筋縄でいかない。アコースティック技やパーカッションは飛び出すわで一気に聴かせる。濃い。（中島）



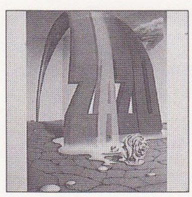
YVES ET TOUP (Canada)
Yves Et Toup
LP/Trans-World TI 6024 '?年

SÉGUINの出身地ケベックのLa Macazaは夜になると本当に3rd LPの裏ジャケのようだ。星に手が届きそうになる静かな美しい場所で、SÉGUINが当時活動していた小屋も今では誰もいないが、正に彼らの目指した自然回帰の原点はここなのであろう。SÉGUINのメンバーであったYve ClontierがR. Toupinと2人で作りあげたこのアルバムもまた、美しい風景の裏ジャケと共に夢みるような作品であった。特にB面を覆う瑞々しい叙情。うたは、SÉGUINの3rd. 4thに劣らぬカナダ最高の内容だろう。どこまでも続く大地。草原のように温かさと哀愁をたたえた夢がファンタジックに広がってゆく。（奏田）



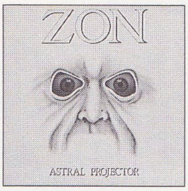
ZAZEN
Mystery School
CD/Terra Nova TND-9003 '91年

ザゼンというグループ名及びインサートのイラストからメディテイショナルなニュー・エイジと思ってCDを聴き始めた。最初のうちこそ思いどおりだったが、非常にリリカルであったり、突然ドライヴ感に富んだテクニカルなジャズ・ロックに変身する。果たして、CDといっしょに送られてきたバイオグラフィを読んで納得した。ザゼンはベース、ギター、キーボード、ドラムスから成る4人組であるが、ベーシストは何とディキシィ・ドレッグスのオリジナル・メンバー。あの名作「What If」にも参加している。また、他のメンバーもジャン・リュック・ポンティと共演した者等、ジャズ・ロック、フュージョン界で鳴らした者達である。そんな彼らの演奏は極めてテクニカルで安定しており、面白味に富んでいる。（賀川）



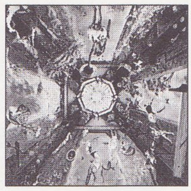
ZAZU
Zazu
LP/Wooden Nickel BWL 1-0791
'75年

スティクスと同じWooden Nickelレーベルより一作で消えたザズー。'75年にリリースされているが、同年すでにスティックスはA&Mに移籍し5作目「分岐点」をリリースしている。このザズー、スティックスの1～4作目（個人的には3作目がベスト）の流れを継承した弟バンド的性格を有しており、これらやカンサス、ジャーニーの活動が、'76年ボストン成功の下地になったことは言うまでもない。広いアメリカ、ヨーロッパ諸国に比べメジャー・デビューの競争率も高く、演奏力・歌唱力等安定しているバンドが多く、このザズーも例に漏れない。全体的にシンセサイザーが効果的に使われているが、A面の4曲はこれとった印象が残らず、B①の10分以上の組曲がこの作品の目玉であろう。（吉野）



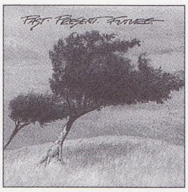
ZON (Canada)
Astral Progector
LP/Epic PEC 90442　'78年

3枚のアルバムを残しているゾンは、'78年にエピックからデビュー。ヴォーカルからハーモニーの入れ方まで、殆どスティクスにそっくり。特に1曲目の〝プット・オン・ザ・ショウ〟は、「グランド・イリュージョン」の頃のスティクスそのままといった感じで、同アルバムの中に収められていたとしても気付かない程に似ている。時期的に見ても、スティックスの成功に触発されて結成されたのは間違いないだろう。一番の魅力と言えば、多彩なキーボード類となるが、7分強の大作以外は全体的に短めでポップ。その大作においても期待のソロ・パートは短かく、長いといったらメンバー全員の髪の毛と鼻の下ぐらいか。初回はブルー・レコード。　(田中)



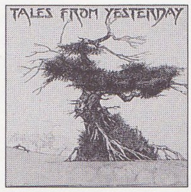
V. A.
Beyond Rock
CD/For Art Sake FAS 192CD　'92年

ワシントン州シアトルの新進レーベルFor Art Sakeのサンプラー CD。コメントに『シアトルの〝Other Side〟』と銘打ってあるのは、今や同地がSub Popに代表されるようなメジャーとマイナーを横断するアーバン・ロックの震源地として広く認知されているためだろう。こちらのレーベルは、Djam Karet風インプロヴィゼーショナル・ロックやカンタベリー臭のするハイテク・ジャズ・ロックともろMARQUEE向けで総じてレヴェルも高い。①や⑩などは早くフル・アルバムが聴きたくなるくらいカッコ良い。　(古田)



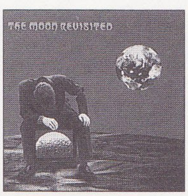
V. A.
Past、Present、Future
LP/Syn-Phonic SYNPHO 10　'90年

タイトルの通り、当時の過去（ハッピー・ザ・マン、イェツダ・ウルファ、リフト、ネザーワールド）現在（ナウ、カラバン、ジャム・カレット、エピソード）のグループを集めてシンフォニック・ロックの未来を探る、と言うオムニバス。イェッダ・ウルファ（1st収録曲）、ハッピー・ザ・マン（「Beginings」収録曲）を除いては全て未発表／新録でクオリティも仲々。古い所ではリフトがアルバムと違ったイエス風の新生面を聴かせ印象深い。一方の若手組ではジャム・カレットが外しているのが痛いが、他の3組はかなり力の入った曲で、いづれもがその後に（彼等なりの）ベスト作を出すのにつながる。ただ、本当にシンフォニック・ロックの未来がここにあったかは意見の分れる所だろうが。　(中西)



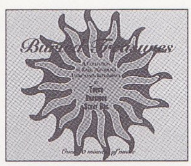
V. A.
Tales From Yesterday
CD/Magna Carta MA-9003-2　'95年
/アポロン APCY-8277

国内発売は「The Moon Revisited」が先だったが、本作がマグナ・カルタ・レーベルのトリビュート物第1弾、イエス編である。「The Moon～」が完コピだったのに対し、こちら約12組のアーティストが独自のアレンジでイエスを料理している。複雑な曲構成を持つイエスの曲の方が、逆にフロイドよりはイジリやすいのかもしれない。企画物としてはフロイド編より成功していると思われる。イエス関係者自らがトリビュートしてどうするという数名もいるが、S・ハウとアニー・ハズラムによる〝世紀の曲り角〟が間違いなくベスト・テイク。その他、レーベルお抱えのバンドや、R・ウェイクマンの息子、何故かスティーヴ・モーズも参加している。ジャケとロゴ・デザインはロジャー・ディーンという凝りようである。　(川上)



V. A.
The Moon Revisited
～PINK FLOYD Tribute～
CD/アポロン APCY-8274　'95年

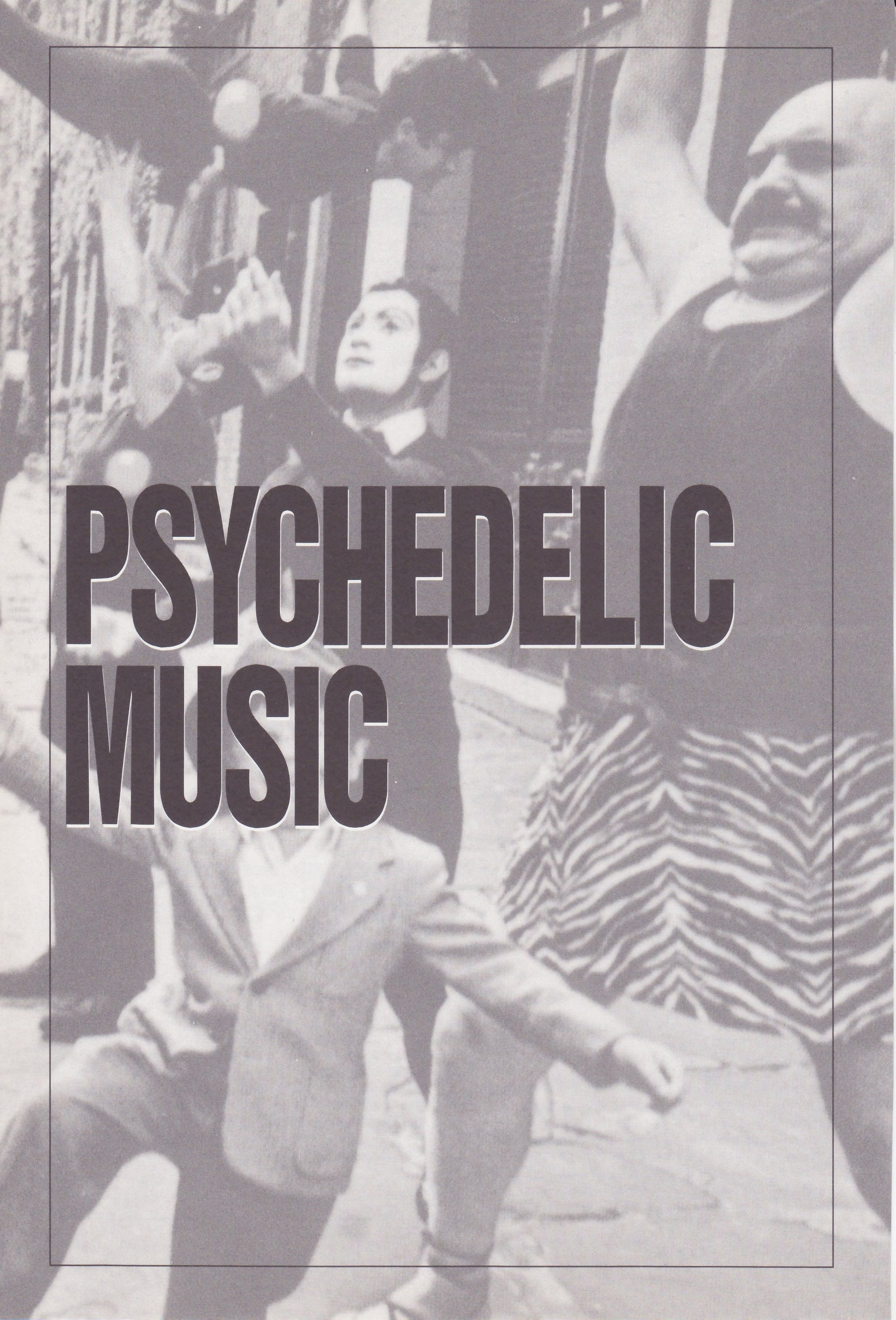
ロック史上最大のセールスを今尚続ける怪物アルバム「The Dark Side Of The Moon」('73)。ピンク・フロイド・トリビュートの仕掛人は、やはりこの人、マイク・ヴァーニー。NAGELLAN、SHADOW GALLERY、CAIRO、ENCHANT、復活したWORLD TRADE、ROBERT BERRY、そしてフロイド完コピ・バンドのDark Side Of The Moon（笑）のマグナ・カルタ・オール・スターズ？　が「狂気」に挑む。特異なキャラクター、芸風を持つアーティストなり、バンドなりが、よく知られた曲をカヴァーすることにより、逆にその体現者の異質性が浮かび上がってくる結果を生じるが、本作はその正反対。各々のアーティストのカラーはすべて巨大な「狂気」に飲み込まれ、〝Brain Damage〟での不気味な笑い声すら聴こえてこない。　(川上)



TOUCH, GRACIOUS, STRAY DOG
Buried Treasures
CD/Renaissance RCD 1006
'94年('68～'74年録音)

この3バンドの未発テイクをどれ程の人が喜ぶかイチモツに不安がある。TOUCH（AMERICAN TEARSの後進で、'80年の第一回モンスターズ・オヴ・ロックに出た方ではなく、古い方の奴ら）は、キーボード中心のポップでジャジーな展開も見せる14分に及ぶ映画音楽用に作られたテイクが聴き所。GRACIOUSはデビュー前のセッションを収録。キーボードがくどいBEATLES、BAD FINGER系の軽めの4曲。STRAY DOGは'73年のレディング・フェスのライヴが中心。ブルージィなインプロヴィゼーションが展開されるハード・ロック。時代を感じる3バンドです。　(川上)

PSYCHEDELIC MUSIC



TURN ON, TUNE IN, DROP OUT

文●星野夏実

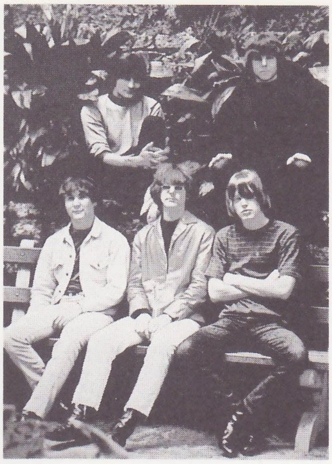


JEFFERSON AIRPLANE



GRATEFUL DEAD

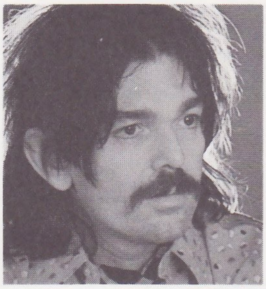




BYRDS



QUICKSILVER MESSENGER SERVICE



CAPTAIN BEEFHEART

サイケデリックな'60年代アメリカの記憶

サイケデリック・ロックを中心に60年代のアメリカの全体像をまとめてくれとのお達しだ。さて困った、なんでもありのあの時代を簡潔にまとめられる訳がないし、第一サイケデリック・ロックなんてものは実態がないのだ。フォーク・ロックやブルース・ロック等は形態を持ち込んだ音楽として説明がつくが、サイケの場合はそうもいかない。要するに雰囲気なのだ。PSYCHEDELICという造語を分解すればPSYCHE(仏・魂)とDELIC(幻覚剤)となる。一般的には〝幻覚〟がキーワードとなるが、私は〝魂〟を本質と見る。Turn On, Tune In, Drop OutのTune Inが鍵だ。音楽に精神の波長が合わせられるか否かなのである。

文化面から見た60年代はオルタナティヴの追求、つまり脱西欧、脱資本主義、脱テクノロジーといった既成構造に対するアンチテーゼ表出の時代となる。前提条件の一つにビートニクスがあるが〝神聖な原始人〟と称されたニール・キャサディを唯一人の例外として青白きエリート連中であり、また後にヒッピーの教典と持囃される書物の大半が論文・研究書の類である事実も見逃がせない。

アシッド・テストを主催し、グレイトフル・デッドを見い出した(トム・ウルフ著『クール・クールLSD交感度テスト』に詳しい)ケン・キージーの処女作『カッコーの巣の上で』(62年)は、マイノリティで日常的に幻覚剤を用いるインディアンを語部とした。現在でも儀式に幻覚剤を使用する部族は多いがそれは純粋に神聖なものであって、アシッド・テストでの使用とはベクトルの向きが明らかに異なる。同じくトランス状態を求めていても、民族音楽のそれは生活に密着しており先祖代々脈々と受け継がれてきた血と同質であるのに対し、サイケデリック・ロックのそれには疑似的な引っ掛かりが否めない。ドラッグに対する過信・迷信は、禅に代表される東洋的なものへの憧れと同質だったのではないだろうか。

音楽に触れよう。公民権運動等ともリンクしていると推測されるのだが白人による黒人ブルースの再発見や、ラヴィ・シャンカールの渡米(58年〜)も忘れてはならないが、最も重要なのはビートルズの登場である。ティンパン・アレーとフォークの時代にビートルズに刺激を受けた全米各地のアマチュア・バンドが録音を残した。後にガレージ・ロックと呼ばれるもので、要約すれば粗末な機材しか持ちえずに稚拙なテクニックによる演奏ではあるが、逆にメインストリームでは出しえないリアリティを持ったロックということだ。詳細はアルバム・ガイドに譲るが、デッドもヴェルヴェッツもマザーズも最初期はガレージであったと思って戴いてかまわない。

地域性についても触れてくれとのことだが、日本や英国の様な狭い島国では全国レベルのヒットが容易だが、国土の広大なアメリカではそう簡単には運ばず、ブルースにしてもジャズにしても確かに地域性はあり、サイケも同様であるということに止めておき、ここではサン・フランシスコの特異性にのみ触れておく。第一は全米を代表する大都会という先入観で降り立つと拍子抜けするくらい小さな街である。誤解を恐れずに書けば、多分に島国的なのだ。第二にここにはビル・グラハムがいた。66年のトリップ・フェスティバルでみんながラリパッパの時にグラハム一人が素面で「入場料を払え」と怒鳴っていたという。60年代とは対極の価値感を持った既に中年に差掛かっていたグラハムには全てがビジネス、だが若いバンドマン達はそんな男に信頼を寄せたというパラドクス。ナチスに迫害を受けたユダヤ人移民でラテン音楽好きなグラハムが、氷入りのセブンナップでオーティス・レディングの心を据えたという告白を読んだ時には、この男の純粋さと腹黒さを同時に垣間見たような気がしたが、こいつなら信用してもいいとも思っていた。グラハムと当時のSF音

VELVET UNDERGROUND

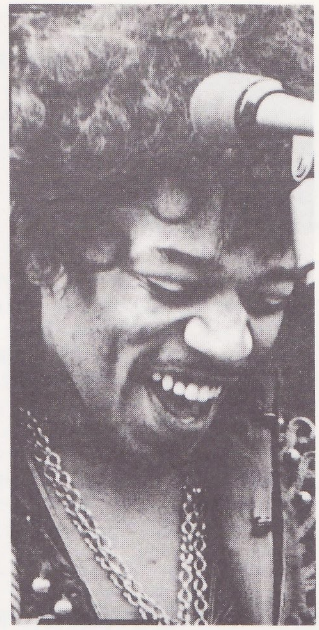




DOORS



BLUE CHEER



JIMI HENDRIX

楽シーンを知るには『ビル・グラハム～ロックを創った男』が批判的意見も多く、読みごたえがある。

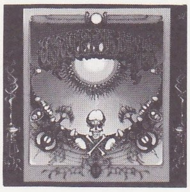
LSDは66年迄は合法であった。38年に合成されて43年に偶然幻覚作用が確認されたLSDは、冷戦下CIAの庇護のもと次第に蔓延していった。ケン・キージーはスタンフォード大学院生だった60年に日当$75でLSDや他の薬物の人体モルモットを請け負い、この時の体験で『カッコーの巣の上で』を発表し、その印税でメリー・プランターズを組織し、アシッド・テストを主催し、グレイトフル・デッドが登場してきた。LSDの歴史についてはマーティン・A・リーとブルース・シュレインの共著『アシッド・ドリームス』に詳しい。ドラッグ・カルチャーの副産物として、ファンタジーの復権を挙げておく。現実離れした話しが、ドラッグの介在により身近に感じられたということだ。トルーキンの『指輪物語』がその最たるもので、登場人物からつけられたバンド名/ステージ・ネイムは実に多い。ただし、ファンタジーとは厳しい現実の写しにすぎないことを見落としてはならない。

マスコミが〝サマー・オブ・ラヴ〟を騒ぎたてていた67年夏の時点で、聖地ヘイト・アッシュベリーにはヘビー・ドラッグが蔓延し、自由な愛・終わりなき喜び・生命の神秘に対する答えの全てを働かずに手に入れる方法を探そうとするドロップ・アウト/フラワー・チルドレンで人口過密となり、殺伐とした雰囲気になっていたという。この時点でヒッピー神話は崩壊の坂道を転がり始めていたとする記述はあちこちで目にすることができるが、サイケデリック・ロックが表舞台に登場してきたのはそれ以降なのである。

映像で目にできる67年6月のモンタレー・ポップ・フェスティバルは実に牧歌的で郎やかであるが、舞台裏ではレコード会社が金の匂いを嗅ぎ取っていた。そして69年8月のあまりにも無計画であったウッドストックと同年12月のオルタモントの悲劇で幻想は消滅したと言っても決して過言ではない。同年夏には異形ヒッピー・コミューンたるチャールズ・マンソンとファミリーが全世界を震撼させている。翌70年にはジミ・ヘンドリックス、ジャニス・ジョプリンが、71年にはジム・モリソンがこの世を去る。直接の死因はともかく、ドラッグが絡んでいたのは疑いようがない。70年代初頭、幻想に疲れた人々の心を捉えたのが内省的なシンガー・ソングライター達の素朴な歌であったのも頷ける。現実と幻想をゆらめくドロドロのドラッグ小説であった『カッコーの巣の上で』が、ベトナム敗戦前後の75年に68年の'プラハの春'でアメリカへ亡命したミロス・フォアマン監督で映画化されてアカデミー作品賞を受賞したが、主人公を変えはしたが設定が同じなのにノン・ドラッグの人間讃歌に脚色されていた点に、60年代と70年代の違いが如実に物語られているといえよう。

最後にフリークスとヒッピーの違いに触れておかねばならない。乱暴に言えば個人個人が全く別の主義主張を持ち、互いにツルみ合わないのがフリークスで、集まり画一的な習慣におとなしく従うのがヒッピーである。前者の代表がフランク・ザッパであり、彼は決してサイケのイディオムで語られるべきではないと断言しておく。

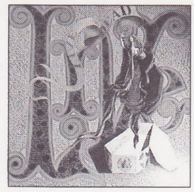
音楽とは聴くものであるが、歴史的背景を知れば面白さも倍増する。本文中に挙げた以外で60年代を知る本を三点挙げておく。メディアの発達は人間の五感の延長だと主張するマーシャル・マクルーハン『人間拡張の原理』、「解釈するとは対象を貧しくさせ、世界を萎縮させることであり、その目的は、いろいろな意味によって成り立つ影の世界を打ち立てる」と説くスーザン・ソンタグ『反解釈』、総論としてはモーリス・デクスタイン『アメリカ1960年代』が最適である。



GRATEFUL DEAD
Aoxomoxoa

LP/Warner Bros WS 1790　'69年
CD/Warner 1790-2
　/ワーナー・ミュージック WPCP 4353

物欲が失せ、気合いを入れてレコード／CDを売りに入っている俺だが、数少ない例外がデッドで、狂ったようにライヴ・テープをトレイドしている。「組織を持たない最大にして最良の宗教団体」という誰かの言葉は実に適確で、本稿を引き受けるきっかけを押しつけてきたのもデッド・ヘッズ仲間の松谷健である。さて、デッドは何と言ってもライヴでスタジオ作はあくまでもライヴを楽しむためのテクストなのだが、それでは話が進まない。ライヴ録音にスタジオで手を加えるという手法をザッパよりも早く実践した前作「太陽讃歌」と純然たるスタジオ作である本作は、治療不能な病気を自覚する以前からの愛聴盤である。両作とも、サイケ以前にロックの基本中の基本、テープ集めに狂うのはそれからでも遅くはない。（星野）



GRATEFUL DEAD
Live Dead

LP/Warner Bros 2WS 1830　'70年
CD/Warner 1830-2
　/ワーナー・ミュージック WPCP 4354

'69年2月27日～3月2日のライヴから選ばれた作品でヘッズになった今となっては必ずしもベスト・テイクが選ばれているとは思えんが、それでも出色の出来を誇るライヴ・アルバムだ。初めてデッドを聴こうと思っている人は本作から入るべし。これが駄目な貴方の体質はデッド向きではない。それにしてもエロティックじゃ!!　どこまでも飛んで行く流れ星の様なジェリー・ガルシアのギター、対照的にウネウネとのたうを回るボヴ・ウィアのギター、ベース・ラインなんか端から無視しているフィル・レッシュ、ダブル・ドラムの微妙なズレが生むポリリズム的なうねりにキーボード、これが一つに集約された時はロックもジャズも民族音楽も超越してしまうんじゃ。ドラッグなんて不用、ナチュラル・ジャンキーと化せ。（星野）



GRATEFUL DEAD
Wake Of The Flood

LP/Grateful Dead CD 01　'73年
CD/MSI GDCD 900643

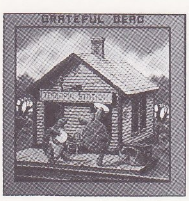
3年振りのスタジオ作は自分達のレーベルからで、ホーンも導入した意欲作だ。ニュー・ソウル的なギターが冴えるファンキー・ナンバーで当初アルバム・タイトルになる予定であった〝アイズ・オブ・ザ・ワールド〟とボビー入魂の大作〝天気予報組曲〟がたまらん。とはいうもののデッドはやっぱりライヴである。やんごとなき事情から'71年～'74年はミッキー・ハートがおらず、ビル・クルーシュンの1ドラムであった。〝ミッキーがいないデッドなんて〟と思っていたが、それは大間違いの先入観でした。ドラマーが一人の為にタイトになり、思い切りジャズ・ライクなのだ。その頃の'73年12月18日のライヴ盤「Dicks Picks Vol.2」。是非聴いて欲しい。デッドに飽きないのはいいかげんだから、それが分かるよ。（星野）



GRATEFUL DEAD
Blues For Allah

LP/Grateful Dead GD-LA494G　'75年
CD/(U.K.) Grateful Dead GDPD-4001
　/MSI GDCD 900650

ミッキー・ハート復帰第一弾!!'74年までのジャズっぽさに、ミッキーが持ち込んだエスニック風味が加わり、ワシ好みになりおった。名曲揃いだ。中でも印象的なのがタイトル曲であるが、ステージでは'75年にたったの3回しか演奏しておらん。しつこいがデッドの本領はライヴであって、スタジオ作はテクストなのだ。でも御安心あれ。ヘッズに人気1番の'75年8月13日のライヴが完全収録でCDになっておる。「ワン・フロム・ザ・ヴォルト」がそれじゃ。ビル・グラハムに紹介されたメンバーから演奏を始めていくオープニングは、そこだけリピートして100回連続で聴いてもゾクゾクするでェ。「ブルース・フォー・アラー」もスタジオ版よりも『アラビアン・ナイト』的艶っぽさでたまらんワ。ハーッ、桃色吐息!!（星野）



GRATEFUL DEAD
Terrapin Station

LP/Arista 7001　'77年
CD/Arista ARCD 8065-2
　/BMGビクター BVCA 1001

デッドのシンフォニック・アルバムである。プロデュースはミレニアムやフリートウッド・マックを手掛けたキース・オルセン、オーケストラ・アレンジはエルトン・ジョンやサード・イアー・バンドで有名なポール・バックマスターである。イソップ童話の「うさぎとカメのレース」をベースにしたこのアルバムのハイライトは、16分以上にわたる大曲〝テラピン組曲〟であろう。ゆったりとしたグルーヴでスタートするこの曲は以後、デッドのコンサートでも重要なポジションとして君臨する事となる。ここで重要な事は、デッドがシンフォニックに挑戦したのではなく、デッドの曲が、シンフォニックを必要とした事である。頭から柔らかにして楽しんで欲しい。もっとオープンになろうヨ！（松谷）



GRATEFUL DEAD
Without A Net

LP/ACD 2-8634-DL　'90年
CD/Arista ARCD 8634-2
　/BMGビクター BVCZ-3001～2

1989年12月から翌年4月までをライヴをソースにした132分をこなす2枚組拡大なスケールと7色に輝くカラフルなサウンドは、彼らがオリジナル・サイケデリアの最後のグループであった証だ。そのスタイルをコンピューターやデジタルと変化させながら、その時代にリアル・トリップを実現させて来たグループはグレイトフル・デッドだけだろう。「聞く人をハイにする音楽」を追求し、〝全ての人と音楽で遊ぶ〟。これが、サイケデリックでなくて何であろう。プログレッシヴでも良い。30年も続いているグループで常に新作が最高なんていうグループはめったにない。しかし1995年8月リーダーのジェリー・ガルシアの死によりオリジナル・サイケデリックは遂に終焉を向かえた。名盤。（松谷）



QUICKSILVER MESSENGER SERVICE
Happy Trails
LP/Capitol 120 '69年
CD/(U.K.)BGO BGOCD 151
/東芝EMI TOCP 8118

デッド・ヘッズの俺だが、'68年まではQMSの方がはるかに尖鋭的であったと素直に認めてしまう。ウエスト・コースト・サイケはライヴにありという自論から名盤の誉れ高い1stではなく、'68年のライヴである本作を選んだ。欧米での評価に較べて日本での知名度があまりにも低いジョン・シポリナがビリビリと感電したように弾き狂うギターの音色は快感!! そのジョンとゲイリー・ダンカンのツイン・ギターの絡みに興奮を覚えぬ奴サイケを聴く資格なしと言ってしまおう。LP片面25分も演ってしまう〝フード・ドゥ・ユー・ラヴ〟の濃密さも、精神をサウンドに乗せてしまえば極楽極楽、フラッシュバックの心配無用のマインド・トリップを保証してくれる。超レア盤を探す前にこうした基本アイテムを聴き込まねば。(星野)



QUICKSILVER MESSENGER SERVICE
What About Me
LP/Capitol 630 '71年
CD/(U.K.)BGO BGOCD 58

コアなサイケ・ファンにはコケにされる'71年の5th。確かにホーンを導入したファンキーな曲が多く、DJが飛びつきそうだけどね。ヒッピー神話が崩壊し、内省的なSSWが人気を集めていた時代に適応した変わり身の早さが、QMSの弱点だったのかもしれない。3rdより加入したディノ・ヴァレンテ(彼の本質はまさしくSSW)が次第に実権を握り始め、本作を最後にシポリナが脱退、バンドも失速していった。そんなことはどうでもいい、タイトル曲で腰を振れ! 南国的快楽主義もサイケの一面なのである。私事で恐縮だが、QMSの歴史を思うと松谷健率いるマーブル・シープがオーバーラップしてくる。本作が気にいった人はベルギー人を感激させたトロピカル・サイケ、マーブルの「トウィガ」をお薦めする。(星野)



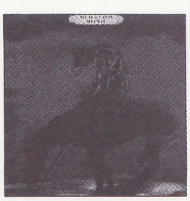
CAPTAIN BEEFHEART & HIS MAGIC BAND
Trout Mask Replica
LP/Straight STS 1053 '69年
CD/Reprise 2027-2
/ワーナー・ミュージックWPCP 5738

濃いでェ!! '69年にザッパのプロデュースで製作・発表されたが、アクの強さでは誰にも負けんザッパの気配が微塵もないのが、一等凄い。100%個人の作品なのだ。だから歴史の風雪に耐えられるほど強靱で、主流にはなれないがいつの時代でも違いの分かる者たちに愛されるのだ。次に凄いのが裏ジャケット写真だ。マジック・バンドの面々の中では親分だけが普通のオッちゃんに見えてしまう。よく知られた話ではあるが、親分はかくもヤバキ連中を9ヶ月間の長きに渡ってドラッグもセックスもタブーの監禁・猛練習を課した後、22時間で28曲を完成させた。溜りに溜った欲求の捌け口をようやく見つけたバンドの面々、スタジオは尋常ならざる殺気に満ちていたはずだ。ザッパも口出しできんわな。必聴である。(星野)



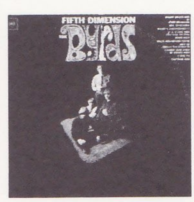
CAPTAIN BEEFHEART & THE MAGIC BAND
Shiny Beast～Bat Chain Puller
LP/WB BSK 3256 '78年
CD/Virgin CDV 2149
/ワーナー・ミュージック WPCP 5741

15、6年前の出来事である。ラジオから訳の分からん曲が流れてきて、ストーンズやオールマンで満足していたまだ童貞で普通の高校生であった俺は吐き気を催した。その週末に少ない小遣いを握り締めて中古レコード屋に行き、偶然見掛けたこのアルバムを恐いもの見たさで安いから買ってみた。全てを誤らせたのはその曲〝トロピカル・ホッド・ドック・ナイト〟だったような気がする。本作は'75年にザッパのプロデュースで録音されるもお蔵となった作品のリメイク版である。'75年版もブートで出回っており聴き比べてみるのも面白いが、出来は断然本作だ。昔はあんなに気色悪かったのに、デッドの「スペース」やサン・ラ様を愛する今となっては目茶苦茶キャッチーでポップに響くのだから、かなわんのお。(星野)



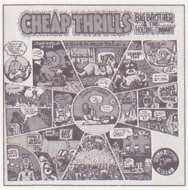
BEACH BOYS
Surf's Up
LP/Brother Reprise 6453 '71年
CD/ソニー SRCS 6090

本来は「スマイル」であるが、現時点では腐る程あるブートでしか聴けないし、待望のオフィシャルも無期延期となった('95.10.4現在)。あまたのポップス・ファンを魅了してやまないブライアン・ウィルソンの感性(ポップ感覚)だが、俺には全く合わない。だが本作に唯一提供した〝私が死ぬまで〟と、「スマイル」のためにヴァン・ダイク・パークスと最初に作ったトラック('66年)をベースに完成させた〝サーフズ・アップ〟の2曲は凄い。ドラッグ漬けのパラノイア、ブライアンが束の間正気に返った時に知る絶望感というキラメキを2分半に集約した〝私が死ぬまで〟のはかない美しさと、'66年の時点でドラッグ幻想の成りの果てを予見していた2点に、好みの問題を越えてブライアンの才覚を認めてしまう。(星野)



THE BYRDS
Fifth Dimension
LP/Columbia CS 9349 '66年
CD/Columbia 9349
/ソニー SRCS 6384

マジック・カーペットに乗っているバーズ、宇宙への挑戦だ。3作目にしていよいよオリジナリティー大爆発で、1曲もディランのカバーが入っていないことは大きい。とにかくジム(ロジャー)・マッギンのギターはスゴすぎる! 前作とは比べ物にならない位に太い12弦の音が自由に曲にの中を動き回っていて、聴いてる私たちに宇宙遊泳の気持ち良さを教えてくれているようだ。何時何度聴いても飽きることがなく、「おクスリの効果」は発売後30年近く経った今でも抜群の効き目をもたらしてくれるのだ。この後、さらに実験的な部分を拡大したアルバム「昨日よりも若く」を発表しており、そちらも要チェックだ。マイナーなサイケ・バンドもいいが、それらを聴く前にちゃんと通っておいて欲しいアルバムだ。(長谷川)



BIG BROTHER THE HOLDING COMPANY
Cheap Thrill
L P/Columbia PC 9700　'68年
CD/Columbia 9700
　/ソニー CSCS 6010

一人悶々と自家発電に耽っていたかつての友人が、ラジオからジャニスが流れてきた途端にイチモツが萎んだと聞き、大笑いしていたのを思い出す。俺もジャニスが苦手だった。疲れてしまったのだ。そんなに気張るなよと思ったりもした。ところが最近、ジャニスが愛しくてたまらん。こんなにキュートな女性は滅多にいるもんじゃない。疑うことなくジャニスは不世出の大天才だ。だが、その事実が彼女を苦しめて死へ追いやった悲劇的なパラドクスも、見事に'60年代的である。よくバック・バンドが下手だと酷評されるが、俺は一度もそう感じたことがない。上手くはないが、珍しいからと持て囃されるあまたのガレージよりもずっとまともだ。ドラッグで酩酊したヘロヘロのサウンドが計算を越えてジャニスを柔らかく包み込む。　(星野)



JEFFERSON AIRPLANE
Surrealistic Pillow
L P/RCA LSP 3766　'67年
CD/RCA 3766-2
　/BMGビクター BVCP 7351

名盤らしい。そうかな？　佳曲揃いだし、ジェリー・ガルシアも参加しているが、どうも小粒なのだ。新加入のグレイス・スリックが持ち込んだ２曲がサマー・オブ・ラヴの年を象端するかの如く、大ヒットを記録した。サイケNo.1ベーシストのジャック・キャサディが低く唸るようにビートを弾き、ボレロ調のドラムが続いて、ヨーマ・カウコネン独特の引きずるようなギターが被さり、グレイスが少し調子の外れたヴォーカルで『不思議の国のアリス』を下敷きにしたオクスリの効用を歌い出す。〝ホワイト・ラビット〟のイントロは、ロン・カーターにビル・エヴァンスが絡む一瞬が美しいマイルスの〝ソー・ホワット〟とともに、俺をいつでもゾクゾクさせてくれる。サイケと言わずに基本中の基本。やっぱ名盤だわ!!（星野）



JEFFERSON AIRPLANE
Volunteers
L P/RCA LSP 4238　'69年
CD/RCA 4238-2
　/BMGビクター BVCP 2013

彼らの最高作である。'69年という１年をものの見事に集約している作品だ。楽天的なラヴ＆ピースは過去のものへとなりつつあり、よりラディカルに体制への反対姿勢を打ち出した。ヨーマのギターとジャックのベース以外で彼等を音楽的に特色付けているのは、伝統的な手法に囚われていない対位法的なリフレインを多用する下手上手なコーラス・ワークであり、ジェリー・ガルシア、ニッキー・ホプキンス等の多彩なゲストもコーラスの引き立て役にすぎないほどだ。駄曲のない充実作である反面、メンバーの心が一つでないのも確か。カントナーの曲では後のスターシップに通じる展開が、ヨーマの曲ではホット・ツナ的アプローチが伺える。それなのにこれだけの完成度!!　時代の空気とはかくも恐ろしきものなのか。（星野）



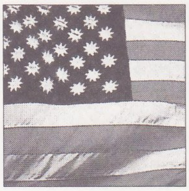
JEFFERSON AIRPLANE
Thirty Seconds Over Winterland
L P/Grunt BFL 1-0147　'73年
CD/RCA 147-2
　/BMGビクター B20D 41028

普通なら'68年のライヴ盤を選ぶべきだが本作なのだ。理由はただ一つ、好きだから。「ヴォランティアーズ」の項で触れたように、案の定バンドはカンタベリー・マップ状態と化した。ロック／ジャズを問わずに、最後のあがきと危うさに俺は魅かれてしまうのだ。'72年夏のツアーを記録したエアプレイン最後のアルバムである本作で光るのは、ヨーマとジャックに気の良いファンキー爺パパ・ジョン・クリーチ、つまりそのまんまホット・ツナ・トリオである。ウッドストックの頃までの闇雲な爆発力はないが、ここでの持続力もただごとではなくすごすぎる。ヨーマとパパ・ジョンのインタープレイも即死的熱さだ。末期的な記録ではあるが、それ故の萎れた美しさに酔いしれることができる奴の感性を俺は認める。　(星野)



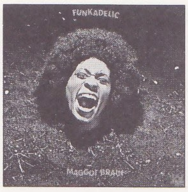
PAUL BUTTERFIELD BLUES BAND
East↔West
L P/Elektra EK 7315　'66年
CD/Elektra 7315-2

サイケ30の選の中で、口が裂けてもサイケとは呼べないのが２人いる。ビーフハートとバターフィールドだ。本作なんかロックでもなく、純正ブルースである。それでも本作は外せない。紫の煙が充満するフィルモアで彼等が演奏を始めるとみんなが呑まれるように聴き入ったというくらい強力である。デッドもQMSもアシッド齧っただけのガレージ・バンドに過ぎなかった'66年に、彼等は10分以上の演奏を10点満点で決めたのだ。彼等がベイエリア・サイケに与えた影響は計り知れない。「ウインディ・シティから吹きつけてくるヘヴィなそよ風」とはビル・グラハムのMCだったそうだが、実に的を射ている。ブルームフィールドが結成したエレクトリック・フラッグが'67年に録音したOST「トリップ」も必聴。　(星野)



SLY AND THE FAMILY STONE
There's A Riot Goin' On
L P/Epic KE 30986　'71年
CD/Epic 30986
　/ソニー ESCA-5219

映画『ウッドストック』でのスライは圧倒的な迫力である。それを知りながらも俺はスライを頭脳先行の人間だと断定する。'60年頃からマイナー・レーベルにシングルを残し、'64～'64年にはサンフランシスコのオータム・レーベルの専属プロデューサー／ソングライターとしてボー・ブランメルズ等でヒット曲を演出した。白黒混合バンドを〝ファミリー〟としたのも時代の臭いを鋭敏に嗅ぎ取っていたのだろう。とことんクールで計算高いのだ。前作「スタンド」も実に緻密に作られているが、JBのような興奮は覚えない。それから２年半後に発表された本作では脱退したラリー・グラハムの穴をリズム・ボックスで埋める。はかなすぎるが故の奇妙な緊迫感に包まれている。内へ内へと向かうしかないヘヴィー・ドラッグ作だ。（星野）



FUNKADELIC
Maggot Brain

LP/Westbound 2007　'71年
CD/Westbound 2007
　/P・ヴァイン PCD-757

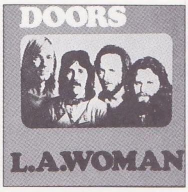
コテコテである。ドス黒くブッとい。祈りでもある。頭の中にウジが湧いてくるような快感に包まれるタイトル曲だけでよい。次作よりブーチーが加入してジャンキー集団は極道非道の武装集団と化し、ザッパ顔負けの大進撃を始めるのだが、この3rdまではジミ・ヘンを濃くしたようなブラック・サイケである。尚、異名同体バンドであるパーラメントに曲を提供していた白人女性歌手ルース・コープランドの2ndでは本作メンバーが脇を固め、〝ギミー・シェルター〞でのエディ・ヘイゼルの悶絶ギターもブッチ切れていてたまらんぜ。〝ギミー・シェルター〞といえばUK極悪集団ホークウインドと永遠のオナペット、サマンサ・フォックスが共演した'93年のものも目茶苦茶カッコイイ!!　(星野)



DOORS
Strange Days

LP/Elektra ESK 74014　'67年
CD/Elektra 9740142
　/ワーナー・ミュージック 1892-2689

今さら何をいわんや、ドアーズ。死んだジム・モリスン。ドアーズ、2nd。日本盤タイトル「まぼろしの世界」。奇妙な日々。迷子の少女。二度愛して。不幸な少女。放牧地帯。月光のドライヴ。変な人々。おまえをみる俺の目。おぼろな顔。音楽が終わったら。音楽が終わったら。音楽が終わったら。音楽が終わったら。音楽が終わったら。ドアーズ、2nd。日本盤タイトル「まぼろしの世界」。奇妙な日々。迷子の少女。二度愛して。不幸な少女。放牧地帯。月光のドライヴ。変な人々。おまえをみる俺の目。おぼろな顔。音楽が終ったら。音楽が終ったら。音楽が終ったら。音楽が終ったら。音楽が終ったら……。死んだジム・モリスン、ドアーズ。　(サトウユキエ)



DOORS
L.A. Woman

LP/Elektra K 42090　'71年
CD/Elektra 75011-2
　/ワーナー・ミュージック 20P2-2347

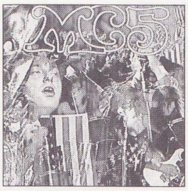
ドアーズというバンド名がオルダス・アクスリーのメスカリン服用体験をまとめた『知覚の扉』から取られたことはよく知られているが、ハクスリーの同書がウィリアム・ブレイクの詩の一説とフランス実存主義哲学メルロ=ポンティの著書『知覚の現存学』に触発されたということはあまり知られていない。ビートニクに憧れ、哲学論議を好んだジム・モリソンらしいネーミングだが、同時にインテリ的なひ弱さも窺える。それは最初の2枚のアルバムの充実度とそれ以後の散慢さにも如実に表われており、そのまま時代に見事なまでに符号している。'71年に発表されたジムの遺作である本作には迷いがない。ジムは幻想を払拭できたのだと思うと余計に突然の死に空しさを覚える。'60年代の代償はあまりに大きかった。　(星野)



IGGY AND THE STOOGES
Raw Power

LP/CBS 32111　'73年
CD/(U.K.) BOMP BCD-4049

1973年に発表されたストゥージスのサード／ラスト・アルバム「ロウ・パワー」は彼らの最高作であると同時に、プロデュース、ミックスを担当したデヴィット・ボウイの最高の仕事でもある。ボウイはストゥージスの破壊的攻撃的なサイケデリック・サウンドに、グラマラスなドラッグ感覚をちりばめ、超人工的なミックスを施す事により、さらにワイルドに、下品でワイセツなアルバムに仕上げる事に成功した。フラワー・チルドレンにツバを吐くアンチ・ヒッピーによるヴァイオレンス・ドラッグ・アルバム。完璧である。以後、彼らのスピリッツはニューヨーク・ドルーズ、ディクテイターズ、ラモーンズへと受け継がれてゆく。また、ドラッキーなワン・リフ攻撃に打ちのめされたい方には1st、2ndもオススメだ。　(松谷)



MC 5
Kick Out The Jams

LP/Elektra 74042　'69年
CD/Elektra 60894
　/ワーナー・ミュージック WPCP 4056

デトロイトで生まれたMC5（モーター・シティ・ファイヴ）のデビュー・ライヴ・アルバムである。'60年代中期から活動して来た彼らは'67年、政治的過激派集団ホワイト・パンサー党のリーダー、ジョン・シンクレアをマネージャーに、ワイルドなアジテイションとハイ・エナジーなロックン・ロールをさらにエスカレートしていった。そして1968年10月30日と31日の両日のステージをソースに完成したのが本作である。しかし、タイトル曲のイントロでの〝マザー・ファッカー〞が問題となりレコード店の多くが販売を拒否、急拠エレクトラ側が〝ブラザー＆シスターズ〞の言葉に指し変えた改訂盤を発売するというエピソードがある。(現在は、オリジナルどおり)。サン・ラとの共作ナンバーも含む歴史的名盤。　(松谷)



MC 5
High Time

LP/Atlantic 8285　'71年
CD/Rhino 71034-2
　/イースト・ウェスト AMCY 470

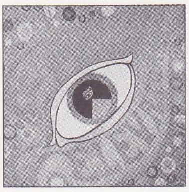
ファースト・アルバムでの〝マザー・ファッカー事件〞でエレクトラに中指をブッ立てたMC5は、新たにアトランティックと契約し、2枚のアルバムをリリースした。グッド・オールド・ロックン・ロール・アルバム「バック・イン・ザ・USA」と本作「ハイ・タイム」がそれである。モータウン・サウンド、フリー・ジャズ、それにジェイムス・ブラウンと独自のワイルドなロックン・ロールとの融合を目指したMC5は、このサード・アルバムで、キーボード、パーカッション、ホーン・セクションなどを導入し、トータルで完成度の高いアルバムに仕上げた。しかしMC5はその数年後に解散してしまい、各メンバーはそれぞれ活動してゆく事になるが'95年現在、ロブ・タイナー（vo）とフレッド・スミス（g）が世を去っている。　(松谷)



BLUE CHEER
Vincebus Eruptum

LP/Philips 600 264 '68年
CD/(Ger.) Repertoire REP 7023

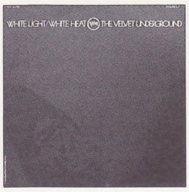
泣く子も黙るブルー・チアーのファースト・アルバムである。そして、このアルバムは世界で初めてのヘヴィ・ハード・ロック・アルバムである。エディ・コクランの名曲〝サマータイム・ブルース〟を大胆なアレンジでヘヴィ・サイケデリック化させた彼らのヴァージョンは1968年、全米で大ヒットを飛ばした。以後'71年まで6枚のアルバムを発表している。後期のブルー・チアーは、そのサウンドを徐々にグッド・オールド・アメリカン・ミュージックへと変化させており、これらも興味深いアイテムである。また、彼らは'70年代後半に突如復活し、ニュー・アルバムをリリース、以前からのファンはもちろん、若いヘヴィ・メタル・キッズまで魅了した。現在は活動の場をドイツへ移している。（松谷）



THE 13TH FLOOR ELEVATORS
Easter Everywhere

LP/Internatinal Artists No.5 '67年
CD/Coll'bles 553

マリファナのMがアルファベットの13番目の文字であり、アメリカのビルディングに存在しない13階フロアをヒントに名付けられたサーティンス・フロア・エレヴェーターズは現在でも未発表音源のリリースが絶えない伝説のサイケデリック・バンドである。1969年までに4枚のアルバムをリリースしている彼らの最もアシッドなアルバムが、デビュー・アルバムと本作／セカンド・アルバムである。ミディアム・テンポの曲を中心としたこのアルバムの溶け具合はスゴイ。ガレージ・ロックン・ロールをベースにしたファーストも初心者向けではないがサイケデリック・マスト・アイテムである。尚、中心人物のロッキー・エリクソンは現在もテキサスをベースに奇怪なアシッド・ミュージックを発表している。（松谷）



THE VELVET UNDERGROUND
White Light / White Heat

LP/Verve 5046 '67年
CD/Verve 825119-2
/ポリドール POCP 1842

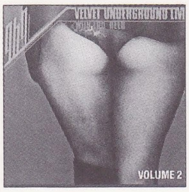
ポップ・アートのアンディ・ウォーホルのプロデュースにより、女性ヴォーカリストとしてニコをフィーチャーし、1967年バナナのジャケットでデビューしたヴェルヴェット・アンダーグランド。本作はその9ヶ月後にリリースされたセカンド・アルバム。アンフェタミン・ソングのタイトル曲でスタートしラストの〝シスター・レイ〟での執拗な揺さぶり。ヴェルヴェッツの歪んだ崩壊寸前のロックン・ロールは、たちまち分厚い音の壁と化し、リスナーの四方を固め外部との接触を遮断してしまう。これほど暴力的なトリップ・アルバムもめずらしい。本当の意味でのヘヴィ・メタル・サウンドであり、とても美しいアルバムである。ヴェルヴェッツの全アルバムをスイセンする。（松谷）



THE VELVET UNDERGROUND
The Velvet Underground

LP/MGM：SE 4617 '69年
CD/Verve 815454-2
/ポリドール POCP 1843

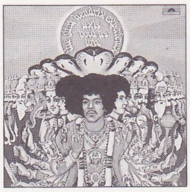
ジョン・ケイルが脱退し、新作にダグ・ユールをベース・プレイヤーとして迎えたサード・アルバム。トロける様なソフト・バラード〝キャンディ・セッズ〟で幕をあける本作は、まるでフォークを聞いているようなムーディーなアルバムである。そして、ここで聞かれる静かで穏やかなクール・トリップは、ニューヨークという都市だけが持つ独特のものでもある。このアルバムの時点で、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドは、既に向こう側へ辿り着いていた。その後、彼らは'70年、アトランティックからヒット・ソングの詰ったロックン・ロール・アルバム「ローディド」を発表するが、グループの中心人物ルー・リードは、その発売を待たず脱退してしまう。（松谷）



THE VELVET UNDERGROUND
1969 The Velvet Underground Live

LP/Mercury SRM2-7504 '74年
CD/Verve 823721-2
/マーキュリー PHCR 4150/4151

'69年のダラスとサン・フランシスコでのライヴをソースに編集された2枚組アルバム。収録されているナンバーは、ヴェルヴェッツのオリジナル・アルバムからと後にルー・リードのソロ・アルバムで登場する曲やスタジオ盤未収録の未発表曲やオリジナル・ヴァージョンなどである。このアルバムで、独特の倦怠感を伴った彼らのロックン・ロールはさらにリラックスしたフリーク・アウトを展開しており、後にも先にもこんなに淡々としたライヴ・アルバムは聞いた事がない。初心者向けでは決してないが名盤である事に間違いない。またCD化の際に、Vol.1、Vol.2と分かれて発売されたが、嬉しい事にそれぞれのCDにボーナス・トラックとしてこのアルバム録音当日のテイクらしい未発表テイクがプラスされている。（松谷）

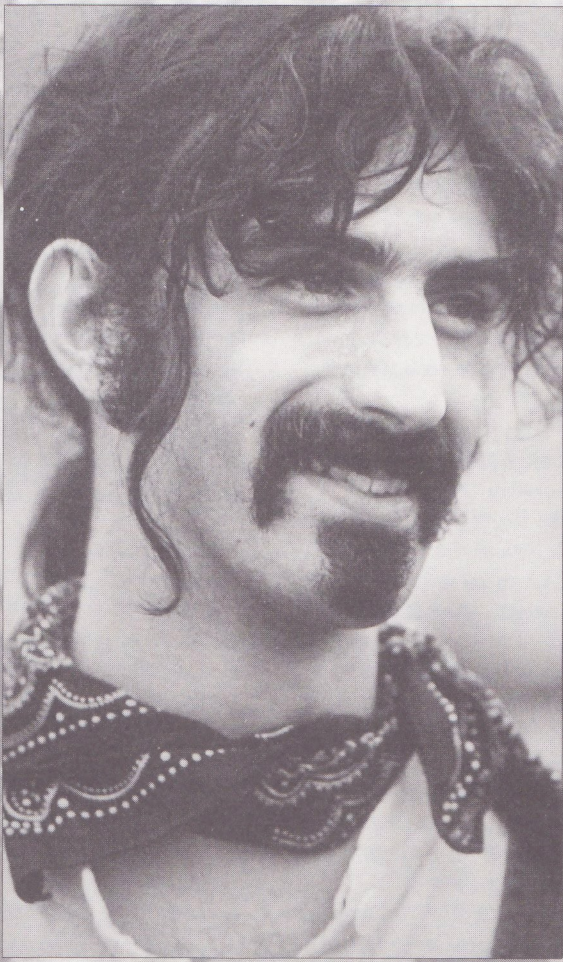


JIMI HENDRIX EXPERIENCE
Axis : Bold As Love

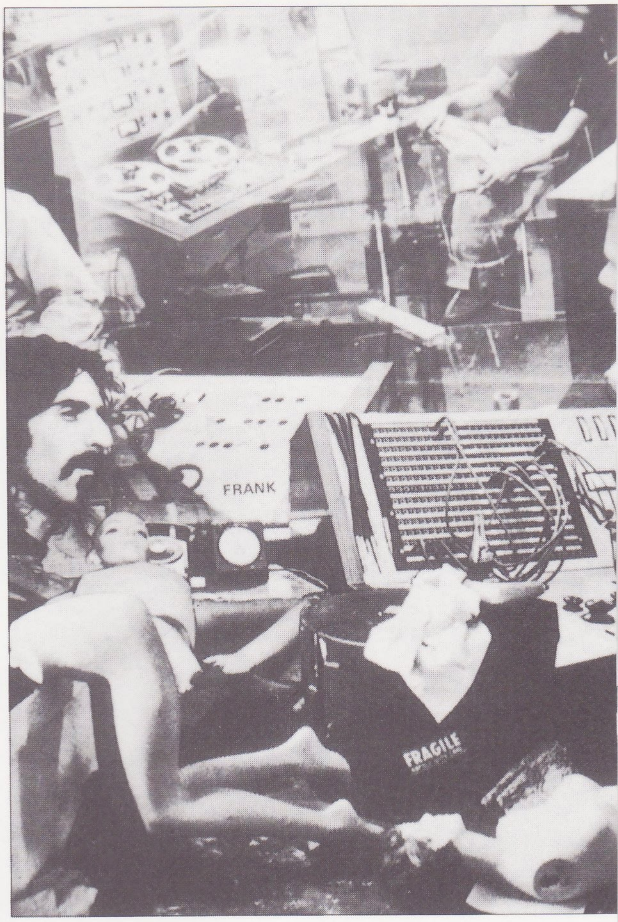
LP/Reprise RS 6281 '67年
CD/Warner 6281-2
/ポリドール POCP 2020

ジミ・ヘンドリックスは彼の才能が絶頂期にさしかかろうとした1970年この世を去った。彼の作品は全てが名盤でありサイケデリックの全てが含まれている。黒人特有のしなやかで弾力のある彼のギター・プレイは、時にワイルドに、切なく、ブッ飛んでいて、そしてとびきりエロティックだ。俗にいう3大ギタリスト（クラプトン、ベック、ペイジ）などとは次元の違う話で、彼こそクリエイティヴなミュージシャン（職人ではない）で、最後までプログレッシヴ／サイケデリックであった。もし彼が存在しなければ、グルグルもタンジェリン・ドリームも、アシュ・ラ・テンペルも生まれなかったろう。否、サイケデリックも生まれなかったかも知れない。基本中の基本であり、全てである。因にこのアルバムはセカンド。（松谷）

FRANK ZAPPA
&
THE MOTHERS
OF
INVENTION



文●岡田敏一



ロック、ジャズ、黒人音楽から、クラシック、現代音楽に至るまで、あらゆるジャンルの音楽を駆使して前人未到・空前絶後の音世界を構築し続け、ジャーナリストの視点であらゆる権威を「笑い」でブッた切った偉大な男。'93年に52歳で亡くなるまで、真の「前衛」であり続けたナイスオヤジ。世に送り出した作品は60作以上とロック音楽の世界ではけた外れに多作なのだが、恐ろしいことに駄作は一枚もない。ビートルズを越える20世紀最大にして最高の音楽家。それがフランク・ザッパである。

1940年12月21日、フランク・ヴィンセント・ザッパは、米国・メリーランド州ボルティモアに生まれた。ロスに引っ越した高校生の頃からドゥー・ワップなどのR&Bに熱中。ストラヴィンスキーやC・ナンカロウ、E・ヴァレーズ、P・ブーレーズといったクラシック、現代音楽の虜になり、バンド活動も始めた。

'64年、レイ・コリンズの誘いで彼のバンド「ソウル・ジャイアンツ」にギタリストとして加入し、バンド名も「マザーズ」に。サイケデリック旋風が吹き荒れる'65年、MGMレコードの名プロデューサー、トム・ウィルソンのおかげで同レコードと契約。バンド名をマザーズ・オブ・インヴェンション(以下MOI)と改名し、'66年「フリーク・アウト」でデビューを果たす。

詳細はアルバム・ガイドを読んでいただくとして、1stでありながら2枚組というこの作品には、冒頭で述べたザッパの音楽の特徴や、表現方法のすべてが提示されている。始まりであるとともに、辿り着くべき目標でもあった。この作品から四半世紀以上に及ぶザッパの創作活動が始まった。

MOIの初期の作品は、ザッパの全活動期間中で、音作り、歌詞とも最も攻撃的かつ前衛的で、風刺と皮肉と笑いに満ち満ちていた。「アブソリュートリー・フリー」('67年)の〝ブラウン・シューズ〜〟では、ザッパのすべての音楽的ルーツと、批判精神がたたみ掛けてくように迫ってくる。「ウィ・アー〜」('68年)では、「ラヴ&ピース」の御旗のもと「みんな一緒になろうよ」的な安直なメッセージを繰り返すヒッピー文化に一撃を食らわせた。MOIの曲をまともにかけないラジオ曲に対しては、イカしたR&B(ドゥー・ワップ)のパロディー「クルージング・ウィズ・ルーベン〜」('68年)でやり返した。

さらに「ホット・ラッツ」('69年)ではギタリストとしても別格となったうえ、コンポーザーとしてはビートルズをも追い越し、ジャズ、クラシックの巨匠のレベルに迫っていた。「ランピー・グレイヴィ」('67年)や「アンクル・ミート」('69年)、「バーント・ウィニー〜」('70年)や「いたち野郎」('70年)では、執ようなカット・アップやテープ・コラージュにより、緻密な曲と即興演奏が見事に調和した。「いたち野郎」を最後にMOIは解散、マザーズが誕生した。

元タートルズのフロ&エディを迎えたことで「チャンガの復讐」('70年)ではヴォーカル面が強化され、同時期のライヴ盤「フィルモア・ライヴ」('71年)と「ジャスト・アナザー〜」('72年)では、ヴォードヴィル調のエンターテインメント・ショーが展開された。

だが、この時期はザッパにとって受難続きだった。映画「200モーテルズ」を製作、同名のサントラ('71年)を発表するが、コンサートのキャンセルによる訴訟などゴタゴタが続いた。この作品はザッパ本人が版権を取り戻せなかったため、現在、ザッパの公式作品のなかで唯一、CD化されていない。

さらに同年、スイス・モントルーで公演中、会場が火事になり、すべての機材を失う。D・パープルが〝スモーク・オン・ザ・ウォーター〟で、この火事のことを歌ったのは有名だ。そのうえザッパは、この直後のロンドン・レインボウ・シアターでの公演中、ステージに駆け上がってきた観客にオーケストラ・ピットに突き落とされ、左足を骨折する重傷を負った。これらのトラブルがもとでフロ&エディーとも決別。新たにビッグ・バンド編成によるジャズ・ロックの傑作「ワカ・ジャワカ」('72年)、「グランド・ワズー」('72年)を発売した。

そして'73年。マザーズの快進撃が始まった。'60年代の突き刺すような社会批判や風刺はやや弱まった代わりに、演奏力や録音・演奏技術が驚異的に向上した。ポップさと社会批判、ユーモアのバランスが見事な「オーヴァーナイト・センセーション」('73年)と「アポストロフィ」('74年)は米国で大ヒット。勢いに乗り、ライヴ盤「ロキシー&エルスウェア」('74年)と、マザーズ時代の大傑作「ワン・サイズ・フィッツ・オール」('75年)発売。「ワン・サイズ〜」では、各地のライヴ・テイクを見事な編集作業で難無くつなぎ合わせるなど、その後のザッパのレコーディング・スタイルの基礎が固まった。バンド名をマザーズからザッパ・バンドに改名し、C・ビーフハート参加の「ボンゴ・フューリー」('75年)、「ズート・アリュアーズ」('76年)を発売した。

'77年、自身のレーベル「ザッパ・レコード」を設立。第一弾として4枚組のボックス・セット「ラザー」をリリースする予定だったが、発

売元のワーナー・ブラザーズが難色を示し、ご破算に。ザッパは全曲をラジオで流すという報復措置に出た。

ワーナーは何と、ラザーを4作品にバラ売りした。「ザッパ・イン・ニューヨーク」('78年)、「スタジオ・タン」('78年)、当初、ホット・ラッツ3という題名だった「スリープ・ダート」('79年)そして「オーケストラ・フェイヴリッツ」('79年)だが、ライヴ盤「ザッパ・イン〜」以外の3作品はザッパの許可無しで出た。おまけに「ザッパ・イン〜」も英・伊盤の初回プレス分以外は、一部の曲やザッパのしゃべりの部分が勝手にカットされた。

結局、ザッパ・レーベル第1弾として発売されたのが、最高傑作の呼び声も高い「シーク・ヤブーティ」('79年)だ。数カ月に及ぶ入念なリハーサルを積んだ超絶テクのメンバーによるライヴ音源に、スタジオでオーバー・ダブを重ねるというザッパ独自の創作コンセプトがこの作品で完成、頂点を極めた。ところが、そのわずか半年後に「ジョーのガレージ」3部作をリリース。ザッパの底力をまざまざと見せつけた。この後、ザッパ・レーベルに代わる自主レーベル、バーキング・パンプキンを設立。大手レコード会社から一切制約を受けない創作活動を貫くことが可能になった。

ザッパは'60年代から「私の編集テクニックは作曲の延長だ」と言っていたのは有名だが、この頃は「私の目標は、オーバー・ダブなしのライブ一発録り『スタジオ盤』を作ることだ」と言っていたらしい…。凡百のミュージシャンでは、こんなブッ飛んだ発想は出てこないだろう。

そのため、ザッパ・バンドはロック界最強の超絶テク集団と化し、超一流ミュージシャンの養成学校の様相を呈した。門下生の顔触れをみると、ギターはE・ブリュー、S・ヴァイ、W・ククルロ、keyはG・デューク、E・ジョブソン、drはE・ダンバー、T・ボジオ、C・トンプソン、V・カリュータ…と、壮々たる顔ぶれだ。

'80年代に入っても、妥協を許さないザッパの創作意欲はとどまるところを知らなかった。'81年にはギターソロだけで構成した3枚組「黙ってギターを〜」、必殺ライヴ「ティンゼル〜」、レーガン政権やヤッピー、宗教右翼を批判し、ゴスペルに乗せてキリスト教を茶化した大傑作「ユー・アー〜」を発表。「黙ってギターを〜」は'88年に続編も出た。

'82年には「シップ・アライヴィング〜」、'83年には「ザ・マン・フロム〜」、「ベイビー〜」、「ロンドン・シンフォニー」の2部作、'84年にはP・ブーレーズ指揮のFZ作品「ザ・パーフェクト」、マザーズ結成20周年記念の「ゼム・〜」、3枚組の超過激ミュージカル「シング・〜」と多彩な作品の発表が相次ぐ。

'85年には、ロックの歌詞検閲などの動きに対抗すべく「ミーツ・ザ・マザーズ〜」を発表。同時に傑作ライヴ「ダズ・ユーモア〜」で笑わせた。'86年にはシンクラヴィアによる自動演奏「ジャズ・フロム〜」で物議をかもした('88年グラミー賞受賞)。この頃から過去の作品のCD化が始まる。自らの死を覚悟するかのように…。

'88年、米大統領選に対するザッパの決意表明である「ブロードウェイ・ツアー」を開始。ツアーの模様は「ブロードウェイ・ザ〜」('88年)、「ザ・ベスト・バンド」('91年)、「メイク・ア〜」('91年)に収録。自分の海賊盤を自ら発売した(!)「ビート・ザ・ブート」シリーズ('91、'92年)も話題を呼んだ。

並行して、'88年〜'91年には過去のライヴの集大成「オン・ステージ」シリーズ(全6作)をリリース。貴重なライヴ音源「プレイグラウンド〜」('92年)と「アヘッド〜」('93年)も登場した。しかし、ザッパの体はガンに蝕まれていた。新作ライブ「イエロー・シャーク」リリース後の'93年暮れ、ついに帰らぬ人となったが、翌年「シヴィライゼイション〜」をリリース。未発表作発売の計画もある。

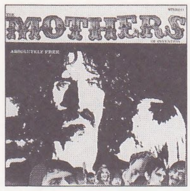
ザッパの曲には下ネタが多いが、これは自分の作品(考え)を多くの人に理解してもらうため、わざと視点を低くした結果ではないか。大上段に振りかぶり、上から見下ろすように愛だの平和だのと説教するのではなく、常に低い視点から社会を批判・風刺し、あらゆる権威を笑い飛ばしたザッパ。彼のこうした批判精神こそ、ロックそのものである。





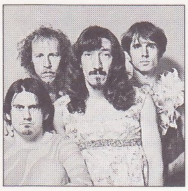
FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
Freak Out
LP/Verve V 5005 '66年
CD/Rykodisc RCD 40062
/ビデオ・アーツ VACK 5101

8年前、アメリカ史研究室に在籍していた俺が卒業論文のテーマに選んだのが《「フリーク・アウト」というアルバムを通して、ザッパが見たアメリカ'60年代》という素敵なものだった。4ヶ月間、一日に最低3回は聴いていたこの傑作をそれ以降で耳にしたのは、ザッパの訃報を知らされた夜にウィンストンを喫いながら私的追悼として流した、その一回きりだ。これ程親切なレコードはないし、無邪気なレコードも滅多にない。小難しいアルバム評などに惑わされずに素直に耳を傾け、〝フリーク・アウトするって何?〟という一文を考えて欲しい。アメリカ人はザッパの名を聞くと思わず笑うのだ。ザッパなんてちっとも難しくない。多作で知られるザッパだが2nd以降は本作のヴァリエイションに過ぎない、これが結論。　(星野)



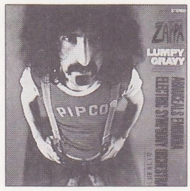
FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
Absolutely Free
LP/Verve V 5013 '67年
CD/Rykodisc 10093
/ビデオ・アーツ VACK-5111

ザッパの楽曲の特徴である、変拍子に乗せてリズムやテンポを複雑かつコロコロ変える試みは今作から始まった。カット・アップ、テープ・コラージュを繰り返し、敬愛するE・ヴァレーズ、C・ナンカロウなどの現代音楽から、ストラヴィンスキー、ビーチ・ボーイズ、テレビのテーマ・ソング、R&B、果ては雑音に至るまで、あらゆる音をポップ・アートのように切り張りして作り上げた音楽は、聞き手をことごとく挑発し、自由の国・アメリカと、ナンセンスなアメリカン・ドリームをあざ笑う。ザッパの音楽のルーツがよく分かるぞ。〝ブラウン・シューズ〜〟の出来は秀逸。〝プラスチック・ピープル〟に代表される本作でのザッパの訴えは切実だが、最後にはやっぱり笑ってしまう。CD化に際して二曲を追加収録。　(岡田)



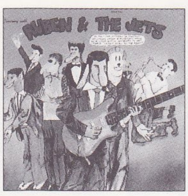
FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
We're Only In It For The Money
LP/Verve V 5045 '67年
CD/Rykodisc 40024
/ビデオ・アーツ VACK-5104

欧米で最も高評価を得ている作品。フランツ・カフカの「流刑地から」を読んでから聞け、との難しい指示がある本作は、当時の米・サンフランシスコを席捲したラヴ&ピースに代表されるヒッピー文化の安易な理想を豪快に笑い飛ばした。当時の若者文化の象徴だったビートルズの「サージェント〜」を標的に選び、徹頭徹尾パロディー化することで「ラヴ&ピース?。寝ぼけたことをぬかすな」とバッサリ切り捨てた訳だ。ザッパにしてみれば、ビートルズでさえも、タイトル通り金儲けしか頭にない鼻持ちならない「権威」にすぎなかった。ビートルズだろうがずうとるびだろうが、関係なかった(訳ないか)。どの曲もすんなり耳に入る。時代背景を勉強して、歌詞をしっかり読んで聞いてちょうだい。　(岡田)



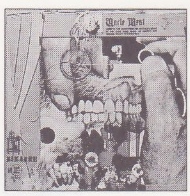
FRANK ZAPPA
Lumpy Gravy
LP/Verve V 8741 '68年
CD/Rykodisc RCD 10504
/ビデオ・アーツ VACK 5105

ザッパなんて難しくないという持論の俺も、さすがに初心者には勧められない初ソロ作。ただし「フリーク・アウト」から「いたち野郎」までを聴き込んだ人には、本作ほど面白いアルバムもないはずだ。これ程遊び心に満ちた作品もなく、後のアルバムに登場する曲のフレーズが一瞬聴けた時の喜びは病人ならお分かりいただけるだろう。喋りもやたらと多いが、音楽とは楽器を駆使することでなく、鼻歌や手拍子がベースであり、それが頭ではなくて皮膚感覚で判る人は、編集の鬼〞たるザッパの手腕がいかんなく発揮されたサウンド・コラージュの大傑作も、チベット密教の読経やピグミーの歌声も同じに響くはずだ。音楽なんて考えちゃいかん、楽しんで作った俺の音をたっぷり楽しんでくれ、そんなザッパの声がする。　(星野)



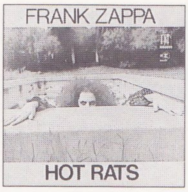
FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
Crusing With Ruben & Jets
LP/Bizarre/Verve V 65055 '68年
CD/Rykodisc RCD 10063
/ビデオ・アーツ VACK 5118

'68年1月ニューヨーク録音。ジャケットには「このアルバムを製作したのは、この種の音楽が本当に大好きだからだ」というザッパ自らのコメント。果たしてその中身は、ラジオ局には全く見向きもされなかったそれまでの〝難解な音楽〞とは打って変わって、ドゥー・ワップをメインとした'50年代R&Bの大特集!　マザーズのルーツともいえる音楽への愛情が素直に表現された傑作であると同時に、ヒッピーやサイケデリックといった、当時の流行りものに対しての鋭い批判をも兼ね備えている。複雑なハーモニーやコード展開を随所に盛り込みながら、それが無理なくなじんでいることに驚く。なお、CD化に際してドラムとベースが差し替えられ物議を醸した。'93年承認マスター使用CDも同様だが、音質はさらにアップ。　(工藤)



FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
Uncle Meat
LP/Bizarre MS 2024 '69年
CD/Rykodisc 10064
/ビデオ・アーツ VACK-5109/10

同名映画のサントラとして製作されたが、MOIの最高作というより、ロック、ジャズ界でも空前絶後の一枚に数えられる。「ランピー・グレイヴィ」とともに、ファウストやカンといったジャーマン・ロック勢をはじめ、アヴァンギャルドといわれる音楽に与えた影響は計り知れない。あくなきザッパの実験精神が、I&R・アンダーウッド、D・プレストンら各メンバーの才能と核融合を起こして生まれた「前衛」の完成形。それらにしても、シークェンサーはおろか、リズム・マシンもない時代に、冒頭のテーマ曲のような一分も隙もないアンサンブルの楽曲がレコーディングされたことは驚きだ。ライヴでおなじみ〝キング・コング〞は何度聞いても身震いする。CDにはオリジナル・アルバム未収録曲3曲が加わった。　(岡田)



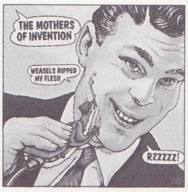
FRANK ZAPPA
Hot Rats
ＬP/Bizarre RS 6356　'69年
CD/Rykodisc 10066
　/ビデオ・アーツ VACK-5102

ギタリスト・ザッパの才能（音楽センスや作曲・編曲能力）が一気に開花したジャジーな一枚。英国では評論家受けも良かったらしく、クリムゾンの「宮殿」を抜いて英国チャートのトップに輝いた。CD化に際して大幅なデジタル・リミックスが加わっているため、アナログ盤と聞き比べることをお勧めする。〝ウィリー・ザ・ピンプ〟ではC・ビーフハートがヴォーカルをとっているが、他は全曲インストでザッパのギターが堪能できる。プレーの水準は四半世紀以上を経た現在でもかなり高い。ザッパは本作でギタリストとしても別格になった。フュージョンの先駆け的な評価が目立つ本作だが、そんなイージーな内容ではありません。〝ピーチズ〜〟は世界初のミニ(シングル）CDとして店頭に並んだっけ。（岡田）



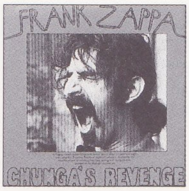
FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
Burnt Weeny Sandwich
ＬP/Bizarre/Reprise RS 6370　'69年
CD/Rykodisc RCD 2-74289
　/ビデオ・アーツ VACK 5081

始め①と終わり⑨がドゥー・ワップ。その間に挟まれたインスト7曲。即興性に富んだオリジナル・マザーズの演奏が、スリリングで刺激的だ。特に18分強に及ぶ大作⑧では、イアン・アンダーウッドのピアノ、そしてシュガー・ケイン・ハリスのヴァイオリン・ソロ等、彼らがひとつの極みに到達した瞬間を完璧に捕らえている。またこのアルバムではザッパは、'68〜'69年の音源を使用しながら、スタジオ・ワークにおける画期的な試みを披露した。例えば⑥は、スタジオでのレコーディングに、ライヴ録音のギター・ソロをオーヴァー・ダビングして製作されたものである。このようなスタジオ／ライヴ音源を自在に編集する発想は、ザッパにとって非常に重要な意味をもつ。マニアの間では、隠れた名作として評価が高い。（工藤）



FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
Weasels Ripped My Fresh
ＬP/Bizarre/Raprise RSLP 2028
　'70年
CD/Rykodisc RCD 10504
　/ビデオ・アーツ VACK 5105

「いたち野郎」だ。オリジナル・マザーズ解散記念アルバムで'67〜'79年に録られたライヴ／スタジオ音源を巧みに編集した作品である。〝マイ・ギター〟のようなＲ＆Ｒや〝オー・ノー〟のようなポップスから、アルバムを締め括る垂れ流しのノイズまで全てが痛快だ。中でも俺の心を舐め回してくるのが〝エリック・ドルフィー・メモリアル・バーベキュー〟。「フリーク・アウト」の内ジャケにも名前が載っていた、音楽的に真の意味で〝フリー〟の境地に達しえた唯一人の地球人（だと乱聴してきた俺は確信している）である天才サックス奏者ドルフィーに捧げられた？名曲は、ミンガス的だったり、アイラー的だったり、カーラ・ブレイと化したりと変幻自在のジャズだ。ジャズとは〝ムッチャ、気持ちＥ〟という意味じゃ。（星野）



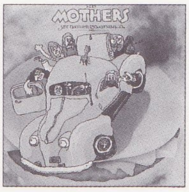
FRANK ZAPPA
Chunga's Revenge
ＬP/Bizarre/Reprise MS 2030　'70年
CD/Rykodisc RCD 10164
　/ビデオ・アーツ VACK 5029

'70年の母の日、ザッパのオーケストラ作品がロサンゼルス・フィルによって演奏された。指揮はズービン・メーター。コンサート終了後、元タートルズのフロー＆エディーが楽屋のザッパを訪ね、ここに俗にいう〝タートル・マザーズ〟が誕生。実は'69年のオリジナル・マザーズ解散後、ザッパはその名も〝ホット・ラッツ〟というバンドを率いて小規模にライヴ活動を続けていた。メンバー的には、本作のリズム・セクションと思って間違いないが、ヴォーカルをとれるヤツがいなかった。そこへタイミング良く、口の達者な二人組が目の前に現われたわけだ。本作の約半数を占めるヴォーカル曲が「200モーテルズ」の布石であったり、例の掃除機が登場したり、後のプロジェクトとの関連が興味深い。（工藤）



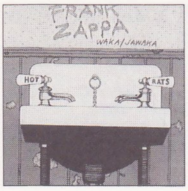
THE MOTHERS
Fillmore East, June 1971
ＬP/Bizarre/Reprise MS 2042　'71年
CD/Rykodisc RCD 10167
　/ビデオ・アーツ VACK 5121

フロー＆エディーをフロントに立たせた、新生マザーズのステージが楽しめるライヴ盤。'71年の６月５日と６日に、２ステージずつ行われたショウの模様を編集したもので、共演したジョン・レノンが「サムタイム・イン・ニューヨーク」で同じ音源を使っていることは有名だろう。①⑥⑩といった代表曲の再演が聴けるし、タートルズの大ヒット⑧も出てくるし、メンバー全員がいい意味のエンターテイメントに徹している。硬派のファンからは、客に媚びているようだ、と批判されることもあるが、フロントの二人のやりとりから発する音楽産業に対しての痛烈な皮肉、笑いを武器にした徹底攻撃は、この時期のマザースならではのもの。アナログ盤が出、当時は、海賊盤をパロディ化したジャケットにも度胆を抜かれた。（工藤）



THE MOTHERS
Just Another Band From LA
ＬP/Bizarre/Reprise MS 2075　'72年
CD/Rykodisc RCD 10161
　/ビデオ・アーツ VACK 5122

'71年８月７日、UCLAで行われたコンサートを収録した〝タートル・マザーズ〟のライヴ第２弾。誰でもまず興味を持つのは、前作のフィルモアから２ヶ月後のライヴの、いったい何がそんなに気に入ってレコード・リリースしたかということだろう。それは、24分47秒に及ぶ演奏時間のためアナログ盤ではＡ面すべてを使って刻まれていた、ロック・ミュージカル〝ビリー・ザ・マウンテン〟①を聴けば納得するはずだ。主題は徴兵制度反対だろうが、まさに絶好調のフロー＆エディの巧みなシャベリ、そして、数多くの経験を積んでさらに成長したバンドの好サポートによって、ザッパも十分満足できるステージをものにしている。また、②⑤のようなデビュー時代の名曲のライヴ演奏が聴けるのも大きな魅力だ。（工藤）



FRANK ZAPPA
Waka/Jawaka

L P/Bizarre/Reprise MS 2094　'72年
CD/Rykodisc RCD 10094
/ビデオ・アーツ VACK 5123

'71年12月、悪夢のロンドン公演。演奏中に暴漢に襲われ、ステージからオーケストラ・ピットに転落し全治6ヶ月の重傷。しかし、それでも創作意欲の旺盛なこの重病人は、入院中も精力的に作曲活動を行い、退院後ギターが弾けるようになるまで回復すると、さっそく独自の人脈で集めたミュージシャンによるレコーディングを開始し、アルバム2枚を発表する。身体が自由に動かないザッパを助けたのは、トランペット奏者のサル・マルケスである。彼はまた、驚異的な多重録音を敢行、17分22秒に及ぶオープニング・ナンバーをはじめとする、この分厚い、重厚なサウンドに重要な役割を果たした。コンセプト的に「ホット・ラッツ」を追随した、ビッグ・バンド形式による縦横無尽な演奏に圧倒される。　(工藤)



FRANK ZAPPA & THE MOTHERS
The Grand Wazoo

L P/Bizarre/Reprise MS 2093　'72年
CD/Rykodisc RCD 10026
/ビデオ・アーツ VACK 5124

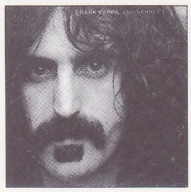
前作から5ヶ月後にリリースされた続編。すばらしいイラストを書いたカル・シェンケルの名前が出てくる②を除いて、すべてインストゥルメンタル。ジャケットに載った不思議なストーリーを再現する、SF仕立てのミュージカルともとれるだろうが、そのビッグ・バンド・オーケストレーションには、ただ驚嘆するのみ。この時期のザッパはジャズ寄りと言われているが、ミュージシャンのソロよりも、曲全体のアンサンブルに重点を置いた、いわゆる〝エレクトリック・チェンバー・ミュージック〟の傑作として評価は高い。ロサンゼルスのパラマント・スタジオで、車椅子に座ってギターを弾くザッパの姿を想像するだけでも、背筋にゾクッとくるものがある。なお、最終承認盤では、1曲目と2曲目が入れ替えられた。(工藤)



FRANK ZAPPA & THE MOTHERS
Overnite Sensation

L P/Discreet MS 2149　'73年
CD/Rykodisc 40025
/ビデオ・アーツ VACK-5107

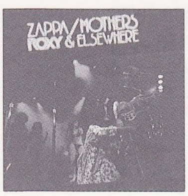
ザッパはその時々のメンバーの技量に合わせて作る。ヴォーカリストのオーディションをしたものの良い人材が見つからず、自分が初めてメインでヴォーカルを取るはめになったためか、この作品では誰にでも歌いやすいポップな曲が多く、セールス的にも成功。マザーズ快進撃のきっかけを作り出した。しかし、歌詞の方はポップどころか、TVによる大衆操作の危険性を予見した〝アイム・ザ・スライム〟をはじめ、痛烈な社会批判、お笑い、エロが一緒くたになって、うーん、ナイス・テイスト。この作品はもっともっと評価されるべきだ。なお、スペイン盤のみ〝ダイナ・モー・ハム〟の代わりに、アルバム「グランド・ワズー」から〝イート・ザット・クエスチョン〟を収録。　(岡田)



FRANK ZAPPA
Apostrophe(')

L P/Discreet DS 2175　'74年
CD/Rykodisc 40025
/ビデオ・アーツ VACK-5108

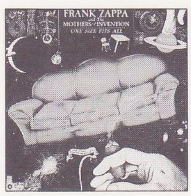
基本的には前作のスタイルを踏襲した作品。エスキモー人の母親が子供に「黄色い雪は(ハスキー犬がオシッコした雪だから)食べちゃだめ」と説教する何かよく分からない曲〝ドンド・イート・ジ・イエロー・スノー〟がシングル・カットされ、全米のラジオ曲でブレイクしたおかげで、ビルボード誌のアルバム・チャートで10位を記録するなど、ザッパのアルバム中、最も売れた一枚となった。ライヴでの定番曲〝コズミック・デブリス〟は、皮肉の利いたザッパの歌詞のなかでも超ナイス。ピアノのイントロがもの悲しい〝アンクル・リーマス〟でセンチメンタルな気分にさせといて、続くラストの曲は〝臭い足〟だとさ(なめてんのか?)。元クリームのジャック・ブルースがベースで参加。だから何なの?。　(岡田)



FRANK ZAPPA & THE MOTHERS
Roxy & Elsewhere

L P/Discreet DS 2202　'74年
CD/Rhino 74241-2
/ビデオ・アーツ VACK-5082

マザーズ結成10周年を記念した最強メンバーによる壮絶ライブ。ザッパを中心に、C・トンプソン(ds)、G・デューク(key)、R・アンダーウッド(perc)らががっちりスクラムを組み、文字通りパーフェクトな演奏を披露している。特に、火花が飛びそうな変拍子に合わせて主要メンバーがユニゾンを決めまくる〝ヴィレッジ~〟から〝ドンチュー・エバー〟のメドレーでの異様な緊張感と疾走感はマザーズしか出せない。ところが同時期のライヴを収めた「オン・ステージVol.2」('88年発売)では、このメドレーがさらにスピード・アップ。ロック史に残る名演となっている。P・コリンズが本作でのC・トンプソンのプレイを聞いてブッ飛び、彼をジェネシスのツアー・メンバーに招き入れたといわれる。　(岡田)



FRANK ZAPPA & THE MOTHERS OF INVENTION
One Size Fits All

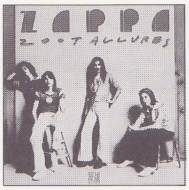
L P/Discreet DS 2216　'75年
CD/Rykodisc 10095
/ビデオ・アーツ VACK-5106

マザーズとして頂点を極めた'70年代初期の傑作。冒頭を飾る名曲〝インカ・ローズ〟だけをみても、ベーシック・トラックがロスのTVライヴで、ギター・ソロだけはフィンランド、ヘルシンキでのライヴと、ややこしさに拍車がかかっているのだが、変質的ともいえるテープ・コラージュなど、常軌を逸脱した編集作業のおかげで、全くフツーに聞こえるから怖い。一聴すると、どの曲もザッパにしては聞きやすくポップだが、めまいがしそうなオチの〝エヴェリン、ア~〟をはじめ、歌詞は皮肉と爆笑が混在していて深いぞ。ライヴではスピード・アップして演奏される〝サン・バーナディノ〟は、かって自身がおとり捜査で逮捕、ムショ入りした体験がもとになっている。ラストの〝ソファNo.2〟には泣ける。　(岡田)



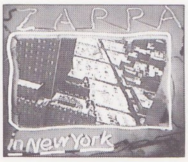
ZAPPA/BEEFHEART/MOTHERS
Bongo Fury
LP/Discreet DS 2234 '75年
CD/Rykodisc 10097
/ビデオ・アーツ VACK-5125

旧友C・ビーフハートを迎え、米テキサスのアルマジロ世界指令本部で行った公演を収録。S・ヴァイが若いころ最もよく聞いたアルバムという。ビーフハート参加ということで、必要以上に大袈裟かつクッサイ表現で形容されている作品だが、大事なこと忘れてないか。初参加の歌って踊れる超人ドラマー、T・ボジオですがな。凶暴かつ繊細、そのうえ正確無比にあれだけの音数を叩きまくるこの人のドラミングは、まぎれもなく本作のハイライト。それにしてもビー君をツアー・メンバーに参加させ、タイトルに名前まで入れたザッパは本当に友達思いだな。でもちゃんとオーディションは受けてもらったらしい。「親しき仲にも礼儀あり」ということか（違うって）。ラストの〝マフィン・マン〟のギターは暴走してます。（岡田）



FRANK ZAPPA
Zoot Allures
LP/Warner Bros DS 2970 '76年
CD/Rykodisc 10160
/ビデオ・アーツ VACK-5126

'76年の初来日直後にリリースされ、当時の日本のファンには思い出深い作品。ザッパのギター曲の最高峰〝ブラック・ナプキンズ〟は大阪公演のテイク。バークリー音大時代にこの曲を採譜し、ザッパに送りつけるという命知らずの暴挙でザッパ・バンドの曲芸（スタンス）ギター担当の座を射止めたのはご存じ我らのS・ヴァイである。おなじみの「拷問～」をはじめ、ほとんどの曲をザッパとボジオの2人で作り上げたためか、ラフな印象は拭えない。ちなみにこの作品には、正規盤とは曲違いのお蔵入りLP2種類（2枚組と1枚組）が存在する。ともに名曲〝スリープ・ダート〟と〝フィルシー・ハビッツ〟などを収録。2枚組の方はテスト・プレスだけだが、1枚物の方は市場にも数枚、出回ったらしい。（岡田）



FRANK ZAPPA
Zappa In New York
LP/Discreet 2D 2290 '78年
CD/Barking Pumpkin D2 74240
/ビデオ・アーツ VACK 5083/4

多作のザッパだが'77年は一作も発表していない。すったもんだがあったのだが、さんざん書き尽くされているのでここでは触れない。さて、今になってもアナログしか買わない人も、本作だけはCDだぜ。UK初回プレスのみで削除されたり編集された曲に加えて、未発表4曲追加だもんね。ブートや地下テープで聴いた'76～'77年のザッパ・バンド（レイ・ホワイト、エディ・ジョブソン、パトリック・オハーン＆テリー・ボジオ）は本当にカッコイイ。本作はそこにブレッカー・ブラザーズやルース・コープランドを加えた特別編成なのだから、もうたまらん。お笑い系ブリブリどファンクからテクニカルなインストまで、この編成でなくては不可能であった、だしは濃密だが口当りはサッパリした高級料理のような作品だ。（星野）



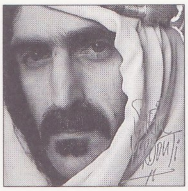
FRANK ZAPPA
Studio Tan
LP/Discreet DSK2291 '78年
CD/Rhino 74237-2
/ビデオ・アーツ VACK-5085

ワーナーがザッパに無許可で出した作品だが、ザッパの才能のすべてを最良の形で表現する一枚となっている。本作を世に送り出したワーナーは偉い。アルバム「ワン・サイズ～」の最強メンバーによるバラエティーに富んで4曲を収録。約20分の大作〝グレゴリー・ペッカリーの冒険〟は、当時、米で流行したラジオ・ドラマの構成や曲調を超絶テクでパロりながら、「やっぱり最後は金やがな」という見事なオチ。楽曲、歌詞、構成、批評性のどれをとっても、この曲の驚くべき質の高さはザッパの全作品の中でも頂点を極めている。他の3曲も最高のジャズ・ロック〝RDNZL〟、'60年代初頭の米・西海岸のサーフィン文化をおちょくった〝海へ行こうよ〟、そして究極の一曲〝ギターと予算不足の～〟と、異常に高水準。（岡田）



FRANK ZAPPA
Sleep Dirt
LP/Discreet DSK 2292 '79年
CD/Barking Pumpkin D2 74238
/ビデオ・アーツ VACK 5086

本人の意志に反したリリース自体には問題があるものの、ファンの間では「ホット・ラッツ3」と呼ばれるほどに評価されているインスト中心のアルバム。日本公演のオープニングでも演奏された①における、イマジネイティヴなフィード・バック・ギターにまず打ちのめされるが、全編を貫いているジャジーな感覚が鋭い。さらにアコースティック・ギター2本で奏でられるタイトル・チューンの奥深さ。聴き込むほどに、その深みにはまっていく。正確なクレジットはないが、録音は「ワン・サイズ・フィッツ・オール」そして「ズート・アリュアーズ」の頃、つまり'74年と'76年あたり。参加したミュージシャンも、この時期のバンド・メンバーである。CD化に際して、②は女性ヴォーカルが入ったテイクに差し替えられた。（工藤）



FRANK ZAPPA
Sheik Yerbouti
LP/Zappa Records SRZ-2-1501
'79年
CD/Rykodisc 40162
/ビデオ・アーツ VACK-5103

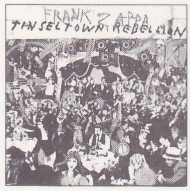
ワーナーとの数々のトラブルをバネに、自らの名を冠したレーベルを設立。その記念すべき第一弾として発売されたのが本作。アルバム「ワン・サイズ～」での常軌を逸脱した変質的録音・編集スタイルがさらに暴走。各地のライヴ音源をつないでベーシック・トラックをつくり、それに幾度もオーヴァーダビングを重ね、完全なスタジオ作品のように仕上げた。本人によると、ライヴでこそ最もエキサイティングな音が採れる、というのが理由らしい……。歌詞はエログロ一色で救いようがないが、演奏力はもちろん、音の構成の緻密さでは比較対象がこの世に存在しない。ヘッドホンで聞くとよりリアルで、すべての音が洪水のように襲いかかってくる。ラストの〝ヨー・ママ〟で、みんな金縛り。（岡田）



FRANK ZAPPA
Joe's Garage Act Ⅰ, Ⅱ&Ⅲ

ＬＰ/Zappa Records　'79年
SRZ-1-1603（Act Ⅰ）
SRZ-2-1502（Act Ⅱ&Ⅲ）
CD/Rykodisc 10060
/ビデオ・アーツ VACK-1527/8

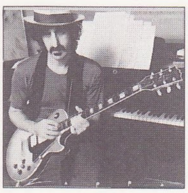
Ｐ・フロイドの「ウォール」、フーの「トミー」、ジェネシスの「ブロードウェー」と並ぶロックオペラの傑作だが、風刺・批評性まで含めたトータルな質の高さでは本作が頭ひとつ抜け出ている。政府が音楽を非合法として取り締まる世界で生きる主人公、ジョーの物語だが、ザッパ自身が名付けた〝パイオニック・ファンク〟をはじめ、Ｒ＆Ｂ、ソウルなど黒人音楽を自分なりに見事に消化し切った高質でポップな楽曲のオン・パレード。頭の中でギター・ソロを弾く想像をしただけで、近所のオバハンに「音、うるさいで」と怒られるくだりをはじめ、本来異常に深く鋭いメッセージが根底にあるのだが、エロのテイストをまぶし、わざとバカっぽくした所がザッパらしい。〝パッカード・グース〟のメアリーの台詞にしびれる。　（岡田）



FRANK ZAPPA
Tinseltown Rebellion

ＬＰ/Barking Pumpkin PW2 37336
'81年
CD/Rykodisc RCD 40166
/ビデオ・アーツ VACK 5129

意外に短命だった〝ZAPPA〟レーベルだったが、さらなる飛躍を目差して設立した〝バーキング・ハンプキン〟において、ザッパはようやく長年の夢を果たすことになる。通信販売等を含めて、ついに思い通りのレコード・リリースを可能としたのだ。その第一弾として、久しぶりにカル・シェンケルのアート・ワークで登場したのが本作である。①を除いたすべてがライヴ録音。スティーヴ・ヴァイが参加して、よりロック色を濃くした'80年後半のアメリカ・ツアーを中心に、⑭⑮といった初期の難曲を再演した'79年のロンドン公演や、客をステージに上げての支離滅裂な「ダンス・コンテスト」⑨を繰り広げる'78年のニューヨーク等、複数のライヴ音源を自在に編集しながら、エンターテイメント性あふれるアルバムとなった。　（工藤）



FRANK ZAPPA
Shut Up'N Play Yer Guitar

ＬＰ/Barking Pumpkin BPR 1111〜1113
'81年
CD/Rykodisc 10028
/ビデオ・アーツ VACK-5112/4

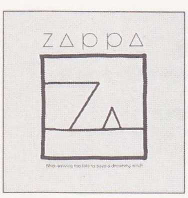
もともと、ハードコアなファンを対象に通販で３枚にバラ売りしていたが、あまりに評判が良いためまとめて正規ルートで売り出された異色作。主に'78年から'80年のライブでのギター・ソロだけで構成された空前絶後のギター・アルバムで、こんなもんを堂々と作って、店で売ることを許されるのはザッパだけである。Ｊ・マクラフリンやＰ・メセニーといったジャズ界の達人にも全く引けを取らないセンスとテクニック。特定周波数の音域だけをブーストさせることで得られるという、あのムチがうねるような唯一無比の音色。ザッパがギタリストとしても孤高の存在であることがいやでも分かる。Ｖ・カリュータ（ds）らリズム隊のプレーも壮絶。ところが'88年に出た続編はこれよりまだ凄いんだから困ったもんだ……。　（岡田）



FRANK ZAPPA
You Are What You Is

ＬＰ/Barking Pumpkin PW 2/37537
'81年
CD/Rykodisc 40165
/ビデオ・アーツ VACK-5130

'70年代のザッパの諸作品は、社会批判より楽曲・サウンド面の発展・充実に重きを置いていたと思われるが、本作では一転、'60年代初期にみられた鋭い社会批判を全面に押し出した。'80年代の〝マネー〟と呼べる超傑作で、発表当時、ローリング・ストーン誌も最高の５つ星を付けた。ヤッピーはもちろん、いわゆるTV伝道師や、聖書を盾に政治への介入をたくらむ宗教右翼の動きなど、当事の米国の社会状況をノンストップで流れるポップな楽曲に乗せて笑い飛ばしている。「お前、自分を何様だと思ってるんだ」と歌うタイトル曲は痛烈。この曲のプロモ・ビデオでは、宿敵レーガン（のそっくりさん）を電気いすで処刑した。〝ダム・オール・オーバー〟は湾岸戦争を予言した曲、との説にも納得させられる。　（岡田）



FRANK ZAPPA
Ship Arriving Too Late To Save A Drowing Witch

ＬＰ/Barking Pumpkin FW38065
'82年
CD/Barking Pumpkin D2 74235
/ビデオ・アーツ VACK 5088

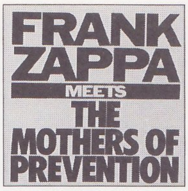
かつての邦題が「ザッパの○△□」、娘ムーンのラップが心地良いヒット曲の日本語タイトルが「エーッ、うっそぉ、ホントー？」、ふざけていてヨイ。今やDAT!!　CDにも興味がない俺だが、本作はLPで話しを進めよう。Ａ面は「ジョーのガレージ」以降、顕著となったヴァイオニック・ファンクの完成型である。ブリブリのファンク・ベースに乗せて〝イヤ、今はダメ（後でゆっくり）〟と裏返った男のオカマ的コーラスに始まり、14歳のムーンが女子高生言葉をまくしたてて青臭い色気を振り撒く２曲は、極悪非道のＰ・ファンクも真っ青!!　Ｂ面はＳ・ヴァイ大暴れのテクニカル・ハード・ロックに始まり、素頓狂なオペラ「娘17売春盛り」に終わるプログレなのだ。最後に一言、ザッパなんてチットモ難しくない。　（星野）



FRANK ZAPPA
Them Or Us

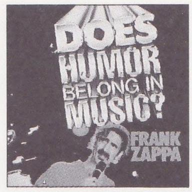
ＬＰ/Barking Pumpkin SVB 074200
'84年
CD/Rykodisc RCD 40027
/ビデオ・アーツ VACK 5131

'50年代R&Bのカヴァー①からスタートする本作には、マザーズ結成20周年を記念して懐かしいゲスト陣が参加。②のリード・ヴォーカルにジョニー〝ギター〟ワトソン、コーラスにはナポレオンの名前。さらに他にも、ジョージ・デューク、ロイ・エストラーダといった仲間たちのクレジット。それにしても、彼らの使い方が尋常でない。また、ドゥイーズルのギター・ソロが聴ける④⑦、アーメットの詩をもとにした⑬等、ファミリーの協力も話題だが、ただの親バカに終わっていないところがサスガだ。'82年ツアーの音源が中心。'80年代のバンド・メンバーの中核となるドラムスのチャド・ワッカーマン、ベースのスコット・チュニスのタイトな演奏が光る。タイトル曲⑫を始め、インストものにおけるザッパのギターにも注目。　（工藤）



FRANK ZAPPA
Frank Zappa Meets The Mothers Of Prevention
L P/Barking Pumpkin ST 74203 '85年
CD/Rykodisc RCD 10023 /ビデオ・アーツ VACK 5117

'85年のザッパは、いつにも増して忙しい時を過ごしていた。当時の米国上院議員夫人たちを中心とする圧力団体〝PMRC〟によるロックの歌詞を検閲し、その結果をステッカーにより表示させる、という動きに対して、敢然と立ち向かっていたのだ。9月に行われた上院公聴会で証言するザッパの姿を見た人も多いはずだが、この時に録音された上院議員たちの発言をコラージュした12分3秒の大作⑨をメインに、この検閲の阻止を目的として緊急発売されたのが本作だ。アナログ発売時、ヨーロッパ盤ではこの曲⑨が①②⑩と差し替えられていた。'93年マスター使用CDでは、もちろんすべてが収録されている。また、ザッパのロック・アルバムにおけるシンクラヴィア使用は、今回が初めてである点も重要だろう。　(工藤)



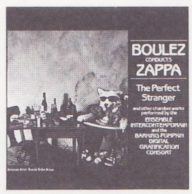
FRANK ZAPPA
Does Humor Belong In Music
CD/EMI CDP 746188-2 '86年 /ビデオ・アーツ VACK 5080

'84年のツアーは、そのほとんどが24チャンネルでデジタル・レコーディングされた。繰り返し再生に耐える技術の発達は、ザッパ独特の編集テクニックにまた新たな可能性をもたらし、後のプロダクションにも大きな影響を与えている。コンセプトはあくまでも、膨大な量の音源からおかしいところを選び出し、それをオーヴァーダビングなしで編集して理想のライヴ・アルバムをものにする、ということだが、本作でも10曲中6曲が、複数の音源をミックスして仕上げられている。アイク・ウィリス、レイ・ホワイトの両黒人ヴォーカルをフロントにして、正確無比な演奏に裏打ちされた、ユーモアたっぷりのステージ。'93年マスター盤ではリミックスされ、より臨場感が出た。同タイトルのビデオとは、収録場所が異なる。　(工藤)



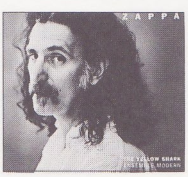
FRANK ZAPPA
The Best Band You Never Heard In Your Life
CD/Barking Pumpkin BPR 7423 '91年 /ビデオ・アーツ VACK 5093/4

大仰なタイトル通り、ホントにこの'88年ツアー・バンドが凄かったことを証明してくれる内容だ。久しぶりにホーン・セクションを従えた、総勢12名によるビッグ・バンドの圧倒的な演奏の中から、お馴染みの代表曲が数多くセレクトされているが、所々に紛れ込んでいるカヴァー・ソングがとんでもない。特にディスク2に入り、ジミ・ヘンドリクスのヒット曲から始まるカヴァー大会は圧巻。さらに最後を締めくくるのが、あの〝天国への階段〟！誰でも知ってるジミー・ペイジのギター・ソロが、ホーン・セクションによって演奏される快感は半端じゃない。観衆を魅了したばかりでなく、ザッパ本人をも大いに満足しているのがよくわかる。本作に続き、続編である「メイク・ア・ジャズ・ノイズ・ヒア」もリリースされた。　(工藤)



FRANK ZAPPA
The Perfect Stranger
CD/Barking Pumpkin D2 72242 '92年 /ビデオ・アーツ VACK 5091

現代音楽界の巨匠ピエール・ブーレーズ指揮、アンサンブル・アンテルコンテムポラン演奏による作品が①②④の3曲。当初ザッパはフル・オーケストラ用の曲をブーレーズに送り指揮を依頼したが、規模を縮小せざるを得なくなり、'81年の1月、パリにて小編成オーケストラのための曲をレコーディング。その3ヶ月後、シンクラヴィアによる4曲の録音。10代の頃から、ストラヴィンスキーやヴァレーズ等をアイドルとしていたザッパらしく、いわゆる現代音楽の作曲家としてのヒラメキが見事に実を結んだ作品集である。「ここに収録された全ての作品は、エンターテイメントとしてのみ意図された。他のいかなる芸術表現とも、混同してはならない」と記しているように、ジャンルを超越したオリジナリティに貫かれている。(工藤)



FRANK ZAPPA
The Yellow Shark
CD/Zappa CDZAP 57 '93年 /ビデオ・アーツ VACK 5100

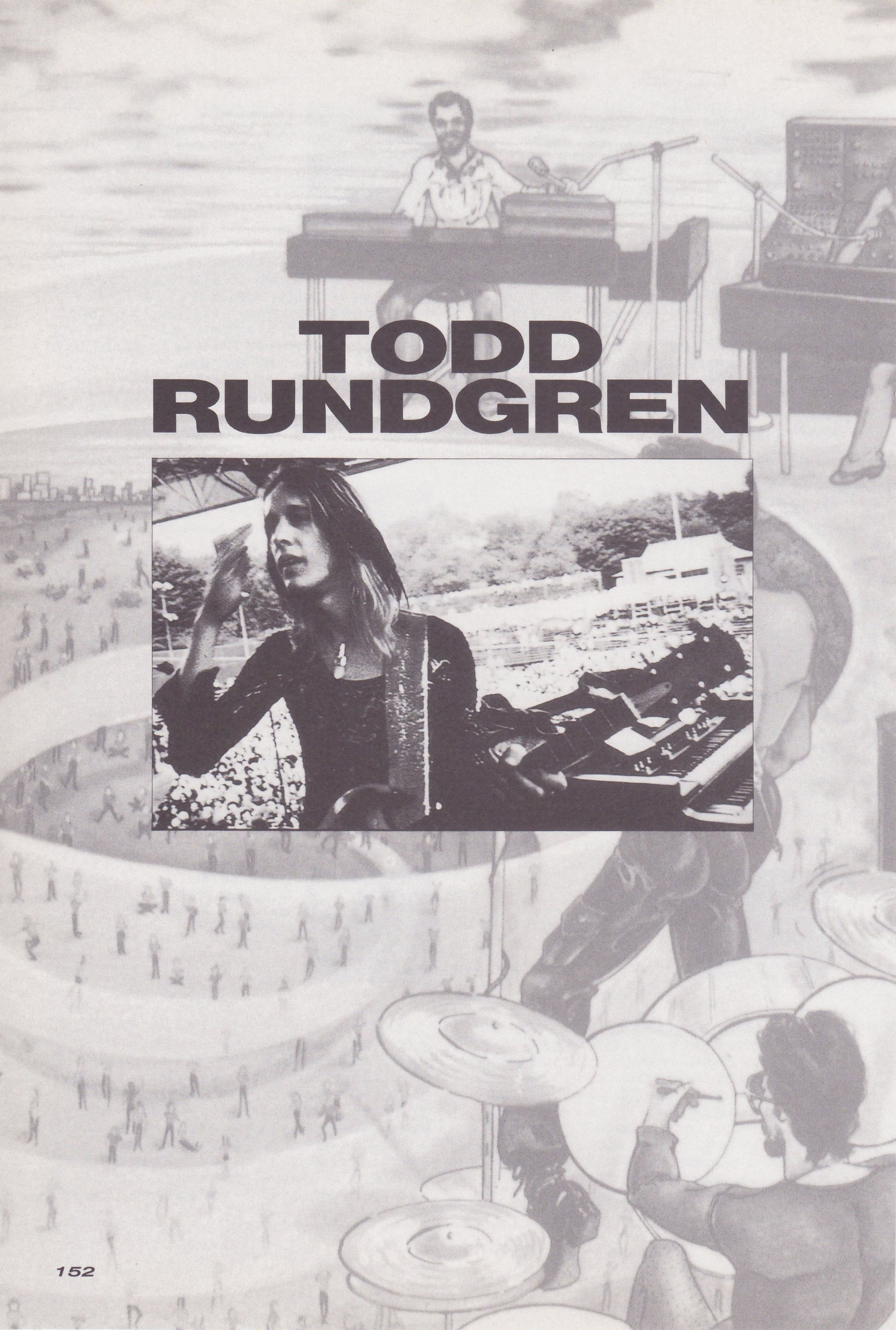
'92年9月ドイツを中心に行われた、生前最後のライヴ録音。この約1年前、フランクフルトに拠点を置く現代音楽演奏集団〝アンサンブル・モデルン〟との出会いに触発されたザッパは、現代音楽的な作品や、新しい編曲による旧作等を演奏するオーケストラ・ライヴ・イベント〝イエロー・シャーク〟に、その残り少ないエネルギーを注いだのだった。彼らは気の遠くなるような、入念なリハーサルを熱心に繰り返し、ついには「人間による演奏は不可能な」シンクラヴィア作品をもものにしながら、ついに19曲、90分に及ぶプログラムを完成。各会場には、新しい開発された6チャンネルのサウンド・システムがセットされ、最高のサウンドが提供された。まさに歴史に残るコンサートの全成果が、このディスクに集約されている。(工藤)



FRANK ZAPPA
Civilization Phase III
CD/Zappa CDDZAP 56 '95年 /MSI MSIF 1/2

'67年のニューヨーク、ザッパは周りにいた連中を呼んで、スタジオのピアノの中に頭を突っ込ませたまま、いろいろおしゃべりさせていた。この時の録音の一部は「ランピィ・グレイヴィ」に使われたが、大半は倉庫に眠ることとなる。それが'95年の夏になって、突如日の目を見るのだからおもしろい。まずはムーンや、アンサンブル・モデルンのメンバーによるおしゃべりを、デジタル編集によって20年以上前に録音された会話とミックスし、さらにシンクラヴィアやライヴ音源による楽曲を加えた。その結果、ピアノの中に住む人々と、外部に存在する悪についての物語として、ついに完結したのが本作である。「イエロー・シャーク」で言及されていた幻の曲〝アムネリカ〟も収録。没後1年してリリースされた快作である。(工藤)

TODD RUNDGREN



文●東野明宏

ポップス界の天才・奇才・奇人・変人・変態(あ、いやいや…)。思えばトッド・ラングレン程様々な呼ばれ方をするミュージシャンも珍しい。そしてその類希なるポピュラー感覚にもかかわらず、生来のメジャー嫌いな性格が災いしてか(?)、彼の作品は尽くヒット・チャートとは一線を画した、いわば玄人受けする内容となっている。事実ここ日本においても、プロのミュージシャンでトッド・ファンを公言する人は多い。中には高野寛のように自己作品のプロデュースを依頼してしまう人も居るくらいだ。プロデューサーとして、数々のバンドやアーティストをヒット・チャートに送り込みながら、自らは頑固一徹自分の趣味を押し通す、こんな姿勢が同業者やマニアックなファンに愛される理由なのかも知れない。

彼が時に天才、時に変人と呼ばれるのは、彼自身の持ついくつもの「顔」がその時々の作品に明確な違いとなって顕れているからに他ならない。少し乱暴かも知れないが、彼の持つその側面をバッサリ箇条書きにしてみよう。

まず肩書的にあげるならば、

1.ソロ・アーティスト
2.ユートピアの一員
3.プロデューサー

さらにプレイヤーとして見た場合、

A.ヴォーカリスト
B.ギタリスト
C.キーボード奏者
D.その他(ドラマー、サックス奏者。但しステージで悪ノリをした時に限る。)

そして音楽の傾向としては、

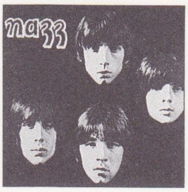
Ⅰ.ブリティッシュ・ロック経由のフィラデルフィア・ソウル
Ⅱ.パンク的な要素のあるアヴァンギャルド・ソング
Ⅲ.スタジオ・ギミックを多用したインストゥルメンタル/プログレッシヴ・ロック
Ⅳ.好みの曲のカヴァー

このうち、ファンが愛して止まない、いわゆる〝トッド節〟と言われるポップ・ソングがⅠであり、Ⅱはその対比として同一のアルバムに収録されていることが多い。Ⅲはフロイドやクリムゾンのような〝哲学実践型〟とも、イエスやジェネシスのような〝アンサンブル構築型〟とも違う、敢えて言えば初期ゴングのような浮遊感の漂うトリップ・ミュージックに近い物と言えよう。Ⅳは「メジャーな人のマイナーな曲」が多く、彼自身のリスナーとしてのセンスの良さが伺える。彼のミュージシャンとしての歴史は、これらの様々な側面が消えては現れ、現れては消える正に万華鏡のようなものであると言えるだろう。

1948年にアメリカのペンシルヴァニア州フィラデルフィアで生まれた彼のプロ・デビューは68年の4人組グループ〝ナッズ〟であった。ここにギタリスト、トッド・ハリー・ラングレンの名前が最初に刻まれている。計3枚のアルバムを発表した彼等、殆どの曲をトッドが書いており、彼の才能の一端を窺うことも出来るが、何せヴォーカルが彼でないので彼の歌が聴きたい人は無理に入手する必要はなかろう(CD化されています)。ヤードバーズのようなブリティッシュ・ビートが演りたかったという彼だが、このバンドの商業的失敗に懲りて、70年にはトニーとハントのセイルズ兄弟との3人組〝ラント〟名義でシングルを発表、同9月にはそれをそのままタイトルにした最初のソロ「Runt」を発表。アンペックス盤とベアズヴィル盤の2種類があることで有名だ(前者は現在殆ど出回っていない)。71年にその続編的内容の「The Ballad of～」を発表すると、72年にはトッド・ワールドの集大成でありファンの間で人気の高い「Something/Anything」、73年にはスタジオ・ギミック満載の不思議な作品「A Wizard, A True Star」を発表。

74年以降は、ライヴ用に組んだバンド〝ユートピア〟を分離独立、ソロとユートピア両方の作品を出しまくる時代に入る。74年に2枚組のポップス大作「Todd」とプログレ色の強いユートピアの1st、75年に30分を超える(当時のLPでですよ！)シンセ組曲を含む「Initiation」とユートピアのライヴ盤「Another Live」を、76年には片面をカヴァーで固めた「Faithful」を発表、この時期はソロとユートピアの境界が曖昧で、音楽的にもメンバー的にも各々入り乱れている。

しかし77年、ユートピアが4人編成で固定され「Ra」を発表した以後は、ポップスはユートピアで、自分の趣味はソロで、という傾向に収斂して行く。78年の「Hermit Of Mink Hollow」、2枚組ライヴ「Back To The Bars」、81年の「Healing」、82年の「The Ever Popular～」までは〝歌手〟トッドの姿がさらされている。ユートピアでは80年にヒット作(珍しい！)「Adventures in Utopia」、ビートルズのパロディ「Deface The Music」の2枚を発表。個人的には、これ以後のユートピアは特筆すべき点もなくCD化も遅れているので省略したい。92年に来日して我々をさすがと唸らせたとだけ記しておく(その時のライヴCDとヴィデオは出ている)。しかしソロの方は相変わらずやりたい放題で、85年文字通り声の多重録音で造りあげた「A Cappella」、89年には40人近いメンバーを使って作り上げたソウルフルなポップス大作「Nearly Human」(来日公演のヴィデオも有)、91年その続編的内容の「2nd Wind」を発表した。そして92年、又々彼の〝悪い虫〟が騒いだのか、「No World Order」はインタラクティヴCDなるメディアで登場、聴取者側が中身を自由に改編出来るというとんでもないもので、その後2種類の別ヴァージョンが出ている。彼の最新作は95年の「The Individualist」。〝魔法使い〟トッドは、これからどんな夢を僕らに見せてくれるのであろうか。



NAZZ
Nazz
LP/Screen Gems SD5001 '68年
CD/Rhino R2-70109-2
/MSI MSIF 2065

NAZZの、つまりはトッド・ラングレンのデビュー・アルバム。メンバーはトッド（g）と前のバンド仲間カーソン・ヴァン・オステン（b）、そしてトム・ムーニィ（ds）ステューキー（vo、key）の4人。彼等はブリティッシュ・ビート・ポップに影響されたスタイルを打ち出していた（バンド名もYARDBIRDSの曲から取ったもの）。ジャケのセンスや髪型もそのまま。歌メロやコーラスにも後のトッド、UTOPIAへの萌芽を孕むものの、そうした要素が顕著に見られる。シングルは時代柄幾分サイケデリックな趣きもある〝Open My Eyes〟。B面の〝Hello It's Me〟は、'70年の再カットと、ソロになってからの「Something／Anything」収録のヴァージョンのヒットでトッドの代表曲に。バンドは他に2枚を残し'70年解散。（高山）



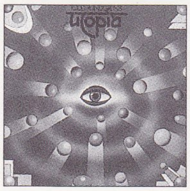
TODD RUNDGREN
Something Anything?
LP/Bearsville 2BX 2066 '72年
CD/Rhino R2-71107-2
/ポニー・キャニオン PCCY-00784

トッドの3枚目のソロ・アルバムでLP2枚組の大作。〝アイ・ソウ・ザ・ライト〟、〝ハロー・イッツ・ミー〟の大ヒットに見られるように、トッドのシンガーソングライターとしての才能が大きく花開いた初期の名作。LPでいうA面からC面までは全ての楽器、歌を彼が演奏する。そして最後の面はブレッカー・ブラザーズやリック・デリンジャーを迎えてのスタジオ・セッション一発録り。まだ屈折した部分はほとんど見受けられないが、ポップ・ミュージックという観点から見ての大傑作であり、例えて言うならピカソが書いた印象派の絵画と言ったところだろうか。ソング・ライティングやプレイだけでなく、プロデュース、アレンジの面での巧みさが光っていて、単なるマルチ・プレイヤーの枠を飛び越えたトッドの原点と言ってもよいアルバム。（津田）



TODD RUNDGREN
A Wizard, A True Star
LP/Bearsville BR2133 '73年
CD/Rhino RNCD 70864-2
/ビクター VICP 2011

'73年発表の、ソロとしては4枚目に当たる作品。シュールなジャケット・ワークのイメージもそのままに、彼の作品中最も奇妙な印象の残る1枚となっている。LPのA面にあたる組曲〝International Feel〟は、奇麗なメロディを持つ曲や、パンクを先取りしたかのようなワイルドな曲からなる12のパートがサイケデリックな電気処理を施されて切れ目なく流れて来て、我々を魅惑のトッド・ワールドへと誘ってくれる。対するB面は、彼お得意のソウル・ナンバーがずらっと並び、トッドの持つポップな面と実験好きな面の両方を示した結果となっており、翌年結成されるユートピアの伏線として解釈することも出来る。56分という収録時間も当時のLPの常識から言えばブッとんでいた。（東野）



TODD RUNDGREN'S UTOPIA
Todd Rundgren's Utopia
LP/Bearsville 6954 '74年
CD/Rhino R2-70865-2
/ポニー・キャニオン PCCY 835

トッド・ラングレンと言えば、様々な楽器からプロデュース、エンジニアリングまで一人でこなすスタジオ多重録音型のマルチ・ミュージシャンというイメージが強いが（でも昔TVで見た彼のドラムは下手だった）、そんな彼がライヴでの演奏を求めて結成したのがこのUTOPIA。それだけにこのA①ライヴ、片面にはスタジオ録音の大作という構成のファースト・アルバムでは、3人のキーボード奏者を擁したインストゥルメンタル主体のまさにプログレ／フュージョンが聴ける。そんな中でもヴォーカル・パートを含め、メロディ感覚を打ち出し、大曲も決して飽きさせないのはこの人らしい。次作「Another Live」は文字通り全編ライヴ。R・パウエルとJ・ウィルコックスが加入し、更に強力な演奏が楽しめる。（高山）



TODD RUNDGREN
Initiation
LP/Bearsville 6957 '75年
CD/Rhino R2-70865-2
/ポニー・キャニオン PCCY-807

邦題は「未来神」。6作目のソロ・アルバムであり、本作以降トッドはUTOPIAでの活動と並行してソロ・アルバムを制作するようになる。原題は時節柄何だが、トッドの神秘思想への関心が表われたものと見て良いだろう。それを裏付けるように〝Eastern Intrigue〟ではイエス、モーゼ、ムハンマドやシュタイナー、グルジェフ、ブラバツキー夫人等、聖人、神秘思想家の名前が連呼される。続く〝Initiation〟、オープニングの〝Real Man〟は名曲だが、2枚組ライヴ「Back To The Bars」ではよりプログレ・ハード・ポップした格好良い演奏が聴ける。変調ヴォイスの〝Born To Synthesize〟は後の「A Cappella」に結実。旧B面は30分を越えるスペース組曲。UPOPIAの他多くの有名ミュージシャンが参加している。（高山）



TODD RUNGREN
Faithful
CD/Rhino R2-70868-2 '76年

プロデューサーとしてのトッドの数多くのヒット作を生み出す一方で、XTCやTOUCH等、バンドと仲違いするケースも多々見られた。それだけ我が強いということなのだろうが、これはそんな彼による企画物としてはロック史でも十指に入る傑作である。旧A面ではYARDBIRDS、BEACH BOYS、BEATLES等、彼が愛し影響を受けたミュージシャンの曲を完コピで披露。録音の雰囲気まで真似た細部へのマニアックなこだわりは、後のUTOPIAでのBEATLESのパロディ（トリビュート？）「Deface The Music」でも在分に発揮される。そしてB面には自身のオリジナルを6曲収録。ハードな曲から極めつきの美しいバラードまで、秀れたメロディ・メイカーとしての真価を見せ、自らの二面性をこの上ない形で表現した。（高山）



UTOPIA
Ra

LP/Bearsville BR6965　'77年
CD/Rhino RNCD 70869

ユートピアとしての３作目であり、カシム・サルトン（b）、ロジャー・パウエル（key）、ウィリー・ウィルコックス（ds）にトッドという４人編成が固まった最初の作品。ユートピアとしては唯一の、統一テーマに則った作品であり、彼等のポップ・センスとプログレッシヴな精神性が絶妙にマッチした傑作となっている。10CCを彷彿させる視覚的なポップ・ナンバー〝Magic Dragon Theatre〟、日本人には少々ヘヴィな〝Hirosima〟等、緩急のバランスも見事だ。また、彼等が最もライヴをこなしていたのもこの頃（'77〜'79年）で、実際彼等のブートレッグやライヴ・ヴィデオもこの時期に集中している。'79年４月には来日公演も実現。この後ユートピアはノーマルなポップの方向へ転換して行く。（東野）



UTOPIA
Adventures In Utopia

LP/Bearsville 6991　'80年
CD/Rhino R2-10872-2
/ポニー・キャニオン PCCY 839

本作から楽曲クレジットもUTOPIAとなり、バンドとしての一体感と路線を確立。一曲一曲をコンパクトかつタイトにしてニューウェイヴ的都会感を強調した前作「Oops! Wrong Planet」の延長上ながら、SF的ストーリーのトータル・アルバムということもあってスペース感覚も戻っている。トッド節健在で元祖はこちらだが、キーボードの使い方やコーラスは当時全盛だったSTYX等のアメリカン・プログレ・ハードに、洗練度はピラミッド仲間？　のAMBROSIAにも通じる。カシムの歌う〝Set Me Free〟がヒット。ロジャーがソロを執るRUSH的な〝Caravan〟は'92年の来日公演でも見所の一つだった。ソウル源流のポップ・センスをもっと下世話にすればHALL & OATESで大ヒットなのだが、品良く中ヒットなのも彼等の良さ。（高山）



TODD RUNDGREN
Healing

LP/Bearsville BHS3522　'81年
CD/Rhino RNCD 70874

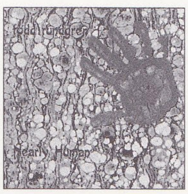
'81年発表のソロ９作目。影一色のジャケット・ワークに象徴されるように、非常にストイックなアレンジの曲が全体を占め、彼の作品の中でも非常に地味な印象の残るアルバムである。おなじみの遊び心たっぷりのスタジオ・ギミックはここでは姿を潜め、〝生身の歌手〟としてのトッドの姿がここにある。前年にユートピアでビートルズのパロディを演ったりしていたので（『DEFACE THE MUSIC』の事ね）、そのはしゃぎぶりの反動と捉える事も出来るだろう。そういう意味では技術的にも精神的にも極めて内省的なアルバムであり、本作を好むマニア諸氏が多いのも当然なのかも知れない。尚、発売当時のLPに同封されていたシングルの曲もCD化の際はしっかり追加収録されているのでご安心を。（東野）



TODD RUNDGREN
A Cappella

LP/Warner Bros. 25128-1　'85年
CD/Rhino RNCD 75761-2
/ワーナー・ミュージック WPCP-3127

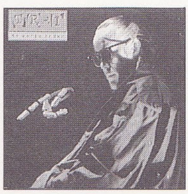
タイトル通り、トッドの〝声〟の多重録音とスタジオ・ギミックを駆使して制作された作品。それだけなら珍しくもないと言われそうだが、ジャケットでトッドが被っているお面からも伺えるように、ガムラン音楽への傾倒が伺える一枚。西洋音楽とは明らかに異なる、奇数度を多用した奇異なハーモニーはこの作品の神秘性を高めている。その中にあって、もろトッド節の⑥、歌というよりは声のコラージュに近い⑦、プラターズのあまり有名でない曲のカヴァー⑩など、トッドらしさが少しも損なわれていない所はさすが。彼は本作のツアーではゴスペル・コーラス隊を率いて本作を完璧に再現、過去の曲もアレンジし直し、おまけにマーヴィン・ゲイ・メドレーまで披露してファンの度肝を抜いた。（東野）



TODD RUNDGREN
Nearly Human

CD/Warner Bros. 9-25881-2　'89年
/ワーナー・ミュージック 22P2-2719

前作『A Cappella』から４年、多作家の彼としては珍しくインターバルをおいた本作は、久々に本格的なソウル色を前面に押し出した作品となっている。丁度カナダのライノ・レコードがトッドとユートピアの全カタログを大量再発した後の待望の新作ということもあって、ちょっとしたトッド・ブーム（？）が起こった事も記憶に新しい。多彩なゲスト、大量のセッション・ミュージシャンを起用しての正攻法が功を奏し、メロディ、アレンジの洗練度が極められ、彼の作品群の中でも頭一つ抜けた傑作となっている。〝６本指〟のジャケットが日本盤では５本指に差し替えられる〝ミソ〟があったものの、来日公演も行ないビデオもリリースするなど、マニアを「トッドづけ」にした一枚。（東野）



TODD RUNDGREN
No World Order

CD/Rhino 71266-2　'92年
/ポニー・キャニオン PCCY-00405

'92年、トッドは再びスタジオ・ギミックの極みとも言える作品を発表した。「CD-Iプレイヤー」。この普及率不明のウルトラ・マイナーなハードで再生することを前提とした本作は、前２作の純真なソウル／ポピュラー路線を根底からブチ壊す近未来的な内容となっている。もちろんレコード店で売っているのは「普通のCD」だが、インタラクティヴ盤（パソコン・ショップ等にあるらしい）は、リスナーがギターやヴォーカル等の全パートを勝手に移動したり、消したり、自分で入れたりして創り変えることが可能と言うもの。その中にあっても、半ば類型化されたトッド節は相変わらずアルバム全体に息づいている。機械相手の奇妙なソロ・ステージを渋谷で行ない、又もや変人呼ばわりされた一枚。（東野）

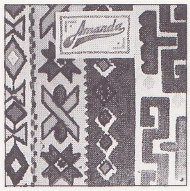
PSYCHEDELIC MUSIC

A to Z



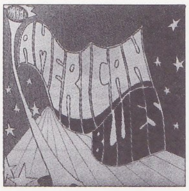
ALEXANDER SPENCE
Oar
LP/Columbia CS-9831　'69年
CD/Coll SRS 75031

最初期ジェファーソン・エアプレーンのドラマー、その後、初期モビー・グレイプのギター奏者として'60年代後半の西海岸代表グループを渡り歩いた人。フラワー・ポップ、ビート系とは無縁のシンガー作。イギリスで言えばケヴィン・エアーズ・タイプの自己満足ふうの歌だから、その分、自己流に掘り下げられた歌だ。カントリー色のあるアコースティック・サウンドに効果音を入れてそれっぽいが、自己陶酔的なモアッとした歌のムードにこそ強度がある。何曲かで出てくる千鳥足風の演奏と歌は、更に我流。表面的な音のおとなしさで目立ちにくいが、明らかに変だ。　(松本)



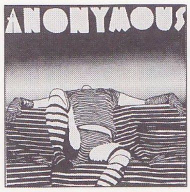
AMANDA TREES
Amanda Trees
LP/Poppy　'?年

レコードのラベルそのものがアシッドしているPoppyレーベル(本誌読者にはMANDRAKE MEMORIALが紹介済)からの女性シンガーAmanda Treesのこの作品は殆ど彼女の心の独白に近いリアルさを持って聴き手にダイレクトに迫る。時に酔っぱらった様に外れまくり、ある時は絶妙な声の抑揚で聴き手の心をぐいぐいと引き込む。バックは殆どアコースティック・ギター一本で、その絶妙なヴォーカルとの対比が素晴らしい。彼女の漂い続ける心の揺らぎを追って、そこにいるレコードを聴いている自分自身を忘れてしまう。それほどに迫りくるものがある大切な一枚だ。　(平野)



AMERICAN BLUES
Is Here
LP/Karma 1001　'68年
CD/(U.K.)Aftergrow AFT 11

この本にこの手のレコードを載せても意味があるのだろうか——と悩んだのだが、逆にこういったサイケデリックの代表的な作品を載せなくては、アメリカらしいセレクトにならないのではと思い、書くことにした。さて、この本を偶然手にしたUSサイケ・ファンがいたとしたら、JOSEFUS、KAK、CONQUEROOといったおよそ有名なものが抜けているにも関わらず、何故か、Joe Peaceのようにマニアックな物が載ったりで、〝全くわかっていない〞と憤慨されそうだが、有名なものは〝聴くのは当たり前〞とし最小限にとどめ、入門的なマニアの為にわかりやすいものを、それ意外は知られざるものの紹介に努めたつもりだ。本作はTex Psycheの代表作の一つ。荒削りだが、乾いた渋いアート・ロック的な演奏。本1stB面後半→2ndA面前半で彼らの音は最も美しく結晶化し、内なる輝きを放つ。　(平野)



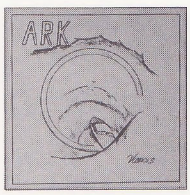
ANONYMOUS
Inside The Shadow
LP/A Major AMLS 1002　'76年

サード・エステイト同様に'76年にひっそりと出されていた自主盤。パンク、ニューウェイヴが一部の地域での現象でしかなかったアメリカにとって、こういった'60年代サイケそのままの音が、'70年代後半から'80年代にかけて当り前のようにリリースされるのはごく自然なことなのかも知れない。アノニマスのサウンドも、シスコ・サウンドそのままのアシッド・サイケである。女性ヴォーカルを中心にしてギターを中心にしたアレンジは、ジェファーソン・エアプレインを想起させるが、オーソドックスなスタイルの中でもアレンジや曲展開がよく練られていて飽きさせない。意味不明の理解に苦しむジャケットはさておいて、数あるコレクター・アイテムの中でも良質の一枚であることは保証できる。　(関口)



ANT TRIP CEREMONY
24 Hours
LP/C. R. C. 2129　'67年

A面、メロウである。ジャジーである。フォーク・ロックである。サイケデリックである。メロウである。ジャジーである。おお、ブルース・ロックである。B面、サイケである。いい塩梅のヌケ具合である。ちょうどいい湯加減である。ラストのインスト・ナンバー、リード・ギターのスティーヴ・デトレイのヘロヘロなプレイがたまらないでござる。ジャジーな要素のひとつ、マーク・ステインのフルートもいいが、曲によって聴ける彼のギターがまた良いでござる。ドラマーのジェフ・ウィリアムスはジャズ・ドラマーの練習生だったそうである。メンバーは6人でござる。これはアント・トリップ・セレモニー、唯一のアルバムである。レア盤である。レコーディング・エンジニアはデヴィッド・クロスビーである。　(サトウユキエ)



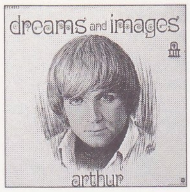
ARK
Voyages
LP/Fanny 070194　'78年

'78年にアメリカの片田舎で100枚程プレスされたという自主盤。オーソドックスなスタイルのフォーク・ロックであり、とりたてて言うほどの目立つ特徴もないため、レア盤でなかったら誰も騒ぐこともなかったろう。だが作曲センスの良さは、数あるアメリカン・サイケの中でも群を抜いていて、トリオ編成によるシンプルなアレンジとあいまって、クールな余韻を残す。曲は全体に、ルー・リードやDr. Hookerなどに近い雰囲気を持っていて、乾いた抒情性が心地良く響く。特にB面での静かな気配に包まれた世界の持つ味わいは格別である。地味な印象の作品ゆえ、プログレッシヴな方々にはおススメしかねるが、そのスジの人にはこれほど魅力的なレコードもないだろう(笑)。　(関口)



ARTHER LEE HARPER
Love Is The Revolution
ＬＰ/Nocturne NRS-905　'?年

ナンシー・シナトラのパートナーとして知られている、リー・ヘイゼルウッドのプロデューサーによってリリースされた、アーサー名義での１st「Dreams & images」は比較的有名だが、別レーベルからリリースされたこの２ndアルバムは、例のサイケ本から漏れたこともあってあまり注目されていないようだ。メランコリックな悲しみを湛えたナンバーで埋めつくされた１stから大きく発展したこのアルバムでは、フォーク・ロック色が強くなり、前作にはないゆったりとした空気があって聴きやすい。浮遊感を醸しだすようなヴァイオリンが、アルバム全体にフィーチャーされ、アーサーのひしゃげたヴォーカルとあいまって、遠い彼方の記憶の糸をたどっていくような、深みのある情感を生み出している。　（関口）



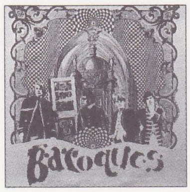
ARTHUR
Dreams And Images
ＬＰ/LHI S12,000　'68年

これはサイケなのでしょうか？　このアーサーという人は作詞作曲者で（演奏に参加しているかは不明）歌を歌っているのは女性です。この名前も分からない彼女の歌声がまた可憐で、曲調は悲し気なものから明るいものまで様々ですが、どの曲もしっとりとしており、その上、生のストリングスや、中期SAVAGE ROSE風の、水泡がプクプク言うようなオルガンまで入っているのです。これこそ、プログレの人の中の女性ヴォーカル・ファンのためのアルバムです。なお、ABC傘下（さんか）(NHKのアナウンサーは、「かさか」と読んでいましたが）このLHIというレーベルは、有名な歌手、Lee Hazlewood（本作のプロデュースも担当）が設立ということで、彼のアルバムも数枚聴いてみましたが、フツーのサウンドでした。　（斉藤）



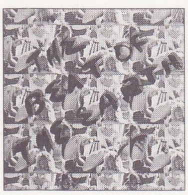
ASHES
Featuring Pat Taylor
ＬＰ/Vault 125　'66年

見かけ上のアシッド色は全くない地味で素朴なフォーク・ロック・アルバム。それだけに聴き込むと魅力が増し、飽きさせない良さを持った内容だ。女性ヴォーカリストPat Taylorの魅力は、裏ジャケの'60年代的ファッションをまとって写る彼女の姿もそうだが、そのイメージにだぶるようにして、過ぎ去った時代の輝きがセピアに滲んだ芳香のように鮮やかにフラッシュ・バックしてくる彼女の歌声にあると言っていい。特に名曲〝Sleeping Serenade〞やメランコリックな〝Sands Of Love〞が印象深い。Ｂ面はMainstreemレーベル系にも近いポップでコーラスを生かした作品集になっているが、余分なエフェクトを加えたり、サウンドを加工していない分、陳腐さはなく、これはこれで良いと思う。この後彼らはPEANUT BUTTER CONSPIRACYを結成し、よりメイン・ストリームな評価を得る。（平野）



BAROQUES
Baroques
ＬＰ/Distortions DRP　'?年

非常に地味で、音も悪い。しかしそんなことはどうでもいい。この未発テイクの一つ一つは、沈んだ水の中の煌めきの一粒一粒のように輝いている。ガレージ？　フォーク・ロック？　アシッド・サイケ？　そんな事でしか彼らの音が理解できないのであれば、様々な音楽を聴き、その後に再び彼らの音を聴いてみるといい。Ａ面の最初からＢ面の最後まで、ガレージ→サイケへの移行があるにせよ、バロックスの〝世界〞は揺らぐどころか、一層その輝きを増すばかりだ。暗く沈んだ水のような揺らめきと刹那の輝き、繊細に織りなす心の風景。この未発集はもっともはかなく美しい結晶の一つだ。尚、本作品は「Purple Day」とタイトルを変え、CDも再発されている。当時Chessレーベルから出たスタジオ盤の方も〝作られて〞はいるが、それなりに良い出来なので興味のある方はどうぞ。　（平野）



THE BEAT OF THE EARTH
Our Standard Three Minute Tune
ＬＰ/Radish A.S. 0001 1/2　'?年

ギミックで始まるこのアルバムは、ビート・サイケが崩れに崩れてリズム不可になったとてもウダウダしたノリがある。とにかくダラダラと続く。だからといってフリー・ミュージックのしかめっ面はまるでなく、至る所で'60年代ふうの素オルガンがあの頃のサントラにありそうな音で顔を出し、インプロで決めるわけでもなく、陽気に明るく、行く。ヴォーカルがストーンズ'60年代かデヴィアンツみたいだが、バック・ビートがないので「歌と演奏」のパターンに陥らない。ギターもベースもオルガンもヴォーカルもわめき声もみんな混じり合って、みんなで、行く。ふぬけなアモン・デュールが、行く。ずっと行く。時間のある人は聴いてみよう。　（松本）



THE BENT WIND（Canada）
Sussex
ＬＰ/Trend　'69年
CD/KSCD 9306

「カナダのアシッド・モンスター」、このLPの内容や音の質感、原盤の激レア度を考えるとそんなフレーズがピッタリとはまってしまう。とにかく全編に渡りだるい演奏が繰り広げられていて、ズルズルと何か引きずっている様なリズムにからむファズ・ギターのだるさったらもう最高！　うなりっぱなしで止まらんという感じがスゴイ。さらにヴォーカルはアッチの方にいく寸前で押さえてあるようなリヴァーブが良く、静かな曲は心地良く、ハードな曲ではミステリアスな雰囲気に誘う。基本的には荒っぽくハードなギターが中心の曲調なのだが、静かな箇所や曲こそ注目して欲しい。剝き出しになったものがそこにしっかりと浮き出ているのを見逃さぬようにしよう。これだけ深い味を持ったアルバム、実は結構少ないぞ。（長谷川）



BEVERLY GLENN (Canada)
Copeland
LP/GRT 9233-1001　'?年

荒涼と広がる平原、風に吹かれる木を照らし出す月、ブルーの夢のような流れに全てが幻想の風景のようににじみ、風の流れとなってゆく、そんなジャケットを象徴するように不思議な世界を彷徨するアシッド・フォーク。アコースティック・ギターのゆるやかなうねりと煌めき、空間におごそかに響き渡り風の声となってこだまする女性vo、風にたなびくフルート、淀みと流れを生み出すベース、ジャジーにソフトに流れを形作るドラム、一流のプレーヤーによるきめ細やかで心の微妙な感情のうねりのように感覚的な演奏は彼女のvoと一体化し、聴き手を幻想の音宇宙へと誘う。カナダでしか生まれ得ぬ独特の雰囲気を持ったミステリアスな作品。全く謎に包まれた初期GRTレーベルの知られざるアルバム。　(平野)



BLUES MAGOOSE
Electric Comic Book
LP/Mercury MG 21104　'67年

N.Y.ブロンクス出身のブルース・マグースは作曲能力とアレンジの多彩さという点では同時期の他のガレージ・パンク・グループとは一線を画した存在である。'67年というアシッド期に突入しつつある中で作られたこの2ndアルバムでは、ガレージ・サウンドのプリミティヴで軽快な感覚に、アシッドによる幻覚感が表出しはじめた時期とクロスする絶妙のタイミングでレコーディングされている。ガレージ・パンクの古典である1stをさらに発展させたこのアルバムでは錯乱しているようなギターとオルガン・パートが大幅に増えて、眩暈のするような展開のアレンジがすさまじい。〝Gloria〞のワイルドな解釈が有名であるが、グループのオリジナル・ナンバーの方がはるかに魅力的で、彼らの実力の高さが窺える。　(関口)



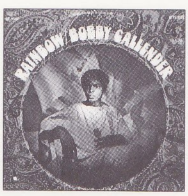
BOB SMITH
The Visit
LP/Kent KST-551　'69年

ジャケットを裏返すと、ゲストが写真入りで8人もクレジットされていて、キーボードが二人(その内一人はムーグ＆メロトロン！)その上フルートにバイオリンと来れば、フツー、期待しますよね？針を下ろすと、メジャー7th(ドミソの上のシが重なった、柔らかい感じの和音)を多用した、神秘的な泣き曲で、「ヤッピー！」と叫んだのもつかの間、次の曲は、ストレート・アヘッドなロックで、更にはヘヴィ・サイケ、ブルース、アヴァンギャルドと、支離滅裂でした。メロトロンは1曲だけで、ムーグはギミックにしか使われておらず、フルート等はヒッピー風の使い方でした。しかし、不思議な統一感があり、決して悪くはありません。1面の裏が3面、そして2面の裏が4面になっている、ヘンな2枚組です。　(斉藤)



BOBBY BROWN
Enlightening Beam Of Axonda
LP/Destiny DR 4002　'72年

ハープ、シタール、フルート、ペダル・ベース、琴、パーカッション等を据えた独自の自作楽器システムを用いて（ジャケット写真がそれだろう）ワンマン・バンド形式で演奏し、歌う異色のシンガー、ボビー・ブラウンの1stアルバム。低音を低く流れるドローンや呟く様な語り、重く催眠的な弦楽器の囁き、土着的なパーカッションがからみ合い、幾分東洋的で呪術的なプリミティヴさを醸し出す異様で不思議な空間の中を、囁き、うなり、震え、喉から息を絞り、噛みしめる様に歌う彼のヴォーカルが一際印象的だ。彼はこの後、ライヴを含む2枚のLPを発表した。　(平野)



BOBBY CALLENDER
Rainbow
LP/MGM SE-4557　'68年

アケミという名で18で。ボビーという名で女性で。しかし、ジャケットの印象と実際の音が、ここまで一致したアルバムも少ないでしょう。シタールにタブラから各種木管金管、果ては生のストリングスまで入った豪華な演奏陣と、「華を減らしたブリジット・セント・ジョン」という感じの、柔らかな彼女の歌声とが、ゆったりもったりしっとりした音宇宙を形作っているのです。B面に、歌謡曲っぽい、あるいは、やけに弾んだ曲もありますが、それも気にならないくらい、夢見心地で統一されています。良いです。なお、シタール、タブラ他で、プログレ・ジャズ・ロック・バンド「オレゴン」のCollin Walcottが参加しています。また、2nd「The Way」(Mithra、発表年無表記）は、2枚組の大作です。　(斉藤)



BRAZDA BROTHERS (Canada)
Brazda Brothers
LP/Dominion LPS-93077　'?年

口笛に導かれてゆったりと始まる〝Blooming Flowers〞。オルガンの音色が空を映し出し、風に吹かれて夢見る草原のように、その音は綴られる。素朴で淡い演奏は、その中に密やかな目に見えぬ何かを育むように、忘れ去られてゆく大切なものを失っていない。彼らの中で積み重なってきた〝音楽〞がふとメロディーとなって紡ぎ出される時、そこの大地や空を通り抜け、水に揺らめく色彩のようにほのかに滲み出す。AndyとGinの兄弟を中心にトロントで制作されたアルバム。彼らはどこからかこの地に移り、そのインスピレーションから本作を作り上げたという。未だ殆ど知られてないアルバムだが、Oliver Klaus、FOLKLORDS、PASSING FANCY同様に大切な思いを秘めたカナダならではの名作として思いは深い。　(平野)

BRIMSTONE
Paper Winged Dreams
LP/"S" 30534 '68年



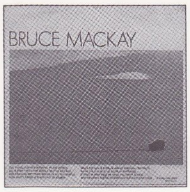
紫～群青の宇宙を飛ぶ白い鳥のジャケットが目を引く、ソフト・サイケデリックの佳作。ジャケットが象徴するように、彼等の音は天上へと向かうのが一つの想いのように飛翔する。こういう作品のレビューを書く時いつも想う事、それは、一人の人間のちっぽけな頭脳が唸ってひねり出した音楽など、何と浅はかで、おこがましく、自己顕示欲の醜い塊にしか見えぬ事かということだ。奇想天外だったり、キテレツだったり、訴えたり、故意に、意識的に作り出された音楽など、錆びたボロボロの、音楽の老廃物でしかない。'90年代は音楽のゴミためであり、いつも不安と雑音と、金属的な虚無感に怯え、それを浴びせかけられている。そんな中で、このアルバムのA面は、オアシスの様に響く。尚、雑誌G-Modernの記事（P54）も読んで下さい。（平野）

THE BRITISH NORTH AMERICAN ACT（Canada）
In The Beginning...
LP/Canadian Now RSS 6700 '?年
CD/(U.K.) Aftergrow AFT 005



モントリオール出身のサイケデリック・ガレージ・グループ。カナダのバンドながら、ハンガリー出身のメンバーが1人、イギリス出身のメンバーが2人含まれているところが変わっている。マイナー調の淡い悲しげな、美しいナンバーが多く、各種コンピレーションに収録された名曲もある。落ちついた地味な印象ながら、聴き込むほど味わい深い作品であり、今でも再発盤は入手しやすいので聴いてみる価値はある。20数年前の公園に今も彼らが佇んでいるのかは知るよしもないが、日常の中で見過ごしてしまうような、なにげない場所にポツンと置かれた彫刻のような、さりげなく押しつけがましさのない作品である。（関口）

BRUCE MACKAY
Bruce Mackay
LP/ '67年



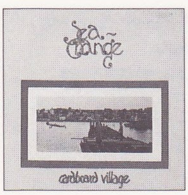
オルガンやフルートのたなびくような音、ピアノやギターのジャズ味が、全体に穏やかな雰囲気を出しているが、どこかシリアスで内省的だ。歌い上げるようなヴォーカルにはフラワー・ポップの能天気、楽天ムードとは逆方向から来た、ある種の挫折を通り抜けた後に来るような謳歌のイメージがある。だから流行乗りとは一味違うすがすがしさ、力強さを歌に通っていて、言いかえれば、それはアーティスト自身に密着した真実味だろう。彼の歌もメロディアスだがこびたものではないからこそ生々しさがあって、そこに魅力を感じる。全体のムードとも合致している。（松本）

C. A. QUINTET
Trip Thru Hell
LP/Candy Floss 7764 '68年
CD/Sundazed SC11021



たけのうちカルテットに、竹之内さんはいないのと同じく、C. A. クインテットに、イニシャルがC. A. であるメンバーはいません。さて、本作は、ヘヴィ・サイケの代表的名盤とされるアルバムです。ジャケットとタイトルからは、呪術的な暗いサウンドに思えますが(明るくはありませんが)その印象よりは、ストレートな音で、少しハードで、颯爽とした感じがします。やはりそれは、トランペットによる所が大きいでしょう。しかし、ギミックを凝らすなど、やはりサイケデリックです。〝光に目も眩み〞（マンフレッド・マンズ・アース・バンド！）から出ているCDは、ボーナス曲の方が多いくらいのお買得品です。なお、ライヴ・アルバムが自主制作で'85年に出ていたそうですが、クズだと言うのがもっぱらの噂です。（斉藤）

CARDBOARD BRIDGE
Sea Change
LP/ '?年



子供が水中に飛び込む途中の変なジャケ、裏を見れば場末の流しみたいな3人のステージ写真。何だこれはと思ってはいけない。ハンド・ドラム、フルート、ギターの3人編成で女性ヴォーカル（フルート）と来れば、いかにも良さそうでしょう？（MOONSTONE ＋ PERTH COUNTRY CONSPIRACY）÷2と言ってしまうと余りに凄すぎますが、これは仲々、素朴なアシッド・フォークで良いのです。これがブリティッシュだったら〝○○ Diving Magazine〞にでも載って今頃大騒ぎ――という内容のレコードは実はアメリカにも数多く在るのです。今回はそういうものを少しばかり載せてみました。（平野）

THE CEYLEIB PEOPLE
Tanyet
LP/Vault LP-117 '68年
CD/(U.K.) Drop Out DOCD 1991



インド音楽の影響、中近東音楽の導入等と様々に取り沙汰されているが、つまるところ無国籍のオリエンタル・ミュージックというのが正解であろう。当時のシーンの中での、ドラッグとエスニック・ミュージックの結び付きが自然であったことも、本作の誕生を促したことだろう。本作を高く評価する向きも多いが、シタールの使い方等安易な点も目立ち、過大評価の嫌いがある。むしろ、トリップという文脈の中で考えた方が、本作の面白さがよくわかる。曲の組みたては優れているとも思えないが、抜け切ったような清涼感は文字通りトリップの魔術といえよう。（法水）

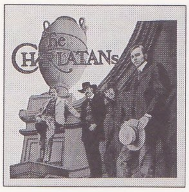
CHAMPIGNONS (Canada)
Premiere Capsule



LP/Les Jeunes Artistes Associes GG1 '72年

サックス、フルート、オルガン入りの6人組。フレンチ・カナディアン、サイケ編。アルバムはこれ1枚のようだ。A面はラフなサイド・ギターと軽めのビートを中心にしたオーソドックスな曲が並ぶ。わずかフルートなんかが入ってフローティングな雰囲気がのぞく程度。これがB面になると、まず片面が1曲に近い。フランス語の語りがシアトリカル。更にメディテイショナルな曲調にもなって、ジャズっぽい雰囲気も混じる。A面のビート色はほとんど消えて、モアッとした曲調が特徴。反復するようなその流れにエコーをきかせたリード・ソロが鳴ったり、サックスがリードをとったり、という割とフリーな曲調になる。このアルバムの聴き所。ちょっと初期のフロイドっぽい。（松本）

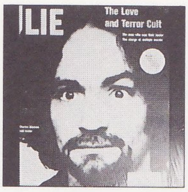
THE CHARLATANS
The Charlatans



LP/Philips 600.309 '69年
CD/One Way OW 31442

シスコ・サウンドの最重要グループの一つとして忘れてはならないグループ。本来ならもっと大きく扱われなければならない存在だが、メロトロンは入ってないからまあしょうがないか。何点か存在するブートレッグで聴ける初期のサウンドにおいては、カントリーやブルースなどのルーツ・ミュージックと、アシッド・ロック、フォークが、ジョージ・ハンターのコンセプトのもとに、異種交配されていくよう生々しく記録されている。こうしてアヴァンギャルドとルーツ・ミュージックがごく当り前に共存している所にアメリカン・サイケのスゴさがある。メンバー・チェンジの後に発表された1stは時間がたって洗練された音になっている。初期のような生々しさはないが、音の自然さからくる美しさは他の追随を許さない。（関口）

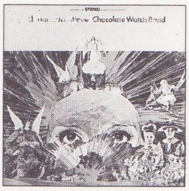
CHARLES MANSON
LLE



LP/Awareness A2144 '70年

サイケデリックがヒッピーの小さな共同体を基盤に成り立っていたことはよく知られていることだが、それゆえそこから生まれた多くのサイケデリック系の音楽が共同体の中での祭礼的、儀式的な側面を持っていることはある意味で当然の結果と言える。このチャールズ・マンソンのレコーディング記録は様々なデモ・テープの寄せ集めだが、返ってそれが先の側面をよく浮かび上がらせていると思う。マンソンの歌に導かれながら次第に集団的な熱狂そして覚醒状態へ入っていくコミューンの人間達をリアルに伝えている。（関口）

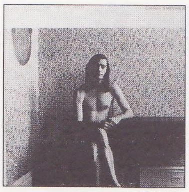
CHOCOLATE WATCH BAND
The Inner Mystique



LP/Tower 51 '68年
CD/(Fra.) Revenge EV 300

サン・ジョセ出身のチョコレート・ウォッチ・バンドは、'66年から'69年までに3枚のアルバムと数枚のシングルを発表している。これは彼等の2ndアルバム。よくパンクのオリジネイターと形容される彼等だが、いまひとつチープなサイケ・サウンドもレコードからは漂ってくる。実はそれ、彼等のマネージャー＆プロデューサー、エド・コブの仕業であった。このレコードなんか、A面の3曲すべてスタジオ・ミュージシャンによる演奏で（うち2曲はコブ作曲のインスト）、一体誰のレコードなんだかなぁ〜って感じ。バンド本来の持ち味であるパンキッシュでストレートな熱気は、一応B面で堪能できるけど。そういうインチキ臭さもすべてひっくるめて〝そんな時代だった〟と。1枚で2度楽しめるレコード、なんてね。（サトウユキエ）

CHRIS SMITHER
Don't It Dragon



LP/Poppy PYS 5704 '71年

サイケデリック・ムーヴメントの音楽的そして精神的中核として君臨したウッドストック・フェスティバル。このロックの聖地とも言うべき地にあるベアズビル・スタジオからは、J・サイモン、E・カズ、A・ギャレット、F・ニールらに代表される当時の〝良質のアメリカン・ミュージック〟の屋台骨を支えたヒッピーたちが、数々の名作を産んでおり、アメリカの〝カンタベリー〟とも言えそうな一大コミューンを形成していた。スミサーもこの一員であり、本作はE・カズ、H・トラウムら名うてのミュージシャンのサポートを得、いわゆる目先のサウンド云々よりも形而上的部分でよりアシッドな感覚を語るこの地独特のサウンドを持った一枚。（宇藤）

CHRISTMAS (Canada)
Live 71



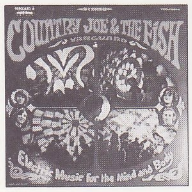
LP/Remember The Alamo RTA 777 '71年

REIGN GHOSTを前身とするCHRISTMAS。彼らの1stはアコースティックな趣きのトリップ・サイケで、BEND WIND、PAPA BEAR等に次ぐ幻のレコードとしてマニアの間では知られている。そして2nd「Heritage」は名ギタリストBob Brydenのギター・ワークが随所で冴え渡るしなやかで変化自在のサウンドが素晴らしいが、曲によって出来にバラつきがある（それでも必聴だが）。とすれば、CHRISTMASの本領はやはりライヴだ。水を得た魚のように生き生きと軽やかに飛翔し、軌跡を縦横無尽に描く、一つの魂のように一体化したサウンドはギター・サイケの一つの頂点であろう。彼らはこの後、プログレへと移行し、〝SPIRIT OF CHRISTMAS〟と改名、一枚のLPを残し、Bob Brydenはいくつかのレコーディングを経たのち、現在、聖歌隊で歌をうたっているという。（平野）



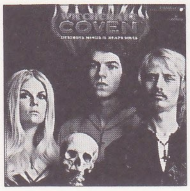
THE COMMON PEOPLE
Of The People/By The People/For The People From The Common People
L P/Capitol ST 266　'69年

　このタイトルとこのジャケでは、フツー、買わないでしょう。しかし、本作は、ソフト・サイケの代表作の一つなのです。曲によってはオーケストラを配したそのサウンドは、シンフォニックとまでは言わないまでも、ゆったりとしていて、厚みのあるものです。特にA①②は、メロディーの美しさ、音の広がりと、正に「この世のものとは思えぬあの世」です。是非とも聴いて下さい。でも、ものには順序がありますので、ソフト・サイケの中では更に有名で、CDも出ている（しかも安い）GANDALFを先に聴いて、気に入ってからにして下さい。そうこうしているうちに、本作もCD化されるのではないかと、私は読んでいます。感謝感謝。助からないと思っても助かっている。（斉藤）



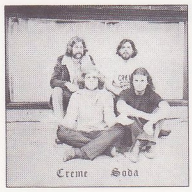
COUNTRY JOE AND THE FISH
Electric Music For The Mind And Body
L P/VRS-9244　'67年
CD/Vanguard 79244

　フォーク・シンガーとしての方が、有名なカントリー・ジョーだが、ドラッグ体験がなければ彼のデビューはなかったのではないだろうか。歌詞の面で、ドラッグやトリップを表現させたら右にでる者はいなかったし、本作で見せたサウンドもズバリそのものであり、今の耳で聞くとジェファーソンあたりの上をいっていた気がする。オルガンの使い方や、聴衆を不安感に導くリズムのタイミング等みるべきものが多い。R＆Bがベースであるが、フォーク調のメロディ等異質なものをコラージュすることで、一級のサイケ・サウンドを作りだすことに成功している。（法水）



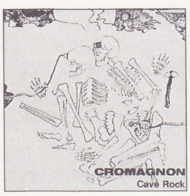
COVEN
Witchcraft
L P/Mercury SR 61239　'69年

　発売後、すぐに発禁処分となったいわくつきのレコード。そもそもコーヴェンとは魔女の集会を意味し、曲も〝ブラック・サバス〟とか〝ルシファーとの契約〟とか、もろ悪魔趣味丸出しのアルバムだ。音はジェファーソンの亜流、あるいは初期のアース＆ファイヤーといった感じで楽しく聴けるのだが……。で、何が問題だったのかというと、悪魔崇拝のサバト儀式が淡々と実況されるB面ラストの〝サタニック・マス〟である。やはりアメリカじゃ、反キリストはかなりのタブー、こりゃやりすぎたと、そういうことだ。その後彼等はどうしたかというと、MGM、ブッダとレーベルを転々としながら2nd、3rdアルバムを発売。3rdジャケにはゴブリン（小悪魔）が思いっきり描かれており、懲りない連中だこと、アーメン。（サトウユキエ）



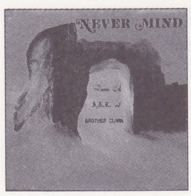
CREME SODA
Tricky Zingers
L P/Trinity CST-11-LA　'75年
CD/Cosmic Mind 025 228 CD

　オヤジ4人で、何が「クリーム・ソーダ」ですかね。しかも、ストーンズの名盤「Sticky Fingers」（ファスナーのジャケットの。〝Wild Horese〟は泣ける！）をパロったタイトルをつけるとは。でも、内容はいいのです。「ソフト・サイケの名盤」として、そこそこ知られた本作ですが、半分は、少し喧しい曲なので、それだけを期待するのはムリです。しかし、とにかく本作は、A①②が素晴らしいのです。メロディーが、極めてよく出来ていて、しかも覚え易いのです。特に、1曲目の〝Give It Up〟では、フロイドの〝See Emily Play〟でのギターに似た、「ピヨピヨ言う音」のギミックが入り、まるで、頭の周りで、妖精達が空中ブランコに乗って行き来しているかのようで、そのくらいヘンなのです。（斉藤）



CROMAGNON
Cave Rock
L P/ESP 2001　'69年
CD/(Ger.) ZYX ESP 2001-2

　クロマニヨンは、ブライアン・エリオットとオースティン・グラスミアーの2人によるプロジェクトだ。ESPに残されたこのアルバム、アナログ盤時代は「オーガスム」というタイトルで呼ばれていた。ジャケットにクロマニヨンという名前以外、何のインフォメーションも記載されていなかったからである。まさに謎の1枚であった。CD化に際し、オースティンが「ケイヴ・ロック」というタイトルを本作に与えたということだ。で、内容だが、オープニングを飾るエスニカル・ノイズ・ロック〝カレドニア〟からラストの〝グレゴリオ聖歌VSフリー・フォーム・ギター〟まで、奇声、ラジオ・ノイズ、効果音、種々雑多の楽器、等々のコラージュによる、見事なまでのアヴァンギャルド・スタイルで貫かれている。過激。（サトウユキエ）



DAMIN EIH, A.L.K. AND BROTHER CLARK
Never Mind
L P/Demelot NS-7310　'73年

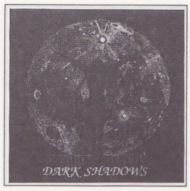
　何ともウサン臭い3人の連名のこのバンドの音は、説明するのが難しいです。ピアノにシンセサイザーも使っているというので、チョット期待して聴いてみると、いきなりファズ・ギターがビビビッとか言うので、言葉に詰まっていると、アコースティック・ギターのアンサンブルに、色々な楽器が重なった、叙情的な曲になるのです。ブルース寄りの曲や、ノリのいい曲もありますが、前述の叙情的な部分が一番多いです。そのため、音は薄いですが、プログレ寄りだと言われれば、そうだなと思います。サイケ本（洋書）〝FUZZ, ACID & FLOWERS〟（以下「聖典」と略）では、「お薦めできない」となっていますが、そのスジでの評価は、極めて高いアルバムです。（斉藤）

DARIUS
Darius
LP/Chart Maker CSG 1102 '68年



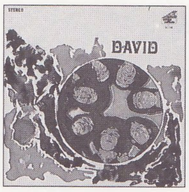
カリフォルニア出身のシンガー・ソングライター。アルバムの曲は、ブルース調のものやバラードまで、変化に富んでいるが、作曲は全てダリウス自身によるものである。ジャケットの写真を見ると、まるでギリシャ彫刻のような端正な容姿の人物であり、その姿に合わせたかのような大胆でドラマティックな唱法は、他にあまり類を見ない独特のスタイルである。特にB面最後の曲など、バラード・ナンバーでの沈みこんでいくような表現力は絶品である。ゴールデン・ロッドによるバッキングも繊細なアレンジのものが多く、曲に美しい色合いを添えている。このアルバム1枚で終わってしまったのが惜しまれる。 (関口)

DARK SHADOWS
Dark Shadows
LP/(Private Press) '69年



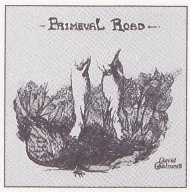
オリジナル盤は幻、リイシュー盤も日本で出回らなかった為、知名度こそ余り高くないが、まるでいぶし銀のように輝きを放つ、なんとも枯れた深い味わいを残すUSサイケ名盤中の名盤。なんという恐ろしいオートハープ、ギター、ヴォーカル、全ての演奏だろう。淡いもやのように立ち込める世界の中に震えるような精神性がくっきりと浮かび上がる。エッジのとれたしなやかで抑制された演奏はどこまでも冷静にコントロールされているだけに透徹した微細な感覚のうねり、連なり、重なり合いを心の動きそのもののように映し出す。アシッド的ではなく、淡々とした演奏の中に狂気にさえ近いDARK SHADOWSの世界を封じ込めた本作こそ、恐るべき魔力を秘めた真性のサイケデリック・ロックだろう。ヘヴィな音楽ジャンキーが心を一時くゆらせる事の出来る、数少ない作品。 (平野)

DAVID (Canada)
David
LP/Sound Canada SC 7705 '69年



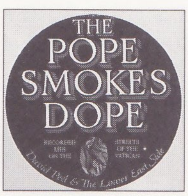
'64年に始動したMARCATOSを母体に'69年にトロントで結成され、唯一のLPを残した。非常に丁寧な音作りと演奏、心の込められたヴォーカル、男女コーラスが印象的な、ソフト・サイケの佳作でホーンの導入はあっても当時流行のソフト・ロックやB級ポップ・サイケのイージーさは全くない為、評価も高い。特にGANDALFを想わせる名曲〝Never Been in Love〞を含むA②〜④の流れ、B面の女性voをフィーチャーした2曲の出来が素晴しい。この後彼らは解散し、中心メンバーの3人は'71年に〝BRIDGE〞を結成、Vintageからカントリー色の強いギター・アルバムを一枚リリースした。尚、同レーベルの他の作品には、そのレア度でも有名なRockadromeのLPが在る。Rockadromeは屈折したフォーク・サイケ〝HYDE〞にも参加していた。 (平野)

DAVID CHALMERS
Primeval Road
LP/River SRR 1000 '76年



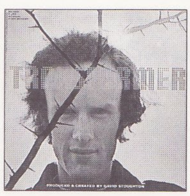
稚拙だが、何か予感めいたものを感じる白のWジャケット、イラスト、丁寧に字や絵が書かれた内側、ピンと来る人は、内容にも何かを感じるだろう。A①〝Dear Friends〞――包み込む様なアープの流れの中を静かに、胸の中に直接送り込むように、歌う――それはどこまでも空を超えて、飛び、込められた願いのようにそれを聴く人のもとへと届くだろう。この一曲の存在は本作を忘れられないものとし、彼のソフトでメロディアスな感覚は、暖かなA面の流れを支配する。〝音楽〞がかけがえのないものである人は是非聴いて欲しい。尚、ここでは2ndプレスの〝River〞盤を紹介したが、オリジナル盤はA①を始め、何曲かの名曲が収録されておらず、意味が無い。2ndプレスを捜しましょう。この後彼は2ndアルバムをリリースするが1stのオリジナル同様今一つの出来。 (平野)

DAVID PEEL
The Pope Smokes Dope
LP/Apple Sw 3391 '72年
CD/Line LECD 9.01050



当時、レノン、ヨーコのプロデュースでAppleより発売され日本盤も出たDavid PeelのLP。タイトルも〝Everybody's Smoking Marijuana〞とかA③、④に象徴されるナンバーが続くが、中身の方も相当きている。曲がみんな同じに聴こえるとかそんなことはアモン・デュールでも同じことだ。そんな事以上に原初のパワーを感じさせる当時のコミューン、ヒッピー達のリアルなドキュメントとして聴くと、この作品の面白さがわかるだろう。まるでダンス・パーティみたいに陽気なレコードだ（本当にそうなのかも）。〝作られた〞音楽を聴くよりも、アシッドのリアティを求める人に。 (平野)

DAVID STONGHTON
Transformaer
LP/Elektra EKS-74034 '68年

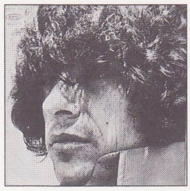


アシッド・フォークとは言っても、非常に個性的な世界を展開する作品で、表面的な聴き方では本作の扱いにくい音楽性をうっかり見過ごしてしまうだろう。この奇妙にプログレッシヴな音楽さは感覚をいつも受信できるアンテナのように研ぎ澄まし、その心の震えまでをもとらえるようにしていると聞こえてくる。ただただ淡々と歌えば歌うほど、内側へと入りこみ、淡いもやのように狂気が浮かび上がってくる。どこまでも摩訶不思議に手の平を返し、すり抜けてしまうこのアルバム。所々に屈折したいびつな裂け目が顔をのぞかせている。 (平野)



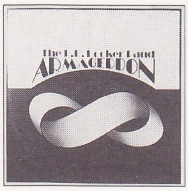
DIALONGE
Dialouge
L P/Cold Studio Dia 5-1　'72年

'72年にリリースされた作品。複雑な構成の作曲によるポップスであり、アメリカでは珍しい内容と言える。どちらかと言えばブリティッシュ・ポップに通じるような音楽性をもっており、イギリスで発見されたと言われればそのまま信じてしまいそうな内容である。ピアノを中心にアレンジされたナンバーが中心で、特にA面でのバラード・ナンバーの曲の良さは特筆に値する。中には構成が入りくみすぎて、曲の良さが殺されかかっているようなナンバーもあるが、良質な内容の作品であることは保証できる。あえてサイケデリックとカテゴライズする必要のない、開かれた内容の作品。　（関口）



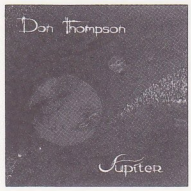
DINO VALENTE
Dino Valente
L P/Epic LN 24335　'67年

広漠として乾ききった現実世界の中で自らの感覚を失い、まるで砂のように消失している様を、もがきもせずあがくこともせずただ諦念と醒めた視線を持って見続けていく。その世界への全否定の中から生まれてくる静かな自己肯定の中でうつろい漂う漂泊感を見事に描ききった貴重な作品と言える。その淡々とした調子の歌声の裏に息づく感覚と身体のバイオリズムのゆらめきは優れて音楽的な波長なのだと思う。　（関口）



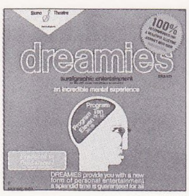
DR. HOOKER BAND
Armagedon
L P/　　　'78年

'73年に録音され、'79年にようやく陽の目を見たDr. Hooker唯一のデモ＆ラフ・ミックス・レコーディング集。一聴して、そのサウンドや雰囲気から隠れたブリティッシュ・プログレの傑作かと耳を疑う。複雑なリズム展開、曲構成、大作志向、唸りを上げるムーグやハモンドの響き……。しかし、この作品の魅力を決定しているのは何よりもDr. Hookerのヴォーカル・センスだろう。ヴォーカルを引き立てるギターやメロトロンもまた良い。聴き込めば聴き込むほどにこの作品の持つ本質的な部分が理解できよう。ただのプログレに終わらぬ、深みのあるヴォーカル・アルバムだ。　（平野）



DON THOMPSON
Jupitar
L P/Sunday KS 5101　'75年

ジャケットを手にしているだけで、あまりの豪華な作りと音への期待でふらふらと買ってしまいそうなレコードです。群青。宇宙に煌めく天の川、赤い惑星、極厚手のダブル・ジャケットはシルク・スクリーンのハン・ドメイド（シルクは初回プレスのみ）。中を開くと夢のようにイラストと文字が広がる素敵なアートワーク……。しかし音は地味な弾き語りで渋い内容です。ですが、広大な夢の宇宙の中でさざ波を聴いてるような、なんとなく素敵なコズミック・フォークアルバム。B面に入ると、いよいよスペーシーな感覚になります。作品に込められた想いが静かに伝わってきます。　（平野）



DREAMIES
Auralgraphic Entertainment
L P/Stone Theatre DM 68481　'73年

頭痛薬の広告ではありません。このジャケットがイヤで、私は本作を聴くのを何年もためらって来ました。しかし、聴いてビックリ、何て素晴らしいのでしょう。「耳で聴く娯楽」と題された本作は、ジャケットに「ドリーミーズはあなたに、個人の娯楽の新しい形を提供します。ステキな時間が皆さんに保証されています」など、色々なコピーが書いてありますが、全て本当です。その音は、淡々としたアシッド・フォーク、と言っても、PEARLSほど暗くはなく、その上を縦横無尽に、様々なギミックが、ピコピコとかポコポコとか言って交錯するのです。パッと聴きはキレイな音なので、「止める必要はないか」と何となく聴いていると、「信じられない精神体験」ができてしまうという、正に、夢見るようなアルバムです。　（斉藤）



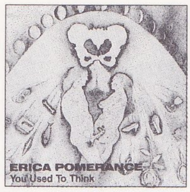
ED ASKEW
Ed Askew
L P/ESP　'68年
CD/(Ger.) ZYX Music

アシッド・フォークと言われるたぐいの音楽の根底や出発点には、疎外感、個人に帰るしかない時のある種の無力感がある。これがコンプレックス（いい意味での）となったアウトサイドな視点は、つっぱりでもいじけでもない個人に根ざした力強さとしてあらわれてくるように思う。このアルバムは、それだけでつくられている芯の強さ、シンプルさがある。実際の音が、マンドリン？の弾き語りだというのも更にいい。派手さに欠けるし聴き手にこびる歌ではないから相手を選ぶだろうが、このしみ入ってくるような物哀しさはマウロ・ペローシの３作めに近いものがある。　（松本）



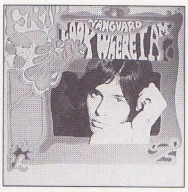
ELECTRIC PRUNES
Mass In F-Minor
L P/Reprise RLP 6275 '67年
CD/(Ger.) Line 9.00888

宗教的な敬虔さや、或る種の荘厳さというものもつきつめれば恍惚感につながることを思い知らされる一作。彼らの抜群のコーラス・ハーモニーがあったが故、成し遂げられたことに疑いはないが、カンタータ調の〝キリエ・エレイソン〟等の見事なできは半端ではない。アルバム全体を通して一種のトータル・コンセプト的なロック・オペラになっており、ストリングスまでも導入している一方で、バンドのリーダーシップが明確なためか、破綻をきたすこともない。ラテン語のヴォーカルの味わいもよく、トリップの心象風景をよく出しきっている。 （法水）



ERICA POMERANCE (Canada)
You Used To Think
L P/ESP-1099 '68年
CD/(Ger.) ZYX Music ESP-1099

片目のくりぬかれたようなレコード・ラベル、裏ジャケのプリミティヴに色塗られた顔、まるで野性の狂った血だ。土けむりのように乾ききったギター、ドラム、ベースは抑制を失って溢れ、たれ流されてゆく、歯止めのきかぬ人間の精神性、本質のように野蛮でリアルだ。ただただ放浪して生きてゆくジプシーの如く、Ericaはうたう。それはうたなんかではなく、心臓や脳髄を貫く鋭い凶器だ。A①の何というハモり方だろう。どこから発せられる声だろう。体調が悪かったためしこたまラリってスタジオ入りしたB面はやはりA面ほどのワイルドさはない。彼女の長い活動に於いて、唯一のレコーディング・アルバム。 （平野）



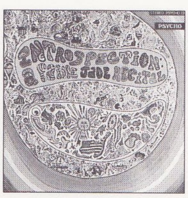
ERIK
Look Where I Am
L P/Vanguard VRS-9267 '?年

繊細にして脆弱な男性シンガーErikの恐らく唯一のLP。同タイプのヴォーカリストとしてはやはり優れたLPを残したDarius辺りに近いが、彼の時にエモーショナルなヴォーカルに比べて更に弱々しく、しゃくり上げる様な、叫んでいる様な物悲しさを残る。A①のようなミディアム・テンポの曲からB②の様なうっすらと漂うナンバーまで時代を感じさせるオーケストラ・アレンジも彼のヴォーカルにはまっている。殆どギターだけで漂っているA⑤のかげろうの様な、風に吹かれたらそのまま消えてしまいそうな繊細さが彼の魅力だろう。 （平野）



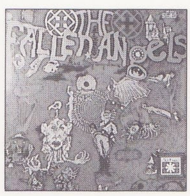
EUPHORIA
A Gift From Euphoria
L P/Capitol SKAO-363 '?年

まるで〝生命の炎〟とも言うべきものを、一枚のレコードの中に、その膨大な何かを刻み込んだ、孤高にして永遠とも言うべき魂の結晶—それは宇宙の中心で途切れることなく流れ続ける鎮魂歌（レクイエム）である。そこらにある多くの音楽から、全く無縁のものかのように遠く離れ、人々の日常の息づきをただ淡々と見つめ続けながら、彼らは歌う。オーケストラが流れ、そして様々な恐れやおののき、不安、所々で深い口を開け、彼らはその中をのぞき込む、そこには滔々と河が流れ、その河の流れは、悠久の時間の流れとなって瞬く星を映し出す、その幻投機は様々に起こりつつある事を一瞬のように映し出してゆくドラマであり、それは彼らの〝生〟の体験が生み出した、精神の軌跡である。背筋が震え出して止まらないのは何故だろう……。 （平野）



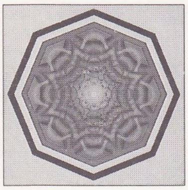
FAINE JADE
Introspection
L P/RSVP ES 8002 '68年
CD/PS 13

サイケのコレクターズ・アイテムとして有名、'80年代初期の例のPsycho盤も出ており、現在Psycho盤ブートまで出まわるこの作品を何を今更という気もしないではないが、これはプログレ・ファンにも受ける！などというよこしまな考えでカタログにのせてしまう気を起こすだけの魅力は確かにある（そんな〝これは何々〟と分類してしまうカタログほどつまらないのもないが……）。まあ、いい。要するにこのヴォーカルを聴いたとたんに、オオッと何かを連想してしまったりする良い声だ。曲の感じも良い。内容的にも非常に聴き易いので、是非一家に一枚！ （平野）



FALLEN ANGELS
It's A Long Way Down
L P/Roulette SR42011 '68年

夢を見るように漂うヴォーカル、物憂げなオルガン。FALLEN ANGELS の 2ndはアメリカのサイケデリックというよりむしろ当時のソフトな肌ざわりのブリティッシュ・ロックの名作に匹敵する出来映えだと言っていいだろう。TREESの漂う様な、思い出したかの様ないつしか記憶の底へと沈んでゆくあの音を更に夢見心地にしたかのようなA②、一方では初期マシーンにも通じるソフトなジャズ色も見られる。中にはB②の様に酔っぱらった演奏もあるが、こうした作風はむしろこの作品の中では異色だ。派手なジャケットを見て変なモノを期待せずにじっくりと味わって欲しい。 （平野）



FARM BAND
Farm Band
ＬＰ/Mantra 777　'72年

たまらんのォ。至福とはこういうことじゃ。スティーヴンという教祖を中心にしたテネシー州のコミューン・バンド。よくデッド・タイプとされるが、ヘッズを自認する俺の耳にはむしろ中期QMSに近く感じられる。さて、テネシーといえばＣ＆Ｗの本場である。そのルーツは開拓民が持ち込んだ伝承歌。テネシー東部にはアパラチア山脈があり、UK本国では消滅していた楽曲を求めて研究者が採譜に行ったのは有名な話で、それがフェアポート筆に繋がる。もうお分かりね、２LPに８曲しか収められていない、このナイス・トリップ・アルバムには西海岸サイケを基調に隠し味としてUKトラッドの芳香が漂っておるのだ。２ndのインサートによれば本作は発表後１年間で$2681分しか売れなかった。さもありなん。（星野）



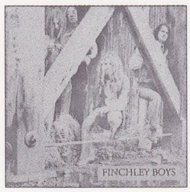
FAPARDOKLY
Fapordolky
ＬＰ/ULP 2250　'66年

数々のバンドをつくり(EXILES、MU、HMS Bounty等)、現在も活動中である、ウェスト・コーストを代表するシンガー・ソングライターである、メリル・ファンクファウザーがExilesに続けて、結成したのがこのファパドクリーである。典型的なガレージ・パンク・バンドだった前グループから比べて、作曲力が向上し、ファンクハウザーの長いキャリアの中でも、最も粒よりの作品で構成されている。ソフト・ロック的なおだやかさと軽さのある聴きやすい内容であり、もっと多くの人に知って欲しい作品である。後にMUになって、はっきりと示される楽園志向はここでも感じられ、ファンクハウザーのキャリアの基本的な部分はこのグループでつくられたと言っていいだろう。（関口）



FIFTY FOOT HOSE
Cauldron
ＬＰ/Limelight 86062　'68年

USAと並んでエレクトリック・ミュージックの文字通りパイオニア。テルミンやサウンド・オシレーター等の当時最新の電子楽器を使いこなした稀なバンド。後のホークウィンドのスペース・サウンドを彷彿とさせる音像空間を作りだしている。難をいえば、エフェクト的効果の域を抜け切っていない。その意味では、先駆者の難しさを如実に示している。曲調は、やや暗めパワー・ポップだが、USサイケでも屈指の女性ヴォーカルが実に魅力的なのは事実。考えようによれば、電子音をバッサリ切り捨てて女性ヴォーカルを前面に押し出した方が売れたかもしれない。（法水）



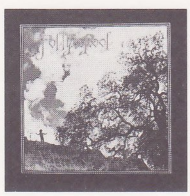
FINCHLEY BOYS
Everlasting Tributes
ＬＰ/Golden Throat 200-19　'72年
CD/Eva B28 852127

多くの人が、「サイケデリック」と聞いて、真っ先に思い浮かべるであろうサウンドです。キンクスの〝I'm Not Like Everdody Else〟をカバーしていますが、この曲を含め、全体的にハードで、ブルース調の曲が多いのですが、ノリは軽めです。こう書いて来ると、大したことのないように聞こえてしまいますが、唯一静かな曲であるＡ②ではギミックを凝らしており、その他の曲も、とにかくストレートではないのです。このクサリ具合が、アシッド・サイケ（基本的には、サイケはアシッドから発するのですから、重複した表現のようですが、ファズが効いていて、なおかつ「ハード・サイケ」「ヘヴィ・サイケ」と呼ぶほど、ハード、ヘヴィではないものを指すことが多いです）の名盤と言われる所以でしょう。（斉藤）



THE FOLKLORDS（Canada）
Releace The Sunshine
ＬＰ/Allied No.11　？年

トロントのAlliedレーベルの諸作はカナダのサイケデリック・アイテムの中でも、特に有名なものだが、本場アメリカの諸作品と比べてもひけをとらない、水準の高いラインナップは特筆に値する。プラスチック・クラウドやレイン・ゴースト、ニヒリスト・スパズム・バンドに比べると、あまり知られた存在ではないが、このフォークローズも重要なグループと言える。男女３人による、いたって地味な内容のフォーク・ロックだが、淡々としたメロディとハーモニーが実に美しい。薄暗く冷たい雰囲気がアルバム全体をおおい、夢の中で迷宮をさまよっているような、不思議な味わいを残す。ムーンストーンなどにも通じる、冷たく張りつめたような空気を感じさせるのは、やはりカナダ独特のものなのか。（関口）



FOLLY'S POOL
Folly's Pool
ＬＰ/Century PB126　'77年

〝WHITE LIGHT〟のLPで有名なレーベルCenturyの作品。さわやかなコーラスとアコースティック・ギターが生み出す清涼感溢れるウエスト・コースト・サイケの佳作。タイトで軽やかなリズムがしなやかでリラックスした心地良いサウンドを生み出す。曲の構成、展開は綿密に作られているが気負ったところはなく、曲作りはプログレッシヴであっても、我然活躍するのはギターやフルートでヨーロッパのプログレとは似ても似つかない透明感と明るさだ。タイプとしては同じウエスト・コーストの〝OASIS〟に良く似ている。(残念ながら女性voは入っていないが……) 非常に洗練された'70年代後期特有のサウンド。すがすがしいアメリカの風が吹いてくる。（平野）



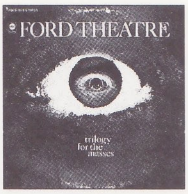
FOOD
Forever Is A Dream
LP/Capitol ST 304　'69年

どう見ても、ポップスのコーラス・グループですよね？　ところが本作は、ソフト・サイケの隠れ…ていたのが段々出て来た名盤だったのです！　これまた、曲によってオーケストラを配していますが、全体の出来としては、前述のコモン・ピープルよりも、更に上だと思います。また、ギターは、逆回転風の音や、音の立ち上がり方がフワッとしている部分については、心なしか（心なしだよ）ロバート・フリップに似ているのも、大きなポイントです。聖典によると、本作からの数曲が、B級ポルノ映画に使われたということですが、それもうなずきトリオ。(「うな付く」「うな突く」だろうから、仮名で書くと「うなづく」なのだと、私は30年以上思い込んでいました）そのくらい、全体に泣きが入って官能的なのです。　（斉藤）



THE FOOL
The Fool
LP/Mercury SR 61178　'68年

この、ヘンにカラフルな出で立ちとジャケット・デザイン、その上名前がTHE FOOLだなんて、カッコイイ！　ジャケットにあるバグパイプと、「サイケデリックの必需品」のタンバリンもちゃんと使って、様々なギミックも駆使して、曲調はポップなものから不可思議なもので色々あるのを、全て、このジャケットのイメージのとおりの、カラフルなサイケデリック・サウンドに仕立て上げています。どおりで、この人達は、デザイナーでもあったのでした。それにしても出来過ぎだなと思ったら、訳がありました。当時〝Evolution〟〝Butterfly〟と、ポップ・サイケの傑作を立て続けに出したばかりの、ホリーズのグラハム・ナッシュ（後のCSN & Yのあの人）がプロデュースをしていたのでした。流石ですね。　（斉藤）



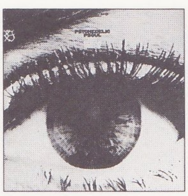
FORD THEATRE
Trilogy For The Masses
LP/ABC ABCS-658　'68年

リンカーンが暗殺された劇場が、フォード・シアターである。かなり過激なネーミングだが、これはブラック・ユーモアか？　リーダーのハリー・パーマ（ギター）は言う、〝暗殺ばかりの時代における若者達の不安や絶望を歌うのが我らの目的である〟と。彼等は大まじめだった。で、そこから生まれた音楽は、プログレである。アート・ロックである。大仰である。大曲である。コンセプト・アルバムである。ギターの音色がサイケな雰囲気を醸し出し、いまいち垢抜けないところが、B級好きの心をくすぐる作品。AB面をつなぐ効果音（エコーのフィード・バック・サウンド）があまりに安易なところも良い。'69年にミュージカル仕立ての2ndを発表したが、まじめ過ぎて売れなかったのか、それがラスト・アルバムとなった。　（サトウユキエ）



FRANCISCO
Cosmic Beam Experience
LP/Cosmic Beam BE-001　'76年

ドアを開けて、ハートを開けて、心を開いて、そして〝ヒーリング・ユアセルフ〟というラヴ&ピース、コズミック・ヒッピーの教義みたいなテーマで始まり、その後いきなりジャケットの世界の如く大宇宙に投げ出され、宇宙の中心で行われている出来事をそこで見、感じるトリップ体験としての感覚的な音世界が展開される。B面では〝Love Sweet Love〟の合唱のリフレインの後に、またもや幻覚的なトリップ・ミュージック展開され、それはさざ波のように集まり、嵐となって一つに結集し、空間を突き抜け、突き抜けた先に穏やかな境地が待っている、という内容。非常にプログレッシヴな感覚を持ったアメリカならではのコンセプト・アルバムだ。(Dr. John Lillyはジョン・C・リリー博士の事だろうか？）　（平野）



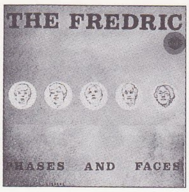
FREAKSCENE
Psychedelic Soul
LP/CBS CS9356　'68年

FREAKSCENEこれはその名の通り変形が進んだRockの畸型の一種だ。最近LOOPやRIDEの様に派手なエフェクトをまき散らかしてうわべだけの変形を装うネオ・サイケと称したどうしようもないバンドが後をたたないが、そうしたネオ・サイケの連中の音が1、2度聴けばやってることがバレてしまうのに反し、FREAK SCENEの音は聴けば聴くほど内部に何かが折れまがってゆくのを感じる。これだけアシッドを感じさせるバンドは滅多にない。何かコミューン的なつながりを持つバンドだったのだろうか。前身のDEEPの方もオリジナルに忠実に再発してもらいたいものだ。傑作。　（平野）



FRED NEIL
Sessions
LP/Capitol ST 2862　'71年

ティム・バックレーの「Dolphins」の作曲者、と言えばピンと来る人もいるかもしれない。しかし、真夜中のカウボーイのテーマ曲、ましてや来日し、ライヴがFMでも流れた事があったなんて私でも知らぬ事だ。残念ながら、この偉大なるシンガー・ソングライターについての私達の認識は情けない程に浅い。Sessions、表に録音日の記載、裏には各曲に何テイク目が記されている様に、その名の通りの形式を取ることにり、彼の内面性を色濃く引き出したフォーク界不滅の傑作だ。この声、余りに深く、例えばA④の様な8分に及ぶ楽器との絶妙さ、言葉では到底語れない。　（平野）



THE FREDRIC
Phases and Faces
ＬＰ/Forte 80461　'68年

ミシガン出身の４人組グループ。音の方はサイケデリックというよりは、ソフトロック的なポップさを持ったガレージ・サウンドの作品と形容した方が正解かも知れない。このアルバムの前にリリースされたシングルを聴くと、荒削りなガレージ・パンクよりのサウンドを聴くことができる。曲やアレンジなどはよく練られていて飽きさせない。最近ブームのために、数多く発掘されたソフト・ロック・アルバムよりも、ムダな装飾がなくシンプルで出来はよい。アルバムの中では特に、スローな淡々としたメロディーの曲が、軽やかで消えていくようなはかなさがあって魅力的である。数年前に再発されたブートが探せばまだあると思うが、なぜか１曲削られている。（関口）



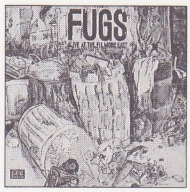
FREEDOM NORTH（Canada）
Freedom North
ＬＰ/Apuarius AQR 501　'?年

心がホッと満たされるような暖かなほんわかとして演奏に始まって、余りに瑞々しく溢れ出すFranki Hartの魅力的なヴォーカル、心打つコーラスが繰り広げる、〝FREEDOM NORTH〟そのものの世界。そんなＡ①、空気に溶ける風のいくつもの流れのような素晴らしいスティール・ギターと目の前に現れるオーロラのようにマジカルなカナダの空間、とても透明な、冷ややかな、その中に灯る火のように、彼らの音は一つになる。ジェファーソンばりのＡ③(何故かこれもカナダっぽい？)、その機が凍りついた水のように滴り落ちるミステリアスな、そして遠くの声を呼ぶようなリコーダーのメロディが印象的なＡ⑤、カナダらしい印象的なナンバーＢ①。Ａ面〜Ｂ①の何と、素敵な音だろう！　尚Frankiは後にRIVERSONを結成し、異なった枯れた味わいで聴かせてくれる。(平野)



FROGGIE BEAVER
From The Pond
ＬＰ/Froggie Beaver dsi7301　'73年

'68年あたりのものばかり書いていると、'73年というのは、バリバリの新録に思えて来ます。打ち込みやキツネ・ストリングスを使っていなければいいのですが。さて、本作は自主制作ですが、ジャケットはカラーなので、お金がなかった訳ではないのでしょうから、この図柄、何とかならなかったのでしょうか？　そのくらいジャケットはヒドイのですが、内容は仲々です。実は、プログレなのです。オルガンが中心ですが、「オルガン・ロック」というイメージほどヘヴィではなく、アコースティック・ギターも効果的で、アルバム全体がメロディアスなのです。モヤッとした感じも薄いですし、何故サイケデリックに分類されているのでしょうか？　曲がポップでない分、AFTER ALLよりも、プログレの人にはいいのでは？（斉藤）



FUGS
Golden Filth
ＬＰ/Reprise RS-6396　'68年

ファッグス、1986年６月１日、フィルモア・イーストでのライヴ。バック・ミュージシャンにリチャード・ティーやハワード・ジョンソン等が参加している、とても聴き易いアルバム。ファッグス、それはNYはグリニッジ・ヴィレッジのスター。詩人エド・サンダース（Ｃ・マンソンについてのノンフィクション「ファミリー」の著者）率いるファッグス。'65年の１st、'66年の２nd、'67年の３rdはもちろんすべて必聴のファッグス。サランラップを巻いていたすとか、コカコーラで洗えば妊娠しないとか、Ｈでお下品なファッグス。セックス、ドラッグ、ポリティカル、それがファッグス。なに言ってんだか解らんが、観客のウケが楽しそうで、語学力不足の自分が口惜しいファッグス。愉快なファッグス、楽しいファッグス。（サトウユキエ）



GANDALF
Gandalf
ＬＰ/Capitol ST 121　'69年
CD/(U.K.)See For Miles SEE CD 326

メロー・サイケの名作中の名作。今後ともこれ以上の音は発見されることはないことを予感させる。ほぼ全編にエコーのかかったそのヴォーカルは、ある一線を突き抜けている。曲の基本は、ビート・ポップに近いと見られるが、時おり顔をのぞかせるオルガン・ワークやアコースティック・ギターの響きの良さは他の追随を許さない。非常に繊細で、はかなさを感じさせる音だけに、聴きようによっては暗さに避易する人もいるだろうが、少しばかり我慢して聴いて欲しい。穏やかさと夢見心地が、サイケの重要な一面であったことを認識して欲しい。美しいの一言なのだから。（法水）



GANDHARVA
The Cosmic Sound Of Energy
ＬＰ/Sadhu 番号なし　'77年

LAの自主盤。'77年というあと追いの時期とは思えないスペース・マインドなアルバムだ。と言うよりもこの流れは'60年代より今も変わらず続いていると見た方がいいのだろう。さて中身だが、基本的にはアシッド・フォーク系。しかし鳴っている音は、エコーがかったヴァイオリンの響きや意味不明の打楽器類だったり、と結構さまざま。おかげでただの内向的なシンガーものに止まらない。が、それでもしかし、このシンガーの独白づいた内面吐露は、それだけで充分な説得力がある。静かな狂気とはこのことで、とにかく入る。そして入り出すとギターのボディを叩きながら「音楽」を踏みはずし、ただただこの男のオーラが残るばかり。全編通して風呂桶の中で録音されたような音が、効果大。深みあるなごみに陶酔できる。（松本）



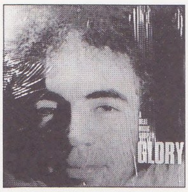
GENTEL SOUL
Gentle Soul
L P/Epic BN 26374　'68年

盤・ジャケットとも、発表年の表記はないのですが、26333の「火星ベーコン」が'68年ですので、'68年としました。さて、このジャケット、白黒でも充分虚ろでしょうが、現物は深緑で、更に虚ろです。ですから、どんなに暗い音なのかと思ったら、暗さは微塵もない、ドリーミーなフォークだったのです。ゲストも豪華で、まずライ・クーダーがあのスライド・ギターを、そして、細野晴臣も絶賛する「音の魔術師」晩大工パークスがハープシコードを弾いており、他にもフルートやチェロ等の神器が入っています。彼女、Maggie Hollandは、少しクセがあるものの可愛い声なので、まず文句のつけようがありません。なお、彼女は、'72年、そしてついに最近（太った！）にも、ソロ・アルバムを出していました。（斉藤）



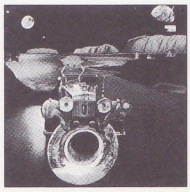
GEORGE BRIGMAN
Jungle Rot
L P/Solid SR-001　'75年

'70年代中期らしいダークなファズと実にアシッドな味わいを持つ低くクールなvoスタイルがSTOOGESばりにカッコいい派手なナンバー"Jungle Rot"で幕を開けるこのアルバム、全編このテンションで疾走すると思いきや、その後に続くナンバーがどれもローでしかも地味なので、がっかりするリスナーもいようが、逆に、ここからがじっくりと味わい深い聴き所だ。ファズ、vo共によりドップリと内側に入りこむA②、ファズなしで地味だが滑らかなギター・サウンドによってサイケデリックな混濁感がより透明に浮き上がるA③、神経的なアシッド・ブルース・ギターが催眠的な曲調の中で溶けてゆくA④、A④にも増してよれよれと蜃気楼のように酩酊するブルース・フォークA⑤と、クールな名曲がずらりと並ぶ聴き応えのある傑作。再発も出ており、手に入り易いので、必聴。（平野）



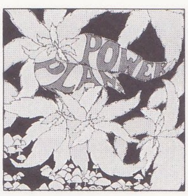
GLORY
A Meat Music Sampler
L P/Texas Revolution TRR 69　'69年

Mayo Thompsonと同じTexas Revelutionレーベルの作品だが、彼のソロと並んで、傑作の多いテキサスのサイケデリック・シーンの中にあってもあらゆる意味で際だった作品が本作。Meat Music Samplerという異様なタイトル、正に、Liden Hudsonという人物のある種異様に屈折した心理状態がそこには展開され、彼のヴォーカル以外には曲によってパーカッション、オルガン、ギター等が最小限に加わるに過ぎなく、生々しい一つのアシッド・サンプラーと言える。非常に地味でありながら、聴き込めば聴き込むほどに彼の狂的な感性がひしひしと伝わる素晴らしい作品である。（平野）



GODZ
Godzundheit
L P/ESP-2017　'73年
CD/（Ger.）ZYX Music ESP-2017

ESPレーベルの中心的役割を果たしてきたグループであるゴッズは、同レーベルに４枚のアルバムを残している。楽器がほとんど弾けず、犬や猫の鳴きマネまでやってのけていた初期のアナーキーなサウンドが、一般的なゴッズのイメージだが、'73年に発売されたこの４枚目のアルバムでは、サウンドが大きく変化して、軽い感覚のフォーク・ロック・スタイルになっている。下手ではあるが、曲がりなりにも演奏をしている彼らの姿を想像すると隔世の感がある。初期のサウンドのファンからは、失望やレイド・バックだと断罪する非難を出そうだが、ふやけた、デロデロに溶けたようなアシッド感覚は健在で、やはり一筋縄ではいかないサウンドになっている。個人的にはこの作品が、最も愛すべきゴッズのアルバムである。（関口）



GOLDEN DAWN
A Power Plant
L P/Internatinal Artists IA-LP 4　'67年

テキサス・サイケの中心的な役割をしたレーベル、インターナショナル・アーティストは、２人グループ、13TH FLOOR ELEVATORとRED CRAYOLAのおかげで有名であるが、この２バンドの他にリリースされた作品も良質の内容であり、このレーベルの先見の明は称賛されるべきであろう。このゴールデン・ドーンも同レーベルより１枚のアルバムを残して消えたグループだが、内容はアメリカのサイケデリックの中でもトップ・クラスの内容である。ガレージ・パンク的な要素を多く残しながら、独特の浮遊感をつくり出しているところが魅力的である。またＡ面での内省的なナンバーの沈んでいくような美しさも味わい深い。グループ名はアレイスター・クロウリーの本から取られている。（関口）



GROWING CONCERN
Growing Concern
L P/Mainstream S/6108　'68年

当時のシーンでは、コーラス・ハーモニー抜群というバンドが少なくないが、このバンドも見事なハーモニー・ワークを聴かせてくれる。と同時に、当時のメインストリームのレーベル・カラーとでも言うべき乗りの良いディストーションの効いたギターがいい味を出している。本作のいい所は、ハード系ではなく、メロー系の曲の中で、実に自由にギターが泳ぎまわっている所にある。もし、ディストーション一本に頼った音作りに終始したならば、凡白のガレージ・パンクでしかなかったろう。自分の個性を生かしきったが故、すぐれたアシッド・サウンドが生まれた。（法水）



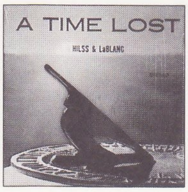
GTO'S(GIRLS TOGETHER OUTRAGEOUSLY)
Permanent Damage
LP/Straight STS 1059 '69年
CD/Enigma 7-73397-2

コレクター泣かせの１枚だ。なにしろザッパは勿論ローエル・ジョージやジェフ・ベックのマニアも、これを買わねばコンプリートにならないのだ。ザッパ関連ならば正規・非合法、果てはバンド・メンバー参加作まで見掛ければ片っぱしから買っていた８年前の病人だった俺も、本作だけは二の足を踏んだ。何しろ７割方がやかましい女の喋くりで、ベックなどセッション史上最低と酷評されている。狂人時代の俺も手が出せず、大人しくCD化を待った。６年振りに耳にしてみたら、これは素晴しい!! チベット密教の呪文のCDが愛聴盤だから喋くりなんかチョロイチョロイ。ジョージ等のペンによる曲がヘタウマ・コーラスでとんでもなくキッチュ!! 大切なことを忘れてた、ザッパ周辺に屯していたグルーピーが残した珍盤なのだ。 (星野)



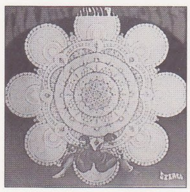
HEAVEN & EARTH
Refuge
LP/Ovation OVQD-1428 '73年

女性二人組によるソフトなアシッド・フォーク・アルバム。他にHOLLINS & STARR「Sidewalks Talking」等の佳作をリリースしているOvationレーベルから1973年に出されたもの。ポップでありながら、実に穏やかに、控え目に作られたアルバムで、その分二人の透き通るような、時には虚ろでミスティックでさえあるヴォーカル、ハーモニーが全曲に渡って、際だった美しさを見せている。曲調は全体的に幾分暗めで、しっとりと落ち着いた、沈んだムードを湛え、胸の中の空洞の様な、独得の印象を残す。特にタイトル曲〝Refuge〞の虚ろさと境地はLinda Perhaesを想い起こさせる。曲名も〝Voice in the Wind〞、〝Feel the Spirit〞等印象的な曲名が、内容を物語っている。女性voのFolk/Psychedelic系LPの中でもバランスのとれた内容のものとして知られる。 (平野)



HILSS & LABLANC
A Time Lost ...
LP/AR3939 '?年

最近になって発掘されたアシッド・フォークの作品。クレジットを見ると作曲された年が'69年から'74年までと多岐にわたっているが、静かな統一感があって、アルバム全体にトータル性があるような感じである。ハデな展開も、前時代的で大ゲサな歌詞も、ましてやメロトロンの洪水もない、淡々とした内容であり、文章に書きようがなくて途方にくれてしまうが、好きなレコードであることは間違いないのである。今回はこのように文に書きようのない作品が多くて困るのだが、音楽は結局のところ曲と歌が良ければそれで十分なのだということか。別に音楽はプログレッシヴである必要はないのである。 (関口)



HOLY MODAL ROUNDERS
Indian War Whoop
LP/ESP 1068 '68年

ファッグスの１stや３rdのレコーディングに参加しているピーター・スタンプフェルとスティーヴ・ウェバー。この２人組が、ホーリー・モダル・ラウンダーズだ。彼等は'63年にNYで出会い、'64年に１stと２ndをプレスティージから発表。そしてこれはESPにたった１枚残された３rdアルバム。ギター＆ヴァイオリン中心に奏でられるトラディショナルやオリジナル・ナンバーの数々。針を落とせば、滅茶苦茶明るいアシッド・フォークの世界が、リスニング・ルームいっぱいに広がるのであった。元気いっぱいの能天気サウンドだ。その後、彼等は、エレクトラ・メトロ・メディア、ラウンダー等に移籍しながら'70年代末まで活動。ちなみに映画『イージー・ライダー』のサントラにも彼等の曲が収録されている。 (サトウユキエ)



HUNGER
Strictly From Hunger
LP/Public P1006 '69年
CD/(U.K.) Afterglow AFT010

「お～腹が減ったよ～」と言えば、「ちびまる子ちゃん」で、時蔵じいさんの声を担当していた（フツーは「ヤマト」を代表作とするんですよね）富山敬さんがお亡くなりました。この歌から、バンド名と本作のタイトルを取った（ウゾ）ハンガーは、ギンギンのオルガン・サイケです。と言っても曲は少しポップで、ハードではなく、ヘヴィと言うほどでもないので聴き易く、プログレの方には、よろしいのではないでしょうか？ これからと言うところで、瞬時にフェイド・アウトしてしまう曲があるのが残念ですが、５分を越える曲が３曲、そして７分を越える曲もありますから、そこを何とか……。PsychoからのLP再発では分かりませんでしたが、CDが出て、ジャケットはカラーだったことが分かりました。 (斉藤)



ID
Where Are We Going
LP/Aura Records AR1000 '76年

'75年冬にNYで録音されたこのアルバム、ゲイリーとデヴィッドのオイックル兄弟を中心に製作された、まあいわゆる自主盤。メロトロンに導かれ、Ｂ級プログレっぽくアルバムは幕を開ける。中身はこれでもか、これでもかと、しつこいくらいのスペーシー・サウンドの嵐、嵐、嵐。弾きまくるギターとフランジング等のエフェクトがサウンドの要。ＡＢ面に分かれて収録されている大曲のタイトル・ナンバー。とにかく弾きまくる。申し訳程度にはいるヴォーカルの下手っぴ具合も微笑ましい。で、また、弾きまくる。いいドタバタ加減のキメがあり、また弾きまくる。Ｂ面もさらに弾きまくる。ラストのインスト・ナンバーで狂ったように弾きまくる。で、思ったとおり、爆発音で幕を閉じる。なかなか楽しいアルバム。 (サトウユキエ)



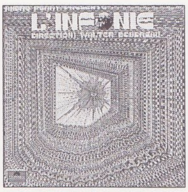
THE ILL WIND
Flashes
LP/ABC ABCS 641 '68年
CD/(U.K.) Afterglow AFT012

このジャケットを見て、「良さそうだ」と思った方には、間違いありません。少し喧しい感じの曲もあるのですが、全体的には、モヤッとした緩いサウンドで、ジャケットのとおりのアシッド・サイケです。ラストの〝Full Cycle〟では、それが頂点に達し、気だるさの中で、身体は浮かんで行くのに、精神は沈んで行くのです。また、リード・ヴォーカルは男性の曲が多いのですが、コニーちゃんの歌う〝Dark World〟は、悲しみに満ちた、珠玉の名曲です。籠り放大のむせび泣くファズ・ギター・ソロと、それに続く、悲しみを煽るソロ・バッキング、そしてコニーちゃんは美人で声もキレイ、これが珠玉でなかったら、THIRD ESTATEが珠玉でしょう。ボーナス・トラックが6曲も入っているCDは必携！ （斉藤）



INDEX
Index
LP/Voxx VOXX 200.023 '67年

'84年にリリースされた、Voxxからの再発も最近は見なくなったINDEXの2ndアルバム。基本的には稚拙な部分の多い、ガレージ・パンク・バンドだが、異常にこもった録音と、デタラメなバランスでかましてあるリヴァーブやファズ・ギターが、強裂に耳に響いてくる。その様はまさにサイケデリックとしか言いようがない。おそらくは劣悪な条件下での録音が生み出した、偶然の産物だと思われるが、あまりにもプリミティヴで、白痴のごとき表現のスゴみは、他に類をみない。バーズのカヴァー等も含まれるが、(ほとんど原形をとどめてないが）バンドのオリジナル・ナンバーが大半を占め、曲の水準そのものは高い。B面最後の、怪物の咆哮のようなファズ・ギターの音塊が全てを物語っている。 （関口）



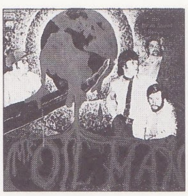
L'INFONIE (Canada)
L'infonie
LP/Polydor 542 507 '00年

リンフォニーの唯一のアルバム。トランペット、フルート、ピアノ、サックス、クラリネット、ベース、ギター、キーボード、ヴィオラ、パーカッション・シンセサイザー等、多くのミュージシャンが参加している。A面は4つのパートから成る組曲であるが、上記メンバーが一体となったオーケストラ的なものではなく、サックス、ベース、キーボード等のソロを主体としている。曲調はポップなものからフリー・フォームなものまで多岐に渡る。B面は6つの小曲を集めているが、これまた、ヴァラエティに豊んだ音作りがされている。中でも演劇的語り、ムーディなトランペット、フリーなサックスが印象に残る。個々には良質な部分も見受けられるが、1つの作品としては焦点が定まらず、散漫な感が否めない。 （賀川）



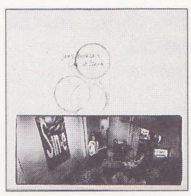
IT'S A BEAUTIFUL DAY
It's A Beautiful Day
LP/CBS 9768 '68年
CD/SFS 11790

イッツ・ア・ビューティフル・デイのサウンドを、今、プログレッシヴ・ロックと呼ぶには多少の無理があるかもしれない。ニュー・ロックの時代を経て、'70年初頭、イギリスにおいてプログレッシヴ・ロックは幾つかの類型を生み出した。その後、それはジャーマン・シンセサイザー・ミュージック、また、オパス・アヴァントラ、ピエロ・リュネール、ウィリアム・シェラーら「ロックの枠を越てたロック」とも言われる特異な作品のリリース等によって、多少なりともその幅を広げた。しかし、本作品で聴くことのできる演奏はそうした範疇に属するものではない。けれども、当時彼らは正にプログレッシヴであった。メロディアスなヴァイオリンと女性ヴォーカルが印象的な〝ホワイト・バード〟を聴く時、彼らの斬新な姿勢と時の流れに色褪せない真の名作の意味が分かるだろう。 （賀川）



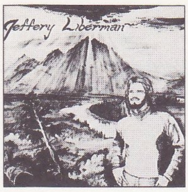
JARVIS STREET REVUE (Canada)
Mr. Oil Man
LP/Columbia 90020 '70年

カナダはオンタリオ州のずっと西、Thunder Bay出身のグループ。Thunder Bayの土地柄か、汚染をテーマにした、正にオイリーな感触のサイケデリックなコンセプト・アルバムでありCanada Columbiaのレーベル中、「It's All Meat」と並んで最も人気の高い作品として欧米では良く知られている。大曲指向であり、'60年代末ならではのドロッとしたサイケデリック感覚に浸りたい向きには、うってつけのアルバム。原盤のジャケットはぶ厚いダブル・ジャケットで、工場群や廃液、煙突等の絵がコラージュされた内ジャケ、表は広げると、涙を流したジーザスがドロドロの地球を抱えるという作りになっている。ブートレッグでLP再発されているので、是非、聴いてみては？ （平野）



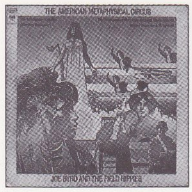
JEFF BUCKLEY
Live At Sin-E
LP/Columbia 9870-77296 '93年

テレキャス一本を抱え、絶妙のシンキング、心の内側を覗かせる、その感情の生き物のようなヴォーカル、父ティム・バックリーのうたは知らなくても確実にこの血を受け継いでいる。現在、これだけのうたを聴かせるシンガーが他にいるだろうか。その〝うた〟が持つ力はこの時代に唯一無比、圧倒的なものだ。彼は他にも幾つかLP（CD）を発表しているが、バック・バンドに支えられ安定したサウンドの中でうたうそれらのレコードよりも(勿論内容は秀れているが)聴き手の心をダイレクトに突き刺す本作が素晴しい。 （平野）



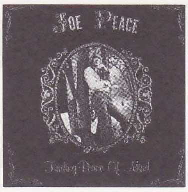
JEFFERY LIBERMAN
Jeffery Liberman
ＬＰ/Librah 1545　'75年

山のふもとでオヤジがニカッと笑っている妙なジャケでどうも印象を損ねてしまうし、キラー・ギターばかりで評価されていて、きちんと語られる事が少ないこのアルバム、実は名盤である。彼は３枚のLPを同レーベルから発表したが、２ndはギターの比重が大すぎ、３rdはポップで洗練され喰い足りなさが残るため、本１stの出来が一番良いだろう。しみじみとした哀愁を込めたフォーク・ロック・ナンバーに於ける彼の深い切りを漂うようなvoがとても素晴らしく、じっくると聴かせる。ヴォーカル・ナンバーと対比を見せる、ギターのソロも波のうねりの如く移ろう心の様に、聴き手を突き刺す、文字通りキラー・ギターだ。Ｂ面はＡ面に比べると〝様々なギター大会〟になってしまってＡ面の凄さはなく、残念……。　(平野)



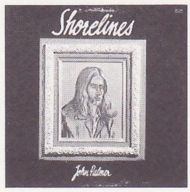
JOE BYRD AND THE FIELD HIPPIES
The American Metaphysical Circus
ＬＰ/CBS 7317　'69年

ブリティッシュ・ロックが持つ味わいが閉鎖的・内向的なスタンスによって構築されたオリジナリティによる物であるとすればアメリカン・ミュージックが持つ味わいは、逆にマルチ・カルチュラリズムが優性遺伝を繰り返した末の産物のようなものであろう。本作は一人のコンポーザーが〝人種のるつぼ〟アメリカで得られる様々のアイデアを単なる〝個々の音〟としてとらえるにとどめず、理性的・思惟的又は独特な直観によってとらえた究極のエッセンス集合体である。それは、初めてサーカス小屋を見に行った時の様な不思議でかつスリリングな感覚であり、まさにアメリカ。　(宇藤)



JOE PEACE
Finding Peace Of mind
ＬＰ/Rite 29917/29918　'72年

ジョー・ピースなるオハイオ出身のシンガー・ソングライターが残した唯一の作品。今回選んだ、シンガー・ソングライター物や、フォーク・ロック作品は、オーソドックスなスタイルで目立った特徴もないため、いい加減書くことがなくて困ってしまうが、この作品もその１つであり、ファズ・ギターが多くフィーチャーされたフォーク・ロックアルバムと言う以外さしたる形容のしようがない。だが、曲や歌の魅力を丹念に探っていけば、きっと忘れられない１枚となるに違いない。カルト系やジャーマン系のように派手なフリーク・アウトの部分に耳が奪われているうちはわからないかもしれないが、もっと音楽の基本的な部分に立ち返ったときに聴いてみてほしい作品。　(関口)



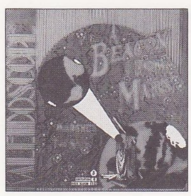
JOHN PALMER(Canada)
Shorelines
ＬＰ/Celebration 1868　'71年

オランダの〝Rainman〟を想わせる風貌を持ったシンガーJohn Palmer恐らく唯一の作品。内ジャケの荒涼とした海辺で打ちひしがれて一人チェスをしているという光景で、おのずから作品の内容は想像がつくだろう。引きずるようなドラム、マイナー・キーのピアノ、オルガン、アコ・ギ、時に顔を出すファズ・ギター、灰色の空の下を足をひきずるように彼の声はさまよい、重い魂は時々一筋の光明を見い出したかの様にミステリアスな高みへ昇華するが、それは一瞬の雲の切れ目のように、またもとのShorelineをたどってゆくようだ。波に洗われるように、過ぎ去ってゆく年月のように果てしない空の下を迷うシリアスなサイケデリック・アルバム。　(平野)



JUDY HENSKE & JERRY YESTER
Farewell Aldebaran
ＬＰ/Straight STS-1052　'68年

Tim Buckley、 Tim Dowe、GTOS、Jeff Simons等アシッド・フォーク、サイケデリック的な作風に特徴が見られるStraightレーベルからの作品。Judy Henskeはユニークなvoを聴かせる何枚ものソロLPをこれまでに発表し、Jerry YesterはMFQで活躍してきた。本作は、彼のヴァラエティに富んだセンス良いポップ感覚に、彼女のヴォーカルが活かされ、秀れたバランス感覚で作り上げられた円熟期の作品。非常に聴き易く、メロウなポップ・サイケの人気作と言えるだろう。彼女の歌は、プログレ系の女性voファンにも広く受け入れられると思うのだが。彼らは、同レーベルからもう一枚〝Rosebud〟という名義でもLPを発表しており、こちらは本作ほど聴き易くはないが、出来はまとまっている。　(平野)



KALEIDOSCOPE
A Beacon From Mars
ＬＰ/Epic BN 26333　'68年
CD/(U.K.)Pinnacle EDCD 288

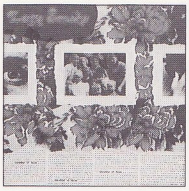
伸びやかで陽気な明るいカントリー調サウンド。しかし何かが違う。その裏側にある何かが心の中に浸み通ってゆく感じ〟カントリー・ロックであってもまるで違った何かが……。もし、イギリスだったらイギリスならではの感性のひらめきを持ったサウンドがあるとするならば、このKALEIDSCOPE、CHARLATANS、MAD RIVER、Mayo Thompsonといった連中の音はアメリカならではのそれである。この音はプログレ・ファンには相当キツイだろう。しかし、国や時代を超えて、何か共感を呼ばずにはおれない。こうした〝Acid〟達の感性サウンド、多くの人に聴かれ、愛されるべきだ。　(平野)



KAREN DALTON
It's So Hard To Tell Who's Going To Love You The Best

CD/ヴィヴィド・サウンド VSCD540 '69年

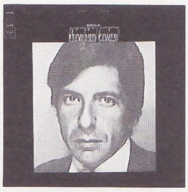
'50年代末からグリニッヂ・ヴィレッジで歌っていた女性フォーク歌手でフレッド・ニールやボブ・ディラン、ディノ・ヴァレンテ（後にQMS）と親交があったという。本作に至る迄の経緯は、日本盤CDの鈴木カツ氏によるライナーに詳しいので御一読を。デビュー作である本作の時点で彼女は既に30歳前後、最低限のバックをつけた12弦ギター＆バンジョー弾き語りによる余裕綽々なフォーク・ブルースである。恩人フレッド・ニール、レッドベリー、おそらくは旧友であるティム・ハーディン等のカバーに伝承歌２曲とオリジナルは１曲もないが、全てが彼女の血となり肉となっている。多少のアシッド感覚もあるが、それは時代の空気であろう。'72年にウッドストックで録音した２ndはSSWファン必聴の名盤。（星野）



LAZY SMOKE
Corridor Of Faces

ＬP/Onyx ES 6903 '67年
CD/(U.K.)Afterglow AFT 003

ビートルズの「サージェント・ペパーズ」に触発されて、'60年代末には、多くのバンドが、それを目指したアルバムを制作しました。本作は、多種多様な楽器の導入とか、テープ編集でコラージュだの逆回転ということはしていませんし、第一、それと同じ'67年の発表ですから、そういうつもりではないのでしょうが、そういう風に聞こえます。まず、コーラスがそれ風なのでビートルズに似ていると言え、そして、凝ってはいないものの、曲は初期ビートルズほどシングル向きではないので中期に近いということです。キーボードを使っていないのに、音がこれだけカラフルというのは、大したものです。同系統で語られ、近年LP再発が出たZERFASよりも、メロディーがしっかりしている分、私はいいと思います。（斉藤）



LEONARD COHEN（Canada）
Song Of Leonald Cohen

ＬP/Columbia CS9533 '67年
CD/Columbia 9533

国内盤を再発され、テイム・バックリーとともに、やっと正当な評価をされるようになったコーエンを、今さらこんなに小さいレビューで書くのも間の抜けた話で、本来ならカナダで最も大きく扱われるべき人である。まあ編集方針の不備をつついてもしょうがないが。コーエンに関しての詳しい話は色々なところで紹介されているので今回はパス。個人的に最も好きなアルバムである１stを取り上げさせていただく。３rdアルバムとともにコーエンの最高作であろう。“スガンヌ”や“シスターズ・オブ・マーシー”等、今や古典となった代表曲が並ぶこのアルバムでは、コーエンの歌唱も瑞々しく、新鮮な抒情を孕んでいる。素材なつぶやきの内に内省的な情熱が高まっていく様は、このアルバム独自の味わいである。（関口）



LIGHTDREAMS（Canada）
Islands In Space

ＬP/IS 2001 '81年

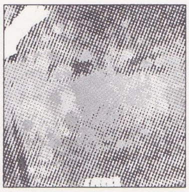
ウエスト・コーストの風を受けたなだらかなアコースティック・サウンドにエレクトロニクス、風など効果音、逆回転エフェクトがコラージュされたスペイシーなコズミック・フォーク。宇宙への憧景が夢見心地に綴られる穏やかな明るさを持ったコンセプト・アルバムで、きめ細かく、丁寧に、感覚的なものを大切に作られているため、この種に有りがちなイージーなサウンドに陥らず、良い意味でのプログレッシヴな音に仕上っている。本作は'81年にバンクーバーで自主制作されたもので、voも含めマルチに楽器を操作するPaul Marcanoを中心に数人によって、Teacの４chカセット・デッキで録音されたもの。本作にはStone Age Music（この意味が分かるかな？）というサブ・タイトルが付いており、〝Iride The Wind〞〝Solar Winds〞といった曲名も彼ららしい。（平野）



LINDA PERHACS
Parallelograms

ＬP/Kapp KS 3636 '70年

風が吹く虚ろな草原の幻、妖精の囁きの様に風は舞い、折り重なり、地表にそっと降りる――そんな流れるようななだらかなギターと透き通る彼女の歌はあまりにひそやかで、ハワイの奥、どこからか、こんこんと流れ出る人知れぬ泉、穏やかに続く山の高み、そうしたものが生み出した、自然の不思議な歌かと思ってしまう。Ａ①コーラス、Ａ②のクールすぎる（!!）ブルース、高みに達しそうなＡ③、アメリカ大陸とは全く異なる、ハワイでしか生まれ得ぬ、素敵な音楽だ。ハワイのサイケには他にホノルルのSinergiaレーベル作品が知られており、サイケデリックなジャケットが印象的なソフト・サイケILLUSIONや本選でも紹介しているTHESE TRAIL等が有名。（平野）



THE LITTER
$100 Fine

ＬP/Hexagon 681 '68年
CD/K-TEL 10002

１stアルバム。「DISTORTIONS」のファズの嵐、ぐちゃぐちゃカヴァー・ヴァージョンも勿論最高だけど、味わいではこちらの２ndの方が数段上か？　オリジナル曲も随分演ってるし、とにかくアルバム作りに対しての団結感と意気込みが伝わってくる。９分にも及ぶゾンビーズのカヴァーや、テープ・フェイズ、自分たちの曲をコラージュしたものにムーグ・シンセを絡める等、『どーだ、サイケだぜぃ』と言わんばかりの出来が最高。このバンド、余りにギターが強烈なので、殆どの人がヴォーカルの良さを見逃しがちだが、歌い上げ過ぎないクールでポップな声が、熱い演奏をほど良く冷ますという絶妙のマッチングはポイント高し！　どんな精神状態でも心地良く聴くことが出来るこの快作、聴かなきゃ大損だ。（長谷川）

LOST & FOUND
Everybody's Here



LP/International Arttists IA LP# 3 '67年

インターナショナル・アーティストからアルバム1枚をリリースして消えたロスト＆ファウンドは'65年にヒューストンで結成された。音の方は同レーベルのイメージから比べるとおとなしめの印象を受けるフォーク・ロック・スタイルのサウンド。全体にラヴからの影響が強いと思われる。曲はどれもよく練られており、バンドの実力はかなり高い。A面では同じレーベルに所属した13thフロア・エレベーターズの1stに収録された名曲〝Don't Fall Down〟がカヴァーされており、ロッキー・エリクソンのテキサスでの地位の高さが感じられ面白い。B面ではフラッシュ・バックしてくるようなロング・トラックも収録されている。（関口）

LOTHAR AND THE HAND PEOPLE
Space Hymn



LP/Capital ST-247 '69年

ローサーとは、テルミンにつけた名前だそうである。バンドは、他に2台のムーグやアンペックスのテープ・デッキを駆使して演奏している。コロラド出身の彼等は、まずサンフランシスコへ、そしてNYに活動場所を移し、デビューとなった。これは2ndで、'68年に発売された1st同様、怪しげな電子音が飛び交うポップ・ソング満載のアルバム。この独得な雰囲気は、確かに実験的なサウンドによるところが大きいのだが、それだけではない。曲作りにおけるポップ・センスが、妙にブリティッシュ臭いところも大きな要因だ。英国のみでシングル発売（B面）された〝Today Is Only Yesterday's Tomorrow〟など、煙に巻かれたような、本当、捉えどころのない不思議な魅力を携えた素敵なナンバーである。（サトウユキエ）

LOVE
Forever Changes



LP/Elektra EKS 74013 '67年
CD/ワーナー・ミュージック WMCS-382

このアルバム、1978年に発行された50人程の欧米のロック・ジャーナリストが選んだアルバム200選の中で、第16位にランクされていた。当時、日本ではレコード未発売で無名のバンド、ラヴ、それが欧米でこれほど評価が高いとは…。サイケ系のアルバムでこれより上位にあったのは、ヴェルヴェットの1stだけ。すなわちこれはサイケのベーシック・アルバムだったのだ。シスコ最古参ロッカーのひとりであるアーサー・リー率いるラヴ。ジミ・ヘンとの交友関係でも有名なアーサー・リー率いるラヴ。'66年のデビュー・アルバムがエレクトラ初のロック・アルバムだったラヴ。そして今では、3rdアルバム（本作）が裏「サージェント・ペパーズ」とまで称賛され、日本盤CDもちゃんと発売されている……ラヴ。（サトウユキエ）

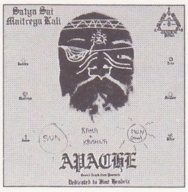
MAD RIVER
Paradise Bar And Grill



LP/Capitol ST 185 '69年

ジャケも音の方も一見間違いなくカントリー調だ。アコースティック・パートのちょっとした指使いさえ丹念で、このあたりはトラッドの肌目細かな音使いと同じ、雰囲気だけでは済ませない感情の込め方を感じる。でもこのアルバムは違う。表面のカントリーの穏やかさ軽やかさのある音とは裏腹だ。特にヴォーカルはおそろしく奥が深い。歌の底で情念が渦まいているような、それを押さえ切れず声に情念が混じって出てくるというふうだ。ジャンルを越えた感動的な歌だ。A④あたりに聴くかげりは、こわい。が、誤解されやすい音楽だとは思う。シンプルだ。（松本）

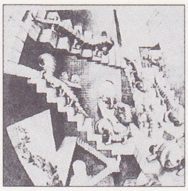
MAITREYA KALI
Apache



LP/Akashic CF2777 '71年

'71年にカリフォルニアでリリースされた、アシッド・フォーク・アルバム。ドラッグ・カルチャーの申し子のような、カルトな雰囲気に満ちた1枚で、霧のようにかかったリヴァーブのもやの中で、淡々と抑揚のないメロディが、さびしく弾き語りで歌われる。多分に独白めいた空気があり、ダウナーな世界を彷徨っているかのようである。ジャケットを見ると、作者がペルーやブエノスアイレスなど、南米を放浪しているスナップが収録されていて、宗教や神秘体験へのこだわりはかなり深そうである。ビーチ・ボーイズのマイク・ラヴが参加したトラックもあり、チャールズ・マンソンの例を持ち出すまでもなく、当時のドラッグ関係の錯綜した人間関係を窺わせる。数年前に（多分）未発売トラックを集めた2ndがリリースされ、マニアを驚かせている。（関口）

MANDRAKE MEMORIAL
Puzzle



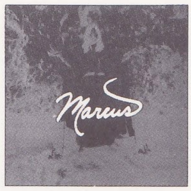
LP/Poppy PYS 40006 '70年

凝った音作りをして失敗した例は多いが、これは例外組。オーケストラを使ったサウンド・エフェクトにも意を配った佳品。エッシャーのジャケット通りの、円環上のトータル・コンセプト・アルバムであるが、アイデア倒れでない所は立派。サイケ・バンド特有の気だるいヴォーカルは決してうまくはないが、味わい深いものがある。全体に静謐感が漂い、盛り上がりに欠けるきらいがあることは事実だが、アレンジ・ワークに冴えを見せ、エコーの使い方のセンス等は見事だし、両面50分の長さが気にならない。聴いてみると喜ぶ人も結構多いのではないだろうか。（法水）



MARCIA MEYER(Canada)
Phases
LP/WRCI-1922　'81年

アシッド・フォークと言うよりは、ブリティッシュの女性ヴォーカル・フォーク系に近いサウンド。ブルース色の強いA①を聴くと何だと思ってしまうがA②からは全編に渡ってアコースティック・ギター、フルート、彼女のvoがトロントロンと夢見心地に響き渡るトータル・アルバムで、それは不思議の国のアリスの世界に迷いこんでしまったようにファンタジックな、甘い芳香に満ちた世界である。'80年頃に製作されながらも、まるで'70年代初期に作られたかのようにドリーミーな作風が魅力だ。'70年代中期から'80年代にかけて、バンクーバーでは特にプライベート・プレスのレコードが数多くリリースされ、その中には、洗練されたメロディアスな作品が幾つも有るが、本作の様な作品は他に見当たらない。　(平野)



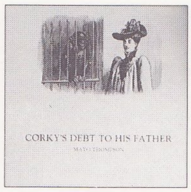
MARCUS
From House Of Trax
LP/NR 10788　'79年

MARCUSというグループ名は幾つか有るが、これは'70年代後期にプライベート・プレスで製作されたMARCUS。まるでGeorge BrigmanかSUICIDEを思わせる心地よいパルスを打ち出すドラムの録音。フェイズ・シフターを通されうねるシンセ、ダークに響くファズ・ギター、ヴォーカル、彼の感覚の趣くままにエフェクト操作された音群が、ジャンキーなサイケデリック空間を生み出している。A①などは彼の深いヴォーカルが生かされた曲でとても良いが、他の曲は細部のリアリティに欠ける嫌いはある。非常にわかりやすく、聴き易い作風なので、日本のリスナーが期待する〝アシッドな感覚〟のイメージを満たす作品だろう。ジャーマン・ロック系の大味な音に飽きた人は聴いてみて欲しい。　(平野)



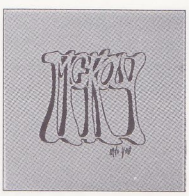
MARY BUTTERWORTH
Mary Butterworth
LP/Custom Fidelity CFS 2092　'69年

何が特徴的かって、ドラムスにかかりまくるエコーがもうしつこいのなんのって、凄いデス。メアリー・バターワース唯一のアルバムだ。ギター、ベース、ドラム、オルガンの4人組。ハモンドに彩られ、凝ったアレンジ、これぞアート・ロック。ハモンドとドラムスは全編に渡って弾きまくり、叩きまくりの素晴らしいプレイを聴かせてくれるし、ギターの腕もなかなかだ。各メンバーとも実力はかなりしっかりしているので、出来は抜群の1枚である。しつこいまでのエコー・サウンドも個性的かつ効果的(思わず笑ってしまうほど思い切りのいいエコー具合だ)。ちょっと長めのナンバー全6曲、もの足りん、もうちょっと聴きたい。オリジナル盤は相当なレア盤だが、'80年代初頭にアナログ盤でリイシューされている。　(サトウユキエ)



MAYO THOMPSON
Corky's Debt To His Father
LP/Texas Revolution 2270　'69年

フリークス・サイケデリアの傑作とされるRED CRAYOLAの1st、逆に編成を最小限に突き詰めることによってCRAYOLAというバンドの凄さと畸型性を極立たせた素晴らしい2nd、そのRED CRAYOLAのFreaks性の核と言えるのが、Mayo Thompsonだ。その彼のソロはスライド・ギター、フィドル、ベース、オルガンをバックに据えたのどかで陽気なフォーク・ロック・アルバムなのだが、彼の絶妙な心の隙間をぎりぎり外れそうなバランスで縫い合わせてゆく二つとないヴォーカル・スタイルとそのサウンドのマッチングの妙がまたこたえられない逸品。いぶし銀のような名作とは正にこのことだ。　(平野)



McKAY
Into You
LP/　'?年

「あなたの中へ」なんて、オフコースみたいですね。さて、最近は、オリジナルは6桁以上する、それ以前に、誰も見たことがないというものまで再発が出る、ありがたい世の中です。本作もその中の一つで、再発LPのジャケット裏に、「コレクターの間で人気が出て来たので、この限定再発が実現した」とあります。アコースティックは使っていませんが、曲調からすれば、フォーク・ロックに入るでしょう。とにかく、メロディがしっかりしています。「グレイトフル・デッドの、ゆったりもったりしっとりした部分だけを集めて、キーボードを抜いて、もっとラフにして、天国から地上に引きずり下ろした、つまりフツーにした感じ」と言ったら、デッド・ヘッズのスコットにシバかれてしまうでしょうか?　(斉藤)



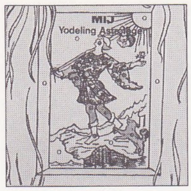
MEDIUM(Canada)
Medium
LP/Gamma 503　'69年

ケベック(フランス系)のレーベルGammaに唯一の作品を残したモントリオールのグループ。同レーベルにはLoise Forestier／L.F(女性voアシッドサイケ。後にも多くのLPをリリース。プログレ／トラッドファンにはLP「On Est Bien……」がベスト!)LE COEUR D'UNE GENERATION(女性vポップ・サイケ)、LA NOUVELLE FRONTIERE(SÉGUINの前身、女性Voフラワー／トラッド・サイケ)等のサイケ・アルバム(他にもヘヴィー系等在る)が残されているが、その中で本作の人気が最も高いので、ここで取り上げた。レア度といい内容といい米のPOLYPHONYによく比較されるように、雰囲気こそ'60年代末のサイケデリックなムードながら、バンドの指向性は非常にプログレ色が濃く、激しい曲調の変化、目まぐるしい展開、クラシカルなオルガン等、カナダ最初期の、プログレッシヴ・ロックを模索した作品として評価できる。(平野)



MICHELLE
Saturn Rings
L P/ABCS-684　'?年

女性ヴォーカリスト、Michelleによるスペイシーでソフトなフォーク・アルバム。ポップスみたいなA①を除けば全て温かみのある、それでいて透き通る様な美しい彼女のヴォイスで占められていてA・ギター、ピアノ、ストリングス、フルート等による控え目の演奏も絶妙だ。しかしながらこの作品をただの肌ざわり滑らかな女性voアルバムで終わらせていない凄さはB①、②あたりに顕著だ。特にB①のリアルなヴォーカルにはゾクッとくる。これだけ良質なセンスのアルバム、やはりC. Boettcherの名がクレジットされている。
（平野）



MIJ
Colour By Number
L P/ESP 1098　'69年
CD/(Ger.) ZYX ESP 1098-2

ESPレーベルにたった一枚の録音を残した謎のシンガー〝MIJ〟唯一の作品。フォーク・ギター1本を抱え、わずか3時間の内に録音された本作は、心の対岸を求めて孤独にさ迷い続けた彼の、放浪の旅の記録そのものであるかも知れない。一度A面に針を落とせば、聴き手は身も心も奪われてそこにいる自分などなくなってしまうだろう。フォーク系の優れたアルバムを数多く残したESPだが、その中でも出色の出来である。色のないジャケット・デザインも本作の特徴を良く表していると思う。まずは、彼の〝心〟に耳を傾けて頂きたい。
（平野）



MOONSTONE
Moonstone
L P/Kot'ai 'Kot 3003　'73年

カナダのモントリオールで'73年にリリースされたアシッド・フォークの逸品。全体に深い森の静けさを想わせる、冷たい張りつめた空気が漂よう。女性ヴォーカルをフューチャーしたA①、B①などのトラックでは、ブリティッシュ・フォークを想わせるような薄暗い、氷のような美しさをつくり上げている。作曲者がグループ内に複数いるため、曲調はバラエティーに富んでいて飽きさせないが、リリースされた年を考えても、アメリカのウェストコースト系のシンガー・ソングライターの影響は意外な程強い。B面後半のナンバーでは、まるでニール・ヤングのような、悲しげな感情を投影したものが多い。発表した作品はこれ1枚のみだと思われるが、情報がほとんどないため、グループの詳しいことはわからない。　（関口）



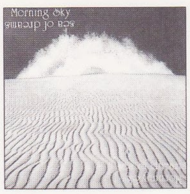
MORGEN
Morgen
L P/ABC Probe CPLP 4507S　'69年

モーガンとは、リーダーのスティーヴ・モーガン（作詞・作曲、ヴォーカル＆ギター）の名前からつけられたバンド名だと思うが、このアルバム、もともとは彼のソロ・アルバムとして制作されたのかもしれない。なぜならレーベル面にデカデカと彼の名前が明記されているからである（ジャケに〝スティーヴ〟の文字はない）。ムンクの絵から想像するような、思いっきり暗いとか無茶苦茶憂鬱とかいった雰囲気ではなく、アップ・テンポの適度にポップでハードな曲がならぶ。１曲目〝ウェルカム・トゥ・ザ・ヴォイド〟、つづく〝オヴ・ドリームス〟など疾走感あふれるサイケ・ナンバーで、かっこいいぞ。丁寧に作られており、しっかりとした出来。スティーヴはプロデュースも行っており、かなりの才人とみた。（サトウユキエ）



MORNING DEW
Morning Dew
L P/Roulette SR42049　'67年

シャッター・チャンスを逃したっていうカンジですか。元々、未発表曲集で、'88年に発表され、その結果2ndとなった「Cut the Chatter！」に、更に別にテイク等を加えたCD「The Definitive Collection」が、米Collectablesから発売になりましたが、ガレージ・パンク寄りの、ポップでシャキシャキした曲が多かったです。それに比べると、この1st、は、重めの曲あり、フォーク・ロックありと様々ですが、先のCDの曲ほどポップではない曲の方が多いので、本作の方を取る人の方が多いのでしょう。ソフト・サイケと呼ぶほどソフトではありませんが、喧ましくはないので、リード・ヴォーカルの声質が粘着質であることさえ気にならなければ、充分にお推めできます。
（斉藤）



MORNING SKY
Sea Of Dreams
L P/SP-1110　'76年

サイケ・ファンに知られたプログレ寄りのアイテムは、MUTHA GOOSE、TOAD、JASPER WRATH、YEAR ONE、EXIT、HOMER、FROGGIE BEAVER、WESTFAUSTER、VIOLA KRAYORA、ORANGE WEDGE等を始め枚挙にいとまない。このモーニング・スカイもそれる膨大な作品群の中のオブスキュアーな一枚で、特に異色なのでここで取り上げた。様々な音楽を吸収し、比類なきセンスとテクニックで昇華させたサイケ、クロスオーバー、プログレいずれもの枠から解き放たれた音楽。何の気負いもなく、風のように繊細できめ細やかな、そしてしなやかにすり抜けるキーボード、フルート、ギター、リズム、女性voのクールなA面、特にBarbara Londonのヴォイスは素晴らしい。
（平野）



MOTHER TUCKERS YELLOW DUCK(Canada)
Starting A Newday
LP/Capitol 6352 '70年

カナディアン・ウエストコースト、バンクーバー出身としてはCOLLECTERSと並んで代表的なグループ。本作は黄色いジャケの１stに次ぐ、ラスト・アルバムとなる2ndで、彼らの並々ならぬ技量、センス、スピリッツが結集した、素晴しい出来となっている。トレードマークのヒヨコのように愛らしく、ハッピーで、穏やかな心打つその音楽性は、音楽を越えて、肌に触れる風となって心の中を通りぬけ、そこでヒヨコがカズーを吹く!!（何と！）それはパーッと広がり、そこから溢れ出る音楽の何という響きだろう！　匂いだろう！　空気や肌ざわりや、織りなす光の糸だろう！　Ｂ面で遥かに広がるヒヨコの世界は（Ａ面も良いよ）もうこれ以上、言葉で書くことはない……。　（平野）



MOUNTAIN BUS
Sundance
LP/Good G 101 '71年
CD/(Fra.)FGL WM-852121

全体の印象はかなり淡々として穏やか、繊細で柔和に練り上げられた温かみのある美しいサウンドは陽炎の揺らめく様に匂い立ち、静かに、それでいて、熱く聴き手の心をかき立てる、そんなアルバムだ。全体的に割と長めの曲が並ぶが、大曲の場合、様々なエッセンスを組み込もうとして作為的になりがちで多くは失敗するのだが、彼らの場合は〝作りあげる〟事よりも〝自然である〟事を知っている。曲は聴き手の鏡に映る心の河を形造り、それは永遠に終わることのない至福の時を目指して漂い、流れ続ける。真にプログレッシヴな作品として評価されるべきだ。　（平野）



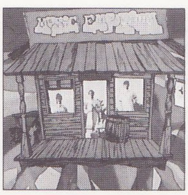
THE MOVING SIDEWALKS
Flash
LP/Tantara 6919 '68年
CD/(U.K.)Afterglow 2

この集成を読んでいるような人には、印象が悪くなるでしょうから、言わない方がいいかと思いますが、「動く歩道」と名乗ることバンドは、サザン・ロックの大御所、Z. Z. TOPの前身です。オルガン＋ピアノを含む４人組です。振りがつけられるほどキャッチーな１曲目に始まり、ヘヴィなものやブルース調のものまで、曲調は多彩ですが、難波先生の言うところの「グルーヴ」があり、ノリのいい曲が多いです。しかし、１曲目の後半はスローで神秘的な全く別の曲のようになったり、アルバム中ほどでは、伴奏とは関係のない弦楽合奏や、テープの逆回転を挟んだりと、ただの南部野郎ではありません。ビートルズの〝抱きしめたい〟をカバーしていますが、歌詞を聞いていないとそれとは分からないくらいヘヴィです。　（斉藤）



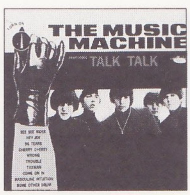
MU
Mu
LP/RTV 300 '71年

ブルーズ・ギターとドラムが活躍。曲はわりとオーソドックス。Ｂ①にこのバンドの特徴が出ていて、カンの「タゴ・マゴ」ドラミングにタジ・マハール旅行団のヴォイスがミックスしたような乗りはきわ物っぽい。他の曲も部分的にはそれっぽさがあるものの、基本のブルーズがしっかりしていることもあってか、そこに留まりがち。衝動が突発するような音の動きや没入のしかたの強度は弱く、どうしても演奏の安定感、地に足のついた音のリアルさの方に耳が行く。このアルバムについてはむしろ、サイケ文脈以外の部分に確固とした音楽性があるように思う。　（松本）



MUSIC EMPORIUM
Music Emporium
LP/Sentinel 100 '69年
CD/(U.K.)Afterglow 01

ビートルズのブッチャー・カヴァー・クラス（ステレオ、コンディション並）の、超プレミア価格のレコード。サイケ・ファンには有名なアルバムだ。男女混合ヴォーカルとチープなオルガンによって繰り広げられる、万華鏡で覗いた小宇宙的世界。サビがお経そのもの（！）のオープニング・ナンバー〝NamMyo Renge Kyo〟はズバリ名曲。さすがは'60年代、サイケなお坊さんもいらしたようで……。もうこの１曲で軽くノック・アウトされちゃうよ。リズム隊の２人が女性なのだが、パワフルでドタバタ感あふれるかっこいいドラムなんだな、これが。〝サイケ・ポップ幻の名盤〟の冠に偽りなし。かつてアナログで再発された時は、ジャケ違いのかつモノラル盤だったが、最近のCDでは改善されているのでご安心を。　（サトウユキエ）



MUSIC MACHINE
Turn On
LP/Original Sound 8875 '67年
CD/Repertoire REP 4154-WZ
/MSI MSIF 7058

いきなりデビュー・シングル「Talk Talk」が全米55位のヒットを記録したガレージ・バンド、ミュージック・マシーン。で、勢いにのった彼等の１stアルバムがこれ。収録曲の多くは、ガレージ・バンドの定番って感じのカヴァーだが、デビュー曲等、リーダーのシーン・ボニウェルのオリジナルがいいぞ〜、かっこよくて。ずっしりとした質感のファズ、粗雑で重量感あふれるサウンド、鉛の塊が反道をごろごろ転がっていく様なドライヴ感、妙に挑発的なヴォーカル、熱い！　しかしバンドはすぐに崩壊。そんな中ひとりがんばるボニウェル、オリジナル中心の２ndアルバムも傑作だ。辞めたメンバーのうち３人は、あのソフト・ロック・サイケの名作、ミレニウムそしてサジタリアスの録音に参加している。　（サトウユキエ）



MYSTIC SIVA
Mystic Siva

LP/V. O. 19713　'72年
CD/Anthology ANT 16. 11

今までに、LP、CDとも、各国のいろいろなレーベル？　から再発され続けて来た、それだけニーズのある、アシッド・サイケの代表的なアルバムです。出る度にジャケット・デザインが変わっていましたが、上のものがオリジナルです。オルガンを多用しており、また、そういうものは、ギターは大したことをしていないバンドも多いのですが、ミスシバ（どこぞの子供向けバンドみたいだ）のギターは、ワウも多用して、活躍しています。更に、曲がよく出来ていて、「どこから始まってどこがサビでどこで終わったのか分からない」などということはなく、キャッチーなリフさえ出て来ます。同じ「アシッド・サイケ」と呼ばれる他のものより、輪郭も意識もハッキリしているので、プログレの人向きだと思います。　（斉藤）



NEIGHB'RHOOD CHILDR'N
Neighb'rhood Childr'n

LP/Acta A-38005　'68年
CD/(U.K.)Afterglow AFT 007

「隣りのガキども」と名乗るこの４人組よる、唯一のアルバムである本作は、サイケデリックの一つの典型と言えるサウンドです。よく引き合いに出されるジェファーソンと比べると、あれ程官能的と言うか濃厚ではないのですが、やはり少しポップで、歪んではいますがハードではない、というところです。リード・ヴォーカルは男女が半々で、このダイアン嬢はピロピロのオルガンも弾いています。「虹の彼方に」をカバーしたり、「キラキラ星」の一節を挿んだりしていますが、クサっていて、仲々いいです。なお、聖典によると、彼等はシングルを５枚も出しており、そのうちの７曲はアルバム未収なので、もしも他の業者さんが改めてCDを出してくれるのなら、シングルを探し出して、追加収録して下さい。　（斉藤）



NEW DAWN
There's A New Dawn

LP/Hoot GR-70-4569　'70年

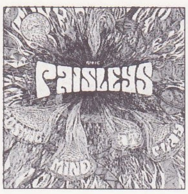
ブートでジャケットの映りが不鮮明な上に、これを写真に録って印刷するのでは、下半分は真っ黒のところにタイトルがあるだけになってしまうでしょうから解説しますと、本当は、メンバー５人が並んで立っている写真のジャケットだったのです。さて、音の方ですが、極めてポップです。曲調は、暗くも悲しくもありません。それなのに、飛翔感というものがまるでなく、ひたすら沈んで行くという感じなのです。リズムの単調さと、喧ましくもなければキレイキレイもしていない音色のせいでしょうか。こういう音の傾向のことを、そのスジでは〝downer〟（ダウナー）と呼んで、イヤがったり感激したりしています。この音が、工夫のない結果ならダメですが、もしも狙ってやったのだとしたら、大したものです。　（斉藤）



OASIS (Canada)
Oasis

LP/(private press)　'73年

欧米マニアの間ではウエスト・コーストのTREESと言われているのが本作。元々はR. J. Foxというグループ名で、ウエスト・コーストのテクニシャンが集まり結成され、当時Atlanticからのリリース予定でレコーディングが成されたが、お蔵入りとなり、結局カナダで自主盤〝Oasis〟を発表するにとどまった。非常にきめ細かく構築され、高度の演奏技術で水準の高いフォーク・ロックに仕上げられており、女性voも魅力。全体的にアメリカ的な清涼感溢れるサウンドなので、TRESSとは多少異なるだろう。尚、R. J. Foxは昨年、当時の録音を２CDにまとめて自主盤でリリースした。　（平野）



THE PAISLEYS
Cosmic Mind At Play

LP/Audio City 9445-2809　'70年
CD/(U.K.)Aftergrow

この本が出る頃には、武宮先生は名人になっているでしょうか？日本シリーズじゃあるまいし、３連勝の後の４連敗などあるものではないと思ったら、囲碁の世界では、実際に何度かあったそうなので……。さて、サイケデリックの古典とも言える、このペイズリーズ。曲調は、驚いたことに、ポップです。Ｂ面は、大作が１曲だけなのですが、これさえもポップです。しかし、このジャケットとバンド名（ジャケットにある唐草模様のこと）とタイトルをもってして、ポップなだけであるハズがありません。ギミックの嵐なのです。正にコズミックです。だからと言って、ドイツものと比べるのは私だけでしょうが、ドイツものは、音と音の間がモヤで埋まっているのに対し、本作はカラッとした感じです。　（斉藤）

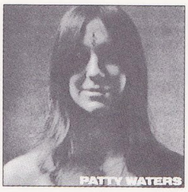


PATRON SAINTS
Fohhoh Bohob

LP/(private press)　'69年

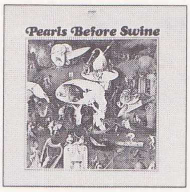
200枚しかない本選の中に、こんなLPを入れるのは気違い沙汰としか自分でも思えない。魔がさしたとゆうか……。さあて、このにやけたオヤジみたいな楽しく悲しくも変な、ノスタルジックなサイケデリックな(そう、正しくサイケデリック??)スバラシクもデヘヘとした……。はじめはジャケットのブッシュマンみたいなオッサンがうたってるのかと思ったが(本当にそんな感じなのだから仕方がない！)、これは原盤ジャケとは全く異なるらしいので、真偽のほどは分からない。(ちなみに原盤はスーパー・レアで、本当に死ぬまで拝めないかも知れない。)とにかく良いのです。ビート世代くずれの浮浪者みたいになって、感じ入ります。普通の人が聴くと頭を豆腐のカドにぶつけて本当に死ぬかもしれないのでやめときましょう。(涙モノです！　これは……。)　（平野）

PATTY WATERS
College Tour
LP/ESP 1055　'66年
CD/(Ger.)ZYX Music ESP 1055-2



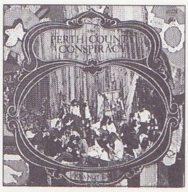
人間の声の持つなんとも形容しがたいある種魔術的な響きと力は身体の底から発生してくる波動をそのままダイレクトに伝えられるがゆえの特権的なものと言えるかもしれない。それゆえ優れたヴォーカルは他のインストゥルメンツから孤立し拮抗した存在を占めている。意識の奥底へと遡行しながら、その過程での地獄めぐりのような自意識との対峙の中でパティ・ウォーターズは世界と自分の間にある深い亀裂を垣間見せながら他の何ものにも寄りかからずただ一人たたずんでいる。それは人間が声を発していく事の源初的な姿を伝えている。（関口）

PEARLS BEFORE SWINE
One Nation Underground
LP/ESP 1054　'67年
CD/(Ger)ZYX Music ESP 1054-2



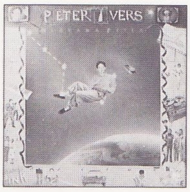
アシッド・フォークの代表作として取り上げられる本作であるが、他の同時代の作品と比べて極めて感覚的な音作りに比重が置かれている点が最大の特長と言えるし、アシッド・フォークの代表作たる所以だと思う。空間的な雰囲気を助長する浮遊感のある効果音やギミック、各インストゥルメンツの感覚的な使い方はトム・ラップの意識の移ろいの中のバイブレーションと見事な一体化を見せ、それがトム・ラップ自身の無意識への遡行の足どりを聴き手に共時体験させていく。その体験性を誘発していく表現力はESPレーベルの作品に共通するものと言える。（関口）

PERTH COUNTRY CONSPIRACY (Canada)
Does Not Exist
LP/Columbia ELS-375　'70年



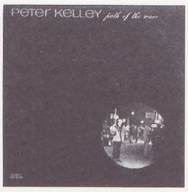
自然志向のアシッド・フォーク・グループとして、独自の活動を続けた彼らの1stLP。特にそのB面の流れにおける、鳥のさえずり、子供の声、揺れる草、輝かしい日の光、心にそっと囁きかける声、光と影に満ちた曲の数々。あまりに繊細で透き通った羽根、痛み、安息――その珠玉の歌の数々は、彼らの生活の中で生まれ、育くまれたかけがえのない、心の雫の一粒となって、聴き手を静かな感動に包んでゆくだろう。古びてしまった彼らのポスターが貼られた地下の穴倉で、また彼らのように歌を歌い、ギターを弾く人たちを見つめながら、一体何時の時代だろう？　と思いながら、そしてつい最近までStratfordのスワンカフェ（Toronto 郊外）で演奏していた彼らや、未だ手に入らぬ詩集の事を考えながら……。（平野）

PETER IVERS
Nirvana Peter
LP/？年



ピーター・アイヴァスのヴォーカル・スタイルは多くのアシッド・フォーク系のヴォーカルの中でもきわめて特異なものと言える。ブラック・ユーモアと諧謔的なところはタイニー・ティムと類似点を見い出せるが、タイニー・ティムに比べると陰湿さはなくより乾いていてニヒリスティックなイメージがある。意識の奥底へと落ちていくことを拒絶しながら、意識と無意識の中間帯でピーター・アイヴァスは浮遊しながら自己を突き放すように歌っている。そのクールで虚無的な自己凝視は他に類をみないものだ。（関口）

PETER KELLEY
Path Of The Wave
LP/Sire SES 97009　'?年



シンガー・ソングライターもの。曲によってエレクトリック・ギターやフルート、オルガン、ドラム、トランペット、ヴィオラなんかが入るが、ほとんどはこの人のヴォーカルとアコ・ギで聴かせる。だから目立たない音をしている。でも声には特徴のある人だ。少しルー・リードにも似た声だ。だからか都会的な雰囲気もする。それよりもこの人の独白めいた、それも感情の盛り上がりを押え込むような歌い方に、なんとも言えない余韻のような静けさが伴う。ここがミソ。内なるものを感じさせる歌い方だ。明るくアメリカンにならず、何か個人に帰っていくようなニュアンスが、「○×△しましょう」的なアメリカン・イメージからは隔っている気がする。そういう臭いに敏感な人へ。（松本）

PETER TESSIER (Canada)
By Turning A Knob……
LP/Columbia ES 90202　'73年



ケベックのエンジニア／プロデューサーとして有名なPeter Tessierがカナディアン・サイケの名レーベルColumbiaに残した唯一のLP。深い淵から朦朧と立ち込める濃霧のような大気、底から沸きあがり、得体の知れぬ、心に棲む生き物のように噴き上げ、なだれ落ちるヴォーカル、クールで時に明るく思えなくもないユニークな曲想が逆に聴き手を燃えたたす不思議な効果。随所に姿を現す、内に奇妙に折れ曲った音作りと、非常に個性的な世界を展開する深い作品で、所々形を変えて繰り返されるA①のリフレイン、Go-Insaneと歌われるA③〝The Rain On The Brain〟、これも歌詞タイトル共に特徴的なA④〝RaversInn〟を始め、各曲聴き応えのある密度の濃い内容だ。一聴、地味な印象だが、聴き込むと深い名盤。（平野）



PLASTIC CLOUD (Canada)
Plastic Cloud

L P/Allied No. 10 '69年
CD/The Laser's Edge LE 1002

文字通り〝Paradise〟を謳いあげたA①の何というイントロと、ヴォーカルのハーモニー、そして間奏のギター――それは彼らがいた、去った時代を眩いばかりに甦らせる。その時間と空間をほんの一時灯らす火のように、幻影がそこに姿を現す、フォーク・ロックの名作。一般的にはA②のファズが有名だが、彼らの真の魅力は全くそこにはない。同レーベルのREIGN GHOST、FOLKLORDSそして彼らと言い、何故にもこんなに繊細で想いのきめ細やかな、優しい音なのだろう。特にPLASTIC CLOUDの音楽は穏やかで、やさしい。ファズこそなければ、それこそ音楽のパラダイスを、至上の夢のように、刻みつけることに成功していただろう。〝夢見る為の音楽〟＝カナディアン・サイケの大切な一枚。 (平野)



PTARMIGAN (Canada)
Ptarmigan

L P/Columbia ES-90257 '73年

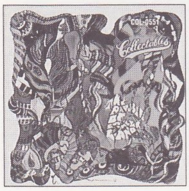
カナダならではの自然志向。スピリチュアル志向といったエキゾティズムを武器に洗練されたアコースティック・ミュージックをインターナショナルに送り出す才能にたけたPaul Hornプロデュースによる作品。私個人としてはPaul Horn系のサウンドはいかにもといったわざとらしさが嫌いなのだが、本作の出来は彼自身の作品ではないので、悪くはない。むしろ良い方だろう。サイケ・マニア垂涎のカナダ・コロムビアの作品であるためか、近年レア度が増しているが、内容の方はサイケとしてはムードに流れすぎ、喰い足りない。バス・リコーダー、12弦ギター、ハンドドラム、ウッドベースによるミスティックな香りのする大曲志向プログレとしては丁寧に作られた良質の作品。バンクーバーらしいすがすがしさも特徴。(平野)



RABBLE (Canada)
Give Us Back Elaine

L P/Trans World TWS 6707 '?年

モントリオール出身の愛すべきグループRABBLEの2ndLP。彼らは写真で見るといつもにやにやしており、なんとなく型にはまっていないちぐはぐな格好で奇妙におかしさを誘うのだが(2nd裏の写真はそうでもないが)、内容もいつもユーモラスな彼等流のオープンなハートを感じることができる。肩ひじを張らずに伸び伸びと楽しく、時に味わい深く彼らの力量は、そこらのサイケデリック・アルバムの群を抜いて、聴き手を楽しませる。軽快(飄々?)な、何だかスカスカしたリズム、ユーモアたっぷりのコーラス、リフ、ブレイク、そのホッとするような楽しさ、voの味わいはRABBLEならではのもの。大ヒット〝Golden Girl〟を収録した1stも良いが、B面がフリーク・アウトしているので、粒揃いの2ndを選んでみた。日本では全く人気がないが、名盤です。 (平野)



RED KRAYOLA
God Bless The Red Krayola And All Who Sail With It

L P/International Artist IALP 7 '68年
CD/Coll'bles 555

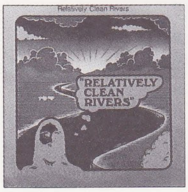
現在も精力的に奇才メイヨ・トンプソン率いるレッド・クレヨラ。インターナショナル・アーティストに残した2枚はズバリ必聴だ。いつ果てるともないフリーキーな演奏を曲調にコラージュした強烈なサイケ・トリップ・ミュージックの1st。そしてこの2nd、針を落としたその時から〝なんだ、これは?〟の大傑作アルバム。全20曲。1曲長くて2分強、なかには5秒のナンバーも。ドラム、ベース、ギターのシンプルでスカスカな演奏、故意にねじ曲げられ、ただの下手クソってか。各楽器は壊れたゼンマイ仕掛けのように勝手に突き進む。ヒッピーねえちゃん達のコーラス、飄々としたメイヨのヴォーカル……。面白スギ、楽しスギ、ぶっ飛びスギ、確信犯的に練られた極めつけの裏業サウンド、脱帽。 (サトウユキエ)



REIGN GHOST (Canada)
Featuring Linda Squires

L P/Paragon 19 '71年
CD/(Ger.)Fire Engin 162016

CHRISTMASの前身。ファズを殆ど使わずに、心にダイレクトに響く、繊細、絶妙にしてマジカルでさえあるBob Brydenのギター(何というギタリストだろう!)と、やはり中心にある炎の揺れ動きのように心を魅きつけるLinda Squiresのvo。その戯れ合いは、中心に滴る雨だれの連なりや、光りの微細な煌めき一粒同士の連結の形を思わせ、それは音楽の心の芯を捉えるために並ならぬ熟練と技量を積んだ、その年月、経験が生み落とした〝雫〟が奏でる音楽と言える。今の時代にはすっかり忘れ去られているが、昔にさかのぼるほど、いい音楽が埋もれていた。上には上があり、それは素朴で密やかで心を奏でる為に熟練された音楽だ。今だからこそ、それを認識しなければいけないと思う。 (平野)



RELATIVELY CLEAN RIVERS
Relatively Clean Rivers

L P/Pacific Is PC 1760/ '76年

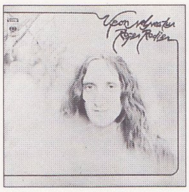
ウエスト・コーストのAMON DÜÜL或いはHAPSHASH……と言われるフリーキーなトリップ集団BEAT OF THE EARTHは一枚のLPを〝Radish〟レーベルに残したグループだが、その後名前を変えてリリースした2ndとも言えるアルバムがこれだ。その内容たるや、同じメンバーとは思えぬ程に地味で枯れたアメリカン・フォーク・サウンドで全く戸惑ってしまう。またもやトリップを期待するリスナーは即死必至だが、かなりサイケを聴き込んできたリスナーはこの作品の良さが充分わかるだろう。サイケ人口が少なく、情報の乏しい日本ではまだまだ知られざるアルバムだが、欧米では非常に高い評価を得ている有名なアルバムである。レアなので、再発が望まれる。 (平野)



THE RISING STORM
Calm Before...

LP/Remnant BBA-3571 '66年
CD/Arf! Arf! AA-034

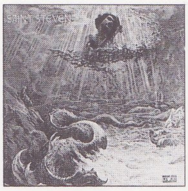
この直後に、アメリカ各地、続いて世界各地に生まれる「ガレージ・パンク」の先駆けとなった、音楽史上、極めて重要なアルバムです。「ガレージ・パンク」というのは、ハイ・ティーンを中心とした世代が、ガレージ等で演奏をしたのが始まりで、ストーンズ等の曲をやっていたものも多いのですが、音の感じは喧しいものもあれば静かなものもあり、曲調は荒々しいものもあればメロウなものもありと、千差万別です。「パンク」と言っても、ピストルズやクラッシュのようなものではなく、'60年代のビート系を淀んで黄昏た感じにした言う方が、まだ近いです。本作は、アップ・テンポの曲もスローな曲も泣き曲が多く、音も歪んだり濁ったりしていない方で、オルガンも入っていますから、とにかく聴いて下さい。（斉藤）



ROGER RODIER
Upon Velveatur

LP/Columbia ES-90095 '72年

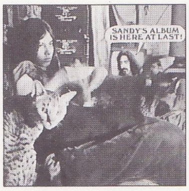
瑞々しいアコースティック・ギター、静かにリズムを刻むドラム、流麗なピアノ、それらを引き立てる弦のアレンジ、全てが一つの理想の形となって、余りに美しい、気品に満ちたこのLPを作り上げた。伊のMark Flyと比較される彼のvo。ソフト・サイケの全アルバム中、このSide-Aほどの流れは他にないだろう。A④"The Key"に至ってはそのアンサンブルとヴォーカルが溶けるように絶妙な美しさを見せ、針があがっても、余韻を刻みつける。昔、モントリオールで、これを買ったレコード屋が懐かしそうに彼の話をしていた事など、色々な想い出が尽きぬ一枚でもある。尚、本作には、ブックレットがついており、彼の魔法のような文字で歌詞が記され、興味深い。裏ジャケの山頂の瓦礫に佇む彼の姿も印象に残る。（平野）



ST. STEVEN
St. Steven

LP/Probe CPLP 4506 '69年

スタジオ・ミュージシャンらしく、音づくりに意をつくした極めて出来のいいアルバム。エフェクト音で曲間をつないでいっており、トータル・コンセプトすら伺わせる意欲作。曲の配列にも目配りがいきとどいている。普通なら拍子抜けするはずのカントリー・ミュージックも実にすんなり耳に入るようになっている。まだまだ一曲毎の独立性が高いが、様々なミュージック・スタイルが顔を出し、万華鏡的な面白さは別格でセンスの確かさは充分認められる。アルバム全体での印象を聴くものに問う姿勢は、当時の中でも珍しく古びない価値をもっている。（法水）



SANDY HURVITZ
Sandy's Album Is Here At Last

LP/Verve V6-5064 '67年
CD/Edsel EDCD 399
/MSI MSIF 3247

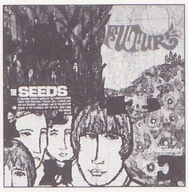
F・ザッパ、H・コーエンの双頭プロダクションBIZARREより名作がまた一つ。タイトルからも解るとおりかなり以前よりザッパの秘蔵っ子であった様だ。彼女の奏でるフレーズそして肉声というにはあまりに美しすぎる幻想的な歌声は、我々に自然（地球）の中で生活する人間が露呈するさまざまな感情の起伏（それはあるときは母性愛であり、ある時は何もかも破壊できる無神経さである……）を語りつくす。バックを務めるのはE・ゴメス、J・スティグら米ジャズ界の名ソリスト。又、チャーミングでしゃれたジャケットはザッパのU・ミート等で知られるカル・シェンケルが担当。（宇藤）



SAPPHIRE THINKERS
From Within

LP/Hobbit H. B. 5003 '69年

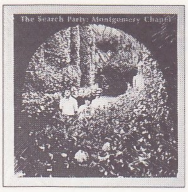
「サファイアを考える人達」……そんな、リボンの騎士じゃないんですから。さて、本作は、女性を含んだコーラス・ワークと、オルガンや泣きのギターが素晴らしい、サイケデリックの中堅アイテム（？）です。同時期のバンド、PEANUT BUTTER CONSPIRACYをご存知の方は、あれほどポップではなく、曲全体の出来にも演奏の質にもムラがないものだと思って下さい。このペギーさんは、フルートも吹いていて、浮遊感があってとても良いのですが、それよりも、勿論、全曲でなくても、何曲かではリード・ヴォーカルを取ってくれていたらと思うのは、私だけではないハズです。でも、良く出来ています。なお、彼女とキーボードとドラムスは、3人とも姓がRichmondですが、兄弟かどうかは分かりません。（斉藤）



SEEDS
Future

LP/Crescendo GNP 2038 '67年
CD/Line IMCD 9.00173

スカイ・サクソン（後にYa Ho Wa 13のアルバムに参加する怪しい奴！）の泥臭く粘着質なヴォーカル、そしてエレクトリック・ピアノを多用したアレンジ……シーズ独特の世界だ。軽妙だがどことなく影があり、得もいえぬ癖のあるサウンドは、今聴いても斬新さを失なっていない。ヒット曲「プッシュン・トゥ・ハード」や「Mr.ファーマー」の不思議な感触といったら……。'66年にデビューしたロサンジェルスのバンド、シーズ。1stや2ndでは、ひた向きに突き進む、プリミティヴなガレージ・サウンドを満喫できる。そして、フラワー・ムーヴメントに合わせればもっと成功するとふんだ新しいマネージャー、ティム・ハドソンの助言により制作された3rd（本作）は、シーズのアルバム中最も凝ったサイケな1枚となった。（サトウユキエ）



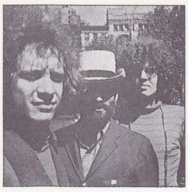
SEARCH PARTY
Montgomery Chapel
ＬＰ/Century 32013　'69年

プレス数が10枚以下といわれている幻のレア盤、カリフォルニア産。女性ヴォーカル、オルガン、フォーク・ロック、そして怪げな雰囲気、静かなるサイケデリック……たまらん。メンバーは５人。Joanie Goff (vo)、Jim Carvalho (b、g、vo)、Pete Apps (g、vo)、Tim King (ds)、そしてNicholas T. Freund。彼はプロデューサーでもあり、作詞・作曲にもクレジットのある、サーチ・パーティの創始者だ。オルガンを弾いているのがきっと彼であろう。制作期間６週間、制作費２千ドル、定価(当時)５ドル。これで10枚しか売れていないとすると、とんでもない大赤字なんだけど……。アップ・テンポのナンバー〝You And I〟ではファズ・ギターが唸り、一瞬アニー・ハズラムを思い起こすヴォーカルも聴ける。　(サトウユキエ)



THE SERPENT POWER
The Serpent Power
ＬＰ/Vanguard VSD 79252　'67年
CD/Vanguard VMD 79252

仲々濃い感じの美人ですね。さて、こちらの方は、フォーク・サイケの中堅アイテムとして知られるアルバムです。少し喧ましい曲もあるので、そう呼んでしまうのはどうかなとも思うのですが、そのスジではそういうことになっています。とにかく、優しく落ち着いたティナの歌声が素晴らしく、スローでミステリアスな曲では、特にそれぞれ極立っています。これだけのメンバーがいることもあり、演奏もしっかりしているので、本作も、プログレの人向きと言えるでしょう。なお、彼女と、リーダーで詩人で夫でもあるデヴィッドは、翌'68年に、同じヴァンガードから、〝DAVID & TINA MELTZER／Poet Song〟というアルバムを出しており、そのスジでは、サーパント・パワーの２ndとして扱われています。　(斉藤)



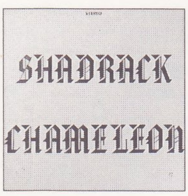
SEVENTH SONS
4:00 A.M. At Frank's...
ＬＰ/ESP 1078　'68年
CD/(Ger.)ZYX Music ESP 1078-2

両面合わせて１曲。それが起承転結とは無縁だということで様式美や作品から程遠い所にある。だから音の表構えこそフルートを多用したフォークだが、アモン・デュールと同じだ。結果を計算して演奏すれば、その分、規制が多くなるわけで、演りたいことが知識にすりかわって結果としてそつのない音になりがちだ。作り手のリアルな感覚が刻まれない音楽はロボットだ。たとえコンピューターを使っても音を選択する時に物を言うのは、その感覚だろう。その点これは演り方としては最もダイレクトだが、その演り方に止まらず開かれた感覚による行為だと言える。フルート、タブラ、アコ・ギ、ヴォーカル等による密室感の強いインプロヴィゼーションが続く。
(松本)



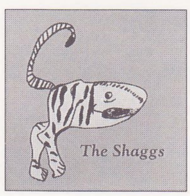
SEX (Canada)
The End Of My Life
ＬＰ/Trance Canada TC 785　'?年

２枚のアルバムがある。１枚めはヘヴィなサイケもの、そしてこちら２枚めは、４人編成のうちサックスが前に出て、曲によっては複雑なことをちらつかせる。ジャズ・ロック調のちょっとしたユニゾンが出てきたり、凝った曲の展開の仕方があったりして、ブルース・ロック・スタイルやオーソドックスな昔々のロック・スタイルにそうしたパターンがまぎれ込んでいる。当時で言えば、ブラス・ロックをとり入れた割とヘヴィめなロック・スタイルと言ったところか。ただし全体には、だからと言って切れがあるわけでも、サイケデリックな雰囲気が漂っているわけでもなく、どうも歯切れが悪い。
(松本)



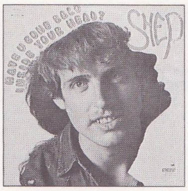
SHADRACK CHAMELEON
Shadrack Chameleon
ＬＰ/IGL 4051-5　'72年

非常に地味だが、深い味わいのあるフォーク・ロック・グループSHADRACK CHAMELEONの唯一のLPと思われる。曲によって録音が悪く、バラつきがあるものの、アコースティック・ギターとヴォーカルを主体とした素朴で乾いたサウンドは心を打つものがあり、例えプログレ・ファンでもブリティッシュ・フォークを深く愛する人には絶対に聴いて欲しい。特にＢ①の物思いにふけるような始まりからヴォーカルが入りギター・ソロ、コーラスへ導かれて行くサウンドは絶品。時折曲によって使用されるオルガンもこのグループの繊細な感性を引き立てている。名作。　(平野)



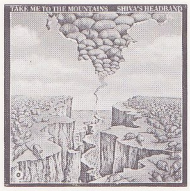
SHAGGS
Philosophy Of The World
ＬＰ/Third World 3001　'72年
CD/Rounder 11547

驚異のGals Rock Band、SHAGGS。彼女らの二つとないその強靱な個性、既成の概念などまるで初めから存在すらしなかったとしか思えぬぶっとびぶり、そこにあった２本のギターとドラムは彼女達の手にあってはひとたまりもない。所詮カッコつけて体裁を繕う凡百のロック・バンドなんか彼女達には関係ない存在だ。この歌、このビート、その生々しさは今聴いても余り有る程だ。ジャーマン・ロックやニュー・ウェイヴ・ファンまでもをノック・アウトするこの〝Shaggs Music〟をザッパは〝Better than Beatles-even tobay〟と評した。Carla Bley、Bonnie Raittも文を寄せている。　(平野)



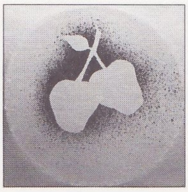
SHEP
Have U Gone Bald Inside Your Head?
L P/Vanguard VSD-6526　'69年

松本先生から、サイケデリックのコーナーのラインナップを聞いた時、私は「うえーっ、こんなに細かいのまで、いちいち載せるんですかね？」と思ったのですが、たまたま、個人的に気に入っているアルバムだったので、黙って引き受けることにしました。そういう訳で、本作は、知名度の低いアルバムです。その上、「頭ん中がハゲちまったのかい」などというタイトルで、〝カウボーイ〟〝レッツ・ジャンプ〟などという曲が並んでいて、不安にさせられますが、ハープシコードが決めての、ドリーミーなフォークで安心しました。カントリー寄りの曲もありますが、それを除いて、イギリスのバンドに例えると、FORESTから、ほの暗い感じを取って、全体的にフワーッとさせたような感じで、そこそこ良いです。　(斉藤)



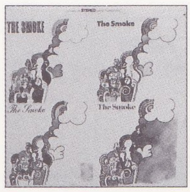
SHIVA'S HEADBAND
Take Me To The Mountains
L P/Capitol ST 538　'70年

テキサス・サイケになくてはならない、そして私個人としても大好きなグループ。ヴァイオリンをふんだんに生かした楽しいカントリー・ロック・サウンドは今聴いても魅力を増すばかりだ。このLPのジャケットを手にとったら裏ジャケを見て欲しい。ユーモラスで、何だか変てこりんで、目からアルマジロが出る異様さ楽しさ(？)それがSHIVAS HEADの魔法だ。味わいがあると言っても、彼らのように自然に、味わい深いグループはいない。だからSHIVAS HEADは凄い。いつ聴いても楽しくなってしまう。それでいて、何とも物悲しく美しい名曲〝Song for Peace〟に涙してしまったり、すべてを含んだ音楽がいつも彼らの中に流れているのだ。愛すべき名盤であり、USサイケ屈指のグループとして忘れてはならないだろう。(彼らは、今もなお活動中！)　(平野)



SILVER APPLES
Silver Apples
L P/Kapp KS-3562　'68年
CD/TRC 039

狂おしいまでのプピプピ電子音とパーカッションによって奏でられる、アシッド感あふれるおサイケな曲の数々。シルヴァー・アップルズは、ダニー・テイラーとシメオンという２人組のグループだ。淡々としたドラムと、ザ・シメオンと名付けられたオリジナル電子楽器（９個の発信器と86個のコントロール部分で構成）から発せられる音楽は、まさに近未来サウンド。'60年代末に夢見た西暦2000年のポップ・ミュージックといった趣きだ。妙ちくりんな丸っこい椅子のある部屋で、どこにあるのかわからないオーディオ装置をリモコンで操作しながら、思いっきり'60年代風化粧の金髪女が踊っている、ズボンはサテンのパンタロン……そんな光景をつい思い浮かべてしまう。'69年の２ndと、２in１のCDあり。　(サトウユキエ)



THE SMOKE
The Smoke
L P/Sidewalk ST 5912　'68年

英サイケ・ビートにも、同じ名前のバンドがありました。(皮ジャンにサングラスというメンバーの写真で、青地のジャケットのアルバム）さて、レイジー・スモークの欄に書いた、数々のアーティストが作った「サージェント・ペパーズになれなかったよ」というアルバムの中で、最高の出来であると思われるものが本作です。大半の曲を書いている才人、マイケル・ロイドと、大御所キム・フォーリーとの共同プロデュースによる本作は、まず、メロディがポップによく歌っており、ストリングスや金管も導入した演奏が実験的かつ色彩感豊かなのです。「曲はビートルズ風で、音作りが豪華」これが最高の音楽でなかったら、ポール・ウィリアムスが最高の音楽でしょう（一挙CD化御礼)。　(斉藤)



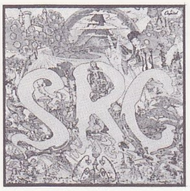
THE SOUND OF FEELING
The Sonud Of Feeling
L P/'69年

彼ら唯一の作品と思われる本作は、リーダーのG・デーヴィッド(p、vo）を中心にアリス、レイのアンドリース双生児の女性ヴォーカル他３人のメンバーで制作。フリーなインプロヴィゼイション、変拍子を楽に熟すリズム感。そしてモードやマイクロ手法などロック、ジャズ、現代音楽に限らずあらゆるジャンルの手法を駆使した幻想的な〝フリー・ヴォーカル・ミュージック〟をくり広げている。しかし、本作の最も注目すべき点はその詩の世界へのアプローチで、現代社会の疎外感、果てしない憩いの希求そして世界共通の言語への飽くなき探究を、ある時はオリジナルでまたある時は自由な解釈で完全に具現化させている所にあると言える。　(宇藤)



SQUARE ROOT OF NINE
Square Root Of Nine
L P/PAC3 PA 88206　'6?年

ミシガンで'60年代に自主製作されたと思われるカレッジ・フォーク／サイケ・アルバム。アコースティック・ギター２本にベース、男女ヴォーカルのハーモニーというスタイルのこの音楽は、決して明るくはないが、'60年代の淡いノスタルジィと良き時代のムードが漂う。作品が放つものは全く異るが、John & Amanda Ylvisker／Follow Me、BIG LOST RAINBOW、といったフォーク・アルバムにも今の時代には失われたムードが漂っていて、その時代が人に影響を及ぼし、精神から奏でられる音楽が、また時代の、その時にしか在り得ぬ姿を映し出す。こうした音楽は、今の時代に幾ら真似してみても、似ても似つかぬ陳腐な音楽にしか成り得ず、それだからこそ時間を閉じ込め、甦えらせる何かを持っているのだろう。　(平野)



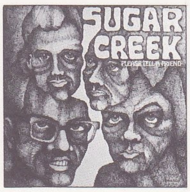
SRC
SRC
LP/Capitol 2991　'68年
CD/One Way S21 56840

　これはかなりプログレ寄りです。基本的には、ハードなオルガン・ロックなのですが、何曲かは、泣き方がプログレの泣き方なのです。その上、〝Exile〞（SRCの場合、放浪者は一人）という、静かで神秘的な曲も挟むなど、全体の展開も起伏に富んでいて、飽きさせません。彼等はアルバムを３枚出しており、この１st、２nd「Milestones」、３rd「Traveller's Tale」と、全てCD化されていますが、３枚ともいいです。しかし、どれか１枚となると、ハナ差で、この１stでしょう。更に、未発表曲・未発表テイク集が、「Lost Masters」というタイトルでCDになっています。QUATERMASSから、もろクラシックという所を取って、音をもっと緩くして、濁らせたような感じと言えば、分かり難いでしょうか。　（斉藤）



STONE HARBOUR
Emerges
LP/(private press)番号なし　'74年
CD/Flashback 006

　'74年にもなってこの音というのは、逆にスゴイ！　曲は至ってメロディアスなのですが、ギターはファズで歪み放大歪んだ上にペチャンコで（ジミヘンの音がやせた感じ）音全体が籠もりに籠もっていて、せっかくキーボードを使っているのに、よく聴き取れないのです。これでは、どう聴いても、'60年代末の音です。さて、ここまで読むと、本作は駄作のように思えますが、とんでも八分背中まで45分！　本作こそ、アシッド・サイケを代表するアルバムであり、傑作中の傑作なのです。なお、この「籠もり具合」が、ゆるやかなうねりを作っているので、別に構わないのですが、達人の話では、ブートだからではなく、オリジナルもこんなに籠っているそうです。しかし、CDのジャケットのこの下品な赤は何だ！　（斉藤）



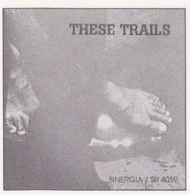
SUGAR CREEK
Please Tell A Friend
LP/Metromedia MD 1020　'69年

　短期間で密度の濃いレコードばかりかけて原稿を何十枚と書きなぐっていたら、身も神経も伸びきってしまって、働いている時間以外は、何時間寝て起きているかもわからなくなり、頭の芯がへべれけですが、また何を今更書いてよいかわからぬSUGER CREEKです。（ふう……）。Jonathan Edwardsが在籍していたサイケの古典的名作の１枚として有名ですが、その通り、名盤です。幾分ブルージーで、中にはどっぷりブルースの曲も有りますが、それ以外の曲の方が魅力的。シンプルなサウンドですが、幾分か足が地面を離れてるような中途感覚がUSサイケならではのたまらない感覚。もう名曲Ａ①で、グッとひきこまれます。Acid Folk、Acid Rock、Tripに飽きた人は必聴盤！　（平野）



THE TEA COMPANY
Come And Have Some Tea With The Tea Company
LP/Smash SRS-67105　'68年

　この壁の、くすんだ赤茶色の唐草模様、このウサン臭さが、本作の音を物語っています。その上、ご丁寧に紅茶の缶を並べて、中身の茶葉まで出していますが、〝TEA〞というのは、マリファナのことでもあるそうで、何をか言わんや瀬戸わんや。曲調はポップで、ヴァニラ・ファッジでお馴染みの〝キープ・ミー・ハンギング・オン〞も、軽めのアレンジでカバーしているのですが、他の誰のアルバムよりも、徹底したギミックの嵐なのです。ギミックだけの曲（？）まであります。これが効いて来て、しまいには、〝TEA〞をやっているかのように、気持ちよくなって来て、気がついた時には、このテの音から、逃げられない身体になってしまっているのです。ケッコウなお茶でした。　（斉藤）



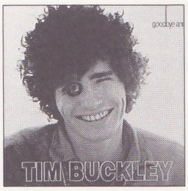
THESE TRAILS
These Trails
LP/Sinergia SR 4059　'73年
CD/Sinergia SR 4059

　ハンドドラム、シタール、エレクトロニクス等や女性Voが実にサイケデリックな怪しい作品。昔からもう少し注目されても然るべき内容だったのだが、CD再発によって、ようやく多くのリスナーに知られるようになった。ハワイはホノルルのSinergiaレーベルからリリースされたアルバムで、ハワイらしいおだやかさ、ミスティックさを備えたフニャフニャとした魅力的なサイケデリック・フォーク。当然女性Voだから、雰囲気が所々Linda Perhacsに似ている。あれ程の空間はないにせよ、全体をほのぼのとした空気が包む。ちょっとチャーミングな、愛らしさのある一枚です。　（平野）



THE THIRD ESTATE
Years Before The Wine
LP/TTE001　'76年

　'76年発表の自主盤。'70年代中期の作品とは思えないほどのオーソドックスなスタイルのアシッド・サイケだが、組曲形式のロング・トラックから、繊細なフォーク・ロックまで内容は多彩。特にギター・パートのアレンジの組み立て方が素晴らしく、浮遊感のあるメロディアスな世界をつくっている。ヴォーカルは男性が中心だが、時折入る女性ヴォーカルはジャキー・マクシを想わせる美しい歌声で、あたかもブリティッシュ・フォークのような冷たい美しさを湛えている。メインの男性ヴォーカルは、特にアシッド・フォーク的なナンバーでの沈みこんでいくような独特のスタイルが印象的である。自主盤とは思えないほどの質の高い内容であり、正式な再発が望まれる。　（関口）



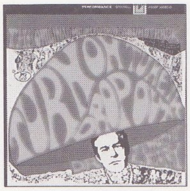
TIM BUCKLEY
Goodbye & Hello
LP/Elektra EKS 7318 '67年
CD/Elektra 74028
)ワーナー・ミュージック WMCS-526

アシッド・フォークの帝王と称されるだけあってティム・バックレーのヴォーカルは他のシンガー達と一線を画する凄みがある。フリーなパートを含んだ浮遊感のある長い曲構成と高音の漂泊感のあるヴォーカルが目まぐるしく展開していきながら、しだいにティム・バックレーの個としてのつぶやきの中に収束されていき、その収束の飽和点で孤立した叫びとして爆発していく様は凄まじい。つぶやくことと叫ぶことの間でゆらぎ転げまわりながら彼は等身大のセルフポートレイトを描き上げる。その鏡面のような鋭角な感性が結局彼にとって両刃の剣となってしまったようだ。　（関口）



TIM DOWE
Penrod
LP/Straight STS 1058 '69年

F・ザッパと、当時米フォーク界の顔役的存在であったH・コーエンが手を組んで設立したBIZARREプロダクションが、埋もれた才能を世に示すべく掲げたレーベル〝STRAIT〟。その同レーベルにあってC・ビーフハートやアリス・クーパーらの影にかくれて８番目にひっそりとリリースされたのが本作である。彼の発するサウンド、テクストはいわゆる〝日常生活からにじみでた〟という言葉がふさわしく、特にヴォーカルにはリスナーを深く包み込む暖かさがある。アシッド性の本質がアメリカン・ミュージックのどこにあるのか、本作はその答を語る作品の一枚である。　（宇藤）



TIMOTHY LEARY
Turn On, Tune In, Drop Out
LP/Mercury SR 6113 '67年
CD/Performance PERF 389 CD

言わずと知れたティモシー・リアリーの、幾つかの作品のうち最もサウンド面での完成度、評価の高いアルバム。本人は喋っているだけなのだが、アシッドと言えばこれもある意味では実にアシッド。聴いているだけでもかなりの説得力がある。同時に〝音楽〟以外の分野のアシッドの接点としても非常に興味深い。このレコードに興味を持たれた方は当時のAcid Testのレコードも数種類出ているので聴き比べるのもいいかも知れないし、様々な分野からアプローチによりその時代の認識を深める事もまた〝ACID〟への手がかりとなるだろう。　（平野）



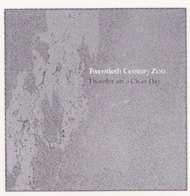
TINY TIM
With Love And Kisses From Tiny Tim
LP/Bouquet 771 74年

ヴォードヴィリアンとして有名、特異な位置にあるタイニー・ティムの、これは疑似(?)ライヴ・アルバム。客の笑いや拍手に混じって、あの奇妙なファルセット・ヴォイスでウクレレの弾き語りをするというその余りに何もかも含め異様なスタイルは、ともすれば単なるゲテ物だが、それだけで終わらない凄さが彼の歌にはある。'80年代、'90年代に入っても活動を続け、オーストラリアから出た12インチではあの奇妙な声ではない歌をしみじみと聴かせてくれ、印象深かったが、最近は開き直りすぎ(?)かエンターティナーとしてのモンドに徹しすぎる嫌いはある。しかし、新譜が未だに出ているというのは、もう、それだけで凄すぎるのだから、何も言うことはない。　（平野）



TRIPSICHORD MUSIC BOX
Tripsichord
LP/Janus JLS 3016 '71年
CD/Eva 852124

ジェファーソン・エアプレーン、グレイトフル・デッド、イッツ、ア・ビューティフル・デイ等に代表される、'60年代後半から'70年代初めにかけて柳葉敏郎(いっせいふうび)したのが「シスコ・サウンド」です。音の特徴としては、「サイケデリック」と聞いて、まず思い浮かべる音よりは、ハード／ヘヴィではなく、独特の開放感と気だるさとを併せ持ったものです。そんな「シスコ・サウンド」で、先の３組に続いて現われたのが彼等です。基本的には、キーボードが入っていないので、その分、先の３組よりは一本どっこかなという気はしますが、ギミックに頼らないこのトリップ感は、やはり捨て難いものです。なお、CDには、ボーナス・トラックが２曲入っていますが、これが２曲とも、ヘヴィなオルガン・ロックなのだからスゴイ！　（斉藤）



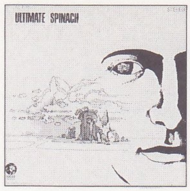
TWENTIETH CENTURY ZOO
Thunder On A Clear Day
LP/Valt 122 '68年

かなりいい雰囲気の静かなサイケ・ナンバーで幕を開ける。タイトルは「嵐の前の静けさ」か、なるほどなるほど。ということは後半いきなり切り込んでくるファズ・ギターは、突然の稲妻、まさに〝晴天の霹靂〟ってことか。一応コンセプチュアルなアルバムということなのだろう。２曲目は一転して、ガレージ風でスピード感あふれる「レインボウ」、いいね、かっこいい。ところが、アルバムの残りはみなブルース・ロック色がかなり強いナンバーである。そうか、バンド本来の持ち味はこっちだったのか。妙にジャージーな展開だったり、曲間に申し訳程度のSEが施されていたり、これはこれでまたたまらんという感じだ。ロサンジェルス録音。彼等は、このアルバム以外に３枚のシングル盤を出している。　（サトウユキエ）



25e RÉGIMENT (Canada)
Ecology
L P/Trans-Canada TC 779　'?年

ビートルズに影響を受けながらも、カナダらしい印象的なメロディ、美しいコーラスワーク、大地をどこまでも広がってゆくような空間性、漂白感、ほのぼのとした暖いみを合わせ持つソフト・サイケの好作品。流れるようなピアノ、フルート、アコースティック・ギター、オルガンにリズム・セクションという5人編成。本作は彼らの2作目に当るが、時代の影響を受けた1stから彼ら独自のサウンドへの大きく変化している。Love & Peaceを唱えたこの時期特有のムードがアルバム全体を大きく覆っており、作風は違えど、同じモントリオール出身のBOREALIS、グランビーのOLIVER KLANS、ウィニペグのCARM MASCARENA、ストーニー・クリークのGIFT、バンクーバーのHUCKLE等数々の同時代に生れた作品と共に、愛着のある一枚として想い出深い。　(平野)



ULTIMATE SPINACH
Behold And See
L P/MGM SE-4570　'68年

シスコ発のサイケデリック熱は全米中に広まり、各地域に飛び火。ボストンでも〝ボスタウン・サウンド〟と呼ばれた小ブームが、1968年に起こっている。その筆頭バンドが、このアルティミット・スピニッチだ。'68年に、バンド名をタイトルにした1stと、2ndである本作を発表。全曲を書いているイアン・ブルース＝ダグラスの才能はなかなか。リラックスした雰囲気のトリップ・サウンド、微かに漂うアシッドの香り……ああ……いいね。しかしその後、彼を含むほとんどのメンバーが脱退。結局、紅一点のバーバラ・ハドソン以外は新メンバーという編成で、再びバンド名がタイトルの3rdを'69年に発表(あ〜ややこしい)。3rdには、後期ドゥービーのギタリスト、ジェフ・バクスターが参加していると、ハイ。(サトウユキエ)



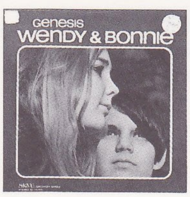
UNFOLDING
Freak Out Party
L P/Audio Fidelity AFSD 6184　'67年

いきなりAcid RockサイドとMeditationサイドに分かれ、裏を見ればわけのわからぬサイケデリック・トップ10が記されている。A面は基本的にはビートなのだが、演奏が酔っぱらっているかヴォーカルが酔っぱらっているかどちらかで遂にはKan Guruと化す。B面に針を移せばインド音楽→語り→ハレクリシュナ→フルート・ソロと続いて終わってしまい、これではティモシー・リアリーと殆ど変わらない。こういう頭を抱えて悩んでしまう様な面白いレコードってサイケのレコードの中にいくらでもありそうで実はない。再発も出ているのでどうぞお見逃しなく。　(平野)



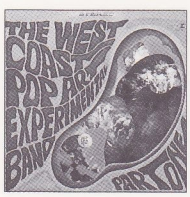
THE UNITED STATES OF AMERICA
The United States Of America
L P/CBS 9619　'68年

'60年代中期のサイケデリック・ムーヴメントの影響を受けて、アメリカでは多くの革新的ロック・グループが誕生した。中でも、ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカは、1枚のアルバムを発表しただけにもかかわらず、最も高い評価を得たグループである。キーボード、ヴァイオリン、ベース、ドラムス等、全ての楽器を電気処理した演奏はエレクトロニック・ミュージック、ポップス、フォーク、クラシック等の要素を含み、サイケデリック色の濃い彼ら独自のものとなっている。当時としてはエレクトロニクスを極めて巧みに用いた、浮遊感のあるやさしく幻想的なサウンドはどこかビートルズの持っていた実験的な部分にも通じるものがあり、プログレッシヴと呼ぶに相応しい。　(賀川)



WENDY & BONNIE
Genesis
L P/Skye-10060　'?年

昔からUS物びいきのファンの間ではMELLOW CANDLEより数倍良い（私もそう思う）と言われ、ソフト・ロック・ファンの間でさえ未だにベスト・セラーを続けるフィメール・ソフト・サイケの佳作。ウエスト・コーストの風が吹く洗錬されたシスコ・サウンドの上を品のあるWendyとBonnieのハーモニーが美しい響き渡る、女性voファンにはたまらない内容。ギターはLarry Carlton(!)、Gary McFarlandのプロデュースも管弦を使ったりせず、シンプルで的を射ている。リズムを強調したA①、風のようなA②、物憂げなオルガンも良いA③から、ジャジーでクールなコーラスの美しいB⑤までどの曲も出来が良く、魅力的な内容だ。尚、本作は当時国内盤も出ていた。　(平野)



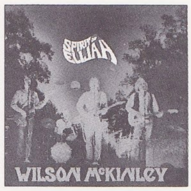
THE WEST COAST POP ART EXPERIMENTAL BAND
Part One
L P/Rerise 6247　'67年

この長い名前、どうにかなりませんかね？　でも、音をよく表わしています。西海岸の爽やかさがあり、キャッチーではなく、正に「ポップ・アート」と呼ぶべきポップさもあり、なおかつ実験的なのです。歪んではいかないし、モヤーッともしていないのですが、サイケデリックというのは、何もそういうものばかりではないので、一般に、本作はサイケデリックの名盤と言われているのは、そのとおりだと思います。なお、本作以降は、少しずつフツーになって行きますが、本作の前年に、マイナー・レーベルから、バンド名と同名のアルバム（本作以降とは異なる、ガレージ寄りの音で、これも傑作）を出しているので、本作は2ndとなり、続くVolume 2及び3はそれぞれ3rd、4thとなり……ええい、ややこしい!　(斉藤)



WESTFAUSTER
In A King's Dream
LP/Nasco 9008　'71年

この「ナツオの恋人」レーベルは、総じて評判が良くありませんが、そのスジでは一番いいと言われているのが本作です。ジャケットの「ブラック・マジックおばさん」を見てしまうと、「嘘もCOVEN」のような、黒魔術風の音を想像しますが、今回、私が書いたものの中で、最もプログレらしいプログレ（？）なのです。オルガンとフルートを中心とした、メロディアスで叙情的なサウンドは、ヴァーティゴのスティル・ライフを、トロ〜ンとした音にして、ヴォーカルをもっと優しい声に差し替えたような感じです。この「トロ〜ンとした感じ」と、ヴォーカルのエコーの深さが、サイケデリックと言われればそうかなというくらいですから、今後はプログレの人に狙われるでしょう。1曲目の歌い出しは5拍子ですし。　（斉藤）



WIISON MCKINLEY
Spirit of Elijar Voice Of Elijar
LP/(private press)　'?年

クイックシルヴァーやグレイトフル・デッドから影響を受けたバンドは数多いが、ウィルソン・マッキンリーもその1つ。ハンドメイドのシルクスクリーンで印刷されたジャケットが印象的な1stでは典型的なスタイルのアシッド・サイケ・サウンドを聴くことができる。2ndでは曲の講成力が大幅に向上し、インプロヴゼーション主体のロングトラックが主体の内容となっている。全体に心地良い浮遊感をともなった演奏であり、同時期のデッド等の作品と比べても遜色はない。ジャケットなどのクレジットを見ると、同時代の他のグループに多く見受けられたように、宗教的なバックボーンを持っているようだ。　（関口）



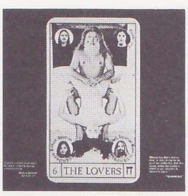
WIND FLOWER
Wind Flower
LP/R-2827　'?年

なんとアラスカのサイケです。幻想的な美しいジャケット、女性voにコーラス、まるで大地の清流を流れる一輪のアネモネの如くかれんなフォーク・ロックで、ほのぼのとした暖みのあるサウンドに魂のこもったヴォーカルが乗り、それは風媒花のように、風に乗って旅をし、夢を紡いでゆきます。裏ジャケのエスキモーにアフロ・ヘアーはちょっと驚きで、一度はびびりますが、内容は大丈夫です。ブリティッシュ・フォークが好きな人も、きっと気に入るでしょう。　（平野）



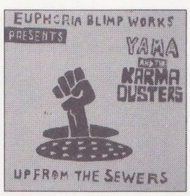
WIZARDS FROM KANSAS
Wizards From Kansas
LP/Mercury 61309　'70年
CD/(U.K.)Aftergrow AFT 6

目新しさ、漸新さ、眼前のものばかりに囚れ、何だか凄いような事を演っているものに、日本のリスナーはすぐ飛びついてしまうが、そんな、砂糖菓子を欲しがる子供のように甘い幻想が今の貧困な凄そうな駄目な日本のアングラ・シーンを形成している。マグマ、ゴング、ジャーマン・ロック？？　そんなものエネルギーの余ったティーン・エイジャーでもあるまいし、T.G、SPK、WHITE HOUSE？（冗談じゃない！）CAROLINER、ローファイ（→即ゴミ）そこらの和物洋物、子供の自慰みたいなの（最近の音楽）はやめてほしい。だからといってDEEP、SILVER APPLES、ESP系等、今更どうでもいい。（FAIRPORT CONVENTION／1stを本当に良いと思ってる人がいたら、CHARLATANS、MU、TRIPSICHORD、本作、MOTHER TUCKERS……、etcを今すぐ、聴かなけりゃ、いけない！）何のレヴューだって？　最高の音楽!!　（平野）



YA HO WA 13
I'm Gonna Take You Home
LP/Higher Key 3309　'7?年

イッチヤッテル型サイケの典型だ。妙に神格化されているが、元シーズのスカイ・サクソンがいること以外には音楽的に見るべきところはない。そう判かっているのに魅かれるのはなぜ？　ハッタリもかましきれば様になるのだ。カリフォルニアにあったセックス＆ドラッグスのカルト宗教団体であるヤホワ13は、知る限り11枚のアルバムがあるが、オリジナルは思い切り値が張る。世も末だ。俺の手元にある8枚は全て安価なコピー盤、内容はどれをとっても大差ない。それにしても教祖様のインセインなヴォーカルはなんなんだ。その教祖様がハングライダーで遊んでいたら電柱に撃突して死んだと松谷健に聞かされたが、レコード同様情けなくてたまらんのお。宗教も音楽も笑いがあるうちは救われる。好き者のみ必聴？（星野）



YAMA AND THE KARMA DUSTERS
Up From The Sewers
LP/Manhole 番号なし　'70年

こういうアルバムは、このテの音を、私などよりも沢山聴いて来た人でないと、正当な評価は出来ないと思うのですが、「読者の大半を占めるであろう〝プログレの人〞には、どう聞こえるか」を書くには、〝ex-プログレの人〞である私がということで。さて、本作は、淡々としたもの、ブルース寄りのもの、ラグタイム風のものと、曲調は様々ですが、全体としては、フォーク・ロックです。ただし、限りなく地味です。ヨゼフ・シゲティのヴァイオリンのように、枯れ切っています。よほど、イッたまま帰って来ないような人でないと、心底いいと思うことはないと思います。しかし、ピアノが入っているせいか、退屈ということはなく、同じくレア・アイテムとして知られる、イギリスのOLIVERよりは遥かにいいです。　（斉藤）

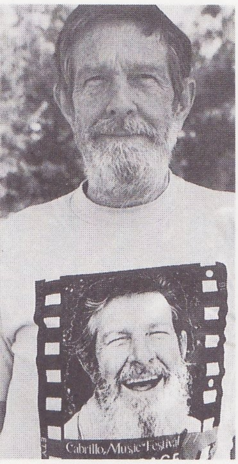
AVANT-GARDE MUSIC



アメリカン・アヴァン・ミュージックの源流

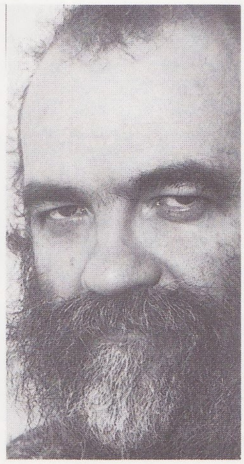
── ジャズとニュー・ミュージックを中心に ──

文●福島恵一

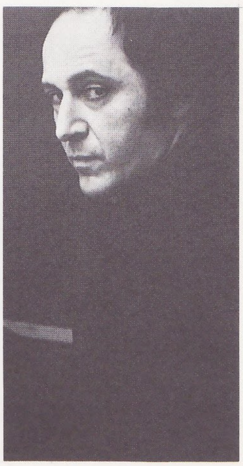


John Cage


Harry Parch


La Monte Young


Terry Reiley


Steve Reich

1.アメリカ実験音楽の系譜

ジョン・ケージの音楽は、ラディカルな還元/問い直しに満ちている。様々な慣習や約束事を(作曲家・演奏者・聴衆から)きれいに取り払って、あらかじめ意図され、子細に計画され、設計図から再現された何物かとではなく、結果の予想できない「出来事」とタブラ・ラサに直面する純粋体験へと向かう動きに。

その具体例と言うべき、ステージ上のピアニストが決められた時間に従ってピアノの蓋を開け閉めするだけの「無音」作品〝4分33秒〟やミクスト・メディアによるハプニング(空間に散らばった様々なイベントが、脈絡なく同時多発的に仕掛けられる)において、結果的に見出されたのが(日常生活の時間における)本来的に異質なもの併置/交錯(=不純性/雑種性)であったことに注意したい。〝4分33秒〟で聴衆が耳にしたのは、決して抽象的な「無音」などではなく、開け放たれた窓から流れ込む森のざわめきや会場であるテントを打つ雨だれ、そして詰め掛けた人々が口々に漏らす困惑や不満のざわめきだった。それはきっと、無響室という可能な限りの「無音」状態においてなお自分の神経系統の発する高い音と循環系の発する低い音を聞いた体験よりも、徹底的な還元/問い直しの果てに、原理やイデアではなく、自然と生活(有用性)を見出すというエマソンやソロー以来のアメリカ特有の身振り(超絶主義)に基づくものではないだろうか。

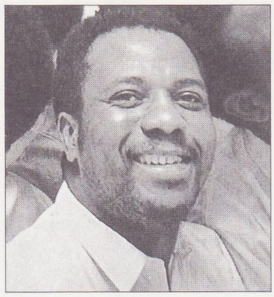
チャールズ・アイヴズ(1874〜1954)の繰り広げた様々な実験も、音楽的語法の拡張といった「前衛」的所業では決してないだろう。創造主として無から有を生み出し、頭の中身を五線紙に書き付ける代わりに、彼は流れゆく時間や移り変わる風景に耳を傾け、事物の配置をスケッチしていった。その中に賛美歌やポピュラー・ソングの断片が潜り込むのは、言わば必然だったに違いない。だってそれは彼の生活時間の一部なのだから。牧歌的な田園〜郊外風景と切り立ったアメリカン・サブライムという違いこそあれ、彼と親交のあったカール・ラッグルズ(1876〜1966)についても同様のことが言える。それは「聴取」の側から音楽を組み立てていくことであり、発想の出発点に具体的な音の観察/発見を置くことであった(彼らが共に画業をものしたのは、おそらく偶然ではない)。

この観点に立つならば、ケージ自身による「実験音楽」の定義にもかかわらず、いわゆるNYスクールの面々(モートン・フェルドマン、アール・ブラウン、クリスチャン・ウォルフに、デヴィッド・チュードアや小杉武久、刀根康尚等を加えておこう)だけにとどまらず、ケージをはるか先取りしたような伝説的な数々の実験を行い、息子チャールズに多大な影響を与えた軍楽隊隊長ジョージ・アイヴズへとさかのぼる一方で、純正律にこだわりマッド・サイエンティストのように風変わりな楽器を山と発明したハリー・パーチや、チャーリー・パーカーに共演を申し込まれた「路上のミニマリスト」ムーンドッグ、スペイン市民戦争参加による国外追放以来、メキシコでプレイヤー・ピアノ用ロール・パンチャーに向かい続けたコンロン・ナンカロウ、さらにはラ・モンテ・ヤング、テリー・ライリー、スティーヴ・ライヒ、フィリップ・グラスらミニマリストや、デヴィッド・バーマン、ゴードン・ムンマ、ロバート・アシュリー、〝M.E.V.〟のメンバーらエレクトロニクス奏者へと実験音楽の系譜をたどることができる。それはまた、いま見てきた通りアマチュアやアウトサイダーたちの系譜でもある。

2.ジャズ・アヴァンギャルドの系譜

チャーリー・パーカーやバド・パウエルら突出した才能た


Cecil Taylor

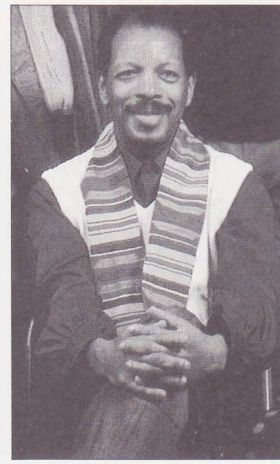

Thelonious Monk


Philip Glass


Sun Ra


Albert Ayler


Anthony Braxton


Ornette Coleman

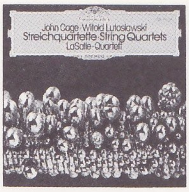
ちがジャズにおけるモダニズムの口火を切り、ジャズを「うた」から離陸させ器楽的閉域をかたちづくることに成功した(と同時に多くの殉教者を生み出した)'40年代のビバップ革命に続く、'60年代のフリー・ジャズこそは「ジャズ史上最初のアヴァンギャルド」(清水俊彦)である。だが、黒人の権利闘争とシンボリックに結び付いたフリー・ジャズの高揚も、やがてコルトレーンの死('67年)によって冷水を浴びせ掛けられ、即興共同体が崩壊し「ジャズが粉微塵になった後の砂漠のような状況」(北里義之)に、ポツンと立ち尽くしている自分自身を発見することになる。現在我々の立っている足元まで地続きの、希薄な「ポスト・フリー」の空間だ。

その時、新たな関係性の構築に向け、いちはやく組織的模索を進めたのがアート・アンサンブル・オヴ・シカゴ(レスター・ボウイ、ロスコー・ミッチェル、ジョセフ・ジャーマンほか)、アンソニー・ブラクストン、リーオ・スミスらシカゴを拠点とするAACM(創造的ミュージシャンたちの進歩のための協会)のメンバーたちだった。新たな構造の探求と集団記憶の再生を掲げた彼らに対し、ドン・チェリーは民俗音楽を日常生活レヴェルで導入し、セシル・テイラーはグループを最小限のユニットへと縮小するとともに、民衆の文化伝統から声や身振りをブリコラージュし、アルバート・アイラーは(途半ばにして倒れたものの)汎ヴァイブレーション的交感を通じてフォークロアへと傾倒を深め、スティーヴ・レイシーはパリの異邦人となって、あえて映画的な場面設定を伴うソロ・インプロヴィゼーションを試み、サン・ラはエレクトロニクスや演劇性をさらに大胆に採り入れ、独自の神話世界を以前にも増してマルチ・メディア的に展開していく。そして、オーネット・コールマンは幾度かの沈黙の後「ハーモロディクス」を唱え、ジャジューカ・ミュージックとの共演を経て、プライム・タイムを結成する。ここで注目を浴びているフォークロア的なものは、決してジャズに異国の香りをまぶすためにではなく、越境を少しも特権化することなしに、幾つものボーダーを不断に乗り越えながら、複雑に入り組んだ国境地帯を旅し続けるオーネットに典型的に見られるように、即興の力を鍛え直して、再びジャズを見知らぬ他人の土地を横断していく「旅する音楽」とするために用いられている。

無論、フリー・ジャズ以前にも、制度としての「ジャズ」を揺すぶりながら、声高に破壊や逸脱を唱えることなく、自在に境界を出入りしていた者たちがいた。デューク・エリントン、セロニアス・モンク、ハービー・ニコルス、エリック・ドルフィ...。彼らはジャズの幹に位置しながら、なおスタイルの交替による進歩史観に収まらない特異な存在として、ジャズの現場に今も刺激を与え続けている。

3.移動する音楽/アメリカ音楽の原像

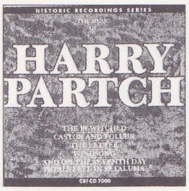
「ヨーロッパの文化伝統からのラディカルな逸脱と異文化に対するラディカルな取り込み」というアメリカ文化の基本的特質は、実験音楽とジャズ・アヴァンギャルドにこそ、最もよくあてはまる。そして、現在のニュー・ミュージックを支える世代、例えばクロノス・カルテットに曲を書く一方で、ネイティヴ・アメリカンの音楽に関するフィールド・ワークを続け、また実験音楽の埋もれた伝統を紹介する雑誌『サウンディングス』を編集発行してきたピーター・ガーランド(1951〜)は、先の二つの流れに全く同時に影響を受けたと表明している。アメリカン・アヴァン・ミュージックとは、こうして常に移動し、問い直しを続け、アウトサイダー/オルタナティヴ/インデペンデントであり続けることによって、結びかけたアメリカ音楽のイメージを、その都度解体・変形していく不断の運動である。そして、それこそは「アメリカ音楽の原像」にほかなるまい。



JOHN CAGE
String Quartet

ＬＰ/Polydor MG 1048　'73年

　ケージを１枚との無理難題を逆手に取って、見逃されがちながら愛すべき本作を挙げることにしよう。スコアが書かれたのは1949〜50年というから、彼がますます東洋指向を強めていった頃で、不確定性導入に「易経」を用い始めるすぐ前に当たる。ここでケージは、ごく限られた音素材（第一vlnなら20分以上にわたる全曲を通じて、わずか17種類の音だけ）を用いて、ひとつの構造から可能な限りの変形を引き出すための手法としてチャートを活用しているという。ここに聞かれるどこか胡弓にも似た倍音を多く含んだ柔らかくかすれた音彩はケージの奏法指定によるもので、キノコ的な瑞々しい伸びやかさを見せながら、緩やかに隙間を保って平行し、あるいはすれ違う。演奏はラサールＱ。Ｂ面はルトスワフスキ。　(福島)



HARRY PARTCH
The Music Of Harry Partch

ＬＰ/CRI CD 7000　'89年

　カリフォルニアの砂漠に住み、オクターブを43に分割した独自の純正律を信奉し、無垢な（その実ステレオタイプの）未開／原始への憧憬と錯誤・捏造だらけのエキゾティズムに溢れた架空のリチュアル音楽を演奏し続けた孤高のアウトサイダーたるパーチの作品は、どれもが「もうひとつの世界」を創造せんとする建築的意志とヴィジョンをなみなみとたたえている（サウンド／ヴィジュアル／儀式的強度のいずれにおいても）。専ら廃物を利用した奇怪な創作楽器群（電球を用いたマリンバをはじめ、その多くは調律打楽器である）も、『ブレードランナー』や『マッドマックス』の後では奇妙に懐かしい。大作「Delusion Of The Fury」（Columbia）はじめLPが入手困難の現在、彼を聴くにはまず本編集盤。　(福島)



LA MONTE YOUNG
The Theatre Of Eternal Music

ＬＰ/レーベル名なし DH-1001　'94年

　200枚限定のおそらくは海賊盤（日本製？）だが、内容の素晴らしさゆえに紹介しないわけにはいかない。うねうねとしたヴォイスをフィーチャーしたＡ面と背景を成すドローンだけを取り出したＢ面という仏Shandar盤に対し、本作はクチャクチャとしたテリー・ライリー的サックス・ソロを前面に押し立てたＡ①、各楽器の生み出すモノトーンが各所で断続して、アンサンブル全体が織り成すドローンにちらつくような揺らぎを与えるＡ②に加え、Ｂ面全部を費やして、ラモンテ・ヤング(vo)、マリアン・ザジーラ(vo)、トニー・コンラッド(vln)、ジョン・ケイル(vla)(両名はＡ面にも参加している)が、正弦波のドローンの揺らめきのもと、どこまでも続く水平線に沿って、まさに永遠の調律を繰り広げる。名盤。　(福島)



TERRY RILEY
In C

ＬＰ/Columbia MS 7178　'64年

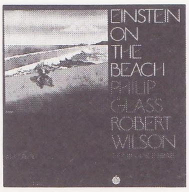
　某有名プログレ・バンド命名のネタとなった「ア・レインボウ・イン・カーヴド・エアー」('68年）と並ぶ彼の代表作。いわゆるロック・アンサンブル的な乗りは、４人組の中でこの頃の彼が一番。ピアノがずっと維持し続ける基本パルス（この最高音のＣのヒステリックな連打がタイトルの由来）に合わせながら、指定された53のブロックのそれぞれを演奏者が各々任意の回数ずつ繰り返して次へと移っていく本作は、反復に基づいたストリート・ミュージシャン的即興（前もって仕込んでおいたフレーズからフレーズへと移っていく）をシステム化したものと言えるだろう。逆に言えば、ズレのプロセス自体をシステマティックに見せようという発想はない。彼がが自身を作曲もする即興演奏者と定義する所以である。　(福島)



STEVE REICH
Early Works

CD/Electra Nonesuch WPCC-4087
'87年

　初期（'60年代）の、漸次変化のプロセスをテープ・ループの同期ズレにより生み出していく作品（例えば「カム・アウト」は黒人暴動の際に逮捕された少年の発言の一部をループ化）から、ライヒはバリのガムランやガーナのドラム音楽の学習を契機として、同じ手法を器楽アンサンブルに適用し始める（〝ピアノ・フェイズ〟〝ドラミング〟等)。編成が拡大していくにつれ、プロセスの産出原理が剝き出しだった構成も、次第にポリフォニックな厚みを帯び（〝18人の演奏者のための音楽〟等）、現在ライヒは自らの出自に目覚め(？)、専らユダヤ的素材を頻繁に用いている（〝テヒリム〟〝デザート・ミュージック〟等）。そこに濃密に漂う意味性こそは、最初期のテープ作品の始まりに置かれていたものであった。　(福島)



PHILIP GLASS
Einstein On The Beach

ＬＰ/Tomato 301311〜4　'79年

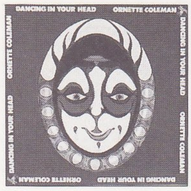
　'76年にメトロポリタン・オペラハウスで初演された劇作家／演出家ロバート・ウィルソンとの共同制作による長大なオペラ作品。'70年代初頭のモノクロームで冷やかな強度に満ちた錯乱が、ヴォイスを加えた「ノース・スター」（'77年）からきらびやかなポップさを身にまとい、これまでの集大成にして一大転機と言うべき本作で華々しく弾ける。この成功で彼は一躍スターダムにのしあがり、以降「サチャグラッハ」「コヤニスカッティ」とますます平明な大作指向へと傾いていくことになる。かつての息の長い強靱な持続は、均質でコヒーレントなサウンド・ブロック（アンサンブルはほとんどひとつの「音色」となっている）の連結に置き換えられており、重点はプラトーの生成よりも場面の転換に置かれている。　(福島)



THELONIOUS MONK
Thelonious Alone In San Francisco

CD/Riverside OJCCD-231-2
'87年(録音'59年)

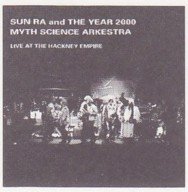
モンクを一枚だけというなら、コンボによる名盤「ブリリアント・コーナーズ」('56年)が定版だが、リズムの不均衡／奇妙な間／不安定なズレを呼び込む不協和音／フレーズの対比が生む落差／至るところ仕掛けられる切断とあちこちの破れ目から走り出す逃走の線……といった彼の特質を味わうには、むしろ肉付けのないデッサンであるソロ・ピアノが適しているように思う（特に本作）。現在のシーンへの影響の大きさを見るには、例えばビル・フリゼールとジェリ・アレンの参加したポール・モチアン「モンク・バイ・モチアン」や清水一登「Yet Somehow…」あたりから、加藤総夫氏の著書(必読！)をガイドブックにスティーヴ・レイシーやICPオーケストラへとさかのぼってみるのも方法だろう。（福島）



ORNETTE COLEMAN
Dancing In Your Head

L P/A&M Horizon SP-710 '77年
CD/A&M CD 0087

プライム・タイム編成による第一作。沸騰する鍋の中で激しく沸き立ち舞踊る鰹節のようなリズム・ワークをキャンヴァスに見立てて、オーネットは自由闊達にドローイングを施していく。キャプテン・ビーフハートが「彼は素晴らしい絵描きだ」と言っていたのを思い出す。この地点から振り返れば、確かに「ロンリー・ウーマン」もハーモロディックだったし、「ユニゾン」（この語の持つ意味合いは、オーネットによって著しく拡張されており、全員がひとつの平面を織り成していくような、一種の共通感覚／状態を指し示しているように思われる）は、「フリー・ジャズ」で効果的に用いられている。併収されたジャジューカとの共演は解読のヒント。ジャズの領域を越えた広がりを見せる真に決定的な一枚。（福島）



SUN RA AND THE YEAR 2000 MYTH SCIENCE ARKESTRA
Live At The Hackney Empire

CD/Leo LR 214/215 '94年

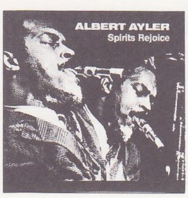
多楽器主義、ヴォイスとエレクトロニクスの導入、演劇性や造形性を導入したステージング、独自の神話的世界の構築、そして自主レーベルを拠点としてのレコード・リリースや出版等のマルチ・メディア的展開……サン・ラの重要性は、黒人のオーラルな文化を全面展開したうえに、クリス・カトラーも著書で述べているように、インデペンデントかつオルタナティヴな活動のモデルを鮮やかに示したことにある。本作はサン・ラの一夜のコンサートを丸ごと収録したライヴ盤。ＥＳＰ時代の誇大妄想狂的な神秘性、その後に示していった部族的な共同性、SF的な未来志向やキッチュなノスタルジアが、切れ目なく緩やかに織り成され、巡るように移り変わり、眼の前を練り歩いて遠ざかる。全体像を概観できる１枚。（福島）



CECIL TAYLOR
Akisakila

L P/Trio PA-3004〜5 '73年

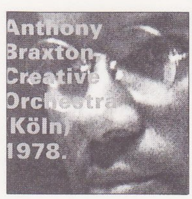
本文に述べた彼の転機は、フリー・ジャズ・ムーヴメントのさなか、目まぐるしいコード・チェンジやリズミックなものの強調により、緻密なオーケストラ的構築を成し遂げた傑作「ユニット・ストラクチャー」「コンキスタドール」（共に'66年）から、小人数のユニットにより渦を巻くような有機的運動性を探求する「Ａの第二幕」('69年）や本作（初来日時のライヴ盤）へと移る間にある。この転機（その頃、彼はちょうど大学で教鞭を取っていた）の後、ソロ・ピアノの発表、オーケストラの編成、詩集や評論集の刊行など、彼の世界の全面展開が始まる。やはり本文に述べたブリコラージュ「バレエ・インプロヴィゼーション」を初めて公開したのも、この来日時であった（残念ながらここには収録されていない）。（福島）



ALBERT AYLER
Spirits Rejoice

CD/ZYX-Music ESP 1020-2 '65年

「ベルズ」、「イン・グリニッチ・ヴィレッジ」と並ぶ代表作。彼の放出するヴァイブレーションが、メンバーの共振／交感による乱反射と増幅を通じて、グループ・サウンドの大きなうねりを生み出していく。「スピリチュアル・ユニティ」の衝撃からか、破壊性ばかりが取り沙汰されるアイラーだが、本作標題曲のテーマをはじめ、随所に見られるフォークロアからの引用／変形／コラージュは、フリー・ジャズ・ファンが見切りをつけた晩年にも引き続き進められており、彼の音楽活動を貫く射程の長い作業となっている。「フレンチ・ロック集成」に述べた通り、この方向性をラディカルに引き継いでいるのは、むしろルイ・スクラヴィスやミッシェル・ドネダ等、仏のフリー・ジャズ・ミュージシャンのように思う。（福島）



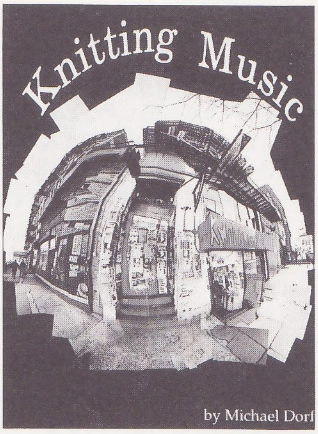
ANTHONY BRAXTON
Creative Orchestra (Köln) 1978

CD/Hat Hut hatART CD 2-6171
'95年

'60年代末から現在まで、オーケストラを率いての活動やコンピューターとの共演、独特の図形楽譜による作曲、完全即興集団〝カンパニー〟への参加、ジャズ・スタンダードの再評価等、幅広く活動を進めているマルチ・リード奏者。アルト・サックスをサウンド／ノイズ・メーカーとして限界まで酷使した無伴奏ソロ「フォー・アルト」をはじめ数多い重要作の中から、ここではロアー・イーストサイド・シーンとの関連を踏まえて本作を挙げよう。傑作「Creative Orchestra Music 1976」の続編であり、N.ローゼンバーグ、G.ルイスら、ここにはとても書ききれない超豪華メンバーによるノイジーに入り組んだ演奏を聴くことができる。そのほか近作では、充実作「Charlie Parker Project 1993」も必聴。（福島）

「No New York」からニッティング・ファクトリーへ

文●坂本　理



ニッティング・ファクトリーはマイケル・ドルフというひとりの青年の手によって1987年2月にオープンした。伝え聞く所によれば、それは小さな薄汚れたクラブだという。ここにニューヨークの意欲ある前衛ミュージシャンがこぞって出演し実験を繰り広げ、たちまちそれは巨大なシーンとして浮上することになった。

しかし、この音楽シーンは、ニッティング・ファクトリーに始まった訳ではない。ニッティング・ファクトリーはシーンの理解者、支援者として、絶好の受け皿になったに過ぎない。

このアヴァンギャルド・ミュージック・シーンがいつ、どこから生まれたのか。それはこのシーンがどのように成立しているのかを知る重要な鍵となる。そして、私ならばこう答える。それはまずジョン・ケージによって予め用意され、1978年、ジャズとパンクと現代音楽から生まれた、と。

このシーンの形成に触媒の役割を果たした重要な3人の外国人がいる。デイヴィッド・アレン、フレッド・フリス、それにブライアン・イーノの3人だ。彼らが接触しなくてもこのシーンは生まれただろう。しかし彼らは間違いなくそれを促した。

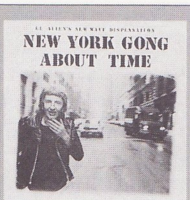
1978年、「No New York」。ブライアン・イーノが編集したニューヨーク・アヴァンギャルド・ロックの歴史的ドキュメント。ここからノー・ウェイヴが生まれた。アート・リンゼイ、モリ・イクエらの無垢で凄絶な産声。

1978年、NEW YORK GONG結成。イギリスでSOFT MACHINEを生み、フランスでGONGを生んだデイヴィッド・アレンは、アメリカでNEW YORK GONG、即ちMATERIALを生み、ビル・ラズウェルを世に送り出した。NEW YORK GONGは、また、同時に、マーク・クレイマーのスタート・ラインでもあり、そこからエリオット・シャープ、ジョン・ゾーンらが登場する。そして、時を経てシミー・ディスクへ。そう、すべてはNEW YORK GONGの波紋なのだ。

1978年、フレッド・フリス、渡米。ソロ・インプロヴィゼーション、MASSACRE、SKELTON CREWと精力的に音楽活動を繰り広げ、遂にはNAKED CITYに至る。

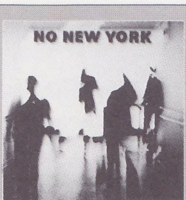
更に付け加えれば、同じ頃スタートしたLovely Musicに集結したLOVE OF LIFE ORCHESTRAやその周辺の面々。ピーター・ゴードン、デヴィッド・ヴァン・ティーゲム、ジョージ・ルイス、ジル・クローセン、ロバート・アシュリー、等々。彼らのヴィジョンをそのままとてつもない規模に拡大したのが現在のこのシーンだ。

ニッティング・ファクトリーは1991年よりレーベルとしてもミュージシャンを支援している。これまで知られてもいなかったミュージシャンがここから大勢脚光を浴びることになった。大半は日本盤が流通しており、手掛りとして手ごろだろう。それがわざわざニッティング・ファクトリーを名指しする理由だ。



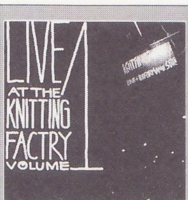
NEW YORK GONG
About Time
Charly Records CRL 5021　'80年

PLANET GONGで復活したデイヴィッド・アレンはそのままの勢いでアメリカに乗り込み、NEW YORK GONGを結成した。アレンにとってはひとつの過程だったが、このバンドがやがて広大なNYアヴァンギャルド・シーンを生み出して行く歴史的な起点となった。ビル・ラズウェル(b)、ビル・ベーコン(ds)、フレッド・マハー(ds)、クリフ・カルトレーリ(g)、マイケル・バインホーン(syn)ら、当時無名の錚々たるミュージシャンが並び、マーク・クレイマー(org)まで顔を出す。そこに今は亡きゲイリー・ウィンド(ts)も余裕のプレイで参加しているのが嬉しい。ワイルドなパワーに溢れた豪快なジャズ・ロック・サウンドとアレンの音楽が不思議なマッチングを見せる。アレンの足跡にはいつもムーヴメントが花開く。(坂本)



CONTORTIONS, TEENAGE JESUS AND THE JERKS, MARS, D.N.A.
No New York
Cintilles AN 7067　'78年

ブライアン・イーノが編集したニューヨーク・アヴァンギャルド・ロックの記念碑的アルバム。上記の4バンドのコンピレーション。明らかにパンクのリズムを打ち出したコアなリズム、ヴォーカルは「メロディを歌う」ということとはかけ離れた「叫び」となっている。そして、サックス等が使用されていることからも分かるよう特にフリー・ジャズからの影響が顕著でもある。また、ギター等の楽器が作り出す不協和音やノイズが多用されている点では現代音楽などの影響を感じることもできる。とにかく、暗く、否定的な雰囲気が充満している。その空気がパックされたアルバム。こういった音楽がNO WAVEと呼ばれるようになり、のちにパンク、ジャズ、ロックと多方面で多大な影響を与えた。CD化を望む。(平山)



V.A.
Live At The Knitting Factory Vol.1
徳間ジャパン TKCB 30297　'91年

'80年代の終わり以降のニューヨーク・シーンを代表する場としてのニッティング・ファクトリーにはレーベルとしての側面があり、単発作を見てもS.ベネット、A.デニオその他重要作は多いのだが、その場としての性格を現しているのがオムニバス・アルバムだろう。これがまたやたらとある上に色々なミュージシャンが入り乱れていて収拾が着かないのだが、まずは本編とでも言うべき本シリーズから。カーリュー、ドクター・ナーヴ、メーレッグド・サリーと言った馴染み深いグループから良く分らない物まで貴重な音源にこと欠かないのが場としての実力を示す。他にもこの手の連中によるビートルズ・カヴァー集やもう少しアーティストをしぼったツアー物等色々面白い物が多い。(中西)

JOHN ZORN

文●福島恵一

略歴

1953年9月2日NYに生まれる。映画少年で、音楽に魅かれたのも映画『オペラ座の怪人』のオルガン演奏シーンからだった（現代音楽に目覚めたのもM・カーゲルのオルガン曲『付加された即興』がきっかけ）。国連学校で作曲を学び、セントルイスのウェブスター大学で作曲・映画・哲学を専攻する。BAGの本拠地であり、シカゴ（AACM）にも近いこの都市は、彼を'70年代初頭の熱きジャズに引き合わせる（大学にはオリヴァー・レイク（as）、ルーサー・トーマス（as）、ジョー・ボウイ（tb）らがいた）。アンソニー・ブラクストン「フォー・アルト」により、習い始めたサックスをサウンド/ノイズ・メーカーとして再発見する。またワーナーのアニメ（『バックス・バニー』等）音楽の作曲家カール・スターリングを研究。幾つもの圧縮されたサウンド・ブロックの連結により、絶え間無いサウンドの加速と飛躍を組織していく仕方は、以後の彼の作曲に大きな影響を与えている。大学を1年半でドロップアウトし、音を伴わぬ見るための「音楽」（カフカ『音楽犬』を思い起こさせる）を上演する劇団「シアター・オヴ・ミュージカル・オプティクス」を創設。'75年NYに戻り、アパートの自室でソロ・ライヴを始め、ユージン・チャドバーン（g）、ポリー・ブラッドフィールド（vn）と共に即興トリオ〝三百羅漢（スタチューズ）〟を結成。トリオごとフランク・ロウ（ts）「ロウ&ビホールド」の録音に参加（初録音）。以後現在に至るまで、「ゲーム・ピース」、ファイル・カードによる作編曲、「ロクス・ソルス」、「濃縮音楽（コンデンスト・ミュージック）」等により、一貫して音の現場と直接切り結びながら構造の探求を続けている。またNYアンダーグラウンドの父とも言うべきフィルム作家ジャック・スミスや「オントロジカル＝ヒステリック・シアター」を主宰する劇作家リチャード・フォアマンをはじめ、音楽以外にも幅広い人脈を持ち、LPだけで1万3千枚以上というディスク・コレクターでもある。



その音楽

昨年9月、JZの40歳の誕生日を記念したライヴ・シリーズが、ニッティング・ファクトリーにおいて1ヵ月にわたり催された。最初期の室内楽から現在彼の熱中しているラディカル・ジューイッシュ・カルチャーの紹介に至るまで、鈴木清順、神代辰巳らの作品上映やジャック・スミスに捧げられた「シアター・オヴ・ミュージカル・オプティクス」の久々の新作の上演を含め、JZの全貌を明らかにしようという極めて野心的なものだ。

本稿もまた同じ野心のもとに俯瞰を試みることとする。

ソロ・インプロヴィゼーションとは、自己の外に参照すべき照応物のない演奏であり、それゆえに構造が求められる。JZがブラクストンらシカゴ派に注目したのも、そこではソロの探求が構造の探求として推し進められていたからにほかならない。その過程において楽器の解体もまた進行する。「ソロ演奏そのものに構造があることを発見することで、特定の音楽形式に束縛されず、その外に立つことができるようになる」（北里義之）「一個の楽器」というコンテクストは解体され、シカゴ派において、その結果は多楽器主義への移行として現れ（楽器は多くの選択肢の中から、そのつど臨時に選ばれたものとなる）、JZの場合、サウンドの加速と圧縮を進めていく過程で、アルト・サックスというメタ・レベルから個々の特徴的な音色/ノイズが析出し、幾つものゲーム・コール（鳥獣をおびき寄せるためにハンターが用いる呼び笛）の集積に代置されることとなる。

そこは何でも選択可能なパラダイスに見えて、実は一種の砂漠である。JZは剝き出しとなった個々のオブジェクトを、スイングする時間（条理に仕切られた時間）ではなく、どこまでも等質で平滑な時間の上に（彼はそれを「時間の外」と呼んでいる）拾い集める。

複数の即興演奏者を一連のルール（それを設定すること自体が〈配置＝構成（コンポジション）〉と見なされる）の下に置こうとするゲーム・ピースは、集団即興に構造を与える試みであると同時に、即興共同体の崩壊によって個々人のパーソナルな言語探究が析出してきた状況に対応し、対話のスペースをとりあえず確保することにより演奏者をどう出会わせるかの探求でもある。ここで注目すべきは、それが新たな共通語＝標準語の確立によってではなく、常に外部から異なる語法を取り込み、クレオール化を続けていくような仕掛けとして設計されていることだ。

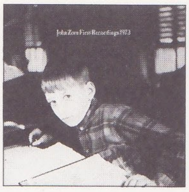
やがてJZは、ビル・フリゼールのようなあらゆる音楽に通じた共同作業者を得て、ワイル、モンクに捧げたコンピレーション参加時のスタジオ経験を契機とし、ファイルカードを用いた作編曲に没頭していくが、ここでは、ゲーム・コールの代わりに音楽ジャンルがとっかえひっかえ吹き鳴らされることになる。

砂漠に散らばる個々のジャンルをつなぎ合わせるために、音楽外のコンテクスト＝多様なものの混在を許すトポス（ラジオ、サウンドトラック、資料集積（アーカイヴズ）．．．．）が用意される。JZは引用やコラージュ、パロディやパスティッシュが少しも特権化されることなく、むしろ前提であるような場所で仕事にかかるのだ。

ここで一貫してイメージされているのは、様々な人種・文化の流入によって、自ら豊かになっていく都市の姿である。それは最も能産的な頃のNY地下（アンダーグラウンド）シーンから抽出されたものであると同時に、彼の原風景でもあるだろう。それはメタ・レベルに仮構された理念的モデルという点では、シカゴ派の掲げた「グレート・ブラック・ミュージック」と変わりないが、後に高度資本主義特有の気狂いじみた消費の加速と抵抗なく結びついていく契機となるだろう（「濃縮音楽（コンデンスト・ミュージック）」の作品群を参照せよ）。

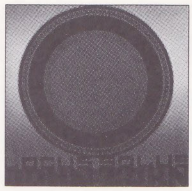
しかし、その時でもJZは身体のコンテクストを手放さない。彼は闘争のためのエナジーを作曲者/演奏者/指揮者/プロデューサーとして、常に音の現場/テクスト/戦場に自ら臨み、身体を交錯する諸力へと直接さらすことから汲み上げる。ノイズも暴力も、また常にポップであることも、身体に直接働きかけ即座に作用を及ぼす直接性/即時性によって選び取られた戦略であり、身に帯びるに至った属性なのだ。

「エレジー」「クリスタルナハト」は新たな段階（今や歴史＝物語というコンテクストへと差し戻すことが不可能な「歴史」が取り扱われる）を告げる。異なるブロックの連結による構成ではなく、ひとつの大きな連続性のなかで、些細な傷口から本来その連続体を構成している多声性が一挙に噴出する瞬間を組織すべく、注意深く耳が澄まされる。ファイルカードに代わって、より細密なマトリクスが準備され、テクストはポリリンガルな速度を紡ぎながらサウンドへと流れ込む代わりに、音楽の傍らに刻まれ、いつまでも鉛のように重く胃にのしかかる。



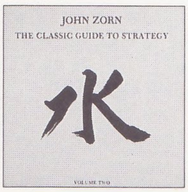
JOHN ZORN
First Recording 1973
CD/Tzadik TZ 7304　'95年

　ジョン・ゾーン19～20歳時の作品／録音群。ほとんど錯乱的なまでにノイジーな喧噪に満ちた即興的パフォーマンスから、陶酔的なミュージック・コレクレートに至るまで、サウンドの部分部分には、彼自身の言う通りカーゲル、ヴァレーズ、ケージ等々の影響がうかがえるが、事後のテープ編集を嫌い、熱狂的集中から瞬時に身をひるがえして、次の集中へとリアルタイムでジャンプを繰り返していく作品／演奏の在り方（スピードと圧縮）は、既にその後の方法論そのものである。特に彼自身「今までで最もクレージーな曲」と認める冒頭曲に聴かれる、ラジオやTVから流れ出す音声と器楽即興、ヴォイス・パフォーマンスへの「多極に分散した集中」（さらに２回分のパフォーマンスがLRに重ねられる）が興味深い。　（福島）



JOHN ZORN
Locus Solus
CD/Evva 33003　'83年

　後期DNAの衝撃はジョン・ゾーンに、ロック・ソングの語彙を直接性・濃密な焦点・電気増幅等の諸要素に構造化し、これらの周りにトリオによる１～３分の即興を結晶化させる「ロクス・ソルス」を試みさせる。素早い変化のために用意された一連のハンド・キューは、やがてテレパシックな交感に席を譲り、即興はフリー・ジャズ特有の迂回を逃れて、自らを濃縮するための焦点を手に入れる。極端に圧縮された変化は、早送りされノイジーに輝く乱流と化して、はるか後のネイキッド・シティ「トーチャー・ガーデン」を予感させる。CDのみの追加トラックあり。　（福島）



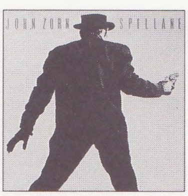
JOHN ZORN
Classic Guide To Strategy Vol.2 “水”
L P/Lumina L 010　'86年

　機動力に富むゲーム・コールの採用は結果としてより性急な切断を招き寄せ、サウンド・ブロックの細分化を促す。アルトにおいても螺旋状のディスクールは排され、短く太い直線の折れ曲がった不連続な連なりが取って替わり、殆どスプラスティックな加速は、やがてサウンドの量子化へと至る（これこそは演奏環境の砂漠化にほかならない）。演奏に与えられたスペースはほんの僅かに過ぎず、一瞬眼前に開けた展望から道は急角度に遠ざかる。ここでのジョン・ゾーンの演奏は一種の臨界に達し、触角を揺らめかせる昆虫／カフカ的なものとなっている。　（福島）



JOHN ZORN
Cobra
CD/日本クラウン CRCJ-2003～4
'87年

　演奏者の出合いを組織するだけでなく、メモリー機能やゲリラ・システムを装備して、いっそう戦略性を増したゲーム・ピースの代表作。ニューヨーク、サンフランシスコ、東京での月例ライヴをはじめ、もはやパブリック・ドメインとなった感がある。演奏者がほぼ同じにもかかわらず、'85年５月メールスでのノイジーに引き裂かれた演奏とはうって変わって、録音（'85年10月と'86年５月）はシニカルなユーモアとメロディアスな牧歌性さえ漂わす。「ラジオ・シティ」の日々が、ゲーム・ピースの新たな扉を開けたことがわかる。CDのみの追加トラックあり。　（福島）



JOHN ZORN
Spillane
CD/Nonesuch 70172-2　'87年

　本作はジョン・ゾーンの所謂ニュー・ミュージック傾向の作品を集めたアルバムで、それぞれかなり表情の違う３種類の音楽を収録している。映画音楽に淫したジャズ・セッション風の表題曲、アルバート・コリンズをフィーチャーしたブルース風セッション、クロノス・カルテットの弦楽四重奏に太田裕美がナレーションをとる〝狂った果実〟。分子レベルまで解体されたクリシェと、耳馴れない再構築。これはリスナーに不可解さを強要する。だからこそ、これが一番判り易いジョン・ゾーンの音楽だ。体験すべし。　（坂本）



JOHN ZORN/GEORGE LEWIS/ BILL FRISELL
News For Lulu
CD/Hat Hut 6005　'88年
/日本クラウン BRJ-4101

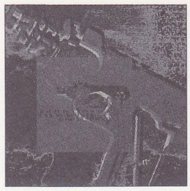
　俊敏でひらめきに溢れたジョン・ゾーンと象が水浴びするように吹き散らかすジョージ・ルイスは、息の合ったペア・スケーターみたいに、互いの役割を自在に取り替えながら、鮮やかな速度に乗せて空間を切り裂いていく。二人が鋭いジャンプやターンを繰り返すたびに、エッジに削られた氷片が飛び散る。ビル・フリゼールはギクシャクしたラインを弾き出し、空中ブランコ乗りの身軽さでリズムやテンポを示唆する一方、あたり一面匂うようにたちこめて、離れて動く二人をひとつの風景に捕えてみせる。ハード・バップを採り上げてなお流体感覚溢れる静寂版「濃縮音楽」。　（福島）



JOHN ZORN
Spy vs Spy/Music Of Ornette Coleman

L P/Electra MUSICIAN 9 60844-1 '89年
CD/Electra 60844-2 /ワーナー・ミュージック WPCP-3616

これはローラー・ゲームだ。深いリバーブをかけた２ドラムスの弾幕に追い立てられて、目も眩む急バンクを猛スピードで駆け抜ける。肩をぶつけ両側にはじけとぶ瞬間、手を引き合って喧噪のただなかへと踊り込む２サックス（急旋回の猛烈な横Ｇに、低く屈み込むティム・バーンと小刻みにジャンプを繰返すジョン・ゾーン）。ハードコアを応用した急加速と圧縮（フレーズの畳み込みや重ね合わせ、特徴あるリフの強調）が、オーネットを「濃縮」し、視覚化された暴力（マーク・ベイヤーによるカヴァーを見よ）を身にまといながら即興それ自体を変容させる。（福島）



JOHN ZORN
Film Works 1986-1990

CD/Nonesuch 79270-2 '90年
CD/Wave EVA 2024

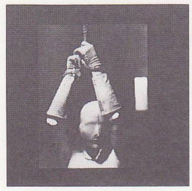
ファイル・カードを用いた作編曲作品群を、ジョン・ゾーンは共同作業の舞台となった由緒あるスタジオにちなんで「ラジオ・シティ・シング」と呼んでいるが、その中で最も演奏者の個性が輝いているのが本作品。断片化と折衷主義こそが強制されてくる時代にあって、サウンド・トラックというトポスは、多様な素材の受け皿であるばかりでなく、交錯する諸力を明視し、そこに働きかける回路であり、またそれを通じてけもの道を切り開いた先達（E・モリコーネ、B・ハーマン、N・ロータ……）との系譜学的な緊張関係を呼び込む通路である。（福島）



NAKED CITY
Torture Garden

CD/Shimmy Disc 39 '91年
CD/トイズ・ファクトリー TFCK 88557

ジョン・ゾーンのファイルカードを用いた作編曲が基盤としている映画的カット・ワーク（コンテと編集）それ自体が「濃縮音楽」のなつてない急加速と圧縮にさらされ、擦り切れるまで酷使される。強姦や殺人の決定的瞬間だけが眩く燃え上がり残像を焼き付け、それ以外は早送りされ、ノイジーに輝く光の乱流と化して、網膜の快楽にのみに奉仕する。映画からヴィデオへの移行は、ジョン・ゾーンが冷酷な消費の論理で素材を見つめていることを示している。「濃縮音楽」とは順列組合せを尽くして延命を図る「音楽」の死期を一際早める豪奢な蕩尽にほかならない。（福島）



NAKED CITY
Radio I

CD/AVANT 3 '93年 /ディスク・ユニオン AVAN 003

ネイキッド・シティのポップ・サイドを収めた本作は、速度と複雑さを数倍した「ラジオ・シティ・シング」の再来であり、ポップス大全集を何重にもフォールド・イン（畳み込み）したような多種多様な引用と剽窃の集積にほかならない。ハウスが素材を脱色化し匿名の事件であり続けたのに対し、こちらは直ちにそれとわかる署名に溢れている（それらは「出典」として曲ごと列挙されてすらいるのだ）。この作業は、死体から切り取った各部位を継ぎ合わせて絶世の美女を造り上げような、決して報われぬ異常な愛情に満ちている。（福島）



JOHN ZORN
Kristallnacht

CD/Evva 33005 '93年

挿入される「リリー・マルレーン」やクレズマーだけがユダヤ的なのではない。ここに現われる音響は全てユダヤの烙印を押されている。音楽はユダヤやナチの寓意を演ずる代わりに、より精密な歯車の集積として組み立てられる。ドイツ語の破裂音の繰返しが掻き毟るようなピチカートに伴われて「リリー・マルレーン」の針音と交錯し、次いで覚めぬ悪夢のように果てしなく続くガラスの破砕音の反復となって耳を襲う。この機械の中を経巡っているのは聴き手に傷痕を残し、針飛び／強迫的反復を引き起こす歴史の白熱した暴力にほかならない。（福島）



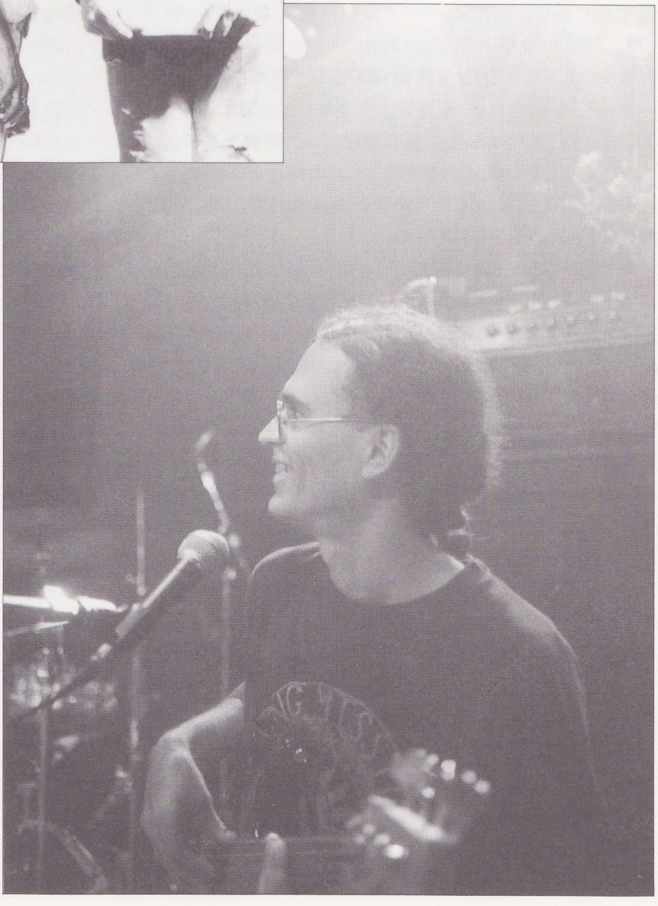
JOHN ZORN MASADA
Alef（マサダ1）

CD/ディスク・ユニオン DIW-888 '94年

ジョン・ゾーン自身の定義付けによれば「ヘブライ・モードに基づくテーマ＋ハーモロディクス」による作品集。いささかも粘らず鮮やかに隙間を保ったドラムスに乗せて、薄くしなやかな新開発の合金のようなディヴ・ダグラス（tp）とJZ（as）のフロント２管の音色が、するするよどみなく走り抜けていく。曖昧で厚みのある身体的記憶からでなく、文字的記録から蒸留抽出し、さらに精密なマトリクスにより要素の置換／再構成を施した〈様式／語法としてのジャズ〉の精密極まりないシュミレーション。それは「うた」から器楽的即興という抽象の力によって離陸したモダン・ジャズを徹底化する試み（ユダヤ的ジャズ）であると同時に、JZにとってかねてから羨望の対象であったオーネットの「声」への飽くなき挑戦でもある。（福島）

オルタナティヴ
(あるいはアメリカのよくわからないヤツ)


SONIC YOUTH


Kramer

文●後藤　仁

アメリカというポップ・ミュージックの大先進国は、実は、だからこそ、数々の異形の才能が、目的不明のスンバラシイ作品を自主製作という形で残しているアヴァン・ポップ天国である。どんなに革新的・実験的な音楽上の試みが成されていようともレコードなりの「商品」として発表されてなければ、極東の本書のような型録では「なかったこと」にせざるをえない矛盾。従って逆説的に「商品化」(売れる売れないは別にして)が環境上最も容易なアメリカこそが、多数の興味深い作品の宝庫となっちゃったワケである。しかし、それらは、各々アーティストの個々の事情でできあがった妄想・強迫観念・勘違い等々の所産One And Onlyモノであって、いわゆるムーヴメント的に分類解析するのは極めて困難である。が、無理を承知でHere We Go。

'95年現在、旬といえばLAFMS(ロサンジェルス・フリー・ミュージック・ソサエティ)。ポッツ兄弟らを中心とするLE FORTE FOURと、後にオレゴンに移住するSMEGMA一派の2つの流れを核とする数十名のアーティスト集団が'70年代中期に残した諸作は、チープなホーム・レコーディング、トリヴィア的アメリカ・トラッシュ・カルチャーを反映したユーモア感覚、反アカデミックな実験精神、現代音楽、フリー・ミュージック、ユーロ・ロック等からの影響をひとつ皿に盛りつける貪欲さ等、アメリカの自主製作実験モノの要素を全て備えた典型となっている。これまでほとんどの作品が入手困難となっていたが、近年の欧米での再評価を受けてCDBoxによる再リリースが予定されている。

そのLAFMSとも関係を持っていたTHE RESIDENTSが主催していたRalph Recordsもまた'70年代後期のニューウェーブムーヴメントから落ちこぼれた奇妙なバンドの受け皿となっていた。SFグラム・サウンドのCHROME(サウンドの要・Helios Creedはグランジ・ムーヴメントの中復活、近年は元HAWKWINDのNik Turnerともコラボレーションを続けている)や後のジャンク/グランジの先駆けとも言えるMX-80 SOUND(バンドは今も健在。リーダーBruce AndersonはHenry Kaiserとも共同作業中)等。御大レジデンツはハイテクに走ってメディアミックスだか何だかやってるが音は今やホントのクズ。

'70年代中期、日本でも話題になったのがオハイオ。DEVO、Tin Huey(自主リリースのシングルは興味深かったが、メジャー・デビューして骨抜きに)等のアクロンと、そのお隣のクリーブランドから出たPERE UBU。あきらかにBeefheart/Hampton Greaseからの影響から出発しているが、それ以上の革新性を常に持ち続ける彼等は脅威。Mayo Thompson(レッド・クレイヨラ)、Chris Cutlerらの加入・脱退を経た20年に及ぶ活動は、各々の時期に代表作を残しており、しかも今も現役である(最新作では、遂にオリジナル・メンバーはDavid Thomasひとりとなってしまった)。また、ほとんど言及されないが、THE HOME & GARDEN、TRIPID JIMMY、THE GIRLS等その周辺バンドにも同様のテイストを持った面白いモノが多数存在する。

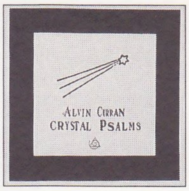
NYについて全てを語るには誌面が少ないが、まず「No New York」。'78年にリリースされたCONTORTIONS/TEENAGE JESUS & THE JERKS/MARS/D.N.A.をフィーチャーした本アルバムは今や伝説である。パンク&ロフト・ジャズ的環境から生みだされたアブストラクトな作品は後のジャンクへの多大な影響となる(作品自体としては、参加バンドの他のリリースと比較すればわかるが、DEVOの1st同様、プロデューサーENOの才能も多大な貢献となっている)。そしてSWANS、SONIC YOUTHの登場となるわけだが、この2つが関わっていたのが複数のエレクトリック・ギターのアンサンブルによる作品を発表し続ける作曲家Glenn Branca。T.MooreやM・Giraは彼のアンサンブルのメンバーであり、SONIC YOUTHの初期作も彼のレーベルNeutralからのリリースとなっている。

ジャンク/グランジのおいしいとこははしょって、で、Shimmy Disc。N.Y.ゴングやらSHOCKABILY、再編FUGSにBUTHOLE SURFERSと奇人関係を渡り歩いたKramerが興こした同レーベルは½JAPANESEのJad Fair、ミュージシャンズ・ミュージシャンでありながら心が不自由な人Daniel Johnstonらのリリースやリコメン系、近年はカンタベリー人脈ともどっぷりつながっているが、同時にUNCLE WIGGLY〜FLY ASHTRAY等、いわゆるLO-FIブームの先鞭もつけている。

と、ここまでは〝歴史〟であるが、アメリカン・アンダーグラウンドはイマ('95年現在)が実は一番面白かったりする。LO-FIというくくりについては御意見も多々あるようであるが、ま、そんな雰囲気の中、意図不明の謎の音塊が次々と登場するスリリングさがある。作曲家にしてフリー・インプロヴァイザーのJim O'Roukeは自らのユニット(GASTR DEL SOL/BRISE GLACE)でいわゆる〝音響派〟的高次元の作品を発表し続けるほか復活Tony Conrad/RED KRAYOLAに関わり、ユーロNOISE人脈ともつながる等、正にキー・パーソン的働きを示している。またCAROLINER RAINBOWを中心とするNufS-ed/Amarilloレーベル周辺の動きも活発である。そんな〝ハヤリ〟と関係なく10年以上に渡り活動を続けるテキサスのJANDEK、NYのL.Mazza Cane、テネシーのSHAKIN' RAYLEVIS、マサチューセッツのIDEA FIRE COMPANY、カリフォルニアのJohn Trubee等々。アメリカの田舎町のベッドルーム音楽家がある日、ほんの思いつきでレコードなんぞを自主リリースし、巡り巡って極東のリスナーがターンテーブルの前で「これは一体…」と腕組みする——そんな光景が今後永遠に繰り返されるのである。

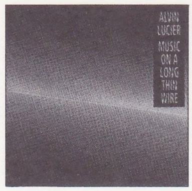
AVANT-GARDE MUSIC

A to Z



ALVIN CURRAN
Crystal Psalms
CD/New Albion NA 067 CD　'94年

元〝M.E.V.〞メンバー。本作は「水晶の夜」50周年コンサートとして、伊・仏・独・墺・蘭・デンマークの5ヵ国を結ぶFMネットワーク上にホログラフィックに編み上げられたアンサンブルにより演奏された。ゆっくりと頭をもたげ、悲しげにあたりを眺め回すまなざしが、悲痛な詠唱となって、ドアを打ち破り窓を叩き壊す打楽器の一撃に断ち切られ、またおずおずと別の場所から始められる。繰り返すうちに、声は針音とともに呼び覚まされる遠い記憶のひとつとなり、ホログラムのように空虚な中心をかたちづくって、子供たちの声や幾重にも重ねられた混声合唱、彷徨する管楽器群の交錯を身にまとう。最近は携わっているサンプリング音楽でも彼は批評的強度を失わない（『Animal Behaviour』参照）。　（福島）



ALVIN LUCIER
Music On A Long Thin Wire
CD/Lovely Music LCD 1011　'79年

アルヴィン・ルシエは感情によってはコントロール不可能な音のコントロール・システムに腐心して来た音楽家だ。同じLovely MusicからCD化されている「I Am Sitting In A Room」('70)では、ルシエ自身が曲の真意を明らかにしたテキストを朗読しながら、それをテープで再生し、部屋に共振させながら変調させて行く。それはやがて人間ではなく部屋の呟きと化して行く。この「Music On A Long Thin Wire」では長い針金を電磁石によって固有の周波数で振動させ、それが部屋の空気と共振する様子を4曲、計75分に渡って記録している。人間の意識とは別の時間を持った音の揺らぎがルシエの関心事なのだと言っていいだろう。けれどもそれを聴く者は次第にその揺らぎに共振して行くことができるのだ。　（坂本）



AMBITIOUS LOVERS
Lust
CD/Elektra 60981 /ワーナー・ミュージック WPCP-4009　'91年

前作「グリード」よりも全体的にエロティックなつややかさを増している。彼等のサウンドの根幹を成していた強靱なリズム隊を幾分抑制させた結果がそういう印象をいだかせるのかもしれない。アート・リンゼイとピーター・シェラーが過去に得た膨大な情報は、熟成に熟成を重ね、完全に形を変えた生きた楽曲として昇華されている。極一部の共通のボキャブラリーを持つ聴き手には彼等の音の背後にある豊かな知識量がわかるはずだ。それらの情報／経験／知識の豊かさとそれらを昇華させ得るブレイン。最後に最上質のセンスを創るのである。　（山崎）



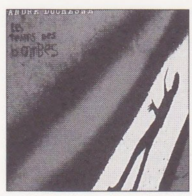
AMY DENIO
Birthing Chair Blues
CD/Knitting Factory Works KFWCD-111　'91年

エイミー・デニオはCURLEWのアルバム「A Beautiful Western Saddle」(1993)に参加したことでにわかに注目度の高まっている女性ヴォーカリスト。彼女は以前よりソロ活動などで高い評価を得ている。これはそんな彼女の音楽を知ることのできる重要作。彼女ひとりで全部の楽器を多重録音しており、知らずに聴いたなら絶対にバンドだと思いそうな内容になっている。どれだけ器用なアーティストかはこれだけで判るだろうが、決して器用貧乏でないのは、自分の表現するものが正確に理解できているからだ。近作「Tongues」も出ている。　（坂本）



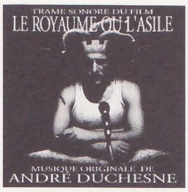
AMY DENIO
Tongues
CD/FOT AD1　'93年

驚愕のTHE(EC)NUDES、一躍脚光を浴びることとなったエイミーが'93年に発表した3rdアルバム。(EC)NUDESで再演される〝Salvatore〞をオープニングに、ヴォイス、アコーディオン、ギター、プログラミング、ベース、サックスを自在に繰り出し正に超・才女ぶりを見せつける内容である。実際にギリシャのトラッドをアレンジして収録している通り、トラディショナルな茫漠たる香りが前衛的密室遊戯とせめぎ合う様が異様なテンションを形成する。こうして聴くと、御大カトラー氏には失礼だが、個人的に(EC)NUDESで感じた魅力の多くは彼女の才能に負う所が大きいのだな、と納得してしまう。この説得力を前にしては、女性voファン、トラッド・ファン（!?）にもイケるのでは。　（中島）



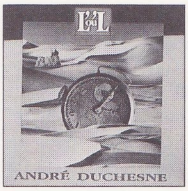
ANDRÉ DUCHESNE(Canada)
Le Temps Des Bombes
L P/Disques A. D. #7777　'84年

自主制作でのリリースとなった1st。コンヴェンタムでの仲間が多く名を連ねている。ほぼ純アコースティック・アンサンブルだったコンヴェンタムからエレクトリック・バンド的な本作への変化は当時の聴き手にとっては仲々の驚きだったろう。いわゆるレコメン色の強いアルバムだ。とは言えコンヴェンタム時代から持ち味を確立していたミュージシャンなので借物めいた感じはしない。フランス語固有の語感を生かしたヴォーカルと変則乗りの演奏の組み合わせは後の傑作群の原型と言った感がある。　（中西）



ANDRÉ DUCHESNE
Le Royaume Ou L'Asile
CD/Ambiances Magnétiques AM-019
PC-001 '90年

同名フィルムのサントラ盤。所々に（フィルムの）セリフ／音響をはさみ込み、いかにもサントラらしい効果音的なパートと通常のデュシェーヌ作品で聴かれる様な曲の両者が収められている。また、後者においては一部モチーフが（制作時期の重なる）「L'ou'L」にも使用されている等正式なソロ・アルバムとは見なし難い。正直デュシェーヌ関連の作品の中では後回しにしても良いだろう。無論、わざわざリリースされている以上、質の低い物ではないし、編成がシンプルな分デュシェーヌ節をストレートな形で味わえる等、楽しめる作品にはなっている。（中西）



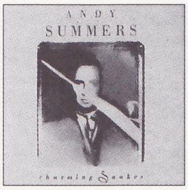
ANDRÉ DUCHESNE
L'ou'L
CD/Les Disques Victo VICTO cd 010
'90年

'89年のヴィクトリアヴィル・フェスティヴァルで収録されたこのライヴ･アルバムは、「孤独な一人の作曲家のための協奏曲」と題され、計70分の濃密なアンドレ・デュシェーヌの音楽を見事な構成力を披露する。現代音楽とロック・ミュージックが何の違和感もなく共通の言語を共有しているのが、驚異だ。この音楽を聴けば、デュシェーヌがどれほど優れた音楽家であるかはいやというほど判る。こういう越境方法もあるのだ。因みに、本録音はおそらくカナダの国営FM局で放送されたのではないかと思われる（羨ましい）。傑作。（坂本）



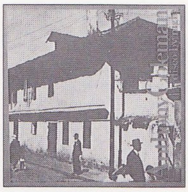
LOCOMOTIVE（Canada）
Locomotive
CD/Ambiances Magnétiques AM
027CD '93年

アンドレ・デュシェーヌの最新グループ、LOCOMOTIVEは、LES 4 GUITARISTES DE L'APOCALYPSO-BARの縮小版と考えていいだろう。エレクトリック・ギターが絡み合って進行する様子はそっくりそのままだ。バンド名が何か思う所を暗示しているのだろうか、例えばトレイン・ソングがあったり、ジェイムズ・ブラウンのパロディーみたいな曲があったりと、これまでのシリアスなイメージから少し逸脱した雰囲気もあるのだが、これはこれで不思議な魅力がある。音楽性を曲げずにスタイルを逆手に取った表現を実践してみせる痛快な作品だ。（坂本）



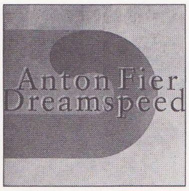
ANDY SUMMERS
Charming Snakes
CD/Private Music 2069-2 '90年
/BMG ビクター BVCP-27

な、な、な、なんと豪勢な演奏者たち。ひとり立ちしてからのサマーズは、ちょっと器用貧乏な所が災いして苦労してたみたいだけれど、４作目にして見事な成果を手にした。マイケル・シューリヴのアルバムに参加したのがきっかけに違いない。そうだ、オレにはまだジャズ・ロックの道が残ってたな、ってな具合に目覚めたのだろう。デヴィッド・トーンなんかと共通するニュー・タイプのジャズ・ロックだが、さすがに長いキャリアを持つだけあって、気負いのない的確なツボを押さえた明快さが素直に気持ちいい。むやみやたらとカッコいい曲も何曲かあって、聴いててほれぼれとしてしまう。あらゆるジャズ・ロック・ファンに聴いてもらいたい秀作。敬遠してると損するぞ。（坂本）



ANTHONY COLEMAN
Disco By Night
CD/ディスク・ユニオン AVAN-011
'92年

ジョン・ゾーンやエリオット・シャープ、マーク・リボーなど、本項の中核とも言うべきイノヴェイター達と長年緊密な協力関係を保ってきた、極めて有能なキーボード奏者／作曲家。今や中世の地獄と化したユーゴスラヴィアにかつて長期滞在した時の体験をベースに作られた本作は、断片的かつ非連続的に東欧系のモードや奇数拍子を散りばめた、不具者のラインダンスを思わせるデコボコだらけの弛緩した曲だけから成っている。タイトルとは反対に、踊れる曲は皆無。極度の不整合性が醸し出す美とメランコリー。（松山）



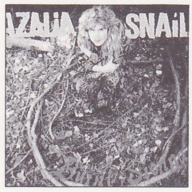
ANTON FIER
Dreamspeed
CD/ディスク・ユニオン AVAN 009
'93年

THE GOLDEN PALOMINOSのロック街道への転身、ジャック・ブルース（b）、鈴木賢司（g）とのハード･ロック･セッションと、てっきりメジャー･シーンに鞍替えしたのかと思っていたアントン・フィアーが、どっぷりアヴァンギャルド路線に戻って来てしまった。ビル・ラズウェルもかなり本気で暗黒のビートを刻む。フューの呪術的なヴォイスを全面にフィーチャーした背景には、確かに往年のCANの音楽を甦らせようとする意志が聴き取れる。このビートはジャーマン・ロック・ファンには強烈に効く。彼らのルーツがまたひとつ明かされた。（坂本）



ARCADO
For Three Strings And Orchestra
CD/JMT 849 152-2 '92年

端正なアンサンブルのただ中から、過剰な音色とエモーションが垂直に立ち上がる。妖しく張り詰めたか細さのうちに息づく「うた」とエスニックな艶やかさ(MF)／音色への繊細な配慮と物想いにふけるようなリリシズム(HR)／フリー・ジャズの色濃い野蛮な突進力の爆発(MD)。お決まりのソロの競演やアンサンブルとの協奏曲的な役割配分の代わりに、折り重なる弦の響きのうちに幾つもの出入口が仕掛けられる。ドアを開ければ異なる時間が流れ出し、様々なスケッチの交錯がもうひとつの奥行きを鮮やかに浮かびあがらせる。
(福島)



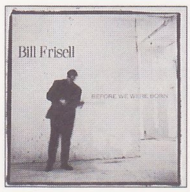
AZALIA SNAIL
Burnt Sienna
CD/Funky Mushroom FM 011 '92年

最近はTHINKING PLAGUEの紅一点、スザンヌ・ルイスと関係を持ってしまい、二人で飛ぶこともあるアザリア・スネイル。NYのぶっちぎりは、ゴッド・コーを飛ばしたファンキー・マッシュルームのレーベル中でも、ギターを片手の、ESPも納得のアシッド感覚あり。これは素晴らしい。よく繁殖して、変拍子をも溶かす。ナゴミ系のエフェクトが乱雑でメロディ漂い出る柔らかな作風だ。出て来た時代を間違えたわけではない。こうしたフォークもアヴァンギャルドも何もかもが境なく入りくむ状況に陥り、そこでハートウォームな歌をうたう人がいるという時になってしまったのだ。ソロは3枚確認できる。S・ルイスとのデュオもある。どこへでも繁殖しそうなこの柔かさは、クレイマーあたりによく似ている。
(松本)



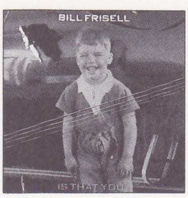
BERNIE WORREL
(PIECES OF WOO)
The Other Side
CD/(Ger.) CMP CD65 '93年
/ジムコ JICK-89708

あのバーニー・ウォーレルがCMP？　これは結構びっくりの取り合わせだが、聴くと更に驚く。ウォーレルは色々面白いシーンに登場して来るので、その名前くらいはご存知の方も多いだろうが、もともとP-FUNKの最重要ミュージシャンのひとりだ。長い活動歴にあって、ソロ・アルバムとしては4作目になるこのアルバムは、ウォーレルのイメージからするとかなりぶっとんだ実験作と言っていい。何しろまずドラムレス。PRAXISという超絶的な変態スーパー・バンドを知っているから、バケットヘッドやラズウェルとのデュオくらいでは腰は抜けないが、ウォーレルの室内楽作品にはさすがに目が点になる。常人には計り知れない才能の持ち主だ。
(坂本)



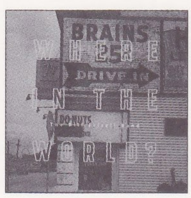
BILL FRISELL
Before We Were Born
CD/Elektra 960843-2 '90年
/ワーナー・ミュージック WPCP-4074

バンドの音楽が前作「Lookout for Hope」から次作「Where in the World」に向けて、ため息の出るほど精緻に織り成された洗練のままに退屈さの淵へ傾いていくのをよそに、ここでフリゼールは自らの作曲を、アンビシャス・ラヴァーズの二人とジョン・ゾーンが勝手に切り刻むにまかせた。この危険な賭けが、本作に天国と地獄を往復するような凄絶で破滅的な美しさをもたらしている。とりわけ聴きものはジョンがバンドを秒刻みに激変する環境へ叩き込む③だろう。終曲におけるアートのエンジェリックなヴォイスも忘れ難い。
(福島)



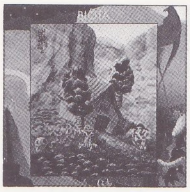
BILL FRISELL
Is That You?
CD/Elektra 960956-2 '90年
/ワーナー・ミュージック WPCP-4041

カーニバルのコットン、キャンディ・モノクロTV、ジョン・フォードの青い空、パルプ雑誌の挿絵に描かれた王女と宇宙船……フリゼールは眼差しに遠い憧れをたたえたまま、輝かしい思い出を語り続ける（アコースティックとエレクトリックの絶妙なブレンドによって)。カヴァーはこれらの音楽の持つブラッドベリ的な味わいをよく伝えている。しかしこの引き出しの奥にしまわれた宝物箱の眩い輝きは、次作「Have A Little Faith」において、大人びた眼差しに映るセピア色に暮れなずむ風景へと、取って替わられることになる。
(福島)



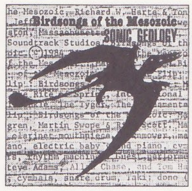
THE BILL FRISELL BAND
Where In The World?
CD/Elektra 60956-2 '91年
/ワーナー・ミュージック WPCP-4594

近年の音楽家フリゼールの充実ぶりは凄い。ギタリストとしての活躍は今に始まった訳ではないが、作曲家、あるいは音楽制作者としての才能はここ4〜5年の間に急速に華開いた感がある。Elektra Musicianに発表しているアルバムはどれも皆信じられないくらい素晴らしい。このアルバムもまさしく名曲、名演揃い。際立って暗い抒情に縁どられた音楽を収録しているのが特徴で、フリゼール・バンドの完璧な表現力を強くアピールしている。本作でバンドを離れたハンク・ロバーツの存在感は相当に大きい。優しく研ぎ澄まされた逸品。
(坂本)



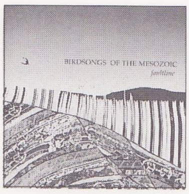
BIOTA
Object Holder
CD/RéR RéR BCD4　'95年

よ～く見るとクリス・カトラーにスザンヌ・ルイスもいる。バイオータはもう10年強前から活動ているが、'80年代の頭の頃はもっとハードコアなノイズ音楽だった。そう思うとこのアルバムは随分と音の種類が多くて、フニャフニャな形ながら、音楽的な音をたくさん使っている。そういう点でも聴きやすい。でも本当に聴きやすい理由は、この音楽が向かって来るのではなく逃げていくものだからだ。つかもうとすると逃げる。それを何度も繰り返していたら、繰り返した分だけ音楽になっていた。そういう引っ込み感、不定形さが、こちらの勝手な想像を拒まないからだ。とりあえずルイスのやる気なさそうな歌を聴けばなごむが、音全体もこれに通じていて、フニャフニャが時々歌に変化したという印象だ。　(松本)



BIRDSONGS OF THE MESOZOIC
Sonic Geology
CD/Rykodisc RCD 20073　'88年

バンド創設者のロジャー・ミラーが在籍していたAce Of Heartsレーベル時代の３枚（うち２枚はミニ・アルバム）からの曲に未発表曲を２曲加えた編集盤。ニュー・ウェーヴ的音色による偏屈なチェンバー・スタイルといった作風は既に出来上っているが、後のCuneiformからの作品に比べてよりキーボードに偏った編成の分、電機室内アンサンブルと言った色がより強い。また、ロジャー・ミラーの影響かむやみにヒネってあえて馬鹿馬鹿しさを見せるようなループ・ゴールドバーグ式のユーモア・センスが色濃く見られるのもこの時期の特徴。オリジナリティ、完成度共に極めて高いが、それ故にスタイルの固定化も避けられず、ミラーとグループは分裂する事になる。　(中西)



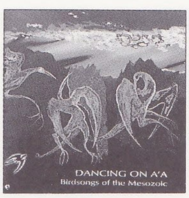
BIRDSONGS OF THE MESOZOIC
Faultline
L P/Cuneiform RUNE 19　'89年
CD/Cuneiform RUNE 19

バンド創設者のロジャー・ミラーが脱退し、レーベルをCuneiformへと移しての第二期バードソングスの初作。以前より交流のあったサックス奏者、スティーヴ・アダムスを迎えたが、レコーディング途中にケン・フィールドに交替している。基本的にニューウェーヴ的なビートとミニマル／現代音楽を応用したキーボード・ワークを主体とした室内ロック・アンサンブルと言った作風に変化はないが、執拗に塗り込めたようなキーボード・アンサンブルの比重が減り、より空間的な拡がりとリズミックなパターンを効かせたスタイルになっている。ロック色が増したとも言えるが、決してストレートになったわけではない。もう一つミラーの持つシック・ジョーク的人の悪さも影をひそめ、より純音楽的でもある。　(中西)



BIRDSONGS OF THE MESOZOIC
Pyroclastics
CD/Cuneiform RUNE 35　'92年

バンド創立者であるロジャー・ミラーの脱退と言う一大事を新たに管楽奏者を加え、もう一人のリーダー格、エリック・リングレンを中心にまとめる事でしのいだ、前作に続くCuneiformからの２作目。メンバーも前作完成時と同じ四人編成からなり、サウンド・スタイルも同様。基本的にはミラー在籍時のスタイルを受け継ぎつつ、キーボード類の重奏部を減らし、より空間を活かした立体的な感覚のある物。ここいらは新たに加えた管楽器奏者の役割りが効いており、モダン・チェンバー・アンサンブルとしての作風が完成している。個性的な芸風を確立しながらも安定感のある作品。その分、このまま行くと次はマンネリか？　と言った気配もあるが、次作では再度メンバーを変え、より躍動感ある作風に転じる。　(中西)



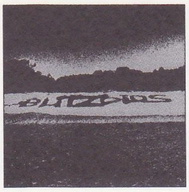
BIRDSONGS OF THE MESOZOIC
Dancing On A'A
CD/Cuneiform RUNE 69　'95年

Ace Of Heart Recordsから数えて通算８作目の本作、前スタジオ録音作の直後にギタリストが変わり、現編成での初めての作品。主要メンバーは変わっていないので音楽的には大きな変化はなし。キーボード×２、ギター、サキソフォンという変則的な構成からも相変わらず彼等独特の音空間が構成されていて素晴らしい事このうえない。現代音楽の要素を基礎に持ち、それをジャズともロックとも言い切れない方向に展開させていったようなスタイルは非常にユニークで、このような音は他では余り聞くことが出来ない。最新作では更に綿密に練り上げられたという感じがするが、良く考えればこいつらはデビューからいきなりテンションが高かった。同じ芸風ながらマンネリにならない懐の深さは流石。　(伊藤)



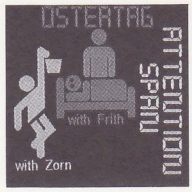
BLIND LIGHT
The Absence Of Time
CD/Alida ALDA-001　'94年

アントン・フィアーのソロ、「ドリームスピード」におけるPhewとニューヨーク勢との共演は、このBLIND LIGHTなるユニットに発展したようだ。ここ数年のPhewは「歌」に非常に強いこだわりを見せており、その赤裸々ともとれる感情表現は常に賛否両論を呼んでいたが、ここでの彼女は全く歌を歌わず、ただ全編に渡って日本語で詞を呟くのみ。だがその肉声の響きひとつで、カンの「フューチャー・デイズ」やマイ・ブラの「スーン」を思わす強力な浮遊感に満ちたバックのサウンドを、ジャケット・デザインのような漆黒の闇へと塗り変えてしまっているのだ。歌を排除することで逆にPhewの持つ特異な言語感覚や、ゆらゆら揺れるリアリティーを最大限に引き出している。麻薬どころではない、麻酔だ。　(川辺)



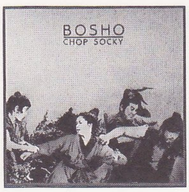
BLITZOIDS
Stealing From Helpless Children
LP/MOOK・MOO-004　'87年

Rē Records Quartlelyにも参加していたイリノイの自宅録音３人組。即興を録音し、テープを編集・加工して作品を構成していく手法はザッパ的というかニーモニスツ〜バイオタ的というか、アメリカン・アヴァンギャルドのひとつの王道的音楽技法ともいえる。レジデンツからの影響が濃いものの、奇妙な器楽アンサンブルにトラッシュ・ムービー風SEが流れ込んでくる音風景は、モンド・ミュージックがもてはやされる'95年現在の方がリアルに聴こえるかもしれない。１stアルバムの他、7″１枚と、'90年に500枚限定のハンドメイド・スリーヴ作「Look Up」を発表、サウンドはよりブッこわれ、幼児退行をはじめている。（後藤）



BOB OSTERTAG
Attention Span
CD/RecRec ReCDec 33　'90年

ボブ・オスタータグはストリートに飛び出したミュージック・コンクレート奏者だと言えばいいのだろうか。オスタータグのサンプリングの考え方を知る上で「Attention Span」は興味深い。ジョン・ゾーンの演奏を更に饒舌に増殖させた〝Slam Dunk〟。サンプリングされたフレッド・フリスの演奏とフリス自身の演奏を共演させた〝Sleepless〟。どちらも素材を本来の文脈で補強し、再構成しようとする。「Sooner Or Later」('91)では父親を葬るエル・サルヴァドルの少年の声が執拗に聴く者の耳に谺する。戯れに音を重ねるのではなく、映像のようにズーム・アップされ多層化され俯瞰された本質の立体感。しかもこういうミュージシャンがステージに上がってプレイする。凄いことだ。（坂本）



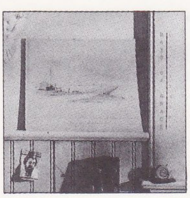
BOSHO
Chop Socky
CD/(Ger.) Atonal ACD 3009　'87年

何やら意味ありげなバンド名もあって、日本では外国で頑張ってる日本人のバンド、みたいな紹介のされ方をしていたきらいがあるが、別段そんなことは意識する必要なし。パーカッショニスト３人とギタリスト（兼ヴァイオリニスト）１人の繰り広げる音楽の何とも楽しげなこと。あれほどテクニカルではないが、聴いていると仙波清彦のオレカマ軍団を連想してしまう。メンバー４人のバランスがとても良く、演奏がいきいきとしている。サム・ベネットのポップ・センスが自然な形で滲み出ていることも、バンドの得難い魅力のひとつ。（坂本）



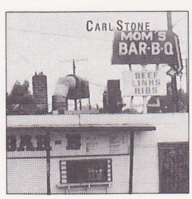
BRUIRE（Canada）
Les Fieurs De Léo
CD/Ambiances Magnétiques AM 025 CD　'92年

コテのソロ・プロジェクトというべき「ざわめく」の２作目。ノイジーで性急な切断と暴力的なコラージュにより断片（破片）性を際立たせる彼は、映画のオーヴァーラップを思わせるなめらかなつなぎを多用するAMの中にあって、コテ自身がゲスト参加したマルタン・テトロー（turntables）の作品とともに異彩を放っている。音作りは前作より遥かに緻密になり、まるでジグゾー・パズルのように組み上げられた音風景は、時代錯誤なロマンティシズムの深みから、表層におけるポップな散乱までと、その振幅をより一層増大させている。（福島）



C. W. VRTACEK
Days Of Grace
CD/Dom Us CD06
'92年('81、'82年録音)

キュニフォーム系グループ、フォーエヴァー・アインシュタインのリーダー、C. W. ヴルタチェクが'80年代の初期に発表した二枚のアルバムから四曲を除いて収録した物（他、一曲に手を加え、一曲を編集している)。曲順もそのままのようで、実質的には2 in 1ともいえるかもしれない。ギター類を主に、自宅録音風に様々な楽器を重ねた物。感覚的なコラージュ風な部分も多いが、ドロッとした感触は無く、よく考えて整理された雰囲気がある。しごく自然で、かなり美しい音楽だ。フォーエヴァー・アインシュタインより面白いかもしれない。（中西）



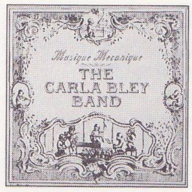
CARL STONE
Mom's
CD/New Albion NA 049 CD　'92年

日本での活動が長かったせいもあってか、カール・ストーンの存在は既に充分浸透している。初めはテープ音楽を試みていたが、マッキントッシュ・コンピュータを導入し、自動作曲プログラム「M」と出会ったことでストーンの音楽は一挙に幅を広げ、またストーンの名前もいつしかポピュラリティーを獲得した。殆ど手作りの簡便さで創作されるストーンの音楽は、「ボーダーレス」とは別の形で現代音楽を根底から揺さぶる。〝展覧会の絵〟が反復再構成されるストーンの代表作〝ホープ軒〟の収録されている「Four Pieces」('89)は既に古典だろう。現代音楽としてその手法を聴くよりは、過程の軌跡として記された音響に耳を澄ませるべきだと考えれば、「Mom's」は感動をすら用意している。（坂本）



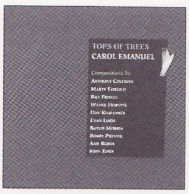
THE CARLA BLEY BAND
European Tour 1977
LP/WATT/8 2313 108　'78年
CD/ECM 831830-2

アメリカ出身ながらヨーロピアン・ジャズの香をぷんぷんさせる、且つシリアスになりすぎずに楽しませてくれる、C. Bley率いるジャズ・バンドの、多分プログレッシヴ・ロック・ファンにはアピール度No. 1の1枚。本人C. Bleyと夫であるM. Mantlerに、良く顔を合わせるG. Windo、E. DeanにH. Hopperを含む10人編成。タイトルとは裏腹に録音はドイツのスタジオにて('77年9月)、ミックスをニューヨークで、という形になっている。いまだにビッグ・コンボのジャズというと難色を示す人も多いと思うが、張り詰めた感じが強く緊張感もなかなか。しかも、このバンドは人を突き放すようなシリアスさだけではなく人なつっこいメロディも持ち合わせていたりする。（伊藤）



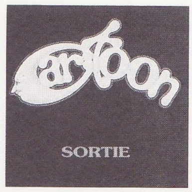
CARLA BLEY
Musique Mecanique
LP/Watt 9　'79年
CD/(Ger.)ECM

カーラ・ブレイの一連の作品群の中で最もプログレッシヴ・ロック・フィールド寄りの1枚が本作であろう。タンゴのリズムを取り上げながら、実験的な作風で演出していく作風は、ヘンリー・カウやスラップ・ハッピー等のカンタベリー系のアーティスト達の描き出す世界と非常に近いものであるといえる。元来、カーラ・ブレイはジャズのフィールドにとどまらず、様々なジャンルのアーティスト達とのプレイを実践してきたアーティストで、テリエ・リピダル(ECM系のギタリスト)、ロバート・ワイアット等、ユニークな人選でセッション・ワークを発表してきたことは特筆に値する。本作を気に入ったのなら必ずや彼女の他の作品もお聴きになることをお勧めしたい。（山崎）



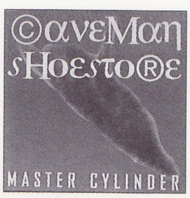
CAROL EMANUEL
Tops Of Trees
CD/EVVA 33002
'95年('91～'92年録音)

ジョン・ゾーン「スピレーン」「フィルム・ワークス」等に華やかな彩りを添えた女性ハープ奏者のソロ第一作(曲により多彩なゲストを迎えている)。端正な指の動きにふりまかれた音のかけらひとつひとつに、各作曲者の個性が鮮やかに映し出される。エヴァン・ルーリーによるデュラス風シネ・ロマン。眼前で瑞々しく沸き立つブッチ・モリス。ガイ・クルセヴェクの描き出す彼方までうねり続く丘陵の平坦な広がり。ジョン・ゾーンがプリペアドや音域の極端な対比により未知の深淵を覗き込めば、マーティ・エーリッヒはどこまでも平行線を描くバス・クラとチェロを輝く銀糸でかがってみせる。思い詰め張り詰めた吐息をふともらすアンソニー・コールマン。ウェイン・ホーヴィッツにより森の中深く置き去れた物語。砕けてしまった思い出をオルゴールの音色がひろい集めるビル・フリゼール……。忘れ難く胸に迫る傑作。（福島）



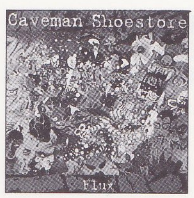
CARTOON
Sortie
CD/Cuneiform 55005　'81/'83年

CARTOONは、「Cartoon」と「Music From LeFt Field」の2枚のアルバムを残したユニークなアメリカのバンドだ。key/g/dsというトリオ編成の1stアルバムでは、keyをメインに90%譜面に頼った奇妙に癖のある音楽を展開。新たにvlnとsaxを加えた2ndでは一転し、全面的にインプロヴィゼーションを導入。演奏、サウンドともに格段の進歩を見せ、アメリカにあっては稀有なチェンバー・ロック系の秀作として一部のファンに高い評価を得た。本作はその2作を1枚のCDに纏めた徳用盤であり（2ndより小曲1曲を削除)、詳細なバンドの歴史が綴られたブックレットも含め、バンドの全体像を摑む絶好の内容となっている。メンバー中3人は現在PFSで活躍中。（坂本）



CAVEMAN SHOESTORE
Master Cylinder
CD/Tim Kerr TK92CD024　'92年

TONE DOGSの活動で知られるフレッド・シャルノー（b）とイレイン・ディ・ファルコ（vo、key)、ヘンリー・フラツィオーニ（ds）によって結成されたトリオ。一聴して、'80年代のクリムゾンの影響を受けたと思われるピコピコしたサウンドと、カンタベリー色の強い不協和音が活かされたオルガン・プレイがフィーチャーされているのがわかる。とはいえ、その音楽にはロックが根底になっているので、かなり強いグルーヴ感を出している。素直にかっこいいが、アヴァン・ロック色はまだ希薄ではある。クレジットにはわざわざ「NO GUITARS！」と書いてあるぐらいだから、ベースに関してはジョナス・エルボーグばりの多彩なプレイが聴け、ノイズ・ミュージックばりの曲まであったりする。（平山）



CAVEMAN SHOESTORE
Flux
CD/Tim Kerr TK93CD056　'94年

前作のメンバーに、ファースト・ネームのわからないディヴァーガス（恐らく女性、b、vo）が加入した4人編成になっている（この後のアルバムではいなくなってしまうのだが)。のっけからのカンタベリー風オルガンが相変わらず気持ちいいこのアルバムだが、前作に比べてより〝アヴァン・ロックらしさ〟が前面に出てきたように感じる。演奏面でより屈折したガシャガシャした感じややたらにフリーなセッションなどが味わえるのだ。しかも曲によってはフレンチ・ホルンやチェロの演奏が入るなどしていることもますますそれっぽい雰囲気を出している。やはりギター無しのベース×2の音は強力。ヴォーカル（イレインの声はセクシーです）のハーモニーも決まっており、音に厚みを帯びた。（平山）



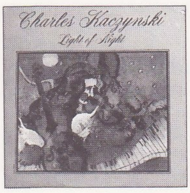
CAVEMAN HUGHSCORE
Featuring Hugh Hopper, Elaine Difalce, Henry Franzoni, Fred Chalenor
CD/Tim kerr TK 95CD 093 '95年
/マーキー MAR 95157

ある所でF. シャルノーの紹介記事を見てコンタクトを取ったホッパーの行動から始まったユニット。元々熱狂的なホッパー・ファンだったシャルノーを始めバンドの面々も大いに乗って、この共演作の発表となった。作曲は全てホッパーによる物で、ソフト・マシーンの〝Dedicated To You〜〟以外は全て近年書きためていた物。ただし、ケイヴマン側も相当にアイディアを出しているようで、全体の雰囲気はむしろケイヴマンの従来作に通じたりもする。これは紅一点、E. ディファルコの演奏／唄による部分も多いか。作品としてはホッパーの持つドスの効いたトーンを軸にケイヴマン側の若々しさ、色気等が組み合わさり、'90年代のカンタベリー発展形としてこの上もない出来。新作も予定されているのが嬉しい。　（中西）



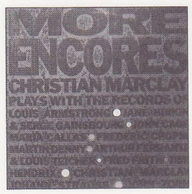
CHAINSAW JAZZ
Dis Concerto
CD/Cuneiform RUNE 46 CD '93年

これは嬉しいポール・シアーズのシーン復帰作だ。いかにも危なそうなバンド名とこのジャケット！　これじゃ、知らないファンは手を出さないかも。10年前に謎めいた解散を遂げたアメリカン・プログレシヴ・ジャズ・ロック・バンドの最高峰、THE MUFFINS。２枚の未発表ソースがリリースされているものの、何故かメンバーは消息不明を線けていた。シアーズは２代目のドラマーだが、ここに久々のきびきびとしたプレイを聴くことができる。sax、g、b、vln、dsの５人編成であり、頼もしい硬質のジャズ・ロックを聴かせてくれる。これからが楽しみ。　（坂本）



CHARLES KACZYNSKI（Canada）
Lumiere De La Nuit
LP/Les Disques Charles Kaczynski CK 1001. FR

コンヴェンタムの１stでvlnその他を弾いている彼の唯一の（？）ソロ・アルバム。生楽器のみのアンサンブルとヴォーカルにより本作、（手許にあるコピーには）クレジットが一切無いので良く判らないが一人多重録音ではないかと思う。編成的にコンヴェンタムに近いが爪弾かれるアコ・ギや上昇感の有るvlnソロ、暗めのコーラス等から受ける印象はより情趣的で煽情的な物。むしろクラシカルなプログレ好みに受けるタイプの作品かもしれない。全体を通してうつ向き加減な夢見と言った雰囲気がある。部分的にちょっと華美になり過ぎという気もするが……。　（中西）



CHRISTIAN MARCLAY
More Encores
10″LP/No Man's Land NML 8816
'88年

４台のターンテーブルと数十枚のレコードによる彼の演奏は、リズムが基盤の黒人DJたちとは異なり、針音とともに浮かび上がる風景（の記憶）と針飛びという事故に起源を持つ。ここでは１トラックごと特定の音楽家（Ｊ・シュトラウスからJZまで）が、トラウマの強迫反復にも似た手つきのレコード・コラージュにより怪物化される。これはカール・ストーンが行っている変形プロセスの提示とは異なり、再現前が不可避的に孕む誤差／恣意性そのものの結果（言わば反魂の祟り）にほかならない。倒錯した愛情はもはや悪意に等しい。　（福島）



CHRISTIAN MARCLEY, GÜNTER MÜLLER
Live Improvisation
CD/For 4 Ear CD513 '94年

クリスチャン・マークレイ、久々の作品である。この作品では「ターン・テーブル奏者」として、「ターン・テーブルを演奏する」というのがメインになっているアルバムとなっている。ターン・テーブルをDJするために使うのではなく、楽器として初めて扱った人として（もともと彼はDJを見てターン・テーブルを演奏することを思い付いたのだが）あまりに有名であるが、コンセプチュアルな面が強かったり、他バンドでの活動では、中心的な存在として演奏するということはあまりなかった。しかし、ここでは彼のプレイを充分に楽しむことができるのだ。また、相方のギュンター・ミューラーもドラムとエレクトロニクスで応戦するが、即興演奏独特の呼応だけでなく、不思議な空間をも作り出している。　（平山）



CONVENTUM（Canada）
A L'affût D'un Complot
LP/Le Tamouir TAM 27011 '77年
CD/Kozak KO 2506-2

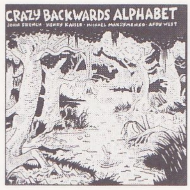
その後RIOと連動して現在に至るまでAmbiances Magnetiqueを通じて紹介されるシーンの大元となったコンヴェンタムのデビュー作。最初期のアコースティック・グループ、次いでプログレッシヴ・ロックに影響されたエレクトリック期を経て、再びアコースティック・グループに戻った編成になっている。（エレキ・ギター／ベースも使用）。フォーク系レーベルからリリースされた本作、RIO接触以前の作品ではあるが、既にトラディショナル・フォークを昇華させたようなたおやかな美しさ、哀調を帯びたサウンドの中に、現代音楽的なテンションを苦もなくすべり込ませるなど一介のローカル・グループには全く終わらない内容。現在のリュシエ／デュシエーヌの意欲作に通じる要素すら既に見える等まるで古びていない。　（中西）



CONVENTUM
Le Bureau Central Des Utopies

LP/Cadence CAD-1005　'79年
CD/Kozak KO 2507-2

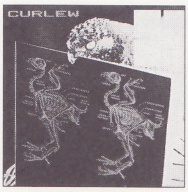
トラッドが香るフレーズをゆるやかに繰り返すヴァイオリンに、ベース、ギター、パーカッションが付き従い、大道を練り歩くように旋律を歌い揺らがせる。しなやかに交錯する鉛筆の線は、旋律とリズムの緻密な対位法的配置・展開を軸として束ねられ（時にリズム構成は中世音楽のそれを思わせる）、ヴァイオリンとベースのユニゾンをもたらす音のふくらみや、アコースティックとエレクトリックの２本のギターの音色の対比を通じて、視覚的なイマージュを浮かび上がらせる（ここに収められた曲の多くは映画のために書かれたという）。　（福島）



CRAZY BACKWARDS ALPHABET
Crazy Backwards Alphabet

LP/SST-110　'87年
CD/SST CD-110

ビーフハート・フリークのH. Kaiser（g）、〝ドラムボ〟としてマジック・バンド全盛期に在籍したJ. French（ds・vo）、元デキシー・ドレッグスのA. West（b）、そしてスウェーデンのマジック・バンドと言われたKräld JursanstaltenのリーダーだったM. Maksymenko（ds、vo）という、マニア狂喜、知らない人は全然知らないスーパー・グループによるマジック・バンド大トリビュート盤。「Aloha」での共演〜本作〜フレンチ、フリス、カイザー、トムプソン〜フレンチのソロと続くことになるフレンチとカイザーのコラボレーションの中でも、全編を貫く骨折リズムの強烈さとアイラー「ゴースト」のカヴァーなどバカ指数の高さで本作は群を抜く傑作となる。年内にアルバム３枚作るとか言ってたけど本作と７″で解散。　（後藤）



CURLEW
Curlew

LP/Landslide LD 1004　'84年

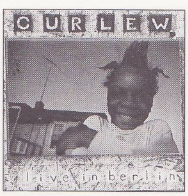
今、最も過激でいきいきしているレーベル、Cuneiform Recordsに席を置く、その中でも中心核となりえているCURLEWのデビュー作（Cuneiformからのリリースではないが）。なんといってもこの時のメンバーが、リーダーであり管楽器奏者のG. Cartwright（後にCuneiformより素晴しいソロをリリースする）を含む５人編成だが、B. LaswellにT. Coraが参加しているのだ。これが全編最高にイカす、今でこそ数が多くなっているが当時では決して簡単にはお目にかかれなかった、疾走型アヴァンギャルド変態ジャズ・ロックであり、しかもその中でも最高のレベルに近い。メンツの凄さに見合った内容の素晴しさ、CDリリースが遅れているのがとても悔しい。　（伊藤）



CURLEW
North America

CD/Moers Music 02080 CD　'85年

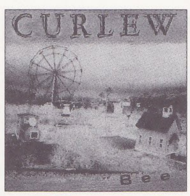
彼らの２ndアルバムである。F・フリスが参加している（b）という事もあってか、４曲目はH・カウの曲である。（「ウェスタン・カルチャー」期のライヴでも演奏されているが、同アルバムに収録されても全く見劣りしない名曲。）収録曲は次作「Live In Berlin」とダブっている。個人的には「Live In〜」が彼らの最高傑作だと思っているが、本作は、スタジオ録音という事もあってか、パワー、気合共及ばず、小じんまりとまとまってしまったかな、との印象が強い。とは言え楽曲自体は極上のカーリュー・サウンドと言える。やはりこの時期が最も私のレコメン魂をくすぐる。未聴の方は、まず、次作「Live In Berlin」から聴く事をオススメします。　（森本）



CURLEW
Live In Berlin

CD/Cuneiform RUNE 12 CD　'88年

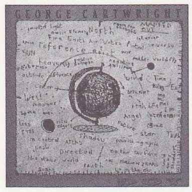
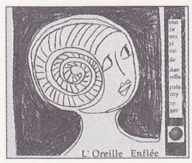
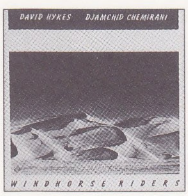
Cuneiform へ移籍しての第１弾。相変わらずの過激な進化型ジャズ・ロックは健在であり、加えてメンバーが若干変わってドラムスにP. Barnett、キーボードにW. Horvitzが参加した５人編成。全体的により疾走感が増した感じがするのは、やはりライヴならではの緊張感の為か。各曲も全体的に長めになっており、どの曲もスタジオ盤以上に二転三転する曲展開がより一層気持ち良い。録音の良さもあり、彼らの作品の中では最高、入門用の一枚としても最適。この後Amy Denioを迎えた「Beautiful WesternSaddle」を発表、より一層の幅広さ、懐の深さを披露する。　（伊藤）

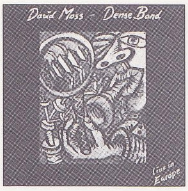


CURLEW
Bee

LP/Cuneiform RUNE 27　'91年
CD/Cuneiform RUNE 27 CD

むしろセッション・グループ的な印象の強かった初期二作を経て、前作のベルリンにおけるライヴ辺りからグループとして確立した活動を見せ始めた彼等の四作目。K. ファクトリー・ツアー時のライヴ録音２曲を除いては久々のスタジオ録音作となる。常にインプロヴィゼーションが基調となっているとはリーダーのD. カートライトの言葉だが、グループとして固まってコンビネーションが強化された分、従来作に比べて随分とまとまりが出て来ており、それがその瞬間に出て来たアイディアのスリルと上手く絡み合っている。前作と並んでグループとしてのピーク的な作品。このやり方にひとまず決着を見たのか、次作ではヴォーカルをゲストに加えての異色作に挑む事になる。　（中西）

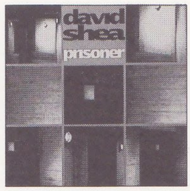
 **CURLEW** **A Beautiful Western Suddle** CD/Cuneiform RUNE 50　'93年 その初期においてはマテリアル周辺に数多くあるセッション・グループの一つとも見えたカーリューだが、前々作あたりからバンドとしての安定した活動が見られるようになり、インプロヴィゼイションを基調とした自由度の高さとコンビネーションの良さを活かした即応度の高いアンサンブルのバランスの取れたバンドの持ち味が見えるようになった。今の所、最新作にあたる本作ではポール・ヘインズのテクストを使用した唄物としての形を取った異色作。このような制約あるシチュエーションにも対応出来るグループとしてのしなやかさを感じさせる。予告されている次作においてここで得た成果がどう反映されているかが楽しみだ。尚、エイミー・デニオの名を広く知らしめたアルバムとしても重要な一枚。　（中西）	 **GEORGE CARTWRIGHT** **Dot** CD/Cuneiform RUNE 57　'94年 CURLEW（本誌51号参照）の中心人物、初のソロ。カーリュー流インプロヴァイズド・ロックのジャズ変容は健在だが、思った以上に分かりやすい音だ。スー・ガーナー、サム・ベネット等多くのクレジットがあるが、バンド色の押しと乗りの強いカーリュウに較べて、ソロ・アルバム特有の、中心人物と参加人各々に変化する幾つかのフォーメーションと協調、といった印象が強い。フリーあり、ロック色の強い曲あり、ヴォーカル曲あり、と様々だ。曲が破綻するかのような力動よりも、まとまりを感じさせる。　（松本）
 **DANIEL LENTZ** **Missa Umbrarum** CD/New Albion NA 006CD　'91年 ダニエル・レンツの音楽は美しい。自身の操るカスケーディング・エコー・システムと、非ベルカントの透明な混声合唱と、ワイン・グラスが奏でる瑞々しい音空間。容赦ないテキストの解体作業の果てに生み出された異形のあどけなさ。10"のミニ・アルバム「After Images」('77)のはにかむような美は今も健在だ。表題曲の、タイトルそのままにミサ曲として素材を用意された音楽は、より大がかりな音楽の構築を目指していて、そこに新しいレンツの魅力を垣間みることができる。尚も構築を望むなら、今後レンツの音楽がどう推移するかが楽しみだ（ちょうどスティーヴ・ライヒの〝Tehillim〟がそうであったように）。ハロルド・バッドの純粋無垢さに惹かれる人は１度聴いてみて欲しい。　（坂本）	 **DANIEL PALARDY ROGER** **(Canada)** **L'Oreile Enflee** CD/Archives Magnétiques AM 04 CD '94年 JUSTINEのパーカッショニスト、ダニエル・P・ロジェ初のソロ・アルバムである本作は、彼女の作詞作曲になる音楽劇「腫れた耳」を記録したもので、同レーベルがカセットでリリースしていたArchivesシリーズのCD化第１弾だ。いくらかマニアックだという判断なのか、ジャケット・スリーヴがなかったりするが、クレジットはちゃんとあるのでご心配なく。終始フランス語のナレーションでストーリーが展開する為、内容の詳細は私には判らないものの、一聴してこれがどれほど優れた作品かは何の問題もなく理解できる。ジャン・ドゥロームが全面協力しているほか、曲によってジョアンヌ・エトゥやアンドレ・デュシェーヌも参加。リコメンディッド系のファンには強くお勧めできる。　（坂本）
 **DAVID HYKES & DJAMCHID CHEMIRANI** **Windhorse Riders** CD/New Albion NA 024　'89年 デヴィッド・ハイクスはどういう聴かれ方をしているのだろうか。きっとある人にはニューエイジ・ミュージックとして聴かれ、ある人にはヒーリング・ミュージック、メディテーション・ミュージックとして聴かれ、またある人には民族音楽として聴かれているのだろう。'75年に結成されたTHE HARMONIC CHOIRは彼の指導を受けた合唱団で、DEEP LISTENING BANDに匹敵するほど深い表現を実践していたが、最近ハイクスはひとり乃至少人数で歌うことを好み、４人編成のWINDHORSE RIDERSを結成している。それがこのアルバムで、ここではタブラやタンブーラなどのインドの楽器とハイクスのホーミーを組み合わせた無国籍音楽を指向している。尚、ハイクスは'87年以降殆どフランスで活動している。　（坂本）	 **DAVID MOSS** **Dense Band** CD/(Ger.) Moers Music 02076 CD '85年 DENSE BANDを名乗っているが、実際はデヴィッド・モスのレコーディング・セッション集。前作「Full House」('84)がアート・リンゼイ、フレッド・フリス、ビル・ラズウェル、デヴィッド・ヴァン・ティーゲム、ジャマラディーン・タクマ、フィル・ミントン等々とのデュオ・レコーディング集だったのに対して、こちらはグループ・レコーディングになっている。参加しているのはフレッド・フリス、ジョン・ゾーン、アート・リンゼイ、ウェイン・ホーヴィッツ、トム・コラ、天鼓、クリスチャン・マークレイ、ジュールス・モスという面々だが、曲によって編成は変わる。インプロヴィゼーションのようでいて、実はフリスとの共作が殆どだったりする。野生人モスの直感一発の演奏がこの音楽の生命線だ。　（坂本）



DAVID MOSS DENSE BAND
Live In Europe

CD/(Ger.) Ear-Rational ECD 1004
'88年

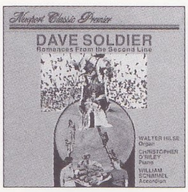
バタバタと疲れを知らぬ幼児のように走り回るポップ・サウンドが、ファンク・ベースの皿の上で様々に混ぜ合わさせる。絶え間なくザッピングされるTVのように、イタリア・オペラと京劇の間をポパイとオリーブが駆け抜け、あちこちでシャンパンが吹き上げパイの飛び交うサウンド構成は、モスの「ブリキのおもちゃ」感覚をよく示しているが、デンス・バンドはオールスターの常としてショーケース的性格が強い。繰り返しの中で疲弊していく声＝鈍重な身体をそのまま提示した「ダイレクト・サウンズ」にも耳を傾けて欲しい。（福島）



DAVID SHEA
Prisoner

CD/Sub Rosa　SR 73　'94年

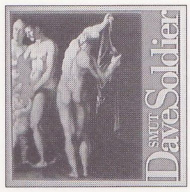
ニューヨークを中心にした活動が続いているデヴィッド・シェーだが、ここ最近のソロ・アルバムにおいては映画などのモチーフを題材に、サンプリングとライヴ演奏をミックスした作品を発表している。これはその中でもかなり演奏的に面白い内容となっている。参加しているメンバーもマーク・リボーを始め、加藤英樹、ジーナ・パーキンスなど強力なメンバー。これはイギリスBBCテレビで放送されていた「プリズナー」を題材に、彼がすべての作曲をしている作品。サンプラーの扱いも独特だが、ピアノなど、プレイヤーとしての力も見せている。彼は架空の映画のサントラをモチーフにした作品を残した後、最新作では彼の単独のサンプリングのみによって編集された作品を出した。（平山）



DAVE SOLDIER
Romances From The Second Line

CD/Newport Classic NPD 85505
'90年

ソルジャー弦楽四重奏団を率いるヴァイオリニスト、デイヴ・ソルジャーのキーボード曲集。'85年にソルジャー弦楽四重奏団を結成して以来、彼は様々なミュージシャンと新しい音楽に挑戦して来たが、デイヴ自身の音楽というとそれほどピンと来なかったりする。ここではキーボード曲集ということで、デイヴ本人は１曲にシンセサイザーで参加しているのみだが、なるほど彼の音楽観が聴き取れる面白い音楽ばかりで飽きない。自然と全体は現代音楽で統一されていながら、スイングあり、タンゴあり、よくよくスタイルに偏見のないミュージシャンなのだなあ、と感心してしまう。圧巻は30分を越すオルガン曲集「ホケットとインヴェンション」。擬古典的様式が巧妙に逸脱を許容し支える骨格となり得ている。（坂本）



DAVE SOLDIER
Smut

CD/ディスク・ユニオン Avan-019
'94年

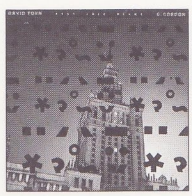
中世音楽とヘヴィ・メタルの融合と銘打たれたこの作品。カルミナ・ブラーナ等から選曲されたスケベな中世歌曲をエレクトリックなアレンジで聞かせる。タイトルは汚れとかみだらとかエロ文学とかいった意味であり、ロバート・メイプルソープらに捧げられている。企画者はエリオット・シャープとの共演で知られるソルジャー弦楽四重奏団の人だが彼はこのCDではヴァイオリンではなくＥ・ギターを演奏している。さて、一部コラージュが施された部分もあるが、多くの曲はＥ・ギター、金管楽器、女性ヴォーカル等による端正なアンサンブルによって成り立っていて、いわゆるロック色はかなり薄く、歌詞はともかくとしてちっとも猥雑ではないのだが。（川辺）



SOLDIER STRING QUARTET
Sojourner Truth

CD/Newport Classic NPD85508
'91年

エリオット・シャープとの密なコラボレイションで有名なNYの弦楽四重奏団。テクニック的にはクロノスの方が上だろうが、実験精神の旺盛さとアグレッシヴな姿勢では最右翼か。本作では１曲目からいきなりジョン・ケイルの「パリ1919」をぶちかます。それもヴォーカルにシェリー・ハーシュを迎えて。その他のオリジナル曲も、エフェクト処理したヴァイオリンでジミ・ヘンのギター音を真似たり、クラーヴェやティンバレス等を加えてラテン風チェンバー・アンサンブルを試みたりとか技が細かい。シャープに突っ込みでポップな味わい。（松山）

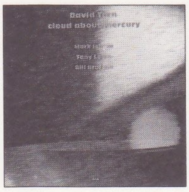


DAVID TORN
Best Laid Plans

ＬＰ/(Ger.) ECM 1284 823642-1
'85年
CD/(Ger.) ECM 1284 823642-2

デヴィッド・トーンの１stソロ・アルバム。最初にトーンを認めたのがECMというのは一見ハマッているようで、振り返ると違和感もある。EVERYMAN BANDからソロへの大抜擢だが、トーンの持っていたきらきらとした感性はECMにあっても充分な訴求力を放っていた。全曲ジェフリー・ゴードン(perc)との共演で、オーヴァーダビングもせいぜい１回程度と思われるシンプルな演奏。作曲されたパートもあまり判然としないふわふわと漂うような曲ばかりだ。それでもトーンのギターが創出する空間はそれだけで強靱な音楽たり得ている。ジェフリー・ゴードンの素性は不明だが、後にニューヨークで活動している中国系２世のヴァイオリニスト、Jason Hwangのアルバム「Unfolding Stone」('90)に参加している。（坂本）

DAVID TORN
Cloud About Mercury
LP/ECM 1322 831 108-1 '87年
CD/ECM 1322 831 108-2



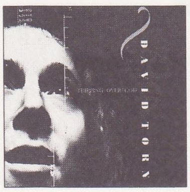
エヴリマン・バンドや1stソロで注目していた人はいたにせよ、多くの人にとってデヴィット・トーンの名を意識する事になったのはこのアルバムを通じてだろう。たとえ、それが共演者のB. ブルッフォードやT. レヴィン、M. アイシャムを通じての注目ではあったにせよ、ここで聴かれる音楽はまぎれもなくトーンの物であり、その後、彼の名を忘れる訳にはいかなくなった筈だ。それ程までにここに聴かれる彼の奏法、音色は印象的だった。冴えたリズムの感覚、落ち着き払った音空間を切り裂くうねりのあるオーヴァー・ドライヴ・トーン。自分の声を持ちつつ、適確にそれをコーディネイトする才能。新たな才能の出現。多少の批判はあるにせよ、こう言う才能を数多く世に出したECMも敬意に価する。　(中西)

DAVID TORN
Door X
CD/Windam Hill WD 1096 '90年



ECMからウィンダム・ヒルへ移籍して作られた3rdアルバム。これらレーベル名が与える印象とはまるで違ったロック・タッチのサウンドで約半数の曲で自身のヴォーカルもフィーチャーされている。前作からの流れでビル・ブラッフォード、更には今や親友と言ってはばからないミック・カーンその他を迎え、安定感を持ちながらも非常に感覚的な演奏を聴かせる。特にトーンの演奏はこれまでの背景に溶け込むような感触を離れ、アグレッシヴな音色を多用したショッキングなもの。これは本人の健康状態の悪化が反映していたと後に分るのだが、とは言え以前より感覚一発で全体の流れを切り裂くような鋭さは見せていた。そう言った部分は次作で思う存分発揮される事になる。　(中西)

DAVID TORN
Tripping Over God
CD/(Ger.) CMP '95年
/ジムコ JICK-89747



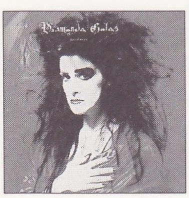
POLY TOWNの興奮がまだ冷めやらぬというのに、早くも新作の登場だ。「Door X」以来のソロ・アルバム。昨年秋の録音というから、最近のこの世界では異例のスピード・リリースと言えよう。全トラックをひとりで演奏してしまった本当のソロ・レコーディングだ。部分的にドラム・プログラミングこそ使っているがシンセは一切なし。CMP原盤なので、プロデューサーの余計な干渉もなく、もう好き放題に弾いていて、トーンの感性が余すことなく伝わって来る。万人向けの音楽ではないかも知れないが、私は彼の音楽をこよなく愛する。　(坂本)

DEEP LISTENING BAND
The Ready Made Boomerang
CD/New Albion NA044CD '91年



アメリカ西海岸実験派現代音楽界のゴッド・ママ、ポーリン・オリヴェロスが率いるジジババ・バンド。彼女の数年来のコンセプトである《ディープ・リスニング》を実践するために集まったメンツによる3枚目。アコーディオンを中心に、トロンボーンとクラリネットの2人そして男女各1名のヴォーカリストという布陣で、地下10数メートルといった雰囲気の炭鉱穴の様なドームにもぐり込み、異常に長い残響効果を利用した奇々怪々のドローン・ミュージックを創り出している。各人の音が幾重にも重なり合い、それが正にブーメランの様にフィード・バックして新たな波紋を広げてゆく。圧倒的なメディテイション・サウンド・システム。炭鉱夫よろしく頭にサーチライトを付けて演奏するアホな写真がえも言われぬ感動を呼ぶ。　(松山)

DIAMANDA GALAS
Saint Of The Pit
LP/Mute STUMM33 '86年

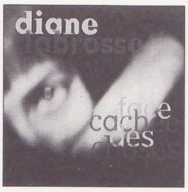


ギリシャ系アメリカ人女性。堂々たるアリアから幼女のすすり泣きへ、さらには獣の唸り声へと瞬時に変貌を遂げる力量を認められ、グロボカール作曲のオペラに主演。ローリー・アンダーソンが「電子メディアの天使」なら、ライヴで各々エフェクトをかけた4本のマイクを自在に操って、絶叫と異言により脳髄の深層に潜む古代の潜在恐怖を引きずり出し、頭から血をかぶって聖書冒瀆の言葉を撒き散らしながら、〝アクト・アップ（エイズ解放勢力連合）〟との連帯を進める彼女は「魔女」かつ「巫女」である。本作はエイズ患者たちに捧げられた「赤き死の仮面」三部作の第二部。前半を支配する禁欲的なまでの静謐さが、後半オペラティックに高揚していく様は圧巻。歌詞はボードレール、ネルヴァルほかによる。　(福島)

DIANE LABROSSE, MICHEL F. COTE (Canada)
Duo Deconstructiviste
CD/Dame AM 031 CD '94年

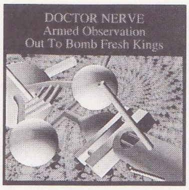


Dameと言うのはDistribution Ambiances Magnetiques Etcetereの略で、Ambiances Magnetiquesの流通部門と理解すればいいのだろうか。これはJUSTINEのキーボード、管楽器奏者、ディアンヌ・ラブロッスとBRUIREのミシェル・F・コテのデュオ・アルバムで、ゲストも大勢参加しているほか、F・フリスやJ・オズワルド、H・ライヒェル等々のアルバムからの断片がふんだんに引用されており、おそらくコテ主導のプロジェクトではないかと思われる。タイトルからして連想できるように、何もかもが細分化してほどけ落ちたような音楽。　(坂本)



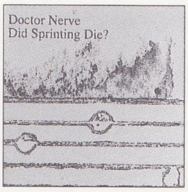
DIANE LABROSSE
Face Cachés Des Choses
CD/Ambiance Magnétiques AM 036
CD '95年

ミッシェル・F・コテとのデュオ作に続く新作（やはりコテが協力)。機械の動作音や雨・風・雷鳴といった具体音が、キーボードの冷ややかな音色やか細くも強靭な歌声、荘重な打楽器とせめぎ合って、焼き付くほどに鮮やかな啓示的光景を映し出す。とりわけ、前半、耳を刺すような軋轢に痛々しく苛まれ、もろくも壊れ去り、虚空へと消え去っていった「うた」が、古風なオルガンやおごそかな鐘の音を従え、毅然たる静謐さと共に回帰する劇的構成や、⑦で憑かれたようにつぶやき続けるサンプリング・ヴォイスの使用、セピア色にけぶるサーカス音楽を思わせるエンディングは見事。ハイナー・ゲッベルスの諸作にも比肩し得る強度と繊細さに溢せた力作。インサートのアート・ワークも美しい。（福島）



DOCTOR NERVE
Armed Observation/Out To Band Fresh Kings
L P/Cuneiform RUNE 8, No Mans Land
'85年 '87年
CD/Cuneiform RUNE 38X NML 8502

ドクター・ナーヴの初期二作を１つにまとめて収録したCD。1st「Out To Bombu」からレコメン系のアヴァンギャルド・ジャズが合体したような曲調は出来上っており、無理矢理な展開を勢いで押し通すあたりもそのままだが、ここでは多少、思い切りに欠けると言うか、こなし切れていないかも。この辺りは2nd「Armed Observation」ではかなり改善されており、ドクター・ナーヴ節とでも言うべき物が確立されつつある。依然、無茶な曲が多いのだが、その上で尚、曲としての魅力がはっきりしつつある。ちなみに1stにはドクター・ナーヴの前段階にあたるSPYBOYあるいはCROWといったグループによる演奏も収録されている。（中西）



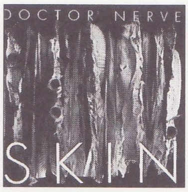
DOCTOR NERVE
Did Sprinting Die?
CD/Cuneiform 55002 '90年

ドクター・ナーヴの通算３作目にあたる作品だが、ニッティング・ファクトリーにおけるライヴを中心にHMSLコンピュータ・ソフトを通して作曲された楽曲を３曲加えた変則的な構成と言い、元々のリリース番号が未発作等を発表するWMASのシリーズだった事から、公式のディスコグラフィからは少し外れる性格を持つ。メインとなるライヴ・パートだが、おそらくはPA卓から未加工と言った感じの録音状態もあって非常に生々しい印象を受ける。その分、とかく人間の限界を超えた作曲をしたがる彼等の実演時の苦労もうかがえるが、勢い、迫力はかなりの物。また前身バンドSPYBOY時代からの同名曲でマハヴィシュヌ・オーケストラのフレーズがはさみ込まれるのも興味深い所。（中西）



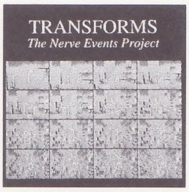
DOCTOR NERVE
Beta 14 Ok
CD/Cuneiform RUNE 26 '91年

中期 Zappa の一番複雑なところを抽出して、過激なジャズ・ロックの要素を大胆に取り入れた様な、'90年代型のアヴァンギャルド・ミュージックのお手本の様な１枚。ギタリストであり全ての曲を作曲するN. Didkovskiはコンピュータの世界にも造詣が深く、自らの手で音楽表記言語、それを利用した音楽ソフトウェア、これを使って作られた曲も納められている。確かに、いかにもコンピュータの手を借りなければ難しいだろうと思われる様な曲調が並び（メディテーショナルなエレクトロニクス・ミュージックではなくて、高度に複雑な作曲の為の手段の為だけである)、それでも人間が演奏しているんだと分かる様なノリを感じさせる。Zappa ファン、HENRY COW ファンの必聴作の１枚。（伊藤）



DOCTOR NERVE
Skin
CD/Cuneiform RUNE 70 '95年

まさに「DR. NERVEハード・ロック宣言」と言って良いだろう。今まで見せてきた複雑さを失わずに突き進むノリを全面に押し出した本作、彼らの最高傑作。必聴。と、これだけの解説で十分伝わると思うが、今まで彼らの音に馴染みがない人には本作は今までの作品とはちょっと流れが違うという事を言っておきたい。前作までは管楽器、マリンバ等の打楽器を全面に出した複雑な作曲をメインにしていたが、本作では何本もオーバーダブされた、ヘヴィに歪んだギターとどこまでも疾走するようなリズム・セクションを押し出し、それでもせわしなく展開してゆく曲調は健在。小難しい事が苦手な人、ロックのノリが無いとどうもという人両方にアピールする。本作を聞いた後、どうしてもライヴを観たくなってしまう。（伊藤）



THE NERVE EVENTS PROJECT
Transform
CD/Cuneiform 55011 '93年

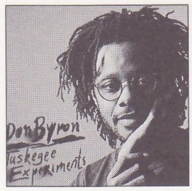
DOCTOR NERVEの「Beta 14 OK」(1991) に基づく様々なミュージシャンによるヴァリエーションを収録した本作が飛び込んで来た。全22チームの25曲。ミュージック・コンクレートやコンピューター・ミュージックもあれば、自分達で演奏しているものもあり、どれもこれも面白いものばかり。本当に同じモチーフを使っているのかなあって言うくらいみんな勝手にやってて、そのクセ、どこかDOCTOR NERVEの影を引きずってチェンバー風、あるいは現代音楽風の演奏が多い。NERVEのメンバー達も個人で参加しているほか、ヘンリー・カイザーやマーク・ハウエル、ブルーノ・メリエ、それにHALF JAPANESEのメンバーらの顔ぶれも並ぶ。これは現代アメリカの先鋭ミュージシャンのカタログとしても存分に楽しめる。（坂本）



SCHÄFER, DIDKOVSKY, NORTON
Ankle To Nose

CD/(Ger.) Amf-Music AMF 1048
'94年

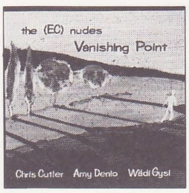
ディドコフスキーがケヴィン・ノートン(ds)、PEOPLE IN SORROWのギッタ・シェーファー（sax）と組んだ「アート・ロック・トリオ」。ブルックリンでの録音だが、おそらくはシェーファー主導のプロジェクトだろう。但し、３人のプレイは全くの互角で、ディドコフスキーとしてはかなり珍しいジャズ・ロック・プレイが堪能できる。リコメンディッドのファンには強くお勧めしたい。（坂本）



DON BYRON
Tuskegee Experments

CD/Elektra Nonesuch 79280-2
'92年
/ワーナー・ミュージック・ジャパン
WPCP-5455

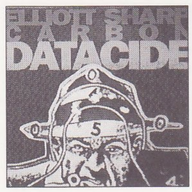
ドン・バイロンはニュー・ミュージックと言うよりは寧ろクラシック・ミュージックからジャズに踏み込んだ高踏派のクラリネット奏者だ。tuskegeeの背景にある、屈折したブラック・ミュージシャンのコンプレックスを指摘するのは彼の望む所かも知れないが、しかし、それで彼を評価するのは間違いだ。この音楽は予想以上にクラシックで、予想以上にジャズだ。その端正なたたずまいが彼を語っている。既に２nd「Don Byron Plays The Music Of Mickey Katz」(同名バンド作)もリリースされている。注目すべきミュージシャン。（坂本）



THE (EC) NUDES
Vanishing Point

CD/RēR N1 '94年

クリス・カトラーがここ数年で残した作品の中でも屈指のインパクトを放つのがこれだ。CURLEWとの共演やソロ・アルバムを発表していたエイミー・デニオの才気溢れるマルチ・プレイは彼女への注目を一気に高めたが、何よりパンキッシュでさえある躍動感、鋭さをもってカトラーの底力を再認識させられる。NY一派のヴェディ・ギーズィとのトリオでレコーディングされ、エンジニアを担当したボブ・ドレイクはその後ベースで加入した。エイミーのソロからの２曲が再演されている他、マドレデウスの〝O Pastor〞の破天荒なカヴァーを収録するなど、アヴァンギャルド、トラッド、ロック、ポップがダイナミックに展開する様は痛快そのもの。カトラー自身、またエイミーにとってもエポック・メイキングな傑作。（中島）



ELLIOTT SHARP/CARBON
Datacide

ＬP/Enemy EMY 116 '90年

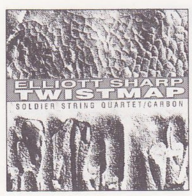
エリオット・シャープのメイン・バンドとして10年以上のキャリアを誇りながら、メンバーはおろか編成すら流動的なカーボンは、『Nots』に収められた名曲の編成が示すように、２ドラムスの間に張られたポリリズムの網に対して彼が激しくアクトする、というのが基本形態と思われる。ここでは、同じくメタリックな艶を浮かべ、金属片がちぎれ飛ぶようなサウンドを放つジーナ・パーキンスを「秘書」に迎えており、タイトルが暗示する情報戦のイメージは、いつものオール・オーヴァーなサウンドにジョン・ゾーン的な加速／圧縮を施すことにより過激に演出されている。（福島）



ELLIOTT SHARP
K! L! A! V!

CD/Newport Classic NPD 85504
'90年

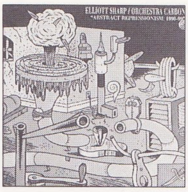
エリオット・シャープ作曲によるキーボード曲集。①は音色や音高といったパラメーターの変化をルール化することにより、即興に構造を与えたゲーム・ピース。様々な音色があちこちから泉のように湧き上がり、また重く澱んでのしかかる。人間では演奏不可能な曲を自動ピアノのために作曲し続けたコンロン・ナンカロウに範を得た②〜⑦は、パーカッシヴなリフの裏を低音のパッセージが駆け抜ける不可能性に思わず血圧が上がる。彼自身のポリリズミックなベース・インプロヴィゼーションをピアノに投影した⑧は、倍音の揺らめきを光背のように立ち昇らせる。（福島）



ELLIOTT SHARP
Twistmap

CD/(Ger.) Ear-Rational '91年

ソルジャー弦楽四重奏団によるエリオット・シャープの作品２曲と、CARBONが全員でシャープの自作楽器を演奏した曲、それにシャープがひとりで自作楽器のスラップの即興演奏を行ないながら、MIDIで加工した作品、計４曲を収録。シャープのニュー・ミュージック畑の作品集だが、かなり密度が高く、楽しめる。シリアス・ミュージックの好きな人も、変な音楽に目がない人も一緒に堪能できるお徳用盤。勿論、シャープ自身には両者を区別する意識は全くない。現代音楽だからと言って身構えて聴くべからず。（坂本）



ELLIOTT SHARP/ ORCHESTRA CARBON Abstract Repressionism 1990-99

CD/Victo VICTO cd 019　'92年

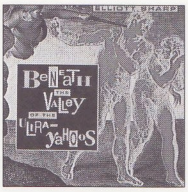
ほとんど打楽器の専制下にあると言うべきエリオット・シャープの演奏空間において、擦弦楽器はもうひとつの音色の世界を開く。ソルジャー弦楽四重奏団によって担われるこのパートは、時折あからさまにメロディを奏で、またピチカートに転じてリズムの渦に身を投じながらも、専ら様々な色合いの軋み（それは圧縮された音色のスペクトルにほかならない）を放出し続ける。ねじれ引きつりながら過飽和に震え、不安定な小爆発を繰り返す軋みの表層で、倍音が波立ちしぶきとともに吹き上げるなか、ひと弓のうちに折り畳まれたポリフォニーが翼を広げる。　（福島）



ELLIOTT SHARP Nots

CD/Atonal ACD 3011
'92年（録音'80～'82年）

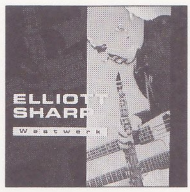
'80～'81年の録音で既に、打楽器的な演奏と鈍く重い鉛のような音色への好み、広範な折衷主義（ダヴやポルカも！）、多楽器主義と改造楽器の使用…と、後のメニューが全て出揃っている。特に彼の署名とも言うべき、音塊をレンガのように積み上げ、空間をオール・オーヴァーに埋め尽くしていく仕方は、おそらくマテリアル経由の共演だろうロフト・ジャズ人脈（AACM出身のP・ウイルソンやデヴィット・マレイの協力者O・ダラ等）が本来持っているジャズのノリを塗りつぶし、コラージュのための台紙を用意するのに役立っている。　（福島）



ELLIOTT SHARP Beneath The Valley Of The Ultra-Yahoos

CD/Sulphur SR 9220　'92年

スライド・ギターをフューチャーした①、自身によるトーキング・ヴォイス②、ロリータ・ファンク③、打ち込みとトランス・ヴォイス⑤、クールでスペイシーなダブ⑥、強迫的マシーン・ビート⑦、ECによるフェイク・ブルースを曲頭に掲げた⑧、イーノ＆バーン的⑨、テヘラン生まれの女性ヴォーカリストを擁した⑩、ハイテク・ポエトリー・リーディング⑪、ディスコ・ビート＋フリー・ヴォイス⑫、ラップ⑭、SF映画の疑似サントラ⑮、自身によるホーミー！⑯……とアメリカを告発する声をテーマにエクレクティズムの限りが尽くされる。　（福島）



ELLIOTT SHARP Westwerk

CD/(Ger.) Ear-Rational ECD 1040
'92年

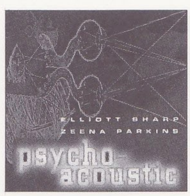
'90年代の『(T)here』とも言うべきソロ・インプロヴィゼーション・ライヴ。両手タッピングの生み出すパーカッシヴかつメタリックな音色が、空間を息苦しいほどの濃密さで充満させたところを、エフェクトを効かした彫りの深いソロがズタズタに切り裂き、蹂躙の限りを尽くす。新たにホーミー唱法や、ディレイのホールドを活用した延々と続く重苦しいうねりをヴォキャブラリーに加えて明暗の対比を効果的に強調しながら、より広範な音色スペクトル／より入り組んだポリフォニー構造の両方に熾烈な攻撃を仕掛けている。　（福島）



ELLIOTT SHARP & THE SOLDIER STRING QUARTET Cryptid Fragments

CD/Cargo EXTREME XCD 020　'93年

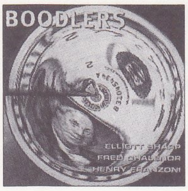
エリオット・シャープの弦楽曲集。素晴らしい充実作。数あるシャープのアルバムから１枚を選ぶなら、これに決定！　ソルジャー弦楽四重奏曲のレパートリーである「Twistmap」の２曲が再収録され（内１曲はニッティング・ファクトリーでのライヴ・レコーディングに差し替え）、そのほかジーナ抜きのパーキンス姉妹がシャープのコンピュータ操作と共演した表題作と、チェロのミッシェル・キニーと自作楽器『サンダー』およびサンプラー操作のシャープの２重奏が収録されている。どれもが冴え切った名演。音質も抜きん出ている。　（坂本）



ELLIOTT SHARP & ZEENA PARKINS Psycho-Acoustic

CD/Victo cd 026　'94年

エリオット・シャープとジーナ・パーキンスがCARBONを離れて繰り広げるデュオ・パフォーマンス。ノイズにこだわると両者の資質は驚くほど似ていて、あまり意外性のある作品ではない。ステージではうまく立体感を演出していたふたりのプレイの位相差のようなものが、ここには全く聴き取れず、平面的な音像を結んでしまっている。CARBONの内側に潜んでいたサウンドを抽出したことの面白さは伝わって来るが、どうもこれだけではダイナミズムの乏しさが気になる。いくらふたりの重要性を説いてみても、このアルバムだけでそれを体感せよと言うのはちょっと厳しいかもなあ。ノイズ・ミュージックはなまものだと改めて実感。　（坂本）



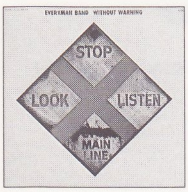
ELIOTT SHARP/FRED CHALENOR /HENRY FRANZONI
Boodlers
CD/Cavity Search CSR18 '?年

この辺りのミュージシャンの場合、誰が誰と共演しようとそれ程驚く事ではない、と言ってしまえばそれまでだが、それでも硬派方面の親分E・シャープとトーン・ドッグス、ピッグペン、ケイヴマン・シューストアのフレッド・シャレノーの組ち合わせは少々意表を突いている。(もう一人のフランツオーニについては資料なし)。DAT直録りと言うシチュエーションから想像の付く通りのフリー・ロック・スタイルで、基本的には(このメンバーから想像される物としては)ストレートな演奏がメイン。これはフランツオーニのドラムが比較的まともにキープに回っているおかげだろう。その上のシャープとシャレノーの音響を活かしたコンビネーションはかなり良い。時としてインダストリアルなクリムゾン風になったりもする。 (中西)



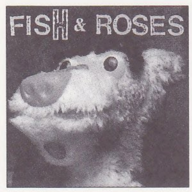
EUGENE CHADBOURNE
2000 Statues/The English Channel
ＬＰ/Parachute P-007 '79年

チャドボーンのリーダー作とは言えないかもしれないが、敢えてこの１枚を。当時正に生まれんとしていたニューヨークのフリー・ミュージック・シーンの核メンバーが全員参加した一大フリー・ミュージック・セッションのドキュメント。参加メンバーはチャドボーンの他、彼の主催するパラシュート・レーベル周辺（Ｂ・オスタータグ、Ｐ・ブラッドフィールド他)、アトランタのTRANS MUSIQからＤ・ウィリアムス（現CURLEW）他、Ｔ・コラ（ファースト・レコーディングか)、Ｆ・フリス、近藤等則、現シミー・ディスク・オーナーのクレイマー、そして、Ｊ・ゾーン。演奏ルールはおそらくＪ・ゾーンによるものだろう。マジメに〝フリー・ミュージック〟に取り組んでいた各々演奏者の若き日の記録として貴重。 (後藤)



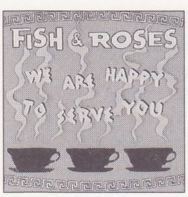
EVERYMAN BAND
Without Warning
ＬＰ/ECM '85年

'70年代初期に結成され、ルー・リードのバックもつとめた事があるらしいエヴリマン・バンドだが、こちらから見ればデヴィッド・トーンがメジャー・シーンに顔を出すきっかけとなったグループとしての印象が強い。こちらは２ndアルバムになる。１stの「Everyman Band」('82年）ではサックスのマーティ・フォーゲルをフロントに立てて自然発生的なジャズ・ロックを見せたが、本作では基本的な作風には変化はないものの、より各メンバーのバランスが良くなり、全体としてのびのびとした印象を受ける。多少カンタベリー・タッチの変則的ながら柔らかな演奏は特定の奏者が前に出る事なく流れが良い物。中でもやはりトーンの感覚的なギター・ワークが冴えている。時代とは関わりがなく、なお新鮮な演奏。 (中西)



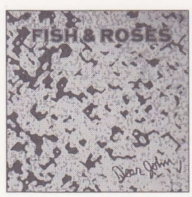
FISH & ROSES
Fish And Roses
ＬＰ/Lost TTL87123 '87年

CURLEW、LES BATTERIESなど、レコメン系スーパー・セッションでひっぱりだこのドラマーRick BrownがV-EFFECT解散後に結成したトリオの１st。ベースのS. Garnerとともにフォーク・トリオ〝SHAMS〟をやってるA. Deanや後にNo SafetyをつくるC. Cochraneらがゲスト参加。V-Effectに比べるとより歌の比重が高まり（C. Haywordからの影響か？）ひねりをおさえた曲作り中心になっている。当時、E. Sharpをオーガナイザーとしてその周辺にこのFISH & ROSESやTHE SCEVELS NOW、MOFUNGO等、パンクとフリーを体験した同傾向のバンドが数多く生まれ、ひとつのシーンを形成していた。その様子は各々のアルバムの他「Peripheral Vision」等のオムニバスで聴くことができる。 (後藤)



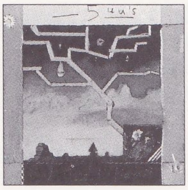
FISH & ROSES
We Are Happy To Serve You
ＬＰ/Homestead HMS130-1 '89年

７曲入り12インチの前作に続く初のフル・アルバム。アレンジの妙といい、曲の出来といい文句なしの彼等の最高作。急激なリズム・チェンジも大仰なソロもなく淡々と進む様、わからん人には普通のアルバムかもしれないが、このなにげない音風景が実は極めてよく練り上げられた物である事は５年以上たった今でも充分鑑賞に耐える作品であることからもわかる。プログレ好きにはややアダルティすぎる渋めの作品か。本作後、シングルとフルCD発表後、チープなキーボード・サウンドを提供していたD. Sutterが抜け、グランジ／ノイズ系作品を発表してきたA. Licht（元Love Child）らを迎え〝Run On〟と改名、'94年より本格的に活動を再開している。 (後藤)



FISH & ROSES
Dear John
CD/Feel Good All Over #12 '93年

フレッド・フリスがこのシーンに及ぼした影響は決して侮れない。例えばCURLEWファミリーへの関与は複層的になされ、現在に至る。CURLEW周辺の特にV-EFFECTに関わる人脈とその音楽は最近とみに面白さを増している。ドラマーのリック・ブラウンが現在活動のメインにしているFISH & ROSESもそんなバンドのひとつだ。これは「We Are Happy To Serve You」(1989)に続く３作目。シンプルなオルガンと、すぱっと切れ味のいい変拍子を駆使したちょっとポップなサウンドは、間違いなくカンタベリーから譲り受けたものだ。 (坂本)



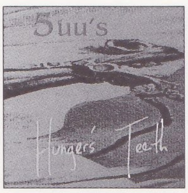
5 UU'S
Bel Marduk & Tiamat
LP/U: r #/'86年

アメリカン屈折レコメン系の代表格。もう一人の代表、MOTOR TOTEMIST GUILDと合体してU TOTEMになったことは先刻ご承知。して、本作は彼等のデビュー作。以後、「Misery Loves Company」('86年)、「Elements」(with MOTOR TOTEMIST GUILD、'88年)、U TOTEMとして「U Totem」('90年)、「Strange Attractors」('94年)、更に5 UU'S名義で復活、「Hunger's Teeth」('94年)となっている。本作は実験色を濃く出しながらヴォーカルを中心に据え（一部朗読も含む)、なかなか意欲的な作品となっている。これもヘンリー・カウ一派が広げた音楽の、アメリカにおける好サンプルの一つ。このバンド、M.T.G.、更にその周辺のHAILとかTHINKING PLAGUEとかをひとまとめにして捉えておきたい。 （伊藤）



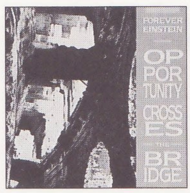
5UU'S WITH THE MOTOR TOTEMIST GUILD
Elements
LP/RēR 33 '88年

主に両グループの中心人物デヴィッド・カーマンとジェイムズ・グリグスビイの交流から接近を見せていた5 UU'Sとモーター・トーティスト・ギルドの合体作品。U TOTEMへの伏線をはらみ、ますますややこしくなる人脈図を予感させるような一枚。ただし、ここではカーマンが全ての曲に名を連ね（共作あり）その意味ではやはり5 UU'Sの作品と見るのが妥当か。ともあれ、それまでは個性的ではあるにせよ密室的な線の細さを持っていた両グループだが、この合体により両者の神経質なまでに凝った室内楽サウンドとストレートに変則的なバンド・サウンドが上手くかみあって1＋1＝3ぐらいの物になっている。その後のメンバー組替えとU TOTEM、5 UU'Sの近年の力作のさきがけとなった作品。 （中西）



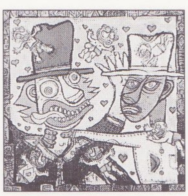
5UU'S
Hunger's Teeth
CD/RéR 5uul '94年

「Elements」('88)以来殆ど音沙汰のなかった5 UU'Sは、U TOTEMに吸収されたものと理解されたていたが、どっこい生きていた。リーダー格のデヴィッド・カーマンとkey奏者のサンジェイ・クマーに、THINKING PLAGUE、HAILのボブ・ドレイク（本来はドラマー）の超強力3人編成に縮小。しかし、カーマン、ドレイクともに卓越したマルチ・プレイヤーなので、音に不足はなし。それどころかこの過剰なまでの演奏の充実ぶりは一体何だ。何が驚いたといって、まさかドレイクが重傷のプログレッシヴ・ロック患者だったとは。初めて披露された彼のヴォーカルはジョン・アンダーソンにそっくりで、「本当はレコメンディッド系のバンドだったYES」を聴いているような、妙な気分になって来る。必聴盤！ （坂本）



FOREVER EINSTEIN
Opportunity Crosses The Bridge
CD/Cuneiform RUNE 41 '92年

現代音楽の世界等でも幅広く活動が知られているC.W. Vrtacekが率いる3人編成の、2作目と推定される。ギター・トリオ(guitar/bass/drums)という最もオーソドックスな編成からは想像のつかない様なひねくれた音楽をくり出す。かくっかくっとずっこけるような曲調、すっとぼけたようなメロディ、それでもちゃんとロックしているドライヴ感覚。1作目である〝Artificial Horizon (RUNE 25 '90年)〞と同じ方向性を継承しながら、本作はより突き進めて完成度を高めた感じ。CuneiformのアーチストのなかでN. DidkovskiやG. Cartwrightと並んで重要な人物であると思われ、今後更に様々な編成で面白い作品を作ってくれる事だろう。 （伊藤）



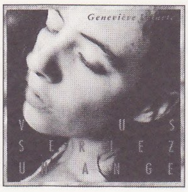
FRANK PAHL
The Romantic Side Of Schizophrenia
CD/Fot FOT 8-FP1 '94年

ジャケがパーだが音はそう見せかけて実は巧妙だ。ゲストにエイミー・デニオ、ユージーン・チャドバーン他。要するにアメリカのふやけ理知派ユーモア・アヴァンギャルド派の1枚。気違いのロマンティックな面とタイトルにあるように、気違いふうだが聴いていると、ほのかな郷愁めいた何か童話っぽいイメージが湧いてくるから不思議。聴き終える頃には、ほとんどこのアルバム・タイトルのイメージになっているほどで、いやぁロマンティックでユーモアいっぱい。ガシャガシャやっているだけの崩し音楽にそろそろ飽きた人へ。 （松本）



FREDERIC RZEWSKI
The People United Will Never Be Defeated
CD/HAT HUT hat ARTCD 6066 '?年

作曲家にしてヴァーチュオーソ・ピアニスト。他のローマ在住米作曲家と共にライヴ・エレクトロニクス集団〝M.E.V.〞を結成。聴衆参加を含むコミューン的実験を進めた。またエラー・システムを含むミニマル音楽や政治的メッセージを伴うパフォーマティヴな作品、レイシー、ブラクストン即興演奏者たちとの共同作業等で知られる。本作は民衆音楽の伝統と西洋音楽の技術を社会改革の中で結びつけた南米の「新しい歌」運動の中から生まれ、チリの民主化闘争で歌われた抵抗歌『不屈の民』を元にした変奏曲（本盤は彼自身の演奏。他に初演者アーシュラ・オペンスや高橋悠治による盤がある)。途中さらに2曲の革命歌の引用を含む変奏はリズミックな躍動感に富み、即興的強度をなみなみとたたえている。 （福島）



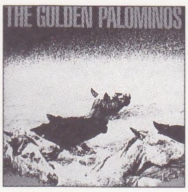
GENEVIEVE LETARTE(Canada)
Vous Serinez Un Ange
CD/Ambiances Magnétiques AM 020
CD '90年

ルタルトゥとコテとの共作というべき本作の場合、荘厳な聖歌調から猥雑なタンゴまで、様々な曲調を渡り歩きながらも、一貫してシーケンスを主としたシンプルなバッキングを採用して、毅然とした張りがあり、作品に「声の劇場」ともいつべき統一感を与えている。スピーディな幕開けから高揚感溢れる中間部を経て、終曲に向けてどこか寂しげな叙情性が高まっていく様には、ワン・コンサートをまるまるパッケージしたような印象をすら覚える。AMでは異色の「歌もの」。（福島）



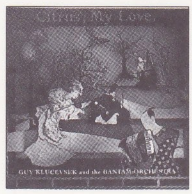
GLENN BRANCA
Symphony No.6 (Devil Choirs At The Gate Of Heaven)
L P/Blast First BEEP 39 '89年

グレン・ブランカはソニック・ユースに在籍したこともあるアメリカの現代音楽家。共作を含め、3枚目のフルLPに当る。(他には'80年のミニLPとBox Setの7″EPがある。) 彼は'80年の「Lesson No.1」以来、厳格なハーモニー計算を用いた独自の手法で一貫して作品を制作し続けて来たが（'86年には来日公演も果たしている）その完成度は一作毎に鋼のような強靱さを増している様だ。ここに至っては、半ば洪水と化したE・ギターのハーモニーとそれに輪をかけるキーボード、まるでNEU！の様に反復ビートを叩き出すドラム、それらが一体となってせめぎあいながらどこまでも高揚し続け、聴き手を永遠の恍惚へと導いてゆく——そんなサウンドが展開されており、ジャーマン・ロック・ファン垂涎のアイテムと言える。（平野）



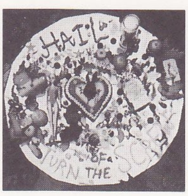
THE GOLDEN PALOMINOS
The Golden Palominos
CD/ジムコ JICK 89055 '83年

歴史的名盤。このアルバムがなかったら、NYのこの10年は、まったく違ったものになっていたかもしれない。元ペル・ユビュ、フィーリーズのドラマー、アントン・フィアと、DNAのアート・リンゼイが中心になって録られた、キーパースン総登場の一大雑音絵巻。ファンク的なリズムを基調に、ゾーン、フリス、デヴィッド・モス等々といった強者どもが過激極まりないインプロを繰り広げ、アートのクールなヴォーカルが乗っかる。現在あらためて聴き直してみても、思わず興奮してしまうほど刺激的だ。尚、2枚目以降は実質的に別バンド。（佐々木）



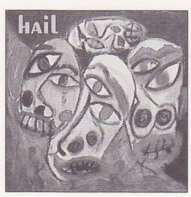
GUY KLUCEVSEK & THE BANTAM ORCHESTRA
Citrus, My Love.
CD/Rec Rec ReCDec 54
'95年(録音'92年)

ゆるやかにたなびきさざめく音のとばりの向こうから、中国民謡を思わせるふうわりと柔らかな旋律が、うららかな春の陽射しに誘われ、ゆるゆる流れ出す。「スキヤキ・エトフェ」（クルセヴィク編曲による坂本九「スキヤキ」）に聴かれたふるふると震えながらなだらかにうつりゆく優雅さが、ここではより円やかに熟成され、かぐわしい香りをたたえて、まさに桃原郷的な至福の酩酊をもたらす。セピア色の記憶がいっせいに立ち騒ぎ、甘酸っぱくもせつない懐かしさを一面に香らせて、繰り返し繰り返し走馬灯のように巡り続ける。あるいは鏡のように静まり返った湖面を渡る風を見詰め続ける表題曲。軽やかに浮き立つポルカのかげの素顔（ムーンドッグにも似た無垢な歌心）がここには収められている。（福島）



HAIL
Turn Of The Screw
CD/RéR Glass RéR HCD '91年

マーキー本誌035号に紹介されていたアメリカのレコメンディド系グループ、THINKING PLAGUEの主要メンバーであるスザンヌ・ルイスとボブ・ドレイクがふたりで組んだ極めて趣味的なプロジェクトがこのHAILだ。ルイスのヴォーカルを全編にフィーチャーし、サイケデリックなニュー・ウェイヴ風のサウンドをふんだんに聴かせてくれる。ふたりで殆どの楽器を手懸け、巧くはないがセンスのある音作りになっている。加えて珍妙な遊びが仕掛けてあり、思わず笑い転げる瞬間もあったりする。よくできた楽しいアルバムだ。2作目にあたる。（坂本）



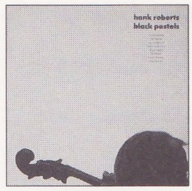
HAIL
Kirk
CD/RéR Megacorp RéR HCD 2 '93年

'90年代、コロラド出身のアート・ベアーズか？ と云われたTHINKING PLAGUE、そこの二人が結成したHAIL、これが3枚目になる。前作「Turn Of The Screw」はがさつさの方が強くてグランジ・チェンバー？？？ふうだったが、今回はいい。スザンヌ・ルイスのヴォーカルを前に出してポップになった。これでグランジ／チェンバー・ポップスだ。ぴったり出来上り。歌詞も曲もアイロニカル、でもポップに浮かれる。その明るいずれ方がキャッチー。シド・バレットがグランジふうにはにかんだような③を始めとてもよい。三重構造位で屈折している。（松本）



HAIL/SNAIL
How To Live With A Tiger
CD/Funky Mushroom FM-025　'93年

HAIL、すなわちスザンヌ・ルイスとアザリア・スネイルが合体して出てきたのは、コ〝アヴァン〟ギャル2人組による乱恥気騒ぎだった。リコメン系というにはハメをはずしている、というのがアザリアの持つブッ飛びの度合いを強く感じる。作曲は半々だが全体のバランスは程良い具合。アシッド・フォークとアヴァンギャルドとオルタナティヴがゴタまぜになったこの音、相応に面白味はあるが、スザンヌのソロが一番良かったりして!?　困るなぁ。これも最先鋭のひとつであることは間違いない。彼女達の歌声の魅力はたっぷり味わえるし、一聴はオススメ。（中島）



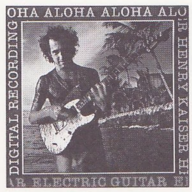
HANK ROBERTS
Black Pastels
LP/JMT 834 416-1　'88年
CD/JMT 834 416-2

何と言ってもフリゼール・グループにおけるプレイが印象に残るH･ロバーツだが、無論、本人自身のアルバムにも優れた物は多い。そのフリゼール他、T･バーン、J･バロン、M･ドレッサー、R･アンダスン、R･ユーバンクス、D･テイラーと言った一連の人脈上のメンバーを多く揃えた本作においてもそれは明らかだ。本人の深くうごめくチェロ（野性味を強く秘めた）にフリゼールの浮遊感あるギター、バロンの鋭角的なドラム等から造られる非現実的でノスタルジックな空間はどこかフリゼールのそれに通じる物だが、純粋に蒸溜されたイノセンス願望をたたえるフリゼールの世界に比べ、どこか地に付いた故の締念と情感を持つ。やるせなくも美しい響き。イマジネイティヴな傑作。（中西）



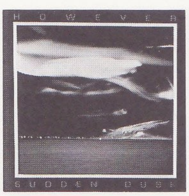
HANK ROBERTS AND BIRDS OF PREY
Hank Robers And Birds Of Prey
CD/ポリドール POCJ-1011　'90年

ハンク・ロバーツのロック・アルバム、これは驚く。チェロとロック、チェンバー系ならともかく普通のスタイルではまぁ、ない。が、これが一聴してごく自然に響く。ギター的なオブリから無調的な空間音、他リズミックなピチカートまで当り前に溶け込んでいるのはプロとして当り前と言えばその通りだが仲々の驚きだ。曲調はファンク調のリズムを使った部分とストーリー性を持った物まで多岐に渡るが落ち着いた響きのバックとどこかしら清楚な女性ヴォーカルの組み合わせは派手ではないものの繰り返し聴きたくなる誠実な魅力がある。（中西）



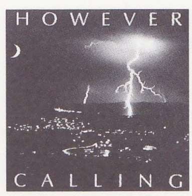
HENRY KAISER
Aloha
LP/Metalangvage 109　'81年

デッド・フリークでビーフハートおたくでデレク・ベイリー・ファンで財閥の御曹子でシンタイドーやっててスキューバでの海中写真家としても著名で最近はD・リンドレーと今日はマダガスカル、明日はノルウェーで現地録音というちょっと変わったヤッピー野郎の3rdにして代表作。ベイリーかぶれのキコキコ物だけやってた頃から、後のロックやらシンクラビアやらギタリスト他流試合やらの何でもアリ期に移行するまさに過渡期の2枚組で、1枚目はフリー・アンプロビゼーション1発録り。2枚目A面がギター多重録音による大作「アロハ・ガメラ」、そして問題のB面がJohn〝Drumbo〟Frenchとの初競演。ここでのズンドコ・サウンドはカイザーのユニット〝The Nome〟に継承されていく。（後藤）



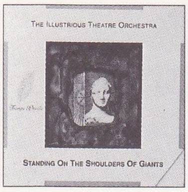
HOWEVER
Sudden Dusk
CD/Kinesis Inc. KDCD 1011　'81年

かつてRandom Radarがリリースした作品の中で、THE MUFFINSについで一部の評判を呼んだのがこのHOWEVERだった。大変良質の洗練されたプログレッシヴ・ロックだ。やはりHAPPY THE MANあるいはGENTLE GIANTの影響が強く、THE MUFFINS以上に本誌読者には支持されることだろう（カンタベリー色は薄い）。当時のワシントンDCの音楽シーンがいかに充実していたかが申し分なく証明される秀作だ。その後「Calling」をリリースしているが、一般にはこのデビュー作の評価の方が高い。'84年収録の7分のボーナス・トラックが1曲収録されているほか、'90年に一部オーヴァーダブが施されている。おそらくその頃からCD化を準備していたのだろう。シンフォニック・ファンにもお勧め。（坂本）



HOWEVER
Calling
LP/Cuneiform RUNE 2　'84年
CD/Kinesis KDCD 1013

元々はハウエヴァーの2ndとして'84年に発表された物。ここでは1stのレコメン色を減らして、例えばハッピイ･ザ･マンのようなカンタベリー／シンフォニック／フュージョンのハイブリッド・スタイルの作品と言う印象があったのだが、現行CD版は追加収録曲が9曲、削除が1曲、残りの曲もほとんどが追加録音、改題、リミックスがなされている等、実質的には新作と呼ぶのがふさわしい。バンド自身はこれにより、アルバム「コーリング」は始めて完成したと語っている。確かに幾分、荒さもあった元版に比べ、丁寧に造られ、完成されたとの印象は受けるが、追加曲が往々にして凡庸なポップスに接近したりする分、間延びした印象もある。（中西）



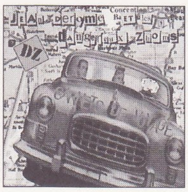
THE ILLUSTRIOUS THEATRE ORCHESTRA
Standing On The Shoulders Of Giants
CD/Trompe L'oreille 119939　'93年

ジ・イラストリアス・シアター・オーケストラは、テナー・サックス、チェロ、キーボード、バリトン・サックス、クラリネットの5人から成るチェンバー・ロック・グループである。うまくアレンジされたアンサンブル重視の演奏は、一部ミニマル・ミュージック的な部分もあるものの、全体としては、クラシカルかつメロディアスで、非常に落ち着いた印象を与える。彼らの経歴及び彼らがどのような聴衆を意識して本アルバムを作ったかは不明であるが、チェンバー・ロック・ファンが一聴するに値する作品であることは間違いない。（賀川）



JEAN DEROME (Canada)
Confitures De Gagaku
L P/Victo VICTO 05　'88年

タイトル通り『雅楽の保存』その特徴ある甲高い響きやすすり上げるような特異なフレージングの模倣、すなわち質の悪いエキゾティズムによってではなく、そのエレガントな厳格さ（魔法陣の数配列を活用したマトリクスによる）と繊細な平坦さを、端正なアンサンブルによってどこまでも追及することによってなされる。薄く薄く平らに引き伸ばされ、ティシューのようにさわさわと息づく音の層の重なりは、決して和音の堆積へと至らず、むしろディレイをかけたようにずれながらさざめいて、淡くにじんだ水彩画を描きあげる。（福島）



JEAN DEROME ET LES DANGEREUX ZONES
Carnets De Voyage
L P/Ambiances Magnétiques AM 032
CD　'94年

このジャン・ドゥロームの新作も相当な出来がある。EVIDENCEの2人にR. リュシエ、他Guillaume Dostaler (pf、syn)、Tom Walsh (tb)の3人を加えた6人編成により、ライヴ録音されたこの作品、ドゥロームの綿密かつ微細な楽曲に各人の演奏がスケールの大きさを加えていて、たまらなくスリリングだ。特に打楽器のピエール・タンギィ（ちなみにこの人がらみではギタリストのティム・ブレイディは要注目）とリュシエのプレイが光っている。これら名手達の適確なサポートにより、ドゥロームのジャズ指向とコンテンポラリー指向の両面を上手く噛み合わせる事に成功している。この作品により、今までリュシェやデュシェーヌの影に回りがちだったドゥロームの名を強く意識せざるを得ないだろう傑作。（中西）



JEAN DEROME/RENÉ LUSSIER (Canada)
Soyez Vigilants, Restez Vivants
L P/Ambiances Magnétiques AM 005
'?年

ドゥローム＆リュシエの記念すべき一作目。プログレッシヴという言葉は彼らのためにこそあるのだと確信させられる、圧倒的に素晴らしい11曲を収録。歌舞伎に影響されたかのごとき1曲目、ドゥローム作のユーモラスなクリスマス・ソング、ケベックのトラッドを料理した曲、A・デュシェーヌ参加の曲ではかつてのコンヴェンタム・タイプの演奏も聴ける。次作と共に、どちらかというとドゥローム主導で作られたものであり、彼独特の奇抜なアイデアがあちこちに塗り込められている。前後作も含め、一刻も早いCDでの再発が望まれる。（佐々木）



JEAN DEROME/RENÉ RUSSIER
Le Retour Des Granules
L P/Ambiances Magnétiques AM 006
'?年

ドゥローム＆リュシエ・デュオの二作目。本作以後、二人はタイトルのバンド名を名乗るようになる。全11曲収録。それにしてもいったいどうしたら、これほどややこしくも痛快な楽曲ばかりを生みだせるのだろうか？　ロックという形式が本来有していた可能性を、ギリギリまで突き詰めたかのような、異常に濃縮されたサウンドがここにある。実際、この時期のアルバムはもっと語られてもよい筈だ。ドゥローム＆リュシエの作品集は、どれをとっても、いわゆるレコメン的な音楽の中でも間違いなくトップ・クラスに位置するものなのだから。（佐々木）



LES GRANULES (Canada)
Au Royaume Du Silencieux
CD/Ambiances Magnétiques AM 018
CD　'92年

レ・グラニュール名義での、ドゥローム＆リュシエ・デュオ三作目最新盤。今回はじめてゲスト・プレイヤー抜きで、全ての演奏を二人きりで行なっている。しかも一発録りのスタジオ・ライヴ・レコーディング（オーヴァーダブ等は一切なし）であり、複数の楽器を取っ替え引っ替え操りながら、これだけ複雑なサウンドを織り上げてみせるとは、まったく驚きだ。全15曲収録。このデュオの最高傑作と思える作品が多数入っている。遊戯心と生真面目さが見事に溶け合った、一瞬たりとも隙のないアルバムだ。アンビアンス・マニェティークの入門盤にも最適と思う。（佐々木）



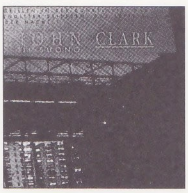
JOAN LA BARBARA
Sound Paintings
CD/Lovely Music LCD 3001 '90年

ジョアン・ラバーバラはフィリップ・グラスのアンサンブルのメンバーとしてその名を知られる女性ヴォーカリストだ(「イー・アー・オー」と歌っていた人)。'79～'88年の彼女のヴォイス・パフォーマンスを収録したアルバムであり、'88年の〝Urban Tropics〟にはカウベルやサンプラーの奏者が参加しているが、後はすべて彼女の独り舞台。当然多重録音が駆使されているものの、エレクトロニクスを利用した編集行為は一切回避されており、声や息だけでどこまでも多彩な表現が追求される。言葉すらもが排除され、意味性への帰着も慎重に除かれた中で、なおも音楽とドラマの境界が曖昧になって行く瞬間を聴き取れるのがこの音楽の醍醐味だ。あたかも絵画を見るかのような味わいがある。 (坂本)



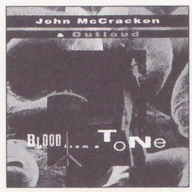
JOANE HÉTU (Canada)
Castor Et Compagnie
CD/Ambiances Magnétiques AM 037 CD '95年

JUSTINEが何だかやけに元気だ。昨年からダニエル・P・ロジェのソロ、ディアンヌ・ラブロスとミシェル・F・コテのデュオ、JUSTINEの2nd、ラブロスのソロと来て、とうとうジョアンヌ・エトゥの初のソロ・アルバムが登場だ。どれを聴いても彼女達が上昇曲線に乗っていることは明らか。ジャン・ドゥローム、D・ラブロス、ピエール・タンゲイを従え、エトゥは実にのびのびと自然に自分の音楽を形にする。そう言えば、エトゥはアンビアンス・マニェティークの主催者。どうりで去年レーベルにいくらコンタクトしても返事がなかった訳だ。忙し過ぎたのね。 (坂本)



JOHN CLARK
Il Suono
CD/(Ger.)CMP '93年
/ジムコ JICL-89713

ジョン・クラークなるミュージシャンはあちこちに大勢いるが、多分一番有名なのがこのジョン・クラーク。ギル・エヴァンス、カーラ・ブレイ、ジョージ・ラッセル等の名だたるジャズ・オーケストラを歴任したフレンチ・ホルン奏者だ。とりわけ故G・エヴァンス人脈は今でも強靱な結束力を持っていて、本作にもそれが反映しているが、中でアンソニー・ジャクソンとジェローム・ハリスの参加がちょっと意表をついている。もう少しおとなしい内容を予想したにも関わらず、CMPに相応しい音になっている最大の原因はJ・ハリスの相当にアグレッシヴなギター・プレイにある。ここにも伝統と前衛を体現しているミュージシャンがいる。 (坂本)



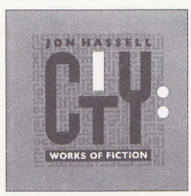
JOHN McCRACKEN & OUTLOUD
Blood From A Tone
CD/Muworks MUW1010 '92年

音合わせをしたこともない連中が集まり、リハなし、インプロヴィゼーションのスタジオ一発DAT録りという究極のシチュエーションで繰り広げる華麗なセッション。主人公のジョン・マクラッケンはFUSIONARESのメンバーだが、ほとんど無名の人物。エイブ・スペラーとチャールズ・ボールドウィンはソニー・シャーロック・バンド。有名人トーマス・チェイピンだけは紹介の必要がないだろう。その4人が繰り出すのは、意外にも、めちゃくちゃにカッコいいジャズ・ロック。マクラッケンとボールドウィンが圧倒的に光っている。絶句……。 (坂本)



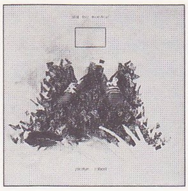
JOHN OSWALD
Plunderphonic
LP/ '89年
CD/

ジョン・オズワルドが今日もつづけているプランダーフォニック(他者の音楽作品を秒単位でデジタル・サンプリング／カット・アップして作品を構成する)作品の、幻の1st。'70年代にはアルト・サックス奏者として即興演奏を続けてきたが、'80年前後、上記の独自の手法を駆使して自身のMystery Tape Labよりカセットを多数発表。本作も本来放送局用のみに制作されたがマイケル・ジャクソン～CBSからの訴えで、ほとんどが廃棄処分の浮き目にあったものの米Tape Beatlesの手で少数のみディストリビュートされた。そのマイケルからC.ティラー、ビーフハート、グレン・グルードまでがサンプリングされ、別の姿をさらけだす。ジョンは近年CCMCにも参加、即興演奏も再開している。 (後藤)



JON HASSELL
City Works Of Fiction
CD/Opal 9 26153-2 '90年
/ポリドール POCP-1302

古くはラ・モンテ・ヤングやテリー・ライリーとの実験、プログレッシヴ・ロック世代にはブライアン・イーノとのアンビエント・ミュージックで知られるジョン・ハッセル。デヴィッド・シルヴィアンやTEARS FOR FEARSの音楽にも多大な貢献を果たしている。現代音楽とポップ・ミュージックの両側に平気で自分の居場所を確保したユニークなボーダーレス・ミュージシャンだ。トランペッターであることを遙かに凌駕したミュージック・クリエイター。アフリカのパーカッション・グループ、FARAFINAとの共演作「Flash Of The Spirit」('88)を経て発表された本作は、いつものメンバーではなくおそらくは相当に若い連中を従えての演奏で、思い切りリズムが弾けている。最高にカッコいいポップ・アルバム! (坂本)



JOCELYN ROBERT
Star Live Maniteur'
LP/RéR 32　'87年

本来はヴィジュアル作品へのサウンド・トラック制作を続けてきたジョセリン・ロベールの1st。現実音を注意深く重ね合わせ貼り合わせて構成する作風は同じくRéよりリリースのある英スティーヴ・ムーアと同様のものだが、異質の音をぶつけるのではなく、その融合を図るかのような指向は、より情緒的な結果を生み出している。'95年発表の3rd「Le Piano Flow」では、コンピューターのエラーをそのまま作品とする。デビッド・カニンガムのエラー・システムのハイテク版ともいえる手法を用いている。ソロ作の他、BRUIT TTVのキーボード奏者として2作を残し、またCCMCのリーダーとして知られるM・スノウとのコラボレーションも発表している。　(後藤)



WONDEUR BRASS (Canada)
Simoneda
LP/Ambiances Magnetique AM102
'87年

カナダ、ケベックきっての女性アヴァンギャルド・ロック・バンド、ワンダー・ブラスの、これは1枚目のアルバム。ギターレスで、サックス、キーボード、ベースがリズミックに絡み合うサウンドは、フランスのエトロン・フー・ルルーブランからの影響を伺わせる。この時点では基本的にシンプルな演奏であり、幾分単調な嫌いもあるが、このアルバムの後で、ほぼ同メンバーのままジュスティーヌ(無論サドだ)と名前を変えてからは、ハードかつ濃密な、とてつもなくテンションの高い音に成長している。「女」を武器にしない本格派。
(佐々木)



JUSTINE (Canada)
(Suite)
CD/Ambiances Magnétiques AM 016
CD　'90年

メンバー全員が女性という編成は特にアメリカ大陸のアヴァンギャルド・ミュージック・シーンではかなり珍しいような気がする。彼女達が目標としていたのがレコメンディッド系のロック・サウンドであったことは明らかで、WONDEUR BRASSの10年を経て、このJUSTINEで漸く彼女達は自分達のサウンドを見つけることができたのではないだろうか。その後もバンドは活動を続けており、女性作曲家をテーマにしたコンピレーション「Dice」('93)で最新の音を聴くことができる。LA LÉGENDE DE LA PLUIEはJUSTINEの別プロジェクトとして重要だ。　(坂本)



JUSTINE
Langages Fantastiques
CD/Ambiances Magnétiques AM 033
CD　'94年

JUSTINE 2ndアルバム。WONDEUR BRASS以来活動歴の長い彼女達だが、JUSTINEになってからは活動こそコンスタントらしいものの、アルバム・リリースは4年ぶりというマイ・ペースだ。但し、その間に「La、Légende De La Pluie」('92)という秀作がある。彼女達はアルバムを重ねるごとに見違えように成長を遂げている。やりたいこととできることのギャップがどんどん縮まって、今ではメンバーひとりひとりが一音楽家として輝いている。当然これは彼女達の現時点での最高傑作だ。透明感のあるレコメンディッド系のサウンドが非常に魅力的。　(坂本)



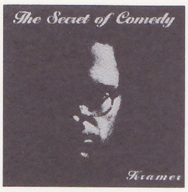
DAEVID ALLEN AND KRAMER
Who's Afraid?
CD/Shimmy 060　'93年

モニュメンタルかつ心安まる1枚。遂にカンタベリー・シーンとジャンク・シーンが手が結んだ。史上最大の人脈図ができあがったも同然。クレイマーはアメリカの最も先鋭的なシーンの中心、シミー・ディスクの親玉だが、そのいい加減さと繁殖力は、考えてみればアレンのノリにぴったりだ。このアルバムは二人のふやけた関係が、とてもプライベートな形で音になっていて、初期のアレンのソロやワイアットのソロに通じる柔らさがある。いいうだり具合だ。その型に定まらない活動は、きっと近いうちに日本の先鋭シーンとも関係してくるだろう。　(松本)



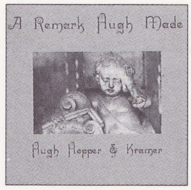
KRAMER
The Guilt Trip
CD/Shimmy Disc sh-055　'93年

'93年中に聴いた何千枚かの新譜のうちで最も印象に残ったアルバムの1枚。2枚組で計36曲、全て本人による作詞、作曲、編曲、演奏(一部ゲスト有り)、プロデュース、エンジニアリングという、まさに一人舞台の大作で、何よりもその音楽的多様化に驚かされる。'60年代のサイケデリック・サウンドからハード・ロック、プログレ、フォーク、ノイズ/アヴァンギャルド、そしていかにもシミー的な変態ポップまで、オモチャ箱をぶちまけたかの様なにぎやかさ。'90年代の「ホワイト・アルバム」という表現がピッタリの万華鏡的世界。
(松山)



KRAMER
Secret Of Commedy
CD/Shimmy-075　'94年
/マルゴ MGOD-001

かつて在籍したショッカビリーなどの強烈な印象があったクレイマー。色々な所で悪名が高いことでも知られている彼だが、前掲の1stソロ・アルバムでは、以前のそういった印象を吹き飛ばすかのような、ポップでキッチュで内省的な素晴らしい音世界を築き上げた。この2ndアルバムはポップ色がより際立ったもの。何でこれがアヴァンギャルド・セクションにあるの？と疑問を持たれた方も多いかもしれない。はっきり言ってこの際、ジャンル分けは一切無視して欲しい。アコースティック・ギターが活かされつつ、メロトロンまで使用している。そこにクレイマーの飾らない歌声が入るというものだ。彼自身、相当なカンタベリー・ファンなので、その手のファンでポップ好きの人は前作と合わせて必聴。　(平山)



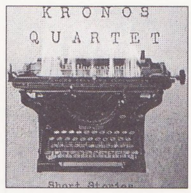
HUGH HOPPER & KRAMER
A Remark Hugh Made
CD/Shimmy-076　'95年

ヒュー・ホッパーとクレイマーのデュオを一体誰が予想していただろう。しかもその音楽がおそろしく的確にカンタベリー・サウンドを醸し出している。参加ミュージシャンがそれぞれに抜群のはまり役として配置され、決して迎合しないままに見事な音楽を築き上げている(勿論故人は迎合のしょうがない訳だが)。中でもクレイマーというミュージシャンの才気に改めて敬意を払わざるを得ない。彼はカンタベリー・ミュージックをジャズ・ロックよりは寧ろサイケデリック・ミュージックの文脈で深く捉えているのだろう。それが音になると全く違和感のない説得力を持つ。だからこそ平気でメロトロンが鳴り響いてしまうのだろうし、初期のSOFT MACHINEやGONGを彷彿とさせるのだろう。感動を覚える傑作だ！　(坂本)



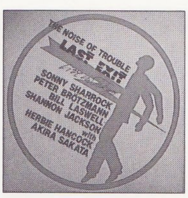
KRONOS QUARTET
Black Angels
CD/Elektra Nonesuch 9 79242-2
'90年

クロノスの衝撃というのは筆舌に尽くしがたいものがあった。勿論センセーショナルな登場のしかたにも侮れないインパクトがあったが、それよりもまず、本気で現代の音楽を揺さぶろうという弦楽四重奏団が桁外れの感度で真剣勝負を挑んだことに驚きを禁じ得なかった。しかも彼らの活動の精力的なこと。ステージだけでなく、出すアルバム出すアルバムがいちいち凄い。「White Man Sleeps」('87)、「Winter Was Hard」('88)と来て、「Black Angels」で最後のだめ押し。演奏だけでなく、選曲も含めて、何と刺激に満ちた音楽であることか。ジョージ・クラムからトーマス・タリスへの落差がとても他人とは思えない。彼らにとってジミ・ヘンドリックスは決して奇を衒ったものでなかった。　(坂本)



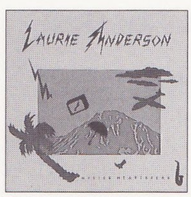
KRONOS QUARTET
Short Stories
CD/Elektra PRCD 8738　'93年

ソルジャーやバラネスクなど多くの後続者達を生んだ〝同時代音楽〟専門の弦楽四重奏団。アタックの強さと切り込みの深さでは、未だ他の追随を許さない強面揃い。ここではJ・ゾーン、E・シャープ、J・オズワルドからS・グバイドゥーリナ、H・カウエル、更にブルースのウィリー・ディクソン、インド古典音楽のパンディット・プラン・ナート等まで計9人の多様な音楽家達の曲を一つずつ取り上げている。今、この瞬間に、音はどう響くべきなのか、という激しい問いかけが、一部のスキもなく作品全体を覆い尽くしている。　(松山)



LAST EXIT
The Noise Of Trouble
CD/Enemy 103　'86年

よもやこんなバンドが世の中に登場するとは思ってもみなかったスーパー・グループ。ラズウェル以外は皆、フリー・ジャズの超大物。大物過ぎてほとんど引退していたシャーロックを舞台に引きずり出し、ヨーロッパでその名を轟かせていたブレッツマンをアメリカに呼び寄せ、THE DECODING SOCIETYで一線の活動を繰り広げていたシャノン・ジャクソンを巻き込んでの大騒ぎ。この日本公演を収録した2ndには更に信じられないゲストも参加している。LAST EXITで一番得をしたのは甦ったシャーロック。彼のブルース色はかなり目立つ。　(坂本)



LAURIE ANDERSON
Mister Hertbreak
CD/Warner Bros. 9 25077-2　'84年

ローリー・アンダーソンはニューヨークを代表するパフォーマーだ。彼女にとって音楽はそのパフォーマンスの一部に過ぎない。ハイテクを駆使したステージが大きな話題になるが、その発想の根元はいつもローテクであり、パフォーマーとのそうしたインターフェイスにこそ彼女の特質がある。彼女の2作目のソロ・アルバムである本作は、初めて真正面から音楽に取り組んだというだけあって、ピーター・ガブリエル(vo)やエイドリアン・ブリュー(g)、ビル・ラズウェル(b)、アントン・フィアー(d)、デヴィッド・ヴァン・ティーゲム(perc)等、豪華ミュージシャンが参加し、彼女ならではのポップ・ソングを披露。それがまたマーケットで圧倒的な支持を受けた。近年彼女はイーノと交流を深めている。　(坂本)



LA LÉGENDE DE LA PLUIE
La Légende De La Pluie

CD/Ambiances Magnétiques AM 026
CD '92年

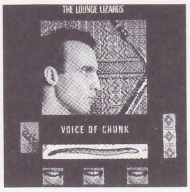
アンビアンス・マニェティーク女性トリオによるワンダー・ブラス以来の持続の到達点と言うべき秀作。考え抜かれ切り詰められた(即興)演奏が指し示す場面/枠組(それは聴衆とのコミュニケーションのための枠組でもある)に従って、複数のヴォイスはそれぞれ異なった役割/局面を与えられ、別々の部屋に割り振られる。語り/悲鳴/簡単な繰り返し/悲歌/モノローグ/淡く霧のようにもやうコーラス/愚痴/楽器とのデュオ/掛声/……。ここでは声の様々な様態が井戸端会議さながらにいきいきと交錯し、日常生活そのままに噴出する多声性を鮮やかに解き放つ。(福島)



LONELY UNIVERSE
Lonely Universe

LP/CMP CD41 '88年
/ジムコ・ジャパン JICK 89702

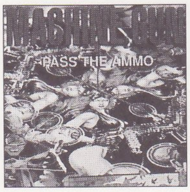
デイヴィッド・トーンとミック・カーンはともかく後の二人はちょっと馴染みがない名前だろう。どちらもカナダ出身(内Lambertはケベックの出なのでランベールとでも読むべきか)で急進的なジャズと現代音楽の接点で活動していた所をクルト・レンカーに見い出され本作を録音するに至ったらしい。で、その際ホワイトが一緒にツアーをした事があるトーン/カーン組(トーンの2ndソロの為のツアー、ドラムはB.ブラッフォードだった)を迎えたと言う訳か。そのせいかこのアルバム、トーンの作品に印象が似ている。編成が同じせいもあろうが、拡がりとうねりを併せ持ったフリーキーながらも統率感の有るサウンド。静かながらもスリリング。(中西)



THE LOUNGE LIZARDS
Voice Of Chunk

CD/ポニー・キャニオン PCCY-00013
'89年

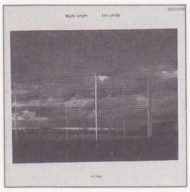
あまりにも特異な経緯で結成されたジャズ・バンド、THE LOUNGE LIZARDSだが、少なくともこの時期の彼らについてはそのサウンドを正当に評価すべきだ。まっとうとは言わないが、この音楽の自立性は、ジャズの本場アメリカにおいて極めて珍しい特例のひとつだ。ちょうど本作をフィーチャーした日本公演を目撃した時、決して音楽の内容に近似性がある訳ではないが、私はしきりにSOFT MACHINEを連想した。彼らには他のフィールドからジャズの迷路へと彷徨い込んだミュージシャンの、実験的精神、研究心が共通していた。(坂本)



MACHINE GUN
Pass The Ammo

CD/Mu Works MUW 1011 '92年

ビル・ラズウェル絡みのエンジニアとして有名なロバート・ムッソがトーマス・チャピンらと組むハードコア・インプロ・グループの3rd。もっともハードコア・インプロと言っても轟音と化している訳ではなく大雑把な決め事位は有りそうな感じで古くは(第一期)ライフ・タイム等を思わせたりする。もっとも現代風にもう少しシャープでコンパクトではあるけれど。いや実の所かなり本誌向けの音だと思う。とりあえず肉体乗りの格好良く暴れている音が好みの人には充分受け入れられる筈だ。三枚共に同レベルの出来だが録音は本作が一番良い。(中西)



MARK ISHAM & ART LANDE
We Begin

LP/(Ger.)ECM 1338 831621-1 '87年
CD/(Ger.)ECM 1338 831621-2
/ポリドール J33J 20182

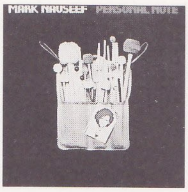
アート・ランディというピアニストは寡作で、ECMでヤン・ガルバレクとのデュオ・アルバム「Red Lanta」('74)を発表後、'75年2月~'77年秋にマーク・アイシャム(tp、flh、ss)、ビル・ダグラス(b、fl)、グレイン・クロンクハイト(d、perc)とRUBISA PATROLを結成し、同名のアルバムを'76年にECMより発表。このほかほんの数枚のピアノ・ソロ・アルバムがマイナー・レーベルから出ているようだが、このマーク・アイシャムとのデュオ作が久々のメジャー作品となった。RUBISA PATROL以来となるふたりの共演は、アイシャムの間口がGROUP 87を経て極端に広がったことでなかなか新鮮な音楽を結晶させている。もう2度と出会うことはないかも知れないほど距離の開いたふたりの作品が残せたことは快挙と言いたい。(坂本)



MARK ISHAM
Castalia

CD/Virgin America 7 90900-2 '88年
/東芝EMI VJD-32044

絶賛するつもりはないけれども、マーク・アイシャムはどう見ても日本では過小評価されていると思う。そもそもはジャンル越境者だった彼の音楽が後のニューエイジ・ミュージックと完全にリンクしてしまったことと、数多くのサウンドトラックを含め作品数が多過ぎることが災いして、チャンスはいくらでもあった筈なのにみんなが評価を後回しにして来たツケが随分たまってしまった。ライル・メイズ(pf)の参加した「Film Music」('85)や、Windham Hill制作の朗読アルバムのバックグラウンド・ミュージック集「Songs My Children Taught Me」('91)等も聴く価値は充分だし、それ以上に面白いのがデヴィッド・トーン(g)がらみの「Castalia」と「Mark Isham」('90)。特に後者を推薦したい。(坂本)



MARK NAUSEEF
Personal Note

LP/(Ger.)CMP 16 St '82年
CD/ジムコ JICK-89727

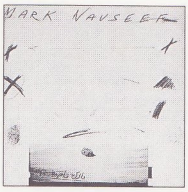
ベルベット・アンダーグラウンドのツアー・メンバーからELF、レインボーのツアー、シン・リジィ、イアン・ギラン・バンドというハード・ロック畑の仕事が多かったドラマーだが、ソロ・アルバムは、ガムランなどの東洋のパーカッションとフリー・ジャズをミックスしたような、およそその経歴から想像すると裏切られる内容である。「ビッチェズ・ブリュー」の頃のマイルス・サウンドやマハビシュヌ、もしかしたらサン・ラやコルトレーンの「オム」などにも若い頃傾倒したんじゃないかと思わせるような演奏がくりひろげられる。しかし、明らかにロックを通過したマーク・ナウシーフの景気のよい4ビート・プレイにあおられ、演奏はものすごい疾走感にあふれ、ひたすら若々しい。全員、凄腕。 (難波)



MARK NAUSEEF
Sura

LP/CMP 21 ST '83年
CD/ジムコ JICK 89728

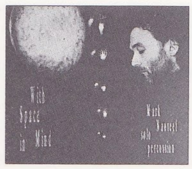
前作「Personal Notes」の大爆発、次作「Wun Wun」の静謐な空間の間にあって、本作も非常に緊張感の高い作品。前作で見せたような怒濤の勢いとはタイプが違い、ぴりぴりと研ぎ澄まされた、それでも自分の世界にぐいぐいと引っぱり込むようなタイプ。なんといっても参加しているゲストに注目。J. Kuhn、M. Stockhausen、T. Gurtu、D. Torn他数名。その中でも一番目立っているのがここぞという時に的確にうねるギターのD. Tornだ。ぱっと聴きの第一印象は断然前作だろうが、本作も是非とも繰り返しトレースして欲しい。登り詰める緊張感は何も爆発的な演奏だけではないということが判ると思う、とっかかりとしては最適な一枚。 (伊藤)



MARK NAUSEEF
Wun Wun

LP/CMP 25 '84年
CD/CMP CD25
/ジムコ JICK 89729

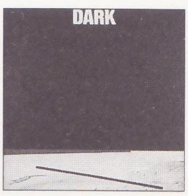
「パーソナル・ノート」、「スーラ」に続く、M. ナウシーフのリーダー作、第三弾。前二作がそれぞれ、ロック/ジャズその他の有名ミュージシャンを大勢迎えたアンサンブル指向の作品だった事、又、両作ともJ. キューンの影響が少なからず見られるのに対して本作では純ソロ・アルバム的なアプローチを取っている。J. ブルース、T. グルトら、W. クイントウスと言ったゲストも控え目に、ナウシーフの打楽器群が主体となった作品。冒頭/ラストの曲でのガムランを始めエスニックな物からの影響が多いが、そう言った要素、あるいはそれらを配するクレバーさよりも尚、ナウシーフの発する音の迫力、響きの強さは圧倒的。綿密に練り込まれつつも、生々しく迫る感覚の冴え、それが如実に感じとれる。 (中西)



MARK NAUSEEF
With Space In Mind

CD/M・A レコーディングス M020A
'94年

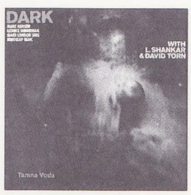
予告されていたナウシーフのM・Aでのソロ・レコーディングがこれ。'91年から始めたレコーディングであり、編集にも相当の時間を注いだらしいが、それだけの内容がある作品に仕上がっている。ナウシーフのCMPでのソロ作品が3作まとめて日本発売されたばかりだが、完全なソロ・レコーディングはこれが初めてとなる。サウンドの構成が準備されていたこともあり、1曲1曲がとても判り易く展開している。私がこれまでに聴いたM・Aアイテムの中でも最高水準の作品。 (坂本)



DARK
Dark

LP/CMP 28 ST '86年
CD/ジムコ JICK 89730

CMP最大の逸材と言っても良いだろう、DARKの1st。次作「Tamna Voda」に譲るところは少なからずあるが(しょうがない、非のうちどころのない名盤なのだから)、本作も相当にテンションが高い。何といっても中心人物M. Nauseefがいるだけで注目なのだが他にL. Shinneman、M. L. Sims、C. Guardという4人編成。次作では更にメンバーが強化される。「Tamna Voda」がK. Crimsonとの引き合いで評価される場合が多々あるが、本作はよりリーダーの民族音楽へのアプローチを強く出した形になっている。順番で言えば次作を先に聴いた方が良いだろうが、本作もしっかりした出来であることを覚えていて欲しい。 (伊藤)



DARK
Tamma Voda

CD/(Ger.) CMP CD 36 '88年
/ジムコ JICK 89731

DARKはマーク・ナウシーフを含む4人組で、これは彼らの2作目に当たる。ナウセフはかつてTHE IAN GILLAN BANDで活躍した後、ジャズ・ピアニストのヨアヒム・キューンと活動をともにしていた名ドラマーだ(因みに彼の1stソロ・アルバム「Personal Note」(1981)はプログレッシヴ・ロック・ファンの必聴盤)。このアルバム、テリエ・リピダルがKING CRIMSONをやってると申しましょうか、今どきの音楽には大変珍しい緊張感のある内容で、プログレッシヴ・ロック・ファンに聴かせれば目を血走らせて興奮すること請け合いだ。眠ってた血が騒ぐぜ。聴いてると興奮してこれ以上解説が出来ない! (坂本)



MARK NAUSEEF & MIROSLAV TADIĆ
The Snake Music
CD/ジムコ JICK 89732 '94年

かねてより話題となっていたTHE SNAKESがタディチとナウシーフのデュオに形を修正して遂に登場した。ジャック・ブルース(b、vo)、デヴィッド・トーン(g)、マルクス・シュトックハウゼン(tp)、ヴォルフガング・プシュニク(sax)といった大物達が参加。曲によって編成が変わるのでバンドとしなかったのだろうが、しっかりと芯の通った演奏で統一されている。J・ブルース、F・ザッパ、J・ヘンドリックスらの古典的名曲を慎重に炸裂させた演奏がぞっとするほど美しい。ひとつひとつの音の厳しさで築き上げられた悽愴な音楽。(坂本)



MARC RIBOT
Requiem For What's-His-Name
CD/ビクター VICP-5182 '92年

現在のNY前衛シーンで、最もめざましい活躍を続けているギタリストの一人。彼が関わる様々なユニットのひとつ《ルートレス・コスモポリタンズ》の2枚目である。アンソニー・ブラクストンとデレク・ベイリーとアート・アンサンブル・オヴ・シカゴとシャグズと金石出が一緒になってサーカス音楽をやっているようなものか。全くのデタラメにように見えて、その実非常に緻密にスコアリングされたインテレクチュアルなサウンドであることは、A・コールマンの作品と同じ。NY/ユダヤ系サークルならではの分裂症的流亡音楽。(松山)



MARTIN TETREAULT(Canada)
Des Pas Et Des Mois
CD/Ambiance Magnétiques AM 017 CD '90年

アンビアンス・マニェティークの中でも、もっとも異色と言うべき一枚。ターンテーブル奏者M.テトローと、ルネ・リュシエ、ミシェル・コテの共演盤である。テトローはC.マークレイのダダイスティックな面を更に展開させたかのような奇抜なコンフューズド・コラージュ・サウンドを作り上げる反=音楽家で、大友良英やD.シェイとは又違ったスタンスを採っている。とにかく聴けば聴くほど仕掛けに富んだ複雑怪奇の音楽で、情報量の多さと謎の多さという点では随一の存在である。ノイズ系とも一脈通じる。カセットも出している筈だが残念ながら未聴。(佐々木)



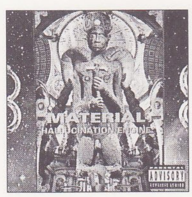
MASSACRE
Killing Time
CD/(Swi.) Rec Rec ReCDec 906 '81年
/ジムコ・レコード JICK-89059

なんといってもF. FrithにB. Laswellで、ワイルドでラフなのに緻密で入り組んでいる。これ以上の説明は必要無いような気がする。F. Frithはこういう人だし、B. Laswellは本誌53号に詳しく述べられているようにああいう人だ。かなり妙なことを演奏しているにも関わらずゴリゴリとした強烈なノリがあるところが奇跡的。複雑に構築され派手にインプロヴァイズされているところにこの編成からではの味が感じられる。余談だが昨年「はにわ5 days」で本作収録の名曲〝Bones〟が演奏されたのには驚いた。尚、Rec Rec盤には6曲追加収録がされている。(伊藤)



MATERIAL
Memory Serves
LP/Restless 72654 '81年
/ジムコ JICK-89046

プレイヤーとしてのビル・ラズウェルを堪能するなら、本作に尽きる。ニューヨーク・アンダーグラウンドの2世代ががっちりとスクラムを組んだ前人未到の音楽。このビートは今でも時代を突き抜けている(しかも、踊れる)。この時、音楽家ラズウェルにはこの先にある音楽の革新的ヴィジョンが見えていた筈だ。しかし彼はこの道を直進せず、巨大な実験場の造成に身を棒げて行くことになる。MATERIALは結局ラズウェルとバインホーンの2人のプロジェクトとして機能して行くが、その音楽はアルバムによって全く違う表情をしている。(坂本)



MATERIAL
Hallucination Engine
CD/Axion 314-518 351-2 '94年
/マーキュリー PHCR-1752

ラズウェルのコンセプトをもっとも忠実に反映した不定形のプロジェクト、マテリアルの最新アルバムは、これまでの総括とも言える大作となった。ウィリアム・バロウズからウェイン・ショーターに至る超豪華な参加アーティスト陣には、この10年間でラズウェルが培ってきた人脈の豊かさが伺われる。サウンド的にも、かれのこれまでの歩みを封じ込めたかのように、ロック、ジャズ、フェイク、エスニック、サイバー、さまざまな要素が縦横に交じり合い、きわめてポスト・モダニスティックな音のサウンド・スケープを形成している。(佐々木)



MEREDITH MONK
Book Of Days
CD/ECM 1389　'90年

歌手一族に生まれ、各種特殊技法の開発や演劇的構成の導入、パフォーマティヴなアンサンブルの構築を進めたヴォイス・パフォーマーの草分け的存在。ミニマルな構造を機軸とするリズミックな推進力に溢れた展開は、声に引き締まった身体ときびきびした動き、軽やかな跳躍力を与えており、未来的時間の中で鮮やかに沸き立ち、輝かしいしぶきをあげて弾け飛ぶ幾何学的アンサンブルは、声によるダンス・パフォーマンスと言えよう。本作は中世のジューイッシュ村（と現代の往復）を舞台としたフィルムと平行して制作され、凍てついた冬の朝を思わせる張り詰めたモノクローム映像を反映して、アンサンブルも幾分かいつもの華やかさを迎え、代わりに謎めいた奥深いしめやかさと狂人の持続的強度をたたえている。（福島）



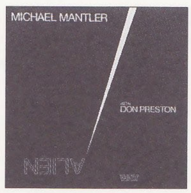
MICHAEL MAUTLER /EDWARD GOREY
The Hapless Child
LP/WATT 4　'76年
CD/ECM 831 828 2

カンタベリー、プログレッシヴ・ロックのファンの間にマントラーの名を決定的に印象付ける事になった傑作。エドワード・ゴウレイのテクストに曲を付けた構成になっており、こう言った作風は次作「Silence」（こちらのテクストはハロイド・ピンター）にも見られる所。常連人脈のカーラ・ブレイ、スティーヴ・スクロウにジャック・テジョネット、テリエ・リピダル等を迎えた演奏は悪夢のようなテクスト、マントラーのテンションあふれる楽曲を表現するにあまりある演奏を聴かせるが、何より決定的なのが全曲で唄いまくるロバート・ワイアットのヴォーカル。終始、静けさをたたえむむ、尚、悲痛なシンギングはワイアットの数える名唱に内でも屈指の物。冷ややかに拡がる傑作。（中西）



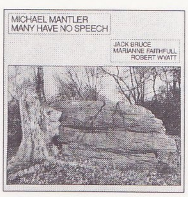
MICHAEL MANTLER
Something There
LP/Watt 13　'?年
CD/(Ger.) ECM 831829-2

導入部の屈折したメロディー・ラインと、調感覚の稀薄なピアノ、さらに圧迫感の強いストリングス。マイケル・マントラーもストリングス・アレンジをマイケル・ギブスに任せた事で、心労の軽くなった分だけ、演奏に力強さがみなぎっているようだ。現代音楽ともジャズともロックともつかない音楽だ。やはり音はヨーロッパ的であろうか。ドラマーのニック・メイスンは場違いな感じがしないでもないが、全体的にみて、ドラムはさほど重要ではないようだ。マイク・スターンのギター、カーラ・ブレイのピアノ、マイケル・マントラーのトランペット、この３楽器をメインに操り広げられる音楽はもっと評価されるべきだ。アール・ゾイが好きなら、このアルバムも気に入るだろう。（中藤）



MICHAEL MANTLER
Alien
LP/(Ger.)Watt/15 827639-1　'85年
CD/(Ger.)Watt/15 827639-2

マイケル・マントラーがプログレッシヴ・ロック・ファンにとってどれだけ重要な存在であるかは繰り返すまでもないだろう。逆に彼の音楽をジャズ・ファンがどれだけ許容できるかを考えれば、マントラーはこちら側のミュージシャンだと結論してしまった方がいい。「Alien」はマントラーがトランペットに専念し、その他シンセサイザー類の一切を元MOTHERS OF INVENTIONのドン・プレストンに依託した作品であり、プレストンの演奏がたっぷりと聴けるという意味で二重に嬉しい内容だ。マントラーの曲は相変わらずシリアス一辺倒。このままオーケストラ曲に書き換え可能な力作だ。彼の音楽は本質的に「The Hapless Child」から現在に至るまで全く変わっていない（つまり全作品が必聴盤！）。（坂本）



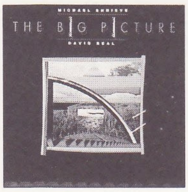
MICHAEL MANTLER
Many Have No Speech
CD/ポリドール J32J59010　'88年

最近ではコンポーザー／アレンジャーとしての方が、マントラーの名は意味があるだろう。（あ、昔からか。）本作でもフル・オーケストラの編曲を手がけているのが、はっきり言って傑作である。スウィング・ジャーナル誌で酷評だったのも、当然、ほとんど現代音楽である。オケの感じはハワード・ショア（D・クローネンバーグ作品のサントラ担当）の辺を想い出させるが、それに加えることにリック・フェンのフリーキーなギター、そしてジャック・ブルース、マリアンヌ・フェイスフル、ロバート・ワイアットのヴォーカルだ。ここでのJ・ブルースは、あのクリームともブルース・ロックとも無関係に存在していながら、かつ強烈なインパクトを放っている。（ベースも弾いていない。）（Chihiro S.）



MICHAEL SHRIEVE
Stilletto
CD/Nouus 3050 2　'89年

サンタナ、オートマチック・マン、ツトム・ヤマシタのGO、クラウス・シュルツとのコラボレーション等、ジャンルを問わない活動を見せているマイケル・シュリーヴ'89年の作。ここではマーク・アイシャム、デヴィッド・トーン、アンディ・サマーズ等を迎え、感覚的なジャズ・ロック・サウンドを聴かせる、適確に落ち着いたリズムの上をアイシャム、トーン、サマーズそれぞれが拡がりを付けていく作風だが、この三者の組み合わせがベスト・マッチング。背景ともリードともつかないラインが絡み合い、ゆっくりと移り替る模様を描く。タメを効かせ、どこかノスタルジックな風情を漂わせている。その後もシュリーヴはB.フリゼール、W.ホーヴィッツ等とも活動。相変らず行動半径は広いようだ。（中西）



MICHAEL SHRIEVE & DAVID BEAL
The Big Picture

L P/(Ger.) Fortuna 17060-1 '89年

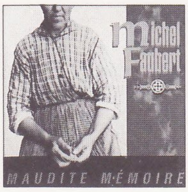
マイケル・シュリーヴがどれほど感度のいいミュージシャンであるかは、今更指摘するまでもないだろう。傑作「Stiletto」('89)は勿論のこと、あまり知られていないアルバムも数枚あって、どれも皆一聴の価値がある。「Stiletto」の助走に当たるスティーヴ・ローチ(syn)とのデュオ作「The Leaving Time」('88)は、デヴィッド・トーン(g)やジョナス・エルボーグ(b)も参加しての雄大なヴィジョンを展開する力作だったので、是非とも再発を望みたい。デヴィッド・ビールとのデュオ・アルバム「The Big Picture」では、ふたりの操るパーカッション・シンセサイザーが聴き覚えのない幻想的な音楽を織り上げる。ちょっとニューエイジ・ミュージック風でもあるが、この躍動感はさすがシュリーヴ。 （坂本）



MICHAEL ZENTNER
Present Time

L P/Red MZ ONE '83年
CD/Ozone OZ 006-2

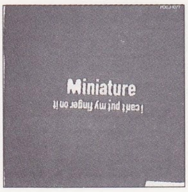
THE MUFFINSのオリジナル・メンバーだったマイケル・ゼントナーの1stソロ・アルバム。当時はゼントナーの参加したTHE MUFFINSのアルバムは発表されていなかったので、この主人公が何者か判らなかったコレクターも多かったと聞く。何しろデイヴィッド・アレンが歌うは、パーシー・ジョーンズとハンスフォード・ロウがベース・バトルを繰り広げるは、ジョン・グリーヴス、ピーター・ブレグヴァッド、フレッド・フリスが参加するは、ドラムスがビル・ベーコン、ケンウッド・デナードだは、カーラ・ブレイがサックスを吹くは、HAPPY THE MANのフランク・ワイアットまでいるはで、騒ぎにならなかったら嘘というものだ。最近ゼントナーはまたまた凄いメンツで新作「Playtime」を発表し、復活しているらしい。 （坂本）



MICHEL FAUBERT (Canada)
Maudite Mémoire

CD/Ambiances Magnétiques AM 021 '92年

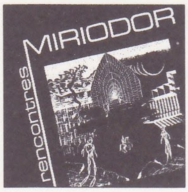
フランス語能力の欠如から推測しか出来無いのが残念だがFaubertはトラッド畑の出身かと思われ、彼の自作曲とクレジットされている一曲以外の曲もトラッドなのだろう(クレジットは無いが)。実際、一部ではア・カペラ（ソロ、コーラス）のみの大変に地味な（が、味わい深い）パートも見られ。とは言え、アンドレ・デュシューヌが監督に名を連ねてアンドレ・デュシューヌの大半をこなし、更に演奏の中心を成すのがロコモーティヴの面々だったりするので残りの部分はむしろデュシュヌの作品として受け止めた方が良い物になっており、ロコモーティヴの作風に近い。 （中西）



MINATAURE
I Can't Put My Finger On It

CD/JMT 849147-2 '91年
/ポリドール POCJ-1077

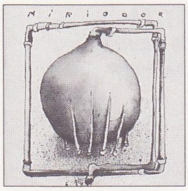
MINATUREはドラム／チェロ／サックスのトリオ編成だが、彼らのサウンドは並大抵のきらびやかさではない。'88年の1stアルバムでは、彼らの潜在的な技量で成立したスケールの大きなインプロヴィゼーションを華麗にかつ鋭く展開してみせたが、この2ndでは表面的な方向性を大幅に変え、見事なジャズ・ロック（という大分違うかも知れないが）を創造している。彼らの創作・演奏能力が桁外れに優れていることを証明した傑作。ジョーイ・バロン、ハンク・ロバーツ、ティム・バーン。3人ともいずれ劣らぬ異才の超人達。 （坂本）



MIRIODOR (Canada)
Rencontres

L P/Rio 43 '86年

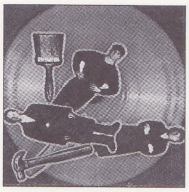
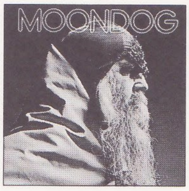
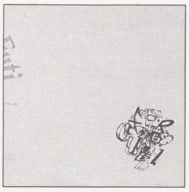
ミリオドールのデビュー作。'84年から'85年にかけ制作され、ここでは6人編成で、楽器の持ち替えなどもあり、大がかりなサウンドとなっている。レコメン系のリズム展開にメロディアスなアプローチは後の作品にも通じるが、もう少しプログレッシヴ・ロック寄りな当りの柔らかさがある。フレーズの節々はキング・クリムゾンを、また線の細いキーボード音とサックスの組み合せはカルプ・ディアンを思わせたりもする他、大仰なパイプ・オルガンが顔を出すあたり、発表当時はケベック・プログレの有望新人と言われたのにも納得が行く作風。次作以降、メンバーを半分に減らしよりシェイプ・アップしたサウンドに転じるが、最近ギタリストを加入させた四人組になった模様。 （中西）



MIRIODOR
Miriodor

L P/Cuneiform RUNE 14 '86年、'88年
CD/Cuneiform RUNE 14

アルバム2作目に1作目との中間に造られたカセット作（30分）を加えた再発。1作目では工夫はあるもののどこか煮え切えない出来だったのだが、この二作では仲々に進歩の跡が見られ、随分と引きしまった音造りになっており、特にチェンバー系のファンにはかなりの好評を得られるのではないのだろうか。もっとも5年前の録音でハイテク機材を駆使した分、今聴くと音色的な不備が若干見られるが、トリオ（key、sax、ds）によるスタジオ・ライヴ録音と言うハンデも考えに入れれば相当にレベルの高い作品だと思う。その後3rdを発表、新作が近く予定されている。 （中西）

 **MIRIODOR** **3é AVERTISSEMENT** CD/Cuneiform RUNE 32　'91年 CDケース前側のインサートの代わりに同じ大きさのビニール袋を入れ、その中に３人のメンバー写真と工具のイラストを切り抜いて封入するというちょっと変わったデザインが印象的なミリドールのサード。シンフォニック・ロックとは相性が今一つのサクソフォーン。サックスを効果的に使った例外的なシンフォニック・ロック・グループの一つがフランスのカルプ・デュアンであるが、本アルバムのサックス・プレイもそれに近い雰囲気を持っている。もっともミリオドールは所謂シンフォニック・ロック・グループではなく、もっと幅広い音楽性を持っている。よく歌うメロディアスなサックスはシンフォニック調だが、チェンバー・ロック風のリズム展開や時としてエトロン・フーを思わすやや実験的な演奏も登場する。(賀川)	 **MOONDOG** **Moondog** CD/CBS MK 44994　'69年/'72年 まるでお伽噺に出て来そうな浮き世離れした盲目の放浪者、ムーンドッグ。本名、ルイス・ハーディン。1916年生まれのれっきとしたアメリカ人ながら、自らのスカンジナヴィアの血に目覚め、'60〜'70年代はヴァイキングの衣装を身にまとい、兜と槍を持ってマンハッタンの街角に現われたという。点字で独学したという作曲の才能を生かし、こつこつと曲を溜め、'69年に発表した１stアルバムと'72年の２ndアルバムを１枚に収録したのがこのCDだ。１stは全編オーケストラ曲で、クラシック、ミニマル・ミュージック、その他名付けがたい音楽が渾然一体となっている。このオーケストラ、よく見るとCBSのおかかえで、ジャズ・ミュージシャンもちらほら。ムーンドッグは現在も元気にヨーロッパを徘徊している。(坂本)
 **MOTOR TOTEMIST GUILD** **Infra Dig** ＬＰ/Rotory Totem RTLP 001　'84年 ５UU'S、THINKING PLAGUE、HAILその他メンバーが入り乱れて収拾がつかない現在のこの周辺だが、この辺が出合う大元は'86年前後にC. O. M. A（California Outside Music Association）を組織する所に始まるようで、現在に関連するメンバーは極一部。バンド自体もむしろジェイムズ・グリグスビーが知り合いのミュージシャンを適宜使ったソロ・プロジェクトと言った感がある。そう言った意味では後の入り乱れる共作からは見えにくい素の部分が見やすいか。不規則なリズムや不響和にRIO系の影響を見てとれるが、よりロック色を抑えた変質した室内楽とでも言うべき音。必要以上に凝りすぎた楽曲からは密室的閉塞感を感じる。一連のグループ／作品中最もシリアス色が強い。(中西)	 **MOTOR TOTEMIST GUILD** **Contact With Veils** ＬＰ/Rotary Totem RTR-LP-005　'86年 ２nd。前作はプライベートの４トラック・スタジオでの演奏に、様々なダビング処理で作られたものだったが本作で初めて本格的なスタジオを利用、器楽アンサンブルを聴かせることに重点を移している。ウッドウィンド、チェロ、キーボードのトリオがベースのサウンドだが、リーダー、Ｊ・グリスビーのクラシック的素養の面のみが前に出ており、なんとも食い足りない作品となってしまっている。とはいえ、これほどにまんま「チェンバー・ミュージック」というアルバムも珍しいので、その筋の方は一聴を。なお本作よりCruel Fredelicでオーネットばりのフリー・ジャズ・ファンクを聴かせているリン・ジョンソンが参加している。(後藤)
 **MOTOR TOTEMIST GUILD** **Shapuno Zoo** ＬＰ/(Ger.)No Man's Land nwl/RTR 8　'88年 折りこみ式全面展開ジャケットでリリースされたこのアルバム、ヴォーカルのＥ・ヘイ等の常連メンバーが顔を揃えている他、今や相棒とも言えるＤ・カーマンも全面参加している。そのこともあってか、やはり室内楽色の強いサウンドながら、初期のスタジオにこもっていたずらに音をひねり回すような密室性がうすれ、もう少し広がった印象がある。依然、アコースティック楽器がほとんどの編成だが、多少、ロック寄りに聴き易くなってはいるか。勿論、凝りまくったサウンドには違いないが、必要以上にやりすぎていた部分が減り、ユーモアも空回りしない。これにシンキング・プラグの若々しさ、５UU'Sの音響感を加えてU・トーテムに発展したのも納得が出来る。(中西)	 **MOTOR TOTEMIST GUILD** **Omaggio A Futi** ＬＰ/Ita. DMMOIOR　'89年 伊リコメンデッド・レコードのAuf Dem Nilから発売された４thアルバム。タイトル通りLuigi Futiに影響された〝再構築理論〟により生み出された作品。既発／未発表の様々の音楽をスタジオでいじくりまわした産物で、特にＢ面全てを占める〝Variations〟のスリリングな展開は、'60年代の企画物インチキ・サイケ・トータルアルバムみたいな幻惑感を出している。３rdと並ぶ傑作で、レーベルの都合からほとんど出回わらなかったのが残念。この作品で活動のピークを迎えたグリスビーだが、以後５UU'Sとの合体等で、まとまった形の本気の作品が出ていないのはおしい。(後藤)



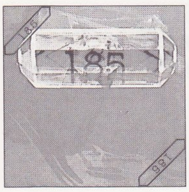
THE MUFFINS
Manna/Mirage
ＬＰ/Random Rador RRR 003　'78年
CD/Wayside Music Archive Series WMAS 4

知る人ぞ知るアメリカン・プログレッシヴ・ロックの傑作として知られる幻のアルバムが遂にCD化された。これでこの作品が多くの人の耳に入るかと思うと、こんなに喜ばしいことはない。聴いてもらえばすぐに判るが、これはカンタベリー・ミュージックの極めて強い影響を受けた最良の音楽の一つだ。歌はないものの、HATFIELD AND THE NORTHのイメージには非常に近いものがある。これが１stアルバムであり、以後３枚のアルバムが発表されている。３、４作目も絶品だ。カンタベリー・ファンは必読！　（坂本）



THE MUFFINS
Air Fiction
ＬＰ/(private press) 番号なし　'79年

一般的にマフィンズの２ndと呼ばれている本作だが、実際の所はちょっと違った事情の元、成立した物だ。どうも海賊盤業者に狙われているらしいと聞いたメンバー自らが千枚限定で片面スタジオ／片面ライヴのオフィシャル・ブートレッグとしてリリースした物で、一部にはオーヴァーダビングがなされている部分もあるが、全体としては曲になる前のアイディアや雑然としたインプロヴィゼーションの断片が収録されている。ここに収められている演奏から「Manna Mirage」や「185」の姿を想像するのは不可能だろう。そう言った意味ではよほどのファンでないと、と言った内容だが、Ｂ面ラストにおいての取りとめのない演奏がいつの間にか１st一曲目となり圧倒的に盛り上る様は見事。聴いていて唖然とさせられる。　（中西）



THE MUFFINS
185
ＬＰ/Random Radar RRR-010　'81年

米国におけるカンタベリー・サウンドの、最良のサンプルであり最重要アーチスト。本作の録音でバンドは解散したと思われ、「Open City」はバンド解散後に過去の音源を寄せ集めてリリースしたもの。事実「Open City」の中で一番新しい音源の半年あとに本作は録音されている。つまりバンドとしては最後期、最も完成度は高い。録音は当時アメリカに渡っていたフレッド・フリスによるもの、半分ぐらいゲスト参加もしている。内容はまったくもって素晴しいの一言、今のアメリカの面白い音楽の半分以上は彼等の影響があるといっても言い過ぎではないかも。残念なのは録音があまり良くなくクリアーさに欠けること。まともな形での再発売と、早すぎたこのバンドの再結成を心から望む。　（伊藤）



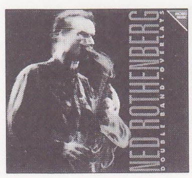
THE MUFFINS
Open City
ＬＰ/Cuneiform RUNE 5　'85年
CD/Cuneiform 55010

元々は「Manna Mirage」期のライヴを中心にフレッド・フリス「Gravity」のアウト・テイクを加えた初期未発表録音集と言った性格の強いアルバムだったがCD化の際、ラスト・アルバム「185」レコーディング・セッション時の曲を６曲加え、バンドの活動歴のほとんどをカヴァーする形の選曲となった。特にこの（既発一曲を含めた）「185」時の勢いはすさまじく、一発録りのスタジオ・セッションにもかかわらず、本番をも上回るような集中力と気迫で一気に通す。初期はカンタベリー系ジャズ・ロック・グループだった彼等がRIO系の影響も受けつつ独自に発展させていったサウンドがどれ程の物にまでなったかを如実に示す音源。未発表集とは言え、バンドの全経歴を一度に見渡せ、入門作にも向くクオリティ。　（中西）



THE MUFFINS
Chronometers
CD/Cuneiform 55007　'93年

1982年に解散したアメリカのバンド、THE MUFFINSの新作として発売告知されていたこのアルバムの正体は未発表音源だった。しかしそれが何と１stより3年も古いオリジナル・メンバーによる全73分もの大作とは、おそれいる。思わず「生きててよかった」を連発したくなる。当時リーダーのデヴィッド・ニューハウス（key）はILLEGAL ALIENSとあうバンドも率いていて、当初そちらの方がメインだったのではないかと推測されていたのだが、いやいやそんなことはない。これはたとえれば、AREAの１stが解散10年後にやっと発表されたようなもので、どうして今まで陽の目を見られなかったのかが納得できない。CD化に際してのリミックスをキット・ワトキンスが行なっているというのも驚きのひとつ。　（坂本）



NED ROTHENBERG DOUBLE BAND
Overlays
CD/Moers Music 02074 CD　'91年

エリオット・シャープ、サム・ベネットとのトリオ、SEMANTICS、ロバート・ディック、J・D・パーランとのトリオ、NEW WINDS、あるいはスティーヴ・レイシー、ロイ・ネイザンソン、エリック・スライヒムとのサックス・カルテット、ANTONYMS１など、ネッド・ローゼンバーグの名前は面白いプロジェクトにしばしば登場する。アヴァンギャルド・シーンにあっては高度のジャズを修得しているサックス奏者であり、このリーダー・アルバムではダブル・トリオで熱いジャズ・ロックを繰り広げる。トーマス・チェイピン（sax）、ジェローム・ハリス（b、g）、カーミット・ドリスコール（b）、ビリー・マーティン（d）、アダム・ルドルフ（perc）との美味し過ぎるアンサンブルはオーネット・コールマンの正当な嫡子たり得る。　（坂本）



NELS CLINE TRIO
Silencer
CD/(Ger.) Enja R2 79768　'92年

オレゴン、シャドウファクスに似たような端整なアコースティック・アンサンブルQUARTET MUSICでの活動を経たネルス・クラインは'88年に１stソロ「Angelica」を発表する。これはQUARTET MUSIC時代の仲間にティム・バーンを加える等して、やはりアコースティック楽器を中心としたやや地味な感触のアルバムだったが、DARKのベーシストマーク・ロンドン・スミス等を加えてのエレキ・ギター・トリオ編成による本作では大きな飛躍を確信させる。ディレイやヴォリユーム奏法による微妙なニュアンス、息の合ったコンビネーション、更には時折見せる激情と瞬発力を秘めたハードなプレイはD.トーン等にも通じる物。今後いつ一線に浮上してもおかしくない存在。
（中西）



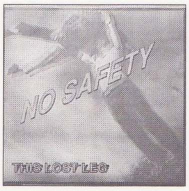
NICK DIDKOVSKY
Now I Do This
L P/Punos Music CX-887　'82年

ドクター・ナーヴのリーダーN. ディドコフスキーがグループ結成以前に自主製作した唯一のソロ・アルバム。プリペアド・ギターを中心とした曲からは明らかにFrith「Guitar Solos」の影響が聴き取れる。しかしミュージック・コンクレートの手法も使われ、既にインプロヴァイザーとしてよりも構成的なコンポーサーとしての資質をより強く感じさせる作品となっている。そうしたスタジオ・ワークの側面は同じコネチカットで活動していた〝キング・オブ・アヴァンギャルド〞C. W. Vrtacek（本作にも謝意が記されている）との共同作業で発展させたものだろう。ディドコフスキーは本作後、活動の中心をN. Y. に移し、G. Veles周辺のエンジニアなどしつつグループ結成に至る。
（後藤）



NICKY SKOPELITIS
Ekstasis
CD/Island 314-514 518-2　'93年

ニッキー・スコペリティスはCURLEWのオリジナル・メンバーとして10代でデビュー。ラズウェルに気に入られ、ヒップ・ホップにまで付き合った、シーンの表から裏まで知り尽くしているギタリストだ。ずっと脇役で通して来たが、既に何枚かソロ・アルバムもリリースしている。これは彼の最新作だが、ご覧の通り、国籍入り乱れての豪華なミュージジシャン達が勢揃い。ワールド・ミュージックにハウスをまぶしてアヴァンギャルド・ジャズ・ロックに仕立て上げた狡猾な音楽。J・リーベツァイトを引っ張り出したのは大正解。
（坂本）



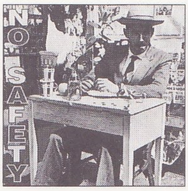
NO SAFETY
This Lost Leg
L P/(Swi.)Rec Rec Music RecRec 25
'89年

音色のザラザラとしたラフな手触り、不機嫌に吐き捨てるような（あるいは沈み込んだ）ヴォーカル、接合面をことさらに見せつける凹凸だらけのアレンジ（ギターとキーボードのおそらくは意図された音色の不整合、肉厚にうねるベースと突き放したように冷淡なドラムスの対比、くぐもった声の熱気とサンプリング音響の冷ややかさ）、強迫的いらだちを（対象をそれと名指し得ぬままに）書き付けた歌詞……完全即興部分を含め、洗練を遂げた次作「スピル」にはもはや聴くことのできない荒々しくもローテクな生々しさが、本作にはいっぱいに詰まっている。なおほとんどの曲がグループ全員（上から５名）の共作であるのも本作の特長である。
（福島）



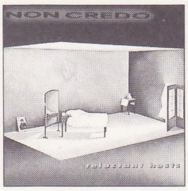
NO SAFETY
Spill
CD/(Swi.)Rec Rec Music RecDec 45
'92年

解散してしまった現在、振り返ってみるとNO SAFETYがいかに重要なバンドだったかがこれまで以上によく判る。何となくがさつなイメージがあったのは事実だが、こんなにカッコいいアヴァンギャルド・ロック・バンドは滅多にあるものじゃない。とりわけこの２ndアルバムは必聴作。ここでのジーナは主にキーボードを演奏しており、CARBONでのプレイとは全く違ったアプローチを行なっている。おそらくこれは彼女の持っているポップ・センスを反映しているのだろう。ツイン・ギターとキーボードの絡みが実に魅力的だ。このバンドの音楽性の多くはもうひとりのリーダー、クリス・コクランに負う所も大きそうだ。今からでもいいから聴くべし。（坂本）



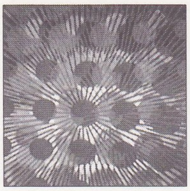
NO SAFETY
Live At The Knitting Factory
CD/Knitting Factory Works KFW 148
'93年

NO SAFETY初ライヴ・アルバムはほどなく彼らの最終アルバムになってしまった。'93年７月にニッティング・ファクトリーで行なわれたライヴを収録している。前作「Spill」のレコーディングから１年半を経過していることもあって、殆どが新曲というレパトリーだが、終盤でV-EFFECTやSKELETON CREWのナンバーが飛び出す嬉しいサーヴィス。ライヴだからあらっぽさは否定できないが、それらが彼らの魅力にもなっているし、とにかくカッコいい。メンバー各人がそれぞれ別の活動を並行していたことが音楽の幅を自然に広げていたのと裏腹に、バンドとしての活動を推進する妨げとなってしまったのは何とも残念。別の形の落とし前を期待したい。
（坂本）



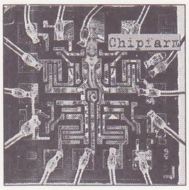
NON CREDO
Reluctant Hosts
LP/No Man's Land NML8814　'88年

レーモン・ルーセルの詩、韓国系女性ヴォーカル、映画音楽の剽窃など極めてスノビッシュでビザールな音楽を生みだしていたカリフォルニアのニューウェーブ・バンド「FIBONACCIS」のパーカッショニストが結成したデュオの1st。女性ヴォーカルをメインにしたキャバレー・ミュージック風の世界はFIBONACCISを正しく継承しているが、よりヨーロッパ的色合いを深めている。'95年発表の2nd「Happy Wretched Family」もよりシリアスな傑作だが、未完成な分、お気楽なかろみ滥う本作を推す。それにしても、こいつら絶対アフター・ディナーのファンだろうな。（後藤）



OPTICAL＊8
Optical＊8
CD/ゴッド・マウンテン GMCD-001 '93年

ホッピー神山、マーク・リボー、セバスチャン・スタインバーグ、ダグラス・E.バウン、E.J.ロッドリグース、スティーヴ・エトーというメンバーで、'92年2月にニューヨークで録音された第一作。〝合図〟を出す等の全体の指揮権はホッピー神山が握っているようだが、テープを回しっぱなしにして録音された即興演奏だという。どこかファンキーな部分や、「暗黒の世界」前後の頃のキング・クリムゾンを思わせるところもある気がするけれど、気がついたら音の奥に見える光景が変わっていたという感じの、なめらかな展開が見事である。透明CDケースの特性を生かした、カラフルなスリーヴ・デザインも見逃せない。55分弱4曲入り。（行川）



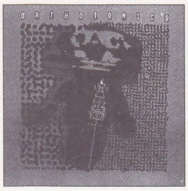
OPTICAL＊8+MELT-BANANA+ELLIOT SHARP+ZEENA PARKINS
Chipfarm
CD/ゴッド・マウンテン GMCD 016 '95年

'95年上旬の来日はレコーディングを兼ねてのことだったE・シャープとZ・パーキンス。この二人＋オプティカル8＋メルト・バナナというたいへんやかましい組合わせがCDになって出た。全体の印象はセッションっぽいが、これはもちろんやり口の近くて違うミュージシャンたちをのびのびと野放しにし、相乗効果で全体をパワー・アップさせる最良の方法。自分たちのやり方を既に持っているバンドは、こうして他者とかかわっていくことで広がっていくのがいいと思う。その時の最低限の了解が取れているからこそ、このとおりコアな凝縮感も出る。（松本）



THE ORDINAIRES
The Ordinaires
LP/Dossier 7509　'85年
CD/Bar/None 7 72632-2

かれこれ10年以上のキャリアを持つバンドだが、あまり他との交流がないため、ちょっと変わり種の印象がある。とは言え、その後マーク・フェルドマン(vln)が加わっているし、リーダー格のカート・ホフマンとフリッツ・ヴァン・オーデンはBAND OF WEEDSでも活動中。ヴァイオリンが2本もいることでお判りだろうが、結構気合いの入ったジャズ・ロック・オーケストラであり、相当の聴き応えがある。ニッティング・ファクトリーのオムニバスに収録されたライヴはかなり癖があったが、本作は安心してお勧めできる。ほかにも作品あり。（坂本）



ORTHOTONICS
Luminos Bipeds
LP/Rift 10　'86年

ドラムのピッピン・バーネット、サックスのダニー・フィネイ、キーボード／ギターのレビー・シャープの三人からなるオーソトニックス唯一の作品。前記の編成からも推察が付く通りのスカスカのサウンドで、一本抜けたようなユーモアを漂わせた簡潔さと妙に凝ったリズムが示す骨格にそれぞれのとぼけたヴォーカルが乗るあたり、エトロン・フー・ルルーブランの影響が強い。変拍子まみれの無愛想なサウンドながらもどこかポップな味がある。メンバーの内、バーネットは後にカーリュー、NIMALに参加。シャープにもソロが一枚ある。フレッド・フリスのプロデュースによる小品佳作と言った感じの本作、小体ながらも妙な魅力がある。（中西）



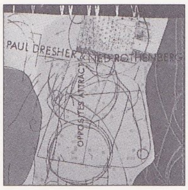
PARANOISE
Start A New Race
CD/Ozone OZ 003　'93年
/ジムコ JICK-89233

マルチ・プレイヤーのJim Matus、リズム・プロムラミング担当のLloyd Fonoroffを中心とするプロジェクト・グループ、パラノイズの2作目。正式メンバーは他にMicky Drtiz(vo)のみだが毎度ゲストが凄い。A.ジャクソン、P.ジョーンズ、G.ウインド、M.ギブス、D.チェリー等々。その多くは両作品に共通する所からはかなり系統した活動がある物と思われるのだが、実態は不明。音の傾向は両作ともファンク、HM等をも加味したジャズ・ロック系。いわゆるNYらしい音。バランスは割合に良い。多少コミカルなヴォーカルをメインにしているのが際物めいた印象を与えるし、ゲストに個性派が多い分、セッション的にも感じるのが損だが、普通から離れたポップ・ロックとしての水準は高い。（中西）



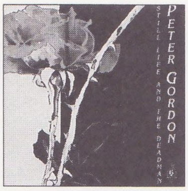
PAUL DRESHER
Dark Blue Circumstance
CD/New Albion NA053CD '93年

ポール・ドレッシャーは西海岸で活動しているミニマル系の代表的アーティストだ。と言っても自身はエレクトリック・ギタリストで、ギター・プレイはロックそのもの。リンデ・エカート(vo)との共作は殆どロック・オペラだし、ネッド・ローゼンバーグ(sax、etc.)とのデュオ・アルバム「Opposites Attract」('91)ではニューヨークの名だたる連中と斬新なジャズ・ロックを繰り広げている。本作は彼の作曲家としての顔が一番よく見える好アルバムだ。ドレッシャーの音楽を聴くならまずこのアルバムから。'93年10月にポール・ドレッシャー・アンサンブルとして来日した時には元CARTOONのクレイグ・フライ(vln)やフィリップ・アーバーグ(key)、ポール・ハンソン(bsn)といったメンバーがいた。 (坂本)



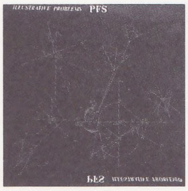
PAUL DRESHER & NED ROTHENBERG
Opposites Attract
CD/New World 80411-2 '91年

ノンブレス、重音、キー・パーカッションといった特種奏法をモジュールとして、ポリリズミックな多重螺旋を組み上げる一方で、尺八に学び、幽玄な広がりや切り立った風景を描き出すローゼンバーグ（要注目！）と、カール・ストーンらとともにポスト・ミニマリストと称され、自ら演奏した音をマルチ・ディレイによって積層化し、複雑なテクスチャーへ織り成していくドレッシャー。ここではテープ・ループが、諸要素の交錯を浮かび上がらせる枠組の役割を務めており、それゆえ全体の印象はポロックにも似て極めてポップである。 (福島)



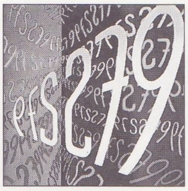
PETER GORDON
Still Life And The Deadman
CD/Robi Droli 129805017 2 '93年

ピーター・ゴードンはLOVE OF LIFE ORCHESTRAへの参加で知られるサックス奏者だ（同姓同名の別人と思われるフレンチ・ホルン奏者がジャズ・シーンで活躍しているので混乱しないように)。「Star Jaws」('77)というチープなジャズ・ロック・サウンドを盛り込んだソロ・アルバムも出ていた。久々のアルバムと思われる本作は本気の室内楽作品集だ。オランダで録音されたエレクトロ・アコースティック・フィルハーモニア演奏の小曲〝Awareness〟。イギリスでバラネスク弦楽四重奏団によって演奏された22のパートから成る〝De Dode〟。そして最後に東京で録音されたゴードン自身のサックスとパースリー弦楽五重奏団による〝Rembrandt Suite〟の３曲が収録されている。ゴードンの存在証明となる１枚。 (坂本)



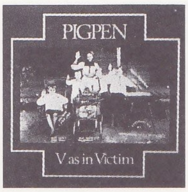
PFS
Illustrative Problems
LP/Cuneiform RUNE 6 '86年

Scott Braziel、Herb Diamant、Gary Parraの三名からなるグループ。全員が参加していたCARTOONの延長型と見なしていいだろう。音楽性にも大幅な変化はなく、わざわざ新グループ名を付けた意図も良く判らない。キング・クリムゾン→RIOと言った方向性をプログレッシヴ・ロック的に洗練させた感があるCARTOONが後期にて行ないつつあったよりバラけた構築性と言う手法を発展させた作風。途方もなく復雑に組み上げられた楽曲を断片化し、コラージュしたような楽曲が並ぶ。それはひどく理性的であると同時に不安感を与える。所々はさみ込まれるユーモラスなパートもどこか乾いた感触を持つ。アメリカのポストRIO世代において早くからオリジナリティを得たグループの一つと言える。 (中西)



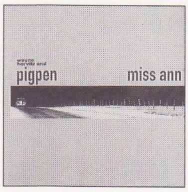
PFS
279
CD/Cuneiform RUNE 22 '90年

鍵盤楽器／管楽器／打楽器、ライヴでは全員テープやノイズも使うという変則トリオによる２枚目。本作では二人の弦楽器がゲスト参加（ヴァイオリンとチェロ）しており、変則的でありながら編成上での奇抜さはあまり目立たない。'90年代に入ってからDOCTER NERVEやX-LEGGED SALLYに代表されるような強力なリズム・セクションを伴った疾走型のジャズ・ロックが多く活動しているが、このバンドはその編成の特異性を活かしてかややクールに、静謐な部分を使い（それでも強力な部分を散らしながら）室内楽的なアンサンブルを前面に出してきている。前作から比べても格段の進歩。チェンバー・ファンは是非一聴を。 (伊藤)



PIGPEN
V As In Victim
CD/ディスク・ユニオン AVAN 027 '94年

ウェイン・ホーヴィッツ率いるPIGPEN。ホーヴィッツは大変優れたコンポーザーだが、ちょっと聴いただけでは判りにくい音楽を手掛けることが多く、些か注目度が低いきらいがある。そんな中でこのPIGPENはロックとジャズを好き勝手に料理して非常にスリリングな音楽を生み出しており、本誌読者には強くアピールしそうだ。ベーシストのフレッド・シャルノーはエイミー・デニオとTONE DOGSを結成していたミュージシャンだ。殆どギターと化したキーボードが聴ける④、実はJ・ザヴィヌルの隠れファンであることを自白した⑥等、プレイヤー、ホーヴィッツの知られざる一面もたっぷりと聴けて、楽しい。あれっ、これはフリゼールそっくりな曲だぞ、と思ったら、カヴァーそのものだった⑧も面白し。 (坂本)



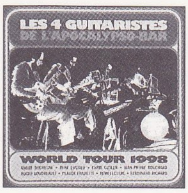
PIGPEN
Miss Ann
CD/Tim Kerr tk93cd069 '94年

PIGPENはウェイン・ホーヴィッツ(key)とフレッド・シャルノー(b)が手を組んだ驚異のグループなのだが、誰もシャルノーを知らないので最近まで無視されていた不遇のバンドだ。「Halfrack」('92)、「V As In Victim」('94)に続く3rdアルバムであり（但し「Halfrack」はミニ・アルバム）、ますますロック色が増して来ている。今はまだ無名のブリガン・クラウス(sax)とマイク・ストーン(d)の腕前も上がる一方で、頼もしい限りのバンドになって来た。リーダーは飽くまでホーヴィッツであり、これまでもほぼ全曲がホーヴィッツの作曲だったことを考えれば、ホーヴィッツがどういうミュージシャンなのかは念を押すまでもない。今後CAVEMAN SHOESTOREの活動が活発になるとPIGPENはどうなるのかが心配だ。　（坂本）



THE POLKAHOLICS (Canada)
Zap The Universe
LP/Utility Grade UG2 '85年

トロンボーンをフィーチャーしたカナダ・トロントのバンドの唯一のアルバム。ニュー・ウェーヴ・サウンドを基調に変拍子がビシバシ入るのはイギリスのワーク周辺のグループに通じる（実際、当時ワークとともにヨーロッパ・ツアーを行っている）。'80年代のオルタナティヴ・ミュージックの奇妙な展開が世界各地で実を結んでいた実証例のひとつ。本作前に12″を発表。グループはこの後、よりゴチック的サウンドのバンド「Our Sir Francisto To The Sea」に発展、解散。リーダーのD. Keyesはアシッド・フォーク色の強いソロ・ワークを現在もリリースし続けている。　（後藤）



LES 4 GUITARISTS DE L' APOCALYPSO-BAR (Canada)
World Tour 1998
LP/Ambiances Maguetiques AM 010/AM014 '87年/'89年
CD/RéR GQ1

コンヴェンタム以後、比較的地味な活動をしていた各メンバーが再び集まり、組んだグループ。クリス・カトラーの全面参加も話題を呼んだが、それよりもE. ギター・カルテットと言う大胆な編成に驚かされた。見た目、やはり際物めいて見える編成だが、音色、アンサンブルにこだわった曲造りは微妙な表現から鋭く走る場面まで自在な物。後のデュシェーヌ、リュシェの活動のみならずこのスタイルの影響はかなり大きい物と思われる。'80年代後半のレコメン系グループとしてはオリジナル、クオリティ共に最重要な物の一つ。尚CDはグループの2枚のアルバムをまとめた物だが、その際2ndからF. フリスの2曲（フリスの「Quurtets」収録曲の原型）及びバルトークの四重奏曲がカットされている。　（中西）



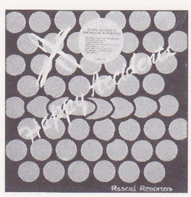
RAF
Ode To Tractor
CD/(Swe.)Day Eight DEMCD 032 '92年

一応のユニット名はつけられているが全曲エルボーグのペンによる（半数は共作だが）所を見ると中心を成すのはエルボーグなのだろう。とは言えJ. ヨハンソンのカラーも随分と強い。全体にコラージュ的な曲を中心に一部セッション風ながら通してのトータリティは強い。総体的な印象はヘヴィで荒涼としたもの。疾走パートでも冷徹な響きが背後に有る。本人の演奏自体は控え目な物なのだがトータルな音風景の喚起力の強さを考えれば、そんな事は問題にならない。厳然とした響きのなす力強さに心魅かれる一枚。　（中西）



RASCAL REPORTERS
Ridin' On A Bummer
LP/Hebbardesque HR 004 '84年

S. GoreとS. Kretzmerのマルチ・プレイヤーである2人を中心に豪華なゲストが周りを固めたという編成の1st。知名度最低、内容最高という、持っている奴は思わず胸張って自慢したくなるような作品。ゲストがF. Frith、T. Hodgkinson、D. Newhouseその他数名ということでピクッときたら正解、THE MUFFINSと並ぶアメリカン・カンタベリー・サウンドの最良のサンプル。丁度HATFIELD & THE NORTHと同じ様な捉え方が出来、やや実験色を強めに出しながらも耳に優しく一気に聞かせてしまう本作、ポップ色をより強めに出しながらも完成度を一気に高めた次作と、まったく甲乙付け難い。入手難なのが唯一の欠点、次作と共にいち早いCD化を望む。　（伊藤）



THE RASCAL REPORTERS
Happy Accidents
LP/Hebbardesque HR 005 '88年

まず、豪華なゲストの顔ぶれに目を引かれるところであるが、This album contains no improvisationのクレジットにある通り各人個性を発揮したプレイとは、言い難い。まるで子供番組の主題歌の様なキャッチーなメロディーと暗黒チェンバー的なフレーズが交錯し、先のメロディーが、楽器とアレンジを変えて繰り返される様は正しくレコメン。'85〜'87年の録音という時代故か、チープなキーボードの音色が気にならないでもないが、今となっては、モンド的な味わいか。LP時代のB面の2曲の方がよりレコメン度合は高い。今まで殆んど人に知られていなかったと思われるが、近日CD化される（された？）との事なのでより多くのリスナーの耳に届く事を望む。
（森本）

REBBY SHARP
In One Mouth And Out The Other
CD/Shimmy E 9026 '90年



フレッド・フリスがアルバム・プロデュースを担当していた、エトロン・フー・ライクなNYのトリオ、ザ・オーソトニクスの紅一点、レビー・シャープの今のところ唯一のソロ作は、奇才クレイマーの主宰するシミー・ディスクからのリリース（他のメンバーは、ピッピン・バーネットとダニー・フィニー）。素朴な味わいを湛えた、フォーク風の楽曲が並んでいるが、演奏しているのはクレイマーを初め、フリス、トム・コラといった面々。シャープ嬢のマンドリン、バンジョーも実に効果的だ。オーソトニクスの残りの２人に捧げられている。（佐々木）

FRED FRITH/RENÉ LUSSIER
Nous Autres
L P/Victo 01 '88年
CD/Victo VICTOcd 01



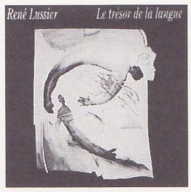
記念すべきVictoレーベル第１弾となった本作は、'86年のヴィクトリアヴィル・フェスティヴァルでのフレッド・フリスとルネ・リュシエのデュオ・ステージを収録したものだ（CD化に際し、'92年のスタジオ演奏が４曲追加されている）。デュオとは言いつつ、曲によって個性派のゲストが参加しているので、演奏自体はSKELETON CREWほどアクロバティックではなく、その分、曲の面白さが素直に伝わって来る。どちらかと言えば、主役はフリスだが、フリスとリュシエの感性は殆ど同一と言っていいほど相性がいい。（坂本）

RENÉ LUSSIER (Canada)
Fin Du Travail
L P/(private press)



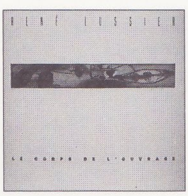
アンビアンス・マニェティーク旗揚げ以前に個人名義でリリースされたリュシエの１stソロ・アルバム。とはいえジャケットのクレジットによると、これも実質的には…とりわけ演奏面は——J・ドゥロームとのデュオ作といっていい。全７曲収録。ホーンとピアノによる軽快なマーチが途中でフリーになる冒頭の曲から、後期コンヴェンタムがハードロック化したかのような作品、マンドリンの爪弾き、呪術的なパーカッション、オカリナの調べ、そして各種ギターの魅惑的な響き……この時点で既にリュシエ的な世界は確立していたことがわかる。出発点にして完成。（佐々木）

RENÉ LUSSIER
Le Trésor De La Langue
CD/Ambiances Magnétiques AM 015 CD



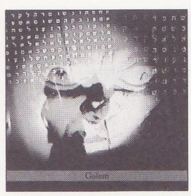
街頭インタビューによるケベック・フランス語を溢れさせながら進む本作は、一聴ハイナー・ゲッベルスのラジオ劇を思わせるが、ゲッベルスとは異なり、ここで人々のパロールは決してテクスト＝機械へと組み替えられはしない。むしろリュシエはフランス語に寄り添い、そこに身を埋めさえしながら、何気ない言い回しの中から、特徴あるフレーズやリズム、抑揚を音楽へと汲み上げようとする。ここで素晴らしいのは、そうした作業がつまらぬ自己確認＝中心化ではなく、むしろ複数性/多声性へ向けた多中心化の契機のなっている点である。（福島）

RENÉ LUSSIER
Le Corps De L'Ouvrage
CD/Ambiances Magnétiques AM 029 CD '94年



既に重要人物として読者にもしっかりとマークされたであろうルネ・リュシエの待望の新作は、管を中心とした12人編成のアンサンブル的作品だ。緻密に書き込まれたアレンジの所為もあって、どこか現代音楽風ではあるが、リュシエのギターとリズム・セクションは思いきりロックしていて、ほれぼれするほど決まっている。ほとんどが管なので馴染みのないミュージシャンが並んでいるが、ジャン・ドゥロームやピエール・カルティエの名前も見える。ピエール・タンゲイ（d. perc）の逸材ぶりには改めて感心した。必聴。（坂本）

RICHARD TEITELBAUM
Golem
CD/Tzadik TZ 7105 '95年



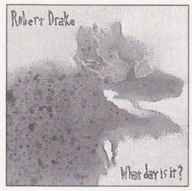
元〝M. E. V.〟メンバーのエレクトロニクス奏者。巨大なムーグ・シンセサイザーを操っての、アンソニー・ブラクストンや富樫雅彦との共演を経て、現在は張り巡らされたインタラクティヴ・ネットワークの中に、共演者の即興やロボットによる演奏をも取り込んだ「電子環境」そのものの「演奏」を進めている（『Concert Grosso』『The Sea Between』等参照）。本作は「大悪神」さながらに泥人形が動き出すゴーレム伝説を題材としたマルチ・メディア・パフォーマンスの記録であり、喉を震わせる詠唱ととめどもなく溢れ出る異言を絶え間無く往復するデヴィッド・モスとシェリー・ハーシュのヴォイス・パフォーマンスを軸に、器楽（即興）演奏とサンプリング音響が縦横に織り上げる濃密な古代世界。（福島）

RINDE ECKERT
Finding My Way Home
CD/(Jap.) DIW859 '92年



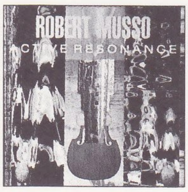
リンデ・エカートというスキンヘッドのヴォーカリストは、１度聴いたら忘れられない声をしている。何とベルカント唱法でロックを朗々と歌ってしまうのだ。顔に似合わぬ優しいまろやかな声で、多分初めて聴いたリスナーはきっと鳥肌を立ててしまうだろうが、馴れというのは恐ろしい、２回目からはその違和感が快感になってしまうのだ。西海岸のアヴァンギャルド系ミュージシャンがバックをとる中、圧倒的に光っているのがニューヨークからただひとり参加のビル・フリゼール(g)。フリゼール目当てでこれを買って、のけぞりながらいつの間にかエカートに中毒した患者が何人いることだろう。そうなったらもう後はポール・ドレッシャーとの共作「Slow Fire」('92)に手を出すしかない。 (坂本)

ROBERT DRAKE
What Day Is It?
CD/Creosote CR 011 '93年



5UU'S、HAIL、THINKING PLAGUE、THE(EC)NUDES等で活躍するロバート・ドレイク、その彼のソロ・アルバムは前記グループともまた違った一枚だ。やはり様々なグループで活躍するデヴィッド・カーマンの助力を得ている他は、ドレイクが全ての楽器をこなし、マルチ・プレイヤーとしての優秀さと、それ以上にサウンド/音響面での冴えを見せている。大体においてニューロティックなジョン・アンダーソンと言った彼のヴォーカルとギター類（多くは重ねられている）がサウンドの中心で、特に録音がアレンジを含めたギター・ワークによる音の空間の広がりと気迫を込めたようなドラム音を交えて時としてドギモを抜く様な曲展開、どこか病み加減の心像の喚起力の強さが、この作品にそれのみに留まらないインパクトを与えている。 (中西)

ROBERTO MUSSO
Active Resonance
CD/Muworks MUW 1008 '92年



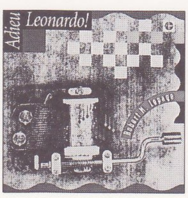
ロバート・ムッソと言えば、ビル・ラズウェルを陰で支えるエンジニアとしてつとに知られるが、彼が主催する自主レーベル、Muworksから彼の率いるMACHINE GUNやソロ・アルバムが次々とリリースされ、実は非凡な才能とセンスに恵まれた音楽家であることが明らかにされつつある。これは「Absolute Music」(1989)に続く２ndソロ、今回はEAST MEETS WESTのカタルピナーが参加していることで判るように、ワールド・ミュージックを意識した音楽だが、ムッソのギターはマンザネラかフリップかというサウンドで迫り、気持ちいい限り。 (坂本)

ROBERT M. LEPAGE (Canada)
La Traversee De La Memoire Morte
CD/Ambiances Magnétiques AM 011 '87年



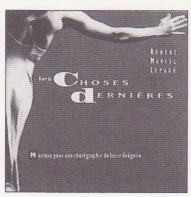
G.シュヌビエにも通じる飄々としたプレイが持ち味の管楽器奏者の１stソロ作。次作でははっきりと開花することになる彼のコンポーザーとしての才能の萌芽ともいうべき、エレガントな作品集となっている。けっして厚いサウンドではなく、どちらかといえば簡素な音作りなのだが、曲の展開の仕方など、一筋縄でいかないものを持っている。エレクトロニクス担当のベルナール・ガノンは、ルパージュの片腕といえる人物で、ガノンの方が中心になった新ユニットLA FLORE LAURENTIENNEでも行動を共にしている。 (佐々木)

ROBERT LEPAGE
Adieu Leonardo!
CD/Ambiances Magnétiques AM024CD '92年



ロベール・M・ルパージュの音楽はアンビアンス・マニェティークにあってもとりわけチェンバー・ロック・ファンにアピールする要素が強いように思う。大仰さはないし、特別室内楽への思い入れがあるようでもない。それなのにそう感じるのはルパージュの奏でるクラリネットやサックスと、背景の音との連なり方がどこか似ているのかも知れない。少なくともZNR系のチェンバー・サウンドには通じるものがあるだろう。どちらかと言うと裏方に回ることの多いルパージュだが、本作で間違いなく主役をはれる力量を証明した。ジャン・ドゥローム(fl、sax)やルネ・リュシエ(b、g)の参加は当然と言いつつ、それがこのアルバムの隠し味になっているのは疑いようのない事実だとしても。注目作。 (坂本)

ROBERT MARCEL LEPAGE
Les Choses Dernieres
CD/Ambiances Magnétiques AM035CD '95年

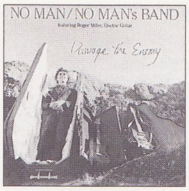


ロベール・M・ルパージュのソロ第３作。リュシ・グレゴワールの舞踏音楽として作曲された弦楽四重奏曲集。演奏はカメレオン弦楽四重奏団で、ルパージュ自身の出番はない。AMにおいて最もチェンバー・サウンドに愛着があると思われるルパージュの本領発揮の意欲作であり、フレッド・フリスの「Quartets」('94)に比較してもいい優れた内容だ。こういうロックと現代音楽の境界作品がどちら側に媚びることもなく当たり前のように登場して来る現在の音楽の在り方は、何と健全なことだろう。対するリスナーはどれくらい健全だろうか。 (坂本)



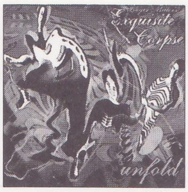
ROGER MILLER/ MAXIMUM ELECTRIC PIANO
The Big Industry
LP/(U. K.) Fundamental Save 54 '87年

バードソングス・オブ・ザ・メソヅィックの創始者、ロジャー・ミラーのソロ活動は結構脈絡がなくて困ってしまうが、大まかに言ってキーボーディストとしての物とギタリストとしての物、2つの路線がある。前者の路線の代表としてバードソングス在籍中の本作が挙げられるだろう。多少のゲストを一部に加えつつ、サンプラーによるジャンク・パーカションとエレクトリック・ピアノ＋ヴォーカルによって造られた作品だが、ディレイ、ディストーションと言ったエフェクトと各種器具によりリプリペアドされたピアノの音色の豊かさ、強烈さは正にマキシマム・グランド・ピアノと呼ぶべき物。バードソングスに通じる曲調ながら響きの強さにより曲が一層際立つ傑作。ヘイワード級のインパクトがある。（中西）



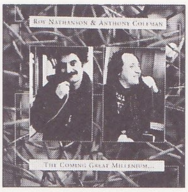
NO MAN/NO MAN'S BAND
Damage The Enemy
CD/New Alliance NAR CD 043 '89年

こちらはギター物の代表しての一枚。多重録音ソロNO MANとインプロヴァイズ・グループのNO MAN'S BANDの2つのプロジェクトによる演奏が収録されている。後者のメンバーを加えて後にバンドNO MANによるアルバム2枚があるなど少々ややこしい。ソロにおける曲調自体はバードソングスにも通じる不規則リズムと精緻なスコアを使用した物だが、主要楽器がギターな分、よりヘヴィでインダストリアルな響きを持つ。後者のグループによる音はよりブラック・ユーモアと暴力性を強調した物で、バードソングスとミッション・オブ・バーマの中間とでも言えば良いか。後のグループNO MANによる作風はやはりヘヴィなトーンを持つようになる。他にも作品は多数ある。（中西）



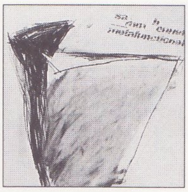
ROGER MILLER'S EXQUISIT CORPSE
Unfold
CD/SST CD 307 '94年

バードソングスの創設者、ロジャー・ミラーのプロジェクト。ガレージ・パンク・バンドと現代音楽を同時にやっていた事がある位に彼の活動には脈略がないのだが、共通する所があるとしたら、何かしら奇妙な感触だろうか。曲調やアルバム構成が妙にプログレッシヴ・ロック的だったりする本作でも持ち味は変わっていないようで、冒頭の疑似中世風の曲を始めとして様々な土地、時代から借りて来たような様式を設定した上で、ヒネリ回す。それも原形を留めておきながらも気色の悪い質感に仕上がる辺り、とにかく面白い。一つ一つの曲はひどく整っているのだが、どこか突き離した感触がある。現実には存在しない出来事を眼の当りにしたような心持ちにさせられる不思議な一枚。（中西）



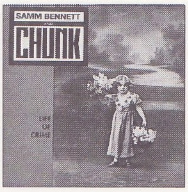
ROY NATHANSON & ANTHONY COLEMAN
The Coming Great Millenium...
CD/Knitting Factory Works KFWCD-119 '92年

JAZZ PASSENGERSのロイ・ネイザンソン(sax)とアンソニー・コールマン(key)がどうしてチームを組むことになったのかは知らないが、その後も2作目を発表しており、息の合ったコンビとしてかなり充実した演奏を聴かせてくれる。次作「Lobster And Friend」('93)がクレイマーでお馴染みのノイズ・ニュー・ジャージーでのスタジオ録音で、曲によってデヴィッド・クラカウアー(clr)らのゲストも迎えているのに対し、本作はまるまるニッティング・ファクトリーでの録音であり、助っ人なし一発勝負の勢いが音に現われている。同様のコンセプトを持ったLES GRANULESと比較してしまうと、音楽のフレクシビリティーで若干不利かも知れないが、思わず比較したくなるような手応えを持ったデュオだ。（坂本）



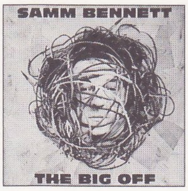
SAMM BENNETT
Metafunctional
LP/(Bel.) Igloo IGL 020 '84年

サム・ベネットの現在の活動は、サード・パースンから歌もののソロまで、極めて多岐に渡っているが、初期にはパーカッションのみの即興演奏を盛んに行っていた。これは彼のファースト・ソロ・アルバムであり、ベルギーの革新的なジャズ・レーベルIGLOOよりリリースされたもの。もともとベネットは民族音楽への造詣が深いミュージャンであり、現在もそのドラミングは西欧的なスタイルから逸脱するベクトルを有しているが、このソロ・パーカッション・アルバムではそのことを明確に確認できる。シンプルだが飽きのこない秀作。（佐々木）



CHUNK
Life Of Crime
CD/徳間ジャパン TKCB-30526 '91年

時折、素晴らしく冴えたポップ・センスを持ち合わせたアヴァンギャルド・ミュージシャンがいる。ニューヨークにもそんな風変わりな才能の持ち主が何人かいて、ローリー・アンダーソンやアート・リンゼイがその代表格だが、このサム・ベネットもなかなかのもの。CHUNKはそんな彼のポップ指向を存分に発揮したバンドで、演奏はこのシーンならではの硬質のサウンドでありながら、ベネットが気持ちよさそうにメロディーを歌い上げる。様々な機会にレコーディングした音源を収録しているが、決しておざなりなアルバムではない。（坂本）



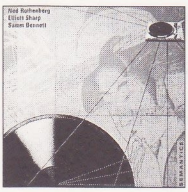
SAMM BENNETT
The Big Off
CD/Knitting Factory 126 '93年
/徳間ジャパン TKCB-70173

昨年リリースされたサム・ベネットのソロ・アルバムはCHUNKの延長線上にある最高のポップ・アルバムとなった。巷ではいくら何でもここまでやったらやり過ぎだ、という風評だったが、CHUNKがいたく気に入っていた私にはもうよだれもののおいしい作品だった。しかも参加者の豪華さと言ったらない。確かに、これを一体誰が聴くのかという問題はある。多分アルバムを手に取るのは一部のアヴァンギャルド・ファンだろう。そんなリスナーがこの音楽を抵抗なく受け入れられるのか。何とか、素直な音楽ファンの耳に届いて欲しいと願うばかり。 (坂本)



SAMM BENNETT'S HISTORY OF THE LAST FIVE MINUTES
Samm Bennett's History Of The Last Five Minutes
CD/Factory Outlet KFW 166 '95年

サム・ベネットのニュー・グループのデビュー作。ポップ・ソング路線の第3作とも言える。ベネットとハーン・ロウのデュオだが、当然レコーディングはオーヴァーダビングを行なっているようだ。ふたりとは言え、曲がシンプルと言うことはなく、ただ全体のアレンジに占めるギターの比重が大きいのは確かで、前作よりはロック色が強い。超豪華メンバーを集めた前作とは好対照だが、ベネットの音楽は相変わらず揺るぎない確信に満ちている。 (坂本)



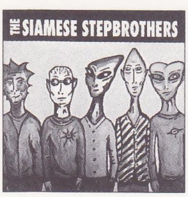
SEMANTICS
Semantics
LP/Rift RIFT 9 '85年

民族音楽に範を得たのであろう呪術的なポリリズムを叩き出すベネット、多楽器とノンブレス、重音、キー・パーカッション等の特殊奏法を駆使して目も綾な多重螺旋を織り上げるローゼンバーグ、鉛色の音塊を敷き詰め、あるいは振りながら引き伸ばして、サウンドにメタリックな輝きと不吉な色どりを付き加えるシャープ。互いによじれ螺旋を描いて緊密に絡まりあいながらも、細やかな息づかいと全体を貫く荒々しいうねりを失わぬ様は見事と言うほかはない。特にベネットは音色の選択を含め、演奏に軽やかさを与えることに気を配っている。 (福島)



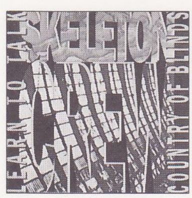
SHOCKABILLY
Live〝. . . Just Beautiful〟
LP/Shimmy 027 '90年

ベイリー的即興とカントリー・プロテスト、ロカビリーとイスラム音楽の間を、過剰な喧噪と諧謔(KKKの扮装で演奏するプリンス!)とともに駆け抜けるチャドバーンのザッパ+サン・ラ+ジャド・フェアとも言うべき偏執/分裂的活動のうち、このショッカビリーは、ロックの根へと沈み込む彼と、後にシミーを設立し横へと拡散していくクレーマーの危ういバランスの上に成立しており、必然的にロックに対して批評的であった。歴史を掻き乱すために古典を採りあげ、その死を速めながら、周囲をドロドロに溶かして鮮やかに輝くもの。 (福島)



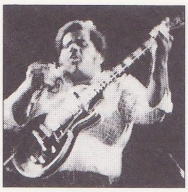
THE SIAMESE STEPBROTHERS
The Siamese Stepbmtthers
CD/Cuneiform RUNE 72 '95年

ヘンリー・カイザー(g)に元MX-80SOUNDのブルース・アンダーソン(g)とデイル・ソフィーア(b)、元グレイトフル・デッドのトム・コンスタンテン(key)、そしてKORBINAT Mのルーカス・リゲティ(ds)というぶっとんだ顔触れの交流は、'92年LAで開催されたUFOコンヴェンションでの出会いに始まった。5人とも'79年6月に地球外へ誘拐された経験があり、足の裏に同じ聖痕を持っているというから、どこまで本気か知らないが、ここまで息の合った鋭い切り込みのジャズ・ロック・プレイを聴かされると、ただならぬ仲であることは信じてもいい。必聴盤。 (坂本)



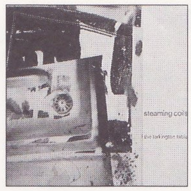
SKELTON CREW
Learn To Talk/The Country Of Blinds
LP/Rec Rec 05、Rec Rec 12
'84年/'86年
CD/Rec Rec Rec Dec 512

F. フリス、T. コラとのデュオによる1st、Z. パーキンスを加えたトリオ編成の2ndの2in1CD。バンド名が示す最底限必要な人数にも満たない人数によるロック・バンドと言う形体は当初MAYDAYとして活動を始めたカルテットから2人が脱退したと言う事故の結果生まれた物であるが、その事故を逆手に取って、絶対に無理な事をあえてやってしまった所がミソ。結果フリス/コラが交互に打楽器を担当する事により分断されるサウンドのぎこちなさが音楽に切迫感を与えている。一方、Z. パーキンスを迎え、多少、人数に余裕の出た2ndではそう言った要素は減り、より完成度の増した作品性の強いもの。この2枚でやるべき事をやり切り解散するが、人脈、衝撃度の大きさ双方での影響は極めて大きい。 (中西)



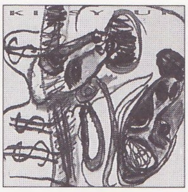
SONNY SHARROCK
Guitar
CD/ジムコ JICK-89182　'86年

'60年代のフリー・ジャズ・シーンから〝元祖・爆音ギター男〟として登場したシャーロックが、長年のファンだったビル・ラズウェルに引っ張り出され、約15年ぶりに発表したリーダー作。ノイズ音のカタストロフィックな攻撃性にウェイトを置いたマテリアルやラスト・イグジットでのプレイとは異なり、同じくインプロヴィゼイションを柱にしつつも極めて情緒的かつ物語り的な清新な音楽展開を見せる。独特のブルージーでメロディアスなフレイジングが泣かせる。隠れた傑作。　（松山）



STEAMING COILS
The Tarkington Tables
LP/Motiv Prod 07　'87年

デヴィッド・クリスマン、ブラッドレー・レイナー両マルチ・プレイヤーからなるグループ。両人の経歴については分からないが、モーター・トーテミスト・ギルドのジェイムス・グリグスビー、リン・ジョンストンが参加している事から例の5UU'S／M.T.G／U.TOTEM系列の乱交人脈にあるグループだろう。やはり、不規則／変則的なリズム・ワークを持ったレコメン系スタイルに近いサウンドだが、インプロヴィゼーション色の強いナンバーとサイケデリックな音響感のヴォーカル曲が交互に出て来る構成でどこかつかみ所がない。むしろ後者の閉塞した遊び感覚に持ち味があり、この路線に集中した方が良ったかも。この時期のこの系列としてはオリジナリティは高い。　（中西）



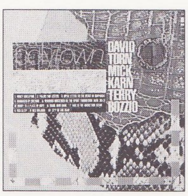
SUSANNE LEWIS
Kissy Fur
CD/Funky Mushroom FM-024　'93年

Hail／Snail（本誌51号参照）で共同作業を進めるアザリアとちょうどすれ違うように、等身大のスザンヌ・ルイスがふらりと姿を現す。HALLの前身というべきCORPSES AS BEDMATESの頃には全体を浸していた混ざりかけのミルクティーのような靄を遠ざけ、逆光の中に彼女の化粧っ気のない横顔が浮かぶ。いまや露わになった細い腕がギターを掻き鳴らし、同じくか細い声が淡々と流れ出す。彼女の多重演奏＋ゲストの編成ながら、スカスカしたチープさや息苦しいような密室性はなく、全くのバンド・サウンド。一聴素っ気ないが聴き込める。　（福島）



SUSSAN DEIHIM &
RICHARD HOROWITZ
Desert Equations : Azax Attra
CD/徳間ジャパン 32 CRD-119　'?年

イラン出身の女性パフォーマー、スーザン・デイヒムと、キーボード奏者、リチャード・ホロヴィッツの共演盤。ホロヴィッツは5年間モロッコに住み、ネイをマスター。ネイ奏者としても引っ張りだこのミュージシャンだが、'83年のジョン・ハッセルの来日に同行したことはあまり知られていない（この時の他のメンバーはJ・A・ディーンとマイケル・ブルック）。これはハイテクを存分に駆使した大変刺激的な音楽だが、デイヒムとホロヴィッツの両者とも背景となる伝統音楽を知悉していることが強靱なバックボーンとなっている。　（坂本）



TERRY BOZZIO/MICK KARN/
DAVID TORN
Polytown
CD/ジムコ JICK 89726　'94年

噂のポリタウンがいよいよ登場した。T・ボジオ（d）、M・カーン（b）、D・トーン（g）のトリオだ。メンバーの顔ぶれは充分に興味深いが、一体どんな音楽になるのか、正直な所、期待と不安が半々だった。しかし、さすがにトーンが自信作と言っていただけのことはある。こういうインプロヴィゼーション・ミュージックは彼らでないと生まれないだろう。確かにこれはトーンの最高傑作だと思う。THE LONELY BEARS以来ボジオも面白いミュージシャンになったものだ。ここからきっと更に面白い音楽が派生して来るに違いない。推薦盤。　（坂本）



THINKING PLAGUE
A Thinking Plague
LP/Endemic Music ER 184　'84年

1st。発表当時あまりにも〝全世界アートベアーズものまね王座決定戦・銀の鳩賞〟的サウンドなんでのけぞったが、よく聴けば曲構成・サウンドともずいぶんとデジタル感覚。後の作品よりも、やり放題の分だけオリジナリティは際立ってるかも。B. Drakeによるハンドメイド・スリーヴの限定盤。なお本作をリリースした自主レーベル〝Endemic〟からは、彼等やデンバーの彼等周辺のアーティストの順列組合せによる多数のユニットのカセット作品をリリースしており、中でもS. Lewisのユニット〝CORPSES AS BEDMATES〟2作品からは、現在の彼女の作風の萌芽が聴きとれる。　（後藤）

THINKING PLAGUE
Moonsongs
LP/Dead Man's Curve DMC 007 '87年



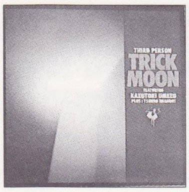
'84年から'86年にかけて制作された2ndアルバム。何故かイギリスからリリースされた。元々の中心、マイク・ジョンソン、ボブ・ドレイクに加え、スザンヌ・ルイスが参加した本作から、現在につながる土台が出来たと見てもいいだろう。この辺の人脈はルイス／ドレイクによるHAILの活動と関係する所か。'70'sプログレシッヴ・ロック→RIO系と向った中心人物2人の好みをそのまま反映させたアート・ベアーズ直系のサウンドながら、どこか深刻にならない唄い回しのルイスにより、コピーではない色が着いている。例えば1曲目におけるシャウトの若々しさ、勢い等にそれははっきりと見てとれる。尚、ラストのタイトル曲はリミックス、オーヴァー・ダヴを加えて次作に再収録されている。（中西）

THINKING PLAGUE
In This Life
CD/RéR tpCD 89年



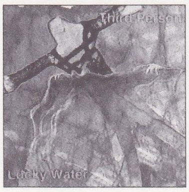
彼らは、これまでに「A Thinking Plague」('84) と「Moonsongs」('87) のオリジナルLPを自主製作リリースし、新旧のナンバーからなるこの初のCDは、見事、クリス・カトラーの目にとまった。グループは、'78年に、マイク・ジョンソンとボブ・ドレイクが、地元デンバーで出会ったことから始まっている。両者とも、ヘンリー・カウ、ジェントル・ジャイアントなどのファンのうえ、中心人物の前者は、ストラヴィンスキー、バルトークなどに親しんでいたと言うのだから、その彼が、「Artは内的自己に開かれた窓のようなものだ」と言う以上、そのとおり、アート・ベアーズに近いサウンドだ。更にスザンヌ・ルイスの全曲に及ぶヴォーカルが、幾分コケティッシュなだけに新鮮だ。洗練された感覚が、実験音楽らしさを遠ざける。（松本）

THIRD PERSON FEATURING KAZUTOKI UMEZU
Trick Moon
CD/Tsuki No Uso TU-001 '90年



ここでサード・パーソンは、新たな出会いを求て、未知の領野を手探りで進む代わりに、気心の知れた梅津を相方に持前の機動力（それこそは彼らの最大の武器だ）を発揮して街頭へと繰り出している。当意即妙の掛け合いや不思議な匂いのあふれる音色、鮮やかな場面転換と素早く役割を取り替えながら繰り出す持ち芸の数々は、さながら大道芸のごとく道行く人の足を止め、耳目を集めて離さないだけの力を持っている。お見事！（福島）

THIRD PERSON
Lucky Water
CD/Knitting Factory Works KFW 156 '95年



THIRD PERSONの久々のアルバムは再度梅津和時とレコーディングとなった。但し、今回はコラとベネットが梅津をニッティング・ファクトリーに呼んでのライヴだ。3人とも決して大ワザは持っていないのだが、小ワザが無限にあって、アイディアは永遠に尽きることがない。これが全部インプロヴィゼーションだと言うのだから、ミュージシャンの息の合い方に恐れ入る。予定調和の対極にある奇跡的な構成美が彼らの真骨頂。（坂本）

CUTLER/DIMUZIO/VRTACEK
Preacher In Naked Chase Guilty
CD/Ponk 15 '95年



クリス・カトラー、トーマス・ディムジオ、C・W・ヴルタチェクの共演と聞いたら思わず期待してしまう音楽があるだろう。ディムジオは5UU'Sでコンピュータ処理を担当したミュージシャンだし、ヴルタチェクはFOREVER EINSTEINだ。でも残念ながらこれはそういう音楽ではない。カトラーはドラムスを叩かないし、ヴルタチェクはなかなかギター・フレーズを弾かない。それはこれが非常に特殊な状況の下で行なわれたライヴだからだ。ブリューゲルやジャクソン・ポロックを題材としたインスタレーションの一部として行なわれた音響イヴェントであり、観客はスピーカーを通して現場の外側でそれを拾う。いわば環境音楽の一種だろう。それにしては刺激の強い音楽だ。聴き流すにはテンションが高過ぎる。（坂本）

TIM BERNE'S CAOS TOTALE
Pace Yourself
CD/Polygram 83442-2 '91年
/ポリドール POCJ-1058



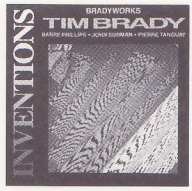
本集成、取り挙げる人数が多い分重要性に比べて取り扱いが小さ過ぎるアーティストが何人といるのだが、このティム・バーンもその一人。ミニアチュール、アルカードと直結する「フラクチャード・フェアリー・テール」も押えて置きたい所。一方の本作、編成的にも、編曲部分即興部分を整理した作風にしても多分にオーソドックスでジャズの伝統を正当的に受け継いでいるが、いわゆるテーマ／ソロ型の類型に堕しない編曲の凝り様、またリズムに対する野心的なアプローチ等は革新的であり、又、多分にアグレッシヴでもある。（中西）



TIM BERNE'S FRACTURED FAIRY TALES
Tim Berne's Fractured Fairy Tales

L P/JMT834 431-1　'89年
CD/JMI 834 431-2

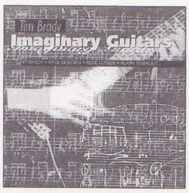
ジョン・ゾーンとも親交の深い現代ジャズ・シーンの重要人物。サックス奏者としてもかなりの物だが、それよりも作／編曲面での能力が際立っている。本作ではM.ドレッサー(cb)、M.フェルドマン(Vln)、H.ロバーツ(Cello)、H.ロバートソン(Tpt)、J.バロン(Ds)を迎え、ミニアチュールとアルカードを合体させたかのような編成。テーマ、ソロ共に多分にジャズの伝統を尊重しながらも尚、冒険的なアレンジを聴かせる。ストリングスの硬質な音色、ふくらみを持った管をバロンの鋭角的なドラミングがつなぎ止める。不安定な造形美と言った趣きのスリルある音。チェンバー・ファンにも向く。以降も重要人脈との活動あり。（中西）



TIM BRADY/BRADYWORKS
Inventions

CD/Just In Time JTR 8433-2 カナダ盤
'91年

カナダの特異なギタリスト、ティム・ブレイディには'94年までに7枚の作品がある。ECM人脈との交流、シリアスな現代音楽的なアプローチ等、幅広い活動を見せるが、常にエレクトリック・ギターにこだわるのは本人によると「ビートルズにより音楽を始めて以来、最も自然な楽器だから」との事だが、既にボーダーを超えた所から始めた、と言った自然さ、身軽さがある。5作目にあたる本作ではB.フィリップス、J.サーマンとの静かなコラボレーションと自らのアンサンブル（他チェロ、key、per、reads）による楽曲からなり、殊にアンサンブルとの精緻ながらも自然な高揚感をもたらす演奏が素晴らしい。カナダの先進的ギタリストとしてR.リュシエやA.デュシェーヌ同様の評価が与えられるべき存在。（中西）



TIM BRADY
Imaginary Guitars

CD/Just In Time JTR 8440-2　'92年

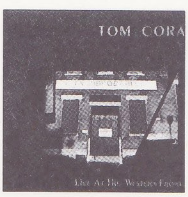
ティム・ブレイディーというカナダのギタリストを正しく理解できるのは僕らだけだろう。ケニー・ホイーラー(flh)やジョン・アバークロンビー(g)との共演で触手を伸ばしたジャズ・ファンは「Inventions」('91)あたりで手に負えなくなり、本作で諦めるだろう。その後には更に現代音楽領域に踏み込んだ「Scenarios」('94)が待っているのだ。ブレイディーの関心はエレクトリック・ギターで新しい音楽を創造することにある。そのためにはライヴ・エレクトロニクスも大胆に採り入れ、作曲の委嘱もいとわない。当然の成り行きとしてニュー・ミュージックに接近する。本作ではまさに音の万華鏡と化したサウンドが行き交い、そんな中でルネ・リュシエの曲までもが奏でられる。絶品と言うほかない。（坂本）



TOM CORA & DAVID MOSS
Cargo Cult Revival

L P/Rift Rift 5　'83年

'80代前半のNY特有のかたかたとチープに薄っぺらく、しゃかしゃかとせわしなく駆け回る音と演奏を聴くことができる（特にモス)。このすばしっこくやせ細った音楽は、全てをご破算にして一から何か始めようとするみずみずしさに溢れている。だがしかし同時に、その後、中毒症的な加速へと向かうことになるひりひりと満たされぬ精神不安（片時もじっとしていられない多動症的身体）も、ここには確かに聴き取れる。（福島）



TOM CORA
Live At Western Front

L P/No Man's Land nml 8710　'87年

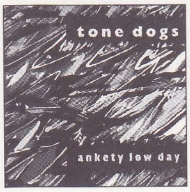
初来日時のセッションなど、即興演奏者としての資質に首を傾げざるを得なかったコラだが、それだけに初ソロたる本作での見事な達成には眼を見張ったものだ。ここで演奏の基底は明らかにフレーズとその変奏にではなくサウンドとその配置構成に置かれている。チェロは全くサウンド・メイカーとして扱われ、切断と軋轢に満ち満ちた、瞬間へと圧縮された速度こそが目指される。深さのない、表層を滑り引っ掻き跳ね回る音楽。（福島）



梅津和時 & TOM CORA
Abandon

CD/Umiushi UU-1001 CD　'89年

NYルーレットでのライヴ録音（'87年)。全編即興デュオだが、驚くほどメロディアスかつリズミック。二人は離れて探り合うことなく、すぐに相手の懐深く飛び込んでがっぷりと組み合い、また自由にそぞろ歩き自在に訪ねあって、飲み食い歌っては話を交わす。ワン・ステージまるまる収録のうち、簡単なモチーフをきっかけにお互い気ままに吹き／弾き散らかしながら、弾む話に思わず興が乗ってしまった風の前半が特にいい。（福島）



TONE DOGS
Ankety Low Day
CD/C/Z Records CZ016 '90年

TONE DOGSは今をときめくエイミー・デニオ(g、b、sax、ds、vo)とフレッド・シャルノー(b、g、key、perc、vo、vln)がシアトルで結成していたトリオだ。ドラムスにマット・キャメロンを加え、更にゲストとしてハンス・ライヒェル(g)、フレッド・フリス(g)、コートニー・ヴォン・ドゥレール(sax)、ボブ・ベイン(g)を迎えての1stアルバムがこの「Ankety Low Day」であり、既にデニオとシャルノーの魅力がいっぱいに詰まっている。デニオにもシャルノーにもアイディアが無尽蔵にあって、しかもそれに相応しいテクニックも持ち合わせているのが彼らの最高の強みだ。それにしてもシャルノーのセンスというのは珍しい彼のキーボード・プレイをも含めて実にカンタベリー・ファンを泣かせてくれる。幸せになれる1枚。 (坂本)



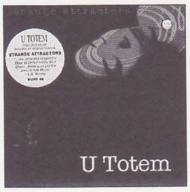
TONE DOGS
The Early Middle Years
CD/SoLEIL MOON RECORDINGS
SOL10 CD '92年

トーン・ドッグス＝エミー・デニオ＆フレッド・シャルノー。2人ともマルチ・インストゥルメンタストであり、リズミックなエクスペリメンタル・ポップ・チューンを演奏する。ドラマーが現サウンドガーデンの人だった、シアトルのCZレーベルから出た1stには、フリス、ハンス・ライヒェルなどがゲスト参加していたが、ラスト・アルバムである本作は、完全なトリオ編成で録られている。解散後のデニオの活躍は知られているが、シャルノーも自らのバンド、ケイブマン・シューストアやW・ホーヴィッツのPIGPEN等で活躍中。 (佐々木)



U TOTEM
U Totem
CD/Cuneiform RUNE 24 '90年

リコメンディッド系は'80年代中頃に入って随分と拡散したが、それでもアート・ベアーズの影を追ったようなバンドもいる。アメリカのリコメンディッド支部とも言えるCuneiformからこのアルバムでデビューしたU TOTEMもその一つ。同期のTHINKING PLAGUEとはメンバーが重複することもあってサウンドが似る。ただしこの10年間で進んだ異種配合による淘汰の跡か、型こそアート・ベアーズ風ながら、重味がなく曲もばらけていて、発散力を感じさせる。過激という程ではないにせよ、アメリカ気質の何でも取り込みジャンク的な身軽さを備えている。管・弦楽器を多用。 (松本)



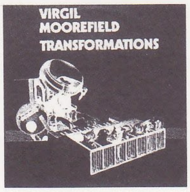
U TOTEM
Strange Attractors
CD/Cuneiform RUNE 66 '94年

ついこの間5 UU'Sの傑作が話題を呼んだばかりだというのに、この一派への注目度は増すばかりだ。5 UU'Sのサンジェイ・クマー(key)とデヴィッド・カーマン(ds)がこちらでも大活躍だが、リーダーは飽くまでも全曲の作詞・作曲を行っているジェイムズ・グリグズビー(g、b、computer)。全体に5 UU'Sに似た印象を受けるのはどうやらクマーのキーボード・プレイのおかげらしい。一貫したストーリーがあって、大量のテキストを斜め読みしても私には内容はちっとも判らないのだが、アメリカや日本、台湾を舞台にタカテクとかマユミとかユーゾーといったキャラクターが登場して情報戦を繰り広げているようだ(確信なし)。当然のように日本語の歌も飛び出す。時間をかけてじっくりと聴き込みたい密度の高い音楽だ。 (坂本)



V. EFFECT
Stop Those Souys
LP/Rift 6 '83年

ドラムス、サックス＋1のトリオ編成による簡素で無愛想なサウンド、急調子で変拍子を多用した曲調と言ったエトロン・フー・ルルーブランに通ずる形態を持つ事、後にカーリューと絡む所等は同じくRiftから出たオーソトニックスを連想させる所だが、あちらがどこか一本抜けたようなポップさ加減を持っていたのに対し、こちらはより性急で攻撃的なタイプのサウンド。全17曲、いづれもあっけに取られたまま終わってしまう。余計な回り道をせずに短刀直入にせまるヤリロが特徴的。フレッド・フリスが「大きな衝撃を受け、影響を受けた」と語るグループ。後にカーリュー、ノー・セイフティのアン・ルペル、カーリユー、ル・バテリーズその他のリック・ブラウンが在籍していた重要グループ。 (中西)



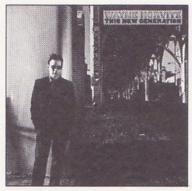
VIRGIL MOOREFIELD
Traceformations
LP/Slipped Disc 1122 '82年

近年Cuneiformより発表された3rdソロで注目を浴びたヴァージル・ムーアフィールドのデビュー作。20分に満たない内容はミニ・アルバムと言った方が良いか。複数のギター、管楽器を迎えた編成は「Distractions～」に共通するが、ここでは一曲を除いて演奏に参加せず、むしろ作曲、指揮に重点が置かれているようだ。本人自身は「大編成の為の作曲の実験みたいな物で余り気に入ってはいない」と語る作品で、確かにドラムのハンマー・ビートやギター・サウンドの壁と言った手法には（彼自身、参加する事の多い）グレン・ブランカのアンサンブルの影響が露骨に出過ぎているものの、あそこまでオブセッションに憑かれず、部分的には現在の彼に通じる密度の中の伸びやかさも感じられる。 (中西)



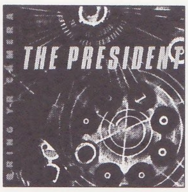
VIRGIL MOOREFIELD
Distractions On The Way To The King's Party
CD/Cuneiform RUNE 56 '94年

これは聴く価値のある音楽だ。主人公のヴァージル・ムーアフィールドはドラマーで、彼が全曲を作編曲している。演奏はギター3本に管4人、ベース、ドラムス各1人という9人編成で、NYアヴァンギャルド・シーンに出没している加藤英樹（b）や、ウィンダム・ヒル所属M-Baseバンド、LOST TRIBEのデヴィッド・ビニー（as）がレギュラー・メンバーで加わっているほか、スティーヴ・ライヒのグループに所属するリチャード・コーエン（sax、cl）もゲスト参加。3本のギターが厚塗りのサウンドを効果的に組み立てる中、変化自在に管が絡んで来る様が異様にカッコいい。プログレッシヴ・ロックが現在のNY音楽と合体し、新しいヴィジョンを提示した注目作。 （坂本）



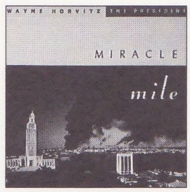
WAYNE HORVITZ
This New Generation
CD/Elektra '87年
/WEAミュージック WMC5-346

Dossierから発表されたウェイン・ホーヴィッツの1stソロ・アルバム「Dinner At Eight」（'86）全曲に、ホーヴィッツ率いるTHE PRESIDENTの1stアルバム「The President」（'87）収録の4曲を追加したのが本アルバムだ。ビル・フリゼール（g）、デイヴ・ホフストラ（b、tuba）、ボビー・プレヴィット（ds、key）、エリオット・シャープ（g、b）、ダグ・ウィーゼルマン（cl、ts、g）、クリス・ブラウン（gazamba、wing）といった面白いミュージシャン達が参加しているが、主役は飽くまでもホーヴィッツ。と言っても、彼はソロ・アルバムでは決してテクニックをひけらかすような演奏をしない。ここではアイディアをスケッチしたかのような淡泊な演奏が一見無表情に紡がれているが、この音楽が不思議と胸を打つ。 （坂本）



THE PRESIDENT
Bring Yr Camera
CD/Elektra Musician '89年
/WEAミュージック WMC5-347

ウェイン・ホーヴィッツ率いるTHE PRESIDENTの2ndアルバム。かなりロック色の強いバンドなので、「This New Generation」よりは遙かに聴き易いだろう。ホーヴィッツがデジタル・キーボードのサウンドに見せるこだわりはもしかすると単に操作性が理由なのかも知れないが、耳に強く残る。①のディストーション・サウンドなど聴くと、感性は殆どプログレッシヴ・ロック（実際、彼は隠れたプログレッシヴ・ロック・ファンらしい）。メンバーはボビー・プレヴィット（ds）、エリオット・シャープ（g）、デイヴ・ホフストラ（b、tuba）、ダグ・ウィーゼルマン（ts）、デイヴ・トロンゾ（slide-g）という大体納得の顔触れ。ホーヴィッツの書く曲はスケールやコードが妙にひねくれていてそこが得も言われぬ快感だ。 （坂本）



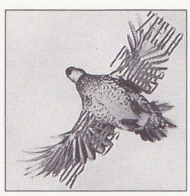
WAYNE HORVITZ & THE PRESIDENT
Miracle Mile
CD/Nonesuch 79278-2 '92年
/ワーナー・ミュージック WPCP-547

ウェイン・ホーヴィッツはちょっと判りにくいミュージシャンだ。大抵は常識外れに目立つミュージシャンのそばにいるものだから、はたからは脇役に映ることが多く、プレイヤーとしての技量もあまり問われることがない。しかし、ソロ作品では妙に凝った部分とシンプルさが同居していて、ちょっと聴いたぐらいではよく判らない音楽を披露する。ところがこれが、よくよく聴くと深く記憶に染み着く内容なのだ。そんな彼の音楽を知る上ではこれが最適のアルバムだ。彼の優れたコンポーザーとしての資質が大変判り易く聴し取れる。 （坂本）



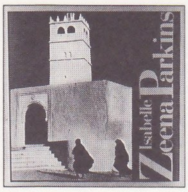
ZEENA PARKINS
Something Out There
LP/No Man's Land nml 8712 '87年

多彩なゲストを迎えてのデュオ集（一部ソロあり）。彼女の比べるもののない特長でありながら、それまで演奏の現場ではコンテクストをズタズタに切断して、後に何も残さない疫病神だったヒステリック・エナジーの爆発（とそのサウンド化である金属片がちぎれ飛ぶような音色）が、ここではジョン・ゾーン「ロクス・ソルス」にも似た濃縮のための焦点を得て、連鎖反応的に演奏の持続を確保するに至っている。彼女の「独立宣言」（ソロ名義第一作）にして、多彩ながら緊張感を失わぬ秀作（生硬という人がいるが、私にはそうは思えない。マークレイとのデュオなど方向性が一致して秀逸）。プロデュース（トム・コラ）の勝利と言うべきか。 （福島）



ZEENA PARKINS
Ursa's Door
CD/Victo cd 018 '92年

「Something Out There」（'87）に続くジーナ・パーキンスのソロ・アルバム第2弾。美人姉妹の弦楽合奏をフィーチャーしている。全2曲。そもそもはバレエ音楽として作曲されたものを音楽として独立させた作品だ。勿論彼女のことだからノイジーなインプロヴィゼーションがふんだんに盛り込まれているのは確かだが、全体の構成は明らかに現代音楽。とは言え、たとえどのような表現形態をとろうとも、その内容がアーティストの個性を正確になぞっているのは、最近の優れたボーダーレス・ミュージシャンに共通の特質だ。多分にチェンバー色を感じさせるので、特にレコメンディッド系のファンにはアピールする作品に違いない。 （坂本）



ZEENA PARKINS
Isabelle
CD/ディスク・ユニオン AVAN 018
'95年

何と美しくしなやかな音楽だろう。「Ursa's Door」をさらに深化させた室内楽作品。いよいよジーナ・パーキンスが作曲家として急浮上して来た。この音楽の語法はどちらかと言えばクラシック音楽の形態に共鳴する部分が大きい。この音楽のもたらす感動の質もクラシック音楽のそれに限りなく類似する。女性探検家イザベル・エバーハートの生涯をテーマにした標題音楽であり、これまでになく明確な構造性を打ち出している。所謂ニュー・ミュージック・シーンにしか生まれ得なかった音楽だ。NYでは更にチェリストとサンプラー奏者を各1名づつ加えた編成でライヴを重ね、今年はヨーロッパ・ツアーも計画しているらしい。最重要作品。　（坂本）



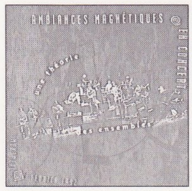
ZERO POP
Glow In The Dank/All The Big Mystics
CD/RecRec ReCDec 49　'92年

ゼロ・ポップはギタリスト、トランペッターのマーク・ハウエル（exカーリュー、現ティムバー、FFGQetc…）と、ホーン奏者ブルーノ・メイエ（exエトロン・フー・ルルーブラン、ブルニフェール）の2人に、ドラマーが加わったトリオ編成のユニット。このCDは、'88年のファースト・アルバムと、'92年のセカンド作を2 in 1にしたもので、現時点での全作品を聴くことができる。曲は2人が交互に書いており、ポップと呼んで何ら差し支えないメロディを、緻密かつ複雑なアレンジに乗せて歌い上げる。隠れた名盤だと思う。　（佐々木）



V.A.
A Random Sampler
LP/R. R. R. 666　'77年

「アメリカのカンタベリー」メリーランド州シルバー・スプリングの音楽シーンをリリースしたランダム・レーダー・レーベルの第1作は、F・Frithとし、Coxhillの未発表ソロ音源も収録したコンピレーション盤である本作だった。THE MUFFINSは「Chronometers」セッションから1曲が収録。他のユニットにも全メンバーが関わっている。いわば大学サークルの記念アルバムみたいなもので、THE MUFFINSのみ後世に名を残すことになったのも単なる偶然の所産かもしれない。Random Radorはこの後、MÄRS EVERYWHERE、HOWEVER等の興味深い作品を含むLP10枚、シングル1枚をリリースし自然消滅したが、その精神はWayside／Cuneiformに受け継がれた。　（後藤）



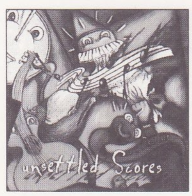
AMBIANCES MAGNÉTIQUES EN CONCERT
Une Théorie Des Ensembles
CD/Ambiances Magnétiques AM 022
CD　'92年

アンビアンス・ミニェティーク創立10周年記念大コンサートのライヴ・ドキュメント。A. M. 所属ミュージシャン総勢15人が出演し、各自のバンドあり、ほぼ全員参加のオーケストラありと、お祭り騒ぎの賑やかさ。色んなミュージシャンがいて、サウンドも決して一様ではないが、総じてレーベルのカラーが非常によく出ている。すべてが聴きものなので、未聴の方は是非一度お聴きいただきたい。才気走った連中ばかりだが、カッコいいロック・サウンドが聴きたい人にはやはりLOCOMOTIVEがお勧めだろう。オーケストラの水準も非常に高い。　（坂本）



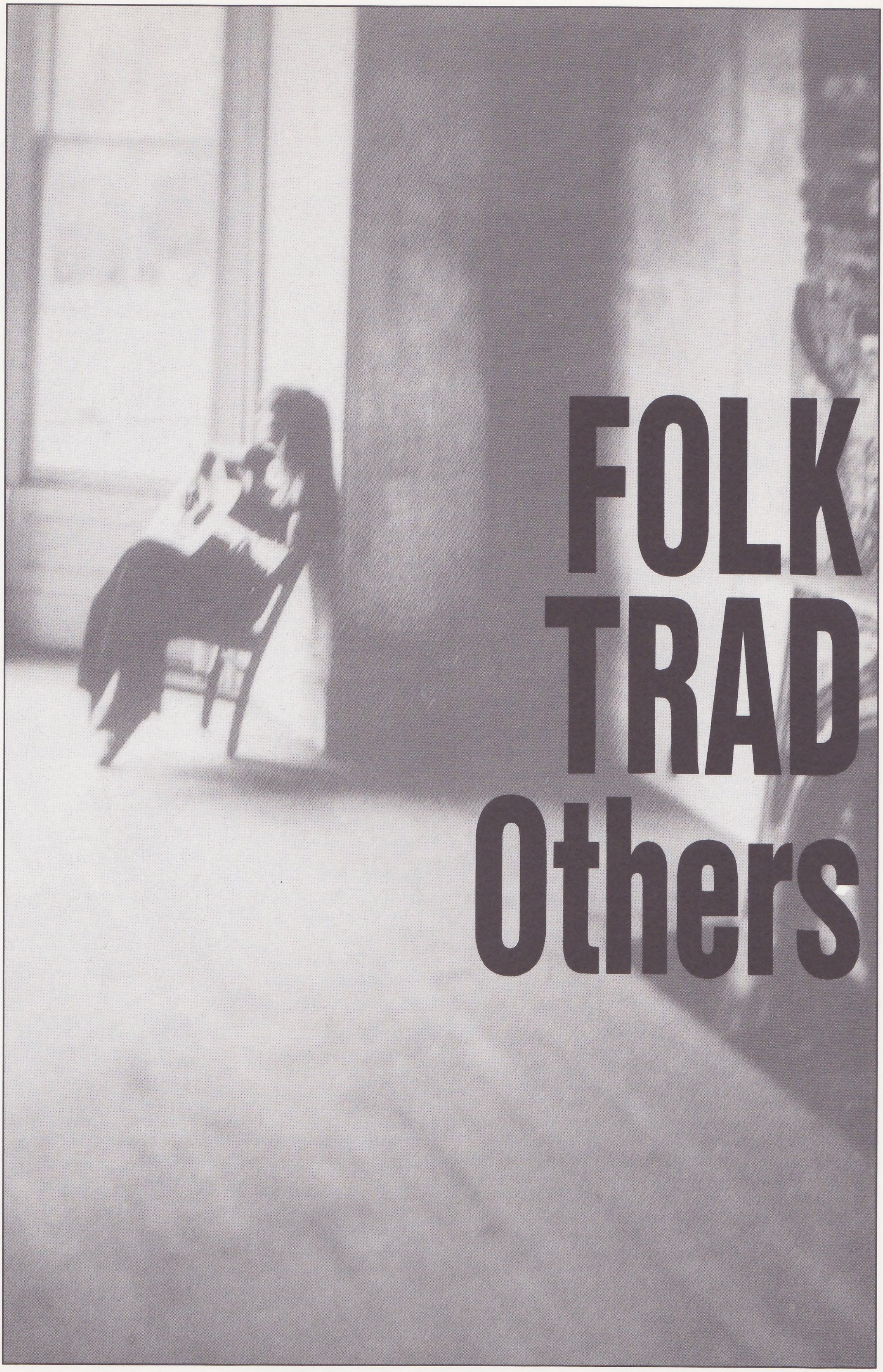
V.A.
Passed Normal Vol.4, Vol.5, Vol.6 & 7
CD/Fot CD ONE, PNS, FOT 2CD's
91年, '92年, '93年

コンピレーション・カセット・テープ・シリーズとして始まった「Passed Normal」だが、Vol. 4にしてCD化を果たす。このシリーズの凄い所は、マイナーなアメリカのミュージシャン達を発掘しながら、HENRY COW周辺のミュージシャン達を巻き込み、Vol. 5ではGONG周辺からヒュー・ホッパー、エルトン・ディーン等のカンタベリー系ミュージシャンまで取り込む。そしてVol. 6 & 7ではロン・ギーシンやアーサー・ブラウン、NIMBUS、SHORT WAVEまでが顔を揃える。この切り口はそのまま現在のアメリカン・ロック・アンダーグラウンドの縮図だ。当初からエイミー・デニオが常連だし、ここから現在のCAVEMAN SHOESTOREを類推することも無理ではなかった。レーベルの悲劇を乗り越えてシリーズの復活を望みたい。　（坂本）



V. A.
Unsettled Scores
CD/Cuneiform RUNE 75/76　'95年

キュニフォーム関連アーティストによるキュニフォーム・アーティスト・カヴァー集。2枚組、総勢25組を収録している。そう言う訳でいちいち紹介していられないが、バードソングス、ハッピー・ファミリー、U. トーテムと言った今の一線級が顔が並べる充実のライン・アップ。元々は冗談半分の企画だったが、それが実現されてしまう勢いを感じさせる好演が続く。これは彼等の連帯感の表明であり、尚、多様な解釈を通じて、それぞれの独自性をも主張したアルバムと言えるだろう。やはりその曲／アーティストが好き、と言った原動力はあるにせよ、ただコピーにはしない所はやはりそれぞれが一芸の持ち主と言った辺り。バンドの芸風、元の曲調を知らずとも聴き通させる工夫と勢いがある。　（中西）


FOLK
TRAD
Others

Joni Mitchell



Bob Dylan



Judy Collins



'60's-'70's USフォーク・サウンド

文●内田哲雄

シンガー・ソングライターの時代

いわゆるアメリカン・フォーク・ロックの基盤を築いた偉大なアーティストと言えば、かのボブ・ディランの名前がすぐに浮かぶと思うが、バート・ヤンシュ、ロイ・ハーパーら英国フォーク・リバイバルの生き証人の語るところによれば、「奴はブリテンあるいはアイリッシュ・トラッドのフレーズを盗用してオリジナルへと転化した」のだという(マーキー誌Vol.62にも似たような記載があったが、私も'94年渡英時にハーパー本人からそのような話を聞いた)。なるほど確かにディランの曲の中にはアイリッシュ・バラッドをそのままアレンジし直したような部分がチラホラと見られる。だが彼の音楽は全世界的なセンセーションを巻き起こし、後世のポピュラー・ミュージック・シーンに多大なる影響を与えてしまったのだ。ここで最も重要なのは、ディランのとった手段に対する真偽の考証はさて置き、彼の楽曲それ自体がサイケデリック・ムーヴメントの洗礼を受けて新しいフォーマットへと変容、進化していったという事実である。かくして出来上がったアコースティック・ロックはフェアポート・コンヴェンション等を通じてイギリスへも「逆輸入」され、更に英国流に「再々加工」されることによりブリティッシュ・フォーク・ロック・シーンの礎となった訳だ。そう考えればボブ・ディランというアーティストの残した足跡は紛れもなく偉大だったと素直に認めざるを得ない。

さて話が少しディランに片寄ってしまったが、次にこの章で多く取り上げた'90年代の作品群、特に「女性ヴォーカル物」について'60〜'70年のアメリカン・フォーク・ミュージックとの接点を考えてみることにしよう。ディランに端を発したこのジャンルの音楽は実に30年もの長い歴史を持っており、その間に他フィールドの音楽と相互作用してはいるものの、'60年代前期に形成されたコアの部分は今もって何ら変わらず保持されていると言って良い。今回取り上げたアイテムのレヴューで頻繁に登場する「ジャズ色」、「ストリングスの導入」、「トラッド風味」という言葉。これらは作品を特徴づける重要なファクターとなっているのであるが、これらの「鋳型」はすでに「古き良きアメリカン・フォーク・シーン」の中で着々と育まれていた。こと女性ヴォーカルに関して言えば、その母体となったのは今から述べる人の「アネゴ」達、すなわちジョーン・バエズ、ジュディ・コリンズそしてジョニ・ミッチェルなのである。

まずはジョーン・バエス。彼女のデビューは'60年で、実にもう35年もの間自分のスタイルを保ち続けている。アコ・ギを手に切々と、力強く歌うその存在感は絶大で、ディランと共にこのジャンルの太い「柱」となった。バエスの歌はあまりにシンプルで誠実、それゆえにその中に込められたメッセージは直に聴き手の心を打つ。その内なるパワーは世界各国のフォーク・ミュージシャンをも魅きつけるほどの求心力を持っていた。日本で言えば「おトキさん」のような存在だろう。今でも彼女がステージに立てば本編カタログでも取り上げたINDIGO GIRLSのような「ナッシュビル系」の新鋭からアイルランドのメアリー・ブラック、モーラ・オコーネルといった一流どころがステージに駆けつけ、レパートリーを交換し合う。ナッシュビルとアイルランドのSSWは現在盛んに交流し合っており、いい意味で影響を及ぼし合っているのをその人脈、サウンドの両面から「架け橋」的な役割を果たしているのがバエスだ。

続くジュディ・コリンズはバエスと同じ'60年のデビュー。バエスが飾り気のないストレートな「うた」で「女性の強さ」を表出していたのに対し、彼女は慈愛に満ちた「母性的」なメロディや思わず守ってあげたくなるような「少女性」等、「ソフト路線」(この言葉は時節柄危ないな)を大々的に打ち出していた。これらの属性をエスコートするのは温かな音色のピアノとオーケストラ。この表現形態はサンディ・デニーを初めとするブリティッシュ・フォーク女性ヴォーカル勢へと受け継がれ、カーディガンズ等「渋谷系グループ」が追い求めた'60年代サウンドのプロトタイプにもなったのである。(ジュディ自身もサンディの「時の流れを…」をカヴァーしている)。

最後にジョニ・ミッチェル、カナダ出身の彼女は前記の2人より遅れて'68年のデビュー。当初から天才的なソングライターとして頭角を表し、先のジュディやFAIRPORTのカヴァー等で知られる「青春の光と影」といった名曲を書き上げている。その彼女があり余る才能を一気に爆発させる契機となったのは'70年代中頃に急速に強まった「ジャズへの傾倒」。'75年リリースの「夏草の線路」から徐々にその傾向が芽生え始め、鋭敏な感性に裏打ちされた個性豊かなカントリー・フォークはジャズのエッセンスを吸い込んで膨れ上がっていく。ジャコ・パストリアス、ウェイン・ショーター、パット・メセニーら超一流のプレイヤーのバック・アップも凄いが、彼らを文字通り「従えて」自分のスタイルをなおも曲げない彼女の姿勢にも驚く。チャーリー・ミンガスの出会いによって作られ、制作中にチャーリーが亡くなってしまうといったいわくのあるアルバム「ミンガス」は真の意味でプログレッシヴかつクリエイティブである。その後'80年代以降は安定期に入るが、そんな中でもロジャー・ウォーターズやチーフタンズのプロジェクトに招かれるなど、常に他フィールドの音楽との接触に余念がない。

以上、3名を挙げるだけで紙面が尽きた。他にもリンダ・ロンシュタットを筆頭とする「カリフォルニア一派」等、紹介したいものは山ほどあるが、それは又の機会に譲りたい。今回カタログ紹介したアルバム群をお気に入りの向きには、是非とも本文で挙げた3名の「アネゴ」達にフィード・バックしてみてほしい。必ず「タネ」が見えてくるはず。



HARMONIUM

SÉGUIN



III

QUEBEC

もう一つのカナダ〜ニュー・フレンチ・アコースティック

文●内田哲雄

イングリッシュとフレンチが混在する国、カナダ。両民族はこの地に根付いて以来根深い確執の歴史を持っており、居住エリアも未だ相入れず二分化している。フレンチ・カナディアンはモントリオールやケベックといった南東部の都市を中心とした地域に局在しているのだが、特に人口の大半をフレンチが占めるケベック州はその民族性の相違から他州とのイザコザが絶えない。平和ボケした我々から見れば、この地における内紛のニュースを耳にするたびに「え〜い、またか」とか「ええかげんにせんかい」とか思うのだけれども、いさかいの中で強まったフレンチに対する「こだわり」とフランス本土とはまた異なる開放的な「風土」が新たな文化を生み出したのもまた確か。こと音楽に関してもそれは全くもって例外ではない。本項ではその中でもとりわけ独自性を持ったケベックのフォーク・ミュージックのいで立ちについて触れてみたいと思う。

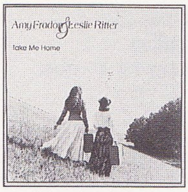
民族的な「独立の心」はいつでも良質のフォーク・ミュージックを産んできた。こういう言い方は非常に心苦しいのであるが、それは「戦い」や「軋轢」によって助長されてきたというのが定説なのだ。ラップランドのヨイク煞り、バスクのフォーク・ミュージック煞りである。ケベックはこれらのような「弾圧」や「被支配」というような経緯はないものの、イングリッシュとの競合によって強い「民族意識」が芽生え、同族同士の団結心をより高める結果となった。この地におけるフォーク・ソングにはそんな彼らのフランス語に対する「こだわり」が見られ、それは「ケベック・フォーク」として70年代中頃をピークとして小さなシーンを築くまでに至ったのである。その中心的存在として活躍していたのが御存知SÉGUINであり、HARMONIUMなのだ(本集成でこの2バンドは「行きがかり上」シンフォニック・ロックの項に区分けされているが、ケベックのアコースティック・ミュージックを語る時にはどうしても外せないので気にせず進めていく。それだけジャンルに対する「区割り」が難しいのだと御理解願いたい)。プログレッシヴ・ロック・ファンにもよく知られたこの2グループ、我々からすれば「まさか」と思うかも知れないが地元では超メジャー、大ヒーロー的な扱いを受けているのだという。今でもTVショウなどでフォーク・コンテストなどがあれば若者たちが彼らのレパートリーを歌うのだそうだし、またマイナーどころのフォーク・バンドにも計り知れない影響を与えたであろうことは想像に難くない(私もフォーク・フェスに出向いた際モントリオールから来たという数名のカナダ人に尋ねてみたところ、一人残らず「ああ、よく知っているよ」などという即答が返ってきて驚いた記憶がある)。

彼らの音は一聴して分かる通りアコースティックだし、またフランス語の響きを生かした絹目のような感触や広大な草原を思わせる大自然の香りなども紛れないフォーク・ミュージックのイディオムである。だがフレンチ・トラッドの代表格MALICORNEやケルト系のGWENDALあたりのフランス勢とは決定的に違う箇所がある。それは「伝統」に縛られた「血の濃さ」がほとんど感じられないという点だ。前者がエレクトリックのフォーマットを取り入れてなお中世音楽への傾倒やケルト色の強化といったシリアス性をはらんでいたのに比べれば、ケベックのそれはどこかポピュラー・ミュージックの香りがする。根底にはフレンチとしての断固たる「民族意識」を認め、カナダの大自然に根ざしたとおぼしきフォーク・ミュージック特有の「土の香り」を漂わせていてもなお、サウンド面においてはシャンソンやロック・ポップスが同時代的に流れ込んだかのような「若さ」があまりに顕著なのだ。これはケベックが地理上アメリカ大都市部と隣接し、そこを経由してポピュラー・ミュージックがリアルタイムに入り込んだのが原因と考えてよい。民族的には対立していても、こと音楽に関しては例えばバスクのような「鎖国制」は敷いていなかったため、フォークが形成される過程でこちらの音楽要素が何のためらいもなく融合したということになる(思えばクリムゾン、ジェネシス等の大物プログレッシヴ・バンドもリアルタイムにこの地でツアーを行って大成功を収めている)。今回シンフォニック・ロックの項にシフトされる要因となったHARMONIUMのメロトロン導入は明らかに往年のプログレッシヴ・ロックに由来するものだし、またより土着が強いと思われていたSÉGUINの前身グループLA NOUVELLE FRONTIERSはまごうことなきサイケデリック・フォーク・バンドでゴテゴテのトラッドというわけではない。こうした連中が「お手本」となっているケベック・フォーク・シーンの作品群は、いわゆるシンフォニックではないにせよ、メロディの中にシャンソン的な節回しがあったり、フランス語で歌っているのに雰囲気がアメリカンだったりして、「トラディショナル」と言うにはやはり特異だ。ヨーロッパ的な「異国情緒」を残しつつもこれほど「開放感」に満ちたフォーク・ソングは他にあまり類がなく、この辺が「アメリカに隣接したフランス人居住区」というケベック地方の特殊性を物語っている。民族の誇りを守りつつもついついサウンド表面に出てしまう「ポピュラリティ」、これがロック系リスナーとの接点になったのではなかろうか。

このケベック・フォークのシーンも80年代に入るころにはピークを過ぎ、フレンチ・カナダ系の作品には近年とんと見かけなくなってしまった。むしろロリーナ・マッケニットを始めとするケルト系音楽がそれに取って代わってしまっているような有様である。長い争いの歴史を持つこの地域だが、最近は「フランス語で歌う」という必然性が徐々に失われつつあるのかも知れない。

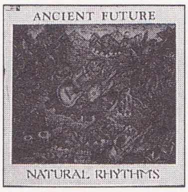
FOLK
TRAD
Others

A to Z



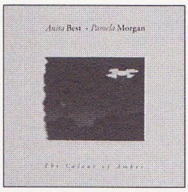
AMY FRADON
Take Me Home
CD/Shanachie Cachet 8013　'94年

ニューヨークの女性デュオ。曲想はアメリカ風にややカラッとした明るいものが多いが、ピアノやギターの適確なサポートもあって軽さはほとんど感じられず、結構懐が深い。何度でも聴きたくなるような親しみ易さがあるのが特徴といえる。何とイエスの〝Your Move〟をアコースティック・フォーク風にアレンジして歌っており、これが仲々の名演。控えめなオルガンとコーラス。ハーモニーが絶品である。ドラムスに10000マニアックスやインディゴ・ガールズ等最近この手でやたらと起用の多いジェリー・マロッタが起用されている。
（内田）



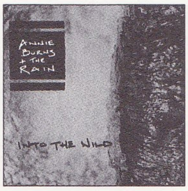
ANCIENT FUTURE
Natural Rhythms
CD/Philo 9006　'81年

アコースティック・ミュージックの意欲作。トム・ニューマンの「妖精交響曲」をカリフォルニアのヒッピー思想の延長でアレンジしたような内容。カヴァーはインドネシア、バリ島のペインターによるもので、多分に'60Ｓ東洋指向の洗練がサウンドにも反映している。広い意味でニューエイジ的な発想のアルバムだ。森のイメージ、おだやかなサウンドは、映像感覚風のもの。今ならむしろリクライゼーション用と言った方が適切かもしれないが、まだそれには土っぽい。童話風のイメージよりも、太古のイメージ、湿地帯のジャングルというイメージが強い。
（松本）



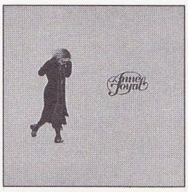
ANITA BEST/PAMELA MORGAN (Canada)
The Color Of Amber
CD/Amber ACD 9008　'91年

ニュー・ファンドランド島のグループ、フィギー・ダフの看板シンガー、パメラ・モーガンが同島屈指のシンガー、アニータ・ベストと結成した女性フォーク・デュオ。パッショネートなパメラとクールなアニータ、両者のスタイルは全く異なるが、曲の中ではこれらの資質が意外なまでに程良く溶け合っている。シリー・シスターズが引き合いに出されそうだがあれほどドライではなく、曲はメロディアスで聴き易い。クラシカルなピアノ一本をバックに抜群のハーモニーを聴かせる〝Sailor's Trade is a Weary Life〟は特に白眉。名盤。
（内田）



ANNE BURNS AND THE RAIN
Into The Wire
CD/(private press) 番号なし　'94年

このコーナー同時掲載のBURNS SISTERSのメンバー、アン・バーンズがTHE RAINという名のバック・バンドを率いて制作した事実上のソロ・アルバム。核はSISTERSと同一線上のカントリー・フォークであるが、バンド形態ということもあってよりスタイリスティックなフォーク・ロック色が強まっている。SISTERSの中でも特に良い曲を書いていた彼女だけに、ウェットで落ち着いた曲想は程良いロック色も手伝ってどこか'70年代のブリティッシュ・フォークに通底する味がある。トラッド風の趣きを持った④やピアノとチェロがドラマティックに盛り上げるメロディアスな⑤など佳曲が多い。無番号の自主制作に甘んじているのは惜しいが、反面プライヴェートならではの内省さが良い方向へ作用しているとも言える。
（内田）



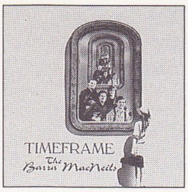
ANNE JOYAL (Canada)
Éveil
ＬＰ/Telson AE-1501　'?年

雪でまっ白な街の上に静かに昇る太陽ならぬ目玉焼き。これでヒヨコがいればオイレンだな。カナダ非トラッド系女性ヴォーカルものの最高峰である。愁いと翳りに満ちた全10曲全て本人の手になるもので、その上で２ndで明らかになった御尊顔もまた麗しい才人。デビュー作だけあってよく練られ何度もリハを行い丁寧に創られたに違いない落ち着きと完成度の高さは本作を20回30回も繰返し聴かせることを可能にしている。英語と仏語ヴァージョンのある２ndでは本作のしっとりとした感じが全く無い安易なポップになってしまったが、'79年の２枚のシングルはＡ面のみそれなりに楽しめる。とはいえ本作には及ばず。黙って買って欲しい名盤。内袋付。（森下）



AREA
Agate Lines
CD/Third Mind TMCD 059　'？年

アメリカの４ADの異名をとるセ・ラ・モ・レコードの代表的アーティストであるエイリア。女性ヴォーカリスト、リン・キャンスフィールドとインストゥルメンタル全般を手掛けるスティーヴ・ジョーンズの２人組である。彼らの引き合いとして常に名前を上げられるのがコクトー・ツインズ。少しリヴァーブがかった透明感あるヴォーカル・スタイルも耽美な曲調も、たしかにコクトーを髣髴させるものである。しかし、ギターを排しリズム・マシーンを使用した彼らのサウンドは、本家に比べるとやはりチープさが目立ってしまう。逆にそこが魅力であると言えなくもないが、ぼくには少々モノ足りない。しかし、通算４枚目になるアルバムの「朝の断片」というタイトルは、実に言い得て妙。
（久保田）



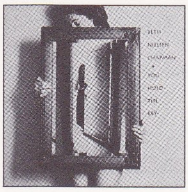
THE BARRA McNEILS (Canada)
Timeflame
CD/Polydor 314 519 029-2 '91年

オンタリオに拠を置くファミリー・トラッド・グループの２作目。デビュー作「Rock In The Stream」('89年) 当時からシンセやピアノを用いてコンテンポラリー寄りのサウンドを奏でていたが、本作ではより一層洗練度を増し、ダンス・チューンまでもがポップス感覚でスンナリと耳に入ってくる。女性と男性が曲ごとにリードを分け合う形を取っており、紅一点ルーシーのキュートなシンギングはもとより、ソフトな声質の男性ヴォーカルもとてもいい感じだ。ルーシーのリードから清涼感一杯のコーラス・ハーモニーになだれこむアイリッシュSSW系の名曲〝Song For Peace〟はとりわけ白眉である。ベースで参加のチャド・アーシックはRANKIN FAMILYのプロデュースも手がけ、両者の関係を裏付けている。　(内田)



THE BARRA McNEILS
Closer To Paradise
CD/Polydor 314 521 106 2 '93年

シンセやドラムスの使用頻度が増し、よりコンテンポラリー色を強めた新作。曲によってはトラッド色が大幅に薄れ、AORやポップス等との差別化が難しくなっているキライもあるが、それでも「良いものは良い」と開き直れるほどのふっきれの良さがあって好感度が高い。ルーシーの歌うダギー・マクレーンの名曲〝Caledonia〟は原曲がアコースティック・ギターによる簡素なアレンジであったのに対し(もちろんこのテイクも良い)、ピアノやシンセによるきらびやかな装飾が施され、彼女のシンギングを最大限に引き立てている。最高！　ラストの〝Am Pige Ruadh〟は有名なスコットランドのマウス・ミュージックで、地元のカパーケリーも近作で取り上げている。　(内田)



BETH NIELSEN CHAPMAN
You Hold The Key
CD/ワーナー・ミュージック WPCP 5212 '93年

テキサス出身、いわゆる「ナッシュビル系」の女性シンガー・ソングライターのこれは２作目。アルバム・デビューは'90年とかなり遅いが、それ以前からカントリー・サイドで脈々と曲を書きためており、クリスタル・ゲイルやアラバマ等の著名アーティストのアルバムの中にもその名を見ることができる。ピアノを中心としたしっとりとした曲想はデビュー作以来定評があり、その高いソング・ライティングの才能は健在。更に曲によってはケルティックな要素をも加えて深みを増した。数曲でポール・サミュエル・スミスがプロデュースを担当。フェアポートのサイモン・ニコル、マーティン・オールコック、トラッド畑のキャスリン・ティッケルらが味のあるサポートで持ち前の良曲に花を添えている。　(内田)



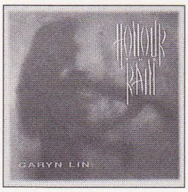
BOILED IN LEAD
Old Lead
CD/Omnium OMM 2001 D '91年
('85年, '87年録音)

アイルランドのポーグス同様、トラディショナル・ミュージックをエッジの立ったロック・リズムのフォーマットに乗せてブイブイ言わせるバンド。これはリアル・タイム当時「幻のアルバム」としてコアなトラッド・マニアの間で騒がれていた'85年の同名アルバムと'87年の「Hotheads」をカップリングした集大成CD。のっけからクレイジーなシャウトで幕を開け、ヘヴィなリフで一直線に乗り狂う。一聴非常に押しが強く、ザクザクした音色のエレクトリック・ギターなどにその傾向が顕著だが、基礎のしっかりとしたフィルドやクリアーな女性ヴォーカルによるクール・ダウン効果が危うい均衡を保つ。直線的なようで実はかなり計算高いのではないか。これ以後中東色を取り入れたサウンドへと変化。　(内田)



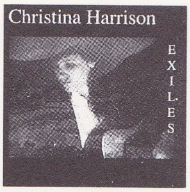
THE BURNS SISTERS
Songs Of The Heart
CD/(Private press) 番号なし '93年

ニューヨークはIthacaのファミリー・フォーク・チーム。メンバー５人全員が女性(シスターズなんだから当り前だ)、しかもコーラス・ハーモニーも出来るという理想的な環境のもとで自主制作されたこのデビュー・アルバム、カントリー・ミュージックの影響下にあってトラッド色は薄い。しかしウェットで温もりのある曲の良さは保証してもよく、しっとりしたストリングスやツボを心得たコーラス・パート（５人もいるんだもんね）がそれを上手く引き立てている。このフィールドの大御所的存在、マーティン・シンプソンのギター・ワークもまさに適在適所といった感じだ。次作では２人抜けて３人編成となり、ブルー・グラス等の要素を取り入れて多彩になったが、温もりは半減してしまっている。　(内田)



CARYN LIN
Honour The Rain
CD/Gypsy Line GY 839 '93年

トラッド系女性ヴァイオリストというフレ込み、あわ良くば女性ヴォーカルをと期待して入手したのだが、クレジットを見るとヴォーカルは入っていない。全くのインストルメンタル・アルバム。やや気落ちしてプレイヤーにのせて音を出した瞬間、その斬新でクリエイティヴな音のうねりに圧倒され、しばし時が停止してしまった。ヴァイオリンという楽器にありとあらゆるエフェクトをかけ、リズム・シークエンス上で縦横無尽に走らせるといういわばサウンド・コラージュ。しかしそのやり方が尋常ではなくヴァイオリンという楽器のもつ表現力の可能性を数倍にも拡大してしまっている。ジェリー・グッドマンのスペイシーさとリック・サンダースの奔放さを足してなおプラス・アルファを感じる凄い作品。　(内田)



CHRISTINA HARRISON
Exiles
CD/(private press) 番号なし '91年

スコットランドのグラスゴー生まれでケルトの血を引く女性シンガー。12才のときにアメリカに移住し、マジソン州の片田舎でプライヴェートな音楽活動を行っている。本作は知る限りでの唯一の作品であり、自分に歌うことの楽しさを教えてくれた両親に捧げるために自分の好きな歌をセレクトした非常に私的要素の強いものだ。ダギー・マクレーンの〝Caledonia〞フェアポート(R.トンプスン)の〝Farewell Farewell〞等言わずと知れた名曲群をアコ・ギやフルートによる控え目な演奏をバックに澱みなく優しく歌う。大陸的なカラッとした曲調の中でほのかに漂うくぐもった「かげり」がたまらなく良い。2曲のオリジナル曲もカヴァー曲にヒケを取らぬ堂々たる出来。次作があるならそれを発展させていってほしい。(内田)



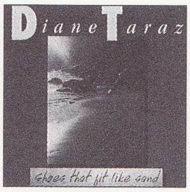
CONNIE DOVER
Somebody
CD/Taylor Park TPMD 0101 '91年

極上品。エンヤやクラナドも良いけど最近の作品は今風すぎて、と嘆いておられる諸兄には最適。声良し、曲良し、アレンジ良し、と「女性ヴォーカル入りトラッド」の三要素を高得点でクリアしている究極の一枚である。適度に洗練されていて聴き易いし、今風のアレンジも決して先走りすることなく、トラッド特有のバタ臭さを上手く緩和している。英フォーク・ルーツ誌で大絶賛されたこの実力派シンガー、元はカンザス・シティのトラッド・グループ〝SCARTAGLEN〞のヴォーカリスト、アメリカ人である。スコットランドの重鎮シリー・ウイザードのフィル・カニンガムのプロデュース。カバーケリーのメーナス・ラニーなどバックも実力者揃い。(内田)



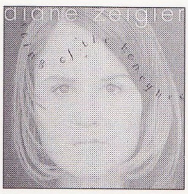
CONNIE DOVER
The Wishing Well
CD/Taylor Park TPM 0201 '94年

前作から大幅な成長を遂げた2作目。前作と同じく女性ヴォーカルの名伯楽フィル・カニンガムがプロデュースを担当、バックもカパケリーのマーナス・ラニーをはじめとしてほぼ同様の布陣である。当然ながら前作の音楽性をそのまま引き継いでいるものの、個々の曲の表情がより豊かになってメリハリがつき、作品としての完成度はさらに増した。収録曲の大半はトラッドで、中にはフェアポートの〝Sir Patrick Spens〞の原曲となった〝Hugh The Greame〞、ペンタングルの名唱で知られる〝Willie O Winsbury〞等かなり有名なものもあるが、どれもが先達にヒケを取らぬ堂々たるものだ。バラードも絶品。フィルのメロディアスなピアノに導かれて歌われる自作のタイトル曲には年甲斐もなくひどく感動してしまった。(内田)



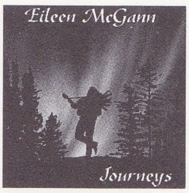
DIANE TARAZ
Shoes That Fit Like Sand
CD/Beacon BCN 10127-2 '93年

これは仲々の名品。下地は明らかにアメリカン・フォークであり、メロディも明るくカラッとしているのだが、どこかうしろ髪を引かれるような一抹の翳りが残る。中でもフルートの心暖まるフレーズが素晴しい〝Fan〞やチェロ、ヴァイオリン(面白いことにヴァイオリンとフィドルが分けてクレジットされている)をフィーチュアした数曲などは以前「アナログ盤探索」で紹介した究極のデュオ、HEAVEN & EARTHを思わせる「ブリティッシュ進化型アメリカン・フォーク」最良の姿といえるほどだ。アイリッシュ・バラードを素材とした〝Amaryllis〞の原曲はサンディ・デニー、メイ・マッケンナそしてヴァーミリオン・サンズで有名な〝My Lagan Love〞である。(内田)



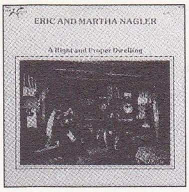
DIANE ZEIGLER
Sting Of The Honeybea
CD/Philo CD PH 1174 '95年

ナッシュビルと並び、近年つとに優れたSSW系作品を輩出しているマサチューセッツから登場したトップ・クラスの実力派。このシーンではもはや名うての重要人物アーディ・トラウムが自信をもってプロデュース。バックもジェリー・マロッタ、デヴィッド・トーンら凄腕のミュージシャンがしっかりと固めていることからもその期待のほどが窺い知れるだろう。内容の方もそれに違わぬ素晴しいもので、近年のSSWモノの中では'90年代前半のベストとも言うべきクォリティ。曲の出来、歌唱力、アレンジ共々派手さはないがソツなく、完成度が高い。ただ単に上手いだけではなく、ハートウォームな表現力も群を抜いている。ガンと闘いながら常に笑顔を絶やさなかった亡兄に捧げられた作品であるという。(内田)



EILEEN McGANN
Journeys
CD/Dragonwing DRGN 113-CD '95年

アイルランド出身で現在はアメリカ、カナダを中心に手広い活動を行っている新進女性SSW。アメリカやヨーロッパのフォーク・フェスにも近年よく顔を出している。純トラッド畑のものは別にして本土のSSW系作品がケルト色を「味付け程度」に加えていたのに対し、彼女の作る楽曲の中には明確にアイリッシュきっての「血の濃さ」を感じる。この3作目ではより洗練されたアレンジが目立つが、パイプやホイッスル、ハープの奏でるメロディはアメリカ大陸とはまた異なるケルトの雄大な草原を想起させる。カントリー色が薄いとは言えトラッドトラッドした音ではなく、あえて分類すればメアリー・ブラックやモーラ・オコーネルらアイルランドのコンテンポラリー・シンガーと同列に見なすべきであろう。(内田)



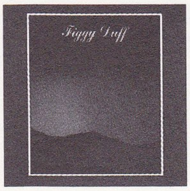
ERIC & MARTHA NAGLER (Canada)
A Right And Proper Dwelling
LP/Barn Swallow BS 1002　'77年

非常に地味だが、カナダにもこれだけ高水準のトラッド系アルバムが存在することを教えてくれる一枚。ジャケットでアイリッシュ・ハープを弾いている女性ヴォーカリストMarthaとギター、フィドル、ヴォーカルのEricによるデュオ・アルバムで、数曲を除いてはギター、ベースにあのBruce Cockburn（彼はここでプロデュースも行っている）他数名をゲストに迎え、統一されたムードの中にヴァラエティ豊かな内容に仕上げており、聴き手を飽きさせない。A①はバンジョー、フィドルのナンバー、2曲目はSSWファンが涙する〝High Winds…〟をカナダのSandy Dennyとも言うべき憂いのある母性的な歌声でじっくり聴かせる。ゆったりとした雰囲気のA③、余りにクールな渋いブルースA④の素晴らしさ、B面はインスト・ナンバーをはさみながら彼女の歌をじっくり聴かせる構成。（平野）



FABIENNE THIBAULT (Canada)
Fabienne Thibault
LP/Kebec Disc KD 906　'76年

HARMONIUMやSEGUINの周辺人脈ともコネクションをもつモントリオールの女性シンガーでアルバムも多数発表している。'80年代以降のものはかなりポップ寄りになっているが、'76年発表の本デビュー作より数作はHARMONIUMやSEGUINのコンテンポラリー・フォーク版といった風情を有し、そのクォリティはケベック廃盤群と並べてもかなり上位に位置する素晴しいものだ。アコースティックな曲想にファンタジックさをたたえたストリングスといった理想的なアレンジ、そして何より比類なき暖かさを内包したメロディが最高。エモーショナルでジェントリー。全編で泣けます。オーケストラを指揮しているのはSEGUINでもいい仕事をしていた「ケベックの大野雄二」Quentin Heck。CD化を望む。（内田）



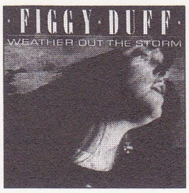
FIGGY DUFF (Canada)
Figgy Duff
LP/ASM 71356-5000-2　'79年

カナダはニュー・ファンドランド島出身で、アメリカ〜カナダ圏を代表するエレクトリック・トラッド・グループ。このデビュー作は'79年の発表となっているが、結成は'73年と古く、その頃から独自のサウンド・スタイルを確立していたという。音の方はケルトではなくブリティッシュのトラッドが下地となっており、往年のフェアポートやアルビオン・バンドとの共通性、影響が感じられる。テクニックも至って安定しているのが強み。しかしこのバンドの最大のテイストは紅一点パメラ・モーガンのシンギング。クールなスタイルが多いこのフィールドの中で彼女のパッショネイトな歌いっぷりは貴重だ。プロデュースを手がけているトム・トルーマスはTRUE MYTHの中心人物だった人。（内田）



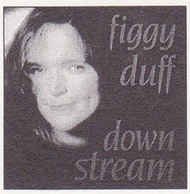
FIGGY DUFF
After The Tempest
CD/Celtic Music CM C0023　'83年

スタイリッシュなエレクトリック・トラッドを奏で、末だアクの強かったデビュー作からより一層の柔軟性を見せつけた2作目。ダンス・チューンを含むインスト曲ではロック・サウンドを加味してドライヴ感を増し、またパメラをリードに据えたバラード・チューンではメロディがより起伏のある表情豊かなものになっている。とりわけリリカルなピアノが印象的なオープニング・ナンバーのインパクトは抜群。情緒豊かなパメラのシンギングも相まってシンフォニックですらある。この一曲で決まりだろう。ペンタングルでお馴染みの〝A Sailor Corted A Farmr's Daughter〞ではクールなジャッキーとは全く正反対のヴォーカル・スタイルとエレクトリックなアプローチがむしろ面白い。（内田）



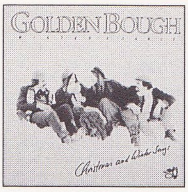
FIGGY DUFF
Weather Out Of The Storm
CD/アルファ ALCB-455　'90年

何と7年間の沈黙の後に出された3作目。これまでにフィーチャーされていたダンス・チューンは姿を消し、パメラを全面的に押し出したトラッド系ヴォーカル・アルバムへと姿を変えた。背景にクラナド、エンヤに端を発したコンテンポラリー化の「波」があったことは否定できまい。しかしポップ色の加わったサウンドと相変わらずパッショネイトなヴォイスは意外なほど良く調和しており、この手ではありそうでなかった新たな魅力を生んでいる。エンヤらアイリッシュのもつどこか潔癖で深窓的なイメージとはまた趣を異にするものだ。バックの演奏も結構ハイ・テンションで物悲し気なメロディの中を去来するアコーディオンやホイッスルの響きがえも言われぬ郷愁を呼ぶ。（内田）



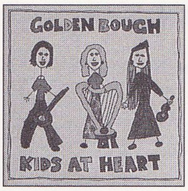
FIGGY DUFF
Downstream
CD/Hypotic 71356-1009-2　'93年

事実上の最終作。大方の予想通りよりコンテンポラリー色が強まり、一部の曲などは女性ヴォーカル系ポップスとの差別化が難しいほどにこなれ切っている。トラッド系バンドとしては、例えばスコットランドのカパケリーの変化のしかたとよく似ているように思えるが、ケルティックのクールさというよりは地に足のついたようなパワフルさが特徴。やはり熱唱型のパメラのシンキング・スタイルがそう思わせるのだろう。今回は味付け程度となった「トラッド色」はメロディアスなサウンドとマッチして心地良い。何とこの年リーダー格のノエル・ディンが死去したためバンドは自然消滅。'95年に未発表曲2曲入りの追悼盤「Retrospective'78—'93」をリリース。パメラはソロに転向した。（内田）



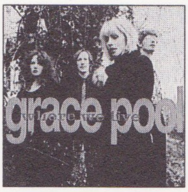
GOLDEN BOUGH
Winter's Dance
CD/ARC EUCD 1046　'85年

アメリカはオークランドを拠点に地道な活動を行い、着実に支持層を増やしているケルティック・トラッド・グループ。'80年のデビュー以来関連作を含めるとアルバムは10作品以上に及ぶ。結成当初は４人組で、ハープをフィーチャーしてケルティックな中にもギタリストのポール・エスピノザが持つカントリー風の大陸的な感覚が地味ながらも独特の個性を与えていた。本作は４人編成での最後の作品にあたり、タイトル通りのクリスマス曲集。ハープやウインド・チャイムによるドリーミーでファンタジックな響きが懐しい子供時代を思い出させるかのようだ。まさに「天使の歌声」のようなフィーメイル・ヴォイスはクリスマスのイメージにぴったりハマっている。
（内田）



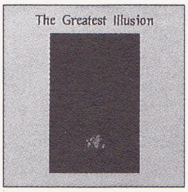
GOLDEN BOUGH
Kids At Heart
CD/Golden Bough GB 203　'93年

９才の子供が描いたという３人のメンバーをあしらった落書き調のカヴァー・イラストが何とも楽しい'93年最新作。出来は相変わらず安定しており、ハープやホイッスル等によって奏でられるケルト色とカントリー・フレーヴァーが程よく溶け合った心暖まる好アルバムとなっている。元々このバンドには「家庭的」な雰囲気のようなものがあって、それが「アメリカらしい」などとも思ったりしたのだが、本作では８人の子供達によるコーラスなどを取り入れたりしてそのムードは一層強まった。子供から老人まで幅広い層に親しめる音とはいえ、時として中世的な趣きを醸すフィドルやハープのプレイなど、一見単純そうでありながら懐は結構深い。　（内田）



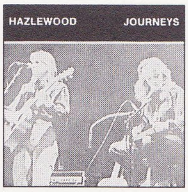
GRACE POOL
Where We Live
CD/Reprise 9 26228-2　'90年

男女３＋２、NYで録音。'88年には「Grace Pool」が出ているので、こちらは２～３作目だろう。バイオ等は不明。都会的な洗練さと'70年代のアメリカンなイメージ、どこか郷愁めいたカントリー・サイドっぽさの同居するアコースティック・ロックが持ち前。ギター、リズム、ピアノ他のうるさすぎないバックもいいが、なんといってもエリー・ブラウンの少し舌たらずで哀愁を帯びた歌声、そして曲のメロディが魅力。ちょっとオール・アバウト・イヴが持っていた陶酔感や感情移入の度が入っているが、そこはアメリカっぽく明るくサラッとしている。もちろん音造りはメジャーで通用するたぐいのもので聴きやすくもある。ゴシックっぽさはあまりない。色気のある音だが、うるさすぎずくすぐる。　（松本）



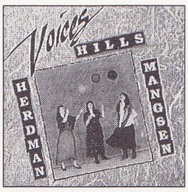
THE GREATEST ILLUSION
The Greatest Illusion
ＬＰ/(private press)　'73年

シアトルで自主製作されたフォーク・アルバム・こうした自主プレス物は宗教、思想的バックグラウンドに依る物が多いが、本作も、その例に漏れぬ内容だ。宗教的信仰の強さが、精神的に音楽に与えるものは非常に大きく、それが作品の中に滲み出たジーザス物、教会物と呼ばれるレコードは欧米諸国でもかなり多い。ただし本作はジーザスでなくヒンドゥーだが……。内容はまるっきりブティッシュ・フォーク然とした女性vo物で、アコースティック・ギターをメインに曲によってピアノ、チェロ、フルート、ベースがかぶさる淡々とした内容。Ｂ面の方がバラエティーに富んでおり、おごそかな高みに達するラスト・ナンバーがハイライト。　（秦田）



HAZLEWOOD
Journeys
CD/(private press) 番号なし　'90年

マジソンが、そしてアメリカが生んだ究極のトラッド・フォーク・デュオ。カントリー風のカラッとしたムードに取って変わるのは'70年代ブリティッシュ・フォークを思わせる曇り空。その曲の「良さ」は往年の名盤たちの中に入れても全く見劣りしないとすら言えるほどだ。ハスキーなトーンのスーザン、透明感に富んだグレイス、２人のコーラス・ハーモニーを聴くだけでもう涙物なのだが、加えてキラキラしたピアノやリック・サンダースを思わせる上昇的なフィドル、優しい音色のホイッスルなどが曲毎に最大限の効果を発揮し、ファンタジックな気分にひたれる。ダギー・マクレーンの名曲〝Reddy For The Storm〟などは絶品である。もちろん自作曲も同等に良いことは強調しておこう。最高！
（内田）



HEDMAN HILLS MANGSEN
Voices
CD/Flying Fish FF-70546　'95年

良質のトラッド系SSWアルバムを近年多数リリースしているフライング・フィッシュ・レーベルのおかかえシンガー、プリシラ・ヘルドマン、アン・ヒルズ、シンディ・マンスンの３名が連名で発表した企画アルバム。個々のソロではカントリーやジャズ寄りのナンバーを歌っていた彼女たちが、ここではどちらかというとトラッド寄り（一部純トラッドを含む）のソングスに取り組んでいる。例えばアイリッシュやスコティッシュのそれと比べると至って素直で多少重味に欠けるキライもあるが、ストリングスやピアノをバックに歌われるジェントリーなハーモニーは聴けば聴くほど心に染む。むしろSSWファンのためのトラッド入門編といえるかも知れない。派手さはないがまずまずの出来。
（内田）



HIS NAME IS ALIVE
Livonia

LP/4AD CAD 0008 '90年
CD/4AD

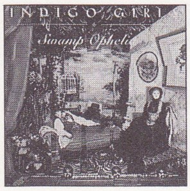
新人アーティストが、レーベル・カラーに染められるケースは、今も昔も同じだろう。このモノトーンのカヴァー・センスを見て、おおよそ4AD系だろうほどの当たりはつけられる程にフォローは欲しい。コクトー・トゥインズが日和ってしまった今、あの感覚を追うならば、これだ。少しコラージュがきいていて、角の立つ感覚が、刺激的だ。どことなくアコースティック面にフォーク色を感じさせ、全体にほのかな明るさが4ADらしく漂うあたり、やはりアメリカ出か。それよりも素直に、女性ヴォーカルが魅力的だと言ってしまおう。ニュー・ウェイヴへの偏見も消し易い。観念的に沈み込むことなく、外へ発散できる開放感をもち合わせている点が、定番となった4ADイメージを変えていくのかもしれない。冴えは確か。　(松本)



HUGO LARGO
Drum

CD/Largo 5129 '88年

アメリカのコクトー・ツインズ(というのもケッコウ多くてアテにならないけど) として一般的に有名なのが、このヒューゴ・ラルゴである。イーノの秘蔵っ子としても知られる存在だ。さて、結論から先に言ってしまえば、コクトーとこのバンドの類似性をそれほどぼくは強く感じていない。コクトーの浮き世離れした美しさとは対照的に、このヒューゴ・ラルゴの音楽からは、日常的な美しさという様なものを感じるからだ。それは、ヴォーカリストであるミミが持つ、まるで母親のような力強い優しさに満ちた声によって生まれてくるものなのだろう。憎しみ、苦しみ、悲しみ、そんなすべての感情をそっと包み込んで癒してくれる、そんな不思議な安らかさがこのアルバムにはあるのだ。　(久保田)



INDIGO GIRLS
Swamp Opheria

CD/エピック・ソニー ESCA 5973 '94年

ジョージア出身の女性デュオで'89年にデビュー。様々な一流ミュージシャンのサポートもあって今やナッシュビルを代表するメジャー・アーティストへと成長した。デビュー当時から殺人、同性愛、エイズ等のアメリカ的なマターを重い内容とは裏腹のソフトなフォーク・サウンドに乗せて歌ってきたが、作を追う毎にその音楽的な表現法はより研ぎすまされ、それは本作において頂点を極めた (ジャケットも良いでしょ)。オープニング・ナンバーにおけるロック的なダイナミズムは従来の彼女たちにはあまり見られなかったもので、サウンド面での飛躍的な成長を窺わせる。ジェリー・マロッタ、ダニー・トンプスン、ジェーン・シベリーら一流どころがこぞって参加。それでも自分達の味を崩していない所は見事。　(内田)



INGRID KARKLINS
A Darker Passion

CD/Green Linnet 1118 '92年

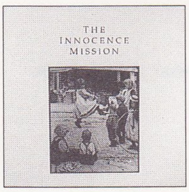
正体不明の女性マルチ・トラッド・シンガーの謎の作品。アメリカやラトビアのトラッドを取り上げているが、プリミティヴさとインテリジェンスが同居したようなユニークなシンギング・スタイルと斬新極まりないアレンジは「過激派」と呼べるほど他に類を見ない独特のものだ。時にバラッド風に優しい響きを聴かせたかと思えば、不安にとりつかれたかのようにがなり立てたり、時には呪術的なバックの上でなまめかしくささやいたりと非予定調和の連続。ケイト・ブッシュの「ドリーミング」にすら匹敵するパワーを感じる。　(内田)



INGRID KARKLINS
Anima Mundi

CD/Green Linnet 1141 '94年

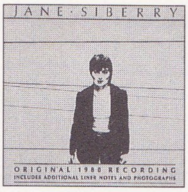
アメリカの女性シンガーの2枚目。前作でのインパクトはそのままに音が迷宮化した。理性と情念の葛藤が幾重にも渦を巻き、どこまでも降下していく。穴が深けりゃ半径も広く、罠にはまった音楽の情報量も質、量共に多彩、曲は一部ラトビア等の伝承歌 (彼女のルーツか?) を元にしているが大半は自作曲、トラッド・シンガーという枠はこの女にはまったく意味を成さない。キーボード、ヴァイオリン、各種民族楽器を自在に操り一曲ごとに多彩なアレンジを聞かせる腕達者ぶりにも恐れ入る。シンプルながら暗く意味深な歌詞といい、赤いジャケットといい、タイトルといい、あまりにもはまり過ぎ。決して衝撃的な音作りではなく、一聴した感じはむしろ前作より地味であるのだが、聞くほどに奥深く、いくらでも深読み可能、今だに底も出口も見えやしない。　(川辺)



THE INNOCENCE MISSION
The Innocence Mission

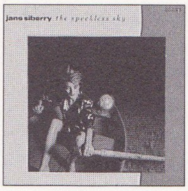
CD/A & M CD-5274 '89年
/ポニー・キャニオン PCCY 10079

イノセンス・ミッションが、アメリカのしかもフィラデルフィアのバンドだと知ったのは去年の暮れだ。本人たちも故郷のペンシルヴァニアから出てきた時にこういう音楽がここフィラデルフィアには、なかったと言っている。vo & keyのカレン・ペリスは、K・ブッシュ、S・ニックス、J・ミッチェル等の影響を感じさせ少し舌たらずの声が何ともかわいらしい。オール・アバウト・イヴと比べるとかなり明るい曲調が多く晴れわたった空や早春の野原を散歩しているようなフワフワした気分にさせてくれるアルバムだ。バックの音もカレンを引き立てる事に専念してシンプルだが雰囲気のある演奏にも好感が持てる。LP未収をふくむシングルのカヴァーも美しい。2nd「Umbrella」も出ている。　(金井)



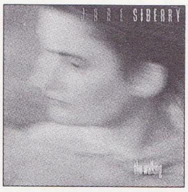
JANE SIBERRY（Canada）
Jane Siberry
CD/Eastside 8051　'80年

偏執的なまでに凝ったソング・ライティングぶりでは定評のあるジェーン・シベリーもデビュー当時はジョニ・ミッチェル影響下のフォーク・ロックを奏でていた。確かにオーバー・ダビングされたコーラス・パートなどに時折オヤっと思わせる箇所はあるものの、アコースティック・ギターやピアノを中心としたバッキングは後の作風を考えれば驚くほどシンプルである。看板であるサンプリング・シンセ群はほとんど使用していない。当然ながらフォーク系アルバムとしては質が高く、かつ個性的で、独特のメロディ・ラインやファルセットを多用したシンギング・スタイルなどに以後の大飛躍につながる「タネ」が見え隠れしている。廃盤ブーム当時一部で話題となったのがうなずける内容。（内田）



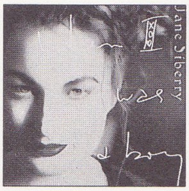
JANE SIBERRY
The Speckless Sky
CD/Duke OD-0305　'85年

過渡期的な2作目「No Borders Here」を経て、いよいよ彼女の偏執的ソングライターとしての才能が最大限に発揮された感のある3rdアルバム。とにかくアレンジの凝り方が尋常ではなく、トリッキーなヴォイス・サンプリングや装飾的な楽器音などが高度に入り組み、何度聴いても全体像が仲々把握できない。それなのにクリアーなヴォイスによって歌われるメロディ・ラインはカナダの大草原を思わせるほどにナチュラル極まりないのだからスゴイ。メカニカルなのにハートウォームという実に不思議なサウンドなのだ。このトリッキーさとナチュラルさの対比は日本のシーンにも少なからず影響を与え、本作を手本にかの遊佐未森が快作「ハルモニオデオン」を完成させた。（内田）



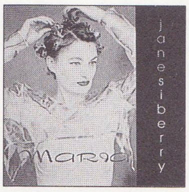
JANE SIBERRY
The Walking
CD/Reprise 9 25678-2　'87年

頂点を極め、もう後がないと思われていた前作を受けて更なる成長を遂げた4作目。掛け値なしの最高傑作である。何が凄いって、あのフェアライトを駆使した複雑でトリッキーなアレンジはそのままに、曲が大作化してしまっているのだ。しかもスキが全くない。9分を越えるオープニング・ナンバーなどは曲が初期のナチュラルさを保ちながら曲が目まぐるしく、ドラマチックに変化する息をもつかせぬ展開にただ圧倒されるのみ。リズム・セクションも極めてテクニカルであり、その密度は筆舌に尽くし難い。彼女のシンガー、そしてコンポーザーとしての全才能がここに凝縮されたといっても過言ではなかろう。ラストの大曲も圧巻。見てみたい気もするが、これらの曲をライヴで再現することはまず無理と思われる。（内田）



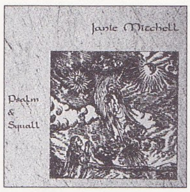
JANE SIBERRY
When I Was A Boy
CD/ワーナー・ミュージック WPCP-5309　'93年

パラノイア的なポップ・サウンドとしては唯一無二の世界を築き上げた3～4作目の反動からか、続く5th「Bound By The Beauty」では多少アコースティックな音へと回帰していたが、この6作目では打ち込みビートやダーク・アンビエント色を加えるなど時流の変化へと即応したアレンジを見せている。曲の出来は相変わらずの折り紙付きであるものの、多少暗めのメロディ・ラインやメリハリの少なさは彼女のナチュラルな感性に共鳴していたファンからすれば多少退屈さを覚えるかも知れない。ブライアン・イーノ、シルヴィアン＆フリップのサポートで知られるマイケル・ブルックらこのフィールドの精鋭がこぞって参加。ヴィオラを弾いているベン・ミンクは元FMのあの人。（内田）



JANE SIBERRY
Maria
CD/Reprise 9 45915-2　'95年

これまでのサンプリングによる迷宮的サウンド・アプローチから一転、本7thではピアノとリズム・セクションによる最小限に抑えたジャズ・シンガー物に挑戦している。一聴非常にオーソドックスに聞こえ、彼女の純シンガーとしての実力のほどが知られるが、時に妙なメロディ・ラインやこの手としてはユニークなファルセットなどが飛び出して一筋縄ではいかない。加えて20分を越える曲が2つというアルバム構成にも驚く。クリアーなピアノとヴォイスが一体となったこれらの楽曲は終始美しさに満ち、アッと言う間に時が経ってしまう。個人的には4作目以来久々の快心作と見ている。ジャジーな中にハッとするようなロック・ビートが顔を出すのも面白い。（内田）



JANIE MITCHELL
Psaim & Squall
CD/New Weave NWCD-454　'92年

アメリカのマイナー・レーベル、New Weaveより登場した知られざる女性シンガーのソロ・アルバム。同一レーベルの秘蔵っ子であるらしい。曲想はややポップだが、そこのゴシック風の「影」や一人多重録音による天界系のヒーリング・ヴォイス、そして適度なトラッド風味をうまく絡ませたユニークなもの。しかし、それだけではない。声質や唱法が「はからずも」ジュリアンヌ・リーガンに酷似しているのだ。数曲などは名前を伏せて「彼女のソロ・アルバム」と言って聴かせても信じるだろう。コピーではない。納得するだけの内容が伴っているのだ。（内田）



JEM MOORE & ARIANE LYDON
O' Susanna

CD/Beacon BCN 10134- 2　'94年

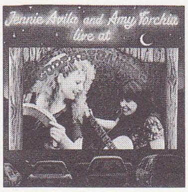
見かけはデュオ名義だが、ハンマー・ダルシマーやホイッスルを自在に操るマルチ・プレイヤーと汎世界的な視野を持った新進女性シンガーによる意欲的な「ネオ・トラディショナル」アルバム。シンガーのアリアンヌはアメリカに定住する前にヨーロッパ、アジア、中東などを点々とし、そこで様々な伝承音楽の素養を身につけた。それがこのアルバムのバラエティの礎となり、多彩かつ高密度なクリエイティヴ極まりない作品が出来上がっている。イングリッシュ・トラッドの名曲〝The Soldier & The Maiden〟はアパラチア出脈の民族歌風にデフォルメされ、ギター曲〝アルハンブラ〟はハンマー・ダルシマーでの新解釈が施される。かの有名なフォスターの表題曲がこんなに深い曲とは知らなんだ。才能あるなあ。　(内田)



JENNY AVILA & AMY TORCHIA
Change Is

CD/Jennamy Music JAAT93　'93年

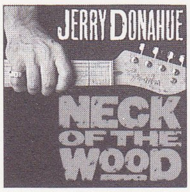
美しいカラーのジャケットに包まれたこのアルバム、内容もまさにそのイメージにピッタリといった感じで、「清楚」、「可憐」といった言葉がすぐに思い浮かぶ。ロー・トーンの落ち付いた声をもつジェニー、思わず守ってあげたくなるほど繊細な声質のエイミー、この２人が切々と優美なバラード・チューンをハモリ上げれば聴き手はいつしか夢の中。室内楽風のストリングスや伸びやかなフルートなどがさり気なく色を添える。静かなアコ・ギのアルペジオから徐々に盛り上がり、サビをハーモニーで歌い上げる展開がたまらなく良い。楽器群の中に何故か日本の古典楽器「こきりこ」がフィーチャーされているのは興味深い。愛らしいルックス通り、素顔の彼女たちもとてもステキな女性なのですよ。　(内田)



JENNIE AVILA & AMY TORCHIA
Live At Godfey Daniels

CD/Jenamy Music JAAT 94　'94年

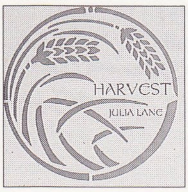
本誌では未紹介だったが、カラフルで美しいカヴァー・アートとそれに負けない内容をもった好デビュー作「Change Is」で一部で話題となった女性フォーク・デュオの２作目にしてライヴ・アルバム。フルートや弦楽器でゴージャスに飾られた前作とはうって変わった２人だけのステージ。質素な分やや渋めの印象を受けるが、物悲しさや優しさのこもった楽曲の良さはより強調され、繰り返し聴くとジワジワと感動が沸いてくる。Simple Is The Bestを地でいく作品。ラストのハワイアンは御愛嬌。ライヴの楽しいムードがモロに伝わってきて良い良い。　(内田)



JERRY DONAHUE
Neck Of The Wood

CD/RGF CD 011　'92年

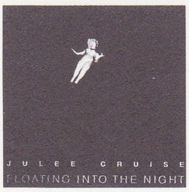
ニューヨーク生まれのロンドン育ち、名うてのギター・キッズ、ジェリー・ドナヒューはFOTHERINGAYやFAIRPORT等の参加により、ブリティッシュ・フォーク・シーンで数々の名演と実績を残してきた。リチャード・トンプソンとはまた異なる「アメリカ的」なアプローチでブリティッシュ・フォークにカントリーやブルーグラスを持ち込んできた彼だが、ソロ・アルバムではそうしたルーツ志向が大爆発、ストリング・ベンダーやエフェクターを駆使したイキの良いギター・アルバムを制作し続けている。ペッグ、マタックスらが全面協力したこの２ndソロではテクニカルながらメロディアスな彼のギター・ワークが存分に堪能できる。現在はギター・トリオHELLECASTERSを率いて更にギターの可能性を追求中。　(内田)



JULIA LANE
Harvest

CD/Castlebay Music OGR 8904
'92年

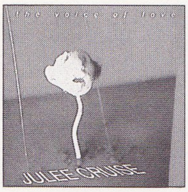
'92年に自主制作された女性ヴォーカルによるハープの弾き語りアルバム。テレーズ・シュローダー・シェーカーほどシリアスではなく、またロリーナ・マッケニットよりはトラッド寄りといういい意味で中庸のある好作品で、この手の音が好きならば絶対にイケる。タイトルの「ハーヴェスト」が示す通りどことなく草原や森といった「緑」のイメージがあったりするのだが、ウーリアン・パイプやアイリッシュ・フルート等のケルト系民族楽器と落ち着きのあるヴォイスがこのナチュラルな音世界を見事に描きっている。「自然の大切さを思い出してほしい」がテーマのようで、CDの売り上げの10%は自然保護団体へ寄付されるという。　(内田)



JULIE CRUISE
Floating Into The Night

CD/Warner 25859-2　'89年
/ワーナー・ミュージック WPCP-3172

「エレファント・マン」等で知られる著名映画監督デヴィッド・リンチが全面プロデュースした「謎のシンガー」ジュリー・クルーズの１stアルバム。リンチの秘蔵っ子的な存在であった彼女は女優業もソツなくこなし、本作収録曲をモチーフとした映像作品の中でも「語り部」的な役割を演じている。要は映像と音楽とが一体となったトータル・アートのサウンド・トラックと見なすことができるだろう。リンチが作詩を担当、有能なサウンド・クリエイター、アンジュロ・バダラメンティがバック・アップした楽曲は終始タイトル通りの浮遊感に満ち、エフェクトのかかったヴォイスと共に不思議な気分にひたれる。ギョッとするようなトリッキーは演出は映像と抱き合わせで鑑賞すると効果的。　(内田)



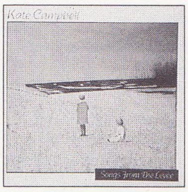
JULIE CRUISE
The Voice Of Love
CD/Warer Bros 9 45390-2　'93年

前作と全く同じ布陣で制作された２作目。作品的な傾向はほぼ変わらず、今回も同等のノスタルジーにどっぷり浸れる。映像作品が付随してない分（もし存在しているのなら早急にLDリリースを乞います。リンチさん）、ショッキングなトリックは影を潜め、より音楽的になってアルバムとしてまとまりのあるものとなった。純粋に彼女の歌にシンパシーを感じてきた音楽ファンはそこに新たな魅力を見い出すだろうし、反面リンチの映像美をフィルターに興味を抱いてきた向きには純シンガー的になった彼女に対して一沫の寂しさを覚えるかも知れない。とは言え、'60年代風のオールディな感覚とモダンなアレンジのミス・マッチはここでも健在、結局片方を気に入れば両方とも「買い」なのだろうが……。　（内田）



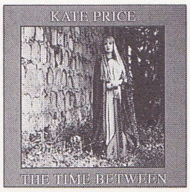
KAILA FLEXER & THIRD EAR
Listen
CD/Compass 7 4226 2　'95年

テクニカルなインスト・サウンドを前面に出したカリフォルニアのアンサンブル・グループ。コントラバスやマリンバを多用してモダン・ジャズ色を取り入れ、目まぐるしい変拍子を伴いながら疾走する様はちょうどオランダのフレアーク（特にTed De Jong在籍）を思わせ、リーダーの女性ヴァイオリニスト、カイラ・フレーザーをはじめとする各人のテクニックも特筆に値するほど高い。素材はブルガリアのトラッドやクレツマーなどのジプシー音楽に及び、自作曲においてもそのムードがありありである。アメリカの多くのトラッド系アーティストが自らのルーツを求めてケルト音楽等に走ったのに対し、この作品は優れたジャズ・ミュージシャンが「面白い素材を求めた」結果トラッドと出会ったものといえよう。　（内田）



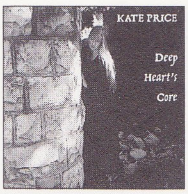
KATE CAMPBELL
Songs From The Levee
CD/Compass 7 4225 2　'95年

INDIGO GIRLS等のメジャーはもとより、アンダーグランドともなると底知れぬシーンを形成している近年のナッシュビル系から登場した期待の新人女性シンガぽ。これがデビュー作と思われる。スライド・ギターやドブロをフィーチャーしたオーソドックスなカントリー・サウンドがベースとなっており、確かにモロそれものの曲もあるが、曲によってはうねりを上げるハモンド・オルガンやメロディアスなヴァイオリンなどが顔を出して大いに盛り上がる。イキの良いカントリー・ロック・ナンバーの間に挟まれるスロー・バラードにおけるストリングスとアコーディオンによるクールダウン効果も絶大。「カントリーなんて」などと言わず、この際トラッド系女性ヴォーカル・ファン全般にススメてみたい。　（内田）



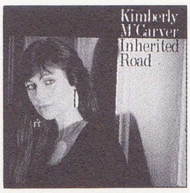
KATE PRICE
The Time Between
CD/Priceless Productions PP 402
'93年

ロリーナ・マッケニット、コニー・ドーヴァーらと並び、「シンフォニック・ファンをもうならせるトラッド系女性シンガー」としての地位を確立した感のあるケイト・プライス。実はカセット・オンリーのデビュー作「Kate Price」('83年)の存在が確認されているのだが、本人曰く「内容に自信がない」とのことでCD化には至っていない。それに続く本作はもはや女性ヴォーカル・ファンの必携アイテムとして認知済。全編をケルティックで深淵なムードが覆い、そこにミステリアスなエンジェル・ヴォイスがかぶさるという理想的な内容である。合い間にピアノとヴァイオリン、ハンマー・ダルシマー（彼女はこれの一流プレイヤーとしても知られる）によるクラシカルな小曲を挟むという構成も絶妙だ。　（内田）



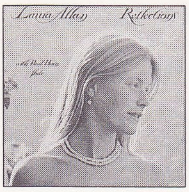
KATE PRICE
Deep Hearts Core
CD/Access AML-500　'95年

女性ヴォーカル・ファンの必須アイテムとなった前作の後を受け、その路線を真っ向から引き継いだ上に更なる成長をも遂げた２ndアルバム。前作で見せた楽曲の「良さ」、「深さ」はさらに洗練され、一曲一曲の存在感も増した。リコーダー、ヴァイオリンといった楽器群の使用法も申し分ないし、ヴォーカルの表現力ももはや「至福」の極みに達している。クラシカルで深みのある曲想はシンフォニック・ファンにも強く支持されそう。これでこのルックス、ジャケットなのだから何の文句もつけようがない。因みに彼女、これら２作がブレイクする以前はケニー・ロギンスのサポート・シンガーをやっており、「Leap Of Faith」、「Return To Poóh Corner」の２作に参加している（出たな〝衝撃の過去〟シリーズ）。　（内田）



KIMBERY M'CARVER
Inherited Road
CD/Philo CD PH 1179　'94年

このコーナーではこれまで未紹介のカントリー寄りの作品を取り上げてきたが、こうしてレヴューのために１日に何枚も聴くと言っても作品によっていろいろなカラー、表情があるもんだ。これはテキサス在住の女性シンガーの２作目で、今回セレクトしたアイテムの中では最もオーソドックスな部類に属するものである。ライトなメロディとカラッとした明るさは一度聴いても二度聴いてもやはり地味だが、10度くらい聴き返せば結構良さが染みてくるかも知れない。歌唱は安定しているし、伸びやかなフィドルの音色がまた、いいんだ。'93年渡英期に１stをジャケで衝動買いして、それ以来のお付き合い。写真映りは１stの方が上、失礼しました。　（内田）



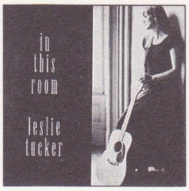
LAURA ALLAN
Reflections
L P/Hear & Now 18-7302-1　'80年

生き残ったヒッピーが10年を経てニューエイジに向かう。その時の浄化を感じさせるアコースティック・ミュージックだ。もしくは自然讃美的な。人間も動物も大地も植物も空気も、みんな等しく恵みあってここに在る、といったパターンの。'60年代後半をサンフランシスコで育し、その後コーラス隊とFLOATING LOTUS MAGIC OPERA COMPANYというグループに入ったとライナーにあるわけだ。ツィターが湖面のきらめきをイメージさせ、そこにスキャットふうの彼女の声やゲストのフルートが舞うように流れては現われ消える。だから浄化されてメディテイショナルでもある。独特の雰囲気を持ったアコースティック・ミュージック。インテリジェントいうには温かみがある。NYの録音。Ａ面３曲、Ｂ面１曲。　(松本)



LAVA HAY (Canada)
With A Picture In Mind
CD/Network W2-30066　'92年

かのロビー・ロバートソンが大絶賛したというカナダのフォーク・デュオ。アメリカの一連の作品のようなカントリー色はなく、どこか'60年代を思わせるサイケ・トーンを帯びているのが特徴といえる。バタバタしたリズムにうねりを上げるハモンド、気だるいヴォーカル。そのいずれもが「古き良き時代」を思い起こさせ、とても心地良い。若いファンにはカーディガンズとかシナモンとか、ああいう「渋谷系」の音を引き合いに出すと分かり易いと思うが、確かにその手の音にハマっている人に何気に気かせると意外と支持されそう。クラシカルなチェロなどフィーチュアしてどこかサラッと流れていかないもどかしさが最高。'90年代という時期にこのような作品がメジャーから出て来たのは喜ばしい限り。　(内田)



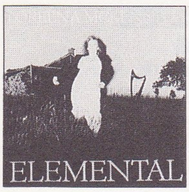
LESLIE TUCKER
In This Room
CD/Compass 7 4288 2　'95年

今やすっかりジャンル化したナッシュビル・カントリー・フォーク・ロック・シーン（うっ、長い）の奥の深さをまざまざと見せつける隠れた名盤。いわゆる「カントリー色」は薄く、そのウェットでありながら気品のある音作りはむしろアイリッシュやスコティッシュにおける最良策のSSW系作品を想起させる。そこで数名のメアリー・ブラックにハマってしまった一般リスナー（ただし対象はすべて女性）に聴かせてみたいところ、全員がいたく気に入ってくれた。皆一様に「心が洗われる」のだと言う。散々タメを効かせておいてクライマックスで一気に盛り上がるメロディは涙物。キラキラしたピアノや室内楽風のチェロも最高の演出効果をあげる。個人的には「カントリー系女性ソロ・シンガー大賞」をあげたい。(内田)



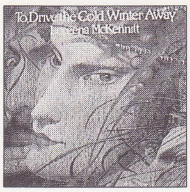
LISA MEDNICK
Artifacts Of Love
CD/Daja Disc DCD7209　'94年

英フォーク・ルーツ誌のオマケについていたサンプル・オムニバスCDの中でたなびくオルガンと沈むような曲想が気になり、ずっとチェックを入れていたテキサスの女性シンガー。マイナー・リリースのため当然日本のマーケットでは見つからず、結局'94年渡欧時にようやくゲットした。で、聴いてみるとこれが意外とストレートなフィーメイル・ロック。キレの良いリズム・セクションや乾いた音色のギターなどを配し、往年のリンダ・ロンシュタットのそれを思わせる小粋なカントリー・ロックが肩を並べている。初めて聴いた時は少し当惑ったが、これがカッコいい。やはり自演によるクセの強いハモンド・オルガンが曲に新鮮なアクセントを与えているのだ。③⑤⑧は当初のイメージ通り。　(内田)



LOREENA McKENNITT (Canada)
Elemental
CD/Quinlan Road QRCD 101　'85年

カナダ、そして今やワールド・ワイドにその名を広めているトラディショナル・アーティスト、ロリーナ・マッケニットの記念すべきデビュー・アルバム。元をたどればアイリッシュの血を引く彼女がケルト音楽に目覚めたのはアラン・スティーヴェルのアルバムを耳にしたことが契機であり、その後ケルティック・ハープと声楽を学び、満を持して'85年に本作が完成した。よく引き合いに出されるエンヤが登場する１年も前のことである。〝Blacksmith〞をはじめとするトラッドの名曲を多く取り上げ、後のアルバムと比べると未だ模倣の域を出ていない感はあるものの、独特のリヴァーヴをかけたアレンジによるサウンド・スタイルは既に確立されている。定番トラッドよりはオリジナル曲の今後につながる種が見える。　(内田)



LOREENA McKENNITT
To Drive The Cold Winter Away
CD/Quinlan Road QRCD 102　'87年

当時はクリスマスのためのスペシャル・アルバムとしてリリースされていた２作目（アイルランドや北欧など、特にクリスマスを重要視しているエリアではこのような企画アルバムが限定発売されるケースが多い）。対外的にディストリビュートされるという意図はほとんど見られず、結果全作品中最も内省的でプライヴェート色の濃いものとなっている。シンセ類は一切用いず、生楽器とヴォイスのみによる必要最小限のバッキングに乗せてアイルランドやスコットランドのクリスマス・キャロルを冷ややかに歌う。イメージはまさしく「冬」。そのシンプルさはかえってクリアーな歌声を強く引き立て、クリスマスのもつ厳かなムードを演出するのに一役も二役も買っている。　(内田)



LOREENA McKENNITT
Pararell Dreams
CD/Quinlan Road QRCD 103　'89年

ハープの弾き語りによる「美的トラッド路線」を集大成し、頂点へと登りつめた感のある3作目。まず自作曲が大半を占めてオリジナリティを増し、曲の表情も実に豊かになった。アレンジ面でもクラシカルな色合い（これが曲によくマッチしている）を加えるなど飛躍的な成長を遂げ、美しかったがやや平板な印象が否めなかった1stあたりと比べると格段のシェイプ・アップ振りである。エンヤの台頭以来この手のケルティックものは一時「ニュー・エイジ」というジャンルに一括りされる傾向があったが、この言葉から想定される「イージーさ」とは全く異質の切るようなテンションがこの作品から強く感じられるのが頼もしい。チェロやイリアン・パイプといった生楽器の配し方も絶妙だ。　(内田)



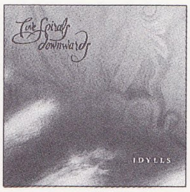
LOREENA McKENNITT
The Visit
CD/WEA CDB 75151　'91年
/WEA WMCS 5-471

デビュー以来の3作ではシンガー、そしてプレイヤー（ハーピスト）としてのスキルを磨き、着実な成長を遂げてきたロリーナだが、この4作目でその音楽的視野を拡大、トータル・サウンド・オーガナイザーとして新たな視点からケルト音楽を見つめ直すという方法をとった。わずかな例外を除いてハープの弾き語りは影をひそめ、エレクトリック楽器をも取り入れた幽幻なアンサンブルが全体を支配するようになったのである。トラッドの定着〝Bonnie Portmore〟や誰もが知っている〝Greensleeves〟などがあたかも別曲のようにアレンジされ、新たな生命力を吹き込まれているのだ。テニスンの詩にインスパイアされた〝The Lady Of Shalott〟は10分を越える力作。新境地として高く評価できる。　(内田)



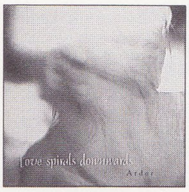
LOREENA McKENNITT
The Mask And Mirror
CD/WEA 4509-95296-2　'94年
/WEA WPCR 174

通算5作目。ボシー・バンド、ムーヴィング・ハーツ等を渡り歩いたアイルランド・トラッド界の最重要人物ドーナル・ラニーのバックアップを得、音楽的に更なるスケール・アップを見せつける。1曲目のフレアーク「Bal Masque」導入部を思わせる中世風のコーラスの使用に度肝を抜かれるが、そのシリアスさがもたらす緊張感は最後まで続き、片時も気を抜くことができない。シンセサイザーやエレクトリック・ギター、ドラムス等を用いてはいても決してイージーにはならず、ハーピスト兼シンガーが陥りやすい「キレイ・キレイ路線」とは方向性を全く逆にするアプローチだ（実はハープをほとんど弾いていない）。加えて大作志向。ストリングスを導入した大曲⑦は圧巻である。完全に一皮むけた。文句なしの傑作。　(内田)



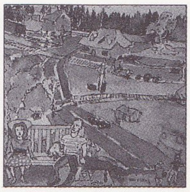
LOVE SPIRALS DOWNWARDS
Idylls
CD/Projekt PR036　'92年

イタリアのORDO EQVITUM SOLISもディストリビュートしているアメリカのゴシック・アンビエント専門レーベル、Projektからの作品。いろいろ聴いてみたがこれが最もしっくりときた。まどろみ系の女性ヴォーカルとドリーミーな曲想、こう書くとまるでSEA HORSESだが確かに類似する部分は多い。ただ、バックが多少クリアーに流れすぎるため、「うつむき度」という点ではやや弱いか。とは言っても仲々の好作品ではあるので、流れに身を任せてまどろみたい方には一聴をオススメしたい。次作に期待を持たせるだけの「タネ」は持っていると思う。　(内田)



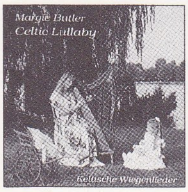
LOVE SPIRALS DOWNWARDS
Ardeur
CD/Projekt 51　'94年

第2弾。COCTEAU TWINS→THIS MORTAL COILあたりの4AD耽美派や近年のヒーリング物とクロスする作風は前作と同一の路線。しかしメリハリが少なくのっぺりしていた前作からするとリズムが押し出されて抑揚がつき、よりスッキリと聴けるようになった。いわゆる「ゴシック的」な暗さは少なく、アコースティック・ギターを多用した清楚な音作りとクセのない素直な声質のフィーメイル・ヴォイスは「闇」というよりは「朝もや」の風景にも似た爽やかさすら感じてしまう。女性ヴォーカル・フリークには無条件で好まれそうな音だが、ロック・ファンが聴くにはやや衝撃性に欠けるキライはあるかも知れない。まあ次作以降のさらなる成長に期待しませう。　(内田)



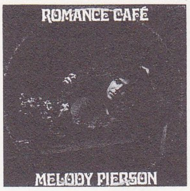
THE MAGNETIC FIELDS
Distant Plastic Trees
CD/Red Flame RFCD3　'91年

ニュー・ウェイヴ風バッキングの中を流れる浮遊感漂う女性ヴォーカル。恐らくソチラの筋のグループと思われ、結構凝った手法も取られているがメロディはあくまで純粋無垢、昨今の耽美派には見られぬ「素朴さ」がむしろ新鮮だ。子供時代を想起させるようなどこか懐しい香りのする音空間は「擬似アコースティック・サウンド」という形容がピッタリだ。スチュワート＆ガスキンを思わせる部分もあるが、何故か日本の「クレヨン社」を思い浮かべてしまったネオアコ・ミーハーの私。アメリカ産。　(内田)



MARGIE BUTLER
Celtic Lullaby
CD/ARC Music EUCD 1191　'91年

GOLDEN BOUGHの看板ハーピスト兼シンガー、マーギー・バトラーが'91年にリリースした初のソロ・アルバム。グループではヴォーカル・パートを男性と分け合っているのだが、「彼女のエンジェル・ヴォイスをもっとじっくり聴きたい」という向きにはまさにうってつけの作品といえる。タイトルの「ララバイ」が示す通り、ケルティック・ハープのつま弾きをバックに愛し児を優しく寝かしつけるような慈愛に満ちたナンバーが並ぶ。アルバム・カヴァーの写真がこの作品の本質を最も端的に言い表しているかも知れない（この構図はスゴく良い）。GOLDEN BOUGHより美の核のみを抽出したかの如き素晴らしい作品。極上の胎内回帰音楽。（内田）



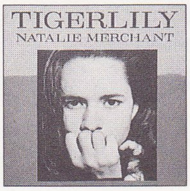
MELODY PIERSON（Canada）
Romance Café
LP/Solo SO 25509　'?年

ケベックの女性ヴォーカル物と言えば、何と言ってもAnne Joyal「Evil」（1st）とカナダのCatherine How？Fabienne Thibaultの「1st」が知る人にとって評価が高いが、他にも優れた作品が多く、どれから紹介していいのか困ってしまうが、Michel Le Francoisプロデュースという話題性も合わせて、とりあえず本作を紹介しよう。アコースティック・ギターを中心に洗練されたフォーク・ロック・サウンドの上を、うっすらとヴィブラフォンやフルートが花を添え、微妙な息づかいのしっとりとした声を聴かせる彼女のヴォーカルが被さる、落ち着いた内容だ。彼女の作品はこれ一作しか確認できていないが、他にもあるかもしれない。（秦田）



THE MURMURS
The Murmurs
CD/MCA mcad-11086　'94年

ジャケだけを見ると「おっ、今時シャンプーの二番煎じか」とか「ロリータ系フレンチ・ポップスか」とか思うかも知れないが、内容の方はというとこれがINDIGO GIRLSを思わせる至って地に足のついたフォーク・ロック。歌い方はジャケ通りにぶりっ子ぶりっ子した箇所はあるものの、チェロやアイリッシュ・ホイッスル、イタリアン・パイプまで導入した曲調はしっとりと落ち着いており、完全にオトナの音である。アップ・テンポのロック・ナンバーも良いが、アコースティックなバラードも一連のナッシュビル系に劣らぬ仲々の出来。白塗りのメイクで年齢不詳だが結構キャリアを積んでいそう。きっとライヴ映えもするだろう。強調するが「ジャケで判断してはいけません！」（でもシャンプーは好きです）。（内田）



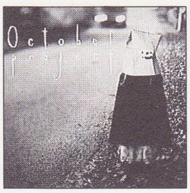
NATALIE MARCHANT
Tigerlily
CD/Elektra 61745-2　'95年

御存知10000MANIACSの女の子。遅ればせながら初のソロ・アルバムである。バンドにおいてはちょっと気だるいムードのポップ・サウンドを歌っていた彼女、ここではこれまであまり目立っていなかったジェントリーな面などが思い切り表に出て来たりして、結構新たな魅力を発見出来たのは大きな収穫だった。曲は総じて穏やかなものが多く、ロー・トーンの枯れたヴォーカルがピアノやアコ・ギのバッキングと程良く調和している。たなびくようなオルガンの音色もまた格別。あらゆる面において良い意味で「等身大」としての彼女の「味」が上手く出ている。しかし裏ジャケの写真。バンド時代は気づかなかったけどとってもいい笑顔をする女性だったのですね。これからも頑張って下さい。（内田）



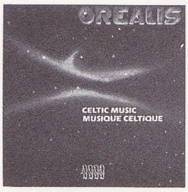
THE NEW ST. GEORGE
High Tea
CD/Folk Era FE1415 CD　'95年

'70年代のエレクトリック・トラッドをシンフォニックな味付けで抑揚をつけたようなサウンド。女性ヴォーカルのパートも多く、またリズムも強い。そしてメロディの装飾音も多くて、トラッド独特の土臭さをロックにスライドさせることでアク抜きしたような音だ。部分的にかつてのグリフォンのような所もあるので、トラッド・オンリーでは物足らないと思う人には向くかもしれない。逆にトラッドの深い情感を求める人にはどうか……。トラッド・ロックの好作ではあると思う。割と大味な所が耳についたが。（松本）



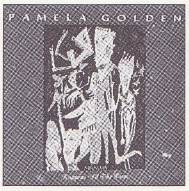
OCTOBER PROJECT
October Project
CD/Epic EK 53947　'93年

南部ナッシュビル出身のアコースティック系ポップス。女性ヴォーカルをメインにアコ・ギ、複数の弦楽器でまろやかな流れを出し、陽気にならず沈まずの線でメロディックに通す。全体に中庸でポイントが散漫ながら、軽く流すにはリラックスした流れの柔かさがちょうどいい。従ってポップスとは言っても型押し物ではなく、むしろ'60〜'70年代のアメリカ女性シンガーの良質な所を受け継ぐような感性を感じさせるものなので、多くを期待しなければ好作ともなるはず。要の〝流れ〟にしても少々栄養豊富だが、そこは秋風ふうに涼しいので問題なし。（松本）



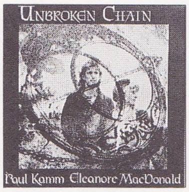
OREALIS
Orealis
CD/Green Linnet GLCD1106　'90年

ハンマー・ダルシマーやシンセサイザーをフィーチュアしたスコティッシュ系インストゥルメンタルを奏でるグループ。各楽器のクリアーな音色とサラリとした引っかかりのないサウンド・スタイルはトラッドというよりはニュー・エイジやイージー・リスニングの分野に属するものであり、発表当時もそのような扱いを受けていたようだ。トラッドを様々なフォーマットで伝播しようとしていたGreen Linnetレーベルの意図がうかがえる。ホイッスルやアコ・ギを隠し味にケルティックなフレーバーをたたえた楽曲はあまりにも耳あたりが良く、比類なき「夢想感」を漂わせている。これは全編に亘って鳴らされるソフトなハンマー・ダルシマーのフレーズのせいなのだろう。トラッドとニュー・エイジの接点としては良質。　(内田)



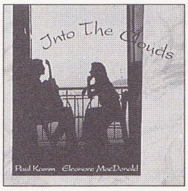
PAMELA GOLDEN
Happens All The Time
CD/Miramar 7001　'91年

いったい何者だこの女は？　トニー・レヴィン、ジェリー・マロッタ、ラリー・ファストといったフリップおかかえの強物達がこぞって参加。バックも新生クリムゾンに非常に近いものがあるのだが、ヴォーカル・スタイルがトーヤではなく、ジュリー・クルーズを思わせるフワフワしたものであったためにこれが問題作となってしまった。メロディは明るく声も可愛らしいのに、計算し尽した音作りのためかトリッキーな印象を受け、たとえ優しげに歌っていてもうかつに感性移入ができない。彼女のキツそうな目もキマっている。(内田)



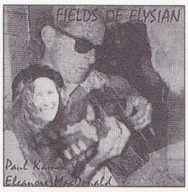
PAUL KAMM & ELEANORE McDONALD
Unbroken Chain
CD/Freewheel FR102 CD　'89年

カリフォルニアはネバダ・シティの男女フォーク・デュオでこれまでに4枚のアルバムを発表している。名前からしてアイリッシュの血を引いていると推察され、またサウンドの方もカントリーのようなアメリカ臭さはほとんど感じられず、どこかケルティックでクールな香りが漂う。本作は地味ながらも好作品であったデビュー・アルバムに続く2作目で、楽曲の出来がグッと良くなり、ほとんどアコ・ギがメインのシンプルなフォームにもかかわらず、シリアスで切るようなテンションすら感じられるまでになった。大半でリードを取るのは男性のポールの方なのだが、クライマックスでエレノアがユニゾンでハーモニーをかぶせる展開が最高。コンテンポラリー版バート＆ジャッキーといった感じか。　(内田)



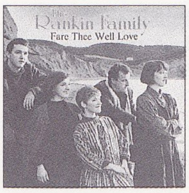
PAUL KAMM & ELEANORE McDONALD
Into The Clouds
CD/Freewheel FR103　'91年

シンセ類の使用頻度が増え、より洗練されたイメージの3作目。ちょっとつき放したような感じのクールな楽曲（これは良い意味、念のため）が多かった前作と比べるとメジャー・コードを多用したハートウォームさが目立ち、メロディのウェットさがより強調されている。一聴かなり取っつき易い音だが、一方ギター等によるバッキングは相変わらずのハイ・テンションなので決してイージーには流れていかない。前2作ではバッキング・ヴォーカルに徹していたエレノアも2曲ほどでリードを取るようになった。これが近年人気のクリス・ワイルあたりを思わせる絶品のシンギング。温もりのある声質と歌唱力によって歌われるこれらの曲を聴くと是非ソロ・アルバムを作ってほしいなどという邪な期待をしてしまう。　(内田)



PAUL KAMM & ELEANORE McDONALD
The Field Of Elysian
CD/Freewheel FR104　'95年

'95年最新作。片割れのエレノアが「これは絶対の自信作。今までで最高！」と語る通り、これまでの作品の良い部分を抽出、発展させたかのような快心の出来となっている。前々作で見せたシリアスさ、前作で見せたコンテンポラリーさが理想的なバランスで溶け合った各楽曲はどれも完成度が高く、個人的にはダギー・マクレーンの傑作「Marching Mystery」をも思い浮かべたほどだ。フルートやエレクトリック・ベースの導入などで適度なアクセントがつき、またエレノアのリード・パートの比重が高くなっているのも嬉しい。フルートが効果的な④、クラシック・ギターを全面フィーチャーした新境地の⑦、そして名手マーティン・シンプスンをゲストに迎えたタイトル・トラックが特に秀逸。鮮烈なインパクトを残す。(内田)



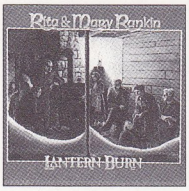
THE RANKIN FAMILY (Canada)
Fare Thee Well Love
CD/Rankin Family RFCD-9001　'91年

BARRA McNEILSのアルバムでベーシストとして参加していたチャド・アーウィックがプロデュース、事実上の兄弟バンドとも言うべきファミリー・トラッド・バンドの2作目。トラッド寄りだったデビュー作と近年のコンテンポラリー路線の過渡期にあたる作品であり、ポピュラー・ミュージックのフォーマットを取り入れながらもまだまだ後作ほどはアカ抜けていない。しかしこの危ういバランスが最大の魅力となっていることもまた事実。トラッド的な「深み」は特にメロディアスなバラード・チューンにおいて効果を発揮する。ファミリー・バンドらしく女性が3人もおり、そのいずれもが女性ヴォーカル・ファンを納得させるキュートな声質の持ち主だ。因みにはヘザーが好み。(内田)



TE RANKIN FAMILY
North Country
CD/EMI E2 80683　'93年

3作目。兄弟バンドともいえるBARRA McNEILSとほぼ同一の方向へと向かっているのはまず間違いないが、こちらは女性ヴォーカルがリードを取るパーツが増し(ほぼ大部分を占めている)、編成上の利点を上手く生かしきっているといえる。どちらかといえばこのグループの方がトラッド色を強く残しており（スコティッシュ・フレーヴァーが心地良い)、とりわけ3人の女性シンガーがゲール語の歌詞をユニゾンで歌う〝Ho Ro My Nuts Brown Maiden〞はアルバム最大の聴きものとなっている。インスト・パートにおける演奏技量も仲々のもので、テクニカルなピアノや力強いリズム・セクションなどは結構インパクトがある。ライヴを観たいものだ。　(内田)



RITA & MARY RANKIN（Canada）
Lantern Burn
CD/CBC 7885-12001-2　'94年

これはカナダの姉妹デュオ。名義は2人であるがフィドル、キーボード、リズム・セクション等の多彩なゲストが加わり、女性2人をメインとしたバンド形態のグループと考えてもさし仕えないだろう。そして本作、これが良い。ケルト系トラッドを抜群のセンスで料理した理想的なコンテンポラリー・トラッドである。ギター、フィドルのような生楽器には伝統曲の「重み」がしっかりと宿り、ピアノやシンセが演出する現代的な「叙情」と見事に融合している。曲が、そしてヴォーカルがまた、いいんだ。これまで来ればもう何も文句はない。名作。　(内田)



SARA McLACHLAN（Canada）
Touch
CD/Arista ARCD 8594-2　'89年
/BMGビクター BVCA 123

カナダはハリファックス出身の感覚派女性シンガー。本デビュー作がアメリカや日本のマーケットにもディストリビュートされ、スマッシュ・ヒットを記録した。透明感あふれるナチュラルなサウンドとハッとするようなメロディが印象的で、至る所で彼女の鋭敏な感性がキラリと光る(当時弱冠20歳というから驚き)。起きヌケに効果抜群の目のさめるクリアー・ヴォイスは子供の頃から声楽の訓練を受けてきたという筋金入りで、とりわけなまめかしいファルセットなどは鳥肌ものだ。クラシカルな味付けとエコーを多用した音響処理はヴァージニア・アストレイを、ストレートなシンギング・パーツはシンニード・オコーナーを思わせたりもする。日本のアコースティック・シーンに与えた影響も大きい。　(内田)



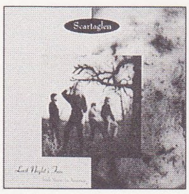
SARA McLACHLAN
Live
CD/Network W2-6313　'92年

ショッキングなデビュー作に続く2作目「Solace」はサウンド面でのキラキラした装飾を捨て去り、ジョニ・ミッチェルやシンニード・オコーナー張りのストレートさを強調していたが、やはり卓越した歌唱が鮮烈な好作品であった。本作はその時のツアーからセレクトしたライヴ・アルバムで、ラストの〝Ben's Song〞以外は全て2ndからの楽曲である。この「ストレート路線」はライヴになると一層映え、これを聴けばスタジオ・テイクはいらないと言えるほど演奏、歌唱共充実している(同年に来日公演を行い、1stの曲も数曲演奏していたがやはりライヴ向けにアレンジし直されていた)。次作「Fumbling Toward Ecstacy」ではよりメジャー化が進み、良質のポップ・ロック・アルバムへと変化を遂げた。　(内田)



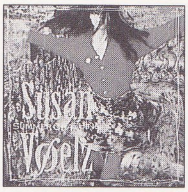
SARAH NAHGOURNEY
Realm On My Senses
CD/ポリスター PSCW-5028　'93年

マンハッタン育ちの生粋なニューヨーカー。期待の大型女性新人SSWが満を持してリリースしたデビュー作。分類してしまえば近時のサラ・マクラクランやナタリー・マーチャントのソロあたりと同列のフィーメイル・ポップ・ロックということになるのだろうが、どこか醒めていてスレ切ったムードは「都会派」の香りをプンプン漂わせている。ポップな中に感じられるある種の「毒気」は歌詞に見られるようなセックスや暴力といったうしろ暗いモチーフに由来するのだろう。アレンジもかなり凝っており、確かにトーヤやジェーン・シベリーが引き合いに出されるのが分かるような気がする。トニー・レヴィン、ジェリー・マロッタのテクニカルで無表情なリズムが「スパイス」として毒気をさらに増強させる。　(内田)



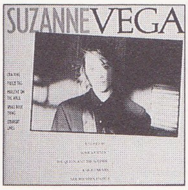
SCARTAGLEN
Last Night's Fun
CD/City Spark 3342　'92年

シンガー、コニー・ドーヴァーが在籍しているアメリカはカンザスシティのトラッド・グループの最新作である。確かなコニーの歌唱力に支えられたバラッドやマウス・ミュージックにダンス・チューンが入りまじった典型的なトラッド・アルバムで、タイプとしてはデ・ダナンやカパーケリーに近い。テクニックも高くこの手では手離しでお薦めだが、やはり光るのはコニーの歌うバラッドの素晴らしさ。不朽の名曲〝Rosemary Lane〞の優しくももの悲しい旋律を聴くと思わず目頭が熱くなってしまう。　(内田)



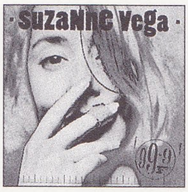
SUZAN VOELZ
Summer Crashing
CD/Dixiefrog DFGCD 8432　'94年

テキサスの風変わりな女性SSWのこれは２作目。それ以前はシカゴに拠点を置くPOIDOGSというバンドでヴァイオリンをプレイしていた変わり種である。叙情的な曲からガレージ風の曲、果てはケイト･ブッシュ風の曲ありと結構雑多であるにもかかわらず､カラーは意外と統一されているから不思議だ。それを言葉で表せば「けだるさ」だろう｡とにかく聴いていると妙な気分になる。オープニングはゲストを交えた弦楽四重奏団によるサロン風のインストだが、そこで彼女と一緒にヴァイオリンを弾いているのがあのIngrid Karkinsだ。
（内田）



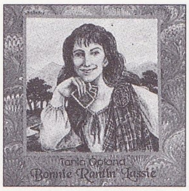
SUZANNE VEGA
Suzanne Vega
CD/A & M CD-5072
/ポリドール POCM-1844　'85年

'60年代のジョーン・バエス、'70年代のジョニ・ミッチェルに継ぐアメリカン・コンテンポラリー・フォーク'80年代の女王的存在。本人はあまり意識していないのだろうが、'90年代のニュー・カマー達にかなりの好影響を与えていることは確かだ。このデビュー作より３作目までは耳あたりのソフトな「弾き語り的」フォーク・ソングが主流を占めているが、オープニングの〝Cracking〞をはじめとして曲には絶大な存在感がある。モチーフの中には戦争など社会問題を含む重めのものが多く見られ、結構メッセージ色が強い。しかしそれをストレートにぶつけたりせず、アコースティックなオブラートに包むこと。これがシャイな彼女の最良の表現方法なのだろう。〝トムズ・ダイナー〞だけで語っていけない。
（内田）



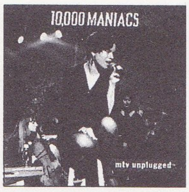
SUZANNE VEGA
9.99F
CD/A & M 31454-540005　'92年
/ポリドール POCM 1002

スザンヌ・ヴェガといえば線の細いフォーク・シンガー、これは間違い。本人も認める通り非常に内向的であった彼女は、子供の頃からマセた目で世の中を見ていたのだろう。彼女の歌の中には孤児の悲しみとか戦場へおもむく戦士の心情とか、そういったモチーフが実に鋭い切り口で強烈なメッセージへと転化されている。この４作目は前３作のアコースティックな方法論が影を潜め実験的なアプローチがなされているが、音は変わったといわれる割には本質的な部分は全く変わっていない｡歌うことに関してはシンの強い女性だ。
（内田）



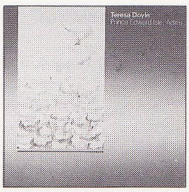
TANIA OPLAND
Bonnie Rantin' Lassie
CD/Tania Opland TM5RL　'93年

ワシントン在住の女性シンガーで､これがデビュー作と思われる。イングランド･ケルト系トラッドの他バルカン半島やフランス等様々な地域の伝承曲を自らのプレイするリコーダー、ハンマー・ダルシマー､チターなどを用いて自分のカラーに上手くまとめ上げている。プリミティヴに響くヴォイスは「土の香り」を強く残しているものの、ハンマー・ダルシマーのドリーミーな音色がそれを程良く緩和して聴き易い｡イングリッシュ･トラッドの名曲〝Death Of The Lady〞を絶妙のアレンジで聴かせたかと思えば、ウクライナの伝承歌〝Podolyanochka〞では呪術的な側面も見せ、研究熱心さが窺えてかなり面白い。アンドリュー・クロンショウにも通ずる。
（内田）



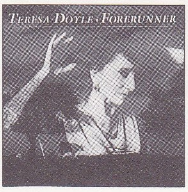
10000 MANIACS
MTV Unplugged
CD/Elektra 9 61569-2　'94年

アメリカMTVの企画番組に端を発したアンプラグド・ブームは超メジャー・アーティストを含む様々なアーティストを巻き込んだ。一部に「乱発しすぎ」との批判もあるようだが、本当に「良い」曲がアコースティック･サウンドとマッチングした時の効果は絶大で、一言で「ブームだから……」などと片付けたくはない。そんな中で行われた10000のアンプラグド･ライヴはなかなかの高得点。弦楽器による気品あるバックでナタリーの「女性らしさ」が一段と映え、これまでになかった新たな魅力をそこかしこに発見できる。こんなに良かったんだあ。CDの他にビデオ･ソフトも出ており、ここではナタリーの背後でせわしくなく動くジェリー・マロッタの姿を拝むことができる。
（内田）



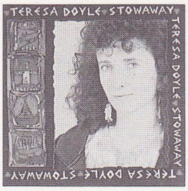
TERESA DOYLE（Canada）
Prince Edward Isle Adieu
ＬP/Bedlam TD 1987　'87年

人口のかなりの割合をスコティッシュが占めるカナダはプリンス・エドワード島きっての女性シンガー。'87年の本作は知る限りで最も古いレコーディングだが、恐らくかなり以前からキャリアを積んでいるものと思われる。当然ながらケルティック･トラッドがベース。しかし同じケルティック・カナダのRANKIN FAMILYあたりが見せる大陸的な大らかさは少なく、むしろスコットランド本土のそれに近い本格派の音である。悲し気なフィドルや荒涼とした野原を思わせるホイッスルが印象的なくぐもったバラードはちょうどフィオナ・ジョイスあたりを思わせる重厚なものだ｡彼女もまた名曲〝Crazy Man Micheal〞をカヴァーしている。地味ながら名盤といっても差し仕えないように思う。
（内田）



TERESA DOYLE
Forerunner
CD/Bedlam TD002　'91年

多数のゲスト陣を迎えて制作された２作目。大半がトラッドであった前作に対して本作では約半数がオリジナル曲となり、幾分コンテンポラリー風の味つけが施されるようになった。ベースがケルトであることには変わりはないものの、新たにシンセやエレピを導入し、ジャズやカントリーのフレイヴァーを漂わせて意外とバラエティに富んでいる。ニュー・ファンドランド島に起源を発し、セシル・シャープ等を通じてイングランドでもポピューラーになった〝She's Like A Swallow〟はFAIRPORT CONVENTIONも近作で取り上げているトラッドの大名曲で、ここではチェロ一本のみによる必要小限のバッキングと端正なシンギングが聴き手の心を打つ。前作に全くヒケを取らぬ好盤。（内田）



TERESA DOYLE
Storeway
CD/Bedlam TDC003　'93年

前２作とは傾向を異にし、この３作目ではドラムやベース、泣き系のエレクトリック・ギターといったロック楽器を初導入し、フォーク・ロック的な色彩を強めている。今回は再び収録曲の大半がトラッドとなっているが、独特の重み、深みにロック的な「張り」が加わって聴き応え十分。この手としては珍しいに違いないトランペットの柔らかな音色がとてもユニークで、言葉では言い表せないほどの懐しさを呼び起こしてくれる。メロディアスなピアノをバックにゲール語で歌われるラスト・チューンの詩は19世紀初めにプリンス・エドワード島に渡ったスコットランド人が望郷の思いを込めて書き上げたもの。本作発表後彼女はアコースティックの原点に立ち戻り、日本人リュート奏者との共作アルバムを発表。（内田）



TERESA MORGAN
Higher Places
CD/Skookumchuck SK-120CD　'90年

ワシントン在住のシンガー。現時点で唯一のソロ・アルバム。ご多分にもれずこの作品もカントリー色を帯びており、曲想もハスキーな声質もやはり「アメリカン」である。しかし乾いた中でクォーター泣きじゃくるメロディが素晴しく、曲の出来も良くて「捨て」が全くない。アコースティック・ギターの優しいアルペジオに低いトーンのヴォーカルがかぶさり、クライマックスでフィドルやホイッスルが思い切り盛り上げるというお約束の展開が続くのだが、これがひどく感動的。フイドルがサビを演出するタイトル曲など最高である。近年のアルビオン一派、特にクリス・ウィルのソロ・アルバムにハマっている人に強くススめてしまおう。アシュレイ・ハッチングスが近時最も好みそうなタイプ。（内田）



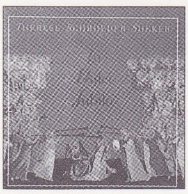
THERESE SCHROEDER-SHEKER
The Queen's Mystrel
CD/Windam Hill WD-1074　'88年

ケルティック・ハープやプサルテリー、リコーダー等を自在に操る女性マルチ奏者のデビュー・アルバム。ウィンダム・ヒルのウィリアム・アッカーマンの目に止まってのリリースとなった。彼女の作品はいわゆる「ハープの弾き語り」に属するものなのだが、例えばロリーナ・マッケニットあたりと比べても素材に対する組み方はかなり学究的というかシリアスであり、土の香りに全く縛られないピュアな音作りはアンドリュー・クロンショウに非常に近いものがある。氷のように冷たいハープの音色と暖かなメロディとの対比が絶妙。ハープの他にリコーダーや各種パーカッション、コーラスなどを幾重にもオーヴァー・ダブした緻密な音作りは「アーティスティック」と言えるほど。録音も恐ろしくクリアーだ。（内田）



THERESE SCHROEDER-SHEKER
Rosa Mystica
CD/Celestical Hermonies 13034-2
'90年

ドイツのPOPOL VUHもディストリビュートしているアメリカのニュー・エイジ専門レーベルCelestical Hermoniesに移籍しての２作目。これがいきなりの大傑作である。インスト志向だった前作にとって代わって彼女自身のこの上なく美しいエンジェル・ヴォイスが全編に亘って響き、曲の方も６～９分の大作がズラリと並ぶ。ほとんどハープのみという必要最小限のバッキングはシンプル極まりないものだが、冷ややかでキメ細やかな爪弾きと心暖まるシンギングの調和が最高。クロンショウやB. J. リンダー張りに緊張しながらもうっとりと昇天してしまう。冷徹でヒューマン。まだ無垢だった頃の無防備な自分をついさらけ出してしまいそうな「カタルシス・フォース」が詰まっているのだ。必聴。（内田）



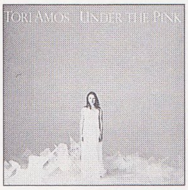
THERESE SCHROEDER-SHEKER
In Dulu Jubilo
CD/Celestical Hermonies 13039-2
'91年

ヴォルテイジ極限の前作からわずか一年余で発表された３作目はケルティック・ハープ奏者定番のクリスマス曲集である。お馴染み〝Ave Maria〟を含む中世古謡がセレクトされ、キメ細やかなバッキングは相変わらず。しかし曲想がややシンプルナイズされたこともあって、美しさに身を委ねながらリラックスして楽しむことができる。タイトル曲はマイク・オールドフィールドも取り上げていた14世紀ドイツの古謡であるが、基本メロディは同じでも全く別物と言えるほど両者の中世音楽に対する解釈、バックグラウンドの相違が見えて面白い。本作後しばし沈黙してしまうが、近年ニュー・エイジ畑のキーボード奏者、ビル・ダグラスの作品にゲスト参加。１曲のみだが美しいヴォイスを披露してくれた。（内田）



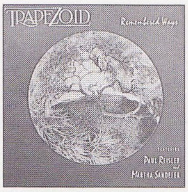
TORI AMOS
Little Earthquake
CD/Atlantic 82358-2 '91年
/イースト・ウェスト WMC 5-488

ギンギンのメタル・パンクをやっていたトッポいネオチャンが何を思ったか突如大変身、名前まで変えて摩訶不思議な超感覚のポップ・ワールドを作り上げてしまった。高音部で意図的に声を裏返したりと、唱法はケイト・ブッシュから多くのことを学んでいるようだが、ケイトにはない妙な清楚さ、素直さを持ち合わせており、強力なオリジナルティを引き出している。バックはかなり静的であるが、一風ヒネたフレーズを発するピアノは特に印象的。オーケストラをさりげなくフィーチュアした〝China〞はけだし名曲である。
（内田）



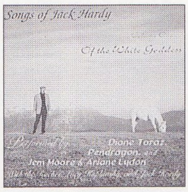
TORI AMOS
Under The Pink
CD/East West 7567-82567-2 '94年
/イースト・ウェスト AMCE 653

２作目。ニュー・アルバムへの期待がいやがおうにも高まっていたが、まずはそれに違わぬ明確な回答を呈示してくれたといえよう。サウンドは「簡素化」への方向への進み、バンド形態の曲によりストレートに、またバラード・ナンバーではピアノとオーケストラのみによるシンプルなアレンジへと変化している。しかしそれが彼女のヴォイスとのコントラストを強め、そこに内在する彼女の鋭敏な感性が一層際立っているように思える。こうした「新感覚」の女性ヴォーカル物は３作目がターニング・ポイントなる場合が多い。多くのメディアが指摘するであろう「ケイト・ブッシュとの類似性」を受けて今後どのような路線を進むのだろう。９分に及びラスト曲にその答えは隠れているような気がするのだが。
（内田）



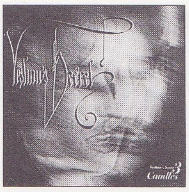
TRAPEZOID
Remembered Ways
CD/Azure ZD53001-2 '94年

ウエスト・ヴァージニアに拠を置くアメリカン・ルーツ志向を持ったフォーク・グループで20年の活動歴を誇り、アルバムも多数発表している。そのキャリアの中で彼らは出身地から予想されるカントリー・ミュージックやルーツ・トラッド、更にはサンディ・デニーのカヴァーなど様々なことを演ってきたのだが、クラシカルなヴァイオリンとシンセ群が幽幻な空間を作り出す本作は創造性という点では群を抜き、一際異彩を放つ。ミステリアスな空間美の中に溶け込む母性的なマーサのヴォイス、そのムードを一層盛り立てているのがまたしてもハンマー・ダルシマーなのである。例えばケイト・プライスのようなシリアスさはないが、アプローチにはかなり共通するものが感じられると思う。
（内田）



VISHNU'S SECRET
3 Candles
CD/(private press) 番号なし '94年

コクトー・トゥインズやデッド・カン・ダンスら４AD一派と同列、あるいは直接的に影響を受けたと思われる「耽美派」デュオ。重く沈むうつむき加減のメロディ・ラインやゴシック風のムードはなるほどその手のフィールドの典型とも言えそうである。こう書くとそれで終わってしまいそうだし、ヴォーカルも線が細くとり立てて個性的というわけでないのだが、それでもこの作品を印象づけているファクターがひとつある。何とメイン楽器にチェロを用いているのだ。時に優雅に、また時にはフリーキーにがなり立てる豊かな表現力は沈みゆく闇の世界を的確に描き出す。ヒーンと裏返る独特の音色はサンプリング・キーボード等ではまず出まい。これでもう少し曲に個性があれば……。
（内田）



ZUSAAN KALI FASTEU
World Beyond Words
CD/Flying Note CD 9001 '93年

多種多様な民族楽器を自在に操るアメリカの女性マルチ・プレイヤー兼シンガー。13年間に亘ってほぼ全世界を転々とし、様々な音楽イディオムを貪欲に吸収した恐るべき才女である。ジャズをベースにハープ、フルート(尺八を含む)、タブラ等の民族楽器を効果的に取り入れたインスト・サウンドはジャズともトラッドともつかぬ唯一無二の個性を放つ。エフェクトをかけた尺八のインプロヴィゼイションや３本のフルートのオーヴァーダブによる一人アンサンブルがあったりと、アイディアや奏法もかなりユニーク、一筋縄ではいかない。演奏技術のみならず、ヴォーカルでもロー・トーンとファルセットを巧みに使い分け、タダ者でないところを見せつける。Ingrid Karkinsに匹敵する「ラジカル才女」と認定せざるを得ない。（内田）



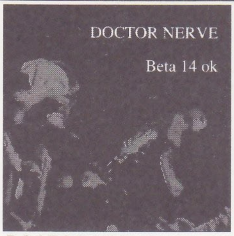
V. A.
Songs Of Jack Hardy Vol.1
CD/Beacon BCN10136-2 '95年

コロラド生まれのベテラン・ソングライター、ジャック・ハーディの曲を本項で紹介したDianne Taraz、PENDRAGON、Jem Moore & Ariane LydonらBeaconレーベル所属のアーティスト達が歌った企画アルバムの彼らの他にあのROCHESまでが参加しているのに驚く。こうして一同に聴くとハーディは本当に素晴らしい曲を書いており、その素朴で深みのある「良い」歌を上記ミュージシャン達が自分の持ち味を生かしながら見事に歌いこなしている。いや、ROCHESがあんなに懐の深いグループだったとは、これって彼女らのディスコグラフィー中ベスト・トラックじゃないですか。キラキラした音色が心地良いJem & Arianeも秀逸。最後はハーディ自身の枯れたバラードでシメる。これがもう泣かせるのなんの。
（内田）

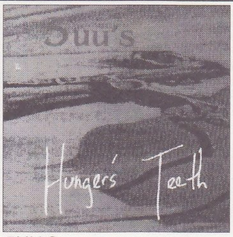
ディスクユニオン新宿店6F：プログレッシヴ·ミュージック



THE MUFFINS
/ Open City



DOCTOR NERVE
/ Beta 14 OK



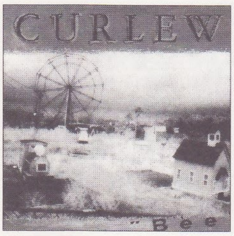
5UU'S
/ Hunger's Teeth



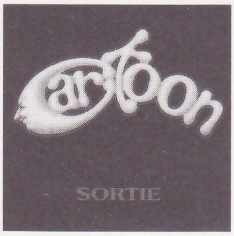
U TOTEM
/ same



BIOTA
/ Almost Never



CURLEW
/ Bee



CARTOON
/ Sortie



NIMAL
/ Voix De Surface

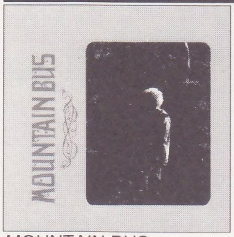


V. A.
/ Unsettled Scores



MIRIODOR
/same

ディスクユニオン新宿店1F：サイケデリック·ワールド



MOUNTAIN BUS
/ Sundance



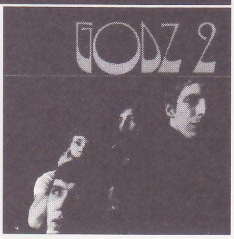
GTO'S
/ Permanent Damage



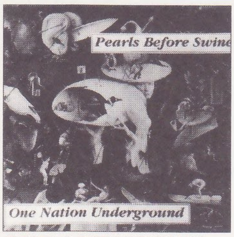
THE FUGS
/ First Album



THE SHAGGS
/ Rev - Ola



GODZ
/ 2



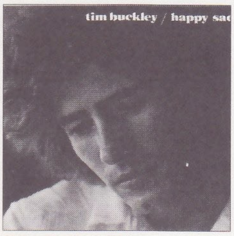
PEARLS BEFORE SWINE
/ One Nation Underground



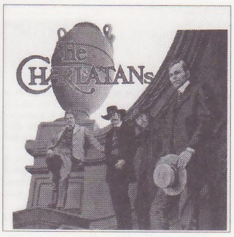
ERICA POMERANCE
/ You Used To Think



TRIPSICHORD
/ same



TIM BUCKLEY
/ Happy Sad



THE CHARLATANS
/ same

ディスクユニオン新宿店
1995年末セール

12/30(土)
中古CD廃盤セール
1,500枚以上の大放出

12/31(日)　恒例の
ラストデイ·バーゲン
全品プライス·オフ!!

12/31(日)〜1/1(月)
オールナイト廃盤セール
午後10時スタート

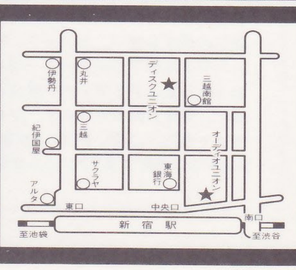
プログレッシヴ·ロック LP·CD·雑誌·パンフ
高価買取中

プログレッシヴ·ロックのLP・CD・雑誌・パンフをご処分の際は、ディスクユニオン新宿店(担当：竹川)をご利用ください。
廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。遠距離の方もご利用いただける出張買取のシステムもございます。
詳しくはお問い合わせください。

disk union
ディスクユニオン新宿店
6F：プログレッシヴロック専門フロア
TEL:03-3352-2691　FAX:03-3352-2455
営業時間：午前11時〜午後8時(日·祝は午後7時まで)

Progressive Rock Shop
Vinyl & CD
Used & Import
diskunion Shinjuku

3-31-4 SHINJUKU,SHINJUKU-KU
TOKYO 160, JAPAN
Phone:03-3352-2691



disk union

12/31(日)

ラストデイバーゲン

とにかくディスクユニオン
年に１度最大のバーゲン!!
全店で開催!!
新宿店はオールナイト
バーゲンもあり!!

アネクドテン

／ニュークリアス

ARCÁNGELO ARC-1002
税抜価格2,300円　12月上旬
発売予定!!



待望のセカンド・アルバム
ついにリリース!!
神秘的なメロトロンとヘヴィーなギターがさらに唸る新世代のプログレッシヴ・ミュージックの最高傑作!!



ケンソー

／ケンソー

ARCÁNGELO ARC-1003
税抜価格2,800円
12月16日発売予定!!

超プレミアム付の幻の名盤、ケンソーのファースト・アルバムがついにCD化。さらにボーナス・トラックとして6曲(未発表曲、未発表テイク)追加収録。

Arch Angel

for Progressive Music Listeners

アークエンジェル
創刊第２号
12/20発売予定

●特集　アレア・アレア・アレア

キング・クリムゾン来日公演、マグマ、アネクドテン、グルグル、ヘンリー・カウ、阿部薫、タルコフスキー、アンソニー・ムーア、ハコ...etc.

アークエンジェル創刊号
780円(税込定価)
好評発売中!!



MAGMAキャンペーン第２弾!!

11/21～'96.1/15
秘蔵ライヴ·コレクション
(税込定価4,000円／２枚組)
★ボビノ1981
★トゥールーズ1975

上記２タイトルのうち、いづれかをディスクユニオンでお買上げの方のみ、抽選で100名様に、
「マグマ·マーク入り特製腕時計」をプレゼントいたします。

Roger Dean **ロジャー·ディーン**
1996カレンダー(税抜価格1,690円)　好評発売中

プログレッシヴ·ロック LP·CD·雑誌·パンフ

高価買取中

プログレッシヴ·ロックのLP・CD・雑誌・パンフをご処分の際は、ディスクユニオン横浜店(担当：桑田)、本厚木店(担当：高野)をご利用ください。
廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。遠距離の方もご利用いただける出張買取のシステムもございます。詳しくはお問い合わせください。

通信販売しています!!

マーキー誌に掲載されているディスクユニオンの広告商品のうち
欲しいＣＤがあったら、

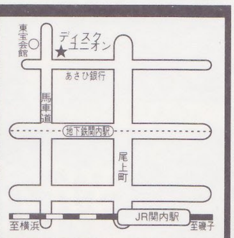
（1）50円切手を貼ったハガキまたは官製ハガキに
＊雑誌名、何月号か、
アーティスト／タイトル名、枚数、金額
(まとめて複数ご注文いただく場合は、それぞれの単価と合計金額をご記入ください)
＊お名前（フリガナ）、住所（フリガナ）、
郵便番号、電話番号、生年月日を
もれなくご記入ください。

（2）〒101
東京都千代田区神田淡路町2-3
東誠ビル
株式会社ディスクユニオン
「通信販売」係
へお送りください。
(TEL:03-5295-8844　FAX:03-5295-8977)

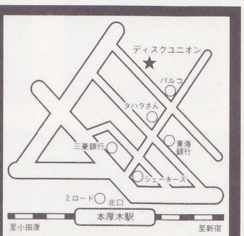
（3）在庫のあるものはすぐ宅配便にてお送りいたします。
宅配業者がご在宅時に配達いたしますので、品物と引き替えに代金をお支払いください。
(宅配業者よりご在宅時間確認のお電話をさしあげます)

●お支払いいただく代金は、品物の代金(広告表示価格は税抜き価格です)、消費税の他に、送料、手数料あわせて800円または900円が別途必要です。(送料、手数料は、お買上げ金額と地域により異なります)。
●通信販売は、広告掲載商品のみとさせていただきます。

disk union
ディスクユニオン
横浜店
2F：プログレ／ハード&ヘヴィ専門コーナー
045-661-1541
営業時間：午前11時～午後8時



disk union
ディスクユニオン
本厚木店
0462-24-5988
営業時間：午前11時～午後8時
(日·祝は午後7時30分まで)



平野　剛／リフレクション・オブ・ドリームス

Go Hirano/Reflection of Dreams

piano,pianica,windchime,hand percussion,grockenspiel,voice によるアコースティック作品集

曲目：(Pearl) 風の残骸 /Windpapers /Dream / Night Vision / 漂い / 花火 /Luminar Flow /Faith / 春草の流れ Part-2 他

やすらぎ
悲しみ
すべての感情のさざ波を
いつも触れて感じている時

風のように
もっとも素朴で
ひそやかな
淀みない深淵に響き渡る
心の音楽



ALSO AVAILABLE:
平野剛 /Distance
(PSF-51)：　LP Only,
残部僅少

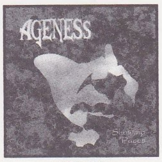
LP (Limited Edition) / CD 同時発売
PSF-71 (LP) /PSFD-71 (CD)
1996年1月下旬発売予定

発売：P.S.F./ モダーンミュージック　東京都世田谷区松原 2-45-11　寺田ビル 2F　TEL/03-3322-4461

日本で初めてスタートした６０・７０年代のプログレッシヴ・ロックの専門店


ENID


ENGLAND


AGENESS


SOLARIS


CAST


DOGMA

<特選プログレッシヴ・ロック>
- ●ENID/ Sundialer (Incl. New Material,Remix)
- ●ENGLAND/ The Last Of The Jubblies (2nd)
- ●GREG LAKE/ In Concert (with Gary Moore)
- ●KING CRIMSON/ King Of Kings (8CD-Box Live)
- ●RIVER OF CONSTANT CHANGE / A Tribute To Genesis (2CD)
- ●MIRAGE/ Live 14th December 1994 (2CD)
- ●SOLARIS/ Marsbeli Kronikak (Incl.2-Bonus Track)
- ●ANEKDOTEN/ Nucleus (2nd Album)
- ●ANNALIST/ Artemis (2nd Album)
- ●AGENESS/ Showing Paces (GENESIS!!)
- ●EMPIRE/ Mark I (Feat. Peter Banks)
- ●POOH/ Buonanotte Ai Suonatori (Live)
- ●IRON HORSE/ Voice Of The Land
- ●LOITUMA/ Same ●ANUNA/ Omnis

<特選 US Folk・Trad>
- ●KATE PRICE/ Deep Hearts Core
- ●SEGUIN/ Recolte De Reves
- ●LESLIE TUCKER/ In This Room
- ●KRISTINA OLSEN/ Hurry On Home
- ●CAROL NOONAN/ Absolution

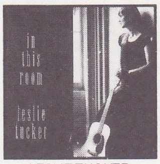
<特選 北米・南米のプログレッシヴ・ロック>
- ●SPOCK'S BEARD/ The Light
- ●ROBERT BERRY/ Takin In Back (3rd Album)
- ●INDISCIPLINE/ A Non-Obvious Ride
- ●RELAYER/A Grander Vision
- ●ANCIENT VISION/ Focus Or Blinders
- ●PROMETHEUS/ Same ●CAST/ Four Aces
- ●DOGMA/ Twin Sunrise / 1st
- ●SAGRADO CORACAO DA TERRA 各種
- ●RALE/ Mascarade Urbanas

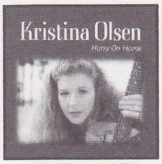
☆PROMO盤など貴重盤も続々入荷 !!

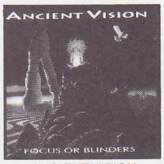

TRIBUTE TO GENESIS


INDISCIPLINE


SEGUIN


LESLIE TUCKER


KRISTINA OLSEN


ANCIENT VISION

〒160　東京都新宿区西新宿 7-5-6 ﾀﾞｲｶﾝﾌﾟﾗｻﾞ 756-202
TEL:03-3363-3669 FAX:03-3365-4823
(平日)11:30-19:30 (休日)11:30-19:00 毎週月曜日定休
☆通信販売　☆各種カード取扱い

新宿レコード

WORLD DISQUE

102 Maison Mejiro, 3-1-17 Shimo-Ochiai,
Shinjuku-Ku, Tokyo 161 JAPAN
Tel : 03-3954-5348 Fax : 03-3954-9563

■営業時間 13:00〜20:00
(日曜 13:00〜19:00)
■火曜定休

12月は、忙しい。

恒例 年末セール

今年は凄いゾ！
12月は無休、1月は4日より営業（福袋セールやります）

12月16日(土) LP底値市
常識外れの売りつくし！一気に放出
KEITH TIPPETT/Blueprint (Orig.) ¥3000, etc.etc.

12月23日(土) 中古CDセール
廃盤から超特価盤まで、中身で勝負の大セール！新品CD特価コーナーも特設。

12月30日(土) LP廃盤セール
毎回好評、今回も年末特価でいきます！

12月31日(日) 大みそかラスト・バーゲン
何が飛び出すかわからない！ お楽しみに。

〈特報〉





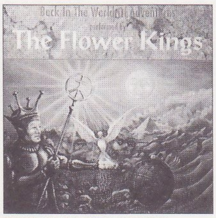
11月25日より
年末企画「ブリティッシュ名盤堂」設置！
チッキン・シャックからカレイドスコープに至るまで、名前は知ってるが実は聴きのがしていた名盤からブリティッシュ・ドリーミングな幻の名作まで特設コーナーにて。

〈特報〉その2

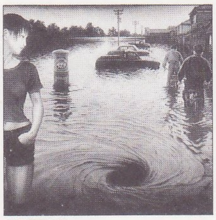


1月4日より
アメリカン・ロック・フェア
「アメリカン・ロック集成」発売記念、アメリカ勢のCD、LPも大幅在庫増強。シンフォ、サイケ、アヴァンギャルド、ジャズ、各種とり揃えてお待ちしています。

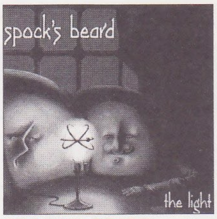
ワールド・ディスク11〜12月特選レギュラー・ディスク（入荷の極々一部です）



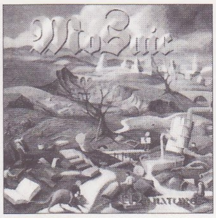
THE FLOWER KINGS (Sweden)
ロイネ・ストルトが前作に続き入魂のシンフォニック・ロック作を発表。カイパ・ファンのみならず総てのシンフォ・ファンへ送る一大ファンタジック絵巻。力強くも優しい、胸躍るメロディー、夢と冒険の地平へ、いざ。



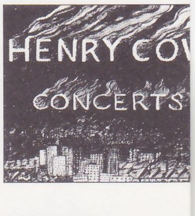
美狂乱 (Japan)
実に12年振りとなるスタジオ作「五蘊」、そして新生・美狂乱の東京初ライヴを収録した「ディープ・ライヴ」（写真）、共に独創性と緊迫感、そして情感に満ちた必聴作。唯一無比の世界へ向かう彼らのパワーを感じて下さい。



SPOCK'S BEARD (U.S.A.)
アメリカより凄玉が上陸。モダンなセンスと往年のプログレッシヴなイディオムを融合し、抜けと演奏力で超一級ぶりをアピール。イエス/カンサス的要素は+αでしかない、というのが凄い。まさに新種、しかも高品質。



MOSAIC (Italy)
御大ヴェッペ・クロヴェッラ、遂に立つ。数々の小曲がトータルに構築されて行く中で展開する気迫のkbdプレイ、クラシカルで深味のある音世界は壮大かつ幽幻。イタリアの底力、ベテランの巻き返し。フリオ・キリコも参加。



HENRY COW (U.K.)
唯一未CD化だった「Concerts」がいCD化。その重要性と充実度は何をか の保証付。メドレーから即興に至るまで の何たるかを教示した究極の一撃です。 バスからボーナスを追加しての2枚組。



BACAMARTE (Brazil)
'83年に唯一残されたブラジリアン・シンフォニックの金字塔。舞うフルート、PFM/イエス的ギター、サグラドと並び称された絶品、遂に初CD化です。女性ヴォーカルをフィーチャーしたシンフォ・ファン必聴作。



HÖYRY-KONE (Finland)
北欧は凄い。またもや超強力新人現る。アカデミックな素養を持ちつつチェンバー/ジャズ/シンフォニックと様々な色をぶち込みヴィヴィッドな感性と鋭さでぶっ切る痛快作。一筋縄ではいかない偏屈度は並じゃない。



HACO (Japan)
アフター・ディナーのHACOがソロ・アルバムを発表。トム・コラ、サム・ベネット、今堀恒雄らを迎えてマジカルな世界を構築。そのものイマジネイティヴな彼女の声は、ジャンルを超えて迷宮へと誘う魅惑的なものです。



TRACE (Holland)
大ヒットの1stアルバムに続き、最高作の呼び声も高い「Birds」が登場。リック・ヴァン・ダー・リンデンのクラシカルなキーボード・プレイ、切れまくるリズム、まさしく'70年代の大いなる名作。残された大物中の大物。



ISLAND (Swiss)
今度こそ実現、超絶テクニカル集団ISLA がCD化。複雑極まる変拍子とミスティ イメージ、チェンバー/ジャズ/シンフォニ 総てを飲み込む怪物的作品。奇跡と評 いられない完成度を誇る。ボーナス入。

▶営業時間変更のお知らせ

WORLD DISQUEでは、12月より営業時間を下記の通り変更いたします。
平日：**1:00PM〜8:00PM**
日曜のみ：**1:00PM〜7:00PM**
平日もゆっくりと御覧頂けます！（祝日8:00PMまで。）

CD買取り開始

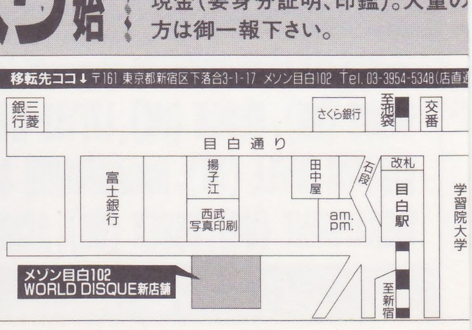
御不要のプログレ系CD高価買取り中。専門店ならではの査定、即現金（要身分証明、印鑑）。大量の方は御一報下さい。



WORLD DISQUE SET SALE LIST Vol.128
11月25日発行!!

遠方の方、忙しくて店に来られない方の為に毎月お送りしている通信販売のリストです。この中には、自信を持って推薦する推薦盤コーナー、主として在庫残りの貴少盤を安価に供給するサービス・コーナー、世界中から集めたLP/CDをストックするスペシャル・ストック・コーナー、そして入手困難な貴少盤/中古盤を扱う貴少盤コーナーがあり、充実したストックからご希望のアイテムを購入できる便利なシステムです。ユーロ/プログレッシヴはもちろん、ブリティッシュ、トラッド等のストックも扱っています。マーキーとこのリストさえあれば鬼に金棒!! お申込は簡単。200円分の切手を同封の上、最新リスト希望と明記してマーキー内ワールド・ディスク通販係までお送り下さい。最新リストをお送りします。
（通信販売のお問合せは従来通り03-3954-2055までお願いします。3954-5348はお店専用電話です。）

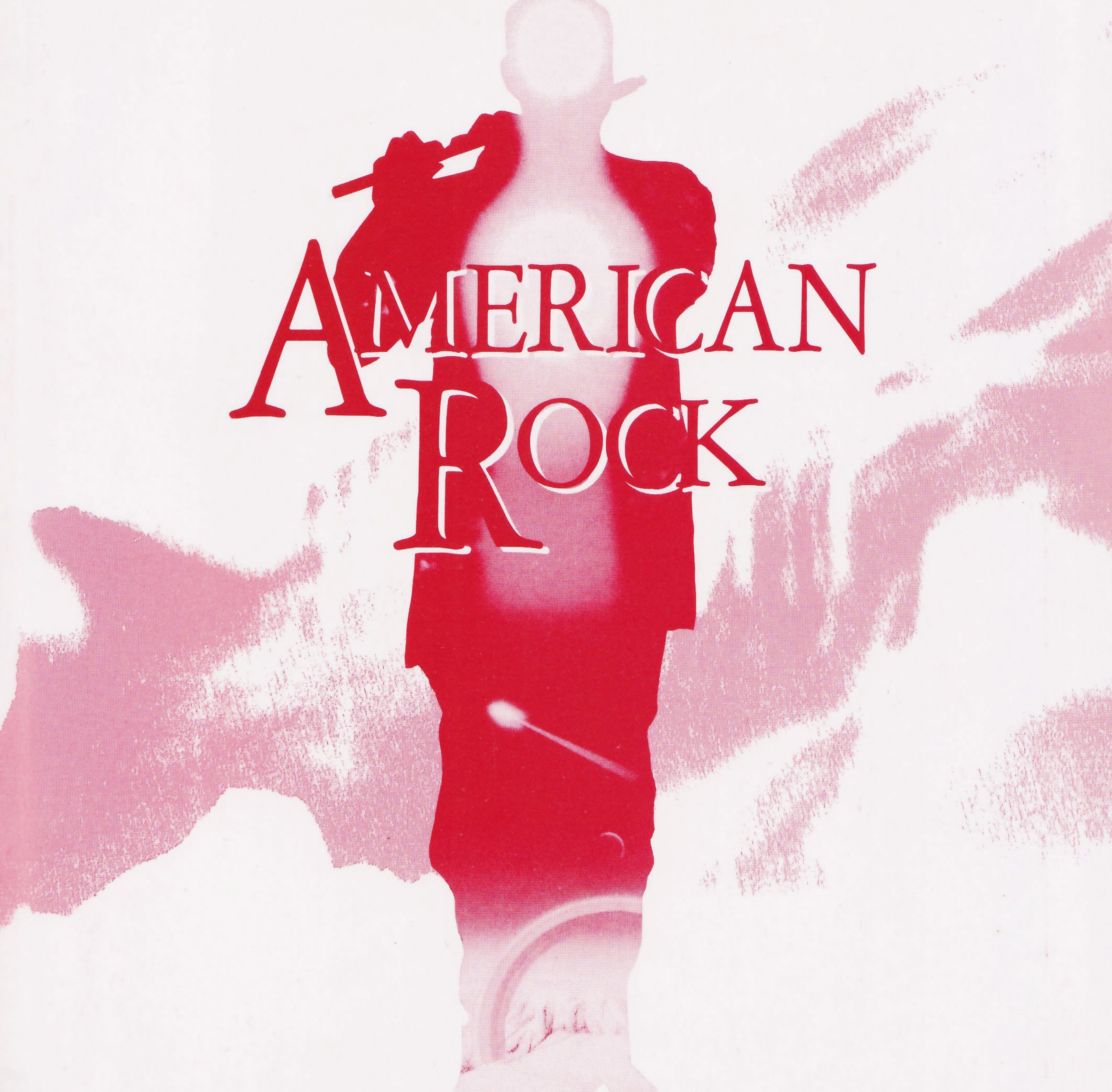
移転先ココ↓ 〒161 東京都新宿区下落合3-1-17 メゾン目白102 TEL.03-3954-5348(店直



MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA *of*

AMERICAN ROCK



PROGRESSIVE ROCK SIDE





マーキームーン社刊
税込定価3,600円(本体価格3,495円)





本書の内容

■シンフォニック・ロック編
〜今までマーキーが扱ってきたアーティストから、ハード・ロック・ファンまで対応
▽サンタナ、ブラッド・スウェット&ティアーズ他、60s〜70sアメリカン・ロック
▽マハヴィシュヌ・オーケストラ
▽カンサス
▽ラッシュ
▽ドリーム・シアター
カタログ

■サイケデリック・ロック編
〜サイケの王道から、超マニアック・レコードまで。アシッド・フォークも充実
▽グレイトフル・デッド、ジェファーソン・エアプレイン、ドアーズ、ヴェルヴェット・アンダーグラウンド、ストゥージズ etc.
▽フランク・ザッパ
カタログ

■アヴァンギャルド編
〜現代音楽から、NYダウンタウン・シーン、そしてアメリカ、カナダの先鋭レーベルを中心に
▽セロニアス・モンク、アルバート・アイラー、セシル・テイラー、サン・ラ、etc.
▽ジョン・ゾーン
▽「No New York」からの系譜
▽ソニック・ユース、スワンズ、ジャンク系、シミー・ディスク周辺
カタログ

■フォーク、トラッド、コンテンポラリー編
〜女性ヴォーカル・ファン、アコースティック・ファン対応、90年代のアルバムを中心に、プラス70年代の知られざる夢見アイテム多数
▽ジョニ・ミッチェル、ピーター、ポール&マリー、ジュディ・コリンズ、ボブ・ディラン
▽ケベックという地域
カタログ

税込定価3600円
(本体価格3495円)